HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1990年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成 ： 自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用
Author(s)	斉藤, 巧弥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13979号
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13979
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94741
Type	doctoral thesis
File Information	Takuya_Saito.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和元年度博士論文

1990 年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成

― 自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用 ―

斉藤 巧弥

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

国際広報メディア専攻

目次

序論　ゲイアイデンティティを問う

１．研究の目的と背景…… 1
　１−１　研究の目的…… 1
　１−２　1990 年代という時代 …… 5
　１−３　本研究の概要…… 9
２．1990 年代におけるアイデンティティの議論 …… 10
　２−１　ゲイスタディーズによる議論…… 11
　２−２　クィアスタディーズによる議論…… 13
　２−３　クィアへの反論…… 15
３．分析枠組み…… 17
　３−１　「アイデンティティ」の捉え方…… 17
　３−２　「活動」の捉え方…… 19
　３−３　本研究の構成…… 22
　３−４　本研究の特徴と意義…… 24

第１章　ゲイ雑誌『バディ』と「ゲイライフ」

――「ゲイ」としての自己肯定と生き方の形成

１．日本のゲイ雑誌と『バディ』…… 27
　１−１　本章の目的…… 27
　１−２　日本のゲイ雑誌と先行研究…… 27
２．「ゲイライフ」の紹介 ―― 強い男のハイパーマガジン（1993-1997）…… 31
　２−１　『バディ』の創刊…… 31
　２−２　「ゲイライフ」とは ―― 自己肯定と生き方の二面性…… 35
　２−３　多様性による調和…… 36
　２−４　思考法としての「ゲイ」――「普通」の否定…… 37
　２−５　「悩み」の解消と「しあわせ」の達成…… 40
３．「ハッピー」という「夢」―― 僕らのハッピー・ゲイ・ライフ（1997-2000）…… 41
　３−１　キャッチフレーズの「公募」という戦略…… 42
　３−２　「ゲイ」であることの強調…… 43
　３−３　「夢」と「ハッピー」の提示 ――〈現実逃避〉…… 44

3−4　読者の顔出しによるゲイライフの提示…… 46
3−5　「夢」の具現化 —— モデルとしての「結婚」…… 47
3−6　「ハッピー」への批判 ——「悩み」の周縁化…… 50
4．「現実」との衝突と「男」の生き方 —— GAY LIFE MAGAZINE (2001-2008) …… 53
4−1　「ハッピー」の現実化…… 53
4−2　「結婚」の強調による「現実」の表面化…… 55
4−3　三十代ゲイ男性への注目 —— ゲイライフの真正性…… 57
4−4　独身という「現実」—— 男性性によるエンパワーメント…… 58
4−5　魅力の年齢差 —— 三十代ゲイと若ゲイの庇護関係…… 59
5．ゲイアイデンティティとコミュニティの維持 —— Bάdi UP! (2009-2019) …… 62
5−1　『バディ』の「UP!」とコミュニティの活性化…… 62
5−2　「ゲイ」であることの再強調…… 66
6．安全なアイデンティティ ——「夢」と「現実」の間で…… 69

第２章　ゲイマンガに描かれるゲイの物語

—— 変化する悩みとその提示／対処／回避

1．「ゲイマンガ」とは…… 73
1−1　本章の目的…… 73
1−2　ゲイマンガと BL —— BL をめぐる議論と批判…… 74
1−3　分析対象…… 78
1−4　分析視角…… 82
2．女性との交際をめぐる葛藤 —— 1990 年代までのゲイ男性向けゲイマンガ…… 84
2−1　女性との結婚をめぐり対立するカップル…… 84
2−2　居場所／ゴールの探究…… 90
3．ゲイコミュニティにおける恋愛と悩み —— 2000 年代以降のゲイ男性向けゲイマンガ…… 92
3−1　結婚制度の欠如による浮気の発生…… 92
3−2　恋愛の自由化による浮気の発生…… 93
3−3　恋愛の動機の不明確化／自己の固有性の希薄化…… 97
3−4　偶然性による純愛の形成…… 99
3−5　ノンケへの欲望 —— 性愛の排除…… 103
4．〈社会〉の描写と回避 —— 1980-2010 年代のゲイ男性向けゲイマンガ…… 106
4−1　抑圧的家族の回避／読み替え…… 106
4−2　社会問題・社会運動の描写…… 108
4−3　欲望の解放、規範からの解放…… 110
5．マイノリティであることを経験する —— 一般向けゲイマンガ…… 111

5−1　過剰なステレオタイプ…… 111
5−2　ゲイについての教示…… 112
5−3　被差別者としてのゲイ男性…… 113
5−4　主人公としてのノンケ…… 117
5−5　恋愛の障害としての性的指向…… 119
6．オルタナティヴ・ストーリーの形成…… 122

第３章　「ゲイリブ」による社会運動とコミュニティ形成
――「札幌ミーティング」による活動を事例に

1．日本のゲイグループと札幌ミーティング…… 125
1−1　本章の目的と分析対象…… 125
1−2　分析資料…… 131
1−3　札幌ミーティングの概要 ―― 設立から活動休止まで…… 132
1−4　札幌ミーティングの活動目的…… 134
2．同性愛者の二極化 ――「ホモ」と「リブガマ」…… 135
2−1　抵抗し合う「ホモ」と「リブガマ」…… 135
2−2　パッシング／カヴァリングの要請への抵抗…… 140
2−3　ゲイリブとカミングアウト ―― 可視化戦略としてのオネエ…… 143
3．新しいコミュニティとしての札幌ミーティング…… 146
3−1　「甘い汁」論争…… 147
3−2　ゲイバー／ハッテン場からの差異化 ―― クローゼットとアウト…… 149
3−3　交流のみを求めることの否定 ――「真面目」な活動とのバランス…… 151
4．対外的活動 ―― ローカルメディアへの抗議活動…… 153
4−1　UHB 問題 ――「気がつけばホモ」 …… 155
4−2　STV 問題 ――「モーホーの見分け方」 …… 160
4−3　性的イメージへの抵抗…… 163
4−4　「からかい」への抵抗…… 164
5．対内的活動 ―― ゲイ男性の取り込みと「ゲイ」への誘導…… 166
5−1　ブランチ制度による集合的アイデンティティの維持…… 167
5−2　ジュニアブランチによる「ゲイ」アイデンティティの形成…… 170
5−3　ゲイリブとの接点としての「ゲイナイト」…… 174
6．レズビアンの活動 ―― コミュニティの形成と「遊び」の重視…… 179
6−1　ウィメンズブランチによる排他的領域の確保…… 179
6−2　コミュニティの不在…… 181
6−3　「運動」と「内面」のバランス…… 184

6−4　ジェンダーの問題の後景化…… 185
7．「遊び」と「真面目」な活動のジレンマ…… 189

第４章　セクシュアルマイノリティのパレードにおける演出
—— 連帯におけるアイデンティティとパレードの中のゲイ男性

1．日本のパレードと札幌のパレード…… 193
1−1　本章の目的…… 193
1−2　分析視角・先行研究…… 195
1−3　分析対象・資料…… 196
2．「政治」と「祭」をめぐる論争…… 199
2−1　東京のパレードでの〈事件〉と札幌のパレード…… 200
2−2　民主的な場としてのパレード…… 204
2−3　「遊び」と社会変革活動の未分化…… 206
3．パレードの方向付けと連帯の問題…… 211
3−1　パレードの名称 —— セクシュアルマイノリティ以外の動員…… 211
3−2　パレードの目的 —— マイノリティの連帯からLGBTの連帯へ…… 212
3−3　「ゲイ」であるための場としてのパレード…… 216
4．パレード行進のパフォーマンス —— 可視化と差異化…… 220
4−1　抗議／要求型から存在主張／可視化型へ…… 221
4−2　境界線の構築／横断…… 226
4−3　一体感の形成と差異化のパフォーマンス…… 228
5．ゲイ男性のパフォーマンス ——「遊び」によるまとめ上げと差異化…… 230
5−1　皆が平等に表象されるのか ——「L」「G」「B」「T」のフロート…… 230
5−2　〈差別なき社会〉における運動 ——「ゲイナイト」的パレード…… 234
5−3　ゲイ企業の参入によるパレードのゲイ化…… 237
5−4　ドラァグのパフォーマンスと〈普通〉志向のゲイ…… 243
5−5　新しい〈普通〉批判 ——「シャイニーゲイ」…… 246
6．〈差別なき社会〉におけるパレードと表象…… 249

第５章　ゲイアイデンティティの「今」と「未来」

1．表象の対立 ——「ハッピーなゲイ」と「悩むゲイ」…… 253
1−1　周縁化される「悩むゲイ」…… 253
1−2　「ハッピー」と「悩み」の二項対立を超えて…… 258

２．自己変革活動から社会変革活動へ？…… 261
２−１　自己肯定の獲得と性愛の充足…… 261
２−２　社会変革活動では解決しにくい〈私的〉な問題…… 263
３．モラトリアム時代のゲイ男性…… 266
３−１　日本における同性婚の議論…… 266
３−２　結婚からの解放／モラトリアムへの解放…… 268
３−３　同性婚はゲイ男性を〈大人〉にするか…… 270
４．ゲイアイデンティティの終焉？…… 272
４−１　〈差別なき社会〉における戦略としての「愛」…… 272
４−２　強いアイデンティティと弱いアイデンティティ…… 273

おわりに

１．議論の要約…… 277
２．本研究の成果と今後の課題…… 281

参考文献…… 285
謝辞 …… 301

図表リスト

図 0-1　各章で扱う事例の活動期間 …… 23
図 1-1　『バディ』新キャッチフレーズ発表の記事（1997 年 6 月号, 115 頁） …… 42
図 1-2　2008 年 12 月号（左）と 2009 年 1 月号（右）の『バディ』表紙 …… 63
図 1-3　『バディ』の頁数の推移（各年 12 月号の頁数） …… 65
図 1-4　『バディ』の表紙の移り変わり …… 68
図 2-1　対立するカップル（山口 1985:198-199） …… 86
図 2-2　結婚の報告（竹本 1997a:28） …… 89
図 2-3　偽装結婚の糾弾（山川 1986b:66） …… 89
図 2-4　『ふたりの童話』と『風のアルバム（1）』の扉絵 …… 91
図 2-5　「当たり前」としての恋愛の続かなさ（小日向 2008b:119） …… 94
図 2-6　「ブス」の主人公（上）と、「イケメン」の登場人物（下）（小日向 2008a:81, 30） … 96
図 2-7　ゲイ雑誌を購入する友人を目撃する主人公（市川 2007:76） …… 99
図 2-8　別れ際の大地と太陽（児雷也 2004:168） …… 100
図 2-9　母からの質問への焦り（大久保 2008:121） …… 107
図 2-10　エイズについての言及（山川 1988:18） …… 109
図 2-11　「イケメン」のパレードへの抵抗（小日向 2008a:17, 19） …… 109
図 2-12　マゾを否定する大橋（田亀 2004a:78） …… 110
図 2-13　ギャグマンガのセックス（熊田 2007:35） …… 112
図 2-14　ホモ狩り（里見 2002a:61） …… 114
図 2-15　仮面による自己の隠蔽（田亀 2019:22） …… 116
図 2-16　息苦しさとしての沈溺（田亀 2019:92） …… 116
図 2-17　真田についての噂話をする同級生（おくら・橋井 2017:79） …… 116
図 3-1　「すっかりオネエ」の主人公（NL1995/3:19） …… 144
図 3-2　「気がつけばホモ」のオープニング …… 156
図 3-3　「ホモセクシュアル度チェック」 …… 158
図 4-1　札幌市中心部の地図（出典：Google マップ） …… 221
図 4-2　パレードの先導車（2010 年〔第 14 回〕） …… 222
図 4-3　実行委員によって用意されたプラカード（第 8 回〔上〕）とそれを掲げて行進する人々（第 7 回〔下〕） …… 229
図 4-4　風船を持ちながら行進する参加者（第 9 回〔上〕、第 11 回〔下〕） …… 229
図 4-5　札幌のパレードにおける出展フロートとその順番（先頭左） …… 233
図 4-6　DJ フロート（1999 年〔第 4 回〕） …… 235
図 4-7　バディフロート（2001 年〔上〕、2004 年〔下〕） …… 238
図 4-8　ゲイバーフロート（2004 年〔上〕、2005 年〔下〕） …… 238
図 4-9　シャイニー批判（BADI2015/11:68） …… 248

表 1-1　戦後日本のゲイ雑誌（2019 年 10 月現在）…… 28
表 2-1　分析対象とする「ゲイ男性向けゲイマンガ」（初出年順）…… 79
表 2-2　分析対象とする「一般向けゲイマンガ」（初出年順）…… 80
表 3-1　1990 年代以前に結成されたゲイグループ／ゲイリブ団体（結成順）…… 126
表 3-2　1990 年代以前に結成されたレズビアングループ（結成順）…… 127
表 3-3　札幌ミーティングによる「雪まつりフォーラム」のテーマ…… 154
表 3-4　札幌ミーティングに設置されていたブランチ（設置順）…… 167
表 3-5　札幌ミーティングによって開催されたゲイナイト…… 174
表 4-1　札幌におけるセクシュアルマイノリティのパレードの年表…… 197
表 4-2　東京におけるセクシュアルマイノリティのパレードの年表…… 198
表 4-3　札幌のパレード各回の公式ガイドブックに掲載されている総広告数と、それに占めるゲイ男性向け企業・サービスの割合…… 240
表 4-4　札幌のパレード各回の公式ガイドブックに掲載されている総広告数と、それに占める女性向け企業・サービスの割合…… 241
表 4-5　北海道内の市長からのメッセージ寄稿数…… 242

凡例

（1）本研究では1990年代以前の資料から多くの引用を行うが、その中には現在では不適切とされる言葉や、現在の表記とは異なる表記がある。しかし歴史的資料として、そのまま引用する。

（2）一部人名などの固有名詞は「□」「○」「△」などの記号で伏字とした。

（3）一次資料の引用形式

3−1　ゲイ雑誌から引用する場合の書誌情報の表記。

・雑誌名をアルファベットで表記し、続けて年・月・頁を記載

『バディ』→BADI、『アドン』→ADON、『薔薇族』→BARA

例)『バディ』1994年12月号10頁からの引用の場合　…　(BADI1994/12:10)

・その他のゲイ雑誌から引用する場合は、その都度雑誌名と年・月・頁を記載する。

3−2　札幌ミーティングのニュースレターから引用する場合の書誌情報の表記。

・「NL」に続けて年・月・頁を記載。

例）1996年1月号5頁からの引用の場合　…　(NL1996/1:5)

・札幌ミーティングによるその他発行物を引用する場合はその都度資料名を記す。

（4）直接引用の形式

・直接引用中の一部を省略する場合、その箇所は「(…)」によって示す。

・直接引用中に筆者による補足を挿入する際には、その内容を「〔 〕」で括る。

（5）マンガからの直接引用

マンガから直接引用をする際には、ひとつの吹き出しの文章は鉤括弧で括ることで表す。またマンガのセリフではほとんど句読点が使用されず、改行と吹き出しによってそれが代用される。読みやすさを考え、適宜スラッシュ「／」を挿入する。

例)　原文：真二にはそれができる俺にはそんな勇気がないよ人に後ろ指をさされるより偽わりでもみんなの手が僕の手をとってくれる……嘘だとわかってもね（山口1985:119)

直接引用の表記：「真二にはそれができる／俺にはそんな勇気がないよ／人に後ろ指をさされるより偽わりでもみんなの手が僕の手をとってくれる……嘘だとわかってもね」(山口1985:119)

序論　ゲイアイデンティティを問う

１．研究の目的と背景

1−1　研究の目的

本研究は 1990 年代以降の日本を対象に、ゲイ男性のアイデンティティがどのように形成されてきたのか、そしてそれがいかなる変容をたどってきたのかを論じることを目的とする。具体的な分析対象とするのはゲイ男性によって行われてきた活動であり、その中でもゲイであるという立ち位置から、男性同性愛者であること、あるいは「ゲイ」であることを積極的に表象し、自己や社会を変えようとしてきた活動である。こうした活動に注目するのは、1990 年代にはゲイ男性当事者が積極的に自ら声を上げ始め、自身について公に語り始めることで、異性愛者によって一方的に語られる存在から脱却しようとしていたため、そして同性愛についての言説が増大し、社会の認識にも変化を生じさせたためである。その中で彼らは男性同性愛者／ゲイであることについて模索し、アイデンティティを立ち上げようとしていた。

昨今の日本でも、セクシュアルマイノリティ／LGBT(1)をめぐる大きな出来事が生じたり、当事者による活動が活発に行われたりしている。2015 年には東京都渋谷区が同性カップルを公的に認める「同性パートナーシップ制度」（通称）を日本で初めて制定した。男女の婚姻とは異なり法的拘束力はないが、セクシュアルマイノリティを可視化するという意味で評価され、こうした制度を待ち望んでいた人々からは喜びの声が上がった。またセクシュアルマイノリティなどに批判的な保守的な層からは「少子化が進む」などの批判的な言葉が浴びせられた。それでもなおその後、札幌、大阪、福岡などの大都市が同様の制度を制定するに至り、日本の至るところで同性パートナーシップ制度制定をめぐる運動が沸き起こっている。2019 年 10 月の段階では全国の 26 の自治体で制度が制定されており、合計で 617 組が利用をしている（『虹色ダイバーシティ』2019.10.8）。この〈同性パートナーシップ制度ラッシュ〉をひとつのきっかけとして、2019 年 2 月には、国を相手に 13 組の同性カップルが同性婚（婚姻の平等）を合法化するための訴訟を起こした。同性パートナーシップ制度や同性婚はかつてニュースで報道されたり一般メディアで議論されることはほとんどなかったが、現在では同性婚が重要な問題として日本社会で共有されるに至りつつある。

2015 年 8 月には、「一橋大学アウティング事件」が生じた。当時 25 歳で一橋大学の法科大学院生であった A さんが、大学校舎から転落死したという事件である。その原因は、A さんがゲイであることを知っていた同級生の友人が、そのことを他の友人に暴露（アウティング）してしまったこと

(1)　本研究では以降、「セクシュアルマイノリティ」という言葉を基本的に用いるが、文脈によっては同義として「LGBT」という言葉も用いる。

にあった。このことに精神的ショックを受けた彼は校舎から転落死をしてしまった。この事件は「アウティング」という言葉を世に知らしめ、同性愛者が置かれている社会的状況を改めて人々の目の前に差し出すことになった。この事件にはいくつもの論点があり、例えばA さんはハラスメント相談室、教授、保健センターに被害を相談していたにも関わらず適切な対応がされず、相談員や保健センターの医師は、性同一性障害治療のメンタルクリニックを勧めるなどしていたことがその後わかっている（『弁護士ドットコムNEWS』2018.7.17）。A さんの死はひとつの原因には還元できない複合的な要因によって引き起こされてしまったと考えられるが、アウティングという出来事が大きな引き金になってしまったことは間違いない。遺族は大学を相手に、相談対応の不備など安全配慮義務違反などがあったとして、約8,576 万円の損害賠償請求をしていたが、2019 年2 月27 日に棄却された（『弁護士ドットコムNEWS』2019.2.27）。これを受け遺族は、判決後の3 月上旬には東京高裁に控訴した。A さんの遺族と同級生の間には、2018 年1 月に和解が成立した。また一橋大学の学内では当事者が安心できる居場所づくりを行うために、同級生のネットワークを作る動きも出ている（奥野2019）。

A さんのような事件が再度生じないように、種々の差別の解消を目指して、2016 年5 月には野党4 党によって、「LGBT 差別解消法案」が衆議院に提出された(2)。この法案は、「国や地方自治体が性的指向又は性自認を理由とする差別の解消を推進するための方針・計画などを定め、行政機関や事業者が性的指向又は性自認を理由として差別的取扱いを行うことを禁止すると同時に、雇用（募集・採用）の際の均等な機会を提供し、ハラスメントを防止すること、学校などでいじめなどが行われることがないように取り組むことなどを定めたもの」（『立憲民主党』2018.12.6）であり、差別解消のための具体的な法律の制定に向けての動きが出てきている。

より文化的な側面にも注目をしてみると、セクシュアルマイノリティの人物を取り上げるテレビドラマや映画が頻発している。例えば2018 年以降に放映されたドラマを見てみると、男性同士の恋愛を描いた『おっさんずラブ』（テレビ朝日）が放送され、「2018 ユーキャン新語・流行語大賞」のトップテン入りも果たした。2019 年には『劇場版 おっさんずラブ ～LOVE or DEAD～』として映画化もされた。他にも、男性同士のカップルが登場する『隣の家族は青く見える』（フジテレビ）、ゲイ男性が主人公の一人として登場する『弟の夫』（NHK）、レズビアンのトランス女性を描いた『女子的生活』（NHK）がある。2019 年に入ってからは、「ゲイで女装家」の主人公が登場する『俺のスカート、どこいった？』（日本テレビ）、男性同士のカップルの日常を描いた『きのう、何食べた？』（テレビ東京）が放映されている。映画にも目を向けてみると、2016 年にはゲイカップルを主人公の一組とする『怒り』、2017 年にはトランス女性を主人公とする『彼らが本気で編むときは、』、2018 年には弁護士夫夫（ふうふ）の生活を追ったドキュメンタリー映画『愛と法』が上映された。

しかし、セクシュアルマイノリティをめぐる動きが広範な領域で生じる中、それへのバックラッシュとも言える出来事も生じた。2018 年には、雑誌『新潮45』（2018 年8 月号）に衆議院議員杉田水脈による「『LGBT』支援の度が過ぎる」という記事が掲載された。この中で杉田はLGBT には「『生産性』がない」と、さらに同性愛者は「不幸な人」であると、LGBT を侮辱する文章を執筆したので

(2)　正式名称は「性的指向又は性自認を理由とする差別の解消等の推進に関する法律案」。2016 年の法案は廃案になったが、2018 年12 月に同じ内容の法案が衆議院に提出された。

ある。このことはツイッターなどのSNSによって瞬く間に拡散され、杉田水脈による過去の差別発言も掘り起こされ、おびただしい批判が投げかけられた。その後すぐに具体的な抗議の輪が日本各地に広がり、7月27日から28日には東京、札幌、福岡、名古屋、大阪で抗議活動が行われ、東京での抗議活動には約5,000人が押し寄せたとされている(宇田川2018,『しんぶん赤旗』2018.7.29)。また10月8日には杉田水脈発言への抗議として、東京で「TOKYO LOVE PARADE」という名でパレードも開催された（後藤n.d.)。

これらの出来事や活動はすべてがセクシュアルマイノリティ当事者によって担われているわけではないものの、セクシュアルマイノリティの存在を可視化したり、差別などの問題を社会問題として共有するきっかけとなるものである。しかしそれだけではなく、こうした活動や出来事は常に意図の有無を問わず、セクシュアルマイノリティとはいかなる存在なのかについての言説を広める側面もある。例えば、同性パートナーシップや同性婚に関する言説では、結婚制度が利用できないことによる〈不利益〉について語られ、同性愛者は〈困りごと〉を抱えた存在として言説化されたり、〈普通〉の人のように〈幸せ〉な結婚を求める存在であることが主張されたりする。アウティング事件や差別解消法案に関しては、ゲイ男性などのセクシュアルマイノリティは自分のセクシュアリティを隠さなければいけない存在であり、偏見の目を恐れ、「クローゼット」の中で生きざるを得ない存在として言説化される。また杉田水脈への抗議活動では、頻発する抗議活動とラディカルな言動によって、セクシュアルマイノリティは「怖い人たち」（宇田川 2019:2）であるというレッテルが貼られていく。ドラマや映画の表象も、それぞれの作品がセクシュアルマイノリティについての特定の物語を提示することによって、彼ら／彼女らのイメージを形成していく。

このようにセクシュアルマイノリティに関する種々の活動や出来事は、「セクシュアルマイノリティとは〜な存在である」という社会的アイデンティティを形成する側面がある。その活動の担い手が誰であるかによらず、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーという存在を作り上げ、社会の中に位置付けようとする。無論、上にあげた例は当事者の意図を離れ受容されるイメージでもある。しかしそれでも〈わたしたち〉の〈本当〉の姿を何かしらの形で表象しようという当事者による多くの活動が行われてきた。このような活動は、昨今になって突如として登場したものではもちろんなく、その源流にはこれまで行われてきた種々の活動が存在している。特に1990年代は、主に同性愛者が中心ではあったが、日本におけるセクシュアルマイノリティの活動の隆盛期とも言われており、その当時の出来事は現在にも多大な影響を与えている。しかし、1990年代から現在までの間にどのような活動が行われてきたのか、そこでは何が主張され、それがいかに変化し、現在とつながっているのかという点については、これまでほとんど注目がされてきていない。だが現在を知るにあたってこれまでの歴史を振り返ることは必要不可欠な作業である。こうした問題意識をもとに、本研究ではセクシュアルマイノリティの中でもゲイ男性に注目し、1990年代以降の彼らの活動を分析することを通して、彼らの現在のアイデンティティについて論じる。

「アイデンティティ」という言葉にはさまざまな意味合いが含まれるが、その中心的なものは、自己についての一貫して安定した意識であり、「自分とは誰か？」「〈私〉はどのような人物なのか？」という疑問に対する答えである。アイデンティティ論の始祖とされるエリク・エリクソンはそれを、「自分自身の存在の自己斉一性と連続性の知覚」という言葉で説明する（Erikson 1968=2017:49)。しかし、自己の斉一性・連続性というもの、あるいは集団における集合的・一枚岩的なアイデンテ

ィティが存在しえないことはすでに繰り返し論じられてきた。だが、自己の斉一性・連続性が実は存在しないということと、それにも関わらず自己を斉一化・連続化させるかのような活動が行われたり言説が生み出されてきたという事実は別に考えなければいけない。そうした試みは事実、1990年代に（そして少なからず現在も）積極的に行われていたのである。「ゲイ」である、あるいは「男性同性愛者」であるというアイデンティティも、一枚岩的に語ることはできない。「ゲイ」や「男性同性愛者」であることにはさまざまな意味合いが含まれるため、それらは自らを「ゲイ」や「男性同性愛者」として自認する人に歓迎されたり、時には嫌悪されたりもする。本研究が論じようとするゲイ男性のアイデンティティも以上のような、さまざまな意味合いの集合体からなるアイデンティティである。

本研究全体を貫く軸は三つある。ひとつ目は、1990年代以降（章によっては80年代にも言及する）の日本を対象に、ゲイ男性のアイデンティティの形成・変容を見ていくことである。1990年代以降に焦点を絞るのは、そこがゲイ男性の運動が隆盛を見せ始めた時期であり、ゲイ／男性同性愛をめぐるさまざまな動き・変化が生じ始めた時期であるからだ。本研究はこの点において、短期間ではあるものの、現在までの約30年間という期間の歴史を記述し論じる歴史社会学としての研究である。

二つ目はゲイ男性のアイデンティティを、ゲイ男性当事者による活動の分析から論じることである。つまり、分析をするのは非当事者による語りや活動ではない。一般的な小説におけるゲイ男性表象であったり、一般雑誌におけるセクシュアルマイノリティに関する言説ではないということである。分析対象となるのは、ゲイ男性がゲイ男性としての立場から同じゲイ男性や社会に向けて行ってきた活動であるため、本研究は社会運動の社会学でもある。

そして三つ目は、ゲイ男性の活動の中で、どのようなゲイ男性が表象され、どのようなゲイ男性が背後に追いやられているのかという、表象の対立や矛盾について論じることである。ゲイ男性を一枚岩で捉えず、当事者による活動を批判的に捉え、集団内の差異に注目する本研究は、クィアスタディーズとしての研究でもある。

1990年代という時期には、ゲイ男性の社会運動が隆盛を見せ、当事者が自ら声を上げ始め、同性愛者への差別が社会問題化されていった。学術的研究も本格的に始まるのはこの時期からである。女性誌を中心にメディアでは「ゲイブーム」という現象が生じ、テレビドラマや映画における「ゲイ」の扱いも増加した。また同性に対する欲望が、個人の趣味や選択というニュアンスのある「性的志向」や「性的嗜好」（sexual preference）ではなく、生まれ持った性質としての「性的指向」（sexual orientation）として本質化（生物として生まれつき備わった、変えられない性質として生物学化）されていった。世界的な動きとしては、1990年にはWHO（世界保健機関）による「国際疾病分類」（ICD）から「同性愛」が外され、同性愛が非病理化された。また「ゲイ」という言葉が普及し始めたのもこの時期であり、新しい言葉によって新しいアイデンティティも形成されていった。現在の社会にある、ゲイ男性をはじめとしたセクシュアルマイノリティについての知識やイメージなどは、この時期の出来事に少なからぬ影響を受けている。

以下では1990年代の出来事を概観し、本研究の出発点となる時代がいかなる時代であったのかを確認する。ただし、必ずしもこの時期の出来事はレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーなどそれぞれを同等に扱っていた訳ではなく、セクシュアルマイノリティすべてにと

って 1990 年代が重大な時代であったと単純には言えない。同性愛についての言説が増大したと言っても、ゲイとレズビアンを比べると、レズビアンに関する言説は圧倒的に少なかった。同性愛が世界的に非病理化の流れにあった中で、トランスジェンダーは「性同一性障害」として疾患化・医療化されていった。X ジェンダーやアセクシャルなどについてはまだ議論が生じていなかった。よって以下では、同じ同性愛の問題としてレズビアンについても触れるが、ゲイ男性の出来事を軸に1990 年代を概観する。

1−2　1990 年代という時代

1990 年代以前にまず目を向けてみると、日本でゲイ男性による活動／社会運動が登場し始めたのは、1970 年代であった。1969 年にはアメリカで、現代のセクシュアルマイノリティの社会運動の引き金となった出来事とされている「ストーンウォールの暴動」(3)が生じた。その後アメリカの運動は広がりを見せ、その報道は日本にも入ってきた。これをきっかけに日本でも当事者によるいくつかの団体が結成されたが、しかしそれらの活動は短命であり、大きなうねりとはならなかった（プロジェクト G 1985:60-61）。1990 年代の運動につながる大きなきっかけとなった出来事は、1980 年代に生じた HIV/AIDS の登場とエイズ・パニック、そしてそれをきっかけに生じたゲイ男性による運動であった。はじめは多くの団体が HIV/AIDS に関わる活動を中心に行う中、1990 年代になると活動の幅を広げていく。東京や大阪などの大都市圏以外にも社会運動団体やコミュニケーションのサークルが登場し始める。こうした社会運動の流れとは別に、1990 年代はメディアで「ゲイ」の表象が増加した時代でもあった。そのきっかけは、女性誌『クレア』における「ゲイ・ルネッサンス '91」（1991 年 2 月号）という特集であったと言われている。これを皮切りにその他多くの一般雑誌でも「ゲイ」について特集が組まれ、その状況は「ゲイブーム」と呼ばれた。

1990 年代のゲイ男性当事者による活動は、二つに大別することができる。ひとつは、社会に対して働きかけを行う活動、もうひとつは、自分たちの意識を変えていく活動である。

社会への働きかけとして代表的なのは、「動くゲイとレズビアンの会」（通称、アカー）による「府中青年の家事件」（あるいは「府中青年の家裁判」）である。この事件は、アカーが 1990 年 2 月に東京都の公共施設である「府中青年の家」を宿泊利用した際、同日に利用していた他団体から嫌がらせを受けたことを発端に生じた事件である。その日は不在であった所長と事件の一ヶ月後に交渉が行われ、次回利用の予約をしていたアカーは同じような嫌がらせが生じないように対処をする要請をした。しかし所長が回答書で寄せた回答は、「教育機関の末端機関の長としてあなたがたの主張や行動を支持するわけにはいかない。他の青少年の健全育成にとって正しいとは言えない影響を与えることを是としない立場にあるものとして、次回の利用をお断りしたい」（風間 2001:126）というものであった。その後、東京都教育委員会にも青年の家利用の請願をしたが、利用不承認とされた。これらの判断は不当であるとして、アカーは損害賠償を求める裁判を起こした。1991 年から始まった裁判は 1997 年まで続き、アカーの勝訴で決着した（風間 1999;2001, 風間・河口 2010, アカー・動くゲイとレズビアンの会 1991, 齊藤 2011）。この一連の裁判と報道は、同性愛者への差別を社会問題として言説化し、同性愛についての知識を広めることに貢献した。

---

(3)　この事件については風間・河口（2010:88）参照。

メディアの同性愛者表象に対する抗議活動も行われた。大阪の団体「ゲイ・フロント関西」（現在は「G-FRONT 関西」）は、1996 年 3 月に発売された『野茂とホモの見分け方』という書籍と、そのもととなったラジオ番組「古田新太と犬山犬子のおちゃめナイト」（ニッポン放送）に対して抗議を行った。「ホモ」を嘲笑するような内容であった書籍は、抗議と交渉の後に回収されることとなり、同年 10 月 13 日にはラジオ内で謝罪が放送された（BADI1997/7:393）。北海道の団体「札幌ミーティング」は 1993 年に放送されたテレビ番組「ポテト年末スペシャル」（UHB）の中の「気がつけばホモ」というコーナーを問題視し、テレビ局と番組に対して抗議活動を行った。このコーナーでは偏見に基づいた 10 の項目によって「ホモセクシュアル度」をはかるという企画が行われた。9 ヶ月近くに及ぶ抗議と交渉を経て 1994 年 9 月 29 日には謝罪放送が行われた。

こうした抗議活動の延長線上に、セクシュアルマイノリティのパレードを位置付けることができる。1994 年には東京で「東京レズビアン・ゲイ・パレード」が初めて開催され、1000 人以上の人々が参加をした。その影響を受け、1996 年には札幌でも「レズ・ビ・ゲイプライドマーチ」という名でパレードが開催されている。紆余曲折を経ながらも両地域でのパレードは現在まで開催されてきている。

社会への働きかけというのはこうした抗議活動のみならず、講演会の開催などによっても行われてきた。ゲイライターの伏見憲明とレズビアンライターの掛札悠子による「LOG キャラバン」は、1994 年 10 月から 12 月の間に、全国縦断講演として 9 都市（札幌、仙台、東京、大宮、名古屋、大阪、岡山、呉、福岡）をまわり講演会を行った（BADI1994/12:289）。1997 年 5 月 25 日の東京大学五月祭では「ゲイ・スタディーズ　ミーツ　フェミニズム」と題するシンポジウムが行われ、上野千鶴子とアカーのキース・ヴィンセントと河口和也が討論を行った。

ゲイやレズビアンの表現活動にも目を向けると、ゲイとレズビアンの映画祭も 1990 年代に開始されている。1992 年には「第一回東京国際レズビアン＆ゲイ・フィルム＆ビデオ・フェルティバル」[(4)]と「第一回レズビアン・アンド・ゲイ・フィルム・フェスティバル」が開催された。このような映画祭は、実験的作品、短編映画、商業マーケットに乗らない作品の作り手が公的承認を得られる場所として機能するばかりでなく、セクシュアルマイノリティ当事者にとっても自らの欲望やアイデンティティを自律的かつ比較的安全に開示できる空間として機能した（菅野 2015:204-205）。またマスメディアのセクシュアルマイノリティ表象とは異なるオルタナティヴな表象を提示する場としても機能していたと言える。

1990 年代の「ゲイブーム」では、主に女性誌においてゲイ男性は「おしゃれ」な存在や「女性の良い友達」として表象された。この傾向は確かに同性愛についての社会的認知を促したが、そのステレオタイプなどに批判の目が向けられもした。この時期に登場した松岡錠司の『きらきらひかる』（1992 年）や中島丈博の『おこげ』（1992 年）といった映画も、ゲイ男性のカップルと異性愛女性による「家族」形成が物語の核となっており、異性愛者によるゲイ文化やアイデンティティの搾取であるとの批判も寄せられた（菅野 2015:205）。しかしこの当時制作された映画はそれだけではない。ゲイカップルの日常を追ったドキュメンタリー映画『らせんの素描』（小島康史, 1991 年）や、

(4)　現在では「レインボー・リール東京」という名称となっており、2019 年で 28 回目を迎える（公式 HP：http://rainbowreeltokyo.com/2019/about.html, 2019 年 5 月 11 日閲覧）。

大木裕之による実験的作品『ターチ・トリップ』(1993 年)、ゲイカップルの揺れ動く心を描いた『あなたがすきです、だいすきです』(1994 年) なども制作・発表された。ゲイであることを公表している橋口亮輔によっても、『二十才の微熱』(1993 年)、『渚のシンドバッド』(1995 年)、『ハッシュ！』(2001 年) といった男性同性愛をテーマとした映画が多く作られた。これらの作品は、そこで描かれるものをゲイの典型であるとして差し出すことは避けながらも、これまでとは異なるゲイ男性の姿を表象していった。

1990 年代には演劇も注目を集めた。1989 年にはゲイの劇団である「劇団ペンペン」が結成された。1992 年には、「『ゲイ』であることにこだわった芝居」を作り続ける「ゲイの劇団」[5]である「劇団フライングステージ」が東京で結成され、座長の関根信一による多くの作品がこれまでに演じられてきた。1996 年に初演された「陽気な幽霊 GAY SPIRIT」は 1997 年に池袋演劇祭 (第 9 回) で大賞を受賞している。また 1984 年に京都で結成されたアーティスト・グループであるダムタイプは、その代表作となる『S/N』を 1994 年に初演した。男性同性愛や HIV/AIDS をテーマとする『S/N』は現在でも注目される作品であり、幾つかの研究論文が執筆されている (齋藤 2010, 竹田 2010;2012;2014)。

1990 年代はマンガ文化においても、男性同性愛を描く「やおい」や「BL」というジャンルが社会的に注目され始めた時期であった。作り手と受け手が主に異性愛女性であるこれらのジャンルは 1960 年代に源流を見出すことができるが、一般化・商業化したのは 1990 年代からと言われている (溝口 2015)。しかし「ゲイブーム」の中では、その表象がゲイ男性から批判もされた。この批判・論争は「やおい論争」として知られており、ゲイであることをいかにして表象すべきかという論点が表出することとなった。それと並行して 1980 年代ごろからはゲイ雑誌でもマンガが掲載されるようになり、やおい／BL への抵抗が意図としてあるわけではないが、ゲイ男性によるゲイ男性向けのマンガの創作もやおい／BL 普及の背後で脈々と行われていた。1993 年に創刊されたゲイ雑誌『バディ』では創刊時から「バディ・コッミク大賞」という企画によって読者からマンガの投稿を募り、ゲイ雑誌におけるマンガ文化を形成しようと務めていた。

次に、自分たち自身の意識を変えようとする活動に目を向けると、〈自分については自分で語り、仲間に声を届ける〉という意図によってこの当時の活動が形付けられていたと言える。例えばこの時期にはゲイ男性、そしてレズビアンの著者による著作が多く出版され、その中で彼ら／彼女らは自分たちの生き方を形成・共有しようとしていた。1990 年代に出版された書籍の中でも伏見憲明による 1991 年の著作『プライベート・ゲイ・ライフ』は、当時の運動や活動に大きな影響を与えたと言われている。同書には伏見の顔写真も掲載されており、この書籍を通して公にカミングアウトを行ったが、こうした行動はこの当時、画期的なことであった (砂川 2003b:47)。1992 年には掛札悠子による『「レズビアン」である、ということ』も出版された。文体や内容はそれぞれ異なるが、両者はそれぞれの著作を通してゲイやレズビアンであるということを問いただし、ゲイやレズビアンというアイデンティティを引き受け、そのもとで自らの生を紡ぎ出そうとしていた。1990 年代は「カミングアウト」についてもっとも議論された時期でもあったが、この両者の「カミングアウト」もクローゼットからの脱出を試み、これまでの同性愛者の生き方とは異なる生き方を形成しようとす

(5)　「劇団フライングステージ　ABOUT」(http://www.flyingstage.com/about.html, 2019 年 10 月 13 日閲覧)

る試みであった。同性愛者はそれまで異性愛者によって一方的に語られる存在でしかなかったが、この頃から一般メディアにおける当事者の露出も増加した。

そうした機会が増える中、『ゲイの贈り物』(1992 年)、『ゲイのおもちゃ箱』(1993 年)、『ゲイの学園天国』(1994 年) という三冊のムックが発売された。いずれも複数のゲイ男性によって執筆されている。『ゲイの贈り物』は表紙に「GAY がつくった、みんなのための、ゲイ・カルチャー案内」と記されているように、ゲイの文化を当事者のみならず社会に対して紹介することも意図されている。紹介されるファッション、アート、映画、小説などは、編者の趣味によって選別されたという偏りについては編集後記で断りがあるものの、「ゲイ」として楽しみ、生きるためのマニュアル本としての役割が目指されていた。『ゲイの学園天国』はより「ライフ」に焦点が当てられた内容となっており、「ハッピー・ゲイ・ライフ」という大きな題目の中で、セックスから恋愛・パートナーシップまでの幅広いテーマで記事が執筆されている。1994 年には「宝島ゲイ・スタッフ」を編者とした『よくわかるゲイ・ライフハンドブック』が出版され、伏見の著作のような「ゲイライフ」という言葉がタイトルに使用されている。ここでもセックス、結婚、カミングアウトといった幅広いテーマで記事が執筆されたり対談が行われたりしており、「ゲイ」というアイデンティティを引き受け、そこから「ゲイ」としての生き方を模索する姿勢が窺える。その他にもゲイ男性による著作は頻出し、羅列するだけでも、伊藤悟による『男ふたり暮らし：ぼくのゲイ・プライド宣言』(1993)、『同性愛者として生きる：すこたん企画奮闘記』(1998)、伊藤と彼のパートナーの簗瀬竜太による『男と男の恋愛ノート：愛と暮らしと仕事のパートナーシップ』(1994)、レズビアンによる著作も、出雲まろうの『まな板の上の恋』(1993)、笹野みちるの『Coming OUT!』(1995)、池田久美子の『先生のレズビアン宣言：つながるためのカムアウト』(1999) などがある。そして 1993 年に創刊されたゲイ雑誌である『バディ』も「ライフスタイルとしてのゲイ」(伏見 2004:379) を追い求め、1997 年からキャッチコピーに「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」を採用し、「ハッピー」な「ゲイライフ」というテーマのもとで誌面作りに取り組んでいく。このように 1990 年代にはゲイ男性、そしてレズビアンも自ら声をあげ、自身について語り始めた。その中では「ゲイライフ」という言葉の普及にも見られるように、ゲイ男性は「ゲイ」というアイデンティティをもとにした生き方を模索したり、同じ当事者や社会に対してそれを提示していくという活動を積極的に展開し始めた。

こうした流れは、自分たちの居場所やコミュニティを作る活動とも関連している。1990 年代の突出した出来事のひとつに、多くの地域でゲイ男性やセクシュアルマイノリティのサークル・団体が結成され始めたことがある。例えば、吹奏楽、合唱、ダンス、英会話といった文化系のものから、バレーボール、テニス、野球、バスケットボールといったスポーツ系のものまで幅広いサークルが登場した (砂川 2015:248)。運動・コミュニティ系の団体としては、1990 年代初期には「ILGA 名古屋」(1990 年, 名古屋)、「E-betcha」(1992 年, 仙台)、「ゲイ・フロント関西」(1993 年, 大阪)、「Tokyo Gay Deaf Community」(1993 年, 東京)、「TOGETHER」(1993 年, 東京)、「すこたん企画」(1994, 東京) など、レズビアンのグループも、「東海レズビアン・コミュニティ」(1992 年, 名古屋)、「国際ビアン連盟」(1994, 東京)、「OLP」(1994, 大阪) など、多くの団体が結成された。大学におけるサークルが登場したのもこの時期であり、もっとも早い時期のものである早稲田大学の「GLOW」は 1991 年に結成されている。特筆すべきは、関東や関西の大都市圏以外の地域でもこうした団体やサークルが結成され始めたことである。筆者の住む北海道を例にとってみても、「ILGA 日

本・札幌ミーティング」(1989 年)、「北大 act」(1996 年)、「GAY NET HAKODATE」(1997 年)、「Happy Swing」(1998 年)、「旭川クラブ」(1998 年)、「CLUB HOMME NAKED'S」(1999 年) といったサークル・団体が結成されている。これらの団体の中には社会運動を行うという志向の強い団体もあり、先に述べたような社会への働きかけを積極的に行っていた。しかしそれと同時に、自分たちの居場所作りも行い、同じ当事者とのつながりやコミュニティを形成するための活動でもあった。自分たちについて自分たちで語る場を設け、悩みに取り組み、肯定的なアイデンティティを獲得することを目指していた。それまではゲイバーやハッテン場が主な交流の場であったと言われているが、それとは違う新しいつながりの形やつながりの場を形成し始めていた。

こうした団体・サークルとは違う形で (主にゲイ男性の) 新しい交流の場となっていった活動に、ゲイナイト (ゲイ男性、セクシュアルマイノリティをターゲットとしたクラブイベント) の開催がある。1989 年に新宿で開催された「The Private Party」というイベントが初のゲイナイトと言われているが、それをきっかけに東京でゲイナイトが開催されるようになった。開催数としては新宿が突出していたが、徐々に東京以外の大阪、京都、名古屋といった中核都市、さらにはそれ以外の地域でも開催されるようになった。クラブ会場のような大きな場に一度に多くのゲイ男性が集うという機会はこれまでなかったものであり、1990 年代の重要な出来事のひとつと評価されることもある。

以上、1990 年代の出来事を二つの点からまとめて概観したが、日本のゲイ男性にとって変革のうねりが押し寄せたのがこの時代であったことが、無数の出来事の存在からわかる。いずれの活動も、ゲイ男性にとっては、ゲイであるという肯定的なアイデンティティを立ち上げ、それを引き受けていく過程であった。しかし、この 1990 年代の出来事についてはいまだほとんど研究が行われていないというのが現状であり、さまざまな出来事が生じたという事実は共有されているものの、具体的にそこで何が行われ、どのような過程を経たのかという点は明らかにされていない。

私たちが現在理解するセクシュアルマイノリティについての知識はこの時期に形成されたと言っても過言ではないし、それは「ゲイ」や「同性愛者」であるというアイデンティティについても同様である。つまり、2000 年代以降の現在の活動がこの 1990 年代という時代の活動を基盤としているということでもあり、その活動を分析することは、今のゲイ男性の生き方がどう形作られてきたのか、2015 年以降の「LGBT ブーム」と呼ばれる中での活動がどのような条件のもとで行われているのかを明らかにする作業となるのである。

1−3　本研究の概要

次節からは先行研究を検討することによって、研究の目的、視点、そしてセクシュアルマイノリティの研究における本研究の位置付けについてより詳しく論じていくが、本論となる第 1 章から第 5 章までの内容を簡単に先取りし提示しておく。

本研究で扱うゲイ男性の活動とは、ゲイ男性によって行われてきた活動の中でも、当事者性のもとに行われ、同性愛者やゲイであることを何かしらの形で表象することを通して、自己や社会の意識を変えていこうとしていたと言える活動である。それを「自己変革を目的とした活動／ゲイ男性当事者をターゲットとした活動」と「社会変革を目的とした活動／社会をターゲットとした活動」の二つに分け、それぞれ二つずつ事例を分析する。事例として扱うのは、1990 年代ごろに始まり、

その後も比較的長期的に行われてきた活動である。事例の選別基準としてこの点を置くことによって、1990 年代以降から現在までの活動の変容や現在との繋がりを視野に入れることができる。

前者の活動として、まず第 1 章ではゲイ雑誌『バディ』を扱う。作り手も読み手もゲイ男性であることが特徴的なメディアで、ゲイの編者らが読者のゲイ男性にいかなる「ゲイライフ」を提示してきたのか、それがいかなる「ゲイ」としての在り方となっていたのかを分析する。第 2 章ではゲイ男性によってゲイ男性向けに作成されるゲイマンガを取り上げる。ゲイ雑誌に掲載されてきた作品を中心的に取り上げ、〈フィクション〉としての表現の中でいかなる物語や欲望が模索されてきたのかを論じる。後者の活動として、第 3 章ではゲイリブ団体であった「札幌ミーティング」を取り上げる。社会に対して抗議を行ったり当事者の居場所を形成する活動の中で、どのようなアイデンティティが模索されていたのかを論じる。第 4 章では、セクシュアルマイノリティのパレードを取り上げる。非当事者へのパフォーマンスとしての側面が強い活動の中で、ゲイ男性を含むセクシュアルマイノリティがどのような存在として社会に提示されているのかを分析する。そして第 5 章ではまとめの議論として、「自己変革を目的とした活動／ゲイ男性当事者をターゲットとした活動」と「社会変革を目的とした活動／社会をターゲットとした活動」でどのように表象が使い分けられてきたのか、これら二種類の活動がどのような関係にあったのかを論じる。

以上が本研究のごく簡単な構成である。次節以降、より詳しく紹介していく。まず、本節以降の序論では、1990 年代以降のセクシュアルマイノリティに関する研究の中でも、アイデンティティについての議論を中心的にまとめる。1990 年代というのは学術的議論が登場した時期でもあり、アイデンティティについても多くの議論が行われた。この時期の議論をまとめることは、その当時、運動や活動がどのように扱われていたのか、アイデンティティという概念がどのように捉えられていたのか、そしてそれらが現在の議論にどのような影響を与えているのかを知るためには重要な作業である。それをもとにして、アイデンティティの捉え方、ゲイ男性による活動の捉え方について論じた上で、本研究の詳しい構成と各章の紹介を改めて行う。

２．1990 年代におけるアイデンティティの議論

日本で同性愛についての研究が登場し始めたのは、1990 年代以降である。もちろんそれ以前にも同性愛についての研究はあったが、それは主に性科学的な論であり、同性愛を逸脱として扱うものであった。そうした流れからは袂を別つように、1990 年代からは同性愛の歴史研究や差別についての研究が登場し始める。日本におけるゲイとアイデンティティについて論じるにあたって、1990 年代から 2000 年代初期のゲイスタディーズにおける議論、アカーの活動・主張、そしてそれに対するクィアスタディーズからの批判について考察したい。なぜならば、これらの一連の出来事が日本で初めて同性愛者のアイデンティティを学術的領域で議論したものであり、現在のアイデンティティをめぐる認識はこの時の議論から大いに影響を受けているからである。また 1990 年代以降の同性愛とアイデンティティをめぐる研究潮流を学説史的にまとめることによって、本研究の位置付けも明確にすることを目指す。

2-1　ゲイスタディーズによる議論

この時期にアイデンティティについて積極的に発言を行い、ゲイ男性のアイデンティティを形成しようと試みていたのは、「動くゲイとレズビアンの会」（アカー）のメンバーである河口和也、風間孝、キース・ヴィンセントであった。1997 年には『ゲイ・スタディーズ』を発表し、同性愛をめぐる議論を牽引してきた。彼らはゲイスタディーズを「当事者たるゲイによって担われ、ゲイが自己について考え、よりよく生きることに寄与すること、さらに異性の間の愛情にのみ価値を置き、それを至上のものとして同性愛者を差別する社会の意識と構造とを分析することによって、同性愛恐怖・嫌悪と戦っていくのに役立つ学問」（ヴィンセント・風間・河口 1997:2-3）と定義する。より簡潔に言うと、ゲイ男性による、ゲイ男性のための学問ということだ。河口は、この定義が当事者性と功利性にとらわれすぎている、あるいは主観的すぎるという批判があることは認める。しかし、これまでの歴史において同性愛者は常に語られる「客体」であり、同性愛者自身の言説が無視されることで差別的な言説が流布してきた。当事者の経験を理論化し、そうした状況を打破するためにも、強い当事者性というものが必要であった（上野・ヴィンセント・河口 1998:33-35）。ゲイスタディーズは、「ゲイ」であるというアイデンティティに立脚した学問であるのと同時に、「ゲイ」としてのアイデンティティを形成することを目指していたのは、「日本の同性愛者が社会的および政治的アイデンティティをいまだ十分持ち得ていないのは事実なのである」（ヴィンセント・風間・河口 1997:154）という発言にも明確にあらわれている。

アイデンティティを形成するという意図は、「性的指向」概念を普及させようという試みにもあらわれている。アカーによって作成・発行されていた『同性愛報道の手引き』で性的指向は、「セクシュアルオリエンテーションとも。その人の性的意識が、同性、異性、いずれかに向かうかを表す概念。日本では、ほとんど知られていない。／性的指向は、皮膚の色などと同様、本人の意志では選択できない。主体的に選択したり、転換することが不可能な orientation を、「性的志向」「性的嗜好」と訳することは、誤りである」（動くゲイとレズビアンの会 1993:n.pag.）と解説されている。この解説では、同性愛は異性愛と同等の存在であること、その他のマイノリティと同様に生物学的に決定され個人の意思では変えられないことが示されているのである。

彼らによって争われた「府中青年の家裁判」でも性的指向はひとつのキー概念となっていた。概要はすでに述べたが、繰り返すと、1991 年から 1997 年までの間に争われた裁判で、アカーが東京都の公共宿泊施設である府中青年の家を利用した際、同施設に宿泊していた別団体から差別的発言を浴びせられ、それを所長に相談したところ、アカーの側が今後の利用を断られるという事件を発端に生じた裁判である。この裁判は同時に〈同性愛者とは何か〉という認識をめぐる裁判でもあり、そこでも性的指向という言葉が使用された。アカーは訴状の中で、同性愛者を異常として捉える認識に抵抗し、同性愛者と異性愛者を同等な存在として捉えるため、「異性愛とは、性的意識が異性に向かうことであり、同性愛とは性的意識が同性に向かうことである。異性愛の性的指向を有するものを異性愛者、同性愛の性的指向を有するものを同性愛者という」と、異性愛と同性愛を定義した（風間 1999:16）。この定義はそのまま第一審判決によって支持された。河口和也が、「日本では本質主義的なものを戦略としてとったほうが運動として展開しやすい面があるからこそ、アカーでは本質主義的な立場でこれまでずっと裁判をしたり、エイズのアクティヴィズムに参画したりしてきたんですね」（田崎・ヴィンセント・河口 1995:35）と語るように、政治的にアイデンティティの本

質化を推し進めることが、アクティヴィズムを進めるにはもっとも有効であると考えていた。性的指向を本質的なものとして捉えることは、同性愛者であることを自身の中の確固とした性質とする。嗜好といった言葉にイメージされる選択性や移ろいやすさは否定され、それを変えられない性質とすることは、自分が同性愛者であることを引き受けなければいけない状況を作り出すことでもあった。

では彼らの言う当事者性や、社会的、政治的なアイデンティティとは一体何か。風間孝はアイデンティティと当事者性について次のように語る。

> 私たちはアイデンティティを当事者性という意味でも用いていますが、それは自分たちが置かれている状況を引き受けているということだと思います。この状況を引き受けるというのは、自分たちは差別されていないとか、日本は寛容だとかいった形で抑圧を否認するのではなくて、自分たちは差別されているということを認めることです。
>
> (風間・河口・横田 1997:72)

つまり、彼らの言う当事者性や社会的・政治的アイデンティティというのは、差別の存在と被抑圧者としての自己を自覚的に受け入れることであった。そして彼らはアカーの活動を通して、そうしたアイデンティティを形成しようとしてきたのである。

アカーは被抑圧者としてのアイデンティティを形成するために、ホモフォビアについての議論も活発に行ってきた。例えば彼らは、エイズとホモフォビアに関する議論を積極的に展開した。風間孝は、これまで顕在化してこなかったホモフォビアが顕在化し始めたのがエイズの登場によってであったとし、エイズ・パニックを通して変容したゲイアイデンティティを分析している。日本におけるエイズ言説と、それにまつわるアカーの活動の考察を通し、「ホモフォビアのカミングアウトは、少数であったにせよ同性愛者たちに自らのおかれている社会的・文化的な状況を自覚させ、日本という文脈におけるゲイ・アイデンティティの形成を促し」、「社会から貼られた〔エイズという〕ラベルによってアイデンティティを引き受け、ホモフォビアと闘うアクティヴィズムを立ち上げていった」(風間 1997a:413) とまとめる。これはエイズをホモフォビアの視点から論じることによって、被抑圧者としてのアイデンティティを形成する作業、あるいは、ゲイたちを政治的に団結させてゆく作業であったと解釈できる。同じくエイズについて論じた別の論文では、「ゲイ男性を取り巻くホモフォビア言説を対象化すること (…) が政治的なアイデンティティを構築していくひとつの可能性を孕んでいることを示したい」(風間 1998a:238-239) とより明確に宣言している。このことからも彼らにとってのエイズ研究とは、ホモフォビアという敵を構築し、ゲイ男性たちを政治的に連帯させる目的のもとで行われていたとまとめることができる。

運動の歴史が浅いところにはアイデンティティやプライドが無い、とアカーのキース・ヴィンセントが語るように、アイデンティティの形成は社会運動の結果として形成されるものと認識されている (田崎・ヴィンセント・河口 1995:26-27)。そのため彼らは以上のような言論活動を繰り広げるために、「アイデンティティ研究会」をアカー内に設置するなどして、アイデンティティの形成を積極的に行ってきた。

2-2　クィアスタディーズによる議論

しかしこうした確固とした一枚岩的なアイデンティティを基盤とする運動や議論は、時を同じくして登場した（「輸入」された）クィアスタディーズによって批判の的となった。キース・ヴィンセントも指摘するように、この時期の日本はクィア系の海外論文が大量に日本語翻訳され出版された時期でもあり、クィアの議論は一種のブームとも言える状況であった（Vincent 2016）。クィアセオリー（のちにクィアスタディーズと呼ばれるようになる）は 1991 年にテレサ・デ・ラウレティス（de Lauretis 1991=1996）によって唱えられた、ひとつの研究の方向性を指し示す言葉である。彼女は、「ゲイ／レズビアン研究」という既存の学問を土台に、そこでこれまで触れられてこなかった、言説の構造、ジェンダーや人種と同性愛との関係性やそれらの共通の基盤などの問題に取り組もうとした。

彼女は、「レズビアンとゲイ」という言い方に注目し、この使用が結果として生み出しているものに警鐘を鳴らす。デ・ラウレティスが強調するのは、「私たちのあいだに存在する『様々な差異』は、それらがどんなものにせよ、『レズビアンとゲイ』という政治的に正しい言語を使う言説によって、表現されているというよりはむしろ、その文脈の大部分において排除されている」（de Lauretis 1991=1996:69）という点であった。この時代の同性愛の研究は実際のところ多くが男性同性愛の研究であり、「レズビアンとゲイ」という言葉の上では両者が平等に表現されているものの、実際の研究では両者の間にあるジェンダーの差異、ジェンダーを原因とする問題の差異が抹消されていると彼女は言う。つまり、「同性愛者」という一枚岩的なアイデンティティの中に埋もれてしまう差異に目を向けることを彼女は主張していたのである。しかし、「『クィア・セオリー』という用語は、このように〔ゲイ／レズビアンのように〕私たちの言説規範に抜きがたく存在するあらゆる細かな区分だてを取り払うために生み出されたと言えよう」（de Lauretis 1991=1996:69）とも言うように、政治における共通の基盤を見つける営みでもあった。よって、クィアとは差異と同一性／普遍性の間を常に往還すること、言い換えると、人々の間にある差異を論じながらも連帯をする試みとなる。

クィアが射程に収めるもののひとつは、アイデンティティに対する徹底的な懐疑的姿勢であると伊野真一はまとめる。クィアセオリーが登場したのと同時期にジュディス・バトラー（Butler 1990=1999）が「女」という一枚岩的なアイデンティティは成り立たないことを指摘したことは、クィアスタディーズによるアイデンティティの議論を促していった。伊野によると、「アイデンティティの脱構築とは、(…) アイデンティティが表現される関係を政治的なものとして確立することであり、アイデンティティの基盤主義的枠組みを疑問に付すこと」（伊野 1997:110-111）であり、アイデンティティが政治の基盤となることを批判する。アカーのような本質主義的なアイデンティティを主張することの問題として彼があげるのは、同性愛を「選択」する人、あるいは「趣味」とする人を異常とみなし、正しい同性愛と間違った同性愛を生むこと、「誰もが性的指向を持っている」と言うことで、性的指向を持たない人、それが希薄な人は排除されること、アイデンティティが本質化されることによって、カテゴリーの再定義・再解釈の可能性が閉ざされること、フーコーにおける主体化とは従属化でしかなかった（ので、アイデンティティを用いてカミングアウトを行うという戦略は、新たな権力関係を起動させることが難しい）こと、などである（伊野 2005）。また伊野はバトラーを引用しながら、「アイデンティティの政治の批判の急先鋒とされるバトラーにおいてさえ、政治的実践としてではなく言説実践の効果としてアイデンティティを記述することによって、

概念としてのアイデンティティは保持される」（伊野 2005：44）と、アイデンティティへの批判を徹底させ、その概念自体を放棄することを主張する。

アイデンティティという概念自体への批判は、他の論者にも見られる。バトラーなども踏まえつつアイデンティティの学説史をまとめた上野千鶴子は、アイデンティティは「有効期限切れの概念」（上野 2005）と言う。野口勝三は「クィア理論というのは、（…）同性愛者という自己同一性を持つことに対する批判というものが一つの中心となった考え方です」（砂川・野口・伏見 2001：240）とまとめ、アイデンティティを持つこと自体をも批判する。また堀江有里は、クィアはアイデンティティ概念を用いた研究や運動に対する、「ある種の“アンチ”概念として用いられてきた傾向もある」（堀江 2015：42）と端的にまとめている。こうしてアイデンティティはその概念のレベルにおいても、社会運動のレベルにおいても、クィアによって痛烈に批判された。これは日本でクィアが「アイデンティティの否定」（清水・クレア 2019：79）として解釈されたことを示している。

「ゲイ」についての積極的な議論を展開してきた伏見憲明は、「せっかく『ゲイ』という主体を成立させようと活動しているところに、今度は『クィア』というものが入ってきて、みんなあいまいなんだっていう方向だけに話を持っていかれちゃうのはいやだった」（伏見 2004：23）と語るが、クィアの議論は、運動の基盤を奪われるような感覚をアクティヴィストたちに与えただけではなく、〈アイデンティティを持ってはいけない〉という一種の強制としても受け取られたのではないだろうか。ここで生じたのは、アイデンティティポリティクスへの批判であると同時に、アイデンティティという言葉を用いることすらも批判されうる状況ではないだろうか。

本質的アイデンティティを主張する基盤主義的な運動は海外でも過去に登場しており、批判が向けられていた。1970 年代のアメリカにおける同性愛者の政治では、政治的姿勢に大きな変化が生じたことをきっかけに、エスニックモデルが登場した。アメリカの 1970 年代以前の運動では同性愛／異性愛という二分法自体への異議申し立てが政治の軸であった。しかし、このカテゴリーや二分法自体からの解放主義的思想はその後、異性愛者からの差異を強調し、同性愛者を一枚岩の集団として主張するエスニックモデルにとって代わられたとされている（Jagose 1996, 河口 2003）。エスニックモデルとは、同性愛者というマイノリティをその他の人種的、民族的なマイノリティと同等に扱うモデルであり、本質的なアイデンティティ観によって支えられている。それは、「すべての人にとっての根源的な可能性としてではなく、独特かつ同一性が認識される集団」(6)として同性愛者を捉える政治観であり、「『平等ではあるが差異もある』というロジック」(7)であった（Jagose 1996：61）。河口は「明確な人種あるいは民族的な差異に依拠することにより、それまで周縁化されていた集団の市民権やその他の権利が保証され、主流の人種・民族集団との平等が確保されることをめざすもの」（河口 2003：39）と説明する。このようなロジックは同性愛者という集団を明確に縁取ることで可視化を促進はしたが、その反面、一貫したコミュニティを提示してしまうことによってゲイやレズビアンの定義が狭くなり、その結果としてそこからこぼれ落ちたり、二分法を否定するこれまでの解放主義的な思想において位置を与えられていた人がその位置を奪われたりした（Jagose 1996：62）。日本でこのようなエスニックモデルと同等の傾向が登場し始めたのが、1990 年代であっ

(6) “as a distinct and identifiable population, rather than a radical potentiality for all” (Jagose 1996: 61)
(7) “‘equal but different’ logic” (Jagose 1996: 61)

たと言える。

2-3　クィアへの反論

クィアという視角は、アイデンティティの問題点を確かに浮き彫りにしたが、批判も寄せられた。ジェフリー・ウィークスは、「アイデンティティに疑問を差し挟むクィアの試みも、最終的にはアイデンティティをふたたび主張することになる。というのも、アイデンティティを持たないというアイデンティティ（non-identity identity）以外に、『クィア』というラベルにどんな意味があるのか」（Weeks 2007=2015:148-149）とクィアを批判し、続けて次のように言う。

> アイデンティティは、私たちが誰であり、また何であるのかに関して絶対的な基礎になるように見える。しかし歴史が明らかに示すように、アイデンティティは歴史的に変化する、偶有的なものである。アイデンティティは、「フィクション」なのである。すなわち複雑だが変化していく歴史の中で、私たちに対して語りかけ、あるいは私たち自身が語る物語なのである。それは、アイデンティティなしに私たちは生きられないという意味で、「必要なフィクション」なのである。（Weeks 2007=2015:149）

アイデンティティとは歴史的・可変的なものであるが、「必要なフィクション」であるとして、アイデンティティを人々が持つことの意味を主張している。

デ・ラウレティスは、「私にとってクイア・セオリーというのは、（…）便宜上作ったひとつの仮説、キー概念であって、つまり、ひとつの安定しているアイデンティティではありません」（デ・ラウレティス 1998:68）と断言しているように、クィアとはアイデンティティではなく、ひとつの分析視角である。それにも関わらず、「クィア」が非典型的なセクシュアリティを持つ人々をまとめ上げて指し示すアイデンティティとして用いられていることをデ・ラウレティスは懸念する。だがこの懸念は、ジェフリー・ウィークスが言っていたように、いくらアイデンティティを批判しようと、人々は一貫し安定したアイデンティティを必要としてしまうという事実を物語っている。清水晶子も、「クィアな態度」が制度やアイデンティティに対する批判に向かうのではなく、「私」のエンパワーメントと化していることを指摘し、このエンパワーメントが「クィア・アクティヴィズムやクィア理論の姿勢を部分的に受けつぎつつ、『私たち』と『あなたたち』とを峻別する既存の規範に対する批判的側面を大きく後退させ、『他の人たちと異なる私（たち）』の揺るぎない境界線を確認し主張する、いわば脱政治化されたアイデンティティ・ポリティクスの性質を強めている」（清水 2013:319-320）ことに警鐘を鳴らす。

クィアスタディーズは学術的領域においてアイデンティティに対してラディカルに批判を行ってきた。しかし、クィアが確固としたアイデンティティと化していることに対する懸念から読み取れるのは、クィアが単に「誤用」されているということではなく、アイデンティティは人を抑圧したり排除したりする側面があるにも関わらず、それでもなお人々はアイデンティティを追い求め、必要としてしまうという事実である。事実、クィアスタディーズもアイデンティティの存在自体を完全否定しているわけではないことは指摘されている。バトラーについて論じる中で清水晶子も、「バトラーにとってアイデンティティのカテゴリーが厄介な問題になるのは、何よりもまず、我々がそ

のようなカテゴリーの記号を使わずには生き延びられないから」（清水 2006:173）であると、アイデンティティからの逃れがたさこそがアイデンティティの議論では重要であり、「記号使用をめぐる「わたし」の（…）無力性、あるいは特定の記号の使用へと駆り立てられる『わたし』の生存可能性の危機についての考察なしに、アイデンティティの政治への理論的批判を行うことは難しいだろう」（清水 2006:185）と、アイデンティティを闇雲に否定するのではなく、アイデンティティ／カテゴリーを使用しなければならないという事実に立脚した論の必要性を説く。藤高和輝も、クィアがアイデンティティを乗り越えるものとして理解されてきたことを批判する。藤高によると、「クィアという侮蔑的な言葉を自己に引き受けることは『痛み』を伴う経験であり、また、それはアイデンティティの問題や不安定性、矛盾、逆説を経験することである」とし、「『クィア＝脱・アイデンティティ』という認識が問題なのは、このような『引き受け』の複雑な過程を『抹消』してしまう恐れがあるからである」（藤高 2015:35）と、アイデンティティ概念自体を否定することを批判する。「『批判的にクィアする』とは、アイデンティティに外在的ではなくあくまで内在的な実践なのであり、アイデンティティが孕む問題、矛盾、逆説、痛み、緊張、両義性において思考すること」（藤高 2015:34）であるため、クィアの視角であってもアイデンティティの存在を出発点としなければいけないことを主張する。

伏見憲明と野口勝三は、1990 年代後半には日本のアクティヴィズムが停滞したとして、その理由について対談で語っている。ひとつは、東京で開催された 1994 年から 1996 年までのパレードで、ゲイの活動家の南定四郎のワンマンぶりが顕著になり、伏見らの世代以降の人々の支持を得づらくなっていったことをあげる（第 4 章で詳述）。二つ目として、目標の喪失、動機の喪失をあげる。ゲイの脱病理化と差別問題としての正当性の主張が一定のレベルに達したことによって、次はそれ以上に何を訴えるべきなのかを見つけられず、同じことを繰り返し主張することによって、活動の動機を喪失した。そして三つ目として、ゲイやレズビアンという主体を立てることに対する、内部からの批判が登場したことを挙げる。この点がクィアによるアイデンティティ批判である。伏見は自身もクィアという語を 1990 年代当時、積極的に用いていたことを振り返り、その負の影響について次のように語る。

> 僕の仕事の功罪の、罪の部分になるのかもしれないけれど、「クィア」とか「セクシュアルマイノリティ」という枠を提出したことで、何でも一緒にやっていくことが正しい、一緒にやらなければならない、そうでなければ差別や排除になる、と考える流れが運動の中にできてしまった。あるいは、カテゴライズすること自体が悪いことだというような主張。ゲイだけで何かをする、レズビアンだけで何かをするということが、批判対象になるという弊害が生じたんです。（伏見 2004:25）

伏見は 1996 年に『クィア・パラダイス』（2003 年には『変態（クィア）入門』として文庫化）を出版するが、この内容が、「ネイティブ・レズビアン」、「トランスジェンダー」、「女装家」、「インターセックス」などのさまざまなセクシュアリティを持つ人々との対談集であったことは、「何でも一緒にやっていくことが正しい」という考えが反映されたものと捉えることができよう。しかし伏見は自分が積極的に用いていた「クィア」が結局のところ、運動に弊害をもたらしたとして当時を振

り返っているのである。類似する批判に、アイデンティティをグラデーションとして捉える認識への批判がある。風間（1997）は、アイデンティティをグラデーションとして捉えることが、ゲイやレズビアンというカテゴリーをも抹消してしまうことにつながりかねないことを懸念する。

1990 年代から 2000 年代初期にかけて生じてきた議論によって、アイデンティティという視点を用いて社会を／セクシュアルマイノリティを分析することすら避けられるようになってきたと思われる。ゲイ男性のアイデンティティと活動についての研究がこれまでほとんど行われてこなかったのは、クィアの受容に見られたように、アイデンティティを扱うこと、あるいは「ゲイ」だけを取り上げることがすぐさま他のマイノリティの排除と結びつけられるようになったからではないだろうか。しかし、アイデンティティを批判的に論じることは必要であるが、アイデンティティを分析の俎上に載せることすら避けるべきではない。

一貫した一枚岩的なアイデンティティを持つことが不可能であるということ、またアイデンティティが時に特定の人々を排除する可能性があるということと、それを形成しようとしてきた人々の営みが実際に存在してきたということは分けて考えなければいけない。砂川秀樹は 1990 年代末に、クィアスタディーズの登場に際して、「日本においては、まだ、ゲイ／レズビアンをめぐる議論が、その内的差異を顕在化させるほど、十分に行われていない」（砂川 1999：142）ことに触れ、「日本のゲイ／レズビアン・スタディーズは、過去に発せられたゲイ／レズビアンの声も同時代のゲイ／レズビアンの声もまだ十分に聞き取っておらず、（…）まだ、具体的な形でほとんど分析的視線を向けてすらいない」（砂川 1999：149）ことを指摘しているが、これは現在でも有効な指摘であると思われる。アイデンティティの存在を強調することは、確かに抑圧を生み出したり特定の人を排除したりしてしまうかもしれないが、しかし事実、人々はアイデンティティを求め生き、それを形成してきたということは無視されてはいけない。マイノリティの活動が必然的に通らなければいけなかったこの過程をつぶさに分析し、記述するという作業は必要である。他者によって語られるアイデンティティではなく、自らアイデンティティを形成し引き受けることは、〈わたし（たち）は誰か〉という決定権を自らの掌中に取り戻すことであり、自らの肯定的なアイデンティティを得るための重要な作業であった。しかしそれが必然的に〈わたし（たち）〉の中から何かを排除してしまうのであれば、ゲイ男性が求めてきたものと、その反面、見えなくなってきたものを共に明らかにしなければならない。社会はセクシュアルマイノリティに対しての理解を示しつつあり、社会が良い方向へ進んでいることは確かである。だがこれまでの活動を批判的に捉えて、何が・なぜ覆い隠されてしまったのかを明らかにすることは、今のゲイ男性が置かれている状況や彼らのアイデンティティについて知ることであり、今後の活動や運動を進める上で重要な作業となるだろう。

３．分析枠組み

3−1 「アイデンティティ」の捉え方

本研究ではゲイ男性による活動を分析することを通して、1990 年代以降に形成されてきたゲイ男性のアイデンティティについて論じるが、では具体的にどのような枠組みで、何に注目をして分析を進めるべきか。まずアイデンティティについて考えたい。

これまでクィアスタディーズによって指摘されてきたのは、まず個人のレベルとしては、確固とした／一貫したアイデンティティは存在しないということ、アイデンティティは流動的であること、確固としたアイデンティティを持つことは個人を拘束することがあること、といった点である。集団のレベルで言えば、運動の基盤となり、多くの個人に共有されるアイデンティティはないということ、そうしたアイデンティティを持とうとすることによって特定の誰かが排除されるということ、であった。

しかしそれにも関わらず、アイデンティティを形成するための（あるいは結果としてアイデンティティを形成してしまう）種々の活動が実際に行われてきたということに本研究は注目をしている。それに加え、その際に行われる活動というのは社会的な行為であるため、その内容や方法は活動を行う人を取り巻く人間関係によって異なるということに注目をしたい。つまり、そうした活動によって提示されるアイデンティティは、戦略的になるということである。ここでアカーが運動を行うにあたって「戦略的」に本質主義を用いていたという言葉を思い出したい。アカーが想定していたのは、本質主義的なアイデンティティ観を用いることがその当時の状況を踏まえた上でもっとも有効であるということであり、その想定のもと、意図的・戦略的に言説を形成していたのだ。府中青年の家事件を取り上げてみると、彼らの活動や主張は広く社会に向けられていたと同時に、裁判官という対象にも向けられていた。社会的承認を得て、裁判に勝つために、戦略的にアイデンティティについての主張が繰り広げられたのである。言い換えると、その他にいくつもの主張が可能である中で、特定の主張が戦略的に選択されたということである。こうしたアイデンティティの戦略については、ゴフマンの議論が参考になる。彼は、人々はコミュニケーションを行う中で、「演技」をすることによってアイデンティティを形成していると論じた。

ゴフマンは『行為と演技』（Goffman 1956=1974）で、人々のコミュニケーションを演劇論的アプローチによって捉えた。パフォーマー、オーディエンス、舞台装置などのメタファーを用いて、人々が日常的に「演技」をすることによって、アイデンティティを管理している様子を記述し、論じている。特に『スティグマの社会学』（Goffman 1963=2001）では、スティグマを烙印された人々（否定的なイメージを社会から与えられている人々）が、さまざまな人間関係の中で自らのアイデンティティをいかに管理するのか（自身の性質をいかに見せたり隠したりするのか／パフォーマンスするのか）について論じている。この中でゴフマンはアイデンティティを大きく二つの概念によって捉えている。ひとつは「対他的な社会的アイデンティティ」（a virtual social identity）であり、他者からの一方的な性格や属性の付与を意味している。つまり、特定のカテゴリーに対して社会で共有されているイメージのことである。そしてもうひとつは、「即自的な社会的アイデンティティ」（an actual social identity）であり、個人が自身のことをどのような人物と認識するのか、自身のアイデンティティをどのようなものとして捉えているのか、という主観的側面を示している。前者を表面的なアイデンティティとするのであれば、後者は「本当」のアイデンティティであると言える。この双方のアイデンティティは一致するのではなく、多くの場合は乖離している。そのためスティグマを持つ人は、自身の「本当」のアイデンティティを隠したり（＝パッシングをしたり）、対他的な社会的アイデンティティを変化させるための行動をとったりすることで、双方のアイデンティティを一致させようと試みる。本研究がゴフマンの論で重要だと捉える点は、アイデンティティの管理というのが一様に行われるのではなく、その時その時の状況によって変化するということ

である。ゴフマンは次のように言う。

> 個人の社会的アイデンティティは、彼の交際する人びとの世界や場所を分割しており、違った仕方ではあるが彼の個人的アイデンティティもまたこのような分割を行っている。スティグマを持つ特定の人の日常生活の反復的諸局面、すなわち仕事の場所、生活の場所、買い物の場所、レクリエーションに参加する場所などの間を往復して行う生活を研究するにあたって、われわれが用いなくてはならないのはこのような〔分割によって生ずる〕多様な準拠枠である。 (Goffman 1963=2001:156, 〔〕内は訳注)

ここで言われているのは、アイデンティティを研究する際には、アイデンティティの管理が生じるさまざまな生活局面を分析しなければいけないということである。場の違いは人間関係の違いでもあり、演技をする際のオーディエンスの違いでもある。オーディエンスが異なることによって演技の内容が異なることをゴフマンは「オーディエンスの分離 (audience segregation)」(Goffman 1956=1974:55) と呼び、パフォーマンスが一元的に決定されているわけではないと論じているのである。

ゴフマンの議論を下敷きに議論を行う石川准 (1992) は、アイデンティティの管理の4つの戦略を挙げている。ひとつは、「印象操作」であり、負のアイデンティティ (与えられたスティグマ) を隠すことが主な行動になる。同性愛者であれば、異性愛者として振舞うことが挙げられる。二つ目は、「補償努力／名誉挽回」であり、価値あるアイデンティティを獲得することである。例えば、高学歴を志向したり、大企業へ就職したりすることなどによる、社会的地位の上昇がひとつである。三つ目は「開き直り／解放」であり、否定的アイデンティティを肯定的なものに転換させることである。元来「楽しい」という意味のあった「ゲイ」という単語を用いることで、同性愛者のイメージを肯定的なものに転換していった例などがある。四つ目は、「価値剥奪／差別」であり、他の誰かを差別することによって、相対的に自分の地位を上昇させることである。この4つのストラテジーを見ても、それぞれ行われる場所が異なることが想像できる。個人は、置かれた場所によってストラテジーを使い分けたり、あるいは組み合わせたりすることによってアイデンティティを管理する。石川は、人々はさまざまなアイデンティティを抱える存在であることを、「『わたし』とはアイデンティティの集合、アイデンティティの束だ」(石川 1992:14) と言うが、同様にして、「わたし」とはアイデンティティ管理の戦略の束によって生み出されるとも言えるのではないだろうか。

よって本研究でアイデンティティを分析するにあたって、何かしらの活動が行われる際のオーディエンスは誰なのか、活動の対象者は誰なのか、それによってどのような表象の使い分けがされるのかという視点を取り入れる。

3-2 「活動」の捉え方

次にゲイ男性による活動を捉えるにあたって、社会運動の枠組みを参考にしたい。セクシュアルマイノリティの社会運動は、社会運動の歴史の中では「新しい社会運動」と呼ばれる運動のひとつと言える。富永京子によると、高度資本主義社会の到来により社会運動論が分析の俎上に載せるものも変化した。その到来以前は労働運動が主な対象であったが、生活の合理化や文化の破壊が問題

視される中で、環境運動、女性運動、先住民運動、マイノリティをめぐる運動へとその対象が拡大していった。そして、「プロレタリアートが従事するものだけではない自己変革のための運動も『社会運動』とみな」すようになっていった（富永 2017:130）。もちろんこの変化は学術的領域でのみ生じた変化ではなく、実際に人々による運動の質が変化したことを反映しての対象の拡大である。また石川准は、「『制度変革志向』と共に『自己変革志向』を持」ち、「社会制度や社会意識を変えていこうとすると同時に、自分達のアイデンティティやライフスタイルを変えていこうとする集合行為だけが、社会運動である」（石川 1988:155）と論じる。しかし必ずしもすべての運動が制度変革志向と自己変革志向を同程度に持つわけではなく、その比重はそれぞれの運動や活動の種類によって変わり、またひとつの運動の中でもその比重が時代によって変化したりするだろう。例えば第一波と第二波フェミニズム運動について中西と上野は、第二波フェミニズムの「それ以前の女性運動とのもっとも大きい違いは、弱者救済運動ではなく、当事者の自己解放運動だったことである」（中西・上野 2003:186）と言うように、第二波からは自己の内面への取り組みが重視されるようになった。セクシュアルマイノリティの運動を例に挙げてみると、制度変革志向の強いものとしては、府中青年の家裁判、メディアへの抗議活動、セクシュアルマイノリティのパレード、同性婚の合法化を目指した訴訟などがあり、自己変革志向の強いものとしては、悩みを語る座談会などのコミュニティ活動やゲイナイトを含めることができるだろう。

こうした点を参考にすると、ゲイ男性による活動も大きく二種類に分類することができる。ひとつは自己変革（自意識・自尊心の変革、自己イメージの変革など）志向の強いものであり、もうひとつは社会変革（社会規範といった人々の意識、異性愛者が持つ同性愛者に対するイメージなどの変革）志向の強いものである(8)。アイデンティティの観点から見るといずれの活動もアイデンティティの形成に結びつくと言えるが、その活動の範囲・過程は異なる。自己変革志向の強い活動は、例えば、セルフヘルプグループなどの活動がある。この活動はその参加者の意識を変えることを目的としており、それ自体は広く社会変革に繋がる必要はない。あるいは、社会変革の有無を問わず、自己が変革すればそれ自体で目的は達成されたものとされるし、社会変革からは距離をおいて活動をすることができる。対して社会変革志向の強い活動は、その対象範囲が前者よりも広い。意図されているのは、主に国を単位とした人々の意識を変えることである。自己変革志向の強い活動では当事者の意識が変われば目的が達成されたとみなされる一方で、社会変革志向の強い活動は、非当事者も含む人々の意識が変わることを目的としており、活動が向けられた対象者が大きく異なる。

以上から本研究では、ゲイ男性による活動を「自己変革を目的とした活動」と「社会変革を目的とした活動」の二つとして捉える。この二つの活動の分類を先に見たアイデンティティの捉え方とともに考えると、誰をターゲット／オーディエンスとして自己提示がされるのかという点と、自己変革と社会変革という分類が重なり合うことがわかる。つまり、自己変革はゲイ男性によるゲイ男性をターゲット／オーディエンスとした活動であり、社会変革はゲイ男性による社会（異性愛者）をターゲットとした活動として捉えることができる。ゲイ男性やセクシュアルマイノリティの活動に関する先行研究も、以上の点から分類することができる。

(8)　石川は「制度変革」という言葉を用いていたが、本研究ではこれを「社会変革」という言葉で言い換え、法律などの明文化された制度だけではなく、広く人々の意識も含むことをよりわかりやすく捉える。

セクシュアルマイノリティ当事者がターゲットとなる活動としては、例えば砂川秀樹（2015）が分析をしている新宿二丁目における「レインボー祭り」という活動がある。2001 年から開始されたこの活動は新宿二丁目の活性化やコミュニティ形成活動となっており、2001 年の「大成功」は「日本に真のゲイ・コミュニティが誕生したのだ」（伏見 2004:196）との言説も生んでいる。また三部倫子（2014）はカミングアウトを親／家族との関係から論じており、同性愛者とその親が参加するセルフヘルプグループを分析している。このグループで行われていることも、同性愛者の子とその親が自らの経験について語ることで親子関係を構築したり変容させたりすることであり、（縁者としての親も含む）当事者がターゲットの自己変革活動と言える。また堀川修平（2016）は日本におけるセクシュアルマイノリティの社会運動を牽引してきた南定四郎の思想や運動論を分析している。堀川は特に 1984 年から 1994 年まで南が行っていた「学習会」を分析し、彼が「被抑圧者としての同性愛者」というのを重視し、そうした当事者性やアイデンティティを形成しようとしてきたことを明らかにしている。この活動は当事者を主なターゲットとした活動である反面、社会変革を高次の目標としている点で、自己変革と社会変革の双方を目指している活動とも言える。

非当事者を主なターゲットとしてより広く社会に対して行われる活動については、新ヶ江章友（2013）による、日本のエイズ施策とゲイ男性のアイデンティティやコミュニティ形成の研究がある。日本でエイズパニックが生じた際、「男性同性愛者」はエイズにかかりやすい「リスクグループ」として同定されたが、当事者団体はそれを批判し、「個別施策層」としてゲイ男性を捉えることを提案している。国家と当事者の協力によってエイズ施策が進められていったことを明らかにしたこの研究も、エイズとゲイ男性に対する社会の認識を変革させるための当事者による活動を分析したものとして捉えることができる。また堀川修平（2015, 2018）は南定四郎によって 1994 年の東京で開始され、2000 年に砂川秀樹によって引き継がれたセクシュアルマイノリティのパレードを分析している。1990 年代の南のパレードは、政治的な「デモ」としての側面が強かったのに対して、2000 年のパレードは「祭り」としての特色を強めていったと論じている。単純化して捉えると、非当事者への働きかけが強いパレードから、当事者が「楽しむ」ためのパレードへと移行していったと言える。

数少ない例ではあるが、ゲイ男性の活動といっても、その内容やターゲットに大きな隔たりがある。それらの活動は向けられるターゲットによって、そして自己変革と社会変革のどちらを主目的とするのかによって、何をどう行うのか、どのような主張を繰り広げるのか、といった戦略に大きな影響を与える。例えば、アメリカや日本における同性婚推進運動について論じたマサキチトセは、大衆迎合的な運動を「世間体政治」という言葉で言い表しているが、それは、「差別への抵抗において、被差別集団がいかにまっとうな人間であるかを説明する形で差別解消を訴えるような政治活動のやり方」（マサキ 2015:78）と説明される。例えばマサキは、日本で同性パートナーシップ制度が制定されたりセクシュアルマイノリティに対する認知が進んでいる中、ゲイ男性の「性」の側面がクローズアップされた際に活動家から発せられた〈LGBT の印象を悪くしないで〉という発言を取り上げているが、この発言も、LGBT は善良な市民であることを主張することで差別を解消しようという戦略である。別の言い方をするのであれば、主流社会／異性愛者への同化であり、オーディエンスとしての異性愛者を意識したことによって生じた戦略のひとつである。しかし戦略的な意識は主流社会に対してのみ向けられるわけではなく、当事者へも向けられるだろう。つまり、いかなる活

動であっても、そのターゲットや取り巻く人間関係によってその戦略は変わってくる可能性があるということだ。

本研究では以上のような観点からゲイ男性のアイデンティティと活動を捉える。「アイデンティティ」と「活動」についての観点を統合し、「自己変革を目的とし、主にゲイ男性当事者を対象とした活動」と「社会変革を目的とし、主に非当事者を対象とした活動」という二つの大枠を設定して事例の分析を行っていく。そしてこの二つの活動での表象の違い、両者の間にある関係性や影響関係について論じていく。

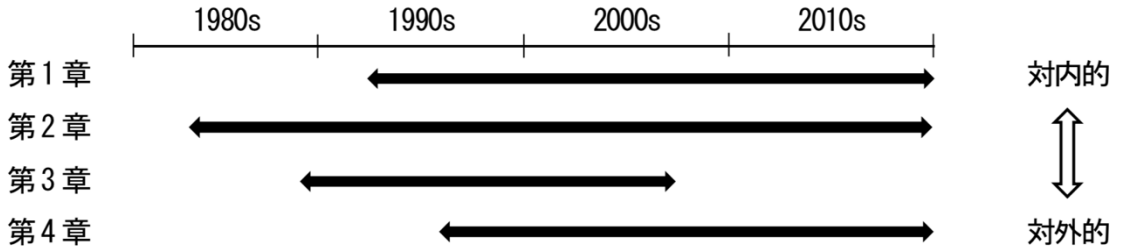
本研究が用いる用語について補足をしておく。ここまでの議論でも既に「ゲイ」「ゲイ男性」「男性同性愛者」といった、同義と捉えられるいくつかの言葉を用いていきたが、以下での用法を確認しておく。本研究では、基本的に「ゲイ男性」という言葉を用いて、広く、男性を性愛の対象とする男性を指し示す。「ゲイ」「男性同性愛者」「同性愛男性」という言葉と基本的に同義と捉え、細かな使い分けをしない。ただし、1990 年代以降に普及し始めた新しいカテゴリーとしての「ゲイ」を強調する場合は、鉤括弧付きの「ゲイ」という言葉を用いる。また 1980 年代以前のゲイ男性について触れる際には、「ゲイ男性」という言葉が時代錯誤的なニュアンスを伴ってしまうことがある。その際は「男性同性愛者」という言葉を適宜使用することがある。「同性愛男性」という言葉は、男性との恋愛や性的接触を経験しているが自身を同性愛者であるとは必ずしも自認しない人を指し示す言葉として使用されてきた傾向があるが、こうした人物は本研究の中でほとんど言及していないため、この言葉は使用していない。

3−3　本研究の構成

本研究では「自己変革を目的とし、主にゲイ男性当事者を対象とした活動」（対内的）と「社会変革を目的とし、主に非当事者を対象とした活動」（対外的）という二つの大枠を設定して事例の分析を行っていく。事例分析は 4 つの章からなるが、図 0-1 では各章の事例の活動時期と対外的／対内的の区分けについて図示している。活動時期に多少のズレはあるが、いずれも 1990 年代に始まったり、そこを重要な活動期間とする活動を扱っている。第 1 章と第 2 章では対内的な活動を、第 3 章と第 4 章では対外的な活動を分析する。そして第 1 章から第 4 章にかけて、徐々に活動が対内的から対外的へと移行するようにもなっている。

第 1 章では、ゲイ雑誌『バディ』を取り上げ、編者による言説を読み解くことによって、いかなる生き方やアイデンティティが主張されてきたのかを分析する。1993 年に創刊されたゲイ雑誌『バディ』はゲイ男性によって、読者のゲイ男性に向けて作成されてきた雑誌である。このような編者と読者の関係性が想定される雑誌であるため、その内容が当事者に向けられているという性格が強い。また『バディ』は「ゲイライフ」という言葉のもとで積極的に「ゲイ」としての生き方やアイデンティティについての言説を形成しており、自己変革を行うという強い意志があった。これはこの当時、「ゲイ」としての生き方を形成しようという潮流があったことと密接に関わっている。「ゲイ」という言葉自体が 1990 年代からアクティヴィストらによって積極的に使用され始めた言葉で、この言葉によって「ゲイ」としての新しい生き方が模索されていった。『バディ』では特に 1997 年からキャッチフレーズに「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」を採用することによって、読者に「ゲイ」としての生き方を提示していった。ポルノ的な側面も強く持つ雑誌ではあるが、一方で情報誌

図0-1　各章で扱う事例の活動期間



として、「ゲイ」として生きるための具体的な情報を提供し、読者へのアドバイスも行っていた。また『バディ』では「ゲイリブ」（ゲイ・リベレーション）の一種として誌面作りが行われていたことも1990年代当時の編者によって語られており、その創刊から2019年の休刊まで、「ゲイ」であることにこだわりを見せてきた。編者の中には『バディ』誌内を超えた活動領域を持つ人物も多く存在し、その影響は広範に及ぶと言える。第1章ではこうした特徴を持つ『バディ』を取り上げ、それが読者のゲイ男性に提示してきた生き方を手掛かりに、アイデンティティを分析していく。

第2章では、ゲイ男性によってゲイ男性向けに作成されてきた「ゲイマンガ」を事例として取り上げ、その表象を分析する。ここで取り上げるゲイマンガとは主にゲイ雑誌に掲載されてきたものであるため、分析対象としては第1章と地続きになっており、活動の対象としてゲイ男性が想定されているものである。しかしゲイ男性によって作成されるマンガでも、一般雑誌に掲載されてきたものもある。本章ではこれら二つを、すなわち、ゲイ男性によって作成されるものでも、ゲイ男性向けのものと非当事者向けのものの双方を取り上げ、その表象の差異についても分析をしていく。1990年代は、ゲイ男性によって一般メディアにおけるゲイ表象が批判を浴びた時代でもあった。批判されたものの代表例として、主な書き手と読み手が女性であるBL／やおいがある。そこではステレオタイプ的表象やホモフォビックな表象があること、あるいはリアリティがないことが批判されていた。その一方で主な書き手と読み手がゲイ男性の「ゲイマンガ」は、BL／やおいほど大きなマーケットを持つに至っていないが、ひとつの表現活動として主にゲイ雑誌という場で継続的に発表されてきた。また数としては少ないが、ゲイ雑誌に投稿された作品が単行本化されたり、あるいは各ゲイ雑誌が別冊としてゲイマンガのアンソロジー本を出したりもした。BL／やおいが批評の対象になったのとは対照的に、ゲイマンガはそうした対象とはならなかったが、その理由は、ゲイマンガは当事者による表現として正当化されてきたからであると考えられる。以上をもとにして、第2章ではゲイマンガの表象を分析し、物語や欲望の形式を読み解くことによって、アイデンティティについて論じていく。第1章が基本的に現実的なアドバイスを読者へしていたことを前提とするのに対して、ゲイマンガは理想や〈フィクション〉であることに特徴がある。そこにはゲイ男性が「現実」を超えて求めるもの、「現実」では簡単には可能とならない「理想」の在り方を求める表現があると思われる。そしてそれが当事者向けか非当事者向けか、自己変革か社会変革かという差異にも注目することで、表象の戦略について論じる。

第3章では、北海道札幌市で1990年代から2000年代末ごろまで活動を行っていた「札幌ミーティング」を取り上げ、その活動を分析していく。1990年代には日本各地でゲイやレズビアンによる

さまざまな団体が結成されたが、札幌ミーティングはその中で当時もっとも活発であった団体のひとつである。それらの団体はそれぞれ異なる目的や活動内容を持っていたが、札幌ミーティングは「ゲイリブ」（ゲイリベレーション、同性愛解放運動）を行うことをその中心的目的としていた。この点において社会変革志向の強い団体であった。しかし、札幌においてゲイ男性のコミュニティを形成するための活動も活発に行っており、当事者を対象とする自己変革志向も持つ団体であった。また札幌ミーティングは 1990 年代当時、札幌におけるゲイ男性当事者による唯一の社会運動団体であったため、非常に幅の広い活動を行っていた。こうした点も、札幌ミーティングが自己変革と社会変革の双方を持ち合わせていた理由である。第 3 章ではこの札幌ミーティングという特定の団体の活動を事例に、強い社会変革志向を持つ中でどのような活動が行われ、「ゲイ」としてのどのような在り方が模索されていたのかについて論じる。

第 4 章ではセクシュアルマイノリティのパレードを取り上げ、そこで社会に対して主張されるものやパフォーマンスの様態を分析していく。具体的に取り上げるのは、北海道札幌市で 1996 年から開始されたパレードである。1994 年に東京で、1996 年に札幌で始まったパレードは今では日本各地で毎年開催されており、公的に行われる活動として代表的なものとなっている。パレードは一般の車道を行進することによって非当事者に対して自分たちの存在をアピールするという側面があり、社会変革志向がもっとも強い活動と言うことができる。無論、セクシュアルマイノリティの可視化は当事者へのエンパワーメントにもなるため、自己変革としての側面も持ち合わせている。パレードでは、大きなフロート（山車）によるパフォーマンス、実行委員によるメッセージの発信、個人がプラカードを掲げて行進することによるメッセージの発信など、さまざまな方法によって社会への呼びかけやセクシュアルマイノリティの可視化を行ってきた。またもっとも公的であるからこそ、パレードにおいてゲイ男性やセクシュアルマイノリティが一枚岩的に表象されることに、当事者から批判が寄せられることも多かった。以上をもとに第 4 章では、札幌で開催されてきたパレードを事例に、パレードがゲイ男性を広く社会に対していかに表象していたのかを分析する。パレードはもちろんゲイ男性のみによって担われているわけではないため、広くセクシュアルマイノリティを表象する活動である。現在の運動でゲイ男性のみによって行われるものはほとんど存在せず、「連帯」の志向があることも考慮し、ここではセクシュアルマイノリティ全体の表象を分析しつつ、そこでのゲイ男性の関わりについて論じていく。

第 5 章では、すべての分析を踏まえた上でのまとめの議論を行う。以上の 4 つの章は活動に中心的に携わるゲイ男性の分析という特徴があったが、この章では必ずしも活動の中心を担ってきたわけではない「一般のゲイ男性」も視野に入れる。そして活動の中での表象の使い分けが何をもたらしてきたのか、自己変革活動と社会変革活動の間にはどのような関係性があったのかをまとめ、2015 年以降の「LGBT ブーム」というより現在的な文脈にも触れつつ、ゲイ男性のアイデンティティの「今」、そして「未来」について論じる。

3−4　本研究の特徴と意義

本研究の第一の特徴・意義は、アイデンティティが形成される過程を重層的に見ることである。これまで行われてきたゲイ男性やセクシュアルマイノリティの活動の研究はそもそも限られているが、それらの研究が必ずしも自己変革活動と社会変革活動のように、活動を分類して分析をしてい

たわけではなかった。本研究ではゲイ男性による活動とアイデンティティの形成を戦略の使い分けという視点から捉えるが、社会運動や種々の活動が場によって戦略を使い分け、ゲイ男性のアイデンティティがその戦略の束によって形成されてきたのであれば、それは矛盾を内包することも必然であると思われる。アイデンティティが形成される複数の領域・戦略を分析することによって、さまざまな「アイデンティティーズ」が併存・拮抗する状況を捉えることができる。また自己変革活動と社会変革活動に注目することは、ゲイ男性・セクシュアルマイノリティの活動を、「新しい社会運動」の流れに位置付けることに貢献する。

二点目は、ゲイ男性内の抑圧について論じることである。ゲイ男性のアイデンティティが複数の領域や戦略によって形成されることは、さまざまな矛盾を生じさせる可能性がある。この矛盾は、ときに（特に活動に関わらない）ゲイ男性に疑問を抱かせたり、活動に対する忌避感を生じさせたり、ゲイであるというアイデンティティを肯定的に受け入れることのできない状況を生じさせる可能性があることを考えなければいけない。現代の社会でセクシュアルマイノリティは、異性愛規範における被差別者として認識されている。同性愛に関する多くの研究が主に差別という文脈の中で行われることによって、異性愛者による／異性愛的な文脈における同性愛についての認識が論じられることが多かった。その反面、ゲイ男性たちがどのような経験をしてきたのかという点については、それほど積極的に論じられてきておらず、ようやく昨今いくつかの研究が登場し始めたばかりである。しかしマイノリティ内でも差別や排除が生じ得ることは、さまざまな研究が指摘してきた。この点はゲイ男性に関しても同様であると思われる。よって本研究で論じるのは、ゲイ男性の活動が形成してきたアイデンティティだけではなく、そこから誰が排除されたり、周縁化されてきたのか、ということでもある。

三点目は、ゲイ男性の男性性を視野に含めることである。昨今は「セクシュアルマイノリティ」や「LGBT」という総称によってさまざまな議論がされてきているが、その社会的潮流の中で、あえてゲイ男性にのみ注目することも本研究の特徴・意義のひとつである。クィアの議論のところでも触れたように、セクシュアルマイノリティの中の差異を取り上げることは重要な視点である。その差異も、ジェンダー、人種、階級、経済的状況、障害の有無など多岐にわたる。しかしセクシュアルマイノリティの中の差異についての議論は、これまで日本で十分に行われてきたとは、いまだに言えない。本研究ではゲイ男性に注目することによって、セクシュアルマイノリティの運動の中でのゲイ男性の位置付け、そしてゲイ男性のジェンダー／男性性の問題に焦点を当てる。ゲイ男性は性的指向においてはマイノリティでありながら、「男」というジェンダーにおいてはマジョリティの位置にいる。「男」であるという事実が彼らの活動にどう影響しているのか、彼らが求めてきたアイデンティティが男性性とどう結びついているのか、という点を論じることで、セクシュアルマイノリティ内のジェンダーの差異を論じる。

四点目は、埋もれがちなセクシュアルマイノリティの歴史を掘り起こし、可視化することである。マイノリティの歴史はセクシュアルマイノリティに限らず、埋没することが多く、あるいは忘却されたりすることによって、当事者の中でも継承されることが困難な状態にある。またセクシュアルマイノリティは家族の中でも孤立を抱え、血縁的な関係によって知識が継承されないという事実もある。よって、歴史を参照できる形で残すこと自体、重要な意義となる。また、本章のはじめでも触れたように昨今の日本ではセクシュアルマイノリティをめぐってめまぐるしい社会的変化が生じ

ているが、これらの動きは昨今突如として始まったことではなく、過去の活動の延長線上にあることは、必ずしも知られているとは言えない。1990 年代から現在までの資料を丹念に読み解き、ゲイ男性の声を拾い上げ、彼らの経験を資料に基づいて記述し、短い期間ではあるが歴史をまとめることで、今の状況や言説がどのような歴史の中で形成されてきたのかを明らかにし、現在と過去を接続する。

第１章　ゲイ雑誌『バディ』と「ゲイライフ」

――「ゲイ」としての自己肯定と生き方の形成

１．日本のゲイ雑誌と『バディ』

１−１　本章の目的

本章ではゲイ雑誌『バディ』(1)を扱い、その編者が「ゲイ」についてどのような言説を形成してきたのか、そして「ゲイ」としての生き方である「ゲイライフ」をどのように形成してきたのかを分析する。『バディ』の編者たちは皆ゲイ男性であり、ゲイとしての立場から読者のゲイ男性に対して、積極的な働きかけを行っていた。よって『バディ』を、「自己変革を目的とし、主にゲイ男性当事者を対象とした活動」として捉えることができる。ゲイ雑誌という比較的閉じた領域における活動は、〈社会の視線〉からは距離のある、一種の安全圏と言える。この中では異性愛社会の規範を変えることよりは、〈ゲイの私たち〉の間で交流をすることで、自己を形成・変革することが目的となる。

1993 年に創刊された『バディ』はその当初から「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉を積極的に雑誌内で用いていた。現在では「ゲイ」は誰もが知る言葉であるが、この当時は必ずしも普及していた訳ではない。特に「ゲイライフ」という言葉は 1990 年代になって頻繁に使用され始めた。1980 年代までの男性同性愛者を形容する言葉に、「隠花植物」というものがあった。これは「暗く、薄気味悪く、人知れず増殖するイメージ」（石田 2014:177）を想起させる言葉であり、明らかにネガティヴな言葉であった。しかし『バディ』はこのイメージを、「ゲイ」や「ゲイライフ」という〈新語〉を積極的に用いたり、ゲイであることの肯定的な情報を提供することによって、ポジティヴなものへと転換させた。そして特に 1997 年からはキャッチフレーズを「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」へと変更することによって、新しい生き方とアイデンティティを形成しようと努めていた。では『バディ』は具体的にどのような言説を用い、どのような戦略によって「ゲイ」についての表象、そして「ゲイ」としての生き方を形成しようとしてきたのか。

１−２　日本のゲイ雑誌と先行研究

分析の前に日本のゲイ雑誌を概観し、その中での『バディ』の位置付けについて確認をしておきたい。本章では一貫して「ゲイ雑誌」という言葉を用いる。これは「ゲイ」という言葉が普及して

(1)　雑誌タイトルは表紙で『Bádi』と表記されている。『Badi』と表記されることもあるが、ここでは読みやすさを考え、『バディ』の表記で統一する。実際にこの表記が雑誌内でも多用されている。

表 1-1　戦後日本のゲイ雑誌（2019 年 10 月現在）

雑誌名	刊行年	通巻	出版社／団体	責任編集者
『アドニス／ADONIS』	1952-1962	63	アドニス会	-
『メモワール』	1953-1951	8	アドニス会	-
『羅信』	1950s?	?	花卉研究会	扇屋亜夫
『MAN』	1954-1957	13?	龍陽クラブ	鹿火屋一彦
『同性』→『同好』→『清心』	1960-1973?	99?	同好趣味の会	毛利晴一
『薔薇』	1964-1967	43	薔薇の会	高倉一
『薔薇族』（伊藤文学版）	1971-2011	399	第二書房	伊藤文学
『アドニスボーイ／The AdonisBoy』	1972-1974	14	アドニス通信社	南定四郎
『恋男』［こいびと］	1973-????	?	?	?
『アドン／ADON』	1974-1996?	270?	砦出版	南定四郎
『さぶ』	1974-2002	232	サン出版	?
『BON／梵』	1975-????	?	?	?
『MLMW／ムルム』	1977-1982	35	砦出版	南定四郎
『スーパーモンキー／Super Monkey』	1978-1980?	10?	アダムス出版	白坂ビン
『ザ・ケン／The Ken』	1978-????	約 20?	雑民の会	東郷健
『ザ・ゲイ／The Gay』	1980-2004	263?	噂の真相	東郷健
『サムソン／SAMSON』	1982-現在	447	海鳴館	-
『豊漫』［ほうまん］	1986-2010	84	海鳴館	今井英夫
『バディ／Bádi』	1993-2019	302	テラ出版	-
『ジーメン／G-men』	1995-2016	241	黒川出版興文社	-
『ファビュラス／fabulous』	1999-2000	4	テラ出版	小倉東
『クィア・ジャパン／Queer Japan』	1999-2001	5	勁草書房	伏見憲明
『クィア・ジャパン・リターンズ／Queer Japan Returns』	2005-2006	3	ポット出版	伏見憲明
『薔薇族』（竜超版）	2011-現在	32	野ばら浪漫舎	竜超
『ISmagazine』［アイエスマガジン］	2015-2016	4	-	-

※1　表を作るにあたって、筆者個人所有の資料や国立国会図書館のデータベースを利用しつつ、三橋（2016）、石田（2012;2018）、伏見（2004）、Mackintosh(2010)、性風俗関連の雑誌・書籍を販売するインターネット書店「太陽野郎」（http://blog.livedoor.jp/taiyoyaro/）の販売書籍情報を参考にした。誌名がカタカナ、アルファベット、漢字による複数の表記がある場合は、「／」を用いて併記する。［］内は読み方、矢印は名称の変更を示す。『MLMW』は「My Life My Way」の接頭辞である。『薔薇族』は休刊と復刊を繰り返した 2004 年から 2006 年までは、一度版元をメディアソフトとナビゲイターに変更している（石田 2018:197）。また編集者が 2011 年に伊藤文学（創刊者）から竜超に変更された。誌名は変わらないが、内容が大幅に変更されたこと、販売がネット販売とごくわずかな書店でのみ行われるようになったことから、伊藤文学版と竜超版の『薔薇族』を別の雑誌として表記している。実際に竜超も『薔薇族』の公式ウェブサイトで「竜超版『薔薇族』」と呼んでいた（竜超 n.d.）

※2　表内の雑誌は基本的に月刊紙である。不定期、あるいは季刊誌として発行されていたものは、『メモワール』、『クィア・ジャパン／Queer Japan』、『クィア・ジャパン・リターンズ／Queer Japan Returns』、『ファビュラス』、『薔薇族』（竜超版）、『ISmagazine』である。

いる現代に特有の言葉であるが、ここでは〈男性同性愛を中心的に扱い、男性同性愛者向けに作成される雑誌〉の総称として用いる。表 1-1 には戦後の日本で発行・出版されたゲイ雑誌をリスト化している。これらの「雑誌」は、会員の間でのみ配布されていた頒布誌・同人誌・会員誌・タブロイド紙から、一般の流通ルートに乗って販売される商業誌までを含んでいる。それらの種別を問わず、「雑誌」という名称をここでは用いている。

表を見ると、日本ではこれまでに少なくとも 25 のゲイ雑誌が発行されてきたことがわかる。しかしこれらのほとんどはいまだに研究されておらず、ここでゲイ雑誌の詳細な歴史や各雑誌の紹介をすることは困難である。また国立国会図書館に所蔵されているゲイ雑誌も少なく（石田 2018）、研究自体が困難であるというのが現状である。ここではわずかながら行われてきた研究などを参考にゲイ雑誌の歴史を概観し、『バディ』の位置付けを捉える。

石田（2018）はゲイ雑誌の特色について論じるにあたり、戦後から現在までを 4 つの期間に区切って考察している。まず第 1 期は 1952 年から 1970 年までの期間であり、会員誌としてのゲイ雑誌のみが存在する期間である。日本で初めての男性同性愛専門の会員誌は 1952 年に配布され始めた『アドニス』であると言われており、その他の会員誌も限られた人々の間でのみ流通していた(2)。表の中にあるものでは、『アドニス』から『薔薇』までがこれにあたり、雑誌によってはシリアル番号・会員番号も振られていた。第 2 期は 1971 年から 1985 年の期間であり、専門のゲイ雑誌（商業誌）が一般の雑誌と同様の取次ルートによって全国へと販売され始めた時期である。その先鞭は 1971 年に伊藤文学によって創刊された『薔薇族』である(3)。その成功によってその後いくつもの競合誌が誕生し、その中でも『薔薇族』と『アドン』、『さぶ』、『サムソン』の 4 誌はそれぞれ 200〜300 号以上を発行してきた。そして第 3 期は 1986 年から 2000 年にかけての期間であり、1985 年のエイズパニックによって生じた同性愛嫌悪・差別に対する社会運動が始まった時期でもある。ゲイ雑誌もこの出来事に影響を受けて変化を見せ、『アドン』が電話相談のホットラインを開設したり、ゲイとしての生き方を肯定的に発信する『バディ』や『ジーメン』が創刊された。そして第 4 期は 2000 年以降の時期であり、情報収集や出会いのメディアがインターネットへと移行していったことによって、ゲイ雑誌が少しずつ衰退していく時期である。ゲイ雑誌の発展には文通欄による出会いのシステムが重要であり、それのみを目的にゲイ雑誌を購入している人も多くいたと思われるが、ゲイ雑誌はその機能をインターネットによって奪われていった。

こうしたゲイ雑誌の歴史の中で『バディ』は、第 3 期の社会運動が盛り上がり始めた時に創刊されたゲイ雑誌であり、この当時の社会状況や言説に影響を受けていた。事実、『バディ』で「ゲイ・リブ」（ゲイ・リベレーション）を試みたことが、当時の編者によっても告白されており（小倉ほか 1999:79）、これまでのゲイ雑誌とは大きく異なる志向性を持っていた。具体的な『バディ』の特徴として、「ライフスタイルとしてのゲイ」を主張し始めたこと（伏見 2004:379）、「ゲイ・マーケット、ゲイ・コミュニティ、ゲイのライフスタイルなど『ゲイを取り巻く状況全体』を視野に入れは

(2) 『アドニス』に関してはいくつかの研究や論考が存在している。もっとも詳細なものに山中剛史（2005, 2006, 2007a, 2007b）、前川直哉（2018）、伏見憲明（2004）がある。また雑誌『彷書月刊』の 2006 年 3 月号では「アドニスの杯」という特集が組まれ、『アドニス』に関連する論考やエッセイが掲載されている（堂本・本田 2006、伏見 2006、安藤 2006、伊藤 2006、高原 2006、七面堂 2006、村上 2006）。

(3) 『薔薇族』については石田（2006）、前川（2017）、Mackintosh(2011)が詳しい。また伊藤文学（2001）による回顧録もある。

じめた」こと（田亀 2003:20）、「フツー」の、そして「一般」のゲイ男性を誌面に登場させることで「ゲイ」についての肯定的なイメージを広めたこと（砂川 2000, 2003b）が指摘されている。伏見憲明は 1998 年に、「『バディ』はいままさに、『ゲイの歴史』を転換させるイニシアティブを握っている」（BADI1998/10:65）とまで評価している。

同時代の雑誌としては南定四郎による『アドン』もリブ的な内容を含んでおり、読者に積極的な働きかけを試みていた。1984 年には国際ゲイ協会（IGA）のビル・シュアーの来日と南への訪問によってコンテンツの国際化と解放運動化が進み（石田 2018:198）、またこの時期には南によって運動についての「学習会」も定期的に開催され、『アドン』誌上でも告知がされていた（堀川 2016）。しかし、1995 年には他のほぼすべてのゲイ雑誌に含まれていたポルノを完全に排した誌面になり、その結果読者数が減り、1996 年には廃刊してしまった（伏見編 1999:99）。1995 年頃の『アドン』は表紙に比較的大きな文字で「Magazine for Gay Liberation」とのキャッチコピーも登場するようになり、リブ色の強まりが窺える。『アドン』はリブ要素をあからさまに強調してしまったため廃刊に至ったが、『バディ』はそれとは別のやり方でリブを行ったことにより、その後も長らく発行され続けたと言うことができる。そこにはいわゆる「運動」とはまた異なる志向性があったと想定できるが、それはいったいどのようなものであったのだろうか。

もう二つ触れておかなければいけない同時代のゲイ雑誌に『サムソン』と『ジーメン』がある。『サムソン』は 1982 年に創刊された雑誌であり、現在（2019 年 11 月）でも発行されている唯一のゲイ雑誌である。石田が言うところの第 3 期を経た雑誌であるために、その内容も当時の運動に影響を受けている可能性があり、分析すべき対象となる。しかし『サムソン』は 1980 年代後半から「フケ専」（年配の男性を好むこと）・「デブ専」寄りの誌面構成へと移行していき（石田 2018:200）、「デブ専雑誌の草分け」（伏見 2004:370）とも紹介されるように、特定のフェティシズムへの偏向がある。つまり、『サムソン』で重視されるのはゲイとしてのアイデンティティや生き方よりも、フェティシズムであると言える。加えて、雑誌の読者の年齢層も高い(4)。一方『ジーメン』は 1995 年に創刊された雑誌であり、『バディ』とほぼ同時期に創刊されている。『ジーメン』は『バディ』と同様に、「普通」のゲイを登場させ、ゲイマーケットやコミュニティ全体を取り込むことが目指された雑誌と評価され（砂川 2000;2003b, 田亀 2003:20）、その内容もゲイの歴史を知るにあたって検討の対象となり得る。しかし『ジーメン』は、「大人のゲイ雑誌」(5)であり、「エロティシズムの中から自己肯定感をつかみとっていこうとするメディア戦略」を採用し、「リブ派とはまた違ったかたちで『ゲイ』の主体化を促していった」（伏見編 1999:99）とも言われるように、主眼は「ゲイライフ」のような生き方とは異なると言える。

上記 2 誌と比べて『バディ』は、「ゲイ」というアイデンティティや「ゲイライフ」という生き方を明確に雑誌の主題としていた。それに加え、上記 2 誌よりも幅広い読者に向けて作成されている。『バディ』の中に中高生向けの読者投稿欄が設けられていたことからもわかるように、ターゲットは成人のゲイ男性に限られなかった。「フケ専」の『サムソン』と「大人のゲイ雑誌」である『ジーメン』とは対照的なターゲットが想定されていた。また編者が自身の顔写真を積極的に雑誌内に登

(4)　対象となる具体的な年齢層は明記されていないが、主に 50-60 代以降であると言える。

(5)　こちらも対象となる具体的な年齢層は明記されていないが、主に 30 代以降であると言える。

場させ（小倉ほか1999:80）、顔が見えない誰かが作成しているのではなく、顔の見える身近なゲイ男性が作成していることを示すことで、読者との距離を縮め、彼らに積極的な働きかけを行おうとしていた。

「ゲイライフ」に注目する本章と類似する視点から『バディ』を取り上げたものに森山（2012）があるが、一部の号しか参照しておらず、特に重要な1990年代の『バディ』への言及は一切ない。ゲイ雑誌を扱うその他の研究には、雑誌内における読者の語りを中心的に分析し、その時代の同性愛者の生活やセクシュアリティの認識を探る研究や（石田2006，小宮2000，前川2017）、編者側の語りにも注目して、現在のゲイコミュニティの諸相について明らかにしようと試みるものがある（Abe 2010，森山2012）。これらの研究は、ゲイ雑誌内の言説を分析することを通して、ゲイ男性の生き方などについての全体的な傾向を論じた研究としてまとめることができる。対してマッキントッシュ（Mackintosh 2010）は戦後のゲイ雑誌について編者と読者を明確に分け、編者がゲイ雑誌を用いることで何を行ってきたのかに焦点を当て分析している。そこから、『薔薇族』の編集長であった伊藤文学が男性同性愛者の間に「連体感」を形成しようと試みていたこと、また、『アドニスボーイ』や『アドン』の編集長であった南定四郎が、彼らの「市民権」の形成を目指していたことを明らかにした。しかしマッキントッシュの分析は1970年代を中心に扱っているため、それ以降のゲイ雑誌の編者がどのような主張を展開してきたのかは把握できていない。

以上を踏まえ、本章では『バディ』を取り上げ、編者の言説を中心的に分析することによって、彼らが形成しようとしてきた「ゲイ」というアイデンティティと生き方について論じていく。分析対象として、1993年から2019年までの『バディ』を扱う。通巻で302号が発行されているが、中心的に分析をしたのは筆者が個人的に入手した228号分である。すべての号が国立国会図書館に所蔵されてはいないため、個人的に入手したものを中心的に扱い、入手できていない号でも国立国会図書館に所蔵されている場合は、できる限りそれらも参照した。具体的に分析するのは『バディ』に見られる編者による語りや全体的な誌面作りであるが、読者による投稿や言説などにも適宜触れていく。

『バディ』は創刊から休刊に至るまでに雑誌コンセプトの変更を三度行ってきた。創刊時には「強い男のハイパーマガジン」というキャッチフレーズであったのが、1997年6月号から「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」となり、2001年には「GAY LIFE MAGAZINE」へと変わった。そして2009年からはキャッチフレーズに変化はないものの、誌名に「UP」という語が加えられた。このキャッチフレーズと雑誌名の変更に注目し、時期を第1期（1993-1997）、第2期（1997-2000）、第3期（2001-2008）、第4期（2009-2019）の4つに分けて分析を進める。しかしここで留意しておきたい点は、『バディ』の言説がこの短い期間の中で明確な段階を踏んで変化してきたわけではないことである。そのため、各期の分析の中では前後する期間の言説を引用することもある。

2．「ゲイライフ」の紹介 —— 強い男のハイパーマガジン（1993-1997）

2-1 『バディ』の創刊

『バディ』は、1990年代当時、ゲイ雑誌に広告を出す側であったビデオメーカーやゲイショップ

13 社が共同出資し、「自分たちの雑誌を作ろう」、「自分たちで売ろう」という発想で創刊された雑誌である（BADI2019/1:74, 78）。『バディ』以前の雑誌はゲイコミュニティとの関係を築いてこなかったため、「『Badi』を立ち上げる際に、全ゲイ産業（当時）を結束させた」（BADI2008/1:46）と言われている。創刊に携わった長谷川博史は次のように語る。

> ゲイであることを前向きに捉えていく雑誌にしたかった。そして、デブ専からいわゆるジャニ専(6)、少年愛も含めて幅広く同性愛をカバーしていこうというコンセプトがあった。その時に情報とかカルチャーってものを共通項としてパッケージできればというふうに考えていたわけ。（BADI2008/1:46）

『バディ』は参集したそれぞれのメーカーの特徴を活かせるように、さまざまな要素が詰まった雑誌を目指した（BADI2019/1:74）。それまではゲイ雑誌にマンガや小説を描く人に適切な掲載料が支払われることがなかったが、そうした作家をプロフェッショナルな作家として扱い、適正な掲載料を支払うようになった（BADI2008/1:46）のも『バディ』の新しい試みである。

こうして企画された『バディ』は1993年9月23日、第0号（フリーペーパー、創刊予告号）としてまず発行された。フリーペーパーでありながら全186ページというボリュームであった。スタッフ募集の短い記事で、「“バディ”という名前は、BUDDY（＝気の置けない仲間）という言葉からきてるんだ。だから、この本は気の置けない仲間達みんなで、ワイワイやりながら作っていきたいって思ってる」（BADI1993/9:100）と、誌名の由来と雑誌作りのビジョンについて触れられている。表紙では誌名が「Bάdi」と表記されているが、その理由としては、「英語の『body』（肉体）と『buddy』（仲間）、両方ともたまたま同じ発音だったので、両方の意味を持たせるために、発音記号を雑誌名にしたんだ」（BADI1999/1:67）と語られている。その後、1993年11月22日に創刊号（第1号）が刊行された(7)。刊行当初のキャッチフレーズは「強い男のハイパーマガジン」であり、そのキャッチフレーズ通り、第1号の特集は「筋肉大好き／そ・そ・る・毛」であった。内容としては、「愛する彼とヤル　ちょっとHなトレーニング」というタイトルの筋力トレーニングを模したポルノ的記事、「ボディビルダーの私生活」というタイトルの体験談／コラム、体毛・髭・頭髪についてのコラムが掲載されている。その後のグラビア記事でも「男の肖像」（1996年1月号）、「男の夏祭り」（1996年8月号）と、主に性的・肉体的な面において「男」であることが強調されている。『バディ』を肉体派を売りにしている雑誌と捉え、雑面作りについてアドバイスをする読者からの投稿も寄せられていた（BADI1994/6:245）。またSM好きのためのコーナーである「奴隷市場」という連載も創刊号から見られ、1994年7月号ではSM特集が組まれている。この時期の『バディ』は「男」であることを強調していたのみならず、SMなどのフェティシズムにも少なからず焦点を当てていた傾向がある。しかし、こうした記事だけではなく、同性愛関連の書籍のレビューなどの文化的・学術的記事や、「POST BOX」という名の文通欄（創刊号は252件の投稿が掲載）もあった。

伏見憲明は創刊された『バディ』に対して、「ポルノグラフィーとしてのクオリティは上がってい

(6)　「ジャニ専」とは、日本の芸能プロダクション「ジャニーズ事務所」が売り出すアイドルのような風貌（比較的長髪・中性的な顔立ちで、フェミニンな要素を持つ）の男性を好むゲイ男性を指す言葉である。
(7)　創刊号の刊記は1993年12月15日。

たかもしれないけど、メッセージしていることは『薔薇族』(…) とあまり変わらなかった」(小倉ほか 1999:79) という感想を持っていたという[8]。創刊時の編者の意図をひとまず脇に置くのであれば、少なくともこれまでゲイ雑誌に触れてきた人には、従来のゲイ雑誌との大きな差は感じられなかった可能性がある。

しかし、この過度な「男」、「肉体」、フェティシズムの強調は創刊 1 年後から徐々に弱まっていく。その大きな理由は、1995 年 4 月 21 日に『ジーメン』が創刊 (1995 年 5 月号) されたことにある。『ジーメン』は『バディ』の創刊に携わっていた長谷川博史によって創刊されたゲイ雑誌である。創刊初期は『バディ』の新人編集者の研修を『ジーメン』が引き受けたり、作家を共有したりしていた (石田 2018:201)。こうした中、『バディ』の「男」としての側面は『ジーメン』へと吸収されていった。『バディ』は出資に集まったメーカーの特徴を活かせるように、さまざまな要素が詰まった雑誌を目指していたが、それだとひとつのジャンルを掘り下げられないため、『ジーメン』が創刊されたと長谷川は語る (BADI2019/1:74)。

> 〔『ジーメン』を創刊したのは、〕もっと自分の性的な嗜好に合った本を作りたいっていう気持ちがあったからなの。比較的若い世代を意識して、なおかつゲイ全体を横に切って作ろうとしたのが『Badi』で、自分の好きな野郎系とか熊系とかガテン系とかね、その当時は言葉は無かったけどね、そうしたものに絞り込んだものが『G-men』だったわけ。
>
> (BADI2008/1:47)

こうして、「男らしさ」を押し出す『ジーメン』の創刊によって、ジャンル・嗜好の棲み分けがされるようになった。この点に加え、『バディ』が創刊時に「男」を強調しながらもそれを徐々に弱めていった理由がもう一点考えられる。それは、初期の『バディ』は既存のゲイ雑誌の型に便乗し、まず売り上げを確保しゲイ雑誌として定着させるという戦略を採用していた可能性である。「男を愛する男たちにどんな未来が待っているのか。バディが新しいビジョンを提示できればいいな、と思っています」(BADI1993/9:102) という編者の語りにあるように、ゲイとしての新しい将来像を提示するという目標が『バディ』にはあったが、そのためにはまず売り上げを確保し、ゲイ雑誌として定着させる必要があったと思われる。例えば、その当時既存のゲイ雑誌『さぶ』は、『バディ』に類似するキャッチフレーズとして「男と男の抒情誌」を掲げており、『バディ』もその流れに便乗した可能性がある。男性同性愛者向けの雑誌の読者として想定されるのは、男として男に欲望を抱く人物であり、そうした欲望を共通項に読者集団が形成される。伏見憲明が言うように、そのような欲望を共通項に「男」としての集団を形成する彼らは、その関係性の中では性やエロスにむき出しにならざるを得ない (伏見 1991:163-164)。ゲイ雑誌として商業的に継続させるためには、その欲望を充足させることのできる雑誌作りがもっとも手っ取り早かったことが想像される。つまり『バディ』編者は性的・肉体的な男性性を強調し、これまでのゲイ雑誌の定型に乗ることでまず雑誌としての売り上げを確保しながらも、ポルノ的な記事以外の内容では新しさを少しずつ創り出すことによって、読者に「ゲイ」としての新しいアイデンティティや生き方を提示する道筋を確保しよう

(8)　ここで言われている「メッセージしていること」が具体的に何を指しているのかは明言されていない。

としていたと考えられる。そして徐々に「男」の要素を削ぎ落としていくことによって、新しいゲイ雑誌を作り上げていこうとしていたと考えることができるだろう。この変化は読者投稿からも読み取ることができる。ある読者は次のような感想を寄せている。

> なんかどの雑誌も一年間読んじゃえば同じような内容の繰り返し。マンネリ化しちゃうんだもん。『バディ』も創刊当時は『薔薇族』や『さぶ』などの寄せ集め。おまけに寄せ集めすぎて、ピントの合わない印象で、とても期待はずれでした。／けど、ここ半年ぐらい、すごく面白い。 (BADI1995/3:293)

初期の『バディ』は既存のゲイ雑誌とそれほど変わらないものであったにも関わらず、徐々に『バディ』の独自性があらわれるようになっていったということである。

『バディ』の印象について語る読者投稿を見てみると、「明るいイメージでよかったです（他のと比べて）」(BADI1994/9:263)、「『さっぱりしているな』と思いました」(BADI1994/9:264)、「貴誌の他誌に見られない明るい雰囲気にすっかり魅了されてしまいました」(BADI1995/1:285)、「若々しい『バディ』」(BADI1996/2:183)、「これからも『バディ』を応援します。『薔薇族』や『さぶ』も購読していますが、若々しい感性と内容はどれにも負けません」(BADI1995/3:297) といった感想が寄せられている。さっぱり感、明るさ、若々しさ、楽しさ、といった言葉によって形容され、それらが『バディ』の新しさとして受容されていることがわかる。既存のゲイ雑誌と比較するような語りでも、「以前は他の雑誌を立ち読み程度しかしなかったけど、バディは他の雑誌の持つ暗さ、いやらしさがなくサッパリとしているところに好感が持てたので、定期購読することにしました」(BADI1994/7:262) と、他のゲイ雑誌にはない好感が持てると語られる。また『バディ』の内容のバランスについて語るものもあり、「今までのゲイ・マガジンの流れからいくと新しい感覚の『楽しさ』とか『快楽』とかを追求できないんですよね。隠れるか突き進むって感じで生活感が全くない。／でも今は『バディ』があるから変わってきましたよね」(BADI1995/6:348) と語られる。つまり、これまではリブ志向（『アドン』）かクローゼット志向（『薔薇族』）[9]の両極端であることが結果として「生活感」を欠くことになっていたが、『バディ』は良いバランスが取れていると評価されている。こういった新しい印象も一因となり、1995 年には、『バディ』がゲイ雑誌の中で売り上げ一位となった（具体的な部数や利益は不明）(BADI1995/12:33)。

こうした受容で重要なのは、読者の感想にあったように、「生活感」といった要素と共に『バディ』が語られ始めたことである。第 3 章で取り上げる札幌ミーティングが発行していたニュースレターでも、『バディ』には「『抜くためのポルノ』というゲイマガジンの王道を押さえつつ、(…) いじわるオネエさんでもなくやたら卑下したがるクローゼットゲイでもなく、ありのままにセクシャリティを受け入れてゲイライフをエンジョイしている最近のゲイの子たちの『視線』と同等のモノが感じられて好感が持てます」(NL1995/7:8) と、「ライフ」と『バディ』の結びつきが語られる。

---

(9) 『薔薇族』はゲイ男性同士の交流を促進させ、彼らに「連帯感」を与えたものの、社会変革などは目指さないクローゼット志向の雑誌であったとの共通認識がゲイ男性間（特に 1990 年代以降の活動を担ってきた人々）にある。伊藤文学は特に 1990 年代にはセクシュアルマイノリティのパレードや同性婚に対する否定的な発言や偽装結婚を推奨する発言をするようになり、活動家に批判された。

第1期の中でもその初期の『バディ』は、「男」であることや「肉体」を強調していたが、しかしその中でも「ゲイ」や「ゲイライフ」という新しい言葉を積極的に使用していた。その理由はすでに触れたように、「男を愛する男たちにどんな未来が待っているのか。バディが新しいビジョンを提示できればいいな、と思っています」(BADI1993/9:102) というような意志があったためである。その姿勢から行われていたのは、「ゲイライフ」についての情報を提供することであった。まだこの時期にはキャッチフレーズに「ゲイライフ」という言葉は使用されていないものの、『バディ』創刊号の記事内にすでに登場している。「ジャンピング・ジャーナル」という、ゲイに関連するニュースやゴシップが掲載されているコーナーは、「ジャンピング・ジャーナルはゲイ・ライフを楽しく豊かにしてくれるとっておきのコラム集です」(BADI1993/12:20) と紹介されている。他にも1994年6月には「ゲイ・ライフはじめて読本」(BADI1994/6:84-98) という記事、1995年12月号には「素敵なゲイライフを送る先輩からのアドバイス3」、「ゲイライフを思いっきりエンジョイするためのチェック・ポイント3」(BADI1995/12:56-57) という指南が提示されている。このことからも、『バディ』では創刊時から「ゲイライフ」というものに意識的に取り組むことが中心的目的とされていたことが窺われる。しかし、そもそも「ゲイライフ」とは具体的に何を意味しているのであろうか。

2-2 「ゲイライフ」とは —— 自己肯定と生き方の二面性

「ゲイライフ」という言葉がゲイ男性の間でいつ登場したのかは不明だが、1990 年代以前からその言葉自体は存在していた。『薔薇族』1978 年 9 月号には「紳士の国イギリスのゲイ・ライフ」(BARA1978/9:20) という記事が見られる (本文中には「ゲイライフ」の言葉は使用されていない)。『スーパーモンキー』1980年4月号には、「80年代のゲイライフをリードする月刊スーパーモンキー」(68頁) という小さな宣伝がひとつだけ掲載されている。また『薔薇族』1986年2月号の読者投稿欄には「楽しいゲイライフ」というタイトルの読者投稿があり、「現在僕が送っているゲイライフはなかなか楽しいものです」(BARA1986/2:113) との記述が見られる。筆者が参照することのできた資料は限られているため必ずしも明確なことは言えないが、少なくとも1970年代から「ゲイライフ」という言葉自体は存在していた。しかし、必ずしも普及していたわけではなく、その使用は散発的であった。1990年代に入ってから「ゲイライフ」という言葉は書籍でも使用されるようになる。伏見憲明の『プライベート・ゲイ・ライフ』(1991) は、書籍で初めて「ゲイライフ」という語を使用したものと考えられる。その3年後の1994年には宝島社から『よくわかるゲイ・ライフハンドブック』も出版されている。このように、「ゲイライフ」という言葉が本格的に普及し出したのは、1990年代に入ってからと言えるだろう。

ではそもそも、「ゲイライフ」とは一体なんなのか。ある対談における伏見憲明のひとつの発言に注目したい。伏見は、「ゲイライフを選択して生きていくという世代は、今の40代、30代以降なんですね。そうすると僕らには先行世代がいないわけですよ。モデルがない」(小沢ほか2001:33) と、ゲイ男性と「ゲイライフ」の関係性について語る。この伏見の発言は非常に興味深い。なぜなら、ここにひとつの矛盾が生じていると思われるからである。伏見が属する30-40代がゲイライフを選択するようになったと言うが、しかし具体的なモデルがないのにそれを選択していると言うことは矛盾ではないだろうか。すでにモデルが具体的な形としてあって初めて、それを選択することができるようになるのではないだろうか。では、伏見の矛盾する発言をどう捉えるべきなのか。これは

単なる矛盾ではなく、「ゲイライフ」に含まれる二つの側面について述べていると捉えることができるのではないだろうか。伏見の意図を汲み取りつつ彼の発言を言い換えるのであれば、次のように言えるだろう。

> ゲイであることを肯定的に捉えることができるようになったのは今の 40 代、30 代以降なんですね。そうすると僕らには、自己に肯定的な立場から生き方を紡ぎ出してきた先行世代がいないので、ゲイとして生きるための具体的なライフスタイルやライフコースといったモデルが存在していない。

つまり、「ゲイライフ」には二つの側面があるのである。ひとつは、同性愛者であることを否定せず、肯定的に捉えてゲイとして生きるという、自己肯定と個人の生を結びつける側面である。もうひとつは、具体的にどう生きるかを示すライフスタイルやライフコースであり、ゲイとしてどう生き、どういう人生を歩むかを示す側面である。この二つを「自己肯定のゲイライフ」と「生き方のゲイライフ」という二つの概念として抽出しておこう。そしてこの二つの側面を目印にしながら、『バディ』の実践を見てみよう。

少し先取りをするのであれば、第 1 期は「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉を読者へ紹介する時期であり、自己肯定感を形成する（＝「自己肯定のゲイライフ」）ために、まず「ゲイ」として物事を見る視点などが語られる。そして第 2 期から第 3 期にかけては、「生き方のゲイライフ」のモデルを具体化しようとする試みが見られ始める。

2-3　多様性による調和

『バディ』はゲイ雑誌の定型に身を委ねながら、「ゲイ」という新しいアイデンティティや「ゲイ」としての生き方を紹介しようとしていたが、第 1 期では必ずしも具体的な生き方のモデルを提示していたわけではない。例えば、創刊 3 周年での編者によるコメントでは、次のように「多様性」をキーワードに『バディ』の方向性について語られている。

> ゲイであることは私たちの永遠のテーマです。そのテーマを追求するにあたって、私たちはやはり調和を尊重します。確かにゲイとして生きる私たちの前には、カミングアウト、エイズ問題、ゲイの人権問題、さらにはドメスティックパートナーシップをはじめとする社会的権利の拡充といったさまざまな課題が山積しています。そうした問題を避けて通ることはできないでしょう。しかし、私たちは声高に政治的正義を叫ぶだけではなく、ゲイの感性を十二分に発揮したエンターテインメント性も追求してゆきたいと思っています。「ゲイ」とは存在の多様性を認める生き方のことです。そして、これからは存在の多様性を認めることが必要な時代なのです。存在の多様性を認め合うには調和が不可欠です。だからこそ私たちは、この雑誌の志向性をさまざまなテーマを盛り込んだ調和のとれたものにしたいと願っています。少しでも沢山の情報を盛り込みたいというそんな願いが、こんなに厚い雑誌となって結実し、皆様に愛される『バディ』に成長したのです。　(BADI1997/1:138)

この語りの要点をまとめるのであれば、「ゲイであること」を常に意識しながらも、特定の主張や内容に偏りを見せるのではなく、さまざまな情報を発信することによって、ゲイ男性を分断させずにまとめ上げることを『バディ』は意図していたのである。言い換えると、ゲイ男性の中にある多様性にできる限り応えることのできる雑誌を作りつつ、読者に「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉を紹介しようとしていたのである。ゲイ雑誌の特徴についてある編者は、「ある人がゲイ雑誌はデパートだ、と言っていました。上半身から下半身まで、ズリネタからカルチャーまで、『知りたい』というゲイのあらゆる欲求に応えなくてはならない」(BADI1996/5:299) と言うが、『バディ』もこのような「デパート」を目指すという志向性を持っていた。この志向は本節のはじめでも触れたように、『バディ』がゲイ関連産業による共同出資によって創刊され、それぞれの特徴を雑誌内に盛り込もうとしていた姿勢によるものであろう。

具体的な内容を見てみても、『バディ』は毎号幅広いテーマで特集を組んでいた。例えば、1994 年 9 月号では「僕たちの夏休み：ゲイライフ夏の愉しみ」という特集が組まれており、「ファッション・チェック」、「灼く、鍛える」、「部屋をゲイテイストに模様がえする」、「夏の新宿 2 丁目・男たちの行動パターン」、「ふたりで愉しむ東京デートコース」といった記事が執筆されている。そうした「ライフ」に着目をする特集と並んで「ハッテン場」(1994 年 8 月号)、「SEX と男とビデオテープ」(1995 年 5 月号)、「ちんちん」(1996 年 1 月号) などの特集も存在しており、情報記事とポルノ記事が織り交ぜられていた。

具体的な生き方のモデルはあまり語られない一方で、「ゲイライフ」という言葉がゲイバーやハッテン場といった既存の交流形式と共に語られたり、セックスと結びつけられるという傾向は見られる。例えば、1994 年 6 月号の「ゲイ・ライフはじめて読本」という記事は、『バディ』で初めて特集タイトルに「ゲイライフ」という言葉が使用されているものであると思われるが、そこに掲載されている内容は、ゲイバー（ゲイバーでの遊び方・選び方などの心得）とハッテン場についてがメインとなっている（男同士で暮らすことについての記事もある)。しかし、「新しいビジョン」としての『バディ』を考えるのであれば、ゲイバーやハッテン場について語ることは必ずしも新しさと捉えることはできない。「ゲイライフ」という新しい言葉を使用しながらも、ここで語られるその内容は、ゲイバーやハッテン場でどう遊ぶかといった既存の関心と大きく変わらなかった。このように、初期の『バディ』では「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉が紹介される反面、それをひとつのモデルとなる新しい生き方と積極的に結びつける傾向は弱かった。

2-4　思考法としての「ゲイ」――「普通」の否定

しかし、「ゲイ」と「ゲイライフ」に関して一点繰り返される言説がある。それは、「ゲイ」であるということを、規範への抵抗として捉えたり、一般的な視点とは異なる視点から思考する姿勢として捉える言説である。例えば、1995 年 2 月号の「アブノスゝメ」という特集が、「普通」を否定するという姿勢を明確に表している。特集名の通り、「アブノーマル」であることを取り上げ、そうあることを肯定する内容の特集である。編者はこの特集を、「『ホモはしょせん変態だから』なんて旧来の自己否定から出てきた日陰者の発想ではなく、男にひかれることを明るく肯定した上での、『君ももっと欲ばりに楽しもうよ』という提案」(BADI1995/2:55) と語るように、「変態」であることを開き直るかのように肯定的に捉え、自己のアイデンティティとしていくことを勧める特集であ

った。重要なのは、〈私たちは普通の人である〉というように、「普通」への希求をしていくのではなく、「普通」であることを否定する姿勢である。この特集について編者は続けて、「自分にできないことを実践してる(ママ)少数派を色眼鏡で見たり、モテたいだけで『普通』にしがみついたり、そんな、臆病なノンケ同然のケツの穴は拡張し、自分のゲイライフにスパイスを効かせてみよう」(BADI1995/2:55)と語るように、「普通」になろうとすることを否定している。またそうした姿勢が視野を広げ、ゲイライフの幅を広げることにもなるというのが、この語りの要点である。同じ号の中では「普通人(バンビー)たちへの反抗旗(プラカード)」というグラビアも掲載されている。

他にも例えば、1995年12月号の「なんでもランキング'95」という特集では、ランキング形式で「ゲイライフ」についての指南が示されている。「素敵なゲイライフを送る先輩からのアドバイス3」として、「1．保険は良く選んで入ろう」「2．(一緒に暮らしているなら)財産は共同名義にしておく」「3．お墓の管理は今のうちから」を、また「ゲイライフを思いっきりエンジョイするためのチェック・ポイント3」として「1．健康」「2．精神的な支えとなる人間関係を保つこと」「3．一人で生きていける生活能力」を、ポイントとしている。しかし、このさまざまなランキングについて、特集の冒頭の対談では、「あら、ノンケのマスコミのマネしたいわけ？多数派や平均値を見せるなんて、ゲイのスタンスから外れない？」(BADI1995/12:28)と、ランキングに対する懐疑的姿勢を見せる。そして最終的には、「それにしても僕たちって、同じ社会の事件でもノンケとはまた違った目で語れるよね。(一同深く自己満足)」(BADI1995/12:30)と、「ゲイ」が特有の視点を持つことに編者は同意する。ここからわかるように、この特集はランキングによってゲイとして生きるための指南を提示する側面がありながらも、同時にゲイに特有の視点から思考することをも提示していると言える。つまり、「ゲイ」であるということは、単に男として男を欲望することではなく、「ゲイ」に特有の視点から物事を考えることでもあるのだ。

「普通」という価値の否定は、ある読者投稿とそれへの編者による応答からも窺うことができる。次のやり取りは、「ジャンピング・ジャーナル」というコーナーに対する読者からの批判と、編者による返答である(上段読者投稿、下段編者コメント)。

> あの、ゲイ関連の本とかレコードとか紹介するページありますよね。あれねー、ちょっと考えものですよ。だって、(…)ゲイの人が歌ってるからって良いものとは限らないでしょう？なんか、「ゲイの、ゲイによる、ゲイのための…」みたいな。そういう「ゲイの人がやってるから」とかいう理由で、聴いたりしても、それ以上広がらないんじゃないですかねー。別にゲイの人のじゃなくても、良いものを紹介するっていう方が、絶対良いと思う。

> 〔編者の自分として指摘したいのは〕こうした批判の中に、実はホモ・フォビア＝ホモ嫌悪が見え隠れしていることが多いという点です。(…)暗黙のうちに、自分でも気づかない程、意識の奥底に「ゲイはストレートより劣っている」という考えを刻みつけてしまったゲイが沢山います。彼らは無意識の内に、「ストレートの物を取り上げるようになれれば、一人前だ」「ストレートと同じになれたら普通だ」と思っています。ストレートの価値基準を絶対だと信じ、そこに擦り寄って安心するおもねりがあるのでしょう。　(BADI1994/8:247-248)

この編者の返答からは、ストレート（異性愛者）の価値基準から距離を置き、ゲイのもの（ゲイ男性によって作成されたもの）を積極的に取り上げることが自己肯定感を得るためのひとつの戦略であるとの認識を読み取ることができる。ゲイであることによる内面化されたホモフォビアへの対処方法としては、〈私は異性愛者と同じ価値観を持っている普通の人物なのだ〉という方法と、「アブノノスゝメ」でも見たような「ゲイ」であること（「変態」であること）にこだわり、それ自体を肯定的なものに転換させる方法がある。『バディ』では、「普通」を目指す自己肯定ではなく、「普通」ではないものとしての「ゲイ」であることに徹底的にこだわった自己肯定が展開されていたことがわかる。

もうひとつ、読者の「普通」志向への批判が表れている記事に、1997年1月号の特集「好きだからあげる」の中の「『普通の恋』なんて、してあげない！」という記事がある。この記事は、読者から届いた、「読めば読むほど、なにか『いや〜』な気持ちになっていく」（BADI1997/1:52）手紙に対して、編者が「重箱の隅をつつくようなあげ足取り」によってコメントをする形式になっている。「普通の恋がしたい！」というタイトルの読者からの手紙には、「普通」であることに囚われた考えが散りばめられており、それに対し編者が「意外と、みんな『普通』ってキーワードに弱かったりする。そんな〈フツウ症候群〉のゲイに喝！」（BADI1997/1:52）を入れるための記事であった。記事のまとめでは、「『普通じゃない』＝『ゲイであること』に誇りを持ってほしい」（BADI1997/1:53）と語られている。

「普通」を否定したり、ゲイであることと「普通ではない」ことを結びつける姿勢は、『バディ』が女装やドラァグクイーンを積極的に取り上げていたこととも関わっている。「ところで、バディはゲイ雑誌内女装濃度が最も高いと言われる。そりゃ、毎号必ず女装（ドラァグ）ネタが登場するのだからねぇ」（BADI1996/10:682）(10)と編者によって語られているように、女装は『バディ』の重視するトピックのひとつであった。続けて、「ドラァグはゲイの伝統文化だ」（BADI1996/10:682）とも言われるように、ドラァグをゲイ文化として紹介すること、あるいは日本における新しいゲイ文化として形成することも目指していたと言える。例えば1997年1月号ではドラァグクイーン特集が組まれており、「ちかごろ話題のドラァグクイーンの総てがわかる！ほかのゲイ雑誌では実現不可能。バディだからこそ出来た異色企画！」（BADI1997/1:35）と見出しが付され、具体的な内容は、日本と海外のドラァグクイーンの紹介、ドラァグメイクの仕方、ドラァグクイーン関連の映画・音楽の紹介などによって構成されている(11)。編者の言葉を引用するとドラァグクイーンとは、「ことさらに『女らしさ』を強調したいでたちで、『男（らしさ）／女（らしさ）』にこだわるヘテロ社会をカリカチュアするのです。ドラァグクイーンは『個』の多様性を無視する『男／女』『正常／異常』の境界線を引きずって、撹乱して、笑い飛ばしてしまおうとするエネルギーです」（BADI1997/1:36）と解説される。一言でまとめると、人々の「普通」を形作る規範への抵抗としてドラァグクイーンを積極的に取り上げていたのである。

このように第1期の『バディ』では、「ゲイ」や「ゲイライフ」を具体的な生き方のモデルに結び

(10) 実際に内容を確認すると、毎号必ず女装やドラァグが取り上げられているわけではなかった。ただ、他の雑誌では取り上げられないそれらを『バディ』は取り上げるという点で、それらが重要なトピックであったことに変わりはない。

(11) 第2期以降にも類似するドラァグ特集として、1999年3月号「HOSSYのドラァグ・メイク・テクニック」、2002年3月号「全国ドラァグクイーン大図鑑」がある。

つけるというよりは、「普通」に抵抗するための思考法、あるいは一種の政治的スタンスとしていたのだ(12)。

2-5 「悩み」の解消と「しあわせ」の達成

「ゲイ」や「ゲイライフ」を思考法として捉えることは、「普通」ではないことをポジティヴなものに転換させて自己肯定を得る戦略であったが、この時期から「自己肯定のゲイライフ」と結びつけられ始めたものに、「しあわせ」というキーワードがある。このキーワードは第2期になってからより強調されることになるが、例えばすでに触れた1995年12月号の「なんでもランキング '95」は、特集の最後が「ランキングの向こうに幸せが見える！」(BADI1995/12:54) というエッセイによって締めくくられている。そして1996年2月号では、「しあわせになりたい！！」という大きな特集が組まれている。

この特集では冒頭に、「『ゲイのしあわせとは何ですか？』と聞かれたら、おそらく多くの人が答えに困ってしまうだろう」(BADI1996/2:36) とあるように、ゲイ男性には生き方のモデルだけではなく、「しあわせ」のモデル（ゲイとしての幸せを構成する具体的なもの）も無いことが示される。その上で、この特集では「思いつく限りの『しあわせ』を検討」(BADI1996/2:38) するとして、「友達がほしい！」「ちんちんをくわえたい！」「とにかく男にもてたい！」「付き合いたい！」「人生にサクセスしたい！」「不幸せになりたい！」(13)「世間並みの幸せがほしい！」「快感をディープに追求したい！」の8つの「しあわせ」が検討されている。これはまさにゲイとしての生き方と「しあわせ」のモデルを提供するような特集である。そして特集の最後で、「あなたにとって、ゲイの幸せとは何ですか？」(BADI1996/2:62) という問いかけに対して、編者が各個人の意見を語っている。しかし、その記事の統括のコメントで述べられているのは、「ゲイの幸せ」を考えると結局はさまざまな幸せの形が出てき、「何もそれは『ゲイ』に限った事ではありません」という結論に行き着いてしまうということである。そのため、「なにも大上段に構えて『ゲイの……』なんて考えなくても良さそう」ということであり、「僕たちは常に自分が仲間外れの『ゲイ』であることを意識せざるをえない状況にあ」るにも関わらず、突き進めると、ゲイであることを意識しなくて済むことがゲイの幸せなのではという回答に行き着くことが語られている (BADI1996/2:62-66)。このような矛盾がありながら、最終的には、「『ゲイ』とは方法論であり生き方の選択肢の一つなのです。／だから、僕は、ゲイで生きたいと思うのです」(BADI1996/2:66, 傍点原文) との結論で締めくくられるように、

(12) 『バディ』創刊から編集に携わり、第2期には一層『バディ』を率いるようになる小倉東は、別の書籍で次のように語っている。
「〔1970年代〕のやり方って、『ゲイは他の（ストレートの）人間と同じなんだ』という論法で話をしてたでしょ。でも、実はそれって、もったいないんじゃないかと思うようになったの。だってゲイであるがゆえに築けた大切な宝物とか能力とかって確かにあるわけじゃない。にもかかわらず『僕たちはストレートと同じなんだ』と言い切ってしまうことは、今まで培ってきたゲイ固有の大切な文化を否定してしまうことになる気がするの。だから僕は今年〔1994年〕をあえて『オネエの逆襲の年』(笑) と呼びたい。つまり、ゲイがこれまで築いてきたカルチャーを再評価する年にしようと思う。ゲイはストレートなんかと同じじゃないわ！　ゲイはゲイなの！　そのゲイは、こんなに優れているんだって部分を……もちろん劣ったところもあると思うわよ (笑) ……どんどん積極的に評価していこうと思うのね。(…) オカマであり、変質者であり倒錯者であるゲイの創ってきた優れた文化を再認識する年にしたいの。」(宝島ゲイ・スタッフ編 1994:131)

(13) 「不幸せになりたい！」とは、失恋などの不幸話ばかりをする人は、「悲劇のヒロイン」としてその不幸を楽しんでいるのではないか、「ありきたりな幸せ」よりもずっと濃厚な人生なのではないか、という趣旨によって執筆されている記事。

この特集でもゲイとして生きるためのひとつの具体的なモデルを提示しているのではなく、思考法のひとつとして「ゲイ」であることを提示しているのである。

しかしここで注目したいのは、幾度にも語られる「幸せになる」という言説と、その希望が生じるための前提条件となる「幸せではない状態」の関係性である。第1期に特徴的な連載に、1995年5月号から1996年12月号まで連載されていた「みんなで悩んで大きくなろう！」というものがある。1994年に「すこたん企画」という同性愛者の活動団体を立ち上げ、書籍の出版なども通して積極的に言論活動を行ってきた伊藤悟と梁瀬竜太が読者からの悩み相談にのったり、最近の出来事について二人が対談をするという連載であった。そのリード文には、「ゲイだからそこ悩むことって結構あるよね」、「うーんと悩んで立派なゲイになりましょう」（BADI1995/5:56）と記されているように、悩みを抱えたゲイ男性という存在と、悩みを通してより良い存在へと成長ができるという道筋を読み取ることができる。『バディ』は「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉によって自己肯定感を形成しようとしてきたが、その前提には自己肯定感を持っていない状態のゲイ男性が存在していたと言える。以上の点を「幸せになる」という言説との関連から捉えると、『バディ』では悩みを抱えて「不幸」な状態にあるゲイ男性を、その悩みを解消することによって「幸せ」な状態へと導くことを目指していたと言える。言い換えるのであれば、「ゲイ」や「ゲイライフ」という新しい言葉によって自己肯定感を形成しようとしていたと同時に、「しあわせ」というキーワードによっても同様のことを実践していたのである。この点は素朴に考えると当たり前のことであり、取り立てて論じる必要のないようにも思われる。しかしこの点が第2期からの実践を捉えるにあたって重要となるのだ。

第1期の『バディ』を要約する。『バディ』はゲイ雑誌の定型に乗り誌面作りを行うことでまず読者を獲得することを目指しながらも、「ゲイ」という新しいアイデンティティと、「ゲイライフ」という新しい生き方を紹介し始めた。しかし、ゲイとして生きるための指南を紹介しつつも、そこで示されるキーワードは「多様性」であり、特定の形あるモデルを提示してはいなかった。一方で「ゲイ」を、「普通」であることを拒否し、規範へ抵抗する思考法として捉え、その実践を通して読者に自己肯定感を獲得させることを目指していた。同時に「しあわせ」というキーワードを散りばめることによって、悩みを抱えたゲイ男性を「しあわせ」の状態へ導くことも試みていた。

3．「ハッピー」という「夢」―― 僕らのハッピー・ゲイ・ライフ（1997-2000）

創刊予告号の発行から約4年後の1997年6月、キャッチフレーズが「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」へと変更された。この時期以降の『バディ』に見られる実践は、すでに第1期で「しあわせ」がひとつのキーワードであったことからもわかるように、第1期の実践をより推し進めたものだと言うことができる。これ以降、当時のスーパーザイザーであった小倉東（おぐらとう）の実践が色濃く誌内にあらわれ始める。小倉は『バディ』創刊から編者の一人として作成に携わっており、創刊の一年後には一度作成から離れるが、一年間の離脱ののち1995年末ごろには復帰し、「スーパーバイザー」として『バディ』に携わるようになった（BADI1996/10:682）。その後1998年にはスーパーバイザーとし

ての立場を離れ、『バディ』の前線からは退いた（BADI1998/1:86-87, BADI1999/1:71）。しかし、第1期から第2期にかけて彼は『バディ』の土台を作り上げたとも言えるため、彼の語りも追いながらこの時期の『バディ』について論じていく。

3-1　キャッチフレーズの「公募」という戦略

『バディ』のキャッチフレーズ変更は、読者からの公募の形を取っていた。1997年4月号と5月号に新キャッチフレーズ募集の広告が掲載された。「『ゲイはステキだ。』と言ってほしかった。」という大きな見出しとともに、「僕たちは情報に囲まれて生きている。でも、同性愛は変態、男を好きになるのは異常……。そんな情報ばかりだからさびしかった。だって、隠花植物なんかになりたくなかったんだ。だからバディは、ゲイがハッピーになるための情報を満載してお届けします。」（BADI1997/4:61）との文章が添えられ、「ステキさ」や「ハッピー」と結びつくキャッチフレーズを募集している。そして1997年6月号には、新キャッチフレーズ決定と発表の記事が掲載された（図1-1）。しかし後に、このキャッチフレーズ変更を主導した小倉は、「実はこのキャッチフレーズは読者公募のキャンペーンだったんだけど、それ自体もウソだったの。だって、このキャッチフレーズ考えたの僕だモン（笑）」（BADI1999/11:402）と、彼自身による〈やらせ〉であったことを告白している。この背景には、当時のムーブメントを引っ張っていくためにイメージ戦略を行うという彼の意図があった（小倉ほか 1999:81）。


バディの新キャッチフレーズ決定！

採用作

僕らのハッピー・ゲイ・ライフ

バディを読んでるとゲイでいて幸せだと思えるようになったから。それと、エロだけじゃなくて、ゲイ・ライフ全般に関する情報がたくさん載ってるから。（島根・勝也）

最終選考作

ボクたちの流行発信基地

広い意味でのゲイのための情報（マンガとかも含めて）が詰まっているから。「情報」がバディを読むことによって「流行」に変わる。……それをまとめて「流行発信基地」としました。（八王子・義弥くん大好き）

俺の気持ちはこの本の中にあるだぜ

バラエティーに富んだ内容と、各ジャンル（ドラマ・少年愛・SM……etc）を網羅する記事が、男の本音を代弁してくれていると思う。（佐賀・アンタレス）

僕も？　彼にも!?　ボクらの味方!!

3万円下さい。お願いです。（札幌・baV）

佳作

すべてのゲイの代名詞

バディはゲイ雑誌の代名詞になりつつあります。代名詞の「同」は、男somethingということで「雄」にしました。（福岡・早川隆博）

Have a Happy Time!!

バディとハッピーの図式をこの言葉に込めました。バディでつかんだ情報で、生活をハッピーにしようって意味です。（東京・駒澤大学PAO-3万でみんなで全裸デーに行こう会委員会）

殿物箱

U + I = Bádi

総評　バディの新キャッチフレーズ募集にたくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。採用作ならびに優秀作を発表します。なお、あまりにステキ（!）な作品が多かったため優秀作2本のところを3本、さらに佳作として4本を選出しました。

選考ではまず、「男の～」「男と男の～」「男同士の～」といった表現をした作品をはずしました。わざわざ「男」といいかえるなら、それが「人間」であってもよいことになってしまいます。けれども、バディと読者の皆さんを置いているのは、なにより「ゲイ」であるという部分なのです。そこで、「男」という大きな括りで表現したものよりも「ゲイ」というより明確なキーワードを打ち出した作品を中心に、「ゲイ」であることをもっと積極的にとらえ直したい、「ゲイ」であることをもっともっと楽しみたい、という思いを込めて選んでみました。

採用作は、島根県の勝也さんの作品です。一部、編集部で手を入れましたが、語感のポップさとバディのメッセージがダイレクトに（ちょっと気恥ずかしいぐらいに……）伝わるところがポイントでした。

送られてきた作品全体を見てみると、本当に時代が変わったな、と感じます。まず、自分のことを表す言葉として「ゲイ」という単語をダイレクトに使うようになってきたことと、「僕（ら）の」「俺の」といった言葉が多く使われていたこと、つまりそれは、自分が「ゲイ」であることを受け入れて、肯定的にとらえられる人が増えてきたということですね。

あと、「ハッピー」という言葉を使った作品も多かった。「ゲイ」でいることは確かにシンドイことかもしれない（少なくとも今の世の中じゃ……）、でも、幸せになりたいと夢見ることは決して悪いことじゃない、夢見ることさえ諦めてしまわなくていいんだよ……と、馬鹿みたいに言い続けてきたことが、ちゃんと読者の皆さんに伝わっていたのだと思うとホントに……ハッピー！（小倉東）

115

図 1-1　『バディ』新キャッチフレーズ発表の記事（1997年6月号，115頁）

『バディ』にいるぼくが、勝手に変えてしまったんではあまり意味がないと思ったので、表向きは読者公募という演出をしたの。あたかもあれが読者の中から自然発生的に生まれてきたという印象を与えるためのトリックだった。（小倉・佐藤1999:3）

それでは具体的に、いかなる「ライフ」がこのキャッチフレーズによって主張され始めたのであろうか。新キャッチフレーズ発表の記事を読み解くことから始めたい。

3-2 「ゲイ」であることの強調

新キャッチフレーズ決定の記事には総評が書かれている。この総評には「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」によって目指されていたものが凝縮されているため、長くなるが全文を引用する。

> バディの新キャッチフレーズ募集にたくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。採用作ならびに優秀作を発表します。なお、あまりにステキ（！）な作品が多かったため優秀作2本のところを3本、さらに佳作として2本を選出しました。
>
> 選考ではまず、「男の～」「男と男の～」「男同士の～」といった表現をした作品をはずしました。わざわざ「男」といいかえるなら、それが「人間」であってもよいことになってしまいます。けれども、バディと読者の皆さんを繋いでいるのは、何よりも「ゲイ」であるという部分なのです。そこで、「男」という大きな括りで表現したものよりも「ゲイ」であるという明確なキーワードを打ち出した作品を中心に、「ゲイ」であることをもっと積極的にとらえ直したい！、「ゲイ」であることをもっともっと楽しみたい！、という思いを込めて選んでみました。
>
> 採用作は、島根県の勝也さんの作品です。一部、編集部で手を入れましたが語感のポップさとバディのメッセージがダイレクトに（ちょっと気恥ずかしいぐらいに……）伝わるところがポイントでした。
>
> 送られてきた作品全体を見ると、本当に時代が変わったな、と感じます。まず、自分のことを表す言葉として「ゲイ」という単語をダイレクトに使うようになってきたことと、「僕（ら）の」「俺の」といった言葉が多く使われていたこと。つまり、それは自分が「ゲイ」であることを受け入れて、肯定的に捉える人が増えてきたということですね。
>
> あと、「ハッピー」という言葉を使った作品も多かった。「ゲイ」でいることは確かにシンドイことかもしれない（少なくとも今の世の中じゃ……）。でも、幸せになりたい！と夢見ることは決して悪いことじゃない。夢見ることさえ諦めてしまわなくてもいいんだよ……と、馬鹿みたいに言い続けてきたことが、ちゃんと読者の皆さんに伝わっていたのだと思うとホントに……ハッピー！（小倉東）　(BADI1997/6:115)

肯定的な新しいアイデンティティを形成するという意図は第1期から存在し、第2期でもその意図は継承されている。例えばこの記事以外でも、「まだゲイであることに必要以上にマイナスイメージを抱いている読者（…）に、ゲイであることの楽しさ、すばらしさを伝えていくことが『バディ』の役割の一つでもあります」(BADI1999/11:374-375) と語られる。しかし、「ゲイ」であることへのこだわりやその強調は、第2期になって一層強まった。「バディと読者の皆さんを繋いでいるのは、何よりも『ゲイ』であるという部分」であるため、「『男』という大きな括りで表現したものよりも『ゲイ』であるという明確なキーワードを打ち出した」ものをキャッチフレーズに採用したとあるように、「ゲイ」としての共通項がより強調される。第1期の方向性を継承しながらも、「男」という括りから距離を置くという点で、大きな転換が行われている。

この総評からは、読者と『バディ』、そして読者たちは「ゲイ」という言葉を媒介としたつながりをすでに築いていることが示されている。しかし、彼らがすでに「ゲイ」であることでつながりを

形成しているというよりは、『バディ』が「ゲイ」であることにこだわり、読者たちを「ゲイ」と名指し、「ゲイ」であることを前面に押し出すことによって、皆を「ゲイ」としてつなげていると言った方が適切であろう。これは一種の読者共同体の形成と言うことができる。「僕らの」という言葉を使用することによって、『バディ』の読者を「ゲイ」として一様に包括しようと努めているのである。そのためここでの「ゲイである」ことは、「男性同性愛者」や「ホモ」などの他の既存の言葉とは異なり、『バディ』から〈新語〉として新たに与えられた、肯定的な意味合いを強く含むアイデンティティである。このように「ゲイ」であるというアイデンティティを強調するのは、小倉による次の発言にもあらわれている。

> アンケートの反応で「一般誌みたいにファッションのページを入れてください」というのが昔からあります。もちろんゲイというのはセックスだけで生きているわけではないから、ファッション、生活、食事、女の話もやりたい。読者がしっかりとゲイであってくれたら、その上でいろいろなゲイっぽくないこともやって行けるけれども、「一般誌のようにして欲しい」という気持ちの中に「一般になりたい」という気持ちが見え隠れするうちはやれないと思っています。もう少しの間はクサイくらいにゲイにこだわりたいなと思っています。
>
> (BADI1997/7:82)

この語りは第1期にも同様に見られたものであるが、第1期からの「ゲイ」へのこだわりを継承しつつ、それをより強調し意識化しようとするのが第2期の新しいキャッチフレーズなのである。

3-3 「夢」と「ハッピー」の提示 ——〈現実逃避〉

新キャッチフレーズで意図されているもうひとつの点は、肯定的な「ゲイ」というアイデンティティを形成するために、それを「ハッピー」という言葉と明示的に接続させることである。このキャッチフレーズ考案の意図として、「バディを読んでいるとゲイでいて幸せだと思えるようになったから。それと、エロだけじゃなくって、ゲイ・ライフ全般に関する情報がたくさん載っているから」(BADI1997/6:113) と記されるように、『バディ』が「しあわせ」を提供する雑誌であるという前提があることがわかる。しかしここで重要なのは、「幸せになりたい！と夢見ることは決して悪いことじゃない。夢見ることさえ諦めてしまわなくてもいいんだよ」、という語りである。注目したいのは、幸せになることが「夢」として提示されていることである。つまり、「ハッピー・ゲイ・ライフ」とは、幸せであることが現状として提示されたものではなく、未だに現実とはなっていない理想として提示されたものなのである。

小倉は先ほどの総評においてだけではなく、さまざまな場所で「夢」について言及している。『バディ』内のある対談で、小倉は「ゲイライフ」と「夢」の関係性について次のように語っている。これは同性愛者の運動（あるいはおそらく社会運動全般）に対する彼のスタンスについて語ったものである。

> ちょっと前の運動論って、「ちゃんと現実を見ろ、対象に向かって戦いを挑め、そして乗り越えろ！」って考えだった。でも、僕は「逃げたかったら逃げちゃえば？現実が辛いんだった

ら、目を閉じて、夢を見てれば救われるじゃん」って考えてた。だから、バディに「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」なんてウソで固めたようなキャッチフレーズをつけたの。だって、今の日本で現実に、ハッピーなゲイ・ライフなんてあるわけないじゃん（笑）。でもだからこそウソでもいいから夢を見て、それで勇気づけられれば、シンドイ現実に立ち向かうエネルギーだって生まれてくるでしょ。（BADI1999/11:402）

彼は、「僕は日本でゲイ・リベレーションとゲイ・メディアをうまく結びつけて展開することを考えてきた」（BADI1998/6:104）と語るように、小倉にとって『バディ』と「ゲイライフ」はリブの延長にあった。そしてこのキャッチフレーズを使って小倉が行ったのは、「あるわけない」「ハッピーなゲイ・ライフ」を提示することであった。「ゲイライフ」は「夢」であり「ウソ」であるということからも、いわば誰も到達することのできないゴールでもあった。そしてこの「夢」を通して「シンドイ現実」に立ち向かおうとするのが『バディ』であった。

小倉はこのような方法を「ゲイナイト的な方法論」と類似するものとして語っている。彼によると「ゲイナイト的な方法論」とは、「『現実を見ろ！敵を探せ！自分を見つめろ！』というのが今までのリブの方法論だったけど、ゲイナイト的な方法論は、日常のしんどさは置いておいて、楽しんで、それを持ち帰って、何かの役に立てばいいじゃん！っていう、バディのハッピー路線的な新しいやり方」（BADI1999/11:402）のことである。この語りを参考にするのであれば、「ハッピー・ゲイ・ライフ」という「夢」は「シンドイ現実」へ立ち向かうエネルギーの元とされながらも、それは非常に副次的なものであり、〈現実逃避〉によって肯定的なアイデンティティを獲得することに重きが置かれていたと考えられる。「ハッピー・ゲイ・ライフ」とは、〈私たちはハッピーなのだ／になることができるのだ〉という〈幻想〉を持つことによる自己肯定であったのだ。

こうした「夢」の提示は、小倉自身の経験から生じたものであった。下の語りは、シドニーで開催された「マルディグラ」というセクシュアルマイノリティのパレードに参加するツアーを『バディ』が開催したときの記事における、小倉の語りである。

僕は 70 年代のアメリカの豊かなゲイ・ライフに憧れて、それを手に入れようと頑張ってきた。夢見ることが出来れば、人間、あきらめなくてもすむんだよね。僕が当時の海外のゲイ雑誌から受け取ってきたように、この〔マルディグラへの〕ツアーは、日本のゲイに夢のもとをあげられたんじゃないかな。目標が出来れば、頑張りがいも出てくるよね。だから、カミングアウトの件についても、「ホモがばれた」場合の悲劇だけではなく、成功して幸せになったゲイ達の姿を意図的に見せるのもゲイ・メディアの役割だと思う。（BADI1998/6:105）

アメリカでの「ゲイライフ」を日本でも実現すべき「夢」として心に留め、小倉個人が活動をしてきたように、『バディ』でもそれを実現すべき「夢」、到達すべき目標として掲げてきたのである。しかし繰り返すように、小倉にとってそれは現実とは異なる「ウソ」としての「夢」という側面もあった。

この姿勢は、小倉が『バディ』の第一線を退いてからも他の編者へと引き継がれている。その後『バディ』の「監督」となった西野浩司は、「ここ半年ほどは現場カントクとして、それ以前の弊誌

の流れを汲み、あらゆるゲイの多様性を認めつつ頭にもハートにも下半身にも感じてもらえる雑誌を作りたい。ことばひとつにも気をつけて、カラ元気でもいいからゲイとしての背筋を伸ばせる楽しさをあげたい。そんな思いで若いスタッフたちとやってきました」(BADI1998/6:748) と語るが、「カラ元気でもいいから」という言葉に、実際には存在する「悩み」を覆い隠すかのような姿勢を読み取ることができる(14)。

3-4　読者の顔出しによるゲイライフの提示

では具体的にはどのような誌面作りが行われていたのであろうか。この時期の『バディ』でもっとも重要な実践は、編者や一般の読者の（顔）写真を積極的に誌面に登場させることであった（小倉ほか1999:80)。この実践は、読者と編者の距離を縮めること、他のゲイ男性の存在を可視化させることであった。これに加え、実際のゲイ男性の「ゲイライフ」を写し取ることでもあった。

読者が顔出しをしている企画でもっとも早いものとして、『バディ』によって企画された合コンがある。「ゲイ雑誌史上初のあり(そ)でなかったこの企画」(BADI1995/11:38) である第1回の合コンは、第1期の1995年11月号で企画され、10人の参加者のうち7人が顔写真付きで紹介されている（その7人のうち3人は『バディ』編者)。そして第2回は1996年7月号で企画され、50名近くの参加者のうち、10名が顔写真とともに紹介されている（その10人のうち2人は『バディ』編者)。第1回は合コンの様子を写した写真はあまり掲載されていなかったが、第2回からは全6頁の特集のうち、2頁が写真で埋められている(15)。

1998年3月号からは「バディの街角 Boy Friends」(のちに「マチカドボーイフレンズ」へ改称) という連載が開始され、一度に多くの一般のゲイ男性が顔写真とともに紹介されるようになった(初回は12人)。1998年11月号の「マチカドボーイフレンズ」では札幌、東京、仙台、横浜、名古屋、大阪、福岡の一般のゲイ男性が総勢 152 人登場し、2000 年 11 月号の「マチカドボーイフレンズ SPECIAL」では145名が登場している。その後この連載は2000年8月号で終了し、以降は不定期に年数回のペースで掲載される企画となったが、2002年2月号からは「マチカドボーイフレンズ」を引き継ぐような「マチカド★パンツ」という連載が開始した。こうした連載以外にも特集記事などで一般のゲイ男性が大量に紹介されることが多くあった。例えば、1998年2月号では「イケてるオトコ大集合！」という特集が組まれ、新宿二丁目にいるゲイ男性の顔出しとそれぞれの詳しい紹介がある。編集後記でも「今月号は一般読者の顔出し写真がいちだんと多いと思いませんか？」(BADI1998/2:738) と語られている。

単に顔写真を掲載するだけではなく、ゲイ男性の生活を写し取ったり、インタビューを掲載する連載もこの時期に登場するようになる。1997年9月号からは「in his Life」というコーナーが始まった。いわゆるお宅拝見コーナーであり、一人のゲイ男性が取り上げられ、彼の部屋が写真とともに紹介される。「ゲイの普段の暮らしっぷりをちょっと拝見！」という見出しとともに、「ゲイは1日中、ベッドの中にいるわけじゃない。」と大きな見出しが添えられている点からは、ゲイ男

(14)　完璧に「悩み」の存在を覆い隠していたわけではない。例えば、『バディ』5周年記念の企画として「特別読者電話相談」を二日間だけ行っており (BADI1998/9:78-79)、「ハッピーゲイライフ」の背後にある「悩み」を解決するための活動も皆無ではなかった。

(15)　1999年1月号では3回目となる合コンが「コスプレ編」というテーマで開催されている。

性をただの性的な存在として捉える認識を否定する姿勢が窺える。1998 年 2 月号から（1999 年 5 月号まで）は「HAVE A NICE GAY!」という連載があった。この連載は「毎月とびきりの『かっこいいゲイ』を紹介」する連載であるが、「かっこいいゲイ」の条件とは、「生き生きとゲイである自分を僕らに見せてくれる、ということ」（BADI1998/2:41）とされている。この連載でも毎回一人または一組（カップル）のゲイ男性を取り上げ、写真とともにインタビューを掲載している。そして 1999 年 9 月号から（2001 年 3 月号まで）は「LIVE 東京ゲイ」という連載が始まった。これも「in his Life」と同じように、東京で一人暮らしをするゲイ男性の写真とインタビューによって構成されており、一般のゲイ男性の生活を垣間見るコーナーとなっている。これらの連載では、ゲイであるというアイデンティティを肯定的に受け入れ生活をしているゲイ男性をまざまざと見せつけることが意図されていると言える。こうしたゲイ男性を積極的に雑誌内に登場させることで、「ハッピー」なゲイライフが多くのゲイ男性によって実現されていることを読者に示している。

3-5 「夢」の具現化 —— モデルとしての「結婚」

しかし、「幸せ」そうで「生き生き」と生活をするゲイ男性を写しとることで「自己肯定のゲイライフ」を提示することが比較的容易であっても、具体的に「生き方のゲイライフ」を提示することは容易ではない。ゲイ男性の生き方を写し取る連載も、生き方の事例を紹介してはいるが、具体的なモデルを提示しているわけではなかった。『バディ』が主導してライフスタイルやライフコースのモデルケースを形成・提示するのではないという姿勢が、コミュニティの調和をとることであるというのは、第 1 期に語られていたことである。ただそれでも、「ゲイの幸せな生き方について、十分なモデルケースがあるわけじゃない。不安や心配がつきまとう」（BADI1995/12:56）という事実がなくなるわけではないため、モデルを求めるという欲求は常に付きまとう。

そこで『バディ』が「夢」の具現化として提示する「生き方のゲイライフ」が、「結婚」である。1999 年 3 月号で創刊 5 周年記念の特集のひとつとして、ゲイ男性同士の神前結婚式が特集されている。「極楽ゲイライフ」という特集の中でゲイカップルの神前結婚式が 9 頁にわたってカラーで特集されている。この特集には見出しとして、「5 年前にはカタチの見えにくかった、僕らのハッピーライフが、どんどんとリアルなものになってきた。（…）今度はバディ誌上で、ゲイのカップルに結婚式を挙げてもらっちゃおう！」（BADI1999/3:27）と記されており、結婚がゲイ男性の生き方のひとつとして提示されている。この企画は非常に影響が大きかったらしく、2 ヶ月後の 5 月号において神前結婚式への反響を紹介する特集が組まれている。この神前結婚式は週刊誌やスポーツ新聞などの一般メディアでも取り上げられるほど反響を呼び、その報道内容の紹介も 5 月号で行われている。

「結婚」に限らず、第 2 期は恋愛やパートナーシップという関係性が『バディ』内で少しずつ取り上げられるようになる時期でもある。もちろん第 1 期から恋愛についての特集や記事は継続して存在しているが、第 2 期からは恋愛／パートナーシップに関する連載が 2 つ開始されている。ひとつは、1998 年 3 月号から始まった「やっぱり♡ふたり」である。ゲイバー「タックス・ノット」を経営し、パートナーシップについての言論活動を行ってきた大塚隆史が、毎回 1 組のゲイカップルにインタビューをするという連載である。連載の紹介文には、「男同士で気持ちよく付き合っていくにはどうしたらいいんだ？いろんなカップルの話を聞いて、何かヒントを見つけてみよう」（BADI1998/3:60）、と記されており、男性同士での交際の仕方を模索する企画となっている。この

連載は、2003年3月号からは「アイノ♡カタチ」という名称変更を経ながら、2004年まで続いた(16)。もうひとつは、1998年1月号から開始された「ふたり～ゲイカップルの肖像」である。この連載は、「ニューヨークのゲイ達の姿を真正面からとらえ、尊厳と深い愛情に満ちた美しいモノクロームに写し取った写真集『Z』で注目を集めた女性写真家の林いず美」(BADI1998/1:62)と『バディ』のコラボレーションによって行われたものである。掲載される写真は、ゲイカップルの「ハッピー」な様子を映し出すのみならず、時に哀愁を感じさせるものもあり、『バディ』に多いポルノ的なグラビアとは一線を画していた。連載にはタイトルとともに、「『ふたり』は、幸せになることのできる最小の必要条件なのかもしれない」(BADI1998/1:62)という言葉も付され、恋愛／パートナーシップを「幸せ」の条件ともしている。

こうした恋愛やパートナーシップについての連載が増え始めた中で企画されたのが、神前結婚式であった。この結婚式は確かに実際に執り行われた儀式ではあるが、本当に「現実的」なものなのであろうか。法的な同性婚も、パートナーシップ制度などもない当時において、この結婚式が意味するものとは一体何か。「僕らのハッピーライフがどんどんとリアルなものになってきた」という認識のもと企画された結婚式であったが、この企画もこれまで論じてきた「夢」のひとつとして捉えられているのである。神前結婚式についての振り返りとこの企画に対する読者などからの反応をまとめた1999年5月号の記事では、この企画を行うに至った経緯が次のように告白されている。

> そもそも、ゲイ雑誌の記事として結婚式をやるに至った経緯だが、これは「ゲイライフ」という特集テーマに対して、もっとも明確に表現できる企画として考え出されたものだ。全てのゲイが結婚制度やパートナーシップを求めているわけではないのは当然。だが、ライフという日本ではなかなか手に入らないゲイ・スタイルを語る際に、一番わかりやすく、そして一部の人々にとっての夢の具現化ともなるのは、やはり結婚式だった。 (BADI1999/5:341)

すべてのゲイ男性が「結婚」を求めるわけではないことを編者は理解しつつも、「一番わかりやすい」ものとして「結婚」を取り上げたと語っている。しかしそれはあくまでも「夢」を具現化したものでしかなく、今すぐ実現する見込みはないが、将来的に達成しうるかもしれない「夢」のひとつとしての意味合いを強く持っていた。同じ特集内では次のようにも語られる。

> 「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」とは一つの可能性を掲げた旗だ。そこに本当に幸せが待っているかどうかは、行ってみなければわからない。ただ確実なのは夢を見る自由だけは、誰にも奪えないということなのだ。 (BADI1999/5:346)

それでは、結婚以外の「生き方のゲイライフ」についてはどうか。結論を先に述べると、『バディ』が主導して積極的にモデルを提供することはほとんどない。例えば1997年7月から連載が始まった「リーマンクラブ」は、その見出しに、「今月号からスタートした『リーマン・クラブ』では、オ

(16) 2005年からは、大塚がゲイカップルの悩み相談を行う「愛のガーデニング」という連載が始まり、2006年からは「師匠」としての大塚が「弟子」と対談形式で恋愛について語る「大塚隆史のトゥマン道場」という連載が始まった。これは2008年に連載が終了した。

フィスワークに携わるゲイのライフスタイルや情報をご紹介！キミのデイリーライフをもっと楽しくしようよ！」(BADI1999/7:168) と記されており、職場における経験を中心とした個人のライフストーリーが紹介されている。確かにこれは個人のライフスタイルを紹介する記事であるが、ライフストーリーは淡々と紹介されるに留まり、もちろん毎回まったく異なるストーリーが紹介される。つまりさまざまなゲイ男性の生き方が事例としては紹介されるが、理想的なひとつのモデルが『バディ』の主導によって提示されているわけではない。

個人個人のライフストーリーはあるにしても、モデルとなるライフスタイルは具体的な形としては存在していない。モデルの提示は『バディ』が担う役割ではないとすると、それは読者の役割になる。もちろん「ハッピー・ゲイ・ライフ」を掲げる雑誌に載っている情報は、すべて具体的なライフスタイルにまつわるものであると言うこともできるであろう。しかし、広告も含め多い時で750ページを越す情報量を誇っていた『バディ』は、その膨大な情報をもとにして読者自身が能動的に生き方を構築するように仕向けていたと考えることができる。よって『バディ』に掲載されている膨大な情報とは具体的なモデルではなく、読者自身がモデルを構築するための事例であり、素材なのである。「生き方のゲイライフ」があることは明示しながらも、具体的にそれがどのようなものになりうるのかについては、事例を紹介するに留め、明示しないという基本的戦略をとっていたのである。

だが、こうした基本的戦略がありながらも、『バディ』は具体的な「わかりやすい」ひとつのモデルとして「結婚」を提示するに至った。このことは、一種の皮肉にもなっていないであろうか。なぜならばそれは、「普通」の生き方であるからだ。実はこの点は、創刊初期から連載マンガやエッセイを寄稿していた大門秀作によっても触れられている。新宿二丁目のゲイバーで「ねえ、一緒に暮らしているの？」という質問が当たり前のように飛び交っていることに気がついた彼は、「男同士が一緒に暮らす」ことについて次のように語る。

> 約7年前、つまり、あの「ゲイ・ブーム」がブレイクする以前には、「男同士が一緒に生活を考える」なんて発想自体、物凄く希少だったような気がする。「男同士でセックスをする」「彼氏をゲットする」ということが「まずまず」の選択肢。パートナーと一緒に暮らすライフスタイルなんて、遠い遠い別世界の夢物語でしかなかった。(…) ／人の「幸せ」を見て、「羨ましいなぁ」と思い、「よーし、自分だって幸せになるぞ」と考えた結果が、こんな変化をニッポンのゲイ・コミュニティの中に生み出しつつあるのだろうか。／ゲイ・ブームの中、「ゲイの幸せって何だろう？」と考えた人たちがいて、彼らは「ゲイなんだから、男同士で暮らせるようになりたい」というビジョンも提示した (…)。先人達が望んだ程ラディカルな形ではないにしろ、こうした「幸せ」の考え方（のひとつ）はカタツムリの速度で人々の間に根を下ろし始めている(ママ)広がっているのではないだろうか。／「幸せになりたい」という程強い欲求ではなく、「楽に生きたい」という「望み」が原動力だったかもしれない。
>
> (BADI1999/1:418)

このエッセイ自体は神前結婚式以前に掲載されているものだが、それにも関連する内容である。彼によると、ゲイブームの最中、人々が「ゲイの幸せ」について考え始め、その中で出てきたもの

のひとつが、男同士で暮らすというものであった。しかしそれは「先人達が望んだ程ラディカルな形ではない」。これが具体的に何を指すのかは明示されていないが、ゲイリブのみならずフェミニズムなどの運動や議論も含まれていると想像できる。そして、「結婚」や「普通」の生き方を否定するという、それらの思想の中で育まれてきた考え方のことを指し示していると捉えることは、あながち間違いではないと思われる。そして男同士で暮らすというライフスタイルが、ラディカルなものというよりは、「楽に生きたい」という「望み」を原動力として出てきたという指摘がされている。この指摘は、神前結婚式にも当てはまるのではないだろうか。つまり『バディ』は、具体的なひとつのモデルを提示することは避けていたが、それでも人々は「わかりやすい」モデルを求めてしまう。その中で、一種の妥協策として「普通」の生き方である「結婚」が出てきたのではないだろうか。

3-6 「ハッピー」への批判 ――「悩み」の周縁化

ここまでは『バディ』内で「ゲイライフ」がいかに扱われているのかを見てきたが、「ハッピー」を過度に強調するという新しい志向性に対しては読者から共感が寄せられると同時に、批判や疑問が投げかけられることも多々あった。例えば、「ボクを悩ます HAPPY・GAYLIFE」とのタイトルが付された読者投稿では、『バディ』の方向性について次のように不安が吐露されている。

> 自分もそうであったように、誰しも暗くうじうじしたままの人生なんか送りたくはないと思います。しかし、そこから抜け出せないでいる仲間もまだまだ多いのではないでしょうか？／だからといって、それぞれの立場を無視して「みんな幸せになろう」なんておこがましいことはいえませんし、同時に、「明るく、楽しく」いこうにもいけない人達をそのまま放っておくのもどうかと思います。こんなことを思うこと自体、おこがましいことかもれませんが、このまま置いていかれるんじゃないかと、私自身時々不安になることもあります。
>
> (BADI1998/9:399)

この投稿の要点は、『バディ』が「ハッピー」であることを強調するあまり、それに同調できない人や、悩みから目を背けることのできない人が取り残されてしまうのではないかという不安を投稿者が感じているという点である。類似する投稿に、「ハッピーオンリーで本当にいいわけ？」というタイトルのものがある。

> 明るく楽しい「僕らのハッピーゲイライフ」というコンセプトを前面に出した雑誌作りには、読み捨てる程度には好感がもてるのかもしれない。けれど、最近なんだかそれ一辺倒過ぎて、誌面全体が空しく感じられる。定着してきた時代の軽さをうまくくみ取っているとも言えるのだろうけど、そうお気軽に暮らしている読者ばかりではないと思う。 (BADI1999/11:374)

この投稿でも、悩みを抱えた読者の存在が等閑視されていることを懸念している。「読み捨てる程度には好感がもてる」のは、『バディ』が「現実」の問題を解決するための情報を提供するのではなく、「現実」から逃避するための享楽的な情報を提供していると捉えられていたからであろう。また

「『バディ』よ！更なる飛躍を」という別の読者投稿は、「ハッピー」の限界を指摘する。

> 毎日、将来のことや今ある悩みなどで苦しんでいます。しかし、私一人だけが不幸であるとひがむことなく、悲劇のヒロインのように生きていないだけでもマシな人生なのかもしれません。今の自分を精一杯生きることが私を取り巻く人々を幸せにもできるし、私自身も幸せになれるのだと信じています。／そこでたくさんの悩みをかかえている人達に自信をつけさせるようなアドバイスを『バディ』でできないものでしょうか？せっかく共通の世界を持っている人達がたくさん集まる場所的存在となっているのですから、もっとみんなを支えていけると思います。ただ「ハッピー」だけでは何も解決できないはずです。
>
> (BADI2000/2:379-380)

この投稿では、「ハッピー」によって解決できることは確かにありながらも、本当の「悩み」はこれで解決することはできないのではないかという疑問が吐露されている。その他にも、「ハッピーゲイライフっていう言葉に踊らされて、いつもいつも現実逃避をしていてはいけない」(BADI2004/5:365) と、強く批判するものもあるように、小倉が告白していた〈現実逃避〉という側面が批判されているのだ。こうした『バディ』の姿勢に対しては、読者から次のような疑問の投稿も寄せられた。

> 日本のどの雑誌を見たり、読んだりしても、ゲイに対しての差別などの事例が少ないように思うのは、僕だけなんでしょうか？やっぱり売れる雑誌を作るには『ハッピーハッピー』してないとダメなんでしょうね。アメリカでは、自由もあるけど差別もあると聞きました。本当でしょうか？ (BADI1999/1:400)

これらの投稿は必ずしも『バディ』のスタンスを完全に否定するわけではない。しかし読者は、ゲイ男性を取りまく「現実」と「理想」をいかにバランスよく扱うか、という点を議題に載せようとしていた(17)。ここで言う「現実」とは、社会には同性愛者に対する差別や偏見が蔓延っていること、その差別・偏見を原因とする悩みを多くのゲイ男性が抱えていることである。そして「夢」あるいは「理想」とは、差別や偏見などに悩まず（あるいはそれらがそもそも存在せず）、ゲイ男性が「ハッピー」であるということ、あるいは「ハッピー」になれるんだということである。『バディ』は「理想」に重きを置いていたが、読者の中には「現実」に重きを置き、それに面と向かうべきであると考える者もいた(18)。

---

(17) その他にも『バディ』を批判するようなコメントとしては、「こんにちは。一年振りに『バディ』を買いました。(…)『ハッピー・ゲイ・ライフ』というスローガンが自分にはどうもピンとこなかったので、あえて買わない、読まないを通してきたのです」(BADI2000/8:332)、といったものなどがある。

(18) 類似する「現実」と「理想」の対立が日本のレズビアン・フェミニズムにおいて生じていたことが、ある対談において語られている。1975 年ごろに登場した「政治的レズビアン」はレズビアンとしての素晴らしい面 (＝理想) を強調していたが、異性愛社会で生きていくことで現実に経験する「傷」を受け入れるべきだ (＝現実) と主張するフェミニストも存在し、この二つが対立をなしたという (出雲・原美・つづら・落谷 1997:60)。このような「現実」と「理想」の対立は、少なくとも同性愛に関する議論や運動において、重要な立脚点であった可能性がある。

「ハッピー」路線を進む『バディ』のスタンスに批判を投げかけていたのは、一般の読者だけではなかった。ゲイ雑誌『サムソン』の編者によっても猛烈な批判が投げかけられ、1997年8月号の『バディ』では、「激化するサムソンVSバディ　『人間のクズ』バトル！！」というタイトルで両者の主張がまとめられるほどでもあった。特に小倉と、当時の『サムソン』編者であった高橋との間に強い対立が生じていた。例えば高橋は、「『みんなにハッピーなゲイライフを送ってほしいから！』なんてことは微塵たりと考えてなくて、『銭が欲しいから』という理由のみでこの編集部で働くようになって1年あまり、思う(ママ)ですけど、やっぱりね、労働って、ダリ〜〜〜〜〜〜〜わ（銭は欲しいけどね）」(BADI1997/8:192)、と『バディ』のスタンスに対して皮肉を言う。また『サムソン』の編者の萩原が、「ホモ雑誌にもいろいろあるけど、編集の人間が読者に対してアドバイスしている雑誌もあるんです。ホモ雑誌の編集〔人〕なんて人間の○○なんですよ。アドバイスなんて絶対できないはずなのに」(BADI1997/8:192) と、暗に『バディ』を批判し、それに対して高橋は、「ホモ雑誌編集者は人間のクズ？あんまりだよ、萩原さん！でも、萩原さんが本当に言いたいこと、僕にはわかるよ。ホモ雑誌の主役はあくまで読者なんだってこと。僕らが偉そうなこと言うなんて間違ってる。一人一人の人生がそれぞれ大切なんだ。それを他人がどうこう言えるもんじゃない…そういうことだよね？」(BADI1997/8:193) と、ゲイ雑誌は読者が中心であり、編者は表に出るべきではないというような主張をしている。しかしもっとも重要な点は、高橋がこの記事全体に寄せた総括のコメントにあると思われる。

> 高橋れす(ママ)。バディ誌の存在がなかったら今のゲイの在り方は全然違っていたでしょう。心から尊敬しています。しかしゲイの総合誌バディ様に対して、フケデブ専誌サムソンは何やっても『変態！』と笑われるのがオチ。ほなうちらは過激にやるで！と意を決して、本当は繊細な少年が心を痛めながらやってるのです（ハメ撮りとか）　(BADI1997/8:192)

つまり、『サムソン』からすると『バディ』は極めて「普通」なのであって、その「普通」への立脚によって『バディ』の「ハッピー」は達成されていたのだ。「普通」であることを否定しながらも、十分「普通」のゲイのイメージを形成する『バディ』と、特定のフェティシズムに偏った「変態」の『サムソン』の間には、マイノリティ内のマイノリティという問題も生じていたと言える。「普通」であることに立脚できるという特権性が『サムソン』によって批判され、これが両者の間で「幸せ」をめぐる対立を生み出していた。

第2期の分析を要約する。第2期では「ハッピー・ゲイ・ライフ」というキャッチフレーズによって、「ゲイ」としての自己肯定感を形成しようと務めていた。ここで強調されていたのは、「ゲイ」というアイデンティティと、「ハッピー」という「夢」であった。『バディ』は「ゲイ」であることへのこだわりを強め、読者を「ゲイ」という共通項によってまとめ上げようとしていた。そして、「ウソ」であり〈現実逃避〉である「ハッピー」を戦略に、「ゲイ」として生きることのポジティヴな面を強調しつつ、「ハッピー」である／になれるという「夢」を読者に抱かせようとしていた。また具体的な「生き方のゲイライフ」は事例の紹介に留め明確に提示しない基本方針を取りながらも、「わかりやすい」ものとして「結婚」をモデルとして提示し始めた。この背景には、ゲイ男性の多

様性を考慮しつつも、それでも「わかりやすい」モデルを欲するというジレンマと妥協があった。また「悩み」という点に注目すると、第1期までは少なからず「悩み」を解決することによって「ハッピー」となることが目指されていたと言えるが、第2期からは「悩み」があたかも無いかのような幻想を抱かせようとしていた。つまり、第1期は「幸せになる」ことを目指していたが、第2期では「幸せである」と幻想していたのだ。

4.「現実」との衝突と「男」の生き方 ── GAY LIFE MAGAZINE (2001-2008)

4-1 「ハッピー」の現実化

2001年1月号からキャッチフレーズが「GAY LIFE MAGAZINE」へと変わった。この時期からは、これまで「夢」であった「ゲイライフ」が「現実」のものへ変化したことを前提に誌面作りが行われるようになる。キャッチフレーズの変更については第2期の最終号で次のように説明されている。

> 「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」というキャッチ・フレーズは、当時決して「ゲイ＝ハッピー」ではなかった状況で、少しでもゲイが前向きに生きていけるようにという願いをこめ、意識的に打ち出したものでした。／2000年8月27日、過去最高の2500人が参加したパレード〔東京レズビアン&ゲイパレード2000〕が成功し、その後のレインボー祭りも、たくさんの人が感動して涙を流すほどの歴史的イベントでした。あの〔レインボー祭りでの〕打ち上げ花火は、あれ以上は無いくらいに劇的に「ハッピー・ゲイ・ライフ」を象徴し、新しい時代の訪れを告げるものでした。／2001年1月号で、『バディ』はちょっとだけリニューアルします。「僕らのハッピー・ゲイ・ライフ」はあの打ち上げ花火とともに役目を終え、「GAY LIFE MAGAZINE」がそれにとってかわります。読者の皆さんの大半は、ゲイである自分を素直に受け容れ、楽しくゲイライフを謳歌していると思います。ある意味でもう、ハッピーは当たり前になったのです。これからは、ひとりひとりのゲイライフがテーマです。『バディ』は、それぞれのゲイライフをサポートし、素敵なライフスタイルを提供する総合エンターテインメント&情報誌として、これからも皆さんといっしょに進んでいくつもりです。
>
> (BADI2000/12:46)

パレードについては第4章で詳しく取り上げるが、ここで簡単に紹介しておく。東京で1994年から開催されてきた「東京レズビアン・ゲイ・パレード」は1996年に実行委員と参加者の間にトラブルが生じたことにより、1997年から1999年までは実質的に休止状態にあった。そのパレードを復活させ、大成功を収めたのが、砂川秀樹を長とする実行委員会であり、それが上記引用に登場する2000年の東京のパレードである。また同年から新宿二丁目では「新宿二丁目振興会」によって「レインボー祭り」というイベントが開催されるようになった。これまでは主にゲイバーなど建物の中で交流を行ってきたゲイ男性らが、新宿二丁目の路上をイベント会場として「祭り」を開催し始めた。パレードと同じようにゲイ男性が堂々と公共の場でゲイとして祭りを開催することはこれまでなく、そこにはゲイ男性を取り巻く新たな心性が生じていた。そしてこれらの出来事によって

「日本に真のゲイ・コミュニティが誕生したのだ」(伏見 2004:196) とも言われた。第 3 期からの『バディ』は、この出来事をひとつのきっかけとして、新たな方向性のもとで誌面作りを始めたのである。

キャッチフレーズ変更の説明によると、「ハッピーは当たり前」になったことにより、「ゲイライフ」はもはや「夢」のものではなく、「ひとりひとり」が現実に送ることのできるものとなった。ここで具体的に現実のものとなったのは、多くのゲイ男性が「ゲイである自分を素直に受け容れ」ているという事実であり、つまりそれは「自己肯定のゲイライフ」のことである。第 3 期の初号でも「今後は『ハッピー・ゲイライフ』を基本にしながらも、ゲイライフを多角的に捉えた、より充実した誌面作りをめざします」(BADI2001/1:68) と宣言されるが、この宣言が意味するところも、肯定的なアイデンティティの存在を前提に具体的な生き方について多角的に捉えていくという姿勢であろう。ハッピーゲイライフが当たり前となったという言明は、2003 年 12 月号でも、「10 年の間にゲイの世界は驚くほど様変わりし、『ハッピーゲイライフ』が当たり前になった感があります」(BADI2003/12:31)、と繰り返される。このように第 3 期では読者がすでに「ゲイになる」ことを完了しているという前提の上に実践が生じる。シェーン・フェランは「(ビ) カミング・アウト」という言葉で、「特定の歴史的なコンテクストの中にあるコミュニティと言説への参加によって、レズビアンやゲイであることを認識してゆく」こと、「それ以前には存在していなかった自我――レズビアンあるいはゲイとしての自我――を形成すること」(Phelan 1993=1995:227) を表現している。この言葉を参考にするのであれば、多くのゲイ男性がコミュニティに参加し、「ゲイ」であることを引き受ける (ビ) カミング・アウトはこの時点で既に終了したとみなされている。第 2 期までの『バディ』が「ゲイ」であることを強調し、読者を「ゲイ」としてまとめ上げることによって、コミュニティの形成と自己肯定感の形成は達成されたと捉えられているのである。

よって第 3 期以降、『バディ』の編者はゲイであるという自己肯定と共同体の存在を前提に誌面作りを行うため、その実践に大きな変化が生じる。この時期では第 2 期のように自己肯定の獲得を手助けするという実践は不必要となり、「どんどん多様化・細分化する指向やライフスタイルに応えられるよう、『GAY LIFE MAGAZINE』バディは、これからも柔軟に進化を遂げていきます」(BADI2003/1:376) と繰り返し言われるように、実践の重点を具体的なライフスタイルやライフコースの提示、つまり「生き方のゲイライフ」に移行させていくのである。

「ゲイライフ」が現実のものとなったことで、より多くの「生き方のゲイライフ」の事例・情報が紹介されるようになっていく。例えば、2004 年 1 月号から 1 年間連載された「はなまるゲイライフ」の紹介文には、「ハッテンや恋愛も楽しいけど、その先にあるゲイライフを充実させていくことが、これからのゲイにとって大事な課題。この連載では、各分野の専門家をゲストに迎え、より豊かなゲイライフを送るためのお役立ち情報をご提供します。さあ、アナタも、くらし上手な『はなまる』ゲイさんになりましょう」(BADI2004/1:94) とある。そして内容としては、「ファイナンシャルプランニング」、「保険 (国保、生保)」、「貯蓄」、「起業 (会社経営)」、「就職、転職」、「若ゲイのライフプランニング」、「親へのカミングアウト」、「ゲイと政治」、「ゲイのメンタルヘルス」、「ゲイの老後、老親の介護」、「学校教育とゲイ」、「ゲイの旅行」といった、第 2 期までと比べてもより一層幅広いトピックが取り上げられている。もちろんこれらのトピックがこれまで一切取り上げられなかったわけではないが、具体的にゲイとして生きるにあたって直面する諸問題を連載として取り立てて扱

うところにこの時期の特徴があるだろう。

4−2 「結婚」の強調による「現実」の表面化

ゲイライフを多角的に捉えるとする第3期でも、「生き方のゲイライフ」としての結婚への注目は継続されている。むしろ、これまで以上に注目され、強調され始めたとも言える。例えば、2003年2月号の「レポート――愛の最前線 教会で結婚式を挙げたカップル」という記事では、教会で結婚式を挙げたゲイカップルが取り上げられ、大塚隆史によるこのカップルへのインタビューも掲載されている。2004年4月号でも「新型・ゲイの結婚披露パーティ」という記事で、結婚披露宴を行ったゲイカップルが取り上げられ、2004年10月号でも「カップルさん いらっしゃい！」という特集記事で、「10 周年結婚披露風パーティ」を行ったゲイカップルが取り上げられている。それぞれの記事では結婚式・披露宴の様子が写真とともに紹介されており、第1期では「夢」であった結婚が「現実」のものとして可能となりつつある様子を映し出している。例えば、「新型・ゲイの結婚披露パーティ」の見出しでは次のように語られる。

> 今年は、新しいゲイライフを提案するというテーマを掲げたバディ。でもゲイライフって何だろう？そんな素朴な疑問のひとつの答えが、ゲイの結婚。近頃、アジアでも同性結婚に近い法律ができるかも、という話題で持ちきりだ。 (BADI2004/4:35)

「ゲイライフって何だろう？」という発言は、これまで必ずしも明確なモデルが提示されてこなかったことを暗示しているが、具体的かつ現実的なものとして同性婚が語られていることに注目しよう。ここでも第2期のように「わかりやすい」ゲイライフの具体的事例として結婚が取り上げられていると言えるが、第2期のように「夢」として語るのではなく、アジアというより身近なコンテクストで同性婚が話題となっていることを引用することで、結婚というライフコースが日本でも近い将来、ゲイ男性が現実に選択できるようになるかもしれないものとして提示されるのである。もちろんこの時はまだ日本でパートナーシップ制度も存在していなかったため、実際には未だに「夢」ではある。しかし、それでも結婚を現実可能なものとして捉える姿勢がこの時期に生じつつあったと言えるだろう。2004年2月号の恋愛特集でも、男同士で暮らすための部屋選びや結婚・子育てについてのインタビューが掲載され、結婚の現実化を図っていることが窺える。

また2005年2月号で組まれた恋愛特集では、「結婚しようよ 世界は同性婚ブーム！！」という記事も執筆されている。世界の同性婚事情についてのレポートや、日本人とドイツ人で国際結婚をしたゲイカップルへのインタビューが掲載されており、これも同性婚を日本（人）でも現実的なものとして捉えようとする特集として解釈することができる。しかしここで注目したいのは、この特集を組んだ編者が編集後記で語っていることである。その編者は「恋愛特集の中で、一歩進んだ同性婚というテーマを担当しました。正直、ネタがなかったゲイシーンで、久々にキタ～気がします」（BADI2004/2:700）と語るが、ここで注目したいのは、ゲイシーンにおける「ネタ」が少ないという状況で、良い「ネタ」として同性婚が選択されているということである。ネタがないということは、提供するほどの情報がないということ、あるいは提供する情報がマンネリ化しているということと言えよう。こうした状況の中で、「良いネタ」として結婚が取り上げられているのだ。つまり、

ただ単に同性婚が現実的なものとして捉えられ始めたから結婚の記事・特集が増加したのではなく、提供する情報に目新しさがなくなりつつある状況で、それでも結婚はゲイ男性の注目を引く「ネタ」であるからこそ、より強調されるようになっていったのである。「ネタ」がない状況でも同性婚が「良いネタ」として取り上げられ続けるのは、編者が結婚の話題はマンネリ化せず、もっとも「わかりやすいゲイライフ」としてゲイ男性の関心を集め続けるものとして捉えていたからなのだ。

しかし、いくら結婚を強調し継続的に取り上げるとしても、中心的な関心は「夢」を経た後の、「現実」の生き方であることに変わりはない。第3期には結婚を現実に引き寄せて捉えるのと同時に、結婚を非現実として捉える姿勢も見え始める。結婚が幾度もモデルとして強調され「生き方のゲイライフ」と結びつけられるとき、その反動として編者自身が結婚という選択肢からの距離を感じ始めたと思われる。例えば、恋愛特集が組まれた号の編集後記で、ある編者は次のように語る。

> 上京して丸5年が経ったけど、いずれは地元の北海道に帰ることを決めている私（…）。でも何度思い描いても浮かぶのはひとり暮らしの中年像。同性婚？パートナー？反対でも賛成でもないんだけど、いまだ自分のことに置き換えて考えることができなく少し歯がゆいです。幸せそうな独り身ゲイライフを暗中模索。（BADI2004/10:677）

この語りには、結婚やパートナーシップといったモデルを具体的な選択肢として捉えることのできない心性があらわれている。結婚を積極的に取り上げ続けることが、かえって人々に〈浮いた感じ〉を与えている可能性もある。また伏見憲明も、「日本で同性婚を求める声はまだそれほど多くない（…）。それは日本のゲイ＆レズビアン・ライフというものがまだ未成熟で、法的な保護を必要とするようなパートナーシップが層となって存在しているわけではない、という現実」（BADI2004/5:84）があることを指摘している。『バディ』が「同性婚をしたいと思いますか？」というアンケートを行った際にも、「したい」が332人、「したくない」が419人、「わからない」が456人、「現在、養子縁組をしている」が9人という結果（有効回答数1216人）となり、「今後、日本全国で議論されるであろう『同性婚問題』。今の段階では、したくないとわからないといった意見が多いようだ」（BADI2004/12:41）とまとめられている(19)。

このように、編者が結婚を現実に引き寄せて捉え始め、それを第2期よりも一層強調する一方で、結婚が必ずしも多くのゲイ男性が求める現実的選択ではない状況も浮き彫りとなり始める。言い換えるのであれば、結婚を現実のものとして捉える心性が生じていたとしても、もうひとつの「結婚ができない」という制度的現実を直視しなければいけない心性も生じていた。いくら世界の同性婚について触れようとも、日本では同性婚が実際問題として制度的に現実のものではなく、そもそも結婚を求めるゲイ男性が多いわけではない。となると、『バディ』は結婚に代わる〈より現実的〉なライフスタイルも模索しなければいけなくなる。そこで特に〈問題〉となり、注目され始めたのは、三十代以降のゲイ男性である。

(19)　このアンケートは手続きなどが明確化されておらず、統計的にはあまり意味をなさないが、同性婚を積極的に望む人が多いわけではないということが結果として言説化されていることに、注目する意味がある。

4-3　三十代ゲイ男性への注目 —— ゲイライフの真正性

第3期から三十代のゲイ男性に注目した記事が登場し始める。2005年2月号からは「30代からのゲイライフ」という連載記事が登場した。2006年1月号で終了するが、その後「オトナサイズ」という後続連載が登場している。「30代からのゲイライフ」のリード文では、「これは、30代以上の『素敵なゲイさん』のライフスタイルをご覧いただき、ワンランク上のゲイライフを送るためのヒントを見つけていただくための連載です」(BADI2005/2:116)と記され、編者も「カッコいいオトナのゲイたちを毎月見せていきたいと思います」(BADI2005/2:701)と、その連載の目的について語っている。特集記事としても、「PRIME GENERATION」(2003年4月号)、「働くオトコの快楽事典」(2004年4月号)、「カッコいい年の取り方、教えます。」(2005年7月号)、「30代ゲイが幸せになる方法」(2007年2月号)、「30代の魅力スタイル」(2009年6月号)といった特集が登場し、三十代以降のゲイ男性の生き方が特集されるようになる。これらの特集から約十年進んだ2016年9月号に「OVER40〜大人の魅力〜」という特集記事もあることから、この時期に生じた三十代のゲイ男性への注目は普遍的な三十代という世代というよりは、1970年代頃に生まれ、この当時三十代であったゲイ男性とも言えるだろう。類似する連載として「リーマンクラブ」(1999年から2006年まで)もあるが、これは第1回の記事で「今月号からスタートした『リーマン・クラブ』では、オフィスワークに携わるゲイのライフスタイルや情報をご紹介！キミのデイリーライフをもっと楽しくしようよ！」(BADI1999/7:168)と言われるように、就職しているか否かという軸でゲイ男性の間に境界線を引くものであり、第3期から目立ち始める三十代ゲイ男性への注目とは少々異なる。

三十代のゲイ男性についての記事では、「本当」の、「もっとも充実」した「ゲイライフ」、そして「本当にシアワセ」な「ゲイライフ」など、その真正性が語られ始める。そして次の引用にあるように、三十代以降のゲイ男性が獲得できるとされる経済的自立・安定が真正性の条件となる。

> 若さこそが絶対的な強み、みたいに思われがちなゲイの世界だけど、実は30代がいちばん楽しいって知ってた？だって、お金にも余裕があるし、年上からも年下からもすごーくモテるんだ。(BADI2003/4:21)

> 若いだけでちやほやされる時期なんて、長い人生の中では一瞬の夢のようなもの。自分の力で稼いで人生を切り開いていく 30 代こそ、本当にシアワセなゲイライフを送るチャンスに恵まれているのではないだろうか？(BADI2004/4:20)

> SEXも恋も遊びもひととおり経験して、仕事も経済力も安定を見せはじめる30代。ゲイにとって、30を過ぎてからこそが、最も充実したゲイライフを営むチャンスなのではないでしょうか？(BADI2005/2:116)

このように、「最も充実したゲイライフ」が送れるのは三十代以降であると想定されるようになる。以上の語りに表れている幸せや充実は「自分の力で稼」ぐことや「仕事」、「経済力」の「安定」という、男性的なライフスタイルと結びつけられる。ときにはこのような傾向がエリート主義的かつ非現実的・理想主義的な側面を見せることもある。「働くオトコの快楽事典」は、その特集タイト

ルの上に「EXECTIVE GAY STYLE」(BADI2004/4:20) と記されており、ゲイ男性のライフスタイルをエリート性と結びつけるような特集にもなっている。「カッコいい年の取り方、教えます。」では見出しに次のような文章があり、その点が顕著に表れている。

> 先月号の「心の不安」特集でもお伝えした通り、ゲイとしてどのように将来設計していったらよいかわからず、ストレスや不安を抱え、心を病む人が多くなっています。時代の閉塞感とかもあるでしょうが、やはり、カッコいい大人のゲイのロールモデルが不足しているということが言えそうです。／そこでこの特集では、仕事で成功してお金やステイタスを持ち、かつプライベートも充実し、ゲイシーンにも貢献し、若い人からも慕われているようなタイプのカッコいい大人のゲイたちを紹介していきます。／見た目にとらわれた性愛ゲームだけではなく、中身を充実させていくことが「シアワセなゲイライフ」につながるし、しっかりした生き方をしていけば、きっと将来、ゲイならではの楽しいシニア・ライフが待っているハズです。 (BADI2005/7:75)

ここで具体的に提示されるモデルは、「仕事で成功してお金やステイタスを持ち、かつプライベートも充実し、ゲイシーンにも貢献し、若い人からも慕われているようなタイプのカッコいい大人のゲイ」であるが、このような生き方は一部の人しか実現することができないだろう。こうした非現実的でありながらも理想的なモデルを提示することは、第2期までの「夢」としての「ゲイライフ」の名残にも見える。

4-4　独身という「現実」—— 男性性によるエンパワーメント

ではなぜこのように三十代以降のゲイライフが真正性とともに語られるようになるのであろうか。現実的であろうと非現実的であろうと、このようなモデルが提示されるという事実に注目すると、重要なのは次のような語りである。

> つい 15 年前は、カミングアウトどころかゲイの友人にさえ本名も告げられなかった時代でした。(…) 大半のゲイが、ゲイとしての生活を送り始めたのは本当に最近のことなのです。今までとは違う新しい世界は、言いかえれば道なき荒野。ライフスタイルの開拓者となった日本の 30 代ゲイは道しるべの少ないリスクと不安を乗り越えて、自分たちの目的地を見つける必要があるでしょう。 (BADI2007/2:299)

1990 年代から「ゲイ」や「ゲイライフ」という新しい言葉が積極的に用いられ始め、それまでとは違うアイデンティティが模索され始めた。ゲイとして生きていくためのモデルを作り上げようとする試みは暗中模索に他ならず、「リスク」と「不安」が伴うものであった。しかしその不安は、第2期の『バディ』では「ハッピー」というマジックワードによって覆い隠されていた。だが第3期から編者は「現実」を見、生き方を模索しようとしていた。ではその「現実」を見ることによって直面しなければいけなくなった「リスク」と「不安」とは一体何か。それは次の語りに顕著にあらわれている。

周りのノンケはどんどん結婚したり子供を作ったりして、順調な人生を送っているように見える。自分はどうしたらいいんだろう、って考えさせられる。20 代前半はノンケも同じように遊んでるけど、30 代くらいからは、「あ、アタシ周りと生き方が違う…」って違いに気づくだろうね。 (BADI2007/2:306)

この語りの要点は、二十代までは同性愛者であろうが異性愛者であろうが似たような生活を送るが、三十代に入ると異性愛者は結婚をするという認識、そしてゲイ男性は結婚をしないために主流から外れ、生き方の違いが目立ち始めるという認識である。第 2 期では結婚が「夢」として提示されていたが、それはあくまでも「夢」であった。第 3 期に入ってより「現実」の生き方が注目されるとき、そこにあるのは同性との結婚ではなく、独身として生きていくという「現実」なのである。つまり、「現実」として向き合わなければいけない生き方が、結婚ではなく独身としての生活であることに直面したときに、編者は経済的自立・安定の獲得を明確に打ち出し始めたのである。第 3 期の『バディ』は、1970 年代以降に生まれた三十代以上のゲイ男性が、独身として生きるという不安を認めていた。そして彼らの「ゲイライフ」を経済的自立・安定と結びつけることで具体化しながら、それを「最も充実」(BADI2005/2:116) したもの、そして「本当にシアワセ」(BADI2004/4:20) なものとして語ることによって、彼らに対してエンパワーメントを行っていたのである。しかしこうした不安の解消は、経済的自立・安定という、「男」としての「わかりやすい」ライフスタイルを提示することによって行われていた。つまり、生きることの不安を、「男」であるというジェンダーに寄り掛かることによって解消しようとしていたのである。「30 代からのゲイライフ」で「心の不安」が取り上げられた時もその専門家は、「とりわけ、幸せを追求するロールモデル（こういう人になりたいと憧れる対象）が、同性愛者の場合、絶対的に少ない（社会的地位の高いオープンリー・ゲイがあまりいない）ので、『なりたい自分』が見えなかったり、アイデンティティの問題にぶつかりやすいと言えます」(BADI2004/9:118) と言い、そのロールモデルの具体例として括弧で捕捉されるのは「社会的地位の高いオープンリー・ゲイ」であった。「生き方のゲイライフ」の開拓が、最終的には「わかりやすい」ロールモデルとしての「男」の生き方となり、規範に沿う生き方としてしかあらわれなかったことは、初期の『バディ』と比べると、方向性が大きく違っている。しかし、暗中模索の末にどこにも行きあたらなかったゲイ男性をもっとも容易にエンパワーメントするためには、こうした「男」としての生き方にすがるしかなかった。

4-5　魅力の年齢差 —— 若ゲイと三十代ゲイの庇護関係

以上のエンパワーメントで重要となるもうひとつの背景に、若さと魅力の関係がある。恋愛や性的な関係における魅力が若さと結びつけられるのは、ゲイ男性の間に限らず広く社会で生じていることではあるが、ゲイ男性の間で（あるいは少なくとも『バディ』の中で）この結びつきがより認識されるようになったのは、この第 3 期あたりからである。〈ゲイライフの真正性〉の言説を再度見ると、若さと魅力の結びつきもキーワードとなっていることがわかる。「若いだけでちやほやされる」(BADI2004/4:20)、そのため「見た目にとらわれた性愛ゲーム」をする、結果として「SEX も恋も遊びもひととおり経験」(BADI2005/2:116) する。このように若さと魅力が結びつくことにより、

恋愛・性愛を存分に享受できるのが二十代までとされるのだ。『バディ』でそれが顕著にあらわれる、あるいは『バディ』自体がそれを積極的に促していたと言えるのが、2001 年から企画されてきた「ナイスバディグランプリ」である。

「元気なイケメンを応援するバディが新しいスターを発掘する『ナイスバディグランプリ』」（BADI2002/7:21）とは、いわゆるミスコンテスト／ミスターコンテストのような企画である。読者は『バディ』のグラビアに登場した人物の中から「一番イイ男だと思うモデル」を選択し、投票する（BADI2002/7:23）。エントリーの記事には、グラビア写真とともにプロフィール、簡単なインタビューなどが掲載されるが、主に外見の魅力によって判断されているだろう。エントリーの条件は「18〜30 歳の健康的で容姿・体格に自信がある国内在住のゲイ男性の方」(BADI2002/7:23) であり、二十代までの若さが最大の条件になっている。こうして、三十歳という年齢を境界線にしてゲイ男性が切り分けられていく。

この企画に対しては、『バディ』の中でも〈アンチ〉と言える特集が 2005 年 11 月号で企画されている。「裏ナイスバディを探せ！！」と題されるこの企画は、その趣旨が次のように紹介される。

> ナイスバディグランプリの条件…30 歳未満の容姿にある程度自身のある方、ってザケんなゴルァ〜ッ！！こちとら 30 超えてるブスなんだよッ！！と、お嘆きの皆様…。そりゃ、ナイスバディ達はうらやましいですよ、カッコいいですよ、チヤホヤされますよ。でも、そういうのはあくまで魅力の 1 ジャンルってことです。まぁ確かにすごい幅効かせてるジャンルですが。ゲイ業界で注目を浴びているスゴイ人達ってのは、他のジャンルにもいーっぱいいるんです。今月号であえて言うなら「裏ナイスバディ」とでもしましょうか。面白さ・発想力・技術・行動力、それぞれの武器を利用して輝いているゲイ達の生き様をクローズアップしちゃいましょう！ (BADI2005/11:55)

『バディ』の編者によって『バディ』の企画が批判（？）されるという滑稽な企画ではあるが、魅力と若さが結びつくことに対する反動としてこの特集が企画されていることがここでは重要な点である。この点を考慮するのであれば、三十代のゲイ男性が経済的自立・安定によってエンパワーメントされていくのは、若さと見た目による魅力が重視される恋愛市場からこぼれ落ちる彼らに、それとは異なる〈社会的地位〉という〈大人の魅力〉を付与することによって、年齢に関係なく「モテ」を維持する試みでもあった。

ここで重要な存在となるのが「若ゲイ」であり、「若ゲイ」と三十代以上のゲイ男性との関係性である。「若ゲイ」とは若いゲイ男性を指し示す言葉であり、主に二十代までのゲイ男性を指している。ゲイ男性間の世代差を取り上げる記事は 1990 年代から存在しており、例えば 1999 年 7 月号では「オバサン・ゲイ VS コギャル・ゲイ」という特集が組まれている。「オバサン・ゲイ」は「推定年齢：30〜45 歳」であり「ゲイへのこだわりが強い」とされ、対する「コギャル・ゲイ」は「推定年齢：18〜22 歳」で「自分へのこだわりが強い」とされている。第 3 期になってからも「若ゲイ、マル裸！」（2002 年 11 月号）や「若ゲイの主張」（2005 年 6 月号）といった特集によって、若ゲイがどのような考え方や生き方をしているのかが探られる。「若ゲイ、マル裸！」は、「若ゲイ」の「本当の姿」を暴こうとする記事だが、「若ゲイ」たちのイメージが主にセックスと結び付けられている。

高校生、学生、フリーター…まだ世間に汚れていない若ゲイたちは、いったいどんなゲイライフを送っているの？コギャルとか援交とか、ありがちなイメージで語られてきた若ゲイたちだけど、ここらでその本当の姿を、たっぷりご覧いただきましょう。 (BADI2002/11:35)

援交なんて当たり前！とか、カレシがいても1000人斬り！とか、そういうイメージで語られがちなイマドキのゲイたちだけど、ホントのところはどうなのか？ (BADI2002/11:45)

イマドキのゲイたちは、若いうちからヤリまくり、バンバンハッテン場で遊んでたり、セフレ作りまくってたり、ケツマンコおっぴろげなセックスライフを送っているのだろうか？ (BADI2002/11:48)

以上の言説では、若ゲイが性的に奔放でセックスにしか関心がないかのように語られる。別の捉え方をするのであれば、三十代のゲイ男性とは違い、ゲイとしての具体的なライフスタイルについては関心のない、未熟な存在としてイメージされるのである。三十代のゲイ男性は「男」としてのライフスタイルによってエンパワーメントされていたが、それは同時に若い世代へのロールモデルの提供にもなっていた。「働くオトコの快楽事典」では編者が編集後記で「今年のオトナ特集は『働く』がテーマ。冒頭に登場していただいた3人は、本当にステキな30代を過ごしていて、若い世代には将来の理想像として映ったのでは？（…）ゲイライフをより楽しむきっかけになればと思います」(BADI2004/4:698) と語っており、言い換えるのであれば、三十代が若い世代に生き方を教えるという関係性が形成されていたと言える。

これに対し若ゲイは三十代のゲイ男性を頼る存在として描かれる。例えば、「若専30代 vs 30代専若ゲイ」(2003年4月号) という合コン企画では4対4の合コンが行われている。見出しに、「最近急増中と言われる『30代専』。30代好きな若ゲイたちは、一体30代のどこに魅力を感じているのだろうか？」(BADI2003/4:35) と記されているように、三十代ゲイ男性の魅力や、若ゲイによる三十代ゲイ男性への憧れを土台とした企画になっている。また「『30代大好き！』若ゲイ座談会」(2004年4月号) は「20代のゲイは同年代好きというイメージがあるかもしれないが、そうとは限らない。30代の魅力を思う存分語ってもらい、モテる30代像が明らかになったこの座談会。若専なアナタは必読！」(BADI2004/4:30) という企画である。参加者の4人の二十代のゲイ男性は、三十代のゲイ男性を、「余裕があるように見えますよね。」「やっぱ頼れるし、それは経済的な部分もあるけど、30代って、ちゃんと経験してる人って、ちょっとやそっとじゃびくともしないから。すげえ、頼りがいがある。」「やっぱ30代の方が熟してるじゃない？オトナの体。」(BADI2004/4:30) と、精神面、人生経験、性的な魅力・成熟度などから彼らの魅力を語っている。

以上の点を考察すると、三十代ゲイ男性と若ゲイの間には、頼られる／頼る、教える／教えられる、成熟／未熟、大人／子供といった師弟関係あるいは庇護関係のようなものが形成されていると言える。この関係性には二つの側面がある。ひとつは、三十代を過ぎて魅力も「モテ」も失うことで恋愛が困難になるゲイ男性に、三十歳を過ぎてからは大人としての魅力が備わることを提示することによってエンパワーメントをするという側面である。そしてもうひとつは、ゲイ男性の恋愛関

係内に師弟・庇護関係を持ち込み、その中で三十代のゲイ男性を〈男性的〉立ち位置に置くことで、「男」としてのエンパワーメントを行っているという側面である。つまり、若さとは違う〈大人の魅力〉によって「モテ」を維持し、そして若ゲイに生き方を教えるという〈男性的〉立場を確保することによってエンパワーメントをするという、二つのことをここで達成しようとしていると言えるのだ。

第3期の分析を要約する。第2期では結婚が「夢」として提示されていたが、それはあくまでも「夢」であった。第3期に入って、より「現実」の生き方が注目されるとき、そこにあるのは同性との結婚ではなく、独身として生きていくという現実であった。そして、現実として向き合わなければいけない生き方が、結婚ではなく独身としての生活であることに直面したときに、編者は経済的自立・安定を〈本当にしあわせなゲイライフ〉として明確に打ち出し始めたのである。第3期の『バディ』は、1970年代以降に生まれた三十代以上のゲイ男性が独身として生きるという不安を認め、彼らの「ゲイライフ」を男性的な経済的自立・安定と結びつけることで具体化しながら、それを「最も充実」(BADI2005/2:116) したもの、そして「本当にシアワセ」(BADI2004/4:20) なものとして語ることによって、彼らに対してエンパワーメントを行っていた。また魅力の年齢差が認知され始めたことによって、見た目ではない社会的地位によってゲイ男性としての魅力を維持しようともしていた。そして「本当のゲイライフ」を教える立場、人生の経験者として頼られる立場を維持することによって、三十代以降における恋愛可能性も示されていたのである。しかしこうした不安の解消は、主に経済的自立・安定という「男」としてのわかりやすいライフスタイルを提示することによって行われていた。つまり、生きることの不安を、「男」であるというジェンダーに寄り掛かることによって解消しようとしていたのである。

5. ゲイアイデンティティとコミュニティの維持 —— Bάdi UP! (2009-2019)

5-1 『バディ』の「UP!」とコミュニティの活性化

第4期の『バディ』はこれまでの「GAY LIFE MAGAZINE」というキャッチフレーズを保ちながらも、誌名の『バディ』に「UP!」を添えるようになった (図1-2)。2008年12月号でリニューアルの予告が次のようにされている。

> 2009年1月号をもちまして、『Badi』が15周年を迎えます。読者の皆様に感謝と新たな決意を込めて、大リニューアルを行います！「SIZE UP!」「QUALITY UP!」「GAY LIFE UP!」と、全て上向きでトライします！！ (BADI2008/12:354)

第4期の第1号となる2009年1月号では、上記の内容がより詳しく次のように記されている。

> SIZE UP! 魅力的で、刺激的な写真を大きなサイズでお届けします。カッコいいけどエロく、エロいけどカッコいい、そして読みやすく、手に取りやすいゲイ雑誌の新規格です。



図 1-2　2008 年 12 月号（左）と 2009 年 1 月号（右）の『バディ』表紙

> QUALITY UP!　15 年の歴史を踏まえ、より洗礼(ママ)された誌面作りに挑戦します。伝統の良さを継承しつつ、斬新で感動的なグラビア、特集、情報提供を行っていきます。
> GAY LIFE UP!　今でも満足！？いや、今よりもさらに快適で便利なワンランク上のゲイライフの実現を目指し、様々な試みにトライ・協力していきます。　(BADI2009/1:3)

「SIZE UP!」はその表現通り、雑誌サイズの拡大を意味している。これまでは A5 サイズ（148×210mm）であったが、B5 サイズ（182×257mm）へと拡大された。この拡大によりその他多くの一般雑誌と同等のサイズとなり、『バディ』が毎月掲載してきたグラビアの質も上がったと言える。物理的・視覚的に雑誌全体の印象を変えることにもなるこの新装は、『バディ』の歴史の中でも大きな転換と言えるだろう。対して「QUALITY UP!」と「GAY LIFE UP!」は、内容面でゲイ雑誌としての質をより向上させること、より良い「ゲイライフ」を提供することを意味している。しかし、より良い情報を提供することは、これまでの『バディ』でも常に目指されてきたことであるとも思われる。ではなぜこの点が改めて強調されるようになったのか。新装の背景として、次のことが記されている。

> 創刊 15 周年目という節目に、バディは大きく変わります。それは今、ゲイシーン全体が大きな変革期であり、我々バディスタッフの意識変化も必要な時期であるからです。
> (BADI2009/1:3)

「ゲイシーン全体が大きな変革期」であることが新装の理由とされているが、では具体的にはどのような変革が生じているのか。編集長が編集後記で語っている次の一節に、それが表れていると思われる。

> 今回の取材でゲイがゲイ雑誌に対して消極的であることの現状を感じ、寂しい思いをしました。それもゲイが多数出演するイベントにも関わらずのことです。ゲイだからこそ、ゲイに

関することへの協力に前向きでいられる心持ち、そうした社会環境が整うこと、これも新しいバディの使命だと思っています。 (BADI2009/1:406)

この語りに表れる悲壮感には、二つの側面がある。ひとつは、ゲイ男性がゲイ雑誌に対して消極的であること、つまり、情報の収拾源がインターネットへと移行したことによる、ゲイ雑誌自体の需要の低下である。例えば編者は、「ネット時代に押され、ゲイコミュニティの衰退が囁かれる今日、バディも相次ぐ雑誌離れに奮闘しています」(BADI2011/12:284) と、ゲイ雑誌自体が求められなくなりつつある状況について触れている[20]。この点は他のゲイ雑誌にも当てはまり、2004 年に『薔薇族』が一度廃刊した際に、編集者であった伊藤文学は、「一番の原因は、ここ 4、5 年のインターネットや携帯電話の急速な普及でしょう」(伊藤 2004:25) と語る[21]。実際に『バディ』の頁数の変化も見てみると、創刊時から現在までの間にその総数は大幅に減少していることがわかる (図 1-3)。図中でもっとも頁数が多かったのは 1998 年 12 月号の 774 頁であったが、2016 年には 180 頁まで減少している。雑誌サイズの変更により 1 頁の情報量が増加したことも理由のひとつであろうが、それを加味しても頁数が減少傾向にあった。

そしてもう一点は、ゲイであるということ自体へのこだわりや関心の低下である。ゲイについて (ゲイであることについて) を誌面づくりの核としてきたゲイ雑誌への興味関心の低下は、同時にゲイであることへの関心の低下としても編者によって受け取られる。「ゲイだからこそ、ゲイに関することへの協力に前向きでいられる心持ち」を作りあげることも使命としていたが、しかしそれ自体が困難な状況にあるとの認識が編者にはあるのだろう。

伏見憲明はゲイコミュニティがセグメント化していると指摘しているが、これは以上で見られた編者の悲壮感の背景と言える。伏見は、「いまや『ゲイ』という自己認知を持つ人々は、さまざまなセグメントに分かれ、中心を持たず、小さな『コミュニティ』が並列している状態だ」(BADI2009/12:202) と、現状について述べている。例えば、「クラブに都合う(ママ)〔→集う〕人々、バーを楽しむ人々、音楽やスポーツのサークルに参加する人々、発展場にだけ生息する人々、そしてリブで自己実現しようとする人々」(BADI2009/12:202) というように、ゲイ男性が交流する場所、ゲイ男性がゲイとして行う活動や生き方が拡散している。ある編者は第 3 期の末に、「昔は、必然的にバーや雑誌のコミュニティを経験して、ゲイ業界のお約束も、共同体意識も生まれたんだけどね」(BADI2007/2:306) と過去を回顧している。この語りでは、ゲイ雑誌がゲイ男性の「共同体意識」を形成する役割を果たしてきたと捉えられている。しかし「昔は」と言われるように、現在のゲイ雑誌はそうした役割を果たしにくくなっていることも暗示されている。

---

(20) オーストラリアのゲイ・レズビアン雑誌の衰退もインターネットの登場が理由であるという同様の指摘がジェレミー・フィッシャー(Fisher 2014)によってされている。

(21) それに加え、次のような理由も廃刊の原因として挙げている。「38 歳で創刊して、現在 72 歳。ぼくも歳をとりましたが、スタッフも同じように歳をとりました。20 代の若い血を入れられなかったので、若者が『薔薇族』から離れていったことも原因のひとつです。それと『薔薇族』が買いやすかった中小の書店が次々と廃業してしまったことも。」(伊藤 2004:25)。ゲイコミュニティ評論家である衆道寺独路は、伊藤による理由とは異なるものをあげている。その理由は主に、伊藤の思想や実践と読者の意識との間に大きな溝が生じていたからである。具体的には、(1)「エイズ＝ゲイの病気」という偏見を助長する 1996 年の厚生省の調査に伊藤が手を貸してしまったこと (被験者の許可なしにハッテン場 (ゲイ男性が性交渉の相手を求めに行く簡易宿泊施設) のゴミを調べ、アナルセックスの有無やコンドームの使用率を調べた調査)、(2) 伊藤文学による同性婚批判 (女性との偽装結婚推奨)、(3) リブに対する懐疑的姿勢、を挙げている (衆道寺 2004)。

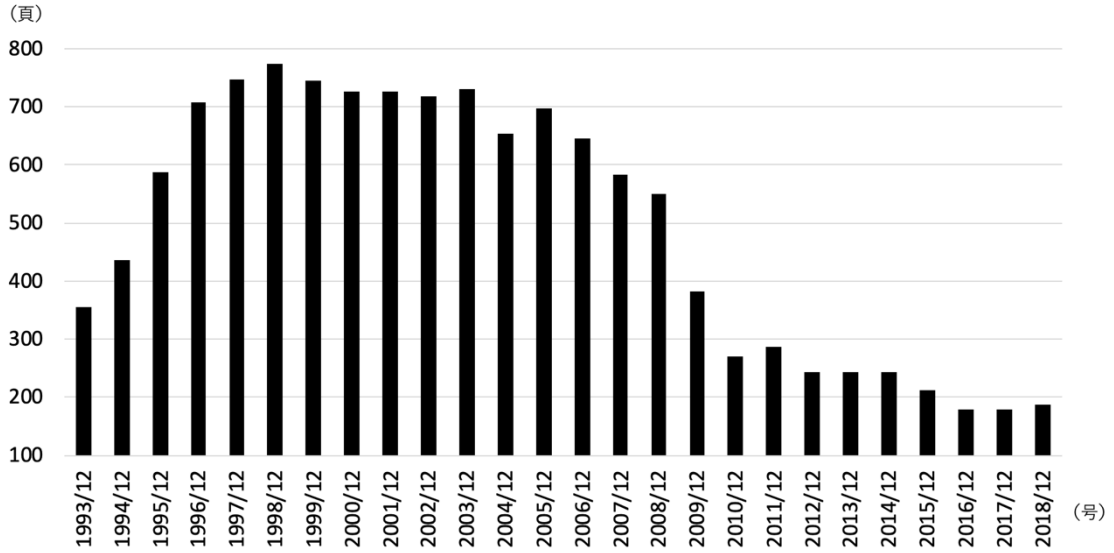


図 1-3　『バディ』の頁数の推移（各年 12 月号の頁数）

インターネットの登場以前は、新宿二丁目やゲイバー、あるいはゲイ雑誌といった限られた場所でのみゲイ男性は交流を行うことができたが、インターネットの登場によって他のゲイ男性との交流が容易になり、その場が格段に増えた。それにより、多くのゲイ男性が集い、出入りするような中心的場所が失われた。つまり、ゲイコミュニティのセグメント化や衰退とは、より具体的に言うならば、趣味嗜好に関わらずゲイという共通項においてのみゲイ男性が関わりを持つ中心的領域の衰退、そして「ゲイ」という言葉によってゲイ男性を一枚岩的にまとめ上げたり語ることが困難になった状況を意味しているのである。しかし、『バディ』は第 1 期からゲイ男性は多様であることを認識してきたはずであり、それを認めつつ、ゲイというアイデンティティを肯定的なものとして形成しようと努めていたのではないか。なぜこの第 4 期になってゲイ男性が多様であることを問題とし始めたのであろうか。

社会全体との関係性を考えるのであれば、「多様性」についての言説が増加し議論が進むにつれて、ゲイ男性内の多様性がこれまで以上に無視することのできない側面として捉えられるようになっていったことが考えられるだろう。もちろんこうした状況はゲイ男性に限らず、いかなるマイノリティの運動や議論も必然的に経験する。同性愛者やセクシュアルマイノリティが一枚岩的なアイデンティティを持つことは困難であるという学術的な議論も 1990 年代にすでに存在していたが、それが人々に十分に広まっていたとは言えない。さらには多様性を認識しつつも「ゲイ」というアイデンティティを立ち上げるために、それに徹底してこだわるという姿勢も 1990 年代にはあった。だがゲイコミュニティも肯定的なアイデンティティも形成が完了したとされる 2000 年代には、そのこだわりもひと段落し、それと同時に多様性の言説が徐々に広まり、それがいっそう無視できない側面となったのが、2000 年代後半以降であったのではないだろうか。

また、ゲイ男性は多様であると言いながらも、実際に『バディ』が売れ、多くのゲイ男性がそれを消費しているという事実自体が、読者が「ゲイ」としてのつながりを欲していること、そしてゲイコミュニティを維持しようとしていることとして 2000 年代初期までは解釈されてきた。「ハッピ

ー」という戦略がゲイ雑誌の売り上げに繋がるなど、実際に目に見える形で『バディ』の実践の効果を読み取ることができた。しかしそうした過去の戦略が現在ではあまり効果を見せず、あるいはゲイ雑誌の需要の低迷によってその効果が見えにくくなってしまったとも言える。

『バディ』が低迷した理由はインターネットが登場したからというだけではなく、『バディ』がさまざまな戦略によってゲイ男性の悩みを一通り解決してしまったからでもあろう。第3期までの『バディ』の内容を振り返ると、第2期には「ハッピー」という「夢」によって〈現実逃避〉を行うことで、悩みがあたかもないかのように振る舞うことを読者に促していた。第3期からはゲイ男性が「ハッピー」であることが前提とされるようになったが、直面せざるを得なくなった生涯独身として生きていかなければならないという悩みを、「男」としてのライフスタイルを提供することによって解決していた。これらのことは、異性愛社会を原因とする差別や、「ゲイ」としてどう生きていくべきかといった悩みを一通り解決したことと同義である。それにより、提供する情報が減少してしまったという実情もあるのではないだろうか。「ゲイライフ」を主軸とする『バディ』は、これ以上生き方などの情報を提供することができなくなり、頁数を減少させていった。すでに悩みを解決してしまっているなら、「ゲイ」という共通項によって一枚岩に表現される集団に特定の情報を提供することの意義も希薄となる。読者も悩みがないなら、「ゲイ」にこだわり、「ゲイ」に特有の情報を欲する必要がなくなる。

5-2 「ゲイ」であることの再強調

「ゲイであること」への興味関心の低下やゲイコミュニティの衰退という状況を『バディ』は悲観する。だが、ゲイ雑誌のニーズの減少に合わせて『バディ』が不要となりつつあることを引き受けたり、ゲイ男性への情報提供や「ゲイ」アイデンティティへのこだわりを放棄したりしたわけではなかった。反対に、「ひと昔前と比べて、ゲイミュニティの在り方も、ゲイタウンの実情も大きく変わりました。それでも、私たちスタッフはゲイのための情報を発信し続けていく媒体として、読者の皆さまに楽しんでもらえるよう、頑張ってまいります」(BADI2012/2:2) と語るように、それらを継続して強調しようとし、ゲイコミュニティを盛り上げるという意気込みが語られるようになる(22)。

> バディを、ゲイコミュニティを、盛り上げていこうと力の限り頑張っていくつもりです
> (BADI2011/9:268)

> ゲイコミュニティを盛り上げていきたい！という僕たちスタッフの声がこれからも、たくさんの仲間たちの心に届き、愛され続ける雑誌であるために、今後も頑張っていきたいと思っております。
> (BADI2012/1:290)

> ゲイっていうコミュニティには僕たちにしか味わえない楽しみがあるんだな～としみじみ。

(22) この背景には、2011年3月に東日本大震災が生じたことも少なからずあると思われる。被災した人の中にはもちろん多くのゲイ男性もいたため、〈仲間〉の支援のためにゲイコミュニティを新たに結束させようという意思が働いたとも推測できる。2012年5月号では、「東日本大震災から1年　被災地からのメッセージ」という記事が掲載されている。

2012 年はもっとゲイがゲイの世界で楽しんでほしいですね。だって、ゲイなんだから(*゜▽゜)ノ★ (BADI2012/3:266)

では具体的に雑誌内ではどのような記事によってゲイミュニティを盛り上げ、ゲイであることを強調しようとしていたのか。これまでの実践を引き継ぐものとしては、さまさまなゲイ男性の生き方を取り上げた連載がある。2009 年 4 月号から（2010 年 2 月号まで）始まった「関西ゲイ百珍。」という連載は、「毎回、関西を中心にゲイというセクシュアリティを持ちながら、個性的でユニークな活動を行っている方々にお話を聞き、ゲイライフへの指針となるようなリスペクトを吸収しようというコーナー」（BADI2009/4:68）と説明される。ゲイ男性の具体的な生き方やキャリアを紹介する記事であり、読者にゲイライフの事例を提示している。例えば、「ディスプレイ・アーティスト」、「床山」、「画家」、「加圧トレーニングインストラクター」、「イベントオーガナイザー」、「ダンスチーム」といった職業・活動に携わるゲイ男性が紹介されている。

こうした記事とは異なり第 4 期に特徴的なものに、若い世代への注目がある。この時期には三十代のゲイ男性についての記事よりは、若いゲイ男性についての記事が目立つようになる。例えば特集として、二十代のゲイ男性の恋愛やカップルについて取り上げた「ゲイの恋愛プロフィール」(2009 年 2 月号)、18 から 25 歳の「イキゲイ（イキイキなゲイ）のリアルライフ」を見る「オトコノコ★大集合！！」(2009 年 3 月号)、「ゲイ業界で活躍している若いオトコノコ」にインタビューをした「業界★オトコノコ」(2012 年 10 月号)、十代のゲイ男性にインタビューをして彼らの考え方や生活を探る「10 代ゲイの世界」(2014 年 3 月号）などがある。

第 3 期では三十代のゲイ男性へのエンパワーメントが積極的に行われており、編者は彼らに「本当のゲイライフ」を提示していた。その一方で若ゲイたちは、三十代のゲイ男性の「本当のゲイライフ」を際立たせるための未熟な存在として対比され、彼らへのエンパワーメントは、三十代のゲイライフを提示することによる間接的なエンパワーメントであったと言える。対して第 4 期では、若いゲイ男性に直接焦点を当て、彼らには彼らなりの生き方があることを提示しようとしている。「オトコノコ★大集合！！」や「業界★オトコノコ」で描かれているのは、若いけれども各々が自分にあった仕事をしているゲイ男性であり、必ずしも社会的地位には結びつかなくとも、〈幸せなゲイライフ〉を送っているゲイ男性である。2013 年 8 月号の「頑張るオトコっていいね！」という特集では、若ゲイのみに焦点が当てられているわけではないが、看護師や切り絵アーティストとして「頑張る」ゲイ男性が取り上げられている。このように、若いゲイ男性を中心に、自分らしい生き方や頑張りに注目することで、若い世代が読むための『バディ』を目指そうとしていた。しかし第 3 期で見たような具体的なモデルを提示をするのではなく、「ゲイ＝みんな同じじゃない。人それぞれの個性グラフィティ」(BADI2018/10:51）として、多様な存在としてのゲイ男性を提示しようとしていた。このように若いゲイ男性を直接働きかけの対象とし始めたのは、単にこれまで間接的なものに留まっていた働きかけを是正するためではなく、ゲイコミュニティが衰退する中、次世代のゲイコミュニティを担うであろう若い世代を改めて「ゲイ」としてまとめあげることによって、ゲイコミュニティを未来へ継承しようとしていたためではないだろうか。『バディ』の最終号となった 2019 年 3 月号が「ゲイコミュニティの未来へ」というタイトルで特集を組んでいたことは、まさにコミュニティを未来へと継承していきたいという意志に他ならない。

一方で、ライフスタイルなどを提示せずにゲイであることを強調するような実践も行われていた。それは主に、表紙のデザインによるイメージ戦略である。2011 年からは『バディ』の表紙が大きく変わった。これまでもイラスト（第 1 期・第 2 期）から実際のゲイ男性の写真（第 3 期・第 4 期）へと表紙のデザインは移行してきたが、2011 年からはよりアーティスティックな表紙を作成するようになった（図 1-4）。2011 年から表紙の写真を担当するようになった編者は、「世界に通用するゲイ雑誌にしたかった」（BADI2012/3:132）という意図から、表紙の人物の衣装を和物で統一した。そして「リアル」なゲイ男性を捉えた写真というよりは、アート的な印象を与える構図や身構えの写真を採用するようになった。表紙のこの転換は確かに世界標準を目指したものではあったが、それと同時に「ゲイならではの感性豊かな要素も含まれている」（BADI2012/3:133）表紙とすることによる、ゲイらしさの創出ともなっていたと言える。つまり、「普通」のゲイ男性の姿を捉えた 2010 年以前の表紙から、「ゲイの感性」を生かしたアーティスティックな表紙となったのである。また 2014 年には表紙にドラァグクイーンも登場させており、ゲイカルチャーを前面に押し出そうという意図を窺うこともできる。



1997 年 7 月号　　2005 年 2 月号

2011 年 5 月号　　2014 年 2 月号

図 1-4　『バディ』の表紙の移り変わり

第 4 期の『バディ』を要約する。第 4 期の『バディ』は二つのコンテクストで捉えることができた。ひとつはゲイ雑誌の衰退である。インターネットの登場によってゲイ男性の情報源が変化し、雑誌自体の需要が低下している現状を編者も認識していた。そのため『バディ』の情報量も第 4 期以降減少が続いていた。もうひとつのコンテクストはゲイコミュニティのセグメント化であった。ゲイ男性が交流を行う中心的場所が失われたことによって小さなコミュニティが乱立し、互いに分断されている状態にあり、ゲイであることに対するゲイ男性の意識も低下していった。第 3 期までの『バディ』が具体的な生き方を提示しようとしていた一方で、この時期の『バディ』はそうした実践がすでに困難となっていると捉え始めていた。こうした背景の中で、『バディ』はコミュニティの活性化を図ろうとしていた。これまでは間接的にしか働きかけていなかった若いゲイ男性を、次世代を担うであろう世代として改めて「ゲイ」としてまとめ上げたり、ゲイの感性を生かした「ゲ

イらしい」表紙を作成しながら、「ゲイ」であるということを再強調していた。第3期まで『バディ』は「自己肯定のゲイライフ」と「生き方のゲイライフ」を形成しようと努めていたとするならば、第4期ではそれらの維持・延命を試みていたとまとめることができる。

6．安全なアイデンティティ ――「現実」と「夢」の間で

本章ではゲイ雑誌『バディ』によるアイデンティティの形成を、「ゲイ」と「ゲイライフ」に注目しつつ、誌内に見られる編者の語りから分析した。キャッチフレーズと誌名が変更された時期を区切りとして創刊から休刊までを4つの期間に分け、各期間の『バディ』の特徴に注目することでその実践を分析した。「ゲイライフ」という言葉を、肯定的なアイデンティティを持っていることを意味する「自己肯定のゲイライフ」と、具体的なライフスタイルや生き方のロールモデルを意味する「生き方のゲイライフ」に分け、『バディ』がそれぞれの側面についていかなる主張を行ってきたのかを分析した。

第1期では、「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉を紹介し、ゲイとしての自己肯定感を形成することを目指していた。「生き方のゲイライフ」よりは「自己肯定のゲイライフ」に重きが置かれていた。その中で編者は「ゲイ」であるということを強調していたが、それは特定のライフスタイルというよりは、「普通」であることを否定する姿勢や思考法を意味していた。

第2期では第1期の実践を引き継ぎながら、読者間で「ゲイ」としてのアイデンティティを形成しようという強い志向性があらわれ始めた。「ゲイ」として読者をまとめあげ、「ゲイ」としての共同体を形成し、「ハッピー」であるという「夢」を読者に抱かせることによって自己肯定感を形成しようとしていた。「夢」という言葉を用いながら「ゲイ」としてのポジティヴな側面に目を向け、一方ではゲイ男性が抱える「悩み」を覆い隠してしまうことによって〈現実逃避〉を行うことも促されていた。「生き方のゲイライフ」に関しては、事例の提示に留め具体的なモデルを提示することからは距離をおいていたが、「わかりやすい」ものとして「結婚」を提示するに至った。

第3期ではそれまで「夢」として語られていた「ハッピーゲイライフ」が「現実」のものとなったことを前提に、誌面作りが行われるようになった。焦点は「自己肯定のゲイライフ」から「生き方のゲイライフ」へと移行し、より多くの生き方が提示されるようになっていった。同時に「結婚」への注目も強まり、それが強調されるにつれて、結婚ができない「現実」も浮き彫りになっていった。その過程で三十代のゲイ男性が注目されるようになった。彼らが「現実」の生き方として直面せざるを得ない独身として生きていくという将来の不安、そして三十代からは魅力と「モテ」を失うという不安を解消するために、『バディ』は経済的自立・安定と高い社会的地位に加え、若ゲイを庇護する立場という「男」の生き方を提示することでエンパワーメントを始めた。

第4期では、「ゲイ」であることへの意識が低下したり、「ゲイコミュニティ」が衰退しつつあることを認識した編者は、ゲイコミュニティを盛り上げ、それらを維持・延命することに取り組み始めた。第3期では間接的な働きかけの対象であった若い世代に、自分らしく仕事を「頑張る」ゲイ男性を見せることで直接働きかけを行ったり、表紙にゲイカルチャーを取り入れることによって、「ゲイ」であることを再強調しようと試みていた。

『バディ』が「ゲイ」や「ゲイライフ」によって提示していたことは、1990 年代から現在にかけて大まかに、規範への抵抗から規範への同化へと移り変わっていったと言えるだろう。第 1 期では「普通」であることを徹底的に否定しようとしていたにも関わらず、第 3 期には「男」としてのライフスタイルが主張されるようになっていった。また第 2 期の「夢」というキーワードによって、異性愛規範から生じる差別やそれを原因とする悩みといった「現実」があたかも存在しないかのような言説が形成され、被差別者ではない存在としてゲイ男性が捉えられていく。第 1 期には前提とされていた「悩み」を抱えた存在としてのゲイ男性を、第 2 期からは「ハッピー」に生きているという主張を行うことによって覆い隠すことで、マジョリティの一員としての意識を得ていたとも言えるだろう。これらの主張は確かにゲイ男性に自己肯定感を与えることに貢献してきただろう。しかし、『バディ』が当初意図していた規範への抵抗からは後退していった。

もちろん『バディ』が行ってきたことの貢献は大きい。1980 年代まで使用されていた「隠花植物」というネガティヴな表象を、『バディ』は「ハッピー」という表象を用いることや、実際のゲイ男性の生活を写しとり差し出すことによって、ポジティヴなものへと転換させた。この点はいくら強調してもしきれない。

しかし、規範への同化へと舵を切っていったことは、結果としてゲイ男性をゲットー化されたクローゼットへと呼び込むことになっていた可能性もある。ここで一度、男性同性愛者のアイデンティティを分析した前川直哉（2017）の論を見てみたい。大正期から 1970 年代までの男性同性愛者のアイデンティティと彼らが抱える悩みの対処法について歴史的に分析した前川は、彼らの悩みの解決が、カミングアウトによって差別と闘うことではなく、「クローゼットへの解放」であったと結論づける。クローゼットに向かって自らを解放してきた理由としては、カミングアウトによって失うものが多いと考えられていたという理由に加え、カミングアウトをしなくても「何とかなる」環境を男性同性愛者が手に入れていたからである。『薔薇族』などの専門誌の他にゲイバーやハッテン場の利用は、周囲に知られることなく欲望を充足し悩みを解決することを可能としてきた。そして前川が的確に暴くように、「クローゼットへの解放」が可能であったのは、彼らが男としてジェンダー構造の中で有利な位置にいたからに他ならない。男性によって占有されているポルノグラフィーの利用によって同性愛者としてのアイデンティティを作りあげてきたこと、商業的な目的を避けることのできない男性同性愛者向けの雑誌は男女の経済格差によって主に男性をターゲットとしてきたこと、ゲイバーへ通うこと、つまり夜遅くに外出し金銭を支払うこと、これらすべては「男」というジェンダーの特権によって可能となっているのである。そして、「ジェンダーの非対称な構造が温存され、それに依存したクローゼット内部の充実が可能である限り、当事者男性の多くが、カミングアウトをした上での同性愛者解放運動ではなく、クローゼットに向かっての自己の解放、およびその内部に留まっての悩みの解決や欲望の充足を、選び続ける可能性が存在する」（前川 2017：221）と前川は警告する。1970 年までを分析した前川の指摘は、『バディ』の分析によって明らかとなったものと共通してはいないか。

本章では『バディ』を、「ゲイ男性によって、ゲイ男性をターゲットに行われる活動」として扱ったが、その点を考慮するのならば、『バディ』が目指してきたものが規範への抵抗としての社会変革ではなく、読者を規範へ同化させたり、規範の中で折り合いをつけて生きていくこととなっていったことは、不思議なことではないかもしれない。またインターネットによるゲイ雑誌の衰退に抗う

ために（収益を確保するために）、そしてより多くのゲイ男性に受容されるために、規範への同化をたどっていったとも考えられる。しかしそれが結果として、ゲイ男性の意識を〈保守的〉な方向に導いていったのであれば、『バディ』は規範への抵抗という当初の目的から退いていったと言えよう。

第2期に小倉東は「『ハッピー』とか『ゲイ・ライフ』という枠組みもゆくゆくはイデオロギーとしては解体されていくものだと思います。でも、ゲイのムーブメントの土台がなければ壊せない、次に進めないのです」（BADI1997/7:81）、「ゲイという生き方を盛んにアピールしているのは、実はゲイという『スタイル』を解体していくため、つまり、解体されることを前提にして積み上げていってるのね」（BADI1997/7:720）とも語っており、彼にとって「ゲイ」であることも「ゲイライフ」も、そして「ハッピー」であることも最終的には解体されるものであった。しかし、一度形成されたものはそう簡単に解体することができないという実情は、この語りでは見逃されているのではないだろうか。「現実」を見る必要もなく、「男」というジェンダーの特権性に寄り添い、「普通」の存在であることを引き受ける〈安全なアイデンティティ〉が流布されてきたのであれば、少なくともこれまでは活動家などによって称賛されてきた『バディ』の実践を再評価していく必要もあるだろう。

より広い文脈から捉えるのであれば、『バディ』に限らず実際に種々の活動や運動によっても、ゲイであることを受け入れ、自己を肯定的に捉えられる人は1990年代から2000年代以降にかけて増加したかもしれない。しかしそれは別の捉え方をするのであれば、「ゲイはハッピーなのだ」、「ゲイは普通の存在なのだ」という言説の流布によりそれが規範性を帯びてしまったことによって、自己肯定を得られず、「悩み」を抱えたゲイ男性が声をあげにくくなっただけとも解釈できるのではないだろうか。今一度、「ハッピーゲイライフっていう言葉に踊らされて、いつもいつも現実逃避をしていてはいけない」（BADI2004/5:365）という読者からの批判を吟味する必要があるだろう。

第２章　ゲイマンガに描かれるゲイの物語

—— 変化する悩みとその提示／対処／回避

１．「ゲイマンガ」とは

1－1　本章の目的

本章ではゲイ男性がゲイ男性をターゲットに作成してきたマンガである「ゲイマンガ」を取り上げ、それをゲイ男性をターゲットに行われてきた自己変革活動として分析する(1)。1980 年代から現在までにかけて発表されてきた作品を分析し、ゲイ男性がゲイ男性に対していかなる物語を提示し、共有してきたのかを論じる。またゲイ男性が一般向けに発表してきた作品も、社会変革活動として捉え分析し比較することで、いかなる表象を戦略的に提示してきたのかを論じる。

広くゲイに限らずセクシュアルマイノリティの情報が圧倒的に欠如している社会において、フィクションにおける表象は読者のゲイ男性にとって自己を知る重要なリソースである (Pearl 2013:6-7)。ゲイマンガは主にゲイ雑誌に掲載されてきたため、ゲイ雑誌という限られた領域での営みではある。しかしゲイマンガを作成することは、自分たちの表象と物語を作り上げ、共有し、アイデンティティを形成する試みであったと言える。ストーリーの構築という側面からは、書き手にとってそれを描くことは「『ほんとうに自分は誰なのかを発見する』主要な方法」(Plummer 1995=1998:71) のひとつであった。

マンガの特徴は、前章で見た『バディ』が読者に「現実的」なアドバイスをすることを志向しつつ誌面作りを行っていたのに対し、〈フィクション〉の物語を通して「現実」にとらわれない物語を形成することにある。フィクションであるからこそ作者は、「現実」とは異なる理想的なゲイ男性像を形成しようと試みたり、「自由」に欲望を投影したり、「現実」に囚われないさまざまなアイデンティティを模索しようと試みていると考えられる。ゲイ男性が一般向けに描くゲイマンガでも同様の傾向はあるだろうが、社会的に承認される物語を描くという意図が働くと想定されるため、オーディエンスの違いによって両者が差し出す物語には違いがあると思われる。『バディ』では「ハッピー」をキーワードに読者のゲイ男性に働きかけが行われていたが、ではゲイマンガではどのような表象によって働きかけが行われているのであろうか。

1990 年代には女性誌を中心に「ゲイブーム」が生じ、メディアにおけるゲイ男性の表象が増大した。これに関連した出来事に、「やおい」や「BL（ボーイズラブ）」（以下、基本的に「BL」で統一）

(1)　「ゲイマンガ」と同じ言葉として「ゲイコミック」も使用されるが、ここでは一貫して「ゲイマンガ」という表現を用いることにする。「ゲイコミック」と言うときは単行本化されたものを指すことが多いと思われるが、それ以外に両者に意味的な違いはない。

といったマンガのジャンルが主流化し始めたことがある[2]。これらのジャンルは、主に女性が女性向けに作成した男性同性愛についてのマンガを意味し、現在では巨大なマーケットが形成されている。BL に関しては多くの研究が行われてきている一方で、ゲイマンガに関しては研究がほとんど存在していない。確かに BL に比べゲイマンガは大きなマーケットとはなっておらず、その社会的影響も低く見積もられているだろう。しかし、ゲイマンガはゲイ雑誌の重要なコンテンツであり、この雑誌文化の中で多分に作成・消費されてきた。そして前章でも触れたように、1990 年代に創刊された『バディ』や『ジーメン』は、1990 年代以前はゲイ雑誌にマンガや小説を描く人に適切な掲載料が支払われていなかった事実を改善し、そうした作家をプロフェッショナルな作家として扱い、適正な掲載量を支払っていた（BADI2008/1:46）。また『バディ』は「バディマンガ・小説大賞」といった企画によって、読者から投稿されたマンガに賞金を与えるなど、マンガ文化を盛り上げようともしていたのである。

本章ではゲイマンガが置かれたこうした背景に注目しつつ、ゲイ男性を表象するゲイマンガがゲイ男性、そして社会にいかなる物語を提示してきたのかを論じていく。まずゲイマンガの概要や 1990 年代以降のゲイマンガの状況について詳しくまとめ、紹介をする。

1−2　ゲイマンガと BL —— BL をめぐる議論と批判

男性同性愛を描くマンガは二つに大別することができる。ひとつは「BL」である。溝口彰子は BL を、「男性同士の恋愛を中心につむぐ物語のことで、作り手も受け手も、そのほとんどが異性愛女性」（溝口 2015:9）であると説明している。BL とは男性同士の恋愛・性愛を扱ったものすべてを総称するものではなく、女性生産者と女性消費者のネットワークの中で流通しているものを意味する傾向が強い。また溝口は BL の機能についても触れており、BL とは「女性の様々な願望が投影された男性キャラたちが、『奇跡の恋』に落ちる物語群であり、女性が、家父長制社会のなかで課せられた女性役割から解き放たれ、男性キャラクターに仮託することで自由自在にラブやセックス楽しむことができる」ものであり、「現実逃避が約束されたジャンル」（溝口 2015:10）であると説明する。また昨今の BL は、家父長制社会、異性愛規範、ホモフォビアなどを克服するための想像力と社会を変えるための意図によって描かれてもいる（後述）。つまり BL は規範への抵抗を何かしらの形で表現する作品群でもある。マンガが機能を持つというのは BL に独特のものではなく、例えば藤本由香里によると少女マンガに共通するのは「私の居場所はどこにあるの？」（藤本 1998:4）という問いであるという。つまり少女にとって少女マンガを消費することは、自己のアイデンティティの形成と密接に関わるのである。

そしてもうひとつはゲイマンガやゲイコミックと呼ばれるものであり、主な書き手と読み手がゲイ男性のものを指している（金城 2012:1）。ゲイマンガに関しては、ゲイ雑誌というメディアで積極的に発表されてきた。つまり BL とゲイマンガは、それらが消費される人物において大きく異なる。もちろん、BL を読むゲイ男性、ゲイマンガを読む女性もいるだろう。また読者のゲイ男性が必

(2)　「やおい」と「BL」は、最大公約数的な意味としては、男性同士の恋愛・性愛を描いたマンガを意味する言葉で、「やおい」は 1970 年代から使用されていた。しかし現在では BL の方がはるかに言葉としては普及している。ここでは両者を同義として捉え、「BL」を使用していく。両者はさまざまなニュアンスの違いがあるようだが、詳しくは溝口（2015:46-47）を参照。

ずしも両者を区別をしているわけではないとの指摘もある（Baudinette 2017）。しかし本稿がBLとゲイマンガを区別して扱うのは、マンガにおける男性同性愛表象の議論の歴史でこれら二つが異なる扱いを受けてきたからであり、その背後には男性同性愛表象の当事者性にかかわる問題が存在してきたからである。

男性同性愛表象をめぐる論争に1990年代の「やおい論争」がある。溝口の議論を参照しながら1990年代のBLの特徴を簡潔に述べると、それは「ホモフォビアや異性愛規範やミソジニーを当然の前提――克服できるかもしれないものではなく――として、それら（一言でいいかえるなら、家父長制社会の抑圧）から、BL愛好家女性たちが逃避して楽しめるように開発されたBL」（溝口2015:55）であった。例えば、登場人物の男性は自分をノンケ（異性愛者）[3]であると言い張りながらも男性に恋をする。しかし、たまたま好きになったのが男であると彼が言い張るように、そこには男同士の恋愛という障害を乗り越えることによって禁断の愛を描くというレトリックがあり、彼らのセクシュアリティは「究極のカップル神話」によって二者内で完結する。そうした彼らを際立たせるために、乱交的・ステレオタイプ的な「リアルゲイ」が描かれる。究極のカップル神話によって、彼らは他の誰とも異なる別種の存在に生まれ変わったこととなり、自らを社会から切り離すことによって、（読者・作者の女性は）家父長制の抑圧から逃避する。こうして、「家父長制＆異性愛規範社会による女性への抑圧から無縁な状態で、のびのびとラブやセックスやライフを謳歌するキャラクターたち」（溝口2015:88）が描かれるのが1990年代のBLであるという。他にも、過剰な愛情の発露としてのレイプが描かれることが多い（同上:54-88）。

こうしたBL表象が主流であった時代の真っ只中に生じたのが、「やおい論争」であった。「やおい論争」とは、「『フェミニズムに関心のある女性のための、自由な発言の場としてのミニコミ』『CHOISIR（ショワジール）』（フランス語で「選ぶ」という意味）20号（1992年5月発行）に掲載されたゲイ男性・佐藤雅樹による『ヤオイなんて死んでしまえばいい』というエッセイに、やおい愛好家を自認する女性が応答するかたちで始まり、他の女性論者たちも参加して41号（1995年7月発行）まで継続した」（溝口2015:99）論争である。この論争と佐藤のエッセイの要点を簡潔にまとめると、「実際のゲイとは関係なしに、『ゲイ（のような存在）』が表象されていることへの抗議」（同上:114）であった。溝口は、この論争が生じた背景には、女性誌などを主な舞台に展開された「ゲイブーム」や同性愛者による社会運動の隆盛があったと指摘している。

この議論の延長線上に石田仁（2007b）の論考を位置付けることができる。石田は、作品に対する他者からの批評を拒否するためにBL作者が用いる「ほっといてください」という表明に注目し、彼女らによるゲイ表象を「表象の横奪」という言葉でまとめている。石田と佐藤の論考は、BLに見られるホモフォビアやステレオタイプ的表象の批判であり、それに無自覚なBL作者に対する批判であったと言って問題ないだろう。石田は、レズビアン／ゲイ・スタディーズの分野でBLが批判されてきたことを指摘し、1990年代のゲイ男性当事者による運動を担った人々によるBL批判を引用している。アカーのキース・ヴィンセントは、BLがゲイを「一角獣のような幻の存在」として描いており「不愉快」であると（ヴィンセント・小谷1996:80-82）、佐藤雅樹は、男性同性愛者の性を商品

(3)　「ノンケ」とは、ゲイ男性やセクシュアルマイノリティの間で使用されるスラングであり、異性愛者を意味する。ゲイの「気（け）」が無い（non）を語源とすると言われている。

化した差別表現であると（佐藤 1996:166）、『バディ』の小倉東は、ゲイにファンタジーを押し付ける（宝島ゲイ・スタッフ編 1994:91）と批判している。ここで石田が言及した論者を見ても、BL 批判は 1990 年代のゲイ男性をめぐる動きと密接に関わっていることは明確である。そしてこの当時登場したゲイ・スタディーズがゲイ男性によるゲイ男性のための学問であったように（ヴィンセント・風間・河口 1997:2-3）、男性同性愛について語る際の当事者性――ゲイでなければ〈正しい〉ゲイは描けない・語れない――が批判の背景にあると言える。

しかし溝口は、「リアルゲイ」（現実のゲイ男性）に BL 作家は興味がないという石田（2007a）の指摘を批判し（溝口 2015:124-126）、やおい論争を経て、「BL 愛好家が表現の主体として、実際のゲイを『他者』として発見し、『かけがえのない存在』とし、自分自身も『かけがえのない存在』としたうえで、現実ではゲイに呼応する男性同士カップリングの表現物をどのように描いていくべきかについて、『自身』に引きつけて誠実な想像力を働かせて取り組」（溝口 2015:121）み始めたと論じている。現実のゲイ男性の声に耳を傾け、想像力を働かせ、社会をより良いものへと変革していくことが目指された作品が 2000 年代以降作られ始め、溝口はそれを「進化系」の BL と呼ぶ。溝口によるこの応答でも、実際のゲイ男性という存在が重要なものとされている。そうして 2000 年代になって増加した「進化系 BL」とは、「ホモフォビアや異性愛規範やミソジニーを克服する手がかりを与えてくれる BL」（溝口 2015:55）だという。この進化系の BL は多様なテーマを扱い始めているためその定型を提示することは困難だが、例えば、家族形態の多様性を描く作品、ジェンダーやセクシュアリティの規範を撹乱するような作品、恋愛関係・友人関係の発展を葛藤や交渉を含めて詳細に綴る作品、具体的なカミングアウトのシーンや周囲の人の反応を描く作品、周囲のホモフォビアとの葛藤／への対応を描く作品、などがある。こうして進化系の BL では社会を変える想像力とともに多くの物語が作り上げられてきている。

このようにやおい論争や BL 批判の中で実際のゲイ男性というのが問題になってきたにも関わらず、一連の議論において、男性同性愛を描くものとしては同じはずのゲイマンガは一切触れられない。BL 批判の文脈で唯一ゲイマンガについて論じていると思われるのがウィム・ランシング（Lunsing 2006）と堀あきこ（2010）である。ランシングはゲイマンガ作者の広瀬川進と田亀源五郎へのインタビューの中で彼らが、BL はリアリティに欠けると語っていたことに触れているが（Lunsing 2006:20, 23）、これはゲイマンガにおける当事者性の認識の存在を示唆するものである。しかし、ゲイマンガでもホモフォビックと言える極端な表象やステレオタイプがあるにも関わらず、それが批判や分析の対象とはならないことにランシングは疑問を呈している。また堀も、BL（堀は「ヤオイ」という言葉を用いている）で描かれるゲイには過度に「美しい男」しかいないことへの批判に応答している。BL は少女マンガのコードと切り離せないことに触れ、そもそもマンガという表現において現実の人間をそのまま写し取ることは不可能であること、ゲイマンガでもゲイマンガのコードにしたがって身体がデフォルメされて描かれることを指摘し、BL への批判が不当に行われていると論じる（堀 2010:32-37）。ゲイマンガが批判的に論じられてこなかったその理由には、BL と比べてゲイマンガは非常に小規模な市場しかなく、社会的影響がそれほど見出されていないことが挙げられるだろう。しかしそれと同時に、ゲイ男性当事者による表象には暗黙の正当性が認められ、BL のような検討の対象とはならなかったとも言えるのではないだろうか。

ではこれまで行われてきたゲイマンガの研究にはどのようなものがあるのか。数は少ないが、昨

今いくつかの研究が行われている。まず、BL とゲイマンガの中で使用される語彙の違いについて分析をした金城克哉（2012）による研究がある。金城はBL とゲイマンガにおけるセリフ、ト書き、オノマトペをすべて収集し作成したコーパスを用いた計量分析を行っている。しかし、性行為の語彙（特に挿入や射精の擬音）や終助詞の「ぜ」がゲイマンガでより多く見られるなどの発見があったが、その他の点では大きな違いがなかったとまとめている。ただ、語彙だけに注目した分析であるため、ゲイマンガにおけるストーリーの特徴などには触れられておらず、限定的な分析に留まっている(4)。ゲイマンガにおける表象を分析したものに、ウィリアム・アーマーによる田亀源五郎の作品の分析がある。アーマーは田亀源五郎の作品に見られる男性性や戦争の描写を分析し、田亀の作品を「不平等な権力関係が持つエロティシズムの可能性を BDSM(5)（に制限されるわけではないが）を通して探求する」（Armour 2010:447）(6)と指摘している。マンガを通した田亀の実践を分析する研究としては興味深いが、本章が関心を置く、ゲイマンガ全体の傾向や実践については触れられていない。ゲイマンガをより広く捉え分析したものに、ゲイマンガのジャンルに注目したトーマス・ボーディネット（Baudinette 2016）による研究がある。ボーディネットはこれまでゲイマンガが一枚岩的に語られ、過度な男性性（hyper masculinity）が描かれていることに焦点が当てられていたことを批判する。そして『バディ』（2010 年と 2011 年の号）に掲載されているマンガを分析し、そこで描かれるものの特徴を、日常生活（slice-of-life）、ユーモア（humorous）、エロティック（erotic）の三つに分類している。この中では必ずしも過度な男性性が描かれているわけではなく、控えめに男性性が表現されていたり、ユーモアとして区分される作品の中では女性性を体現したステレオタイプ的な「オカマ」が登場したりする。しかし彼の研究では、それぞれのマンガで具体的に何が描かれているのかという点までは分析を行っていない。

本章で試みたいのは、ゲイマンガを個別作品としてではなくより総体的に捉え、全体的な傾向と個別作品間の関係性を論じることである。そしてゲイマンガが、ゲイ男性に対していかなる物語や表象を差し出しているのか、あるいは異性愛者をも含む人がターゲットの読者となる作品ではいかなる物語が形成され、両者の間にいかなる戦略的差異が生じているのかということである。

以上の議論と歴史を前提に、本章ではゲイマンガを分析する。「やおい論争」を経た後の BL では多様なテーマでゲイ男性が描かれてきた。佐藤の批判への応答により BL 作家はできる限り〈本当のゲイ〉を描こうとしたり、実際のゲイ男性の声を参考にして〈リアル〉なゲイ男性を写し取ろうとしたり、BL によって社会を変えようとしてきた。ではゲイマンガでは、いかなる存在としてゲイ男性の表象が形成されてきたのであろうか(7)。

---

(4) 類似する分析として同じく金城（2013）によるものがある。金城はゲイ雑誌『G-men』に掲載されている小説を対象に、「を」格を伴う男性器表現と述語の共起関係を分析している。しかしこの研究も男性器表現という語彙面に的を絞ったものであるため、物語の特徴には踏み込んでいない。

(5) Bondage, Discipline, Sadism, Masochism の略。いわゆる SM の性行為のこと。

(6) “explores the possibilities of the eroticism of power differentials through, but not limited to, BDSM” (Armour 2010:447)

(7) 2000 年代に入ってからゲイマンガと「BL 文化とのクロスオーバー」（田亀 2018:14-16）という現象が目立ち始めたと田亀は指摘しており、この指摘を参考にすると、現在はBL とゲイマンガの区別自体が無効化しつつあるとも言える。この区分の現状や両者間の影響関係をより詳細に論じることも重要であるが、この点は今後の課題としたい。

1-3　分析対象

ひとつ目の分析対象となるのは、ゲイ男性によってゲイ男性をターゲットに作成されたマンガである。この点をできる限り満たしうる最適なものを分析対象として選択するために、二つの基準を設け資料の選別を行う。ひとつ目として、ゲイ雑誌を初出とするマンガのみを分析対象として選択する。この理由は、ゲイ雑誌が初出であることによってそれが主にゲイ男性向けに創作された作品であり、主な読者であるゲイ男性が消費することが明白であるためである。留意しなければいけないのは、では本当に作者はゲイ男性であるのかという点である。作者によっては自身をゲイであると公表している人物もいるが、必ずしもすべての作者がそうしているわけではない。しかしゲイ雑誌に発表されてきたマンガとしては、そこにある程度の当事者性を前提とすることができると思われる。二つ目として、(ゲイ雑誌が初出であり、かつ) 単行本化されているもののみを分析対象として選択する (自費出版と思われるものも含む)。この基準を採用する消極的な理由は、これまでに発行されてきたゲイ雑誌の数とそこに掲載されてきた作品の数は莫大であるため、すべてを分析することは到底不可能であり、その中から取捨選択をしなければならないためである(8)。1990 年代以降に発行されてきた主要ゲイ雑誌を概算しただけでも、1000 号分以上存在している(9)。この基準を採用する積極的な理由は、単行本化されたということは「選択のプロセスをくぐり抜けてきているということ」であり、「『読むだけの価値がある』と他の人々が判断したと確信し」た上で出版されているためである (Culler 1997=2003:40)。つまり、ゲイマンガ自体はマイナーで周縁的な領域ではあるが、単行本はゲイマンガをある程度代表することができる「周縁のキャノン marginal canon」(Pearl 2013:26) として捉えることができるためである(10)。表 2-1 は、以上の基準を満たすゲイマンガを初出順に並べたリストである。単行本化されたゲイマンガは必ずしも多くはなく、また把握し損ねている作品もあると思われるが、分析には十分な数であろう。前半は『薔薇族』を、後半は『バディ』『ジーメン』を初出とするものが多く、ゲイ雑誌の出版状況、そしてそれぞれの雑誌の方向性に少なからずマンガの内容も影響を受けていると考えられる。時代を反映しつつ、それにマンガがいかに応答をしてきたのかという点も本章ではできる限り視野に入れて論じていく。

二つ目の分析対象となるのは、ゲイ男性が「一般向け」として発表してきたマンガ (男性同性愛を扱うものに限る) である。ここで言う「一般向け」とは、一般の商業マンガ雑誌や広くインターネットで発表されてきたマンガであり、ターゲットが必ずしもゲイ男性ではなく、異性愛者も含む広い読者が想定されているものである。ゲイ男性向けのゲイマンガと比べこちらはさらに数が少な

(8)　ゲイ雑誌内のマンガを無作為に選択することも可能性としてはありうるが (例えば、『バディ』の各年の 1 月号と 6 月号に掲載されているマンガを分析するなど)、その場合、数号に渡って掲載される連載を断片的に分析することになってしまう。一話完結の短編も多いことは事実であるが、この事態を避けるためにも単行本化されているもののみを扱うことにする。

(9)　1990 年 1 月から 2018 年 12 月までの間、月刊で継続的に発行されているとして単純に主要ゲイ雑誌の発行号数を計算すると、『薔薇族』(1990 年 1 月から 2011 年 12 月 (伊藤文学版) の 21 年間、252 ヶ月) 252 号分、『アドン』(1990 年 1 月から 1996 年 12 月の 6 年分、72 ヶ月) 72 号分、『サムソン』(1990 年 1 月から 2018 年 12 月までの 28 年間、336 カ月) 336 号分、『バディ』(1994 年 1 月から 2018 年 12 月までの 24 年間、288 カ月) 288 号分、『ジーメン』(1995 年 1 月から 2016 年 12 月の 21 年間、252 ヶ月) 252 号分、これら全てを足すと 1200 号分となる。

(10)　ただ、今回扱う作品がどのようなプロセスを経て単行本化されたのかは不明であるため、その過程も時代などによって偏りや変化がある可能性がある。また出版社も、ゲイ雑誌の発行がメインの出版社から一般のマンガも出版するものなど、ばらつきがあることは付言しておく。

表 2-1　分析対象とする「ゲイ男性向けゲイマンガ」（初出年順）

単行本名	著者	出版年	初出年	初出雑誌	形態
『ふたりの童話』	山口正児	1985	1982-1983	『薔薇族』	長
『風のアルバム』（全二巻）	ボネ鏑木	1987	1982-1983	『サムソン』	長
『君にニャンニャン』	山川純一	1986	1982-1985	『薔薇族』	短
『兄貴にド・キ・ド・キ』	山川純一	1986	1983-1986	『薔薇族』	短
『ワクワク BOY（男たちの夏）』	山川純一	1988	????	『薔薇族』	短
『雲に抱かれて眠りたい』	竹本小太郎	1997	1990-1996	『薔薇族』	短
『五月のせいかもしれない』	竹本小太郎	1997	1991-1996	『薔薇族』	短
『愛の世紀末劇場』	熊田プウ助	1996	1992-1995	『サムソン』	四
『まぶしい空に Kiss しよう』	竹本小太郎	1997	1993-1996	『薔薇族』	短
『Tango』	上条毬男	1997	1994-1996	『バディ』『ジーメン』	長/短
『銀の華［復刻版］』（全三巻）	田亀源五郎	2012	1994-1999	『バディ』	長
『山田参助の無駄な抵抗やめましょう』	山田参助	2007	1995-2005	『さぶ』『バディ』『サムソン』	短
『若さでムンムン』	山田参助	2004	1996-1997	『さぶ』	長
『十代の性典』	山田参助	2016	1996-2008	『さぶ』『激男』	長/短
『タイムカプセル』	野原くろ	2013	1996-1998	『薔薇族』	短
『熊田プウ助大全集』	熊田プウ助	2007	1997-2004	『薔薇族』『サムソン』『ジーメン』『バディ』	短/四
『熊田プウ助大全集Ⅱ：極楽コロシアム！！』	熊田プウ助	2009	1997-2004	『ジーメン』	四
『ミルク』（全三巻）	野原くろ	2005	1998-2003	『薔薇族』	長
『五人部屋［新装版］』	児雷也	2004	1999-2002	『ジーメン』	短
『PRIDE』（全三巻）	田亀源五郎	2004	1997-2004	『ジーメン』『SM-Z』	長/短
『ナツノカッパ』	市川和秀	2005	2001-2004	『バディ』『ジーメン』	短
『男気』	市川和秀	2007	2002-2007	『バディ』『ジーメン』『激男』『爆男』	短
『エキストラ・ゴング』	平ひろ	2005	2003-2005	『ジーメン』『爆男』	短
『仰ゲバ尊シ』	児雷也	2007	2003-2006	『ジーメン『爆男』	短
『Relation』	小日向	2008	2005-2007	『バディ』	短
『アグリっ娘』	小日向	2008	2005-2008	『バディ』	短
『坊や良い子だキスさせて』	大久保ニュー	2008	2005-2006	『バディ』	短
『山椒は小粒で』	松崎司	2009	2007-2009	『ジーメン』	長
『続・極楽コロシアム!!：熊田プウ助大全集Ⅲ』	熊田プウ助	2013	2007-2013	『ジーメン』『激男』『ウラゲキ』『G Bless』	四
『太陽が呼んでいる』	戦艦コモモ	2010	2008-2010	『ジーメン』	長
『下宿のお兄さん』	野原くろ	2014-2017	2009-2018	『バディ』	長
『激情男児！！』	晃次郎	2015	2010-2014	『バディ』『ジーメン』『コミック G.G.』『SUPER SM-Z』	短
『ひこうき雲』	戦艦コモモ	2015	2011-2014	『ジーメン』『コミック G.G.』『SUPER SM-Z』	短
『8 月の居候』	くじら	2014	2013-2014	『ジーメン』	長
『ガチラブバトル！！』	おタケ	2015	2014-2015	『ジーメン』	短

表 2-2　分析対象とする「一般向けゲイマンガ」（初出年順）

単行本名	著者	出版年	初出年	初出雑誌	形態
『レインボウ・ライフ』（全二巻）	里見満	2002	2001-2002	『MANGA ALLMAN』	長
『熊田プウ助のつれづれ駄ホモぐらし』	熊田プウ助	2010	-	（書き下ろし作品）	短
『世界一周ホモのたび』	サムソン高橋・熊田プウ助	2011	????	『本当にあった笑える話スペシャル』	短
『弟の夫』（全四巻）	田亀源五郎	2015-2017	2014-2017	『月間アクション』	長
『そらいろフラッター』（全三巻）	おくら・橋井こま	2017-2018	2017-2018	『ガンガン JOKER』	長
『メルヘン課長とノンケ後輩くん』（全四巻）	ミナモトカズキ	2017-2019	2017-2019	『COMIC リュウ』	長
『あさな君はノンケじゃない！』	あさなさくま	2018	2018	『pixiv コミック』	短
『僕らの色彩』	田亀源五郎	2019-	2018-	『月間アクション』	長

※1　表 2-1 と 2-2 に共通して、「出版年」は単行本の出版年を意味する。「形態」は収録作品の形態を意味し、長編（一冊、あるいは複数冊を通して一続きの物語が展開されているもの）、短編集（独立した短い物語が複数収録されているもの）、四コママンガに分類してある。「長」「短」「四」がそれぞれに対応する。長編とともにいくつかの短編作品が収録されているものは「長/短」と表記してある。

※2　表 2-2 の作品はゲイ雑誌を初出としていないので、表 2-1 のように作者をゲイ男性と前提することができない。この点について、田亀源五郎と熊田プウ助以外の作家について補足しておく。里見満は、『バディ』で「既婚でバイ」というエッセイマンガを連載していた人物である。正確にはゲイではなくバイセクシュアルだが、ゲイ男性と同じ立場から発言を行ってきた人物として、ここに含めている。ミナモトカズキはエッセイコミック（ミナモトカズキ 2016）でゲイであることをカミングアウトしている。おくらも『バディ』にマンガを何度か掲載してきた人物である。また『そらいろフラッター』についてのインタビューで、自身がゲイであることを語っている（須賀原みち 2017）。単行本の『そらいろフラッター』は、おくらが自身の個人ウェブサイトで無料で公開していた同名の「そらいろフラッター」を橋井こまの作画によってリメイクしたものだが、ストーリー自体はおくらによるものとして、分析対象に含めた。あさなさくまは単行本内で自身がゲイであることを語っている。

く、また多くは（おそらく「LGBT ブーム」に応じた形で）2010 年代に発表されているため、限定的な比較分析になることを断っておく。この一般向けゲイマンガも同様に、単行本化されているもののみを分析対象として選別した（表 2-2）。以下、ゲイ男性向けに発表されてきたものを「ゲイ男性向けゲイマンガ」、一般向けに発表されてきたものを「一般向けゲイマンガ」と呼び、「ゲイマンガ」は両者を含むものとして使用する。

表に挙げたマンガについて、数点の補記をしておく。まずひとつとして、表内の長編作品の中には単行本としては完結していない作品がある。具体的には、『風のアルバム』、『8 月の居候』、『下宿のお兄さん』、『僕らの色彩』である。『風のアルバム』は第 2 巻の最終ページに第 3 巻が発売されることが示されているが、筆者が調べた限りでは発売されていない(11)。『8 月の居候』も第 1 巻は発売されているが、第 2 巻以降は筆者が調べた限り、発売がされていない。『下宿のお兄さん』は『バデ

(11)　『風のアルバム』は単行本内に初出についての情報は記載されていないが、『サムソン』創刊号（1982 年 7 月号）から連載されており、『サムソン』1982 年 12 月号に掲載されている第 5 話が『風のアルバム』第 1 巻の終わりに、『サムソン』1983 年 1 月号に掲載されている第 6 話が『風のアルバム』第 2 巻の始まりにおおよそ対応していることは確認できた。第 2 巻の初出時期は 1983 年初旬から中旬頃であると予想される。『サムソン』1986 年 4 月号で「第一部・完」（第 38 話）となり、1986 年 6 月号から第二部が開始されているが、筆者が所持している『サムソン』はごくわずかであり、かつ国会図書館にも所蔵されていないため、初出連載の終了時期、あるいは実際に連載が完結を迎え終了したのかは確認ができていない。少なくとも 80 年代に連載されていたものと推定される。よって単行本化されたのは、連載初期の作品のみということになる。

ィ』最終号（2019 年 3 月号）にて最終話を迎えたが、まだ単行本化されておらず、『僕らの色彩』に関しては現在連載中であるため、完結していない（いずれも 2019 年 11 月現在）。これらの作品も分析に含めているが、単行本内での表象のみを分析することとし、初出を参照しての欠如部分の分析はしないことにした。

2 点目は、初出から単行本化される際に、絵やストーリが加筆・削除・修正されている作品が数点あることである。作者が明確に単行本内のあとがきなどでこの点に述べているものに、『風のアルバム』と『Tango』がある。『風のアルバム』では第 1 巻のあとがきに、「『風のアルバム』はホモ雑誌という特殊な本に連載されている、そこでは必要とされなかった部分を書き加え、また削除するという事も必要であった」が、「発売日という時間的制約の中で、それは完全とは程遠く、計画したほんの数パーセントの実行で終わってしまう事になった」（ボネ鏑木 1987a：166）と記されていることから、初出のゲイ男性向けに描かれたものは、単行本化されるにあたって「一般向け」に書き換えられた箇所がある可能性がある。ただそれは数パーセントであると言われているため、基本的な物語は初出時と変わらぬ内容であろう。『Tango』でもあとがきで作者は、「〔『バディ』で連載してきた〕『タンゴ』を〔単行本に〕収録するにあたって半分近く縮めなきゃいけなくなっちゃって、なおかつ 3/4 近くを描き直すという暴挙を経た末にようやっと出来たわけで…ははは」（上条 1997：276-277）と語っている。そのほかにも単行本化にあたって程度の差はあれ修正が加えられたものがいくつかあると思われるが、初出からの変更は論じず、修正があったとしても基本的な内容は変わらないとの想定のもと、単行本の内容のみを分析する。

3 点目は、表 2-1 で挙げたマンガの初出先が、表 1-1（第 1 章）に挙げたゲイ雑誌以外の雑誌であるものがいくつかあることである。ゲイマンガを掲載しているゲイマンガ雑誌・ムックである『コミック G.G.』、『SUPER SM-Z』、『激男』、『ウラゲキ』、『G Bless』、『爆男』がそうしたメディアである。本章ではこれらの雑誌・ムックを初出とする作品も、ゲイ雑誌を初出とする作品として扱うことにする。

4 点目は、田亀源五郎と熊田プウ助の作品の扱いについてである。田亀源五郎はゲイのマンガ作家として多くの作品を発表してきており、ゲイ雑誌の連載から単行本化された数がもっとも多い人物である。ゲイ雑誌の初出が確認できている単行本で 10 作品、それ以外も含めると 19 の単行本を出版してきている(12)。よってゲイマンガを論じるにあたって彼の作品は重要である。しかし彼の作品すべてを取り上げると本章で扱う作品が大きく彼の作品に偏ってしまうことになる。また突出した作家であるため、彼の作品を分析するのであればそれらを単体で論じるべきであるとも思われる。そのため今回は彼が描くゲイマンガに関しては、入手可能な代表的長編を 2 作品（『PRIDE』と『銀の華』）のみ取り上げることにした。熊田プウ助も同様に単行本を多く出版しており、特に一般雑誌

(12) ゲイ雑誌での初出が明記されているものは『PRIDE（上・中・下巻）』(2004, 古川書房)、『外道の家(上・中・下巻)』(2006-2007, テラ出版)、『田亀源五郎［禁断］作品集』(2007, ポット出版)、『君よ知るや南の獄（上・下巻)』(2007, ポット出版)、『童地獄・父子地獄』(2010, ポット出版)、『田舎医者／ポチ』(2012, ポット出版)、『銀の華［復刻版］（上・中・下巻)』(2012, ポット出版)、『冬の番屋／長持の中』(2013, ポット出版)、『エンドレス・ゲーム』(2014, ポット出版)、『奴隷調教合宿』(2017, ポット出版プラス)、それ以外は、『柔術教師』(1994, B プロダクト)、『獲物』(1998, ジープロジェクト)、『天守に棲む鬼／軍次―田亀源五郎短編集』(2005, 古川書房)、『ウィルトゥース』(2007, オークラ出版)、『筋肉奇譚』(2012, オークス・コミックス)、『嬲り者〔復元完全版〕』(2017, ポット出版プラス)、『髭と肉体』(2009, オークラ出版)、『弟の夫』(2015-2017, 双葉社)、『僕らの色彩』(2019, 双葉社) である。

に連載された作品や書き下ろし作品が多く単行本化されてきた(13)。一般向けの彼の作品は初期の2作品（『世界一周ホモのたび』と『熊田プウ助のつれづれ駄ホモぐらし』）のみを取り上げることにした。

1−4　分析視角

本章ではゲイマンガのストーリーを中心的に分析するが、本節ではその理由を明確にしておく。先行研究としても触れたように、ゲイマンガの分析では、言語の側面、男性性の描写、戦争といった特定テーマ、ジャンルなどに焦点が当てられてきた。しかし本章ではこれまでにほとんど分析されてこなかった、ゲイマンガのストーリーに注目をする。理由のひとつは、前章で見た『バディ』の実践が「ゲイライフ」というゲイ男性の生き方・人生と密接に関わっていたためである。ひとつの物語として人生をどう作り上げるか、という点から『バディ』はさまざまな言説を形成していたと言える。よって、ゲイマンガの分析でも同様の視点を採用し、いかなる生活が描かれるのかという点を軸において分析するためには、ストーリーに注目するのが最適であると考えられる。

2点目は、進化系BLが社会を変えようという意図によって作成されてきた点と関連する。本章ではBLとゲイマンガの比較を行うことを目的としてはいないが、しかしゲイマンガをBLの歴史との関連から捉えてきた。そのため、ゲイマンガではいかに社会の規範に抵抗する取り組みが行われているのか（あるいは行われていないのか）を見ることは重要である。そして社会の規範と自己の関係性をいかなるものとして捉えるのかという点は、前章の『バディ』でも重要な側面であった。以上の問いに取り組むにあたっても、ストーリーに注目することが最適である。

そして3点目として、ゲイマンガの中でゲイ男性の「悩み」がいかに描かれ、その「悩み」をいかに解決しようとしているのかという側面を論じる狙いがあるためである。『バディ』でも進化系BLでも、ゲイ男性の「悩み」への対処が行われていたと捉えることができる。すなわち、『バディ』はゲイであることを否定的に捉える当事者が肯定的なアイデンティティを形成できるような誌面作りを行っており、進化系BLもゲイ男性が異性愛社会で経験する差別≒悩みを描き、それを乗り越えようとしていたと捉え返すことができる。また初期のBLには女性を家父長制の規範から解放させる機能があったことも考慮するのであれば、ゲイマンガもゲイ男性を規範から解放させたり、「悩み」への対処を行おうとしていたと言えるのではないだろうか。この点を見るにあたっても、ストーリーに着目することが最適であろう。

以上の理由から、本章ではゲイマンガのストーリーに注目をする。ゲイマンガ（特にゲイ男性向けゲイマンガ）では登場人物の身体が特徴的に描かれることもあるが、そこには注目しない。例えば、児雷也や田亀源五郎の描く登場人物は筋肉が隆起した「マッチョ」やボディビルダー的体型の人物がほとんどである。対して、例えば市川和秀が描く登場人物は中肉中背であり、そこに身体的特徴は見出せない。このようなバリエーションがゲイ男性向けゲイマンガにはありそれ自体重要な

(13)　サムソン高橋と熊田プウ助の共著によるものとして、『世界一周ホモのたび DX』(2012, ぶんか社)、『世界一周ホモのたび　祭』(2014, ぶんか社)、『世界一周ホモのたび　狂』(2016, ぶんか社)、『世界一周ホモのたび結』(2016, ぶんか社)、熊田プウ助の単著として、『トーキョーホモルン定食』(2014, 実業之日本社)、『GoGo!! おひとりホモ☆』(2015, ぶんか社)、『TOKYO中年駄ホモ生活』(2016, ぶんか社)、『世界でヤろう!!：おひとりホモ☆』(2018, ぶんか社)、『ダレセン！：Yes, all I need is Love!!』(2019, ぶんか社) がある。

側面ではあるが、本章ではこうした側面は捨象し、ストーリーに焦点を当てることにする。

ストーリーに注目するにあたって、ゲイマンガが「物語」であることがその表象にいかに関わるのかという点も触れる必要がある。やまだようこは「物語」を「2つ以上の出来事（events）をむすびつけて筋立てる行為（emplotting）」（やまだ2000:147）と定義している。つまり、ある出来事をいかなる順序と因果関係によって結びつけるのか、という行為が物語化になる。ではその出来事はいかにして選択されるのであろうか。出来事の選択は自由に行われるわけではなく、何を語り何を語らないかという選別が生じ、また語られやすいものと語られにくいものが存在する。和泉広恵（2001）によるとこれまでの物語論では、語られないものは語られるのを待つもの、語られることでドミナントストーリーに抵抗をもたらすものと考えられていた。しかし和泉はこの「物語化されないもの」を、「物語化される必要のないもの」、「物語化され得ないもの」として位置付け、物語化するという一種の強制力が、人々が感じる抑圧の原因となっていることを指摘し、「物語化することによる意味づけを放棄する立場」を提唱している。つまり、ある出来事を避けること（出来事の解釈の放棄）が一種の精神的安定をもたらす可能性について指摘している。これは同時に、「物語化を拒否されたもの」と捉え直すこともできるであろう。この視点から眺めるのであれば、実は第1章でみた『バディ』の実践も、「差別」や「悩み」を物語化することを拒否することによって、自己のアイデンティティを形成していたと解釈できる。

こうした出来事の選別は、「フィクション」であるマンガにも当てはまる。ゲイマンガが「フィクション」であるという特徴に注目すると、「フィクション」であるからこそ可能となる表現があると言える。例えば仲野由佳理（2016）は、少年院における演劇の役割と「教育的行為としての物語化」の分析をしている。自己の物語を新たに構築することによる更生（＝アイデンティティの変容）を目指すとき、例えば親への手紙を書くことなどが考えられるが、「混沌とした過去の経験や感情への直面化に、少年が躊躇を口にすることは少なくない。このとき、劇（＝フィクション）という形式は、言語化をうながす仕掛けとして機能する」（仲野2016:36）。また、「劇という枠組みの内部での言語化は、言語化に対する躊躇を緩和することで物語化に必要なナラティヴの収集を助けるだけではなく、得られた言語資源を用いた自己理解へと連続している」（仲野 2016:37）。つまり、演劇というフィクションによる間接的な表現様式により、経験を言語化するハードルを下げることができ、さらにはそこで使用される新たな言語資源によって自己の物語化を促すのである。演劇のこうした機能は、「フィクション」としてのマンガにも当てはめることができる。

前章が「現実的」な言説であったとすると、ここで扱う「フィクション」では『バディ』内で表出しにくかった言説を生み出している可能性がある。「自由」な欲望の表出が可能となるマンガというメディアでは、これまでに見てきた語りでは提示されにくい表象が形成されているだろう。しかし、ゲイマンガが一種のフィクションであるからといって、何を語り、何を語らないかという選択を自由に行っているわけではないし、完全に主流の物語と異なるわけではない。物語化の過程には、すでに社会で共有されているパターンが必ず入り込んでくる。こうした点についてケン・プラマーは次のように指摘する。

> ひとつの文化のなかから「離陸する」ほとんどのストーリーは、支配的なイデオロギーのコードという、その社会でもっとも受容されているナラティヴに入り込みやすいからこそ、そ

れが可能なのである。 (Plummer 1995=1998:240)

ゲイマンガの表現様式も、読み手に受け入れられるためにはそれが消化されうる形で形成されていなければいけないため、主流の物語形式が多分に利用されているだろう。ゲイマンガは既存の物語構造の中に自らを位置づけながら、ゲイマンガというジャンルにおける物語を形成するのだ。よってゲイマンガとは、既存で主流の物語様式と、ゲイ男性に特有の物語様式の組み合わせによって形成されているものと捉えることができる。これらの特有の組み合わせによって何が行われているのか、それがどのような効果をもたらしているのかという点が重要になる。

忘れてはならないのは、マンガが「フィクション」としての特徴を備えている一方で、ゲイマンガやBLをめぐる議論では、そこにゲイ男性のリアリティを求めていたということである。つまりゲイマンガの表象には、リアルな表象を求めるという側面と、フィクションであることを利用して物語を形成するという二つの側面があることになる。だがもちろん、「フィクション」と「現実」という二つの枠組み自体がそもそも成り立たない。アイデンティティは、社会的に構築されるものでありながらそれなしで人々は生きることができないという意味で、「必要なフィクション」(Weeks 2007=2015:149) であった。以上の点も念頭に置きつつ、ゲイマンガの物語の分析に移っていく。

まず、ゲイ男性向けゲイマンガで描かれる恋愛や結婚についての物語から分析を始めたい。その理由は、このテーマが多くのゲイ男性向けゲイマンガに描かれているからである。このテーマがよく描かれるのは、ゲイという言葉がそもそもどのような性別が好きかを意味する性的アイデンティティであるからであると同時に、ゲイ男性が結婚・恋愛の規範との関わりにおいて自らを捉えてきたからとも言える。大正期から 1970 年代までの男性同性愛者の「悩み」について分析をした前川 (2017) は、「周囲に打ち明けられない」という悩み、「相手探し」が困難であるという悩み、そして「結婚」の悩みという三つを分析し、それらが大正期から1970年代まで大きく変わらなかったことを指摘している。後者二つは恋愛・結婚に関わる「悩み」であり、それらがゲイ男性にとって特に大きな悩みであったことが前川の分析からわかる。では恋愛や結婚をゲイ男性向けゲイマンガはいかに描いてきたのであろうか。

2．女性との交際をめぐる葛藤 —— 1990年代までのゲイ男性向けゲイマンガ

2−1　女性との結婚をめぐり対立するカップル

1990年代中頃までのゲイ男性向けゲイマンガによく描かれるものに、女性との結婚・恋愛をめぐる葛藤がある。自分が同性愛者であることを自覚しながらも、世間体があるがために女性と仕方なく結婚する、いわゆる「偽装結婚」に関わるテーマである。1970年代の男性同性愛者と結婚についての言説をゲイ雑誌を資料に分析した前川 (2017) は、彼らの語りの特徴を3つあげている。ひとつは、妻に隠れて男性と交際するという語りである。2 つ目は、同性愛者であることを女性に告白し、理解ある妻と結婚をするという語りである。そしてもうひとつは、女性同性愛者との結婚、当時の言葉で言うと「百合族」と結婚をするという語りである。これらの3つはいずれも、同性愛者である自分が女性といかにして付き合うのかという点、そして女性と結婚をしないことが主流の選

択ではないという点において共通している。こうした女性との結婚のテーマは本節で扱う 1990 年代中頃までの作品にも登場するが、しかし、大きな違いがひとつある。それは、ここで見る作品に登場するカップルには、女性との結婚を最終的には望む一者と、男性との永続的な恋愛を望む一者によって構成されているものがあることだ。つまり、結婚観の異なる二者によって構成されるカップルが、一方は女性との結婚を最終的には望むが、もう一方はそうではないために葛藤をする物語が描かれるのである。

日本で初めて単行本化されたゲイ男性向けゲイマンガであると思われる山口正児の『ふたりの童話』(14)では、互いに異なる恋愛観・結婚観によって葛藤やすれ違いを経験する男性カップルが描かれる。登場人物の一人である岡田良男は、銀行勤めで独身の 28 歳で、世間からの結婚圧力に憂鬱さを感じている。もう一人の登場人物である萩原真二は、喫茶店のウェイターをしている独身の 23 歳で、イラストレーターを目指しているが、なかなかうまくいかず先が見えないことに悩んでいる。真二は良男を銭湯で見かけ、さらに後日書店で良男がゲイ雑誌を購入する姿を見かけた際、真二が良男に声をかけたことをきっかけに交際が始まった。同棲もはじめ、幸せな毎日を送っているが、良男は親からの結婚の期待に悩んでいた。良男が地元に帰ったときには両親によって近所に住む良江と面会させられ、彼女との結婚を勧められた。「親孝行はしなさいよ」（山口 1985:107）と近所のおばさんから言われ、父親からは、「今年で二十九だろ／もうそろそろ身をかためることも考えんといかんじゃろ」「かたわじゃないんだからな」（同上:100）と言われる。ついに良男は真二に「俺……結婚しようかと思ってる」（同上:116）と告白する。ここから二人は結婚について何度も口論を重ねる。真二はこう言う。

> 〔女性との結婚は〕そんなに価値のあるものなの／自分を犠牲にしてまで目に見えない道理や融通のきかないレールにのっかろうとするの
>
> それでいいの／もっと自分自身を大切にしなきゃいけないよ　（山口 1985:118-119）

それに対して良男はこう答える。

> できればそうしたいさ／でもな素直に生きることで目に見えない重荷を背負わされるくらいなら俺はみんなと同じように流れようと思う
>
> おまえはそういうふうに生きればいい（…）真二にはそれができる／俺にはそんな勇気がないよ／人に後ろ指をさされるより偽わりでもみんなの手が僕の手をとってくれる……嘘だとわかってもね　（山口 1985:119）

物語の後半における、「大勢の人が同じ服を着て自分も同じだって安心するのかい」（山口

(14)　以下では、表 2-1、2-2 中の長編作品（単行本名）を引用する際には、二重鉤括弧で書籍名を記す。短編集内の作品名は一重鉤括弧で表記し、適宜掲載書の書誌情報を記す。

1985:207）という真二のセリフと、「多数の中で少数の者が主張すれば上着もなにも脱がされ野たれ死にじゃないか」（同上:199）という良男のセリフ（図2-1）は、上記の対立をより鮮明に見せつける。このように、女性との結婚を否定して自分らしく生きようとする真二と、社会に流された方が良いと考え、親の期待に沿って女性と結婚をしようとする良男が対比的に描かれるのである。葛藤の末、良男は最終的に女性との結婚をやめ真二と暮らす決断をするが、両者の葛藤が終始生々しく描かれる。また『ふたりの童話』の特徴は、一人の主人公の視点からストーリーが進むわけではなく、良男視点の話と真二視点の話が交互に織り交ぜられながらストーリーが構成されているところにある。より細かく言うと、数頁から20頁ほどの間隔でストーリーの視点が入れ替わる。読者はこの二人のいずれに対しても同一化することができるようになっている。



図2-1　対立するカップル（山口 1985:198-199）

ボネ鏑木の『風のアルバム』にも類似する二者関係が描かれる。この作品は、大学進学で北海道から東京に来た18歳の大学生、風野豊（通称、フウ）を主人公とする物語である。陸上部に所属するフウは、なぜか男の先輩の染谷に目が行き、心臓がドキドキし、「わけの判らぬ感情／型をもたない欲望」（ボネ鏑木 1987a:20）が自分の中にあることに気づく。ある日彼は女子高生のミオとデートをするのであるが、デート中にズボンのジッパーが壊れてしまい、しかもパンツを履いておらず、そのことに気づいた彼女に呆れられデートは失敗に終わる。彼はやけ酒の挙句、夜の公園のベンチで陰部を出した状態で寝てしまう。そこに通りかかった平田源平（通称、おじさん、52歳）は、彼に話しかけ、帰るように促すが、泥酔しているフウは呂律の回らない返答しかしない。おじさんは「ジッパーちゃんと上げとかないとマズイんじゃないかな」「つまりだな／世の中には少しだけ変っとる人もいる／目の毒だよ／ほら／女をあまり好きじゃない向きだ…判るだろ？」と言うが、フウは「大賛成だ／俺ね／そーゆー考えの人と仲良くしちゃうー」と答え、おじさんは唖然とする（同上:25）。彼を「仲間」だと思ったおじさんは、彼を自分のマンションへ連れていき、愛撫を始める。しかしその時、ほとんど寝た状態であったフウが目を覚まし、「誰(ママ)れだよあんた」「あんたァオカマかぁ！？」「冗談じゃねーよ！俺そんなシュミねーからな！！」（同上:29-30）と叫ぶ。おじさんは謝り、「だがな…オカマなんていい方やめなさい／あれは我々を蔑視する言葉だ」と悲しげに伝える（同上:30）。フウは「さっきの悪気で言ったんじゃねえんだ／だからごめんなさい」「俺／イナカもんで知識とかねーから」「今度から気をつけまっす」と頭を下げて謝罪する（同上:31）。この出来事をきっかけにして二人は交友をはじめ、フウはおじさんに対しても不思議な感情を抱き始め、おじさんの住むアパートの部屋を間借りして一緒に暮らすようにまでなる。

ここで描かれる人間関係は『ふたりの童話』の二人とは少々異なる。というのも、フウは染谷やおじさんに不思議な感情を抱きながらも女性とデートを重ね、おじさんも妻とは別居中でありながらも既婚であるため、二人とも異性婚を志向する（した）人物であると言える。しかし『風のアルバム』でも、女性との交際を望む一者（フウ）と、男性との交際を望むもう一者（おじさん）の二者関係を中心に物語が進んでいく。

フウは自分のことを「ホモ」だとは認めない。彼女のミオとも喧嘩をしながらデートを重ねるが、染谷に対して不思議な感情を抱いてしまう。フウはおじさんに好意を寄せられていることを知っており、おじさんに何度も体を許してしまいながら、「男は女とするのが自然なンだ」（ボネ鏑木 1987a:82）と自分に言い聞かせる。染谷に対する感情は「ホモとかそんなのとは違う……強い友情だ！」（ボネ鏑木 1987b:71）と、強く自分に言い聞かせながらも、「俺もホモなんだろうか？」（ボネ鏑木 1987b:74）と思案し、さらにおじさんに対する感情についても、「君／自分がおもってる以上に源さんにホレてんだ／きっと」（ボネ鏑木 1987b:110）と、おじさんに初めて連れて行かれたゲイバーの店員に言われてしまう。こうしてフウは常に自分のアイデンティティに対して曖昧な感情を持ち続ける。この背後には、異性愛規範との葛藤があることは明確である。フウがおじさんとの同居を選択したのも、「おじさんが正直だから」（ボネ鏑木 1987b:70）という理由であり、「自分の欲望に自由に生きてるからさ／正直に！僕には出来ないや／とっても出来そうにない」（ボネ鏑木 1987b:71）と、おじさんを羨望するのである。彼は男性への恋愛・性愛の感情に正直に生きるべきか、それともそれを否定して女性との関係を選択すべきかという選択肢の間で葛藤するのだ。作者があとがきで、「フウがホモとして生きるか、女とゴールして我々に別れを告げるか、フウ自身まだ答えをもっていない」（ボネ鏑木 1987a:167）と記していることも、作者がそうした葛藤を描くことを意図していたことを物語る。

おじさんは既婚でありながらすでに 2 年間別居状態にあり、その妻もおじさんが「ホモ」であることをすでに知っている。彼が自分を「ホモ」であると何度も自認することは、フウと大きく異なる点であり、おじさんはすでに男性との恋愛を選択する決意をしている。彼はフウに対して強い愛情を感じているが、フウが染谷に対して不思議な感情を抱いていることを知らず、彼女のミオとデートを重ねていることは認識している（彼女は何度も二人の家に遊びに来ている）。しかしあまり性格の良くない彼女をおじさんは好ましく思わず、心の中で「フウ／お前は女に渡さない」（ボネ鏑木 1987b:68）と、語るのである。フウを渡したくないのは「女」であり、ミオという個人ではないことには、フウが異性愛規範に流されることを嫌うおじさんの心性が表れている(15)。

竹本小太郎の作品にも類似する物語が登場するが、竹本では、男性との永続的恋愛を望む側に視

(15)　この二人の間には擬似的父子関係も生じていると言える。おじさんは既婚・別居中であるだけではなく、息子も若くして亡くしている。またフウに実父はいない。フウがおじさんに聞こえない声で「好き」「お父さんみたい」「本当にそうだったらいいのに」（ボネ鏑木 1987b:81-82）と囁くことや、おじさんが亡き息子との思い出を回想する場面、おじさんが息子をフウに重ね合わせるような場面が何度か登場することは、彼らの互いに対する感情が父への憧憬と息子への憧憬を含んでいることは明確だろう。この点は他のマンガでは見られないが、男性間の恋愛・性愛において疑似親族関係が形成されていたことは、1970 年代のゲイ雑誌を分析した Mackintosh（2010）や、『薔薇族』（おそらく 1980 年代の号）の文通欄の投稿を分析した近藤（1987）によって指摘されている。前章の 4-5 節の分析と合わせて、疑似親族関係・庇護関係が現在のゲイ男性間でいかに利用されているのかという点は、「結婚」から排除されてきたゲイ男性のアイデンティティを論じるにあたって、今後別途論じる必要があると言える。

点が置かれる傾向がある。単行本のタイトルともなっている「5 月のせいかもしれない」(竹本 1997b) は、卓と満のカップルの話である。一緒に住んでいると思われる二人は、微笑ましくテレビゲームをし、食事をし、クローゼットの服を眺めていたかと思うと、突然、物思いにふけるような顔つきで思い出のゲーム、食器、服を次々とゴミ袋へと放り投げていく。二人はベランダで星を眺めながら、「どうしても変わんなくちゃいけないものなのかな」「どうしたって逆らえねーことあるじゃねーか」(同上:11) と言葉を交わす。卓は「夜が明けてきた／もうパーティーは終わりだ――行きな」(同上:15) と言い、満はそれに対して「子供できたら卓さんの名前もらっていい？」(同上:16) と問いかけ、部屋を出ていく。満は女性との結婚を選択したのである。満が結婚して 2 年後、卓の元に彼から手紙が届いて物語は終わる。そこにはこう書かれていた。

> 卓さん元気ですか…早いもので結婚して 2 年近くたってしまいました。この子が卓也です。卓さんの言ってたとうり(ママ)男の子ができてしまいました。…はは…卓さん…俺は今幸せなんだと思います。そうさせてくれたのは…卓さんです…ありがとう… (竹本 1997b:18)

同じく竹本による「春へ急ぐ人」(竹本 1997a) というタイトルの作品は、主人公の長瀬が電車に乗ってとあるところへ向かう場面から始まる。混んでいる車内で、空いていた隣の席に堀という男が座ってきた。非常にフレンドリーな彼に長瀬は迷惑そうな顔をする。長瀬は連絡をするために席を立ち、電話をするのだが、その間にトイレに行こうと席を立った堀は、長瀬が電話で話すのを聞いてしまう (図 2-2)。

> どういうことだよ／会いに来てもらっちゃこまるって
> 一年ぶりなんだぞ／おまえに会いたくって俺…ここまで来たんだぞ
> え…なに？今…なんて
> …結婚！？
> …結婚するって／そんな…
> 俺は…じゃあ俺はどうなるんだよ／お前が戻って来るのをずっと待ってた俺は――
> あ…もしもし？延彦…延彦！？ (竹本 1997a:27-28)

そして長瀬は、地元に帰ってしまった (と思われる) 延彦のことを 1 年間思い続けていたこと、連絡はほとんどなくなっていたが、相手も会いたいと思ってくれていると信じてサプライズで会いに行こうとしたことを、堀に打ち明ける。納得のできない長瀬はそれでも会いに行こうとするが、堀は無理やり長瀬を途中下車させる。そこは桜の咲く海辺の駅であり、堀は長瀬に気持ちを落ち着かせてもらおうとここに連れてきた。延彦だって苦しんだこと、本当に延彦が好きならば彼を許すべきであることを堀は伝え、長瀬が堀に礼を言い物語は終わる。そのほか、「X'MAS なんていらない」(竹本 1997a)、「聖なる夜に降る雪は…」(竹本 1997b) でも女性と結婚をしている人物が登場する。

竹本による物語はいずれも、主人公は恋人の男性との恋愛を望んでいるが、相手は女性との結婚を選択してしまうというものになっている。主人公が最終的に、相手が女性と結婚してしまったことに一定の納得を見せている点は『ふたりの童話』とは異なるが、これらの話も女性との結婚を巡

って引き裂かれるカップルが描かれている点は同じである。

山口や竹本のマンガが予定調和の物語を描く傾向があるのに対して、登場人物の死をもって異性愛規範からの逃れ難さを描き、女性との結婚を糾弾する物語が山川純一によって描かれている。山川の作品は 1990 年代のその他の作家の作品と比べて性的な描写が多く趣が異なる印象があるが、彼も女性との結婚を取り上げた作品を描いている。「裏切り」(山川 1986b) というタイトルの作品は、洋二と早苗の「一度として満足な性交渉のない夫婦」(同上:54) の話である。洋二がセックスをしてくれないことを理由に、早苗は離婚を切り出す。洋二も「俺のような者が女と結婚だなんてどだい無理な話だったのさ」(同上:55) と内心では離婚をしたがっているが、しかし会社の部長の仲介によって結婚したため、部長の面目を保つためにも離婚はできないと、早苗に叫ぶ。さらには離婚したとしても自らの経済状況では慰謝料を払うことができず、また出世もできなくなるため、洋二は早苗が浮気するのを待とうとする。洋二に耐えきれなくなった早苗はアパートの隣に住む男の佐伯に、「私もうがまんできないのよ／わかるでしょう？主人が一度も抱いてくれないの…あなたにやってもらう日が来たわ」(同上:57) と話しかけ、二人は早苗の自宅でセックスを始める。しかしその最中に洋二が帰ってきてしまう。洋二は二人を殴り、早苗に「とっとと出て行け！」と怒鳴る。佐伯と早苗の二人は佐伯の部屋へ行き、洋二は一人酒を飲みながら自宅で気持ちを落ち着かせていると、そこに佐伯が一人でやってくる。洋二は高らかに笑い、「これであいつと慰謝料の心配なく別れることができる」「あの淫売女め／お前が俺のさしむけた男とも知らずに抱かれたのが運のつきさ」と言い、佐伯は洋二に「抱いてよ」と語りかける (同上:62-63)。洋二はそれに応えて佐伯にオーラルセックスをするが、その瞬間、洋二は苦しみだし、吐血し、生き絶えてしまう。そこに早苗が「やったわね」と言いながら登場する。佐伯のペニスには毒が塗られていたのだ。佐伯と早苗は洋二の死を、妻に浮気されたゆえの焼身自殺として作り上げる。「この男／死因が何かもわからないほど丸焼きにしてやる！」「私をだまして結婚したばつよ／いい気味だわ」(同上:66) と洋二を蔑む表情で言う (図 2-3)。早苗はすでに佐伯の子を身ごもっており、洋二の保険金で豪華マンションに引っ越し暮らす未来を語りながら物語は終わる。



図 2-2　結婚の報告 (竹本 1997a:28)



図 2-3　偽装結婚の糾弾 (山川 1986b:66)

偽装結婚によって早苗を騙していた洋二がさらに早苗を騙し離婚をすることで、「自分らしく」生きようとする物語だと思わせつつ、最後は早苗と佐伯に殺されてしまうというこの物語

では、異性愛規範の強さとそこからの逃れ難さが主人公の死をもって表現されていると言うことができる。同時に、同性愛者でありながら女性と結婚し、女性を騙してしまうという後ろめたさ、あるいは偽装結婚であることが露呈してしまうかもしれない不安を描く作品と捉えることができる。山口や竹本で描かれていたようなカップルは登場しないが、ここで描かれているのも女性との結婚をめぐる葛藤、そしてそれへの糾弾である。

以上の作品ではそれぞれに違いがありながらも、女性との結婚・恋愛を批判的に捉える物語が描かれていた。分析対象が異なるため純粋な比較はできないものの、ここで一度前川（2017）の分析とここでのゲイマンガにおける表象を比較してみたい（前川が分析したのはゲイ雑誌の読者投稿）。前川の分析では、主に、同性愛者である自分が女性とどう結婚すべきなのかという点が語られており、女性との結婚・交際と男性との交際のうち、前者のみを選択するか、あるいはいかに二つを〈両立〉すべきかという悩みが語られていたことになる。しかし本節で見た作品群には、前者と後者を志向する人物が対立的に描かれており、二つの〈両立〉を図ろうとする物語はほとんどない。マンガを離れ当時の社会の「実情」を考えると、確かに 1980–1990 年代当時、前川の分析のように多くの男性同性愛者は女性との結婚を最終的には選択していたのかもしれない(16)。しかしこれらの作品を見る限り、1990 年代中頃までのゲイ男性向けゲイマンガで表現されているのは、自身が同性愛者であるという事実を引き受けることのできない人物である。つまり、女性との結婚・交際と男性との交際の〈両立〉ではなく、世間体を気にするがために女性と結婚するのか、それとも本当の自分の欲望に従って男性との永続的な恋愛を望むのか、この二つの選択肢の間で苦悩するゲイ男性が描かれていたのである。

2–2　居場所／ゴールの探究

このアイデンティティの分裂は、生き方や居場所を見つけようとするテーマから読み取ることもできる。例えば、『ふたりの童話』では、「居場所」がテーマとなっている。単行本の最初の扉絵には、「何万の人が自分の場所を探してる／僕にもどこか場所がある／だれか僕に幸福を運んでくるそんな人が必要さ」（山口 1985:3）とあり、また物語の中盤でも各登場人物に触れ、「誰もが日だまりの心地よい居場所を探してる／少なくとも信じられる人のもとでひざを枕に……良江は自分の居場所は疑惑の中で揺れていた／良男は自分の居場所がどこか気づきはじめていた／真二は自分の居場所は愛する人のもとだと信じていた」（山口 1985:170）とあるように、各人物が自分のほんとうの「居場所」を見つけることが物語の軸に据えられている。物語の最後では、良男は真二と暮らすことを決意し、良男に振られてしまった良江もその三年後には「幸せな結婚」をしている。皆が自分の「居場所」を見つけることで話は終わる。つまり『ふたりの童話』は「居場所」探しの物語とも言えるのである。

『風のアルバム』では居場所という言葉は使っていないものの、男性同士で生きることを問いかけ

(16)　1991 年の段階で伏見憲明は、「ゲイは結婚しているの？」という質問に対して次のように回答をしている。「大半は結婚するんじゃないですか？結婚に対する圧力って大きいし、この社会ではしてないと一人前とは見なされませんからね。性的には無理をしても体面を保とうとしますよ。（…）いままでは時代の限界というのもありましたから、ある年齢以上の方はだいたいしているでしょうね。これからはわかりませんが……。」（伏見 1991:16）

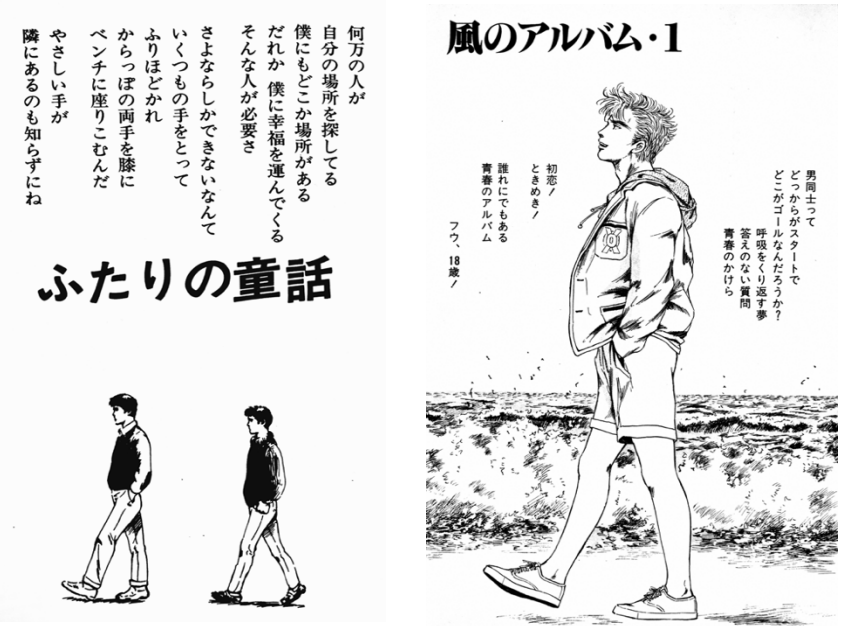


図 2-4　『ふたりの童話』と『風のアルバム（1）』の扉絵

る扉絵から物語が始まっている。「男同士ってどっからがスタートでどこがゴールなんだろうか？呼吸を繰り返す夢／答えのない質問／青春のかけら／初恋！／ときめき！／誰れ(ママ)にでもある青春のアルバム」（ボネ鏑木 1987a:5）という言葉には、単に登場人物が十代でアイデンティティのモラトリアム期を生きていることだけではなく、「男同士」で生きるという「答えのない質問」についての何かしらの答えを模索しようとしている主人公を読み取ることができる。この作品の中でその答えが示されるわけではないが、物語全編を通して、主人公のフウは自己のアイデンティティの葛藤を経験するのである。

この二つの初期のゲイ男性向けゲイマンガの扉絵が非常に似た構図を見せているのは単なる偶然とは言えないだろう。いずれの扉絵でも主人公となる人物がどこかに向かって歩いていく（図 2-4）。おそらく『ふたりの童話』の二人は「居場所」のあるところを目指して歩いており、『風のアルバム』のフウは男同士で生きていくことの「ゴール」を目指して歩いているのだ。

以上のように、1990 年代までのゲイ男性向けゲイマンガでは、女性との結婚・恋愛についての葛藤を描く作品がいくつも存在していた。そしてそれらの作品は同時に、同性愛者としてのアイデンティティを引き受けることのできない人物、男性との永続的恋愛を選択することのできない人物の葛藤を描いていた。こうした「悩み」は最終的に解決されるもの（山口正児）、糾弾されるもの（山川純一）として描くマンガもあれば、引き受けざるを得ないもの（竹本小太郎）として描くものもあった。このような差異はありながら、いずれの作品においても描かれているのは、異性愛規範を原因とする悩みに葛藤する人物であった。

しかし、以上の葛藤を単にゲイ男性の「悩み」を描いたものとして捉えるのではなく、物語上の機能を持った設定としても捉える必要がある。恋愛観の違う対立するカップルが描かれたり異性愛規範との葛藤が描かれるのは、恋愛成就の遅延（delayed consummation）（恋愛成就を妨げる障害）を生じさせ、（長編の連載作品に関しては特に）雑誌における連載を継続させるためであった可能性

もある。例えばアメリカのテレビドラマ“Will & Grace”（邦題：ふたりは友達？ ウィル&グレイス）ではゲイ男性とストレートの女性の二者関係が描かれるが、それも恋愛を成就させず物語を継続させるための障害であるとされている（Battles & Hilton-Morrow 2002）。つまり、ここまで見てきたゲイマンガでは、異性愛規範を原因とする葛藤が登場人物の恋愛成就を妨げる障害として利用され、それを乗り越えることによって純愛が達成される物語（あるいはそれによって純愛が達成されない悲劇）が描かれてもいると言えるのだ。要約すると、この時期の作品ではゲイ男性は異性愛社会を原因とする葛藤・悩み抱えた存在として描かれ、女性と結婚するか否かの選択肢の狭間で揺れ動き、その葛藤・悩みが恋愛成就を左右するための障害として利用されていたと言うことができるだろう。しかしこうした物語と葛藤は、2000 年前後を境にして、それ以降のゲイ男性向けゲイマンガではほとんど描かれなくなっていく。

３．ゲイコミュニティにおける恋愛と悩み

—— 2000 年代以降のゲイ男性向けゲイマンガ

2000 年代のゲイ男性向けゲイマンガから、登場人物は男性と恋愛をすることを当たり前のものとして、そして同性愛者であることを肯定的に受け入れているかのように物語が進んでいく。その背景には、ゲイであることを肯定的に捉え直そうとする当事者による運動の影響があったと考えられる。例えば 1990 年代には、「かわいそうなホモからハッピーなゲイへ」というクリシェが用いられたり（石田 2006:208）、前章で見たように、『バディ』では 1997 年から「ハッピー・ゲイ・ライフ」という言葉によって、肯定的なアイデンティティが提示されていった。また以下で見ていく作品では、ゲイコミュニティ（ゲイ男性同士の交友・交流関係を広く指し示す言葉として用いる）の存在が重要になってくる。まず、2000 年代以降のゲイ男性向けゲイマンガによく描かれるようになる、愛情の真正性に関する物語（浮気をめぐる葛藤や愛情に対する疑義）について考察を進める。

３−１　結婚制度の欠如による浮気の発生

愛情の真正性を描く作品は 2000 年代になって初めて登場したのではなく、もちろん 1990 年代にも存在している。例えば、ゲイ男性の浮気を描いたものに『Tango』（に収録されている長編「Tango」）がある。作者の上条毬男はインタビューの中で、「あの頃〔「Tango」の連載を始めた頃〕って『トレンディドラマ』が流行ってて、僕自身あまり好きじゃなかったんだけど。（笑）でもゲイマンガでこれやってみたら…って考えて。身近なゲイの世界で、自分達がやってるようなこととか、やってなくても実際にありそうなことを描いてみよう」（BADI1997/3:61）という意図により「Tango」を描いたと語っている。その当時の流行をなぞりつつ、〈リアル〉なゲイ男性の生き方を描こうとしていることがこの語りからわかる。

この作品では 3 年ほど交際をしている小田島浩と篠田昌巳のカップルを中心に物語が進んでいくが、浩は昌巳が浮気をしているのではないかと心配し、昌巳は他の男性と頻繁に会いセックスをしている様子が描かれる。浩はゲイの友人と会話をする中で、「ほら、たとえば昌巳なんてたぶん結構遊んでると思うんだ」「そんな話も聞くしね」（上条 1997:41）と語ったり、昌巳に対しても、「なあ、

昌巳／最近時々不安になるんだよ／年なのかなあ」「お前が俺の元から離れるんじゃないかって／はは、バカな話だろ」（同上:58）と、恋愛が永続しないのではないかと心配をしている。対して、昌巳はハッテン場となっていると思われる公衆トイレで出会った男性と頻繁に会いセックスをし、しかしオープンリレーションシップ（カップル外での性交渉を良しとする関係性）ではないため、その浮気を隠そうとする様子が描かれる。この作品では浩と昌巳の双方の視点から物語が描かれるため、読者は浮気を心配する側と浮気をする側の双方にアイデンティファイしやすくなっており、その構造は『ふたりの童話』と類似している。

「Tango」で描かれる浮気についての悩みの背景には、男性同士で結婚ができないことがある。浩の友人たかしが恋人と別れ、浩に対して「ホモ同士の恋愛ってやっぱりそんなモンなのかなぁ」（上条 1997:40）と相談をした際、浩は次のように語る。

> この世界って肉体から入っていくのが多いじゃない
> あげく（SEX）やろうと思ったらお手軽にやれちまう／サウナとかハッテン場とか、ゲイバーだってそうだろ？
> そのほとんどが男をみつけに来てるわけだ／今の僕達みたいにそうじゃない奴らもいるけどね
> 婚姻届なんてモンないから物理的に束縛されるものもないわけだし、だから、そこいら辺をどう感じるか…じゃないかな　（上条 1997:40-41）

このセリフでは、ゲイ男性は気軽に他の男性とセックスをすることができてしまうこと、そしてその理由が、結婚という制度的な枷が欠如しているからであると言われている。逆に言うのであれば、結婚さえあれば、浮気の悩みは解決されるということにもなる。この意味においては、『Tango』でも異性愛社会を原因とする悩みと葛藤が描かれていると言えよう。

上のセリフを少し異なる視点から捉えると、結婚制度のない中、男性同士で交際するにあたって、いかに「相手と『折り合って暮らして』」（Giddens 1992=1995:31）いくか、つまり、いかに交渉・妥協をして交際していくかを描いているとも言えるだろう。浩はそれを「暗黙のルール」と言い、それを、浮気をしてもその「相手を、家に連れて来ない」、「やったって事、おくびにも出さない」（上条 1997:41）ことであると語る。しかし物語が進むにつれ、浩は昌巳が他の男性と頻繁に会っていることを知ってしまい、ふたりは破局を迎える。その後、浩は昌巳を許し縒りを戻すが、その直後に浩は交通事故によって亡くなってしまう。この浩の死によって表現されているのは未来の遮断であり、男性同士で交際を永続させるという未来を描かない・想定させないということであると解釈できる。「暗黙のルール」による折り合いのつけ方は一時的には有効かもしれないが、必ず成功するものではないということ、長期的な未来には繋がらないということが表現されるのだ。つまり、ゲイ男性同士の恋愛の困難さ・不可能性が結婚制度の欠如と共に描かれ、未来の不確かさを当場人物の死を描くことで隠蔽しているのである。

3−2　恋愛の自由化による浮気の発生

恋愛の真正性の物語は 2000 年代以降の作品でより顕著に描かれるようになるが、作品内で結婚

制度の存在は必ずしも触れられるわけではない。愛情や恋愛関係が真正なものかどうかをめぐる悩みが物語の中心を占めるゲイマンガに『Relation』がある。ここに収録されている短編全9作品中、6 作品が恋愛の真正性に関する不安を描いた作品と言える。収録作品の多くに共通するのは、主人公は一途でありながらも恋人はそうではないというカップル形式である。「間違い探し」（小日向 2008b）は、マサカズとヨシキの同棲をしているカップルの話である。ヨシキは仕事の打ち合わせを装い、「客先」という言葉を使い、いつも別の男のところへ通っている。マサカズはヨシキの靴下が朝に家を出て行った時と違うことなどに気づいており、この「浮気」については両者に暗黙の同意がすでに形成されているような雰囲気を醸し出している。普段はこれを見ぬふりをしてやり過ごすマサカズであったが、それに耐えられなくなり、その日に限ってヨシキが帰ってきた瞬間彼にキスをし、セックスを始める。しかしマサカズは次の日この家を出ていくことを決めたという物語である。この作品では、マサカズの視点から浮気をされることの不安と、浮気による破局が描かれており、ゲイ男性の恋愛における困難が表現されている。この作品では浮気が破局の原因として描かれているが、浮気や破局の可能性を受け入れる作品もある。

「そこにあるもの」（小日向 2008b）も恋愛の不安をわかりやすく描いている。主人公のヒトシは、数年前に幸せの絶頂で彼氏のマサキに振られた。自身の部屋で同棲をしていたため、マサキのものが部屋に数多く残されているのだが、それらを捨てられずにいることに、現在の彼氏ユタカはショックを受ける。マサキの物を捨てるのでずっと一緒にいてくれるかとヒトシはユタカに尋ねるが、「バカ」「そんなのムリに決まってんだろ」「死ぬまで一緒なんてねーだろフツー／どっちか飽きるかも知んねーし浮気で別れるかもしれない／当たり前の話じゃん」（小日向 2008b:119）と大笑いしながら言われてしまい、ヒトシは仰天する（図 2-5）。だがヒトシは同じような悩みを抱えている人にバーで会ったことをきっかけに、部屋のものをすべて捨て、新しい家具をユタカと買う決意をする。家具選びでユタカと揉めた結果、すべてユタカに任せることにし、いつも自分の我を通すユタカとの時間に楽しさを感じないヒトシであったが、一緒にテレビを見て笑っている時にわずかながらも幸せを感じ、「いいやもう／ずっと続かなくても幸せ感じるならもうそれでいいや」（小日向 2008b:119）と、涙を流しつつ微笑みながら言うのである。

この作品でヒトシは、自分がいつか捨てられてしまう可能性にショックを受けつつそれを引き受けている。「間違い探し」とは違い、ゲイ男性の恋愛が永続しないことを開き直りによって受け入れ、そうした不安を解消しようとするのがこの作品と言えるだろう。しかしヒトシは「いつか終わる関



図 2-5 「当たり前」としての恋愛の続かなさ（小日向 2008b:119）

係なんてそんなのいらない！！」（小日向 2008b：120）とも言うように、永続的な恋愛を望んでいるが、永続的に恋愛をするという未来を見ずに、〈いま〉を楽しむための選択をしている。『Tango』との比較において捉えるのであれば、『Tango』では登場人物の死によって未来が強制的に遮断されていたが、「そこにあるもの」では未来を見ず、〈いま〉の幸せを選択する主人公が描かれ、それが恋愛の悩みの解決になっている。

そのほかにも、『坊や良い子だキスさせて』でも恋愛の困難さがよく描かれる。例えば、「サイコーの恋人」では「カレ」に恋をする主人公が描かれるが、相手にとってはそれが二股である様子が描かれ、「HELLO☆負け戦ちゃん」でも「恋人がいる男の 2 号」だった主人公が「俺…ついに…」「本妻になれたんだ♡」（大久保 2008：99-100）と喜ぶものの、これまで「負け」ばかりだったために不安を抱える様子が描かれる。こうした物語では、恋愛関係が永続しないという不安、恋人が別のより良いパートナーを見つけてしまうかもしれないという不安が描かれている。またゲイ男性の性的奔放さが恋愛の悩みとして描かれる作品もある。例えば、「ろくでなしの恋」（晃次郎 2015）では主人公が、「恋愛よりも遊びのセックスばかり」（晃次郎 2015：5）をする同居人に片思いをする様子が描かれ、「走れ！ウォシュレット男！」（市川 2005）でも、彼氏がハッテン場に行っているのではないかと心配する主人公の様子が描かれる。

これらの不安は、最終的に解消されることもあればそうでないこともあるが、これらの作品では、浮気の不安が恋愛成就を左右する新たな障害として利用されているのである。重要なのは、ゲイ男性同士の恋愛の中でこうした不安が喚起されるようになっていることが描かれはじめたこと、そしてゲイ男性同士の恋愛が異性愛社会を直接的原因としない不安感・不信感と共に描かれるようになってきたということである。物語の舞台においても登場人物の発言においても、異性愛社会は意識されていない。

恋愛の真正性が悩みとして生じるには、その前提として恋愛や性的なパートナーを得ることが比較的容易となっていなければならない。この背景として、ゲイ男性同士の出会いを促すテクノロジーとしてのインターネットが、1990 年代末ごろから発達していったことがあると考えられる。それにより、同じ地域に居住するゲイ男性同士が知り合うことが容易となった。これまでも例えばゲイ雑誌の文通欄などが存在してきたが、紙媒体を用いたやり取りは時間を要したのに対して、インターネットではより手軽に交流ができるようになった。2000 年代からは個人ホームページ（ゲイ男性個人のプロフィール、日記、BBS などによって構成される個人運営のホームページ）が流行し、mixi や Twitter などの SNS、ゲイ男性向けの SNS や出会いアプリの普及によっても、ネットをきっかけとした交流の機会が増大していった（鹿野 2011；石田 2019：204-207）。

山田昌弘は1970 年代以降の日本社会における男女交際の活発化を「恋愛の自由化」（山田 1996：119）と呼び、それによって未婚化・晩婚化が進んだと分析している。女性の社会進出、恋愛に対する意識の変化、青少年の経済的余裕の発生、匿名性が確保された出会いの場・手段の発達によって異性と出会う機会が増え、「もっといい人がいるかもしれない」という考え方が広まった。結果として結婚相手を選択するのに慎重になり、結婚を遅らせることになった。恋愛の相手の選択肢が増え、「もっといい人がいるかもしれない」という状況がゲイ男性の間でも生じたのが、出会いのテクノロジーが発達し始めた 1990 年代末頃からであると思われる。

ゲイ男性間での出会いの容易化と恋愛の自由化は、ゲイ男性同士の友人関係を形成することも促

進したと考えられる。そうした背景を反映するように、恋愛だけではないゲイ男性同士の交友が描かれるようにもなる。例えば、『ミルク』や『アグリっ娘』ではゲイ男性同士の交友が物語の展開する場面設定となっており、ゲイ男性同士での飲み会、旅行や花見をする様子などが描かれる。そしてこれらのマンガでもゲイ男性同士の恋愛の困難さが描かれる。『アグリっ娘』はゲイ男性の恋愛・交友関係における美醜の格差を描いた物語である。主人公のアズサとテルミは「ブス」のゲイ男性であり、「イケメン」は恋愛やセックスを楽しめる一方、「ブス」はそれらを謳歌できない状況が皮肉を込めて描かれる。「イケメン」のゲイ男性は同じ「イケメン」のゲイ男性としか交友関係を形成せず、「ブス」はそこからも排除される。アズサの「アタシはブスを差別しない！！」（小日向 2008a：43）という発言からも、ゲイ男性の間では、恋愛においても友人関係の形成においても、美醜の基準が強烈に働くことが一種の「差別」として描かれている。ここでの美醜の基準とは単に顔の端正さではなく、いかに男性性を体現できるかである。図 2-6 を見て明らかなように、ふたりの「ブス」の主人公は体の細さや身だしなみなどすべての面においてフェミニンに描かれている一方で、「イケメン」の登場人物はそのような描き方はされず、どちらかと言えば男性的（短髪、髭、広い肩幅など）に描かれている。

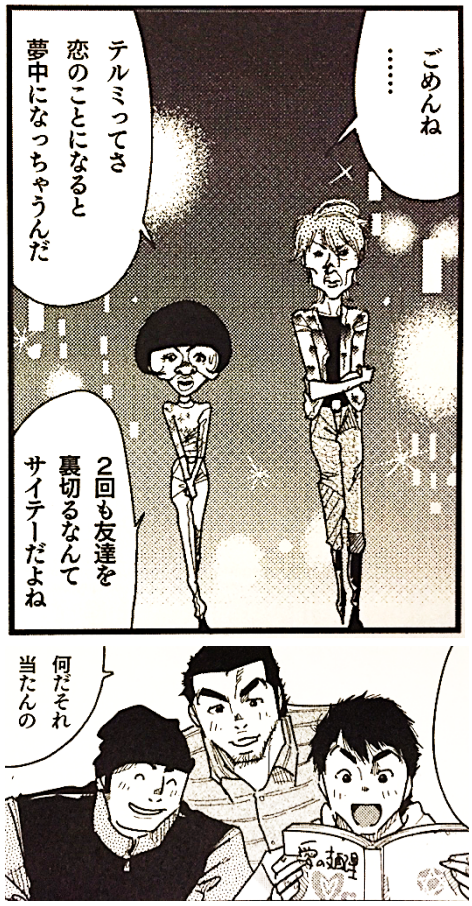


図 2-6　「ブス」の主人公（上）と、「イケメン」の登場人物（下）（小日向 2008a：81，30）

山田昌弘は恋愛の自由化によって、モテる人とモテない人の階層分化が生じたことも指摘している。「魅力」は人々に不平等に配分されている。集団があれば、その中で多くの人が「魅力的」だと感じる人と、そうでない人がいる。恋愛の自由化以前、恋愛の相手が限られていた時代には、魅力を基準としたパートナー選択は限定的なものであった。しかし自由化以後、パートナーの選択肢が増えることによって、より「魅力的」な人を選ぼうという欲求が生まれることにより、選ばれる人と選ばれない人の格差が広がった。「ブス」と「イケメン」の対立を描く『アグリっ娘』は、ゲイ男性の間で恋愛の自由化が生じているだけではなく、彼らの間で「モテ」と美醜の格差がこれまで以上に意識され始めたことを証明する作品でもある。また『ミルク』における恋愛は、ゲイの主人公の健太の淡い恋愛と、健太のゲイの友人であるカズの「不幸」な恋愛が対比的に描かれている。カズはゲイのアユムと出会い、良い方向に進展すると感じていたが、彼を自宅に招いた際に財布から金を抜き取られて逃げられてしまう。対して健太は高校時代からの友人の周作（異性愛者）に長い間片思いをしており、その淡い恋心が物語を通して展開していくのである。ゲイ男性同士の恋愛は不幸とともに描かれ、ノンケへの片思いは淡い恋愛として描かれる。このように、『アグリっ娘』と『ミルク』でもゲイ男性間の恋愛における不信感が描かれている。

以上のような恋愛の真正性についての悩みは、1990 年代までなかったわけではないものの、比較的後景化されていた。なぜならば、女性との結婚圧力が物語化されている時代には、男性との恋愛をどのように継続させるかといった悩みよりは、男性との恋愛をそもそも選択できるかどうか（女性との結婚を否定できるか否か）といった悩みがまずあったからである。しかし、男性同士の恋愛を選択することが当たり前として描かれることによって、これまで後景化されていた悩みが前景化することになった。こうした物語の特徴からは、ゲイ男性の恋愛や交友が活発になった現代性をリアルに写し取ろうとしたり、皮肉を込めて描こうとしたりする作者の意図を読み取ることができる。

3−3　恋愛の動機の不明確化／自己の固有性の希薄化

女性との結婚という障害からゲイ男性の浮気という障害へと 2000 年代以降は描かれるものが移行している点は、何を示唆しているのだろうか。

まず女性との結婚という障害で描かれるのは、登場人物の一人が女性との恋愛を選択するか、男性との恋愛を選択するのかという二択の間に生じる葛藤である。もっともわかりやすいのは『ふたりの童話』であろう。内容にはバリエーションがあるが、女性との結婚に直面し二者択一を前に葛藤するという点では、彼は必ずいずれかを選択するという能動的な立場にいる。そしてこうした葛藤を抱える人物にとっては、恋愛の動機付けや意味合いも比較的明確に決まっている。彼が女性との恋愛を選択するのは規範に従って生きるためであり、同性との恋愛を選択するのは自分らしく正直に生きること、規範にとらわれずに生きることの表現でもあった。彼の恋愛における恋愛対象の選択は、女性を選ぶか男性を選ぶかという性別の選択によって規定されているため、どの女性を選ぶか、どの男性を選ぶかという関心は背後へと追いやられ、中心的な葛藤とはならなかった。それと比べ、ゲイ男性の浮気という障害に伴う悩みは根本的に異なる。なぜならば、恋愛の葛藤が、どの男性を選ぶのかというひとつの性別内で行われるようになったためである。これがもたらした根源的な影響とは、どの男性を選択するのかという行為の動機付けがそれ以前の恋愛と比べて格段と不明確になったことである。

ゲイ男性向けゲイマンガが描いているのは、恋愛の対象として選ぶ相手を能動的に選択している人物だけではなく、相手に選ばれるか選ばれないかという受動的な立場にいる人物でもある。1990 年代の女性との結婚という障害が描いていたのは、自分は男性との恋愛を継続したいが、相手はそうではないという人物でもあった。この人物の視点から見ても、相手が女性との結婚を選択し自分という男性との恋愛を選択しない場合、あるいは自分との恋愛を選択する場合も、その動機を比較的明確に察することができる（女性との結婚は規範に従うため、自分という男性との恋愛は自分らしく生きるため）。一方で 2000 年代以降の、他のゲイ男性との浮気という障害の物語で浮気をされる側の視点から物語を眺めると、そこには必ずしも納得のいく動機を見出すことはできない。つまり、なぜ自分ではなく他の人が選択されたのか、なぜ他の人ではなく自分が選択されているのか、という点についての明確な理由を見出すことが困難となっているのである。つまり、女性との結婚を葛藤とする 1990 年代の作品と比べ、ゲイ男性同士の浮気を葛藤とする 2000 年代以降の作品では、パートナーを選ぶ側と選ばれる側の双方において恋愛の動機、パートナー選択の理由・根拠が不明確となっているのである。

この点を、恋愛における他者の問題として捉えて、「私」という一人の存在がどのような構造に絡

め取られているのかを考察したい。小谷野敦は恋愛と他者性の問題について、二つのレベルにおける認識を論じている。ひとつとして彼があげるのは、自分の固有性と恋愛の関係性である。彼は「『情熱恋愛』が重要なのは、その中で恋する主体が、自分自身の固有性に気づくからである」（小谷野 1997:178）と言い、情熱恋愛（ここで彼がいう情熱恋愛とは「激しい片思い」のこと）は他の人とは違う自分、恋愛対象とも違う自分というのを見せつけるという。個人にとっての恋愛とは、「天地開闢以来だれ一人『同一』の経験をしたことのない、この世に初めて現われた〈出来事〉」（小谷野 1997:178）として感じられるのである。例えば、失恋をした人に「男などこの世にはいくらでもいるじゃないか」と言ったとしても、その時のその人にとって今愛する人はそのように映るわけではない。ここには、恋する対象も、私という恋する主体も、その他のすべての人物とはまったく異なる、同じ経験を共有することのできない固有の存在として立ち現れるのである。「他人が自分と同じように痛みや嘆きや喜びを感じているということに何の証明性もない、というのが本来的な『他者体験』である」（小谷野 1997:181）というのが、このことである。

もうひとつは、個人の固有性が経験される恋愛とは対になる、共同体的な恋愛である。これは上記の論をひっくり返すことで成り立つと言っても良い。つまり、自分の恋愛という経験が、実は他の人にも同じく生じている経験であると気づくことによって生じるものである。言い換えると、恋する対象が他にもいたこと、私という恋する主体が他の恋する主体となんら変わらないことに気づいた時、それは共同体的な恋愛になる。彼が例としてあげるのは、遊郭と色道である。そこで行われる恋愛は一定の形式だった振る舞いによる「疑似恋愛」であり、それは「不意打ち性」と「出来事性」が徹底的に奪われている。また色道論などの言説は、類的存在として太夫・女郎を語る特徴がある（小谷野 2017:75-76）。現代的な例で言うならば、恋愛マニュアル本を想像すれば良いだろう。そこでは恋愛を成就させるための技術が唱えられており、そのための一連の手順、行動形式が伝授される。この中では恋が思いもがけないところで意図せずに始まることや、それがひとつの特殊な出来事であることが唱えられるわけではなく、いかなる人物に対しても同じ行動を示せば成功につながることが伝授されているわけである。そこでは恋の対象も恋する主体も一枚岩的な類的存在としてしか捉えられておらず、ある人に対しては好意的に捉えられる行動が別の人ではそうならないことなどは、等閑視される。

これまで論じてきたゲイ男性の恋愛の物語に即して捉え直すと、1990 年代以前の恋愛物語は個人の固有性が確保された恋愛であり、2000 年代以降のものは共同体的で、個人が固有性を持ちにくい恋愛と言える。そしてこの両者の間では、個人と集団の関係性（ゲイ男性個人とゲイコミュニティの関係性）が根本的に異なる。女性との結婚が葛藤となる物語では、ゲイコミュニティと呼べるような場が物語の舞台とはならず、異性愛社会の中での自分という関係性が描かれていた。ここにはゲイ男性個人とゲイ男性の集団との関係性は薄く、パートナーの選択肢も閉ざされており、同性との恋愛や女性との恋愛の葛藤の経験は、彼個人が特有に感じるものとして描かれていた。対して 2000 年代以降の作品では、登場人物のゲイ男性はゲイ男性の集団との関係において自身を捉えている。だがこうしてゲイ男性の交流の中で自己を捉えるようになったことで、ひとつの葛藤が生じるようになった。それは、ゲイ男性のつながりがある程度自明となり、また男性との恋愛も自明となったと同時に、ゲイ男性のつながりの中に類的存在として埋没してしまうことで、自己の固有性が希薄になってしまったのである。

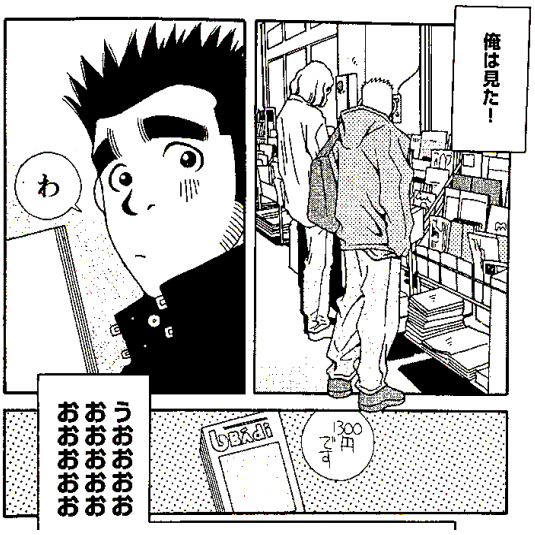
この点は、先ほど山田昌弘の議論で参照した「もっといい人がいるかもしれない」という考えと結びつく。パートナーの選択肢が限られていた時代では、選ぶ自分にとっても相手にとっても、それがほとんど唯一の恋愛であった。恋愛は何度も経験するものではなく、非常に限られたものであった。自分も相手も、他の選択肢との比較で互いを選んだ訳ではないため、互いは唯一固有の存在となる。対してパートナーの選択肢が増大し、「もっといい人がいるかもしれない」という考えが登場した時代に、唯一の選択肢はない。常にいくつかの選択肢の中から比較によって相手を選択しなければいけない。一度誰かと恋愛関係になったとしても、もっといい人がいればその別の人と恋愛をしたいと思うかもしれない。となると、同じような恋愛を幾度も繰り返すことが想定されはじめ、パートナーがその人でなければいけないという絶対性・固有性は希薄化する。置き換え可能性という言葉を用いるのであれば、女性との結婚が葛藤となっていた時代には、男である私と恋の〈ライバル〉である女は置き換え不可能な存在であったが、2000 年代以降の作品では、男である自分が他の男と置き換え可能な存在となってしまった状況が前提となっているのである。ゲイ男性は「ゲイ」というアイデンティティを形成し、同時にゲイコミュニティも形成する中で、男性との恋愛を当たり前のものとするようになっていったが、それは結果として、女性との結婚の葛藤の物語の中にはあった、自分の固有性が希薄化してしまうという事態を生み出したのである。

ここまで、ゲイ男性向けゲイマンガに描かれる恋愛の真正性・浮気の物語を考察してきたが、一方で、以上のような不安を描くものとは別の形で〈純愛〉を描く作品も数多く存在している。ここで純愛という言葉が主に意味しているのは、一対一の排他的関係性・恋愛感情である。そうした作品では浮気や不安という障害を避けたり、それが生じ得ないような舞台設定がされている。自己の固有性と出会いの偶然性という視点から、それらの物語について考察をしていく。

3−4　偶然性による純愛の形成

純愛を描くために、偶然の出会いによって恋愛関係を発展させる作品がある。この偶然性を成立させるために、物語の舞台としてゲイ男性同士の交友や、ゲイバーなどといったゲイコミュニティから距離のある場所が用いられる。

代表的な舞台は、学校である。例えば「恐怖！ミミズの呪い」（市川 2007）は、主人公タケシがミミズに小便をかけてしまったためペニスが腫れ上がり、勃起をするとペニスが強烈に痛むという設定のコメディチックな物語であるが、物語の軸はタケシの恋である。タケシは親友の将人に恋をしているが、その舞台は学校（おそらく高校）である。タケシは入学時から将人のことが気になっていたが、思いを伝えられずにいた。タケシは将人をノンケだと思っていたが、しかし、将人がゲイ雑誌を購入するところを偶然にも見かけ、将人もゲイであることを知る（図 2-7）。それでももちろんすぐさま告白などできはしない。後に、将人の


俺は見た！
わ
うおおお

機嫌が悪くなり、その理由がタケシが近頃いつも別の人物と一緒にいることに対して嫉妬をしていたからであると告白される。この時タケシは二人が両思いであることを知るのである。

同じように学校を舞台とするものに、「恋女房」(児雷也 2004) がある。この作品は大学の野球部のバッテリー間の恋愛を描いた作品である。主人公でキャッチャーの大地は、ピッチャーの太陽に恋をしていたが、その思いを伝えられずに大学 4 年間と部活最後の日を迎えた。太陽はプロ野球に進み、大地は家業を継いで板前になるため、容易には会えなくなる。「野球への未練も…そしておまえへの想いも…俺は―この胸ン中の…」「奥の…奥の…奥の奥に押し込めちまうって決めたんだ」「『好きだ』って言葉は…／奥の奥に飲み込んで、」「俺は…笑って／こいつを見送るんだ」(児雷也 2004:164-165) と心で語り太陽と別れようとしたところ、太陽は「俺がいねぇからって浮気すんなよ」「今までも、これから先もずっと――」「離れてたって、おめーは俺の恋女房だって、思ってんだからな」(同上:167-168) と、含みのある言葉を残しその場を立ち去る (図 2-8)。続編となる「恋女房 その後」(児雷也 2004) では、板前としての仕事中に店に備え付けてあるテレビで、太陽が参加する野球の試合を見ている大地が描かれる。試合後のインタビューで太陽が「見ててくれてるよな大地！！」「ずいぶん会ってねぇけど…まさか俺のこと忘れてねぇだろーな！」「こっちは毎日おまえのことばっかり考えちまって、練習にも身が入らねえんだ。」「電話も何度かしてみたんだけど…忙しいのか出てくれねぇしよぉ…」「おまえに会いたいよ。今…そばにいてほしいよ。」「大好きだ、大地。」(児雷也 2004:175) と、テレビ越しに大地に告白をする。



図 2-8　別れ際の大地と太陽 (児雷也 2004:168)

こうして学校を舞台とするものは他にも、主人公がサッカー部の主将に恋をする物語である「スーパーサブにて候」(晃次郎 2015)、男子校での恋愛が物語のひとつの軸となっている『下宿のお兄さん』などがある。類似するものとして、道場を舞台とする作品もある。例えば、「チャンバラ LOVE!」(市川 2005)、「拳の約束」(おタケ 2015) は、道場を舞台にして男性同士の恋愛・性愛を描いている。

ゲイ男性の出会いにおける偶然性について、鹿野由行 (2011) による議論が参考となる。鹿野はゲイ男性の出会いの形式について分析を行っており、ゲイ男性の間で生じていた飲み会や合コンの流行に注目している。その流行の理由として、ネットやゲイバーにイメージされる、恋人を作るという目的から生じる即物的な出会いを回避することができる点を挙げている。そして飲み会・合コンの場では出会いの「偶然性」と「運命の物語」がイメージされていると分析している。この点は

前項で見た、出会いの不意打ち性や出来事性と共鳴する点であり、ゲイ男性間の恋愛で固有性を確保することで「純愛」を求めようとする傾向が生じていることを示唆している。本項で見た作品での出会いも偶然性によって成り立っていると言えるが、意図的に企画されなければ開催され得ない飲み会・合コンと比べて、より高い偶然性が利用されている。

より具体的に言うと本項のここまでで見た作品は、二つの偶然性によって物語が支えられている。ひとつは、基本的には異性愛的な空間とされている場所で他の男性と恋愛関係になったり、同じ性的指向を持つ人物を発見するという偶然性である（場の偶然性）。もうひとつは、主人公がたまたま恋をした相手の男性も同様に、主人公に対して恋心を抱いていたという偶然性である（対象の偶然性）。この二つの偶然性によって恋愛の真正性をめぐる悩みが回避できる理由は、他のゲイ男性が不在であるためである。そのため、恋愛感情が二者間の閉じた関係性においてしか生じず、浮気などの可能性が排除される。別の言い方をすると、恋愛が生じる可能性のある他者が排除されているため、登場人物の二者間でしか恋愛が生じ得ない状況が設定されている。そしてもうひとつの理由は、出会いを求めるという能動性が排除されるためである。誰かと恋愛関係になりたいという意志によって能動的に恋愛感情を抱くのではなく、出会いを求めるという意図がなかったにも関わらず恋をしてしまったという受動性を描くことによって、恋愛感情が特定の相手にしか向かない主人公を描くことができる。出会いの場面を偶然性とともに描く作品は、3-2 項で見たものの中にはほとんどない。

もちろんゲイ男性特有と言える出会いの形式が描かれないわけではない。例えば、「on my way」（小日向 2008b）ではインターネットのゲイ男性向け掲示板から始まる出会いが描かれ、「ひこうきぐもとシクラメン」（戦艦コモモ 2015）ではゲイ男性向けの出会いアプリから始まる恋愛が描かれる。しかし全体から見ると少数である。反対に、『下宿のお兄さん』ではインターネットやゲイバーでの出会いを積極的に否定する主人公が描かれる。ゲイの主人公の将太がゲイの友人のモンちゃんに「将ちゃんだって行くとこ行きゃ〔出会うことが〕できるでしょ？アプリだってあるし」（野原 2017:42）と言われるが、人見知りであるためにそういう行動が苦手であると返答する。つまり、出会いと結びついてイメージされる、ゲイバーに通うことやゲイ男性向けの出会いアプリを使用せずに出会いを求める主人公が描かれるのである。

以上とは異なる形でゲイコミュニティからの距離化を図り偶然性を確保するものに、地理的に舞台を移動させている作品も存在する。デミリオが論じるように、資本主義によって家族という生産単位から解放された個人は、主に都市部でゲイコミュニティやアイデンティティを形成してきた（D'Emilio 1983=1997）。家族から都市へという生活領域の移動はゲイアイデンティティの形成を促すものであり、現代でも少なからずその移動は抑圧からの解放と結び付けられている。しかし 2000 年代以降のゲイマンガで描かれる移動は、地方（家族のいる領域）から都市への移動ではなく、（都市から）地方への移動である。

「海彦山彦」（児雷也 2007）は、大学進学を機に離れた海辺にある故郷へ帰省し、大学最後の夏休みを過ごす山彦が主人公の物語である。幼少期からの友人であった海彦ともそこで再会し、海でその他の友人らとも遊んでいたが、潮に流されてしまう。二人は流れ着いた岸を歩き、山中にあった小屋で一夜を過ごす。濡れた服を焚き火で乾かしているため裸で過ごす二人は、お互い勃起しているのに気づき、セックスをしてしまう。その中で山彦は、「俺…お前のことずっと…好きだったんだ

ぜ…」「そりゃいつもケンカばっかしてたけどよぅ…」（同上:130）と、そして海彦も「俺もな山彦、お前にずーっと惚れっぱなしだったんじゃ！」（同上:133）と、お互いが昔から好意を寄せていたことを告白するという物語である(17)。

「竜首神社例大祭奉納神楽」（児雷也 2004）は、故郷で行われる例大祭へ出るため、そこに 4 年ぶりに戻る竜平の物語である。竜平は高校を卒業し、二人暮らしの父親が亡くなったのを機に地元を出ており、もう戻る気は無かったが、17 歳年上の神楽のパートナーとして幼い頃から恋心を寄せていた寅一に呼び出されての帰郷であった。竜平が地元を出る前に寅一が結婚してしまったことも、竜平が地元に戻らない理由であったと思われる。寅一と再開した竜平は「つくづく自分が嫌んなる…。寅兄ぃは普通の男。結婚だってあたりまえ。」「しかも俺の気持ちを知ってるわけじゃなし。」「何もかもしかたねぇのに。」（児雷也 2004:32）と、いまだに感じる恋心に葛藤をしていた。しかし神楽が終わった後、寅一から次のように告白され、二人は親密な関係性になる。

> 俺もな、もう四十だ。このまま自分に嘘ついてジジィになっちまうと思うとよ。（…）…すまん。お前の気持ち、ずっと知ってたんだよな…俺。（…）…家を継がなきゃあならんかった俺は…死んじまうまで嘘をつき通す気でいたさ／そのつもりで嫁も取った…。でも、うまくいくはずもねぇ――。わかってたことだな……。竜、俺のこと許せるか？…許せるんなら……。（児雷也 2004:37-38）

以上の二つでは偶然の出会いが幼馴染という設定によって持ち出されているとも言え、また後者に関しては 1990 年代の作品によくみられたように、女性との結婚規範を障害として純愛を形成しているとも言えるが、同時に地元への帰省という場所の移動によっても幼馴染との再会、そして偶然の出会いが可能となっている。

『山椒は小粒で』では、父親の造園業を継ぐために新宿から地元に戻ってきた主人公の小野が描かれる。移住したばかりのころに税務署で出会った粂寺と恋愛関係へと発展する物語である。「都心から遠い街」である地元が「ここは新宿じゃねェんだ」（松崎 2009:n. pag.）という小野の言葉によって対比される。帰郷によって「仕事を継いで男遊びも控えて」（同上:n. pag.）いたという発言は、都会ではない地元では、そもそも「男遊び」が困難であることも暗示している(18)。

また地元への移動に限らず、都会から離れた場所が物語の舞台となるものもある。「渚のメモリーズ」（おタケ 2015）では海辺にある民宿を舞台に、経営者のアラタと、毎年夏に宿泊・手伝いに来る昔馴染のヨシヒコの交流が、看板娘のチナツの視点から描かれる。アラタがヨシヒコに恋心を抱いていることを感じ取ったチナツは思いを告げるべきだとアラタに助言し、二人は結ばれる。「沖縄のおいしい水」（市川 2005）は沖縄を舞台に、東京に住む小鉄と沖縄に住む天辺の遠距離恋愛を描く作品であるが、ここでは沖縄に住む天辺がいつも「ヘラヘラ」しており、子供っぽくあるいは純粋な心の持ち主として描かれている。この作品では東京＝都会の人物と沖縄＝地方の人物が対比的に描かれている。

---

(17)　児雷也の作品に「帰る」「帰ってくる」という設定が多いことは彼自身も触れている（児雷也 2007:110）。
(18)　小野や粂寺の過去の恋人や、街に一軒しかないゲイバーといったものが恋愛の障害として複線的に登場するエピソードもある。

こうして故郷・田舎・地方といった場所は、純粋な恋愛が生じる場所として設定されていると捉えることができる。このような地方の捉え方は、1990 年代までのマンガとは根本的に異なる。第 2 節で取り上げた『ふたりの童話』と「春へ急ぐ人」（竹本 1997a）を見てみると、これらの作品における故郷への移動は抑圧的なものとして描かれている。『ふたりの童話』では主人公の良男が帰省した先で親や地元の知人から結婚の圧力を受ける。「春へ急ぐ人」でも、東京から帰郷した延彦が結婚することになったことが判明する。このように、かつて故郷は親からの圧力などが存在する抑圧的領域・保守的領域として描かれていた。しかし 2000 年代以降の作品では、故郷・田舎・地方とは、都会から離れており、ゲイコミュニティからも離れているために、かえって出会いの偶然性・固有性が強調される場と捉えられているのである。

過去には都会がゲイアイデンティティを形成しコミュニティへの参入を可能とする場所であり、都会への移行がゲイ男性にとっての解放を意味していた。しかしゲイ男性同士の恋愛の純粋性が疑問視され、それが常に不信感や不安感を伴うものとして捉えられ始めたとき、故郷・田舎・地方といったこれまで抑圧的・保守的と考えられていた場所の意味づけが変化し、そこへの移動が別の〈解放〉として捉えられ始めていると解釈することができるだろう(19)。

3−5　ノンケへの欲望 —— 性愛の排除

偶然性を用い、かつゲイ男性のコミュニティから距離のある物語を描くにあたって重要となるもうひとつの設定は、ノンケ（異性愛者）の登場人物である。ゲイ男性向けゲイマンガの中にはゲイとノンケの性愛を描くものや、〈ゲイではない〉人物同士の性愛を描くものがある。

例えば山田参助による作品では、1990 年代と 2000 年代以降のいずれの作品でも、「ホモ」であることを否定する人物が同性と性行為をする物語がよく描かれる。例えば、「若さでムンムン」（山田 2004）は、高校生の奥村が友人のいとこである重政からレイプ同様の性行為をされたことをきっかけに、重政への性的な興味が頭から離れなくなり、次は奥村が「変態」の重政に「おしおき」として性行為をする物語である。奥村は重政によって椅子に縛り付けられ強制的にオーラルセックスをされるが、そのときに「俺は」「ホモじゃないッ」（山田 2004:43）と叫びながらも快感を覚える姿が描かれる。「明後日に向かって撃て！！」（山田 2007）は、主人公の大学生である東山が「出張尺八」（「尺八」とはオーラルセックスの隠語）をしているサークルの後輩（男性）にオーラルセックスをしてもらうという物語である。物語の最後には、その後輩が彼女といることころを東山が見つける場面が描かれ、彼が「ノンケ」であるのに「出張尺八」をしていたことがオチとして描かれる。

ゲイであることを否定するノンケを描くことは、BL 批判の文脈ではホモフォビックなものとして批判されていた。しかしゲイ男性向けゲイマンガの中でも同様の物語が存在することを事実として受け止めるのであれば、これは単にホモフォビックなものという解釈だけでは不十分であろう。ゲイ男性向けゲイマンガの文脈で、ノンケなのに同性との性行為をしてしまうという物語を捉えると、いくつかの解釈の可能性がある。ひとつは、性的欲望や性的アイデンティティの流動性が描かれているという解釈である。つまり、同性愛者というアイデンティティを持っていないであろう登場人

(19)　地方を舞台に純愛を描くマンガにはもうひとつ可能な解釈がある。都会とゲイ男性が結び付けられていくにつれて、地方のゲイ男性の存在が周縁化されていく。そうした中、地方においてもゲイ男性が存在し、彼ら同士の恋愛が可能であることを表現しているとも言える。

物であるにも関わらず同性との性行為をしてしまうことを描くことで、異性愛・同性愛といった二項対立の曖昧さを描いているという解釈である。二つ目は、異性愛社会における日常生活では同じゲイ男性を見つけることが困難であるゲイ男性に対して、ノンケであっても〈ゲイになる〉かもしれないという〈ファンタジー〉を提示しているという解釈である。これは「偶然の出会い」のバリエーションのひとつとも捉えることができるだろう。そして三つ目は、ゲイからノンケへの叶わぬ片思いを描くことによって、純粋な恋愛を描いているという解釈である。これも二点目と同じく「偶然の出会い」のバリエーションと言える。しかしすでに論じてきたように、2000 年代のゲイ男性向けゲイマンガにおける物語の特徴は、ゲイ男性の恋愛の悩みが、異性愛社会を原因とするものからゲイコミュニティを原因とするものへと移行しているということであった。ここで注目したいのは、ゲイ男性複数人の中のノンケという関係性を描く作品である。

野原くろによる『ミルク』と『下宿のお兄さん』は、主人公のゲイがノンケに恋をするのを、周囲のゲイの友人らが応援するという関係性が物語の構図になっている。重要なのは、この関係性がゲイ男性同士の友情を支える役割をしているということである。『ミルク』の中心的な登場人物は主人公の健太、その友人のカズと秀治の 3 人のゲイ男性と、健太が恋をしているノンケの周作である。ゲイ男性 3 人の間で恋愛は生じず、ノンケに対する健太の恋を応援したり悩みをサポートしたりすることを通して彼ら 3 人が交流する姿が描かれる。カズが初めて周作に出会ったときに心中で発した、「ノンケかしら／ノンケってだけでブランドよね」（野原 2005a：29）という言葉は、ノンケがゲイとは異なる特有の性愛の対象とされていること、そして健太が周作を好きな理由もノンケとしての「ブランド」である可能性を暗示している。『下宿のお兄さん』でも中心的に描かれるのはゲイとノンケ（だが男性にも興味を惹かれる男性）の恋愛である。物語の舞台は主人公の将太（ゲイ）が経営する下宿であり、社会人の大輔（ノンケ）、高校生の徹也（ノンケ）、漫画家の桜井（ゲイ）が下宿をしている。そして将太は大輔が気になり、徹也は同級生でゲイの高松に告白されてから高松が気になり始め、付き合い始める。その他の登場人物のゲイ男性間での恋愛が描かれないわけではないが、ノンケとゲイの恋愛を周囲がサポートすることによって登場人物間の人間関係が形成・維持されている傾向を読み取ることができる。この二つの作品では、ゲイとノンケの恋愛を中心的に描くことでゲイ男性同士の恋愛が副次的な物語とされている。そして登場人物のゲイ男性間では、恋愛関係よりも互いの恋愛をサポートする関係が描かれる。

山田参助や野原くろの作品とは異なり、複数のゲイ男性がノンケを共通の性的対象とする関係性を描く作品もある。明確にそれを描くものに「ザ・レイパーズ」（戦艦コモモ 2015）がある。この作品では、「ホモのホモ嫌い」（同上：122）という共通点を持つゲイ男性 3 人による「徒党」がノンケをレイプするという物語である。インターネットを通した出会いに躍起になっているゲイ男性や、ゴーゴーボーイとして持て囃されているが本職では同様の〈地位〉を持ち合わせてないゲイ男性などに落胆する彼らは、性的欲望が同じゲイ男性ではなくノンケに向く。彼らはノンケを「犯す」という共通目的によって絆を形成している。

『太陽が呼んでいる』は比嘉（ノンケ）が経営する沖縄のゲストハウスが舞台の作品である。このゲストハウスは、「かわいい」比嘉が経営しており「ゲイ受け」が良いため、そこに来る客はゲイばかりである。比嘉はノンケであるが、しかし、酒を飲んで泥酔すると男性ともセックスをしてしまい、さらには朝になるとその記憶を忘れている。このゲストハウスには居候状態で長期滞在をする

ゲイカップルがおり、ゲイの客がやって来ると彼が比嘉とセックスをすることができるよう、比嘉に酒を飲ませるなどの働きかけをするのである。

また少々形は異なるが「タクノミ☆王様ゲーム」（おタケ 2015）も類似する作品となっている。ゲイの英治とノンケの文太と史郎が家で飲み会をしている中、王様ゲームをすることになり、王様となり続けた史郎は英治と文太がセックスをするように仕向けるのである。英治と文太はオーラルセックスからアナルセックスまで行い、作品の最後には英治と史郎が拳を突き合わせ「やったな！」「サンキュー！」（同上:58）と言葉を交わし、「計画的な『犯行』」（同上:93）であったことが暗示される。この作品で絆が形成されているのはゲイとノンケではあるが、その二人の関係性がノンケへの性愛を媒介にして形成されているという点は以上の作品群と類似しているだろう(20)。

ここまで見てきたノンケとゲイの性愛を描く作品はそれぞれ形は異なるものの、ノンケが特有の性愛の対象となり、それを媒介としてゲイ男性同士の関係性が形成されていると解釈することができる。山田参助の作品のようなノンケばかりが登場する作品は、想定されたゲイ男性の読者共同体が作品内のノンケを消費し、一方でノンケもゲイも登場する作品では、物語内のゲイ男性に読者がアイデンティファイしノンケを性愛の対象として消費している。ゲイ男性の悩みの形がゲイ男性間での恋愛における浮気などの不信感に移行しつつあることを 3-2 項で論じたが、この文脈でゲイとノンケとの性愛関係が持つ機能は、性愛の関係性をゲイ男性同士ではなくゲイとノンケの間で生じさせることで、ゲイ男性間からは性愛を排除し、浮気といった悩みから距離を置くことによって、ゲイ男性同士のつながりを維持するというものであろう。言い換えると、ゲイ男性がゲイではなくノンケを性的対象とするのは、ゲイ男性同士は同じ「ゲイ」としてつながりながらも、「純粋な友人関係」から「性愛的な関係」を分離し、ゲイコミュニティ内の性愛の〈いざこざ〉から距離を置きたいという欲望として解釈できる。この点は、セジウィックによるホモソーシャルの理論を参考にしてより詳細に捉えることができる。

セジウィック(Sedgwick 1985=2001)は、現在の家父長制社会がミソジニー（女性嫌悪）とホモフォビア（同性愛嫌悪）によって成り立っていることを明らかにした。男は男だけの集団を形成するためにそこから女を排除する。しかしそうして形成された集団は、男だけで構成されるがために、同性愛的なものに見えてしまう。そこで男たちは、異性愛者であることを互いに確認するために女を積極的に性的対象としながらも、彼らの集団からは排除する。斎藤綾子はセジウィックが強調する点を、「エロスを排除した均質な連帯が維持されることにより男たちの精神的・制度的なつながりが強調されるという点」（斎藤 2004:287-288）としてまとめている。上野千鶴子はこのような関係性を「性的であることを抑圧した男同士の絆」（上野 2010:25）と単純明快に呼んでいる。また上原(2001)も、「セジウィックによれば、このホモフォビアこそ女の交換を推進する力である」（上原 2001:89）と指摘する。この指摘によると、男同士の性愛の禁止（ホモフォビア）が強力になるほど女の交換が促進される。ここで重要なのは、女を性的対象とするのは男同士の絆を維持するための〈戦略〉であるという点である。

これを本項で見たノンケへの欲望とゲイ男性のつながりの関係性に応用するのであれば、ゲイ男

(20)　史郎はノンケであると作品内で言われているが、英治と文太のセックスには彼も加わっているため、「ノンケ」であるという読みは限定的なものである。

性のコミュニティが悩みの原因となることがノンケへの欲望を推進する力になると言える。これにより、ゲイ男性のつながりが家父長制の社会におけるホモソーシャルな図式との類似を見せる。つまり、ゲイ男性同士での性愛から距離を置き、ノンケを共通の性愛の対象とすることによって、性愛が排除されたゲイ男性同士の連帯を形成するのである。異性愛の男が女を欲望するのは、自分が男を欲望しているのではないことの強調であり、同性愛者として差別されることから逃れるための〈戦略〉である。類似して、ゲイがノンケを欲望するのは、自分はゲイを欲望しているのではないこと――ゲイコミュニティでの恋愛からは距離を置きたいこと――の強調となり、浮気や乱交性と結び付けられるゲイ男性から性的な意味合いを取り払い、ゲイ男性をまとめ上げるための〈戦略〉となるのである。こうしてゲイ男性は男との性愛をノンケとの間で充足させながら、ゲイコミュニティから性愛を排除しつつも、ゲイであるという共通項によってゲイ男性同士のつながりを維持しようとするのである。

本節では 2000 年代以降のゲイ男性向けゲイマンガを分析した。2000 年代以降は異性愛社会よりもゲイコミュニティが描かれるようになり、その中での浮気の悩み、恋愛の真正性の悩みが描かれ始めた。ゲイ男性同士の恋愛を当たり前として捉えるようになったこと、ゲイ男性同士の出会いが容易となったことで、女性との結婚・恋愛規範の悩みを抱えていた時代とは異なる新しい悩みが生じ始めた。それは、1990 年代以前よりも恋愛の動機が不明確になったこと、「もっといい人がいるかもしれない」という状況が生まれ、恋愛における自己の固有性が希薄化したこと、恋愛が自由化したことでモテる人とモテない人の格差が生まれたこと、である。それを解決し〈純愛〉を描くために、学校や地方といったゲイコミュニティから距離のある場所を舞台とし、偶然の出会いを確保していた。また、ノンケへの欲望を描くことでゲイ男性間から性愛を排除し、ゲイ男性同士の〈純粋な友人関係〉を描いていた。

4．〈社会〉の描写と回避 ―― 1980-2010 年代のゲイ男性向けゲイマンガ

2000 年代以降のゲイ男性向けゲイマンガでは、悩みの原因が異性愛社会ではなくゲイコミュニティに見出されるような描写がされ、同時にゲイコミュニティでの恋愛から距離を置くさまざまな設定が用いられていた。では 2000 年代以降の作品で〈社会〉はどのように描かれているのであろうか。本節では 1980 年代の作品にも一部触れつつ、2000 年代以降の作品内の〈社会〉について見ていく。はじめに、ゲイ男性が特に葛藤を抱え、対峙が避けられないであろう家族がどのように描かれるのかを見てみる。

4－1　抑圧的家族の回避／読み替え

表 2-1 のゲイ男性向けゲイマンガの中での 2000 年代以降の作品で、家族について描くものは少ない。その中で家族からの明確な拒絶について描いたのは、「LOVE SONG」（市川 2007）のみであり、主人公と親、周囲の関係性をもっとも深刻に描いている作品である。登場人物は男子高校生のカップル（だと思われる）二人であり、拓人は恋人（名前不明）にバイトを始めることを伝える。「突然

じゃん」と驚く彼に拓人は、このように答える。

俺、ガッコ行けなくなるもんよ（…）
授業料もう払わねえって親が云うし
ホモなんか死ねってこの前家帰ったら包丁握らされて（…）
目の前で死んで見せろって
ぶぶぶぶっ（…）
マジドラマ観すぎ俺のオヤ　（市川 2007：46-47）

拓人が「ホモ」であることが何かしらの形で親に伝達され、それが親の壮絶な拒否反応を引き起こしたと想定される。親がこの作品の中で直接登場するわけではないが、身近な他者からの拒絶・差別が登場人物の語りによって表現されている。

ではその他の作品で親が描かれるときにはどのような描写がされるのであろうか。「おニャン子 BOY の疑問」（大久保 2008）では主人公の両親が物語の後半に登場し、主人公と会話をする場面が描かれる。恋愛が長続きしないことに悩んでいる主人公が、「ヤッカイな親父」と 30 年も結婚生活を続けている母親に「どうしたら 30 年も同じ相手を」「そんな大事にできるワケ？」と聞いた際に、母親に「カノジョとうまくいってないの？」と聞かれ、「ギクッ」とする主人公が描かれる（大久保 2008：121）（図 2-9）。この作品で母親は抑圧的な存在として描かれているわけではないが、ふとしたきっかけから自分がゲイであることが露呈してしまうのではないかという危機感が描かれていると言えるだろう。しかし、全体的にコミカルな描写が多い大久保ニューの作品の中では、このような危機感も笑い話（あるあるネタ）のひとつとして回収されてしまう。

以上二つとは対照的に、親を同性愛者として描く作品もある。例えば「木村厳五郎一家」（児雷也 2007）は 18 歳の豪とその家族を描く作品であるが、父親や兄弟が同じゲイであることが判明していく物語である。初めて行ったハッテン場で父親と祖父に出会い、またインターネットのゲイ男性向け掲示板に 5 歳の弟が投稿をしているのを見つける。その後 4 人でゲイバーに赴く様子が描かれるなど（そこで口論が行われたりするものの）、同じゲイ男性としての親密な関係性が形成されているとも言える。また「ハッテン家族」（晃次郎 2015）も主人公がハッテン場で父親と出くわすという話である。前者とは異なりこの話はその後、性行為をするため近親相姦的な物語でもあり、父子の関係性を性愛的なものに読み替える作品でもある。同性愛者は生まれ育った家族の中で他の同性愛者と出会うことは基本的にないため、血縁的なコミュニティにおける孤立を経験する。しかしこれらの作品ではそう



図 2-9　母からの質問への焦り（大久保 2008：121）

した異性愛主義に裏打ちされた家族のつながりを非異性愛的なものとして読み替えることで、抑圧的な家族を非抑圧的なものへと読み替えていると言えるだろう。

またこうした読み替えとは異なり、家族をあえて描いていないと言える作品もある。例えば『ミルク』の舞台設定は主人公健太が一人暮らしをする実家であるが、仕事の関係で両親がアメリカへ旅立ったところから始まる。「かけ出しのイラストレーター」である健太の「仕事のほとんどはゲイ雑誌と女性向けのお耽美系」（野原 2005a:11）のイラストを描くことであり、部屋にはゲイ雑誌などいくつもの資料が置いてある。親へのカミングアウトはしていないと思われる健太は両親のアメリカ行きに対して、「ただでさえゲイなのにこういう仕事をしていると親との同居は何かと面倒なので両親のアメリカ行きはラッキーだった」（同上:11）と語り、両親の不在を「ラッキー」と形容するあたりは、両親を物語に登場させないことによる安心感として読み取ることができる。また『山椒は小粒で』は実家の父親の造園業を継ぐために新宿から地元へ移住した主人公の話であったが、その父親は死去している。また家族へはカミングアウトをしていないと発言はするものの、母や兄弟などの他の家族は一切登場しない。

これらの家族の描写を見ると、2000 年代以降のゲイマンガでは、家族が抑圧的な存在として直接的には描かれていない。しかしそれは家族が同性愛者に対して寛容であることを意味しているのではなく、むしろその逆であろう。だからこそそれを非異性愛的なものとして読み替えたり、あるいは家族を物語の舞台から排除することによって、家族の問題を無化しようとしていると言うことができる。溝口は、2000 年代の BL は現実のゲイ男性を「かけがえのない存在」として発見したことにより、彼らが直面するであろう現実的な問題に想像力を働かせて取り組むようになったと論じるが、それと比べるとゲイマンガは反対に想像力を働かせることで「現実的な問題」を回避していると言えるのではないだろうか。

4－2　社会問題・社会運動の描写

広く社会問題といったトピックについて目を向けると、これもほとんどゲイ男性向けゲイマンガでは取り上げられないが、唯一、山川純一の「僕の生活論」（山川 1988）に HIV/AIDS への言及がある。この話には明らかに HIV 感染予防を啓発する意図がある。主人公の道下高司の自己紹介からはじまり、「過去に愛し合った男はかなりいたけど今はひとりもなし／今はエイズが怖いからね」（同上:5）という発言がされ、過去に彼がセックスをした男についての回想が始まる。そして最後は次のような発言によって終わる（図 2-10）。

> 彼らとの出会いは俺という男をひとまわり大きくさせたような気がする／しかし、そんな人と人との絆をも奪い去ってしまうエイズという凶器を俺は限りなく憎悪してやまない
>
> 考えてみればエイズばやりの昨今／危険を犯して人間とセックスしなくてもそこいらに代用品[21]はいっぱいあるのだ！そこのところを皆さんも熟考してみてはいかがですか？――――

(21)　ここで「代用品」という言葉で意味されているのは、図 2-10 の人物が抱えている猫であり、猫にペニスを舐めてもらうことで人間との性行為の代用としようとしていると推測される。

なんちゃってね！　　（山川 1988:17-18）

この語りは HIV/AIDS の脅威について恐れ、セックス自体を避けることを促している点は、公衆衛生や HIV/AIDS 予防啓発の言説におけるセーファーセックスを促す言説とは大きく異なるが、唯一 HIV/AIDS 予防の啓発メッセージを投げかける作品である。しかし最後の「なんちゃってね！」というセリフによって、メッセージの重要さが無化されてもいる。この最後のセリフから読み取れるのは、作者が HIV/AIDS を重要な話題として作品内で取り上げようとする志向と、読者のゲイ男性はこうした問題を取り上げることを好まないだろうという想定によって生じる、ジレンマではないだろうか。真面目なメッセージを描きながらも、それを「なんちゃってね！」というセリフによって冗談交じりで描くことによってしか、HIV/AIDS 予防啓発を表現できないのである。



図 2-10　エイズについての言及（山川 1988:18）

もうひとつ唯一、社会問題に関連して、セクシュアルマイノリティの社会運動であるパレードが登場する作品に小日向の『アグリっ娘』がある。これも同じく表 2-1 の作品内では珍しいが、しかしその取り上げ方が、ゲイ男性と政治をめぐる関係について示唆的である。『アグリっ娘』に収録されている短編の第 1 話が「パレードへ」というタイトルであり、主人公のアズサがパレードへ参加する場面が描かれる。しかし、ゲイ男性間の美醜の格差を主題とする『アグリっ娘』では、パレードも「イケメン」が楽しく自身の「モテ」をアピールする場として描かれるのである。「イケメン」が集い、「ボクたちモテま〜す♡」（小日向 2008a:17）というプラカードを掲げて行進する中、「ブス」のアズサは「飲み屋のブス放置反対！！」、「〔ハッテン場における〕イケメン割引反対！！」、「もっと中身を見てくださーい！！」（同上:18）という掛け声とともに、「ブスだって幸せになりたい」（同上:19）というプラカードを掲げて行進する（図 2-11）。パレードの〈本来〉の目的をここで前提として議論をすることは困難だが、少なくとも社会に対してセクシュアルマイノリティの存在を主張したり当事者へのエンパワーメントのためのイベントであるの



図 2-11　「イケメン」のパレードへの抵抗（小日向 2008a:17, 19）

に対し、『アグリっ娘』ではパレードが美醜の格差によって印象付けられるイベントとして、つまり、ゲイコミュニティの問題が表面化される場として表象されているのである。

4-3　欲望の解放、規範からの解放

全体的に異性愛社会を問題とする描写やゲイ男性に関する社会問題の描写が少ない中、SMを通して社会規範に疑問を呈するものに『PRIDE』がある。この作品では、自分がセックスにおいて能動的役割であることを疑わなかった主人公が、SMの「調教」によって、自身の気がつかなかった欲望を見出していくという物語が描かれる。主人公の大学生である大橋は心理学の教授である柴崎に突如呼び出されたが、その理由はハッテン場で大橋がセックスをしているのを見たからであった。その後二人はセックスをするが、柴崎はセックス後に「セックスもその尊大な態度も実に単純でわかりやすい」(田亀2004a:24)と大橋の〈プライド〉を傷つける発言をする。それに激怒した大橋であったが、柴崎とのセックスが忘れられず他の人物とのセックスが一切できなくなってしまう。彼はもう一度柴崎のところへ向かうが、そこで柴崎の「実験」に付き合うことになる。身体中を縄で縛られたまま、あるいは肛門にゴルフボールなどを挿入されたまま日常生活をおくったり、野外での露出を強制させられたりすることを通して、受動的行為に性的興奮を覚える自身を発見していく。はじめのうちは「バカにすんじゃねェ！いいか！俺は受け身でもマゾでもねェんだ！」(田亀2004a:78)と大橋は抵抗するが(図2-12)、「不能も退屈なセックスもその下らないプライドのせいだ！」(同上:35)、「無意味なプライドは捨てたまえ」、「君に必要なのは本当の自分を知ることだ」(同上:36)、「頭で考えるな！自分を常識から解放しろ！」(田亀2004b:189)という柴崎の言葉によって徐々に「調教」されていき、フィストファックやスカトロジーも行うようになり、最終的に大橋は柴崎の「マゾ」の「奴隷」となる。

大橋には堺という男性のセックスフレンドがいたが(おそらく大橋に恋もしていた)、その彼が大橋が参加するSMの乱交を目撃し、「やめろよ！」「この変態野郎！」(田亀2004c:95)と叫びその場を立ち去る場面がある。その場にいた柴崎は、「ああいう物言いをする人間はえてして自分が変態だというコンプレックスから抜け出せないのだ」、「だから自分より更に変態な人間を貶めることで自分はまだまともな方だという錯覚をしたがる」、「受け身やマゾを恥じるのと同様に正常から異常／普通から変態という下らん常識的な差別構造に囚われたままで…ね」(田亀2004c:97)と、堺が内面化する規範を批判するのである。『PRIDE』はSMを通して社会の性規範に疑問を呈する作品であり、作品のタイトルである「プライド」とは、自身の欲望



図2-12　マゾを否定する大橋(田亀2004a:78)

を制限する規範のことを指しているのだ。

田亀はあとがきで、この作品を「SM プレイの実践者としての私が描いたファンタジー」（田亀 2004c:248）として捉えるだけではなく、次のような目的のもと描いたと語っている。

> 実はSMという「変態性」を根本では受容していない、ブンガク的な作品全般へのアンチテーゼという意図もあった。更にはそれを通じて、SMに限らず現実社会でそういった自己の枠に捕らえられてしまっているゲイや、その他のセクシュアル・マイノリティ諸氏にエールを送ることができれば、などとも考えていた。(…) おいしいオカズとして使え、同時にビルドゥングス・ロマンとしても機能しうるエロマンガの創作。それが目標だった。
>
> （田亀 2004c:248）

『PRIDE』にはSMの過激な描写が多いが、それは規範への抵抗であり、〈自己解放〉を表現する手段のひとつなのである。

本節では、主に2000年代のゲイ男性向けゲイマンガで〈社会〉がどのように描かれているのかを分析した。1990年代の作品では第2節で見たように、女性との交際・結婚という異性愛規範による悩みが描かれ、親からの抑圧も描かれていた。しかし2000年代以降の作品では、異性愛社会の存在が後景化していった。それはただ後景化していっただけではなく、親を同性愛者と読み替えたり、親を登場させない舞台設定をとることによって、積極的に回避されていた。社会問題や社会運動というトピックも1980年代から2010年代全体を通して見ても正面からは扱われておらず、〈社会〉の規範への抵抗は、SMという表現によってのみ行われていた。

5．マイノリティであることを経験する ── 一般向けゲイマンガ

本節ではゲイ男性が一般雑誌やウェブサイトを含む一般メディアに連載してきたマンガを分析し、オーディエンスの違いによる表象の比較を行う。ゲイ男性によって一般向けに描かれた作品は必ずしも多いわけではない。だがその表象には、どのようなゲイ男性像を提示すべきかという戦略が表れている。今回扱う作品はわずかではあるが、それらには類似する表象が存在し、ゲイ男性向けゲイマンガと大きく異なる。

5−1　過剰なステレオタイプ

はじめに、一般向けゲイマンガの中でも特異と言えるものに、熊田プウ助による作品がある。熊田の作品の特徴は、ゲイ男性向けにも一般向けにも、ゲイのセックスを描くギャグマンガを発表してきたことである。『熊田プウ助大全集』に収録されているゲイ雑誌を初出とする作品は、ほぼすべてがゲイのセックスなどの性をネタに扱っており（図 2-13）、また一般雑誌を初出とする作品が収録されている『世界一周ホモの旅』でも海外のハッテン場での出来事を、書き下ろしの『熊田プウ助のつれづれ駄ホモ暮らし』では彼を含むゲイ男性の性事情をエッセイコミックとして描いている。

表象自体の使い分けはそれほどされていないが、その表象がそれぞれの読者に対してどのような読みを求めるものなのか、という点から考える必要はあるだろう。これらの作品の内容は、ゲイ男性をセックスに過剰に結びつけているため、ゲイ＝セックスというステレオタイプを強化するようにも見える。しかしそれがギャグマンガという形態で、「お笑い」、「遊び」の一種としてセックスが過剰に表現されていることは、その表象に対する別の読みを促す。ゲイ男性向けゲイマンガでは内輪の自虐ネタとなるが、一般向けゲイマンガではその表象が「お笑い」の一種であることによって、それを〈リアル〉なものとして真面目に受け取ることを拒否する。言い換えるのならば、ステレオタイプをギャグの領域に引き入れ囲い込むことによって、それは〈リアルではない〉ことを提示するのである。ステレオタイプに抵抗するには、ステレオタイプを描かないか、あるいはそれに代わる何かを表象することが可能だが、それを過度に描き、ギャグとしての意味づけをしていくことも、また別の抵抗として捉えられるのではないだろうか。しかしこれが正当化されるのは、ゲイ男性という立場から行われるときのみであって、非当事者が同様のことを行うと、ステレオタイプであると非難されうる。

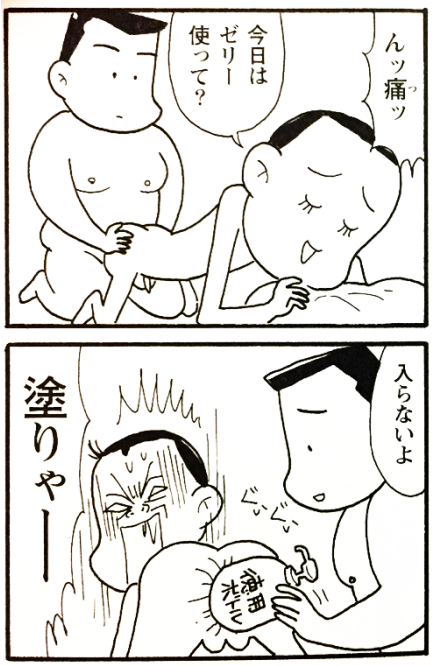


図 2-13　ギャグマンガのセックス（熊田 2007:35）

一般向けゲイマンガにおける熊田のような表象はどちらかと言えば少数であり、その他の作品ではこれとは対極的な物語が描かれる。

5-2　ゲイについての教示

一般向けゲイマンガでは、その読者にゲイ、LGBT、セクシュアリティについて教示しようとする作品が多くある。まず『レインボウ・ライフ』を見てみると、いわゆる「ゲイ用語」が登場するたびに米印「※」を用い、欄外でその用語の簡単な解説がされている。物語は主人公の橘コージによる「新宿はオレの街…！！」「それは…」「オレ…橘コージが…」「『GAY』だからだ！！」（里見 2002a:3-5）という（心の中での）宣言から始まっている。まずここで「GAY」について、「ホモセクシャルのアメリカン・スラング。主に男性の同性愛者の事をいう。『陽気な』『浮気な』『きらびやかな』等の意味をもつ。」（同上:5）と解説される。「GAY」という基本的な単語から解説がされるのは、作者は読み手をゲイ男性当事者ではなく非当事者、特に同性愛についての知識が一切ない人であると想定しているからである。その後も、「ハッテンバ」、「ノンケ」、「ウリコ」、「ウリセン」、「タチンボ」、「ネコ」、「ヤリ友」、「ヘテロ」、「やおラー」、「おこげ」、「キンゼイ・レポート」、「ビアン」といった言葉が登場するごとに解説が付される(22)。これらの言葉は主人公や登場人物が発しているものだ

(22)　「ウリコ」とは、ウリ専（ゲイ男性向け性風俗）で働く人物のこと、「タチンボ」とは路上で客引きを行う（ゲイ男性の）セックスワーカーのこと、「ネコ」は同性間のセックスにおいて受動的な役割の人のこと、「ヤリ友」はセックスフレンドのこと、「ヤオらー」はやおいやBLを好む人（主に女性）のこと、「おこげ」とは友人として過度にゲイ男性を好む女性のこと（「お釜＝おかま」にへばり付く「煤＝おこげ」という意味）。「キンゼ

が、わざわざ登場させなくとも物語上支障のないものもある。しかしあえてこれらをセリフに登場させ解説することで、ゲイ男性に関連する用語を教授しようとしている。

ゲイ用語、LGBT 関連用語を教示する点は、『弟の夫』でも顕著に表れている。『弟の夫』では数話ごとに各話の間に「マイクのゲイカルチャー講座」（マイクは登場人物の一人）というエッセイが差し込まれており、『レインボウ・ライフ』と比べより具体的に「ゲイカルチャー」を教えようとしている。紹介・解説されているトピックは「同性婚」、「ピンク・トライアングル」、「レインボー・フラッグ」、「その他のプライド・フラッグ」、「カミングアウト」、「プライド・パレード」、「ゲイ・プライド」、「アウティング」といったものであり、実際にはゲイに限らずセクシュアルマイノリティ全般に関わるものではあるが、基本的用語が解説されている。また単行本の表紙におけるマイクの服装にも着目すると、ピンクトライアングルやレインボーフラッグが印刷されたシャツを着ている。ゲイや LGBT にまつわるシンボルを積極的に用いていることからも、『弟の夫』は単にゲイを題材とした物語を形成しているのではなく、想定される異性愛者の読者にゲイや LGBT について教えることを目的とした作品であることがわかる。

『あさな君はノンケじゃない』はコミックエッセイの趣が強くその他の作品とは少々異なる点もあるが、この作品内ではセクシュアリティについてより詳細な解説がされている。導入では「WHAT'S LGBT？」というタイトルのもとで「レズビアン」、「ゲイ」、「バイセクシュアル」、「トランスジェンダー」、「エイセクシュアル」、「ヘテロセクシュアル」、「クエスチョニング」の解説が行われ、その次には、セクシュアリティを構成する四つの要素として「生物学的性」、「性的指向」、「性自認」、「性表現」が解説される。「生物学的性」と「性自認」の組み合わせによって「シスジェンダーの男性」、「トランスジェンダーの女性」、「X ジェンダー」、「トランスジェンダーの男性」、「シスジェンダーの女性」が派生し、性自認と性的指向の組み合わせによって「パンセクシュアル」、「エイセクシュアル」、「バイセクシュアル」、「レズビアン」、「ゲイ」、「ヘテロセクシュアル」が派生するという、非常に丁寧な解説がされている。

このように一般向けゲイマンガは、ゲイやセクシュアルマイノリティに関する知識を読者に教えるという強い意図によって作成されている。基本的な言葉の解説がされることは、読者が触れるゲイ男性表象は、その読者にとっては初めてのものである可能性が作者によって想定されていることを示している。そして作者は、〈正しい〉ゲイ男性の表象を提示したり、あるいはこれまでのゲイについてのイメージを変えてもらうよう働きかけを行おうとしているのだ。では具体的にどのような物語と表象が描かれているのであろうか。

5-3　被差別者としてのゲイ男性

一般向けゲイマンガでは、同性愛者に対する差別が明確に描かれる傾向がある。表 2-2 の作品の中では、『レインボウ・ライフ』が身体的暴力としての差別をもっとも生々しく描いている。この作品では主人公の橘コージの恋愛やアイデンティティの葛藤が描かれるが、物語の軸は、横須賀にある公園での「ホモ狩り」の発生と、その犯人探しとなっている。とある少年たちの集団が、「変態に

イ・レポート」とは、1948 年と 1953 年に発表された、アメリカ人の性行動を膨大な調査によって初めて体系的に示した報告書のことである。

生きる資格なし！！」「頼むから死んでくれ！！」（里見 2002a:61）と叫びながら、ハッテン場となっている公園にいた人物に集団で暴行を加える場面が描かれる（図 2-14）。主犯格の少年である小林直樹は、父親から「同性愛者は社会における癌細胞だ――」「切除しないと増殖して…」「秩序を破壊し人類に混乱と罪悪をもたらす」（同上:95）と言われたことを理由に、「だからおれはこいつらを滅ぼすまで狩りをやめない！！」「これは正義だ！！」（同上:95）として「ホモ狩り」を続けようとする。「ホモ狩り」のシーンを見てみると、少年らの顔は悪魔のような形相で描かれており、強烈なホモフォビアが彼らの中にあることが表現されている。



図 2-14　ホモ狩り（里見 2002a:61）

のちに小林直樹が、実はゲイの主人公の橘コージが家庭教師をしていたときの教え子であることが判明する。そして小林が「ホモ狩り」をするもうひとつの理由は、彼が小学生時代、男である橘コージに恋をしていたこと、自己に対するホモフォビアを「ホモ狩り」という行為で昇華させていたことも判明する。小林は、殺人となってしまった自身の「ホモ狩り」の新聞記事を見ながら、「あんた〔→被害者〕が…」「あの人〔→橘コージ〕に似てなけりゃ……」「おれだってブッ殺すまで殴ったりはしなかったさ」「『ホモ』なんかのくせにさ」「似てんだよな…」「あんた――オレの一番大切な人にさ」（里見 2002a:79）と吐露している。彼の「ホモ狩り」が殺人にまで及んでしまったのは、自身の中に同性への恋愛感情があることに気づいた原点が橘コージへの恋愛感情であったこと、被害者となってしまった男性の北島と橘コージを重ね合わせ北島を殺害することによって、自身のアイデンティティの原点を抹消しようとしていたからである。こうして『レインボウ・ライフ』は、「ホモ狩り」という事件を扱うことによって、社会に強烈なホモフォビアが存在しているということ、そしてゲイ男性自身もが自己へのホモフォビアを抱えることによって、自らの存在を否定してしまうということを描いているのである。

『レインボウ・ライフ』の雑誌連載が始まった 2001 年という時代背景を考えると、この作品は実際に 2000 年 2 月に東京で生じた「ホモ狩り」を題材にし、マンガを通してそれを知らしめようとしていたとも言える。風間と河口による事件の紹介を参考にまとめると、「新木場事件」と呼ばれるこの事件は、2000 年 2 月 10 日の夜に東京都江東区の JR 京葉線新木場駅近くにある「都立夢の島緑道公園」で三十代の男性が殺害された事件である。事件後、中学三年生、高校一年生、成人男性の三人が逮捕された。少年らは、公園を歩いていた男性の顔面と腹部を複数回足蹴にして気絶させ、直径十センチほどの丸太棒で頭部、顔面、腹部を何度も殴っている。被害者からは現金八千円も奪っている。供述調書で少年らは自身の行為を「ホモ狩り」と呼んでおり、その供述は「少年たちが『ホモ狩り』を、『人間のクズで、変態野郎』を制裁する正義の行為とみなしていたことを十分に想像さ

せるもの」であった（風間・河口 2010:125-144）。加害の様子や加害者の意図は、図 2-14 で描かれているシーンと酷似している。風間・河口によると、テレビ報道ではこの事件が同性愛者を狙ったヘイトクライムであることは触れられず、「『遊ぶ金欲しさ』の少年たちによる『おやじ狩り』『ホームレス狩り』の一種と位置づけられることになった」（風間・河口 2010:129）。こうした背景を踏まえるのであれば、『レインボウ・ライフ』はゲイ男性へのヘイトクライムが存在している事実を明示し、社会がホモフォビアに溢れていることを表現しようとしていたのだ。

『レインボウ・ライフ』のような過激な表現はその他のマンガでは見られないが、主人公の周囲の人物による偏見を描くものは多い。『僕らの色彩』はゲイの高校生の井戸田宙を主人公とする作品であるが、同級生の会話の内容に敏感に反応し、「ホモネタ」によって同級生が盛り上がるその都度、自らの存在を消し去ろうとする井戸田が描かれる。男子の同級生が「腐女子」という言葉を発した瞬間、「あ／嫌な予感」（田亀 2019a:21）と心の中で感じる井戸田は、常に周囲の会話に耳を凝らす。彼は、「腐女子」というたった一言がホモフォビックな会話へと続いていくのか否かを先読みしなければいけない。そして周囲が「ホモネタ」で盛り上がると、「仮面」を身につけることによって、自らの存在と表情を消し去り、「ホモネタ」への加担を拒否しながらも、「ホモネタ」自体を糾弾することもできない井戸田が描かれるのだ（図 2-15）。本当の自分を押し殺し、嘘をつき通さなければいけない息苦しさは、『僕らの色彩』では沈溺のメタファーによっても表現されている（図 2-16）。

周囲の偏見によりゲイである自己を隠蔽しなければいけない状況は、ゲイ男性の孤立としても描かれる。それを描くにあたって用いられる場面設定が学校であり、高校生・中学生という人物設定である。『僕らの色彩』の主人公の井戸田も高校生であり、周囲に自身がゲイであることは言えておらず、孤立し息苦しさを感じる様子が描かれる。『弟の夫』でも、主人公ではないが、中学生の小川一哉がゲイであることに悩み、初めて自分以外のゲイに出会う場面、初めてカミングアウトをする場面が描かれる。

『そらいろフラッター』では高校を舞台に物語が繰り広げられ、ゲイの学生の孤立が描かれている。主要登場人物は高校二年生であり、「ホモ」であると噂されている真田光はクラスで孤立している。「ホモ雑誌」が真田のカバンに入っているのを見た人がいたことから噂は広まり、彼が「ホモ」であることを同級生らは陰でからかう。しかし真田が「ホモ」であることは事実でもあるため、真田もそれを否定しないが、カミングアウトをするわけでもない。周囲がその「噂」を話していても彼は聞こえぬふりをし、同級生を避ける（図 2-17）。昼食もクラスメートとは食べず、幼馴染であり唯一交流をしている山本あゆみと共に食べている。柔道の授業も毎回欠席しており、あからさまないじめを受けているわけではないが、クラスメートとの交流はない。そこに転校生としてやってきた能代大が、同級生に避けられ孤立している真田を見て、彼と交流をしようとするのがこの作品である。

孤立を描く作品ではカミングアウトの場面も描かれ、それが孤立から抜け出すきっかけとなり、また「本当の自分」として周囲との関係を築くきっかけとなる。『そらいろフラッター』では、真田によって「私はゲイである」というようなカミングアウトがされるわけではないが、ノンケの能代が真田に「お前も黙ってないで自分でちゃんと〔あの噂は〕違うって言えよ！」と忠告するが、真田は「悪いけどその噂」「本当だから」と噂が事実であることを告白する（おくら・橋井 2017:33-34）。これをきっかけに能代はゲイである真田のことをより一層知ろうとする。また幼馴染の山本に



図 2-15　仮面による自己の隠蔽（田亀 2019a:22）



図 2-16　息苦しさとしての沈溺（田亀 2019a:92）

「光ちゃんは」「男の人が好きなの？」と聞かれ、「うん」と返答する場面も描かれる（おくら・橋井 2018b:92-94）。前者が出会って間もない人物へのカミングアウトであるのに対して、後者は長い関係を築いてきた人物へのカミングアウトであるという点で、質的に異なる。前者は出会って間もない人物と初めから「ゲイ」の自分としての関係性を築こうとしている一方で、後者はすでに形成されている関係性を作り変えるためのカミングアウトでもあった。真田は山本に、「あゆみにはちゃんと自分から言おうと思ってたんだけど…」「俺…言うのこわくて」、「付き合いが長いからこそ言いづらいってとこもあって…」（おくら・橋井 2018b:95-97）と言い、既存の関係が変化してしまうことを恐れていたことがわかる。『レインボウ・ライフ』でもカミングアウトと言える場面が何度も描かれる。例えば橘コージが、「ホモ狩り」をしていた元教え子に自分がゲイであることを伝える場面（里見 2002a:96）、ゲイであることを隠して付き合っていた彼女にゲイであるこ

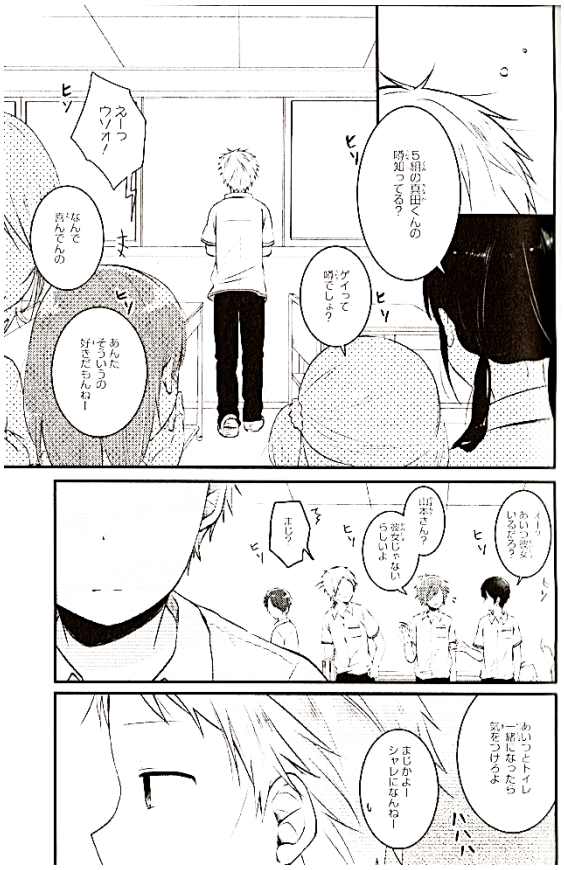


図 2-17　真田についての噂話をする同級生（おくら・橋井 2017:79）

とを伝える場面（里見 2002b:12）、「ホモ狩り」をきっかけにテレビのニュースに登場することとなり、マスメディアを通してゲイであることを伝える場面（里見 2002b:208）などが描かれる。テレビを通してのカミングアウトによって、その後、橘コージと両親が交流し、両親がコージを受け入れる場面も描かれる。

『弟の夫』でも中学生の小川一哉がゲイの主人公のマイクに対してカミングアウトをする場面が描かれ、他のゲイに会ったことも、ゲイであることを誰かに言ったことも初めてだと語る。『僕らの色彩』でも高校生の井戸田宙がカフェを経営するゲイ男性にカミングアウトをし、同様に、他のゲイに会ったことも、ゲイであることを誰かに言ったことも初めてだと語る。このように一般向けゲイマンガでは、カミングアウトの相手や状況などのバリエーションはあるが、その場面を積極的に描くことによって、カミングアウトがゲイ男性の抱える大きな悩みであることが表現されているのである。

5−4　主人公としてのノンケ

カミングアウトは、登場人物のゲイ男性が抱える葛藤や悩みを描いたり、孤立を解消するための手段としてのみ描かれるのではなく、登場人物としてのノンケがゲイについて学び始めるきっかけとしても用いられる。注目したいのは、マンガの主人公として「ノンケ」が採用されるということである。『そらいろフラッター』ではノンケの能代の視点から物語が進んでいく。そして主人公のゲイの真田が能代にカミングアウトをしたことをきっかけに、能代がゲイについて知ろうとしたり、自身の中にあるホモフォビアに気づくことによって、成長する物語になっている。能代ははじめ真田がゲイであることを信じることができなかったが、「ホモだろうがホモじゃなかろうが」「そんなの俺は全然気にしないぞ！！」（おくら・橋井 2017:44）と心の中で言い聞かせ、その翌日からあくまでもフレンドリーに振舞おうとする。しかしいつもと比べて言動が不自然な能代を真田が問い詰めると、真田がゲイであることをまだ信じられないと吐露する。それに対して真田は「ウソだよ」と返答すると能代は「はーーなんだよも〜〜〜〜」「よかったー」「そうだよなーそんなわけねーよなー！」といった瞬間、真田は「気分悪い」、「表向きは」「いい顔しながら」「気持ち悪がってんのは」「お前じゃねーか」と言いその場を立ち去ってしまう（おくら・橋井 2017:50−55）。これをきっかけに能代は自身の中にもゲイに対する偏見があったことに気づき、真田について、そしてゲイについて知ろうという姿勢を見せていく。

同様に『弟の夫』もノンケを主人公にし、その主人公の成長物語となっている。主人公の弥一はシングルファーザーで、娘の夏菜と二人で暮らしている。そこにカナダ人のマイクがやって来、数週間滞在することになるところから物語が始まる。マイクはゲイで、弥一の双子の弟でありカナダへと移住したゲイの涼二の結婚相手であった。しかし涼二は結婚後に亡くなってしまい、弥一と両親にマイクやマイクの家族を紹介することはできなかった。弥一らとも「家族」になるという涼二との「約束」を果たすために、マイクは弥一のもとにやって来た。

初めて弥一がマイクと会った時、弥一はマイクへの接し方がわからず、マイクがゲイであることへの偏見も感じていた。例えば弥一が初めてマイクと会いマイクに抱擁をされた際、心の中で「てめ…このやろ…何だ！」「離せホモ！」（田亀 2015:17）と叫ぶ自分を想像している。マイクの滞在先を、ホテルではなく弥一宅にすればいいと夏菜が提案した際にも「ああ迷惑だよ」「夏菜！余計な

こというんじゃない」（同上:33）と心の中で叫ぶ。弥一はこのような偏見を持ちながらも、「もしこれが弟の嫁さんだったら」「俺は多少戸惑いはしても」「ウチに泊まるかもと普通に想像したろうし泊まってけと自分から勧めたかも知れない」「弟の結婚相手だという男…」「そんな相手にどういう風に接したらいいのか…」「それが俺にはまだ判らない」と悩みもする（同上:41）。またいつも入浴後は下着一枚で過ごす弥一だが、「この格好じゃ…マズいよな…」「マイクはその…アレなんだし…」（同上:47-48, 傍点原文）と考え、服を着る。しかしこうした弥一の偏見も、娘の夏菜の純粋で単純な物事の捉え方によって少しずつ変化を見せ始める。男性同士でマイクと涼二が結婚したことを知ったときに夏菜が「こっち〔カナダ〕で良くてあっち〔日本〕でダメなんてそんなの変！」（同上:25）と弥一に言い立てたり、何の偏見も持たずにマイクと日々楽しそうに交流する夏菜を見て弥一は「俺もそんな風に」「単純に考えればいいのかな」（同上:77）と、少しずつ自分の認識を変えていく。弥一は、同性愛者にとってカミングアウトが非常に勇気のいる行為であること（田亀2016a:164）、一番身近な存在としての親に受け入れてもらえないかもしれないと悩むこと（田亀2016b:13, 15）、目には見えにくい差別が社会には存在していること（同上:70）などを学んでいく中で、マイクと一緒に温泉に行って入浴することに抵抗がなくなっていることに気がついたり（同上:42, 43）、マイクを弟の配偶者として周囲の人に紹介することができるようになっていく（田亀2017:61）。このように『弟の夫』はノンケの弥一の成長物語になっているのだ。つまり読者は主人公の弥一にアイデンティファイし、弥一とともにゲイを取り巻く社会状況や悩み、そして自己の中にあるホモフォビアを確認し、それを乗り越えるように仕向けられているのである。

ノンケを主人公にするという点では『メルヘン課長とノンケ後輩くん』も類似する作品である。主人公はゲイの犬飼健二とノンケの高木颯斗であり、二人は同じ職場の上司（犬飼）と部下（高木）の関係にある。犬飼はゲイであることをオープンにしており、社内の女性の恋愛相談に乗るほどでもある。そんな犬飼にノンケの高木は特別な感情を抱いてしまい、デート、交際を申し込む。しかしノンケであるのに「ゲイになる」ことが何を意味するのか、犬飼は高木に「あんたは男と恋愛することに…」「怖さとか感じないわけ！？」「自分をゲイだって認めるって事は…」「いろんな可能性を捨てることになるのよ！？」「結婚もできない／子供だって作れない」「ゲイが養子をもらうなんてのも今の日本じゃまだまだ現実的じゃないの！」（ミナモト 2018a:n. pag.）と言い聞かせる。しかし犬飼は「そもそもゲイになるつもりもないっすけど」、「人を好きになるのに」「そういうカテゴリー分けって」「必要なんでしょうか」（同上:n. pag.）と言い返し、両者は交際することになる。だが、「ゲイ」であることを否定しつつも男性同士で交際をすることは、「ゲイ」であることによっていかなる困難があるのかということに目を瞑ることになる。後の場面では、二人が高木の妹と出会い、犬飼がゲイであることに彼女が気づく場面がある。そのとき犬飼は「何か勘ぐられたりはしなかった」か心配し、「まさかお兄ちゃんもゲイなんじゃないかとか／お兄ちゃんがゲイならお母さんにも報告しなきゃとか」「お兄ちゃんがゲイなら私がなんとしても子孫残さなきゃじゃないのバカ――とか！！」言われなかったか、慌てふためきながら高木に問い詰める（ミナモト 2018a:n. pag.）。高木は「俺は別に」「課長と付き合ってる事バレても構いませんから」と返答する（同上:n. pag.）。それに対して犬飼は、次のように「現実」について諭す。

…高木／それは楽観的すぎるわね

友達とか
職場とか
世間さえも認めてくれたとしても…
血の繋がった人間は違う
そんな
簡単な事じゃないのよ　（ミナモト 2018a：n. pag.）

ノンケを登場させ、ゲイではないけれども男性と交際をするという人物を描くということによって、「ゲイ」として生きるということが何を意味するのか、それによりどのような困難があるのかを明確な言葉で教えなければいけない。この作品もノンケの高木が男性と交際をすることの困難について知っていく成長物語のようなものとなっているのである。

『そらいろフラッター』でも『メルヘン課長とノンケ後輩くん』でも、登場する「ノンケ」はゲイの登場人物と交際をすることになる。しかしいずれの作品に登場するノンケも、「ゲイ」というアイデンティティを持つようになるわけではない。BL 批評の文脈では、たまたま好きになったのが同性であると言い張り、「ゲイ」というアイデンティティを否定する人物は、ホモフォビックな存在として解釈されていた。上記二つの作品に登場するノンケは、「ゲイ」というアイデンティティ持つわけではないが、そのことをもって単純にホモフォビックと解釈することはできない。なぜならば、昨今の一般向けゲイマンガで用いられる〈たまたま好きになった人が男であった〉という設定は、読者がそのノンケにアイデンティファイしつつゲイについて学ぶための戦略的表現であるからである。加えてカミングアウトもノンケの登場人物に対して行われることによって、そのノンケの登場人物が自分の身近にはいないと思っていたゲイについて学んでいくきっかけとして描かれるという側面が強い。

5−5　恋愛の障害としての性的指向

登場人物のノンケが果たす物語上のもうひとつの機能は、ゲイとノンケの間の恋愛を描くことによって性的指向の違いを恋愛の障害とし、恋愛成就を遅延させることで、それを乗り越えるという物語を生成することである（そして連載を長期化させることができる）。1990 年代の BL の「禁断の愛」、そしてゲイ男性向けゲイマンガのように、二者間の排他的な恋愛関係という純愛を描くことができるようにもなっている。

『メルヘン課長とノンケ後輩くん』はゲイの犬飼とノンケの高木の恋愛が物語の軸であり、高木は男の犬飼に対して感じてしまう感情が何なのか、犬飼を見るたびに勃起してしまうのはなぜかを知ろうとする。そして交際を申し込まれた犬飼がノンケと付き合うことの不安を抱える様子が描かれる。高木は犬飼に、「生まれてはじめて男性が気になってる」、「自分の気持ちについても」「もしそれが付き合うというカタチで」「少しでも解き明かす事ができるなら…」「俺はあなたの恋人になりたい」「のかもしれない」（ミナモト 2017：n. pag.）と告白し、交際を申し込むが、犬飼は「ノンケが男に本気で心動くなんてありえないんだから」（同上：n. pag.）と、当初はそれを断る。しかし高木による積極的なアプローチにより交際へと至り、犬飼も高木への恋心を感じ始める。それでもなお犬飼は、「私の事が好きなのにノンケって言い張ってるような男と」「本当に恋愛なんて成立するの？」

（ミナモト 2018a:n. pag.）と、相手がノンケであることに不安を抱き続けるのである。

この関係性の中で、犬飼はこれまでの乱交的な素行から身を引いていく。34 歳であり、これまで恋愛をしてこなかった犬飼は、高木のことが好きであるという自らの気持ちに戸惑いを感じ、「だだだだってっこんなキモチはじめてなんだものっ！」「今まで男イコール／セックスだった私がノリでヤるのなんてイヤッ」「ひとつひとつの行為を大切に育みたいなんて思っちゃってるのよ！？」「セックスエキスパートのこの私がっ！？」（ミナモト 2018b:n. pag.）と取り乱しつつ高木に問い詰める場面も描かれる。

ゲイ男性がノンケに思いがけず恋をしてしまうことは実際にあり、ゲイ雑誌の読者投稿欄などでも、この〈叶わぬ恋〉についての悩みは頻繁に語られてきた。だが、ノンケとの交際には基本的には至らない(23)。しかしここではこの基本的には生じえない恋愛を描くことで、純愛を描くことができている。犬飼は恋愛に興味はなかったが、高木からの告白によって、たまたま高木に恋愛感情を抱いてしまったのであり、高木も男性が好きだからという理由ではなく、犬飼という特定の人物に対して恋愛感情を抱いてしまったのであり、この両者の間には、〈あなただから特別に恋愛感情を抱いた〉という、対象の排他性が成り立っているのである。この点は、ゲイ男性向けゲイマンガにおける純愛の構造と類似している。

『そらいろフラッター』でも類似する関係性が描かれている。この作品では、ノンケの能代とゲイの真田を中心に物語が進んでいくが、物語の後半ではもう一人のゲイの誠人が登場する。これらの登場人物の中での恋愛関係が描かれるが、彼らの恋愛関係を捉えると、ゲイの誠人はノンケの能代に片思いをし積極的にアプローチをする。ゲイの真田はノンケの能代が気になるがその気持ちを素直に認めることができずにおり、能代は真田に対して不思議な感情を抱くがそれが「好き」という気持ちなのかわからない、という関係になっている。ここでの恋愛感情の方向性を見ると、ゲイという明確なアイデンティティを持った二者がノンケに恋をするという構造が中心にあり、ゲイ男性二者の間での恋愛関係が描かれるわけではないのである。最終的にはノンケの能代とゲイの真田は交際することになるが、この作品でも性的指向の違いが恋愛の障害として設定され、それを乗り越えることによる純愛が描かれているのである。

『そらいろフラッター』も『メルヘン課長とノンケ後輩くん』も舞台は学校・会社という、基本的には異性愛的な空間とされる場所であり、そこで生じる〈偶然の出会い〉と〈性的指向の違いという障害〉によって純愛を描くことが可能となっている。この点はゲイ男性向けゲイマンガの物語と非常に類似しており、ゲイ男性のコミュニティからの距離が純愛の生じる条件ともなっている。しかし、一般向けゲイマンガが「社会」を舞台に取るのは、ゲイ男性が経験しうる差別を描くためであり、ゲイ男性向けゲイマンガで見たような、ゲイコミュニティからの距離化を図って純愛を描くためと解釈することは必ずしも妥当とは言えない。つまり、ゲイ男性向けゲイマンガでゲイコミュニティ以外の場所が舞台とされるのはゲイ男性の恋愛を純愛として描くためであったのに対して、一般向けのゲイマンガでは、ゲイ男性の受ける差別を描くために「社会」が設定された上で、差別の存在を提示する表現方法のひとつとして恋愛が描かれるため、その恋愛が持つ意味合いは副次的なものでしかないのである。

(23)　「基本的に」と言ったのは、ノンケと交際できたという語りは実際には少数ながら存在するからである。

以上、本節では一般向けゲイマンガを分析してきた。分析を要約すると一般向けのゲイマンガは、読者にゲイを含むセクシュアルマイノリティについての知識を教示するという志向があり、異性愛社会で差別や抑圧に悩む登場人物が描かれていた。作品によっては主人公にノンケを採用することによって、想定される異性愛者の読者が主人公にアイデンティファイしやすくされ、主人公の「成長」を通して読者は擬似的に差別と抑圧のある社会を学習・経験するのである。異性愛規範の存在を描き、それを乗り越えようとする登場人物が描かれるという点で、一般向けゲイマンガは溝口が言うところの進化系BLに類似している。

進化系 BL が異性愛規範を意識した作品を描くようになったきっかけとして、やおい論争があると溝口は語っていたが、では一般向けゲイマンガがゲイ男性向けのゲイマンガとは異なり、差別・抑圧を積極的に描く背景には何があるのか。もちろんそのひとつは、想定される読者としての異性愛者にゲイを取り巻く社会について教示するという目的があるが、『レインボウ・ライフ』の作者である里見満は自著の背景について次のように語っている。

> インターネットの普及は、ゲイコミュニティにこれまでにない繁栄をもたらした。
> 「ナイトではアゲアゲだしィ、ケータイフォトメ(24)でサクッと即ヤリだってオッケーだしィ、もう、おじさん達の時とは時代が違うのぉ！」
> 彼等の言葉を裏付けするように、新宿二丁目の街角では大画面でゲイビデオが流され、ハッテン・サウナにはジャグジーだってついている。
> 人気の出会い系ゲイサイトでは、秒単位で新しいメッセージが更新されていく。
> 一歩でも外の世界に出るとあいかわらず漂ってくる、あのサムい、イタい、オモい空気を、十分以上に覆い隠してくれている。（里見 n.d.）

この語りでは、ゲイコミュニティという「内」で生じた変化が、「外」の世界である異性愛社会にある「現実」を覆い隠すようになりつつあることに触れられている。この語りによると、里見が『レインボウ・ライフ』を描いた目的は、当事者のゲイ男性に対する働きかけであった。彼自身、「『Rainbowlife』という作品は、私自身の『ゲイリブ』だったのである」（里見n.d.）とも語っている。しかし『レインボウ・ライフ』のような物語がゲイ雑誌に掲載されなかったのは、必ずしも差別・抑圧の物語がゲイ男性が求める物語ではないということを里見が感じ取っていたからであり、だがそれでも一般雑誌における連載を通して間接的にでもゲイ男性当事者に働きかけようとしていたからではないだろうか。

(24) 「ナイト」は「ゲイナイト」の略である。「フォトメ」は「フォト・メッセージ」の略であり、友達・恋人・セックスフレンドなどを募集するメッセージとともに投稿者自身の顔写真を掲載することのできるインターネットの掲示板のことである。

６．オルタナティヴ・ストーリーの形成

本章では、ゲイ男性によってゲイ男性向けに描かれたマンガと一般向けに描かれたマンガを取り上げ、どのようなゲイ男性がどのような物語とともに描かれているのかを分析・比較した。1990 年代までのゲイ男性向けゲイマンガでは、異性愛社会を原因とする葛藤が描かれ、その葛藤を障害として恋愛の成立・不成立が物語化されていた。またその葛藤は「自分らしさ」をめぐる葛藤ともなっており、異性愛社会との関わりの中でゲイ男性のアイデンティティは揺らいでいた。しかし 2000 年代以降から描かれる恋愛の物語では、悩みの原因がゲイコミュニティに起因とするものへと移行していった。浮気や美醜の格差などゲイ男性間で生じる不信感が恋愛の悩みとなり、それが恋愛の成立・不成立を左右する障害となっていた。その悩みを〈解決〉し恋愛を成立させるために、学校や地方という場所が偶然の出会いが生じるための舞台として設定され、これまでに異性愛的な空間とされてきた場所に新たな意味づけがされていた。また家族が描かれる際には家族を同性愛者へと読み替えたり、あるいはあえて家族を描かないことによって、実は抑圧的である家族の問題を避けるような描写が行われていた。社会問題と言えるトピックは描かれつつも、それを取り上げることにためらいが見られたり、別の解釈が与えられたりしていた。こうして 2000 年代以降の作品では異性愛社会の存在は後景化していった。対して一般向けゲイマンガは、想定される読者としての異性愛者に、ゲイや LGBT について教示する意図によって描かれていた。実際に生じた事件を取り上げたり、ゲイ男性が普段の生活で経験する差別や抑圧、ゲイであることを隠さなければいけない苦痛などが描かれていた。ゲイ男性はゲイコミュニティという閉じた関係性の中に存在するものとしてではなく、広く社会に存在するものとして描かれており、ゲイコミュニティにおける悩みのようなものは描かれていなかった。

ゲイ男性向けゲイマンガについて考察すると、2000 年代以降の作品の大きな変化として、作品内でゲイ男性が自らを位置付けるものが、異性愛社会からゲイコミュニティへと移行している点が特徴的であった。これは単に悩みの質の変化を示すだけではなく、広く社会において自らをどのような存在として捉えるのか、社会の中のどこに自らを位置付けようとするのか、という認識を反映するものとも言える。つまり、ゲイ男性は広く異性愛社会に存在する者というよりは、主にゲイコミュニティという限られた人間関係の中に存在する者として捉えられ始めていると言えるだろう。しかし、ゲイコミュニティを描くと同時に、ゲイ男性同士の恋愛を成就させるためにそのコミュニティからの距離化を図ったり、ノンケを性愛の対象とすることで恋愛の悩みから距離を置きながらゲイ男性同士のつながりを維持するための物語も形成されていた。この点が示唆しているのは、ゲイとしてコミュニティに関わりを持ちたいという欲求と、恋愛を行うためにはそこから距離を置きたいという相反する欲求が共存するアンビバレントな状態ではないだろうか。ゲイコミュニティの中ではまっとうな恋愛ができないというような物語や、ゲイ男性が他のゲイ男性から距離を置こうとするような舞台設定は、内面化されたホモフォビア、あるいは「ゲイのゲイ嫌い」と呼ばれるような状況にも見えてしまう。しかし登場人物はゲイであるという自身のアイデンティティを否定する様子があるわけではないし、ゲイであることへの嫌悪が描かれているわけでもない。ここで描かれているのは、ゲイ男性がゲイとしてコミュニティとどのように関わっていくべきかという、新たな

悩みの形と言えるのではないだろうか。

ゲイコミュニティにおけるゲイ男性の関係性を描く作品が 2000 年代になって多く登場し始める全体的な傾向の中では、幸せな物語を描きたいという作者による語りが意味を持ってくる。児雷也は「ハッピーエンドしか書けない」（児雷也 2007:172）と語り、1990 年代に女性との結婚について描いていた竹本小太郎も、「現実には、ゲイであることに対しての悩みを持つ人は多いだろう。だからこそ、悩むよりも楽しくやれば？という希望を込めていつも描いている」（竹本 1997c:37）と語っている。これらの語りは、実際にはさまざまな（異性愛社会を原因とする）悩みをゲイ男性は抱えているが、それとは別のゲイ男性像を描こうという姿勢として捉えることができる。しかしそれでも、描かれるゲイ男性は彼ら同士の交友を原因とする恋愛の悩みを抱えている。だが、ゲイ男性が抱える悩みというのが異性愛社会を原因とする差別などの悩みとして言説化されている社会では、ゲイコミュニティを原因とする〈悩み〉は悩みとして認識されず、2000 年代以降の作品では異性愛社会からゲイコミュニティへと焦点が移ることにより、比較的閉じた関係性の中で従来の悩みからは距離のあるゲイ男性を描くことができるのである。そして描かれるゲイ男性は恋愛の〈悩み〉を抱えていても、比較的「ハッピー」なものとして認識される。この傾向は同時に、直面したくない「現実」から目を背けているようにも見え、ゲイ男性がよりクローゼット志向になりつつあるようにも見えるだろう。この点は、必ずしも良い傾向であるとは言えないかもしれないが、ゲイ男性がこうした物語を生産し消費するという活動が、抑圧から一時的にでも逃避し、生きやすい世界に自身を投影することによるガス抜きとなっている可能性は考慮すべき点だと思われる。

だが、「ハッピーしか描けない」、「悩むよりも楽しくやれば？」という語りは、本当に単に異性愛社会を原因とする「悩み」から目を背ける〈現実逃避〉なのであろうか。この背景にあるのは、3 節のはじめでも触れた、ゲイであることを新しいイメージで捉えていこうという 1990 年代の当事者によってもたらされた志向であり、主に社会運動の文脈で主張される、異性愛社会を原因に悩む「近代の『悩める同性愛者』」（古川 1994:48）とは異なる表象を形成しようとする欲求ではないだろうか。アメリカのヤングアダルト小説における LGBT の表象について分析をしたトーマス・クリスプは、「リアル」・「真実」のように受容される小説は既存の物語形式に則っていること、そして物語を「リアル」に見せるためにホモフォビアが描かれることを指摘している(Crisp 2008:2009)。この指摘を参考にすると、本章の一般向けゲイマンガは、まさに「リアル」な物語を提示する作品となっている。つまり、社会一般で共有されていると思われる、あるいは少なくとも異性愛社会を変革するための運動の文脈で用いられる、「被差別者」としての同性愛者像をなぞった物語になっているのである。

ここで今一度思い出したいのは、BL について溝口が分析した際に指摘していた、2000 年以降の「進化系 BL」である。1990 年代のやおい論争を経たことで BL の作り手がより〈ゲイの視点〉を取り入れた作品を創作するようになり、その中ではカミングアウトの物語などが積極的に描かれていた。しかし本章で見てきたゲイ男性向けマンガでは「進化系 BL」に見られるような特徴はあまり見られなかったことからも、ゲイ男性向けゲイマンガが必ずしも異性愛規範に敏感であり、社会変革を目指した作品であるわけではない。となると溝口が言っていた、BL 作者が「発見」した〈実際のゲイ〉とは、いったい誰であったのだろうか。少なくとも言えるのは、進化系 BL に取り入れられたとされるゲイの視点というのは、あくまでも BL の作家らが想定した〈ゲイ〉の視点であり、〈本当

のゲイ〉を描くという限界を見せている。言い換えると、〈ゲイの視点〉を取り入れたとしても、結局のところそれは〈本当のゲイの視点〉にはなり得なかったのであり、主にゲイ男性当事者によって社会変革のために主張されてきた「ゲイ」にまつわるひとつの物語でしかなかったのではないだろうか。

同性愛者に対する差別があるか否かという状態も社会構築主義的視点から捉えると、「クレイム申し立て活動（claims-making activity）」によって構築された〈現実〉である。「クレイム申し立て活動」とは、「社会問題とはある種の状態であるという考え方を捨てて、それをある種の活動として概念化しなければならない」（Specter & Kitsuse 1977=1990：116，傍点原文）とする視点であり、社会問題は「なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレイムを申し立てる個人やグループの活動である」と定義される（同上0：119，傍点原文）。この視点から考えると、一般向けゲイマンガで描かれる差別や抑圧も、クレイム申し立て活動のひとつであり、被差別者としてのゲイ男性を構築する行為である（もちろん同様に、ゲイマンガにおける「ハッピー」な表象にもこの視点が当てはまる）。アカーの活動を思い出してもわかるように、1990 年代のゲイ男性当事者による社会変革活動で主張されていたのはこのような被差別者としての同性愛者であり、それは「ゲイ」としての集合的アイデンティティであることが強調されていた。しかしゲイであることを一枚岩的に捉えるアイデンティティ（少なくともそのように受容されていたと思われる主張）には、個人のあり方を枠づける側面がある。この点はカミングアウトの言説にも当てはまり、大坪真利子はカミングアウトをめぐる主流の認識を論じる中で、「『抑圧状態からのカミングアウトへ』というストーリーの浸透は、次の問題を引き起こすようになる。個人のホモセクシュアリティの開示を『クローゼットからのカミングアウト』というストーリーに還元させることで、その語りを枠づけてしまう」（大坪2013：79）と指摘している。

ストーリーの画一化についての議論を参考にするのであれば、「ハッピーしか描けない」、「悩むよりも楽しくやれば？」という語りは、単に〈現実逃避〉であるのではなく、主流の「被差別者」としてのイメージへの抵抗であり、それとは異なるオルタナティヴ・ストーリーを構築しようという営みでもあるのではないだろうか。社会変革にあたっては差別・抑圧の存在を主張することが必要ではあるが、その物語にだけ自らを押し込むことは〈本当の自分〉を必ずしも表現することにはならない。ゲイ男性向けにはせめて別の物語を提示したい、という作者らの欲望があるのではないだろうか。この視点からは、前章で見た『バディ』の実践もオルタナティヴ・ストーリーの形成として捉えかえすことができる。しかしさらにもう一歩進んで、なぜ「被差別者」という一枚岩的なアイデンティティに対してのオルタナティヴ・ストーリーを形成したいという志向が生じたのか、という問いを考えることができる。この問いへのひとつの答えは、『バディ』の言説が「男」としての生き方に向かっていったことを考えると、ゲイマンガ作家の中にも、読者のゲイ男性の中にも、「男」としてのマジョリティの位置から社会における「被差別者」というマイノリティの位置へと地位が降格することを避けたいという気持ちがあるからではないだろうか。

第３章　「ゲイリブ」による社会運動とコミュニティ形成

――「札幌ミーティング」による活動を事例に

１．日本のゲイグループと札幌ミーティング

1-1　本章の目的と分析対象

前章まではゲイ男性をターゲットとした自己変革活動を中心に論じてきたが、本章からは、社会変革志向が強く、非当事者に対する働きかけを積極的にしてきた団体である「札幌ミーティング」（通称）を取り上げる。この団体が形成していたゲイ男性に関する言説と具体的な活動を分析することによって、札幌ミーティングがゲイ男性をどのような存在として社会やゲイ男性に提示していたのかを論じていく。

前章までの分析を簡単に振り返ると、ゲイ男性をターゲットとした自己変革活動としての『バディ』では、「ハッピー」をキーワードに読者のゲイ男性に働きかけを行い、差別などの現実を見るよりはそこからの〈逃避〉を促したり、「男」としての生き方の提示によってエンパワーメントをしたりしていた。ゲイ男性向けゲイマンガでは、1990 年代までは異性愛規範を原因とする「悩み」が描かれていた。しかし、2000 年代以降はゲイコミュニティでの〈悩み〉が描かれるようになり、かつ比較的「ハッピー」な存在として描かれるようになる中で、社会の存在は後景化していった。つまり、ゲイ男性をターゲットとした自己変革活動では、「ハッピー」の表象によって自己変革がされてきたとまとめることができる。対して、社会変革活動としての一般向けゲイマンガでは、ゲイ男性を取り巻く差別と彼らの「悩み」がまざまざと描かれており、対当事者と対社会の表象には明確な使い分けがあった。では本章から見ていく社会変革を基盤とする活動では、ゲイ男性はどのような存在として捉えられてきたのであろうか。「ハッピー」と「悩み」の表象はいかに利用されてきたのであろうか。また前章まではゲイ男性をターゲットとした自己変革活動が分析の中心であったが、本章から扱う活動は自己変革志向と社会変革志向を共に持つ。表象の使い分けだけではない、両者の活動の間にある関係性も視野に入れ分析を進める。

1980 年代後半から 1990 年代の日本では、「ゲイグループ」や「ゲイリブ団体」（ゲイリブ＝ゲイリベレーション、同性愛解放運動）と称される、ゲイ男性を中心とした活動団体が多く登場した。表 3-1 には対社会的な活動を主に行っていた団体から、友人作りなどのコミュニケーションを主に行っていたものなど、1970 年代から 1990 年代に結成されたものを広くリスト化している。活動の規模はそれぞれの団体で大きく異なるものの、1990 年代以降のゲイ男性をめぐる状況を知るにはいずれの団体も重要な分析対象となり得る。まず以下では、なぜ社会変革志向の強い活動としてゲイリブ団体の活動を取り上げるのか、そしてなぜゲイリブ団体の中でも札幌ミーティングを取り上げ

表 3-1　1990 年代以前に結成されたゲイグループ／ゲイリブ団体（結成順）

団体名	設立時期	活動地	機関誌・会報
日本同性愛解放連合	1976/11	?	-
フロントランナーズ	1977/3	?	-
プラトニカ・クラブ	1977/5	東京	『ぷらとにか』（全 4 号）
OWC（アワーズ・ワーク・コミュニティ）	1978	?	『ウェンズデーニューズ』
JGC（ジャパン・ゲイ・センター）	1979/3	?	『ゲイ』、『チェンジ』、『JGC ニュース』
東京ゲイサポートグループ	1981	東京	『COMING OUT』
CLⒶSS	1983	東京、大阪	?
IGA 日本 → ILGA 日本	1984	東京	『JOIN』、『win』
上方 DJ 倶楽部	1985	大阪	『デコマガ』
動くゲイとレズビアンの会（アカー）	1986	東京	『アカー』、『ACT!』、『LIO 便り』
YOUgikai	1986	愛知	『ゆうとぴあ』
OGC（大阪ゲイ・コミュニティ）	1987/10	大阪	『OCG にゅうす』、『結びっ子』
ILGA 日本・札幌ミーティング → 北海道セクシャルマイノリティ協会（HSA）札幌ミーティング	1989/2	札幌	『ニュースレター』
ILGA 日本名古屋グループ	1990/3	愛知	『太郎と次郎』
DON!	1991/8	兵庫	『magazine DON！』
ぷあぷあ	1991/11	関西	?
仙台ユニット E-betcha	1992/8	宮城	『いいべっちゃ通信』
佐藤雅樹（責任発行）/Kick Out	1992	東京	『Kick Out』
プライムクラブ	1992/12	大阪	-
ドラゴンサークル	1993/3	東京?	『ドラゴンインフォメーション』
ドルフィンクラブ	1993/4	千葉	ニュースレター（名称不明）
東京ゲイろう者コミュニティ → 東京レズビアン&ゲイろう者コミュニティ	1993/4	東京	『L&G・Deaf News』
ゲイ・フロント関西 → G-FRONT 関西	1993/4	大阪	『UP&UP』、『ぽこあぽこ』
UGO ず（うごうず）	1993/5	埼玉	-
TOGETHER	1993/6	東京	『とぅぎゃ夫くん』
神奈川 WAVE	1993/8	神奈川	-
レインボーフラッグ	1993/8	東京	?
DON! TOKYO	1994/4	東京	?
P3	1994/5	岡山	『P3 プレス』
サークル SEGMENTS	1994/5	北見（北海道）	-
すこたん企画 → すこたんソーシャルサービス	1994/9	東京	?
レズビアン？ゲイ？バイ？ヘテロ？…生と性はなんでもありよ！の会　プロジェクト P	1995/2	京都	会報あり（詳細不明）
GAME	????	埼玉	会報あり（詳細不明）
Truth	????	千葉	?
TⒶKESHI PROJECT	????	東京	?

エイズ・アクション	????	東京	?
G・BLOCS 東京	????	東京	?
Pride Music Network	????	東京	?
まつぼっくり	????	愛媛	『気まぐれ通信まつぼっくり』
サークルT	????	大阪	『ぽこあぽこ』
JTG	????	?	?

表 3-2　1990 年代以前に結成されたレズビアングループ（結成順）

団体名	活動期間	活動地	機関誌
若草の会	1971 - 1986	東京	『EVE & EVE』、会報あり（詳細不明）
「すばらしい女たち」編集グループ	1976 - ????	東京	『レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌 すばらしい女たち』、
まいにち大工	1977 - ????	東京	『ザ・ダイク』
ひかりぐるま	1978 - ????	東京	『ひかりぐるま』
レズビアンフェミニスト・センター	1980s - ????	?	-
シスターフッドの会	1980s - ????	?	『レズビアン通信』
れ組のごまめ	1984 - ????	東京	『れ組通信』
ひょうこま舎	1980s - 1990s?	?	『瓢駒ライフ：新しい生の様式を求めて』
れ組スタジオ・東京	1987 - 現在	東京	『れ組通信』
掛札悠子（責任発行）/ Office Out	1992 - 1995/12	東京	『LABRYS』(1992 年秋創刊)
東海レズビアン・コミュニティ	1992 - ????	愛知/名古屋	?
国際ビアン連盟	1994 - ????	?	?
OLP	1994 - ????	大阪	会報あり（詳細不明）
LOUD	1995 - 現在	東京	-
Crépuscule	1994 - ????	宮城県/仙台	会報あり（詳細不明）
ピースリバー	1995?	神奈川	会報あり（詳細不明）
Herstory	????	北海道/札幌	?
レズビアンの本を読む会「うさぎ文庫」	????	宮城県/塩釜市	『うさぎ文庫だより』
鼎事務局	????	新潟	『フローライト』
レインボー・ライフ・ネットワーク（R・L・N）	????	埼玉	?
ラヴェンダーガーデン	????	千葉県/柏市	?
Vivid～セクシュアリティを考える会～	????	千葉	会報あり（詳細不明）
玉さんの畳のお部屋	????	千葉	会報あり（詳細不明）
Womyn's Bi-Net	????-1996/12	東京	会報あり（詳細不明）
ヘテロティカ	????	東京	?
Selfish Club	????	東京	会報あり（詳細不明）
自営業者達の情報交換会「JOB」	????	東京	『JOB』
「性的指向」についての情報を広めるアクション	????	東京	?
星空スプーン	????	東京	?
神奈川県♀♀の集まり　ピースリバー	????	神奈川/厚木市	?

CIRCLE ZERO	????	神奈川/横浜	会報あり（詳細不明）
Lemon	????	石川	『LEMON』
Q.P.	????	愛知	-
THORN-PATH	????	愛知	?
WOMEN'S DIARY PROJECT	????	京都	-
LIB(Lesbians Information Board)	????	大阪	『リブレター』
OWN(Okayama Women's Network)	????	岡山	会報あり（詳細不明）
MORE	????	広島	?
ハート・ショット	????	中国・四国地域	?
Sweet Soul	????	福岡	『Sweet Soul』
フルフル	????	九州	?

※1　表3-1、表3-2の作成にあたって、札幌ミーティングのニュースレター(特にNL1995/7)、プロジェクトG(1986)、伏見(2004)、杉浦(2008;2015;2017)、『KICK OUT』12号(1994)、『LABRYS』10号(1995)、『ゲイの学園天国』(1994:216-218)、『アニース』(1996秋号、1997春号、1997夏号、1997冬号)、『女を愛する女たちの物語』(1987)、(BADI2000/1:48-55)、を主に参考にした。これらに加え、筆者によるその他の資料調査の中で発見した団体を記載している。表内には、政治的活動を主な活動にしていた団体から、交流サークルと言える団体までをも含んでいる。大学内のサークルは表記していない。詳細が不明な団体も多いが、存在が確認できているグループをすべて掲載している。
※2　名称の変更があった場合は、「→」で旧名称から新名称への移行を示している。
※3　表3-1のグループは「ゲイグループ」「ゲイリブ団体」とくくったが、ゲイ男性だけではなくレズビアンの女性などが参加しているものもある。表3-2はレズビアン・バイセクシュアルなどの女性のみのグループを記載している。

るのかという点を明確にしておく。

ゲイリブ団体をとりあげる理由は、法制度を改革するための活動やメディア表象に対する抗議活動を積極的に行ってきたという点で、社会における同性愛者（をはじめとしたセクシュアルマイノリティ）についての認識を変えていこうという強い姿勢があったためである。例えば序論でも述べたように、1990年代の重要な出来事のひとつに、アカーによる「府中青年の家裁判」があった。彼らは同性愛者であることを理由に公共施設の利用を断られたが、その背景には同性愛者にまつわる偏見があり、アカーはそれを裁判を通して変えていこうとしていた。またG-FRONT関西による「野茂とホモの見分け方」に対する抗議活動も、「ホモ」という蔑称が用いられることによって男性同性愛者が嘲笑の対象とされること、「ホモ」にまつわるネガティヴなイメージが書籍を通して流布されることを批判するものであった。また時代は少し進むが、すこたん企画の伊藤悟と簗瀬竜太によって引き起こされた「オカマ論争」も類似する抗議活動であった。この論争は雑誌『週刊金曜日』の中で「オカマ」という表記が用いられたことに彼らが抗議をしたことから始まったが、マスメディアで「オカマ」という「蔑称」を用いることや、メディアにおける同性愛者の扱いについて問題提起するものであった(1)。このように1990年代に登場したゲイリブ団体は、国や企業などを相手取り、社会の認識を変えるための働きかけをしていたのである(2)。

ゲイ男性当事者に向けた活動を行うか、あるいは非当事者に向けた活動を行うかによって表現内容が異なるのは、一般向けゲイマンガの分析に顕著に表れていた。広く社会に対して働きかけるに

(1)　「オカマ論争」の詳細は（伏見・及川・野口ほか2002）を参照。
(2)　このような活動をしていた団体すべてが「ゲイリブ団体」を自称していたわけではないが、ここでは広く社会に対する積極的な働きかけをしていた団体を「ゲイリブ団体」と呼ぶことにする。

は、セクシュアルマイノリティの存在を承認してもらうため、あるいはセクシュアルマイノリティがマイノリティとして置かれている状況を伝えるため、ゲイ男性に対するものとは別の表象がされていた。『バディ』やゲイ男性向けゲイマンガは当事者の変革が主眼で、社会変革を目指していたとは言いにくい。では、社会変革を基盤としつつ当事者に対する働きかけを積極的に行ってきた札幌ミーティングは、ゲイ男性のどのような在り方を提示・形成してきたのであろうか。

ゲイリブ団体の中でも札幌ミーティングを取り上げる理由のひとつは、北海道札幌市という日本の〈周縁〉を拠点としながらも他地域の団体に引けを取らない活発さがあり、特に1990年代には全国的にもゲイリブを牽引する力があったと言えるからである。1990年代の札幌ミーティングは北海道で唯一のセクシュアルマイノリティの運動団体であり、非常に幅広い活動を行っていた(3)。序論でも触れたような抗議活動に加えて、講演会、勉強会、合宿、ゲイナイトなど無数の活動を行っており、札幌ミーティングにはありとあらゆる活動が集約されていた。種々の活動の中でもその活発さと社会変革志向の強さを象徴するものに、セクシュアルマイノリティのパレードの開催がある。日本では1994年に東京で初めてパレードが開催され、早くもその2年後の1996年には札幌でも開催された。東京と札幌の次にパレードを開催した地域は大阪であるが、その初開催は札幌での開催から十年後の2006年であった。また東京でのパレードは1997年から1999年までほぼ休止状態であったが（第4章で詳述)、札幌ではその間も休まずに開催されてきた。その後、東京では2000年にパレードが復活したが、復活の立役者となった砂川秀樹は、「2000年に東京でのパレードが復活したのは、札幌でのパレードの継続があったからと言っても過言ではないだろう」(砂川2003a:141)と語っている(4)。伏見憲明も2004年に札幌の活動について次のように評価している。

> 札幌は人口百七十七万人、日本で五番目の大都市である。しかし、ゲイムーブメントという意味では、人口では上回る大阪や名古屋以上にアクティブで、九〇年代後半からはゲイパレードまで開催されている先進都市だ。近年は、ネットワーク内でのゲイリブ団体とゲイバーなどとの連携も上手くいっていて、さながらゲイコミュニティの実験都市として時代の先端を走っている。（伏見2004:322）

伏見による評価にもあらわれているように、札幌ミーティングは1990年代当時の日本の活動を知るための代表例と言えるのである。つまり、札幌ミーティングを分析対象として選択することは、札幌特有の活動を分析することのみならず、1990年代当時のゲイリブのある程度一般的な現象を考察することでもあるのだ。

札幌ミーティングを取り上げる二点目の理由として、セクシュアルマイノリティの社会運動が東京中心の出来事ではなかったことを示すという、筆者による意図がある。これまで注目されてきた

---

(3) 1990年代半ば以降、他にもゲイ男性のサークルが北海道内で結成されている。例えば、「北大act」(1996年)、「GAY NET HAKODATE」(1997年)、「Happy Swing」(1998年)、「旭川クラブ」(1998年)、「CLUB HOMME NAKED'S」(1999年）といったサークルがあった。しかし、社会運動として活動を行っていたのは札幌ミーティングのみであったと思われる。

(4) 1997年にはクィア・スタディーズ編集委員会による「クィア・スタディーズ大賞」の「アクティヴィズム部門」において、札幌ミーティングが表彰されている（クィア・スタディーズ編集委員会編 1997:40)。表彰状には、「貴団体は地方都市において初めてクィア・パレードを企画、実行し、これを成功されました。このことによりクィア・ムーブメントに顕著な功績を残されましたので、ここに表彰します。」と記されている。

活動のほとんどすべてが関東や関西での活動であった。確かに、1980 年代以前は主に東京や大阪に活動団体が集中しており、その中でも東京を拠点とするアカーはもっとも活動的でありかつ目立つものであった。上述のように日本で初めてセクシュアルマイノリティのパレードが開催されたのも1994 年の東京であった。また社会運動という文脈から離れても、ゲイ男性のアイデンティティの形成と密接に関わる「ゲイコミュニティ」の中でも最大の規模を誇るのは、ゲイ関係のバーが 330 軒ある（砂川 2015:27）、東京の新宿二丁目である。こうした事実は、東京での活動を知ることが日本のゲイ男性のアイデンティティやゲイリブの歴史を知るために必要不可欠であることを意味している。しかし、その他の地域でも活発な活動が行われていたことは紛れもない事実であり、東京での活動ばかりに注目すると、その他の地域の活動を結果として軽視してしまう可能性がある。そしてあたかも関東・関西以外の地域での活動が存在してこなかったと思われる可能性がある。例えば、ゲイアイデンティティについて論じた古典的研究でも、ゲイアイデンティティの形成が、資本主義による都市化と人々の都市への集中を背景としていたことが論じられている(D'Emilio 1983=1997)。しかし河口和也（2016）はこれまでの研究の問題点として「地方」で暮らすセクシュアルマイノリティが見えないままであることを指摘し、「地方」のセクシュアルマイノリティの生活について論じている。「地方」に注目することは、単にセクシュアルマイノリティが東京以外の地域にも存在しているという当たり前の事実を改めて論じるだけのことではなく、ゲイリブといった社会運動と積極的なアイデンティティの形成が「地方」でも行われていたこと、それが関東・関西特有の出来事ではなかったことを示すことでもあるのだ。もちろん、「地方」といっても 2019 年現在の札幌は人口二百万人近くを有する都市であるため、北海道内では「大都市」としての認識が十分にある。しかしそれでもなお、関東・関西以外の地域での積極的な活動とアイデンティティの形成があったことを示すことは、日本という領域におけるセクシュアルマイノリティの活動を捉えるにあたって重要である。

そして三つ目の理由は、札幌ミーティングではゲイとレズビアンの活発な交流があったため、ゲイ男性のアイデンティティがレズビアンとのいかなる関係の中で形成されていたのか、あるいはゲイ男性とレズビアンをジェンダーの点から比較することで、彼らの活動やアイデンティティがいかなる条件において可能となっていたのか、という点も視野に入れることができるためである。掛札悠子は、「日本全国どこ探したってILGA札幌（ママ）ミーティング（…）ほどの規模で、レズビアンやバイセクシュアルの女性とゲイが一緒に活動しようとしているグループってないのよね」（NL1994/3:7）と語っている。東京に移住して女性を対象とした活動を開始した札幌ミーティングの女性メンバーは、「ゲイもビアンもバイセクシャルも一緒になって活動できた札幌ミーティングの楽しさを味わってしまった自分には少々ものたりない感がある」（NL1998/7:14）との感想を残している。表 3-2 では1990 年代以前に設立されたレズビアンのグループをまとめてあるが、ゲイグループ／ゲイリブ団体と同様に数多くの団体が結成されてきた。これらの団体の具体的な設立経緯や活動内容は把握できていないが、その多くは必ずしもゲイ男性とともに活動をしていたというわけではない。特に 1970 年代から 1980 年代にかけて設立され活動を行っていた団体はレズビアンフェミニズムの思想から多く影響を受けており（杉浦 2008）、ゲイ男性の活動とは異なる道筋をたどってきた。

ゲイとレズビアンの交流が札幌では活発であったという状況は札幌の人口規模にも起因すると思われる。東京ではセクシュアリティ別・目的別に団体やコミュニティが棲み分けられているが、札

幌などの一定規模の地方都市ではゲイとレズビアン、そしてその他の団体との交流が存在しているという指摘がある（赤杉 2004）。札幌程度の大きさの都市では、ゲイとレズビアンで個別の団体を形成すると規模が小さくなりすぎてしまうため、ともに同じ団体に所属せざるを得なかったという事情もあっただろう。また後の分析で詳しく触れるが、レズビアンだけでコミュニティを形成することが困難であったからこそ、ゲイと同じ団体に所属するという事情もあったと思われる。

しかしこの〈連帯〉の中では対立も生じていた。当時のメンバーであった河中優郁子は2003年の段階で過去の札幌ミーティングについて振り返り、「男性会員数を逆転しそうなほど女性会員数の多かった時代もあった当会でも、『ゲイ主導』『女性蔑視』を理由に、多くの女性たちが会を辞め、独自にサークル・イベントを模索していったこともある」（河中 2003:37）と語っている。また2018年には、1990年代から札幌ミーティングに所属していたゲイとレズビアンのメンバーが対談をしたが、両者の間で激しい喧嘩が幾度も繰り返されていたことが回顧されている（『Knock on the Rainbow』2018.11.10）[5]。以上が暗示するのは、ゲイとレズビアンの間にあった何かしらの差異の存在によって、両者の間に対立が生み出されていたということである。前章までの分析でゲイ男性のアイデンティティには男性性が重要な要素となっていたことが明らかとなったことからも、その差異をジェンダーの差異と想定できる。ゲイとレズビアンが「男」「女」として置かれていた当時の状況に注目することで、社会変革志向の強い活動における男性性の問題も視野に入れ論を進める。

以上の理由から、本章では札幌ミーティングを分析していく。一点留意をすると、上述のように、札幌ミーティングはゲイ男性だけで構成されているのではなく、レズビアンやトランスジェンダーはじめとする他のセクシュアルマイノリティや異性愛者も参加していた。しかし札幌ミーティングはゲイ男性によって結成された団体であり、彼らはその活動内で「ゲイ」としてのアイデンティティを形成しようとしていた事実がある。よって今回は、本研究の焦点であるゲイ男性の言説を中心的に扱うことにする。

1−2　分析資料

本章で中心的に扱う資料は、札幌ミーティングが発行していたニュースレターである。札幌ミーティングのニュースレターは1991年9月に第1号が発行され、2004年12月の最終号（第135号）を迎えるまで、ほぼ毎月発行されていた[6]。2000年11月号（108号）まではB5サイズで、2000年12月号（109号）からA5サイズに変更された。モノクロ印刷で、各号の平均ページ数は25頁ほどであり、各号約200部が発行されていた（『北海道新聞』1995.3.29）。メンバーに配布されるだけでなく、札幌のゲイショップでの販売、「ミニコミ喫茶ひらひら」（後述）での配布・販売、東京にある模索舎（ミニコミ誌などを多く扱う書店）での販売、札幌ミーティングが開催した各種イベントでの販売、他団体との交換購読による配布など、一般の流通ルートに乗らない形で配布・販売がされていた。掲載されている記事は非常に幅広く、メンバー個人の興味関心を扱った連載記事、イベ

(5)　『Knock on the Rainbow』とは2018年からSTVラジオで放送が開始された、LGBTの情報番組である。2018年11月10日の放送で、1990年代に札幌ミーティングに関わっていたゲイとレズビアンのメンバー二人が対談を行い、両者の対立について触れていた。

(6)　時に発行が遅れることもあり、その場合は合併号として2号、あるいは3号同時に発行されることもあった。発行されてきたニュースレターは基本的にすべて参照したが、100号（2000年3月頃発行）、118号（2001-2002年頃発行）、132号（2003-2004年頃発行）の3号分のみ参照できなかった。

ント・活動の告知・報告、各号の特集テーマに沿った記事、新聞・雑誌記事の転載などである。

幅広い記事によって構成されているニュースレターを本章では二つの視点から捉える。ひとつは、当時の活動を知るための文字資料としてである。札幌ミーティングの活動は新聞・雑誌記事で紹介されることもあったが、団体の活動が量的にも質的にももっとも豊富に記述されているのは、このニュースレターである。また、札幌ミーティングはアカーのように学術論文、論考、書籍などを多くは発表していないため、参照できるほとんど唯一の資料としてニュースレターを扱う。もうひとつの視点は、団体の活動の一環としてのニュースレターである。ニュースレターの発行は、単に情報を発信するために行われていた周縁的な活動ではない。ニュースレターの役割は次のように示されている。

> ニューズ(ママ)レターは札幌ミーティングにかかわるすべての人達の自由な表現の場でありたいと考えています。／ニューズレターは、時にはメンバー個人の意見を表明する場であり、時にはブランチ活動を報告する場であり、時には札幌ミーティング全体の方向性を示す場でもあったり、時には読者からのダイレクトな反響を展開する場でもあります。ニューズ(ママ)レターは、読み手と書き手、個人と団体、ミーティングと他団体、ゲイ、レズビアン、バイセクシャル、ヘテロ、すべての枠を取り払い、相互乗り入れ可能な、真に自由な開かれた場を目指します
> (NL1993/9:23)

「自由な表現の場」であるニュースレターは、さまざまな書き手が参加し互いに議論をすることによって、札幌ミーティングの思想や彼ら／彼女らのアイデンティティが形成される場のひとつとして機能していたと捉えることができる。よってニュースレターは、単なる活動記録以上のものなのである(7)。このニュースレターに加え、札幌ミーティングによるその他の発行物・作成物、当時の音声資料・映像資料、ゲイ雑誌・一般雑誌・新聞における札幌ミーティング関連の記事なども適宜扱っていく。

1-3　札幌ミーティングの概要 —— 設立から活動休止まで

次節から具体的な分析に移るが、その前に札幌ミーティング設立までの流れと活動の概略を紹介しよう。「札幌ミーティング」は名前の通り、北海道札幌市で1989年2月に設立された団体であるが、その設立以前には、「IGA日本札幌支部」（「IGA札幌」、「札幌支部」との表記もあり）というグループが存在していた。東京で南定四郎によって1984年に設立された「IGA日本」(8)は日本各地でセミナーを開催しており、「第1回IGA札幌セミナー」が札幌にあった「ミニコミ喫茶ひらひら」(9)

(7)　日本のゲイ雑誌に足りない政治的な情報や生き方に関する情報などをミニコミ誌が補っているという認識（NL1995/7:5）を参考にするのであれば、本章の言説は『バディ』と対になるものと捉えることもできる。

(8)　IGA（International Gay Association）とは、スイスのジュネーブに本部を置く、セクシュアルマイノリティの国際組織である。「IGA日本」はIGAに加盟する団体として設立された。現在はILGA(International Lesbian, Gay, Bisexual, Trans and Intersex Association）へと名称が変更されている。

(9)　「ミニコミ喫茶ひらひら」は、ウーマンリブに携わっていた東由佳子氏によって「自分たちのミニコミを気がねなく置ける場所をつくりたい」という思いから、1974年に開店している。フェミニズムのグループをはじめとし、さまざまな社会運動家によって利用されていた。しかしその後、情報交換の様式などが変化したことをひとつのきっかけに、1998年3月に閉店した（『北海道新聞』1998.4.24）。

で1986年2月16日に開催された（具体的なセミナー内容は不明）(ADON1986/5:90)。1986年6月22日に第2回（ゲイ映画鑑賞)、1986年8月10日に第3回（ゲイ映画鑑賞)、1986年10月10日に第4回（エイズについての勉強会）が開催されている（ADON1986/5:90, ADON1986/6:90, ADON1986/9:137, ADON1986/11:94)。第2回のセミナーにおいて、毎週水曜日の19時から21時まで「ひらひら」で会合を行い、その時間帯には電話ホットラインを開設することが決定し、その数ヶ月後には「水曜日のホットラインおよび定例ミーティングもすっかり定着し、『水曜の夜7時、喫茶「ひらひら」に行けば必ず仲間がそこにいる』といえるところまでたどりついた」(ADON1986/11:104)と語られている(10)。当時のメンバーは6人であり（ADON1986/9:101)、少数ながらも活動が行われていたが、代表の東京転勤によって活動は自然消滅してしまった（NL1996/1:29)。

東京の「IGA日本」は「ILGA日本」へと名称の変更を経ながら(11)、日本各地でのセミナー開催を継続してきた。1989年2月26日に札幌サンプラザ（ホテル、コンサートホール、文化教室などを含む複合公共施設）で、エイズをテーマとしてセミナーが開催された。その時の参加者はわずか4人のゲイ男性であったが、ひとまず彼らによって新しいグループが立ち上げられ、休止状態であった札幌での活動が再開された（ADON1989/5:112-113, NL1996/1:29)。これが「札幌ミーティング」の設立である。設立メンバーの鈴木賢は、「札幌ミーティングは1989年に、ILGA日本の札幌支部として、ぼくもふくむ北海道大学の四人の大学院生が集まって始まりました」(『にじ』編集部2003:18)と語る。「最初の二、三年は内輪のお茶会的な集まりといった程度の活動を繰り返していた」ことが「札幌ミーティング」という名称に繋がった（鈴木2003:40）(12)。定例会は月に一回、第一水曜日の19時から21時まで「ひらひら」で行っていた（ADON1989/6:117)。

当初はメンバーも増えず、ILGA日本への加盟のための年会費12,000円も払えなかったため、支部ではあるが実際にはILGA日本に加盟せず活動をしていた。しかし1990年3月以降にメンバーが6人に増加したことをきっかけにILGA日本に加盟をした(13)。その後すぐにイベントを開催し始め、1990年5月には南定四郎を招致し講演会を開催したり、1991年の雪まつりに合わせて「雪まつりセミナー」(札幌市との協力によるエイズについてのセミナー）を企画・開催している。こうして札幌ミーティングは活動の裾野を広げていった。

札幌ミーティングの会員には運営会員、一般会員、協賛会員、購読会員(NL1992/7:2, NL1996/12:6)などの種別があり、中心的な運営を担う会員からニュースレターの購読のみを行う会員もいた。それぞれの内訳を含む会員数の詳細な推移は不明だが、1993年1月での会員数は55人（ADON1993/4:156)、1994年の段階では約50人、ニュースレターの購読者は約120人（『北海道新聞』1994.11.21)、1995年の段階では札幌ミーティングの事務所に「40人ぐらいが出入り」し、ニ

(10) IGA日本の機関誌『win』(1985年3月1日に第1号発行）の読者会が札幌で開催されていたとの記録もある（ADON1988/1:98)。おそらくIGA札幌の活動の一環として行われていたと思われる。レズビアンの女性が参加していたとの記述もある（ADON1988/1:98)。

(11) 名称の変更は、IGA自体がILGA（International Lesbian and Gay Association）へと名称を変更したことを受けての受動的結果であり、それにより活動内容が変化したり、レズビアンの参加が増加したりといった変化はなかったという（堀川2016:63, 65)。

(12) 「89年2月に『ひらひら』で4人で細々と始めた」。「4人時代が1年、その後1年間は6人での月1回の月例会」を行っていたと語られている（NL1995/5:5)

(13) のちに、ILGA日本の事実上の機能停止をうけ、1996年11月24日には会名を「ILGA日本・札幌ミーティング」から「北海道セクシュアル・マイノリティ協会（HSA）札幌ミーティング」に変更。1997年にはスイスのジュネーブにあるILGA本体に直接加盟するようになった（NL1998/3:28)。

ニュースレターは200部発行（『北海道新聞』1995.3.29）、1996年の段階でニュースレターの購読会員は道内に約200人（『北海道新聞』1996.2.24）との記述がある。巨大な団体とは言えないが、ある程度の規模を持つ団体であることがわかる。札幌ミーティングのメンバーシップは多様であるが、本章で扱う語りは基本的に、運営・活動に中心的に携わり、ニュースレターの執筆を積極的に行っていた人らによるものである。

1990年代を通して活発な活動を行い、やがてやや下火になりながら、2000年代末ごろまで活動をしていた。2006年8月以降は公式ホームページの更新も行われておらず（現在このホームページは削除されている）、活動も休止中である。活動期間は設立から20年ほどと概算してよいと思われる。

1−4　札幌ミーティングの活動目的

札幌ミーティングの設立時、その目的は「申し合わせ事項」としてごく簡単に定められていた。ニュースレターが発行される前、主にメンバー内部で作成・配布されていた『札幌ミーティング文集』の第1号（1990年2月発行）には、「ゲイの生活にかんする情報を相互に交換するとともに、札幌におけるネットワーク作りを進めることを目的とする」と記されている(14)。設立当時の札幌ミーティングはゲイ男性4人による団体であったため、目的は彼らに関することに限定されている 。団体結成から3年の活動を経た後の1992年6月28日には創立以来初の総会が行われ、詳細な会則が制定された。そこで提示された札幌ミーティングの目的は次の三つである。

> ①同性愛者であることを誇りをもって受け入れ合い、同性愛者の孤立を解消する。
> ②同性愛者を多様な生き方のひとつとして偏見なく許容する社会の実現に努める。
> ③地域の同性愛者に正確で有用な情報、および自分らしく生きる環境を提供する。
>
> (NL1992/6:2)

1992年にはレズビアンもメンバーとなったことから、ゲイ男性に限らない同性愛者に対して働きかけるための目的が制定されている。その後、基本的な文言は変わらないが、「同性愛者」という用語は1996年には「性的少数者」に変わり、さらには1998年には「セクシャル・マイノリティ」へと変わった。これらの目的に表れているように、札幌ミーティングの目的は、①・③の肯定的な情報の発信によって肯定的なアイデンティティとセクシュアルマイノリティのコミュニティを形成するという対内的活動、②のセクシュアルマイノリティに対する差別のない社会を形成するという対外的活動としてまとめることができるだろう。つまり、当事者をターゲットとした活動と、非当事者をターゲットとした活動の双方が札幌ミーティングの目的となっている。この双方の活動は互いに切り離されて行われていたこともあったと思われるが、二つの志向が互いに影響を与え合う中でメンバーのアイデンティティが形成されていたと言える。

日本のゲイコミュニティについて分析をした新ヶ江章友(2013)は、日本の「ゲイコミュニティ」はHIV/AIDSの登場によって形成されたと論じる。札幌ミーティングでも設立時からHIV/AIDSの問題に積極的に取り組んでいた。例えば、1991年9月から発行され始めたニュースレターの最初の数

(14)　「申し合わせ事項」は1989年5月10日の例会で決定されている（ADON1989/8:122）。

号は主にHIV/AIDSに関する情報を扱っていた。第1号は「AIDS感染経路 ― その新しい可能性」というタイトルで記事が書かれている。その他にも繰り返しになるが、1991年2月には「第1回雪まつりフォーラム」として、札幌市衛生局予防課との共催でエイズセミナーを開催している。1991年11月25日にはゲイバー四店舗の主催による「ゲイ・ディスコパーティー」で、来場者の約200名にコンドームと、札幌ミーティングが作成したエイズ予防のためのパンフレットを配布している（NL1992/1:1）。確かにHIV/AIDSに関する問題に取り組むことで、団体の活動が活発化し、札幌における（ゲイ男性の）コミュニティも形成されていったと考えられる。しかし彼らはHIV/AIDSに関する問題だけを扱っていたわけではない。例えば、『札幌ミーティング文集』第1号には結婚、バイセクシュアル、ゲイのカップルについての記事が掲載されており、これから見ていくようにHIV/AIDS以外の活動にも多く取り組んできた。よって本章では、HIV/AIDSの問題にのみに注目するということはせず、札幌ミーティングが行ってきたさまざまな活動や語りを総体的に扱っていく。

次節以降の議論の流れを示しておこう。第2節と第3節では、社会変革志向が強い札幌ミーティングのゲイ男性が「ゲイ」というアイデンティティや新しいコミュニティとしての札幌ミーティングをいかなるものと捉えていたのかについての言説をまとめる。第2節では男性同性愛者を指し示す「ホモ」「ゲイ」「リブガマ」という具体的な言葉を巡って札幌ミーティング内でいかなる議論が繰り広げられていたのかに注目し、「ゲイ」としてどのような在り方を目指していたのかを明らかにする。第3節では札幌ミーティングという場がいかなる場と捉えられていたのか、そこでの人間関係の在り方がいかに模索されていたのかを論じる。第4節と第5節では第2節と第3節の議論を参考にし、札幌ミーティングの具体的な活動について論じる。第4節では主に社会をターゲットとした対外的活動として、ローカルメディアへの抗議活動を取り上げ、第5節ではゲイ男性を主なターゲットにした対内的活動として、ブランチ制度と呼ばれていた活動形態とその活動を中心的に取り上げ、第2節と第3節で論じたゲイ男性のアイデンティティが具体的な活動とどう関わっていたのかを論じる。そして第6節ではレズビアンのメンバーの言説と活動を分析し、ゲイとレズビアンのジェンダーの差異を論じることによって、ゲイ男性のアイデンティティと男性性の関係に焦点を当てる。

2．同性愛者の二極化 ――「ホモ」と「リブガマ」

2-1　抵抗し合う「ホモ」と「リブガマ」

本節では1990年代当時の男性同性愛者を指し示す言葉について、札幌ミーティング内でいかなる言説が形成されていたのかを論じる。1990年代の男性同性愛に関する雑誌言説を分析した石田仁は、この時期には「かわいそうなホモからハッピーなゲイへ」（石田 2006:208）というアイデンティティの転換が生じ、「覚醒したゲイ（リブ）／蒙昧な二丁目派・ハッテン派のゲイ」（石田2006:214）という二分法が生み出されていたと分析する。また砂川秀樹も、1990年代から次第に「ホモ」という言葉に取って代わって「ゲイ」という言葉が使用されるようになっていったと論じる。「ゲイ」という言葉はゲイリブが積極的に広めようとし、事実非常に普及したが、いまでも「ホモ」という言葉は当事者によって使用されており、微妙なニュアンスの違いを残しながら現在まで並存している

（砂川 2015：278-282）。

「ホモ」と「ゲイ」に加えてここで注目したいのは、「リブガマ」という言葉である。この当時、男性同性愛者の社会運動に関わるゲイ男性を示す言葉に「リブガマ」というものがあった。「ゲイリブ」に関わる「オカマ」のことである。この言葉について、札幌ミーティングの創設者の一人である鈴木賢は次のように当時を回顧している。

> リブ・ガマというのは、〔1990 年代〕当時はののしり言葉でした。つまり、クオリティー高く隠れて、異性愛者のふりをして過ごせばいいのに、わざわざ外に出て権利とか平等とか言うのはやめてもらいたい、迷惑である、という反発がすごく強かったのです。
>
> （蔵田編 2017：19）

彼のこの語りでは、ゲイリブをめぐってゲイ男性内で対立があったことが示されている。つまり、クローゼットを志向するゲイ男性と、積極的に表に出て社会を変えていこうとするゲイ男性の対立である。ゲイリブに対する批判が、札幌ミーティングに所属していないゲイ男性から札幌ミーティングのゲイ男性へ投げかけられていたことは、ニュースレター内でも語られている。例えば、カミングアウトについて特集をした号に掲載されている「カミングアウト？しなくていいわよ、そんなもン！」という記事では、「某ススキノ・ゲイスナック・ママ談」とされる語りが模倣・再構成され掲載されている。ゲイリブに対する〈典型的〉と取ることのできる批判が（札幌ミーティングのメンバーの視点から）記述されている重要な記事であるため、全文を引用する。

> カミングアウト？しなくていいわよ、そんなモン。
> 変態はしょせん、変態よ。あたしたちは、まっとうじゃないの、あだ花なの。ひっそりと夜に咲く青白く可憐な一輪のマツヨイグサ…ちなみにあたしは大輪の月下美人だけどね。オホホホ。うれしはずかしみえかくれが、ニッポン人の美意識よ。ここはあっ（ママ）メリカじゃないの、日本なの。自己主張は嫌われるの。出るくぎは打たれるの…
> 親に告白？バッカね！心配かけるだけじゃないの！親を泣かせてどーすんの！息子が変態だとわかったら、親はやっぱり泣くわよ。自分の価値観を押しつけたりするもんじゃありません！息子が男のチンポくわえてるなんて親が知ったら、あんた…ご両親の気持ちになってモノを考えなさいっ！偽装結婚？時と場合によっては仕方ないわね。何事も経験だと思うわ。そのほうがあなたのおとうさん、おかあさんも安心するでしょ。結婚くらい、出来て一人前よ。あんた、年下が好きなんでしょ？失敗したら失敗したで、バツイチのホモって、お兄さん専の子たちからモテるわよぉ…
> 結婚は一度くらい経験するのもいいかもしんないと思うわ。その方がヒトとして自然よ。人間の幅も広がるし、そして、すてきな家族を築きつつ、夜になったら飲みにいらっしゃいね。男の子はいくらでも紹介してあげるから…あたし、あなたたちのことを心配してあげているのよ。あなたたち最近、目立ちすぎだと思うの。なんだかいろんなことをやってるみたいだけど、極力波風立てずにね…無力な圧力は避けてね…ここは日本なのよ。あまり大きな声を出すと、ちょっと、アレよ…今までどおりで別にかまわないじゃない？何か具体的な不

都合があったからしら？あたしたち以上にかわいそうな人はいっぱいいるでしょ？おとなしく黙っていれば、何事も起こり得ないのよ。それでいいじゃない？何か問題ある？出る釘は…寝た子を起こすようなマネは…　(NL1995/1:6)

この語りには、先ほど鈴木賢によって回顧されていた内容がより具体的に表れている。自分の価値観を押し付けるような自己主張はすべきでないこと、声を上げて目立つべきでないこと、結婚しつつも夜はゲイバーに通い〈二重生活〉をすること、同性愛者であっても生きる上で不都合はないので特に何かする必要はないこと、こうしたことがゲイリブに対する批判の根底にあった。また自分たちが社会の少数者として差別・抑圧の中に置かれているという認識がゲイリブを批判する人の中になかったことも示されている。重要なのは、ゲイリブとしての積極的な活動は、単に異性愛社会に対する抵抗から生じていたのではなく、ゲイ男性内部からの批判によっても拍車をかけられていたのではないかという点である。つまり、ゲイリブの〈敵〉は異性愛社会・異性愛規範のみならず、それに同化することを良しとし、ゲイリブを批判する「ホモ」でもあったのである。

では「ホモ」、「ゲイ」、「リブガマ」は具体的にどのような存在として語られていたのであろうか。ニュースレター内の用語解説で、「リブガマ」をはじめとしたいくつかのカテゴリーや用語が次のように解説されている。

リブガマ → 出典は昨年10月のLOGキャラバンの作家 伏見憲明 大先生（…）の演説。政治的に目覚めたオカマのこと。お女装・オネエ・オカマがもつ明るさ、陽気さ、いい加減さ（?）と、政治意識というハード(ママ)が合体すればもう恐いモノなし(笑)、そういう無敵状態のオカマを指す(→リブガマ戦士)。あえて「オカマ」という差別語を自らが用い、その言葉が持つマイナスイメージ、しいてはゲイに対する差別や偏見さえも吹き飛ばしてしまおうという高等戦略。

ホモ活動 →「ホモ」という差別語からは、夜だけの、セックスというフィルターを通してしか理解されないゲイの存在が見えてくる。そんな「ホモ」の活動であるからにして、おおまかにハッテン活動を指す。(…) 反対語→ミーティング活動

MSM → 男とセックスするだけの男の意。つまり、夜だけの、セックスだけのホモ活動で満足している人達。ゲイ・プライド（…）やゲイ・アイデンティティ（…）を持ち得ないホモたち。あるいは持つ意識も必要性も何も感じていないホモたち。24時間のゲイ・ライフを指向しないホモたち。セクシャリティは「ライフ」の問題だという認識がまるでない連中。反対語→ゲイ（…）。ゲイは、意志的に「なる」もの。ゲイ・プライドなり、ゲイ・アイデンティティが必要。セクシャリティをしっかり引き受ける意志のない者はMSMなりホモなりと呼ばれる。　(NL1995/6:18)

この解説では、「リブガマ」と「ゲイ」の対極に「ホモ」、「ホモ活動」、「MSM」を置くことによって、両者の明確な対立が生み出されている。「リブガマ」が「政治的」であり「明るさ」を持った「無

敵状態のオカマ」を意味するものとして使用され、さらには「リブガマ戦士」との表現で、人としての力強さも与えられている。一方で「ホモ」や「ホモ活動」は「夜」と「セックス」にのみ結びつけられている。「MSM」(Men who have Sex with Men) というのはHIV/AIDSと公衆衛生の文脈で使用されるもので、男性との性交渉を行うが、自身のことを同性愛者と自認しない人を指す学術用語である。その他の文脈ではほとんど使用されないが、ここではゲイであることを引き受けず、それを「ライフ」の問題としない男性同性愛者としてMSMを解釈することで、否定的に語っている。「ホモ(活動)」と「MSM」はほぼ同様のニュアンスを持つ言葉として捉えられている。重要なのはここで「MSM」と「ホモ」が主にセックスという行為のレベルで扱われている点であり、単なる〈行為〉の「ホモ」と、〈人〉を表す「ゲイ／リブガマ」が対比されているのである。

このMSMの捉え方は、日本のゲイ雑誌についての記事でも登場している。その記事の筆者は日本のゲイ雑誌はポルノ要素が強いことを指摘し、ポルノ要素がなく政治色の強いゲイ雑誌が登場する条件を次のように想定している。

> 今は隠れていたり、二重生活を送ることに甘んじている「アイデンテイテイー(ママ)を持てない」括弧付きの「同性愛者」(MSM = men who have sex with men = 男とセックスする男、WSW = women who have sex with women = 女とセックスする女) たちが、しっかりと肯定的なアイデンテイテイー(ママ)を持てるように変わった時なのかもしれません。 (NL1995/7:19)

この語りでもMSM(とWSW)がアイデンティティを持たない同性愛者として捉えられ、肯定的アイデンティティを持つことが政治的活動や社会運動へと繋がっていくと想定されている。また「ホモ」や「MSM」に関わる言葉として「カクレ」というものもある。「カクレ」は、「ゲイバーやサークルなどの社交界にまだデビューしていないゲイのこと。まるで犯罪者のようにびくびくおどおど、内なるホモフォビアに引き裂かれること多し。あたしらみたいなつきぬけたおネェ、いえゲイが、たまに彼らとお話ししてみると(…)イライラ辟易すること多し」(NL1995/4:14)と説明されている。

「ゲイ」、「リブガマ」、「ホモ」、「MSM」、「カクレ」など、ゲイ男性の何かしらの〈状態〉についての言説は、アイデンティティを段階的な移行として捉えていると言える。例えば先ほども引用した用語解説でも、「ゲイは、意志的に『なる』もの」(NL1995/6:18)と言われる。こうした〈選択〉としての「ゲイ」は、「“ゲイ”という生き方は、誰から押し付けられたものでもなければ先天的な定めでもなく、自分が選択した“生き方”なのです」(NL1996/1:38)という語りにも明確に表れている。つまりこうした語りでは、「ゲイ」であることを意志的に「選択」していない人物と「選択」した人物が(あるいは「ゲイ」になっていない人と「ゲイ」になった人が)二項対立的に語られながら、「ゲイ」になっていない状態から「ゲイ」になった状態への移行が理想的であると暗示されているのだ。また「カクレ」の「デビュー」という言葉に注目すると、男性同性愛者としての人生内に「デビュー」という移行段階が存在することが暗示されている。「デビュー」とは、「ゲイバー、サークル等、ゲイコミユニテイー(ママ)に初めて顔を出すこと」(NL1995/4:14)を意味する。つまり、(1)同じ同性愛者の知り合いがいないがために孤立しており、内なるホモフォビアを抱えている段階から、(2)「デビュー」することで、男性同性愛者が交流する領域へと参入するという段階が想定されている。この段階はまだ、主にセックスを中心とした「行為」しか行わず、アイデンティティを持た

ない、あるいは内なるホモフォビアを抱える「ホモ」の段階でもある。

しかし1990年代になって「ゲイ」や「リブガマ」という言葉が使用され始め、そうしたアイデンティティを持つことが意志的な「選択」として語られることによって、新たな段階が生成される。それは、(3)「ゲイ」に意志的になることで肯定的なアイデンティティを形成し、それを「ライフ」の問題とすることで政治性を獲得する段階である。(1)は孤立した「カクレ」としての同性愛者、(2)はクローゼットの領域における交流とセックスばかりを行う「ホモ」としての同性愛者、そして(3)は意志的に肯定的かつ政治的なアイデンティティを持った「ゲイ」や「リブガマ」としての同性愛者と言うことができる。この新たな第三段階が登場したことによって、「ホモ」であることは同性愛者としての未発達状態のように捉えられ、「ゲイ」や「リブガマ」としてのアイデンティティを持つことが望ましいとみなされるようになっていった。言い換えるのであれば、「ゲイ」や「リブガマ」であることは、他の同性愛者よりも〈成長〉した同性愛者であるとの認識が形成されていたと言える。このような言説はアカーのメンバーによる、「日本の同性愛者が社会的および政治的アイデンティティをいまだ十分持ち得ていないのは事実なのである」(ヴィンセント・風間・河口1997:154)という発言とも共鳴する。

この時期に生じたのは先行研究によって指摘されていたような、「ホモ」から「ゲイ」へのアイデンティティの転換だけではなく、アイデンティティの〈発達段階〉における新たな段階の構築でもあった。言い換えるなら、「ホモ」に取って代わって新しいアイデンティティとしての「ゲイ」が登場したというよりは、人々が「ホモ」を経由して「ゲイ」になるという発達段階が構築されていた。これを図式的にまとめるのであれば、「カクレ」→「ホモ／MSM」→「ゲイ／リブガマ」となる。「ゲイ」と「リブガマ」という言葉の登場は、〈それ以前〉というアイデンティティを形成することで、「ホモ」と「ゲイ／リブガマ」の対比を強め、同性愛者の中で性質の違う二者を作り出していたのである。

こうした二項対立を利用することによって、罵り言葉として用いられていた「リブガマ」という言葉を札幌ミーティングのゲイ男性らは積極的に引き受け、「ホモ」からのゲイリブ批判に抵抗していた。ニュースレター内に掲載されているマンガでは、「無敵状態のオカマ」である「リブガマ戦士」の力強さが描かれることもある。例えば、「リブガマ、リブビアンの１日」(NL1996/1)というマンガは、「超パワフルリブビアン戦士」(ゲイリブを行うレズビアン)であるメンバーと、「とーってもアクティブで、がんばり屋さんな」「リブガマ」であるメンバーの一日を描いたものである。このマンガでは二人が札幌ミーティングで活発にリブ活動をしている様子がコメディチックに描かれている。また「札幌リブストーリー」(NL1995/6)というマンガでは、自分を「ノンケ」だと思っていた主人公(≒「ホモ／MSM」)の成長物語となっている。その中では、レズビアン&ゲイ映画祭に行った主人公と、そこの運営スタッフの間でのやりとりが次のように描かれる。

どうしてあなたはそんなにキラキラ輝いてるんですか？

それはボクがリブガマだからさっ

ボクも…ボクもリブガマになれますか？

ああもちろん大歓迎するよ！！ (NL1995/6:12)

こうした輝きと共に描写される「リブガマ」は、本項の最初で見た用語解説の「明るさ」や「無敵状態」を表している。「夜」に活動をする「ホモ」と「びくびくおどおど、内なるホモフォビアに引き裂かれる」「カクレ」とは非常に対照的な存在として、「キラキラ」した〈かっこいい〉「リブガマ」が描かれているのだ。侮蔑語として使用されていた「リブガマ」に肯定的な意味づけを行い、「ホモ」とは対照的なイメージを構築することによって、ゲイリブへの批判に抵抗していたのである。

2-2 パッシング／カヴァリングの要請への抵抗

「ゲイ」と「リブガマ」を「ホモ」から差異化しながら、ゲイリブへの批判に次のように応答する語りもある。

> 某のみやのオンナ(15)に「かくれてるからいいんじゃないのよ。バカなオンナねあんたも…」と言われたりもするが、僕は嫌なんだよね。(…) もっと普通に、もっと自然に、もっと豪華に(ママ)。ノンケみたいにGAYとして生活したいんだよね。 (NL1994/1:23)

肩身狭く隠れずに、「ノンケみたいに GAY として生活したい」というのは、次の語りの中にある「24時間ゲイ」とも共鳴する。

> 札幌ミーティングのニュースレターとしては、いや、アタシとしては「24時間ゲイ」であることの楽しさを提案したいわね。ゲイであることをポジティヴにとらえて、それを日常生活の中にどんどん生かす。 (NL1999/3:17) (16)

クローゼットの隠れた、閉ざされた暗い空間（ゲイバー、ハッテン場など）ではなく、公の、開かれた〈アウト〉な日常空間で「24時間ゲイ」として生きる、あるいは「どんなときも、いつでも、どこでも『ゲイ』」(NL1993/11:17) (17)として生きるというのは、ゲイであることを隠さずに常に「自分らしく」生きること、「ゲイ」であることを個人のアイデンティティの中心的なものとして捉え、それがすべての生活局面で個人を決定付けるということでもある。

またこれは、「ノンケっぽい」振舞い（異性愛者のような振舞い）をしている限りは自分らしく生きているとは言えない、とみなす語りとも共鳴する。ニュースレター内に、「ノン・ケポイ」という

(15) ここでいう「オンナ」とは女性を指し示しているのではなく、男性同性愛者を指し示す言葉として使用されている。ゲイ男性の間では特定のゲイ男性に対して（特にオネエ言葉では）「あのオンナ」という表現が使われることが多々ある。

(16) 『バディ』1996年1月号の「学園バディ」（読者投稿欄）には札幌ミーティングのメンバーからの投稿があり、これにも「24時間ゲイでいたい」というタイトルが付されている（BADI1996/1:317）。

(17) この語りが掲載されている記事はゲイ雑誌『アドン』における札幌ミーティングの紹介記事の転載と思われるが、具体的な号数などは不明。

名の「ノンケっぽい」人物が登場するマンガ（NL1997/3）がある。「女装好き」であり「オネエ」であることを隠して「ノンケっぽく」振舞っていた彼が、ハイヒールを購入する姿を友人に目撃され、心の中で次のように嘆く。

> なっなんてこった……。いままでずうっとノンケっぽく通してきたのに／サッカーもがんばって、日焼けもほどほどにして、ノンケ語も使って、がにまたで歩いて、銭湯でも前を隠さずやってきたのに…… (NL1997/3:46)

その後、「ノン・ケポイ」に対して別の登場人物が、「まったく女装の一つや二つバレたくらいではしたない…／そんなことではいつまでも『自分らしく生きる』なんてできないわよ」(NL1997/7:37)と諭すように、「ノンケっぽく」振る舞い「女装好き」であることを隠すことは、「自分らしく生きる」ことの妨げとみなされている。

しかし「自分らしさ」が時には、常にゲイでなければならないというような強制を伴って語られることもあった。「24 時間ゲイ」であるためには「ノンケっぽく」振舞うことは推奨されず、さまざまな生活局面で「ゲイ」であることを意識しなければならないということが主張される。音楽についての記事における次のような語りには（半分冗談めいた語りではあるが）、以上の点が如実に表れている。

> ゲイテイストとは違ったところで人気のあるロックスターにしがみつくことによって、相対的に自分の感覚がより異性愛者と同質だというところで安心したがる臆病なゲイって、死ねばいいと思うの（笑）。 (NL1995/11:7)

ゲイの心を掴み、多くのゲイが好む「ゲイテイスト」を持つものにではなく、異性愛者の多くが好むものに同調することが非難されている。第 1 章で論じた 1990 年代の『バディ』において「ゲイ」であることへのこだわりが強められていったことと同様のことがここでも生じているのである。ゲイでありながら「ノンケっぽく」振る舞うことは「自分らしくない」と判断され、趣味などにおいても「ゲイらしさ」を備えなければいけないことが、強制的なニュアンスと共に語られている。

こうした姿勢からは二つのことを読み取ることができる。ひとつは、異性愛社会の価値・規範に同調することをラディカルに拒否しようとすることである。初期の『バディ』が「普通」であることを徹底的に拒否しようとしていたように、ここでも「ノンケ」っぽく振る舞う＝「普通」になることが否定されるのである。そしてもうひとつは、「ゲイ」として自らを異性愛者から差異化し、「ゲイらしさ」を表現することによって、ゲイであることを社会に見せていくことである。そうすることで自分たちの存在が社会で不可視化されることに抵抗するのである。つまり、「24 時間ゲイ」や「ゲイテイスト」というのは、単に「自分らしく生きる」ことを言っているのではなく、ゲイであるというアイデンティティをいかに身につけ、ゲイという存在をいかに社会で〈可視化〉させていくのか、という行為も意味しているのである。こうしたマイノリティの可視化の戦略は、アーヴィング・ゴフマンによるパッシングとカヴァリングという二つの概念を参考にするとより詳細に捉えることができる。

アーヴィング・ゴフマンは、スティグマを付与されたアイデンティティを持つ人々が、「常人（the normals）」（Goffman 1963=2001：19，傍点原文）との対面場面でそのアイデンティティをいかに扱うかを論じている。彼はスティグマを持つ人を二つのタイプに分類する。ひとつは「すでに信頼を失った者（the discredited）」であり、もうひとつは「信頼を失う事情のある者（the discreditable）」（同上：18，傍点原文）である。前者は、スティグマの存在がすぐに他者に知覚される者であり、例としては、身体部位の欠損や麻痺といった身体障害を持つ者や盲者があげられている。後者は、一見しただけではスティグマの存在がわからず、まだ他人にはそれが知覚されていない状態にある者であり、例としては麻薬中毒者、セックスワーカー（「売春婦」）、過去に犯罪歴のある者などがあげられており、同性愛者もここに含まれる。ゴフマンは特に後者がスティグマに関する情報を操作／管理する方法のひとつを「パッシング」（passing）と呼び、「まだ暴露されていないが〔暴露されれば〕信頼を失うことになる自己についての情報の管理／操作」（同上：81，〔〕内は訳注）と定義している。パッシングは可視性（visibility）、つまり、「ある人がスティグマをもっていることを〔他人に〕告知する手がかりがスティグマそのものにどの程度備わっているか、という問題」（同上：88，〔〕内は訳注）と密接に関わっている。スティグマについての社会的情報を伝達する記号をゴフマンは「シンボル」と呼んでいるが（同上：82）、パッシングではそのシンボルの操作／管理が問題となる。

類似する概念としてゴフマンは「カヴァリング」（covering）[18]も用いている。カヴァリングとは、「（多くの場合知られているか、あるいは一見して判然としているので）スティグマのあることを率直に認めることのできる人びとは、率直に認めはしてもなほ（ママ）そのスティグマが人の目に大きく映らないように大変努力するということ」（同上：173）を意味している。彼はパッシングを可視性（visibility）の問題とし、対してカヴァリングを目立つこと（obtrusiveness）の問題と結びつける（同上：173）。つまり、パッシングはスティグマのシンボルをいかに隠すかを問題としているのに対して、カヴァリングはそのシンボルをいかに目立たせないかを問題としているのである。

ゲイアイデンティティについてゴフマンを下敷きに論じたヨシノ・ケンジは、カヴァリングを「自分について知られているゲイであるという側面を抑えこむ試み」（Yoshino 2006：18）[19]と捉え、パッシングをクローゼットのゲイ（カミングアウトをしていないゲイ）とアウトのゲイ（カミングアウトをしているゲイ）を分離する行為であるとする一方で、カヴァリングを「普通のゲイ（normals）」（≒異性愛者のように見えるゲイ）と「クィアなゲイ（queers）」（≒ゲイっぽいゲイ）を分離する行為とする。そしてカヴァリングは、ゲイであることを「見せびらかす」（flaunt）か否かを中心的な問題としていると述べる（Yohsino 2006：77）。また彼はパッシングとカヴァリングを社会からの要請と捉える。つまり、〈ゲイであることを隠せ〉という「パッシングの要請」と、〈ゲイであることは構わないがそれを誇示することはやめたまえ〉という「カヴァリングの要請」が存在するのである。これらは、同性愛者への二つの形態の「差別」を捉えたものと言える。

パッシングの要請とは、異性愛規範による差別を恐れ、同性愛者であるという自身のアイデンティティを開示できないことを意味している。〈変態〉や〈逸脱〉としてのラベルを避けるために、同

(18)　訳書では「偽装工作」と訳されているが、“covering”のニュアンスがうまく捉えられていないと考えられる。また「パッシング」と対比させるために、ここでは原語を音訳した「カヴァリング」を用いる。

(19)　“attempt to tone down my known gayness” (Yoshino 2006:18).

性愛者はそのアイデンティティを隠さなければいけない。しかしこれは、要請を超えた強制でもある。なぜなら、同性愛者は自分が同性愛者であることを示しうるシンボルを持たないため、黙っていれば他者によって「常人」として強制的に認知されてしまう。言い換えると、黙っていれば意図せずともパッシングが生じてしまうという「パッシングの強制」の状況に同性愛者は置かれている。

カヴァリングの要請は、「寛容言説」という形で生じてきた。日本という文脈では、過去における男色文化の存在、宗教的言説による差別（差別意識）の希薄さ、同性愛を禁止する法律の不在、メディアにおける〈セクシュアルマイノリティ〉の存在などから、日本社会は同性愛に寛容であると言われることがある（風間・河口 2010:94）。また同性愛者がカミングアウトした際に受け取る典型的な反応として、「どうしてそんな私的（プライベート）なことをわざわざ言う必要があるのか（秘密にしておけばいいじゃないか）」（風間・河口 2010:54）というのがある。同性愛に〈寛容〉でありながらそれを私的な領域に留めておこうとする圧力は、〈あなたが同性愛者であることは構わないが、そんな「性癖」を誇示する必要はない〉という言説を生み出してきた。この言説で否定されているのは、同性愛者であることそのものではなく、それを誇示することである。これは、同性愛者は存在していない／同性愛者は異常だ、という認識による社会からのパッシングの要請というよりは、同性愛者の存在を認めながらもその存在を直接的な批判の対象とせずに、彼らの自己表現を否定するカヴァリングの要請なのである。「ホモ」たちによっても投げかけられる、「何か具体的な不都合があったかしら？」（NL1995/1:6）というゲイリブに対する批判も、寛容言説の一部と捉えることができよう。よってパッシングの要請とカヴァリングの要請は（異性愛）社会からのみ向けられていたのではなく、同性愛者内部からも向けられていたのである。

以上を踏まえると、「24 時間ゲイ」であること、「どんなときも、いつでも、どこでも『ゲイ』」であること、そして「ゲイテイスト」を身に着けるというのは、パッシングの要請とカヴァリングの要請への抵抗であると捉えることができる。つまり、同性愛者が社会で不可視化されていることへの抵抗と、「寛容」と言いながらもその存在を無視しようとする姿勢への抵抗であると言えるのだ。では具体的にはどのようにアイデンティティを管理し、抵抗をしていたのであろうか。ここで注目しなければいけないのは、パッシングもカヴァリングも共にシンボルをいかに管理するのかが問題となっていたが、同性愛者はスティグマを伝達するシンボルを持たないという点である。そのため彼らは、そのシンボルを作り出したり、既存のステレオタイプをシンボルとして利用しなければいけない。その具体的な戦略のひとつと考えられる、「オネエ」や「オネエ言葉」といった女性性の表現に注目する。

2-3　ゲイリブとカミングアウト —— 可視化戦略としてのオネエ

ゲイ男性が用いる、いわゆる「オネエ言葉」は、札幌ミーティングのニュースレター内のいたるところで用いられている。しかそれだけではなく、「オネエ」であることが「ゲイ」や「リブガマ」としてのアイデンティティと積極的に結び付けられるような語りも存在している。例えば先ほど見た「ノン・ケポイ」のマンガでも、「女装好き」の主人公が描かれる。他にも「アタシの少年時代」（NL1995/3）というマンガは、主人公の男性が札幌ミーティングに参加し、ゲイリブについて学び、活発に活動をするようになるという成長物語だが、その結果として主人公が「すっかりオネエ」（NL1995/3:19）になっている（図 3-1）。ここでは、ゲイリブを行うということが「オネエ」である

ことと結び付けられている。あるいは、「街中でオネエでしゃべることだって立派なゲイリブ」(NL1999/12:5)とも言われるように、「オネエ」はゲイリブの一様式とも捉えられ、「ゲイ」や「リブガマ」といったアイデンティティと「オネエ」であることは接続されている。先に見た「リブガマ」の用語解説でも、それは「お女装・オネエ・オカマ」と「政治意識」が結合したものと解説されていた。



図 3-1「すっかりオネエ」の主人公
(NL1995/3:19)

「オネエ」についてはニュースレター内の用語解説で、「“社会的に望まれている男性像”を“自ら降りる”ことを演じ」る(NL1995/4:14)と解説されており、ジェンダー規範や異性愛規範への抵抗として捉えられている。第1章で論じた『バディ』でも「女装」や「ドラァグ」について同様のことが言われていた。しかしここでは別の解釈が必要であろう。なぜならば、男性同性愛者とオネエ/女装=女性性というステレオタイプ的な連想を、言い換えるなら、男性同性愛者としてのもっともわかりやすいステレオタイプを、あえて引き受けているゲイ男性の姿を読み取ることができるからである。これが意味することは、「オネエ」であることは、自分がゲイであることを表現し、ゲイであることを他者に伝達するためのシンボルとして機能しているということである。

ここで行われている可視化は、「私は同性愛者である」という宣言によるものではない。そもそもそうした宣言が容易にできるわけではないし、できたとしても常に自分が同性愛者であることを宣言するというのは非常に面倒な作業でもある。そのため、自分が同性愛者であることを他者に伝えるもっとも簡単な手段は、世間が抱くステレオタイプ――つまりゲイであることと女性性を結びつける振る舞い――である「オネエ」を実際に体現し、ゲイであることを見せびらかすことなのである。オネエ言葉とは、中村桃子が言うところの言語資源――「私たちがさまざまな人物を造形するときに利用する『ことば』の知識、材料、資源」(中村2007:15)――であり、その使用は、日常生活でゲイであることを顕在化させ、周囲にゲイであることを伝え、常にゲイという社会的アイデンティティをパフォーマンスするための言語的戦略なのである。よって、政治性を帯びる「ゲイ」というアイデンティティに、「オネエ」が結びつけられることは、不思議なことではない。

ではこのシンボルの利用は、いわゆる「カミングアウト」と同義なのであろうか。1990年代のゲイリブではカミングアウトが重要なテーマであった。「カミング・アウトすることはゲイ・リブの第一歩なのです。カミング・アウトする以前には、リブのリの字もありません」(NL1995/1:5)という言葉にも明確であるように、ゲイリブの中心的な活動のひとつにカミングアウトが位置づけられている。こうした主張はカミングアウトを推奨するだけではなく、多くのゲイ男性にカミングアウトを強制しているようにも見える。しかし、「状況がどうであろうと『今すぐ明日にでもカミング・ア

ウトすれ[20]』と言っているわけではありません」(NL1995/1:5)、カミングアウトは「無理にする必要はない」(NL1996/1:38)、と言われるように、その有効性と必要性を説いてはいるが、強制しているわけではない。そこで重要となるのは、「ゲイ・パワーの源であるカミング・アウトを、いかに効果的に、いかにダメージを少なく行うか」(NL1995/1:5) という論点である。ここでは金田による「バレバレ」の論が参考になる。

金田智之 (2003) はカミングアウトについての論文の中で、カミングアウト／クローゼット、あるいはカミングアウトをする／しないといった二分法に疑問を付し、「バレバレ」という状態について論じている。「バレバレ」の状態というのは、カミングアウトをせずとも、周囲の人間が特定個人をその人の仕草や振る舞いから同性愛者であると認識できるような状態を意味している。金田がインタビューをしたゲイのA さんは、カミングアウトはしていないが「バレバレ」の状態であるために、大学で所属していたサークルでは自身のセクシュアリティを提示することに成功しており、ハッテン場の話をするほどでもあった。またゲイのC さんは、友人にカミングアウトをしたときの反応について尋ねられた際、「否定的な反応はまずない。僕の場合もとからそういうのが出てるから、仕草やら言葉やら。ある程度は絶対分かってるし、鈍いノンケ男とかでも納得はする」(同上:72) と語っている。つまり彼らは、「基本的には振る舞いによって自分がどのようなセクシュアリティの人間であるのか他人には分かっているだろう、と考えている」(同上:72) のであって、自分が同性愛者であるという明示的な宣言をしているのではない。

しかしここで重要なのは、「振る舞いによる表出のみによっては、自身がどのようなセクシュアリティの持ち主なのか、ということを完全に他者へ伝えることはできない」(同上:72) という点、つまり「バレバレ」という状態の曖昧さである。A さんとC さんは確かに「バレバレ」という状態の表出によって、周囲の人物が彼らのセクシュアリティについて察することを「想定」している。しかしA さんは、バイト先でも大学のサークル内と同様に「バレバレ」の状態を保っているが、バイト内では「ホモじゃないよ、って言っちゃうね」(同上:66) と語っているのである。ここで見えてくるのは、「バレバレ」という状態はその個人が同性愛者であることを他者に伝える指標となりながらも、それは同性愛者であることの明示的な宣言ではないために、自分が同性愛者であることを場合によっては否定することができるという、「バレバレ」の機能である。クレアらは、個人のアイデンティティを伝えるにあたってそのヒントとなる指標を見せることをシグナリング (signaling) と呼んでおり、その特徴は、「スティグマのある非可視的な社会的アイデンティティを明示的に開示することのリスクを最小限に抑える」(Clair et al.2005:83) [21]ことであると論じている。「オネエ」として振舞うこともシグナリングと言うことができる。

札幌ミーティングの〈カミングアウト〉についての言説は、これまでの議論を参考に次のようにまとめることができるであろう。カミングアウトは有効で必要だが、差別や偏見が強い状況でそれをするのはリスクが大きい。だがカミングアウトせずとも「オネエ」として振る舞い「ゲイらしさ」を見せつければ、他者に対して自分はゲイであると推測させることができ（同性愛者の存在を可視化させることができ)、それでいてゲイであることの明示的な宣言ではないため、もし何か差別的な

(20)　「〜すれ」は北海道弁。「〜しろ」(命令) の意味。
(21)　"[s]ignaling minimizes the risk of explicitly revealing an invisible stigmatizing social identity" (Clair et al.2005: 83)

ことを言われても、防衛として「ゲイではない」と否定することができる。よって、「オネエ」の使用とは、〈カミングアウト〉をしながらもいざとなったら防衛することのできる戦略的な行為なのだ。

本節の前半では、「ホモ」＝「クローゼット」、「ゲイ」＝「アウト」として二分する言説が形成されていたと論じたが、しかし、札幌ミーティングの「ゲイ」が全員、一般的な意味でのカミングアウトをしていたわけではない。彼らの実践をより正確に捉えるのであれば、それはカミングアウトというよりは「可視性の管理」(visibility management) (Lasser & Tharinger 2003:237) と言うべきであろう。よってより彼らの〈実情〉に沿って「ホモ」と「ゲイ」の二分法をまとめるのであれば、前者は自らを不可視化させる存在であり、後者は可視性を管理することで同性愛者を可視化させようと努める存在であると捉えることができるのである。

以上をまとめると、彼らの主張はクローゼットに留まることを否定しカミングアウトを推奨していたという単純なものではない。「24 時間ゲイ」であるというのも、誰彼構わずカミングアウトをすることを推奨するものではない。彼らはパッシングとカヴァリングの要請に抵抗するために、スティグマのシンボルを積極的に利用し、〈正面からのカミングアウト〉とは異なる戦略によってゲイの可視化を行おうとしていたのだ。ゲイであることはライフスタイルの問題であるということ、「24時間ゲイ」でありたいということは、ただ「自分らしく生きる」ことを意味するのではなく、ゲイであることをシンボルとして示し得る振る舞いを利用し、可視性の管理を行うことも意味していると言えるだろう(22)。

本節では、札幌ミーティングのゲイ男性が形成していたアイデンティティを「ゲイ」「リブガマ」「ホモ」という言葉に注目しながら論じた。彼らはゲイリブに批判的な「ホモ」に抵抗するように、「ゲイ／リブガマ」としてのアイデンティティを形成していたが、そのアイデンティティの要点は三つにまとめることができる。ひとつは、「ゲイ／リブガマ」であることはライフスタイルの問題であり、クローゼットの領域でただセックスをするだけの「ホモ」のような生き方ではないということである。ふたつ目は、ゲイリブにおける活動に能動的・主体的に取り組むという政治性によって脚色されていることである。そして三つ目は、ゲイの可視性を管理することによって、自らの存在を社会にアピールしていくということである。特にひとつ目とふたつ目の姿勢は以下の分析で見ていくものの前提になるものである。そして三つ目の姿勢は、次章のパレードの開催とより密接に関わってくる。

3．新しいコミュニティとしての札幌ミーティング

前節で見たのは、広くゲイリブにおける「ゲイ」としての在り方をめぐる認識であったと言える。では「ゲイ」というアイデンティティは、札幌ミーティングという具体的な場・コミュニティとど

(22)　ここでの論は、「常人」の視点から可視化の戦略が達成されているのかということは一切問題にはしていない。あくまでも「ゲイ」の行為を彼らの主観的なレベルにおいて分析したものであり、それが現実に日常の「常人」との相互行為の中で達成されているのか否かはここでの問題ではない。

う結びついていたのであろうか。孤立の解消や情報の提供を行うという目的を持った札幌ミーティングは、その団体自体が新しいコミュニティとして機能していた。では実際のところ札幌ミーティングはいかなる場として認識されていたのだろうか。そして、札幌ミーティングのメンバーはどのような在り方を期待されていたのだろうか。

3−1 「甘い汁」論争

団体のあるべき姿として札幌ミーティングが模索したものがもっとも表出しているのは、「甘い汁」論争と名付けることのできる一連の議論である。札幌ミーティングという場は自然発生的にできたのではなく、どういう場であるべきかという語りをメンバー同士が共有することによって、その特性やあるべき形を積極的に創造し、維持してきた。「甘い汁」とは、メンバーが札幌ミーティングから受け取ることのできる利益や恩恵を意味し、それらを一方的に受け取ることは「甘い汁だけを吸う」と表現される。1994 年 9 月号には、「ゲイグループ論序説 ―『甘い汁』論争に寄せて」という記事が掲載されている。

「甘い汁」について最初に問題提起されたのは、1993 年 8 月 21 日から 22 日に仙台で行われた地方交流温泉合宿（ゲイグループの交流合宿。札幌、名古屋、仙台のグループの共催）であった。その 1 日目の午後に、「あなたはグループに何を求めますか」というテーマでのディスカッションがあり、そこで札幌ミーティングのメンバーの一人（A 氏と呼ぶことにする）が、「甘い汁だけを吸う」メンバーの存在を問題視したことが始まりであった。A 氏は、役員などの一部の会員に業務が集中してしまっていることがその当時の札幌ミーティングで問題となっていることを挙げ、運営に積極的に関わったり仕事を担当したりせず、「楽しい」ことだけに参加するメンバーを「甘い汁だけを吸う」と問題視していた（NL1994/6:16）。グループ活動における「甘い汁」の具体例として、「発展場や飲み屋での人間関係からは得られ辛い『ポジティブな人間関係』が構築出来ることや、日常生活に有益な色々な情報を得られること、同性愛者である事が理由で困ったことがあったときに適切に対処出来ること」（NL1994/6:16）を挙げている。

この合宿に参加をした大阪のグループのひとりは、そのディスカッションを合宿後に振り返り、「甘い汁だけを吸う」メンバーの問題視に対して次のように応答している。

> グループのメンバーが定着し、みんなが積極的に活動するように運営したいと考えるのは当然だ、と思いつつ、「グループに関わって甘い汁だけ吸ってやめてしまう人」がいてはならない、そういうのはけしからん、という発想は、ぼくにはよくわからない。（…）グループと出会って元気を「盗む」人がいたっていいじゃない。グループの「役目」は立派に果たしたわけだし、いつまでも自分だけが仕事を担当し続けるのは「割が合わない」と、不満に思うようになったら、やめたらいいじゃん。やりたいからいつまでも手離さずにやってるんじゃないの？と、ぼくなどは思ってしまう。他人様のために活動してるわけじゃなくって、自分自身がやりたくって元気が出るからやっている。人がその活動・生き方に出会って元気になったとすれば、それにこしたことはない。（NL1993/9:13, 傍点原文）

ここでは、ゲイリブは自分のためにやるものであるという主張が彼の意見の根本にあると言えよ

う。この点は札幌ミーティングのメンバーによっても幾度と繰り返されている。例えば、「札幌ミーティングは同性愛者全体のために活動しているわけではありません。誰のためでもなく、“同性愛者である自分自身”のために活動しているのです」(NL1996/1:3)という主張がそれである。

A 氏は「そういう立場に立ったグループ運営もアリエルとは思う」(NL1994/6:16) と、先の大阪の参加者の意見に耳を傾けながらも、札幌ミーティングはそういう団体ではないと反論する。彼の主張は、「ミーティングに来て何ヵ月も経ち、友達もそこそこ出来た上で、さらに元気だけをもって行くだけでコミュニティーの運営に協力する気がないのなら、札幌ミーティングにはいてほしくないというコンセンサスが成立している」(NL1994/6:16) というものである。また続けて、「ミーティングに入会するということは、会の運営に協力し、何か役割を分担するということを意味するのであり、実質的な活動や運営業務を分担する意思のない方の入会はお断りすることになっている」(NL1994/6:16) として、何かしらの役割を担当することが入会の条件であると言う。

A 氏の主張は一見すると、団体に正式に参加をしながら仕事をしない人に対する単なる非難のようにも見え、事実その側面もあるだろう。しかし彼の主張の要点は、そこだけにあるのではない。彼が危惧しているのは、メンバーが「甘い汁だけを吸う」人ばかりになってしまうことで、「甘い汁」を作り出す人がいなくなってしまうことなのである。別のメンバーはA 氏の主張をまとめ、それに賛同を示している。

> お友達の紹介だけは受け付けるが、会を維持し、さらに活動を充実させることには一切関心を示さず、お友達が出来るとさっさと去っていく人は歓迎されていないのだ。(…)「甘い汁」を吸うことに関心はあるが、「甘い汁」を作り出すことに関心を示さない人は、やっぱり「勘違い」君だと思う。 (NL1994/9:15-16)

彼はA 氏の主張を、「『甘い汁』を吸うためにこそグループが存在すると考え、『甘い汁』にポジティブな意味を与えている」と捉え、その要点を「人が準備した甘い汁を吸うだけ吸って、甘い汁の準備、拡大生産に無関心なのは困る」(NL1994/9:16) ということだとまとめている。そして、「要するにグループ活動をするということは、一方的な受益者になるということではない。それぞれのメンバーがグループから利益を得続けるには、知恵や力、汗を出し合わなければならないはずだということにつきる」(NL1994/9:15) と、付け加える。

人為的に形成された札幌ミーティングというコミュニティは、人々の協力によってしか維持できない。つまり、こうして甘い汁を吸うだけの人が批判されるのは、従来のコミュニティとは違う、新しい「居場所」として札幌ミーティングを維持しようとしていたからなのである。

> ここは僕たちの『居場所』です。(…) この『居場所』の門戸は広く開かれていますが、敷居はとても高いのです。いつまでたっても「お客さん」や、男が出来たらハイさようならの勘違い君や (いっぱいいるけど)、「忙しい」を口実に何もしないで (みんな忙しいのよ！) タナボタを狙う輩や、「利用」するだけの人や、「甘い汁」を吸うだけの人は必要ありません。 (NL1995/5:6)

ミーティングでいいことあったぶん、活動の方にしっかり還元してちょーだい！男ができたらハイ、サヨウナラの勘違い君なんてもってのほかよ！（いっぱいいるけど）そういう連中が最初から入り込めないような雰囲気を作っていきましょうね♡ 夜に飲み込まれていく子、セックスにハマる子、そんな子はミーティングを経由しないで、とっととインラン旅館(23)に行けばいいべさ！！ (NL1995/8:16)

これらの言葉からは、メンバーの積極的な活動がなければ「甘い汁」を生み出し続けることができないという強い思いを読み取ることができる。この背景には次のような事情があるだろう。それは、札幌にはこうした活動団体が札幌ミーティング以外には存在していなかったということである。札幌でもゲイバーやハッテン場が昔から存在してきており、それらはゲイ男性に多くの恩恵をもたらしてきた。いわゆる「甘い汁」のようなものはそれらによっても提供されてきた。しかし札幌ミーティングが言うところの「甘い汁」とは、そこでのものとは異なる。A 氏が「甘い汁」のひとつとして「発展場や飲み屋での人間関係からは得られ辛い『ポジティブな人間関係』が構築出来ること」(NL1994/6:16) をあげているように、ゲイバーやハッテン場から得られる利益から札幌ミーティングを差異化しようとしているのである。つまり、ゲイバーやハッテン場が生み出すことのできない利益を生み出すために札幌ミーティングは存在しているという認識がここにはあるのである。もし札幌ミーティングがゲイバーやハッテン場のような人間関係の場となってしまえば、札幌ミーティングが存在する意味がなくなってしまう。そのため、「甘い汁」を皆で生み出すことによって、新しいコミュニティを作り、既存のコミュニティから差異化しようとしていたのである。

1990 年代当時の札幌において、札幌ミーティングはゲイ男性が集うことのできる、ゲイバーやハッテン場ではないほとんど唯一の場所であり、札幌でさまざまな役割を引き受ける中心組織であった。唯一無二の場所であるからこそ、つまり、唯一「甘い汁」を作り出すことのできる場であるからこそ、彼らは「甘い汁を吸うだけ」のメンバーに対して批判的なのである。ここに、ただ怠け仕事をしない人への文句とは違う、新しいコミュニティを形成しようとする彼らの強い思いを読み取ることができる。

3-2 ゲイバー／ハッテン場からの差異化 —— クローゼットとアウト

「甘い汁」論争の核心は、札幌ミーティングをゲイバーやハッテン場から差異化し、新しいコミュニティを作ろうとする強い意思であった。その新しいコミュニティの重要性は、ゲイバーやハッテン場には存在しなかった関係性を構築できることとされている。A 氏は、仙台での合宿に参加していたとあるメンバーによって「甘い汁」が体の関係を意味すると誤解されたことについて落胆しつつ、次のように語っている。

もし、そのグループの活動の意義が究極的には SEX 相手を見付けることにあるのだとすれば、（…）さっさとグループを解散してしまい、運営や維持なんて面倒なことは止めて、お金を

(23) 「インラン旅館」とはいわゆるハッテン場のことである。昔は旅館形式のハッテン場が多く存在していた。数は少ないが、現在でも存在している。詳しくは石田仁 (2015)。

> 払えばそれなりに楽しめる飲み屋に通えば良いし、お金が無いときは発展場に行けば良いのだから。 (NL1994/6:16)

札幌ミーティング（およびゲイリブ団体）がゲイバーでもハッテン場でもないという主張は、多くのメンバーによって反復される。注目したいのは、「ゲイバー、ハッテン場」と「札幌ミーティング」が明確に二項対立的に語られる様子であり、ゲイバーやハッテン場が否定的に捉えられている点である。ゲイバーやハッテン場という場所はこれまでも少なからず多くのゲイ男性にとっては解放的な場所、つまり、自分の欲望を隠さずに「自分らしく」振る舞うことのできる唯一の場所であったはずである。にもかかわらず、札幌ミーティングのメンバーはそれらの場所を否定的に捉えるのである。

第二回の仙台合宿に参加した札幌ミーティングのメンバーは、その時のディスカッション（テーマは「グループに求めるものについて」）を振り返り、「楽しさ」という言葉で札幌ミーティングで形成することのできる関係性を示している。

> 例えば、私が考える札幌ミーティングが提供し得る「楽しさ」というのは、名字で自己[紹]介しあうノンケの間ではごくあたりまえの出会いであり、タイプだタイプじゃないセッ[ク]スするしないが基準のすべてではない全人格的な友人関係であり、ともに何かをやり遂[げ]た仲間意識であり（少し恥ずかしい）、対社会に向けてセクシャリティを隠さないこと[へ]の開放感といったようなものです。
>
> (NL1993/8:21、[]内は印刷が切れている箇所であり、文脈から引用者が語を補った)

この語りでは、性的要素の入り込まない関係性が構築できることがグループ活動の良さであると言われている。札幌ミーティングでの出会いは性的魅力を基準としない「全人格的な友人関係」として特徴付けられ、ノンケ（異性愛者）が当たり前とするような交流の様式が作り出されているとメンバーは考えている。次の語りでは、札幌ミーティングの意義のひとつが出会いの提供であると言われているが、その出会いも性的なものとは差異化されている。

> 意味という程の意味ではないかも知れませんが、札幌ミーティングには、出会うこと自体が困難なゲイたちのために、出会いを提供する場所くらいの意味はあると思います。(…) 札幌ミーティングでの出会いは、セックスする、しない、タイプだ、タイプじゃない、というかけひきからは遠い場所にあるはずですから、他のゲイたちの出会いのケースに比べて、片意地を張らないよりごく自然なよりごく普通の出会いが実現できると思うのです。
>
> (NL1993/1:22)

セックスが入り込まない関係性が札幌ミーティングの特徴とされているが、ここで同時に暗示されているのは、これまでの関係性が、非意図的であっても性愛にまつわる駆け引きを中心に成立していたという認識である。第2章で論じたゲイ男性の恋愛について振り返ると、インターネットの登場による恋愛の自由化・出会いの機会の活性化が恋愛の悩みの原因となっていた。しかしこの活

性化が生じる前からゲイバーやハッテン場では類似する〈悩み〉が生じていたと言えるだろう。前節の分析でも、札幌ミーティングのゲイのメンバーは「ゲイ」であることを性的なものとしてしか捉えない認識に抵抗していたことを論じたが、札幌ミーティングから性的要素を排除しようとするのは、ゲイであるということを性的側面以外で定義し、「全人格的な友人関係」を築くことを目指していたからである。

戦後すぐに登場したゲイバーでは室内における売買春の営業も行われており（伏見 2004:274-277）、ゲイ男性同士の交流の場としての機能と、性的接触を提供する場としての機能が共存していた。しかし現在のゲイバーは「射精産業ではない」こと、「店員との『恋愛』を提供しない」ことを特徴としており（石田 2004:84）、ゲイバーは歴史的に主にゲイ男性同士の交流の場所として機能を狭めてきた。しかしここまでの語りではゲイバーが主に性的な出会いを求める場所として構築されている。ゲイバーとハッテン場では、性的な出会いが求められてきたことは確かであろう。しかしこれらの語りはゲイバーやハッテン場の歴史的役割を正確に批判しているというよりも、札幌ミーティングという場の対立項を立てるために、ゲイバーやハッテン場を性的出会いやセックスの場として構築していると言ったほうが良いであろう。

3-3　交流のみを求めることの否定 ――「真面目」な活動とのバランス

札幌ミーティングをゲイバーやハッテン場とは異なるものとして認識するのは、札幌ミーティングのメンバーの主張にだけではなく、そこに初めて参加した人たちの感想にも表れている。札幌ミーティングの会合への初参加者による、「初めてミーティングにきたが、飲み屋・ハッテン場以外での交流の場があればいいなと思い来た」、「飲み屋・ハッテン場とは違って人々の交流ができていいと思う」（NL1994/5:23）という語りには、彼らがこれまでとは異なる人間関係を求めて札幌ミーティングに参加したことを見て取れる。

しかし、札幌ミーティングを単なる交流の場と認識するだけでは、歓迎されない。札幌ミーティングはお遊び系・コミュニティー系のサークル（ただ単に当事者のみで交流を行うグループ）ではないので、「コミュニティー系サークルの要素を消し去ってしまえばいい」（NL1998/3:26-27）と、交流のみを求める人を厳しく締め出すような発言がされることもあった。また、たとえゲイバーやハッテン場とは違う新しいコミュニティが維持できたとしても、「『アルコールのない飲み屋』なんて私にはいらない。そんなのただダサイだけ」（NL1994/6:21）と、批判されることもある。

しかし、この「コミュニティー系サークルの要素を消し去ってしまえばいい」、「『アルコールのない飲み屋』なんて私にはいらない」という批判の対象には、ただ「甘い汁」を吸うだけの人のみならず、「甘い汁」を作りだし、新しいコミュニティを作ろうとしている人まで含まれてしまうのではないか。つまり、ゲイバーやハッテン場から差異化することができたとしても、それ以上の活動をしない人をも非難していると考えらえる。言い換えると、「甘い汁」の生産と消費だけを行い、対社会的な活動を行わない人がここでは批判されていると言えるのだ。札幌ミーティングが「アウト」な空間であるのは、単にゲイバーやハッテン場とは領域が違うという理由だけではなく、社会に対して活動を行うことで、同性愛者を取り巻く状況をラディカルに変革させようとしていたからにほかならない。

こうした批判があるなか、コミュニティー系サークルとしての札幌ミーティングを擁護するメン

バーもいた。札幌ミーティングを「アルコールのない飲み屋でも、クルージング[24]しないハッテン場でもない」(NL1994/8:15) と断言しながらも、入会条件のハードルの高さを批判的に語り、「お遊び」を擁護する。

> ミーティングでおネェ丸出しでしゃべりまくっても、定番会話でなに話してもいいじゃない。いわゆる大人の人たちがいう真面目なことに目を向けられない若い子はミーティングにいちゃダメなの？／飲み屋や、ハッテン場みたいな閉ざされた空間に追い込まれてしまうの？僕たちはクローゼットに押し込められているのが嫌でここに来たのに…。／僕はエイズ問題や、マスコミ問題、でかいことは言えないけど、ゲイ・リブってやつも好きだし、大切だと思うし、自分なりに進めてるつもり。別に興味がないって訳じゃないし、目をそむけているつもりもない。だって、大切な問題視(ママ)、必要と感じるから。じゃあ、世間話や、うわさ話が必要と感じているなら飲み屋に行けと言われるのだろうか？ (NL1994/8:15)

この語りは札幌ミーティングを「アウト」な空間と認識するのみならず、「エイズ問題や、マスコミ問題」といった「真面目なこと」を話すことのできる唯一の空間であると捉えている。また「これから男をさがそうとしている男がうじゃうじゃ集まっている」飲み屋では「都合悪いこと」は扱われず、真面目な話をする余地がないことも吐露されている (NL1994/8:15) [25]。つまりこの語りでは、「真面目なこと」に取り組む意思が語られ、その意思さえも否定されてしまうことを懸念しているのである。

以上の語りから見て取ることができるのは、札幌ミーティングにおいて、「楽しく」交流するという「遊び」と「真面目」に社会変革活動に取り組むことをいかに共存させるのかという葛藤である。「アウト」な新しいコミュニティを求める人々によって札幌ミーティングは構成されるが、札幌ミーティングをただ楽しく交流をするための「アルコールのない飲み屋」とはしたくなかった。ただ「遊び」をするだけならばゲイバーやハッテン場の「ホモ」と変わりがないが、彼らが求めていたのは、「全人格的な関係」の形成と、積極的にゲイリブに携わり、能動的に活動を行う「ゲイ」や「リブガマ」としてのアイデンティティの形成であった。コミュニティの形成はあくまで社会変革活動を行うためのひとつのステップであり、ただ交流するだけで満足してしまう人は、たとえ甘い汁を作り出す立場にいたとしても、歓迎されなかったと言える。「楽しい」「お遊び」と「真面目」な「活動」の二つのバランスを取ることを彼らは望んでいたと言えるが、全員がそのバランスを取ろうとするわけではない。この点が、札幌ミーティングの葛藤のひとつであった。

本節では、札幌ミーティングという場がいかなる場として構築されてきたのかを論じた。「甘い汁論争」と言える一連の論争では、札幌ミーティングから受け取ることのできる恩恵である「甘い汁」を吸うだけの人が批判されていた。この批判の核心は、全員が「甘い汁」を積極的に生産すること

(24) クルージング (cruising) とは、主にハッテン場で性的な相手を探すことを意味する。
(25) 札幌ミーティングが結成される前にはゲイバーしか行く場所がなく、その過度に賑やかで下ネタが多かった状況に馴染めなかったことを嘆く語りもあるが (NL1998/3:25)、これもゲイバーでは真面目な話ができないという認識と共鳴するものである。

によって、ゲイバーやハッテン場という旧来のコミュニティから札幌ミーティングという新しいコミュニティを差異化させることであった。性的要素の入り込まない「全人格的」な人間関係を形成することができるのが、札幌ミーティングであった。しかし、甘い汁の生産と消費をし、「遊び」しか行わないことは批判された。札幌ミーティングとは、「全人格的」な人間関係を築いた上で、社会変革活動といった「真面目なこと」に取り組む場であったのだ。ここには、「楽しい」「遊び」を経由して社会変革活動へ至るという道筋を読み取ることができるだろう。この点は第5節でより詳しく論じる。

4．対外的活動 —— ローカルメディアへの抗議活動

本節からは、札幌ミーティングの具体的な活動を取り上げ、彼らのアイデンティティがそれらといかに結びついていたのかを論じていく。前節までの言葉を使用するならば、「ゲイ」や「リブガマ」というアイデンティティによってどのような活動が行われてきたのか、それらのアイデンティティがどのように具体的な活動内で形成されてきたのか、そして「遊び」と「真面目」な活動の間にはどのような関係があったのか、という問いに取り組むのが本節以降である。第4節では異性愛者をターゲットとする対外的活動、第5節ではゲイ男性をターゲットとする対内的活動を取り上げる。

異性愛者をターゲットとする対外的活動とゲイ男性をターゲットとする対内的活動を区別して扱うが、対象者が両者双方を含む活動もある。例えば、各種講演会はゲイ男性も異性愛者も対象となる活動である。札幌で毎年2月に開催される雪まつりに合わせ、1991年から2002年までの間に「雪まつりフォーラム」と称される講演会が開催されてきた（表3-3）[(26)]。毎年さまざまなテーマが設定されているが、そのテーマからもターゲットにはゲイ男性も異性愛者も含まれることがわかる。「レズビアン&ゲイ・フィルム・フェスティバル」として、札幌にあるミニシアター「シアターキノ」で開催されてきた映画祭や、1996年から札幌で開催されてきたセクシュアルマイノリティのパレードも、同様にターゲットを制限しない。以上の点に留意しつつ、ゲイ男性・異性愛者をターゲットとする傾向の強い活動をそれぞれの章で分析していく。

異性愛者をターゲットとする傾向の強い活動として、選挙の際のアンケート調査がある。国政選挙・地方選挙の際には候補者や政党に対して同性愛やセクシュアルマイノリティに関する質問状を送付することによって、彼ら・彼女らのセクシュアルマイノリティに対する認識を調べていた。初のアンケートは1995年4月の北海道知事選挙の際に行われており、その後も継続的に選挙の際にはアンケートの送付を行い、その結果をニュースレターで公開してきた。次節で見るブランチの活動に目を向けても、そのひとつである「親の会」は、セクシュアルマイノリティ当事者の親を対象に行われる活動であり、親同士の交流会などを通して彼ら・彼女らのサポートをしてきた。札幌ミーティングが活動休止状態になっている現在でも、「親の会」は「レインボーファミリー」という名称のもと独立して継続的に活動を続けている[(27)]。

(26)　第11回からは名称が「雪まつりフォーラム」から「フォーラム」へ、第12回は「レインボーキャラバン」へと変更。また第12回の講演会は、3月に札幌で開催されたのち、同じテーマで5月に旭川でも開催された。
(27)　親の会の詳しい紹介は、竹村（2002）参照。

表 3-3　札幌ミーティングによる「雪まつりフォーラム」のテーマ

開催年月日	講演タイトル
1991 年 2 月 10 日	トーチソング・トリロジー上映&エイズセミナー（札幌市衛生局保健予防課との共催）
1992 年 2 月 9 日	ゲイライツ in 札幌（ゲスト：風間孝、新美広）（参加者：約 40 名）
1993 年 2 月 13 日	カムアウトは楽しくしたたかに：日常をゲイとして生きる（ゲスト：平野広朗）
1994 年 2 月 5 日	レズビアンコミュニティ&ゲイコミュニティ（ゲスト：掛札悠子）
1995 年 2 月 11 日	同性を愛するということ
1996 年 2 月 25-26 日	劇団フライングステージ　札幌公演「夜のとなり」（参加者、約 330 人）
1997 年 2 月 23 日	差別って何さ！'97
1998 年 2 月 21-22 日	劇団フライングステージ　札幌公演「陽気な幽霊」（参加者、260 名）
1999 年 2 月 27 日	レズビアンとして自分らしく生きる（ゲスト：池田久美子）
2000 年 2 月 27 日	親と子の対話：セクシュアリティと家族（参加者数：約 100 人）
2001 年 3 月 20 日	子供と暮らす女性カップル：多様化する家族のすがた
2002 年 3 月 21 日	レズビアン・ゲイへの素朴な疑問にお答えします

このような対外的活動がある中、本節で取り上げるのは、札幌ミーティングによるローカルメディアへの抗議活動である。活動の初期から札幌ミーティングのメンバーは抗議活動を行っており、例えば一般書籍内の同性愛差別的記述を問題視して筆者へ抗議の手紙を送ったりしていた(28)。こうした活動が必ずしも最終的に筆者からの謝罪や記述内容の変更へと至ったわけではないが、同性愛に対する社会の認識を変えるための地道な活動として行われてきた。本節ではこうした抗議活動の中でも特に、UHB（北海道文化放送）によって放送されたテレビ番組への抗議活動と、STV（札幌テレビ放送）ラジオによって放送された内容への抗議活動を取り上げる。

札幌ミーティングは比較的長期的な抗議活動をいくつか経験してきたが、この二つはそれらの中でも特に長期に渡り展開され、かつ最初期のものである(29)。またこの抗議活動ではメディアにおける同性愛者の扱いと表象を主に批判の対象としているため、その当時社会にはびこっていた同性愛についての表象と、彼らが求める表象との齟齬や乖離が明確に表れている。こうした理由から、本節ではこれらの抗議活動を札幌ミーティングが展開した対外的活動の代表例として扱い、考察を進める。次項で UHB への抗議活動を、その次に STV への抗議活動を扱う。具体的にはまず、それぞれの放送内容についてまとめ、同性愛者についてどのような表象がされていたのかを確認したのち、

(28)　最初期のものに、アンソニー・ストーの『性の逸脱』の訳者への抗議（NL1992/4:2）、山口剛の『エイズの真実』への抗議（NL1992/5:5）、大羽賢二の『おかまのとっておきの話』への抗議（NL1992/6:6）などがあった。

(29)　札幌ミーティングが経験してきた比較的規模の大きな抗議活動は他にもある。例えば、1993 年に札幌で生じた殺人事件の被害者がゲイ男性であったことから、札幌のゲイ男性が警察によって次々に「任意」の事情聴取をされるという出来事があった。アウティングなどの脅しによって事情聴取を強制され、交友関係や私的なことを洗いざらいに問い質されたりした。これは抗議活動というよりは、警察を非難しながら、事情聴取に応じる必要はないことを札幌のゲイ男性に注意喚起するに留まったが、札幌ミーティングの初期の事件としては重大なものであった。また、1996 年には帝京大学の松田重三に対しても抗議を行っていた。1996 年 3 月号の『薔薇族』に松田重三と伊藤文学によって HIV/AIDS のアンケートが掲載されたが、その内容が HIV/AIDS はゲイの病気であるという認識を助長すること、恐怖を煽る文章が記されていること、興味本位としか言えない質問項目があることなどが批判された。またこれに伴い、松田重三が 1991 年に発表した文章が HIV/AIDS の広がった原因をゲイリベレーションの結果であると論じていたことにも抗議をしていた。

札幌ミーティングがその内容のどこを問題視したのか、それに代わるどのような主張をしていたのかを論じていく。

4−1　UHB 問題 ——「気がつけばホモ」

1993 年 12 月 24 日に放送された 2 時間（15:30-17:30）のテレビ番組『ポテト年末スペシャル』（年末特番）は、その年の出来事を振り返る内容であった。その中で「気がつけばホモ」という 20 分弱のコーナーが放送され、札幌ミーティングはその内容を問題視し抗議を行った。この抗議活動は新聞や地元雑誌などのメディアによっても取り上げられた。9 ヶ月ほどの抗議と交渉を経て、1994 年 9 月 29 日には札幌ミーティングのメンバー二人とアナウンサーの対談が放送され、メンバー二人による主張が読み上げられたのち、UHB が謝罪した。同年 10 月 15 日には札幌ミーティングにファックスで謝罪文が送られてきたことによって、この問題は終結を迎えた。実は年末特番が放送される以前の 1993 年 11 月にも UHB はゲイを番組内で取り上げていたが、その際は札幌ミーティングの全面協力のもと、質の高い番組が制作・放送されていた。「気がつけばホモ」が年末に放送される一ヶ月ほど前に UHB が質の高い番組を放送したという事実があったからこそ、彼らは積極的な抗議活動を行ったのであった。

UHB への抗議活動は 1994 年に展開されたが、その年の年末に 1994 年の活動を振り返ったメンバーは、「94 年は札幌ミーティングにとって激動の年であった」（NL1995/2:6）、「札幌ミーティングは最近、ゲイリブ団体だという意識を強くもちはじめた。発足から 6 年をへてようやく会の基本的性格がはっきりしてきたようだ」（NL1995/2:11）と語っている。1994 年に展開されたのはもちろん抗議活動だけではないが、札幌ミーティング全体の方向性に大きな影響を与えた活動のひとつが、この抗議活動であった。

まず、札幌ミーティングが抗議をすることになった番組全体の構成について概観してみよう。「気がつけばホモ」に先立つ 1993 年 11 月には、「ほんとうのゲイの世界〜素顔の同性愛者たち〜」というタイトルで、ゲイブームと同性愛者の現状について紹介する 16 分ほどのコーナーが放送された。パーソナリティーにより、一般雑誌などのメディアがこれまで以上にゲイについて取り上げ始めたという現象である「ゲイブーム」の紹介が行われ、具体的なものとして、ゲイブームの先駆けとも言われる雑誌『JUNE（ジュネ）』や公開中の映画である『二十歳の微熱』などが紹介された。ただ、こうしたメディアの同性愛者像がすべてではないということ、メディアの表象に反して実社会には差別があるということにパーソナリティーは触れ、札幌ミーティングのメンバー二人へのインタビューに移り、ゲイとして生きることなどについて彼らの語りが放送された。その後、パーソナリティーから、ゲイムーブメントが日本でも生じており少しずつ成果を見せ始めていること、具体例として広辞苑の「同性愛」の記述が「異常性欲」から変更された(30)ということが紹介され、コーナーは終了する。

コーナー全体で（男性）同性愛者の現状について〈真面目〉に、誠実に紹介されており、当事者の口による語りも放送することによって、メディア側の一方的なイメージを押し付けない番組構成になっていた。札幌ミーティングが制作に協力していたので、ある意味では当然の内容ではあった。

(30)　広辞苑の第三版では「同性愛」が「同性を愛し、同性に性欲を感ずる異常性欲の一種」と解説されていたが、アカーによる申し立てによって、1991 年に出版された第四版で「同性の者を性的愛情の対象とすること。また、その関係」と改訂された（『朝日新聞』1993.4.9）。

しかし札幌ミーティングの協力なしに作成された「気がつけばホモ」はこれとまったく異なる内容となっていた。



図 3-2　「気がつけばホモ」のオープニング

「気がつけばホモ」(図 3-2) ではまず、1993 年は同性愛についての話題が多かったというトークがパーソナリティーらによって簡単に行われる。その中、「今年ホモに目覚めたかた」から生電話を受け、電話相談・意見収集をするということ、「ニューハーフ」のパーソナリティが生電話の相手となることが（テロップと電話番号とともに）アナウンスされる。その後、パーソナリティーらの「ホモセクシュアル度チェック」をするコーナーへと移り、「ホモセクシュアル度」を測る 10 の項目が挙げられる。その項目は科学的な根拠に基づくものであるとして、札幌にある大学の教授によるコメントが放送される。次に、なぜ昨今同性愛が話題となり始めたのか、という話題に移り、テレビドラマ『あすなろ白書』、『同窓会』、映画『二十歳の微熱』、アダルトグッズの「ダッチハズバンド　伊集院　健」が紹介される。札幌にも「ホモ専門の書店」があるとして、パーソナリティーがそこに出向き、全国のゲイバーなどの情報を扱う『男街マップ』を購入する姿が放送される（店内は映されない）。『男街マップ』に掲載されている札幌の情報をもとにして、ハッテン場となっている映画館、公衆トイレ、旅館にパーソナリティーが赴き、それぞれを紹介する。映画館と公衆トイレに関しては、中まで撮影して紹介される。次に生電話の相談に移り、とあるバーのマスターから言い寄られており、「一歩踏み込んでいいのか」迷っているという男性からの相談にニューハーフのパーソナリティーが回答し、放送は終了する。

12 月 24 日の番組の放送以降、札幌ミーティング内で話し合いが行われ、翌年の 1 月 31 日には UHB に対して質問状（抗議文）が送られている。その中では次の 5 点に対する回答を求めている。

（1）ホモセクシャル度チェックとはどのような根拠に基づくものか
（2）同性愛者の交流場を公にした制作意図はなにか
（3）同性愛関係の書籍も扱う書店を「ホモ専門書店」とした理由は(ママ)？
（4）作家・□□□氏の言動は制作者の意図したものなのか
（5）「レズ度が高い」という表現は何を意味するのか　　(NL1994/5:7)

上の 5 点で具体的に問題視されたことを順を追って見てみよう。まず 1 点目の「ホモセクシャル度チェックとはどのような根拠に基づくものか」[31] という質問は、抗議の手紙では、

コーナーで取り上げられた「ホモセクシャル度チェック」を作成するにあたり検討された学

(31)　札幌ミーティングによる質問状では「ホモセクシャル度」、「気がつけばホモ」の放送では「ホモセクシュアル度」と表記されているため、表記の揺れはそのまま引用している。

術文献の提示を要求する。□□□□大学・□□□□氏を採用した経緯を明らかにすることも要求し、受け入れられない場合には、□□□□大学への法的抗議行動を行う所存である。

(NL1994/5:7)

と、要求されている。この質問内容は「ホモセクシュアル度」を測るための 10 の項目を問題視してのものである。番組内で「ゲイブーム」についての振り返りが行われたあと、リポーターが、「どっかでみなさん、第三者的に進行していません？どっか、私は関係ない、他人ごとだと思っていませんか？でも違うんですよ。みなさんの中にある深層心理の奥にある、ホモセクシャル願望をわたくしが白日のもとにさらしてあげましょう。ホモチェックです！」と宣言し、「ホモチェック」のための 10 の質問が始まる。それらは次のものである（図 3-3)。

ごひいきの同性のタレント・スポーツ選手がいる
同性の汗を見て素敵だと感じる
お化粧をしたことがある
コップをもった時ついつい小指を立ててしまう
頼まれたらイヤと言えない
時々むしょうに銭湯にいきたくなる
相手の耳たぶが気になる
耳たぶにさわる時手をクロスする
人前で海パンになれない
前より後ろが好きだ

これらの項目に当てはまる個数によって、「立派なホモ」(10 個)、「きっとホモ」(7-9 個)、「たぶんホモ」(4-6 個)、「もしかしたらホモ」、(1-3 個)、「いつかはホモ」(0 個) との判定が下される。これらに対する批判は、同性愛者を女性的や性的な存在とするステレオタイプに対する批判と、性的指向をグラデーション的に捉える認識に対する批判の二つに大きく分けることができる。

札幌ミーティングが作成し UHB との話し合いで用いられた資料では、上記の 10 項目について、「上記のような質問項目の背景には、同性愛者はすべて“女性的”だというステレオタイプのイメージが満ちている」と批判されている（「お化粧をしたことがある」、「コップをもった時ついつい小指を立ててしまう」「耳たぶにさわる時手をクロスする」が該当すると思われる)。これは、同性愛とトランスジェンダーが混同されていることに対する批判でもあり、身体的性別、性自認、性的指向、性表現がそれぞれ独立していることを主張している。「『前より後ろが好きだ』という項目は、同性愛者＝アナルセックスをする輩という、明らかに間違った認識に基づいている」とも記され、同性愛者がアナルセックスと過剰に結びつけられること、同性愛者を過剰に性的な存在として捉えることへの批判となっている。また質問状に、「コーナーで取り上げられた『ホモセクシャル度チェック』を作成するにあたり検討された学術文献の提示を要求する」と記載されているように、これらがどういう根拠に基づいているのかの開示も要求している。コーナー内では札幌にある大学の某教授を登場させコメントをもらうことで、これらの項目に科学的根拠を付与しようとしているが、



図 3-3　「ホモセクシュアル度チェック」

札幌ミーティングはそれがまったく根拠になっていないとして、具体的な学術文献の提示を求めたのであった。

以上に加え、同性愛というものをすべての人が潜在的に持ちうる資質として考えることに対しても批判を行っていた。札幌ミーティングはUHBに対して何度も番組に関する質問状を送っていたが、UHBからの回答には、「番組の基本コンセプトは御覧いただいて理解いただけるとおり、人間の愛は異性愛、同性愛ともに何等変わるものではなく、普遍的なものであり、同性愛についても全ての人間がもっている感情であり特殊なものではないという考えに基づいています」(NL1994/8:5) という一文がある。この文言に対しては札幌ミーティングのメンバーから、「同性愛はすべての人間が持っている感情である、というのは一体どーいうこと？意味不明。わけわかんなーい」(NL1994/8:7)、「『同性愛についてもすべての人が持っている』？じゃあ、すべての人間が同性愛者として差別されているの？」(NL1994/9:8) といった反応が寄せられている。これらの批判にあるのは、同性愛者と異性愛者を明確に異なる存在として捉えようとする姿勢である。つまり、同性愛と異性愛とはグラ

デーション的にあるのではなく、1 か 0 か、白か黒かのようにはっきりと区別されると捉えているのである。（5）の「『レズ度が高い』という表現は何を意味するのか」という質問も以上の問題点を問いただすものである(32)。番組内でリポーターが女性出演者に対して、「□□さんはお姉さま肌だからレズ度が高いかもしれない、ハハハハ」と発言しているが、これもまったく根拠が示されていないこと、そしておそらく、レズビアンであるということをすべての人に共通する素質として捉えることに対する批判となっている。加えて、侮蔑的ニュアンスを含む「レズ」という言葉の使用に対する批判でもあった。

（2）「同性愛者の交流場を公にした制作意図はなにか」という質問は、いわゆるハッテン場をテレビで取り上げたことに対する批判である。質問状では、

> 少数者であるが故に限られている出会いの場を公にすることによって、各地で様々なレズビアン・ゲイ暴行事件が多発しているのは周知の事実である。それにも関わらず敢えて「□□□□□□」の公開を目論んだ意図を明らかにすることを要求する。
>
> (NL1994/5:7, 伏せ字はハッテン場の具体的場所)

と記されている。番組内でリポーターがハッテン場となっている映画館、公衆トイレ、旅館をめぐり、そこでセックスが行われていることをレポートしていた。この点についても札幌ミーティングの批判を二つに分けることができる。ひとつは「ホモ狩り」が生じ得る危険性についての批判であり、もうひとつは、同性愛者がハッテン場を利用しなければいけない社会的文脈が一切説明されないことに対する批判である。「ホモ狩り」が発生する可能性を危惧したのは、事実、以前に札幌のとあるタウン誌がゲイ男性の集う某公園を紹介した際に、「ホモ狩り」が発生したためであった。「〔札幌のタウン誌でハッテン場が〕紹介されてから半年もたたないうちに、ストレートの男の子たちが公園に乗り込み、ゲイと見定めるやいなや追いかけまわし、脅迫し、金品をまきあげる」(NL1994/3:14)ということが生じたのである。「気がつけばホモ」でも、「住所名称はふせられモザイク処理がほどこされてはいたものの、札幌住民ならほぼ間違いなくすぐあそこだと特定出来てしまうような映し方」(NL1994/3:14) で紹介がされていたため、彼らは同様のことが生じる可能性を危険視していたのである。しかしこうした差別の存在はUHB 側には認識されていなかった。またゲイ男性とハッテン場の関係性については次のように指摘される。

> なにもわれわれはわれわれのセックスが暴かれたからといって怒っているわけではない。なぜ同性愛者はああいった秘密の場所で人目をはばかってこそこそと逃げ隠れるように出会いを求めなくてはならないのか、その説明が何ひとつされないから怒っているのだ。
>
> (NL1994/3:14)

差別や偏見を恐れる男性同性愛者が集うことのできる場所は、匿名性の担保されたハッテン場に

(32) 質問状内では具体的に、「番組中、『レズ度』なる言葉が飛び交ったが、いかなる根拠に基づいて選ばれそして使われた表現なのか、明らかにすることを要求する。」(NL1994/5:7) と記されている。

限られていたこと、公共の場を間借りすることでしか自分たちの居場所を形成することができなかったこと、こうした点が番組内では説明されていない。結果として、社会的背景の説明なしに、公共の場でセックスをする〈変態〉として性的な側面のみがクローズアップされ、「セックスだけの存在としての同性愛者というステレオタイプを強調する」(NL1994/3:14)ことになっていたのである。

（3）「同性愛関係の書籍も扱う書店を『ホモ専門書店』とした理由は？」という質問では、

> 書店側が取材を拒否したにも関わらず、場所が明らかに特定できる形で外景を撮影したのは極めて問題が大きい。一般書籍の占める売場面積の方が広い筈の当該書店を、なぜホモ専門などという差別的表現で公にしたのか、その意図を明らかにすることを要求する。
>
> (NL1994/5:7)

と質問状に記されている。ここでの批判点は、（2）と類似する。つまり、同性愛に関する情報が少ない中、そうした書店は彼らにとって情報を得るための大切な場所であった。しかし半強制的な取材によってそうした場が公にされ、しかも「ホモ専門」と差別語を用いて形容されることで、その場の安全性が侵害されてしまったのである。結果としてゲイ男性がその書店に出向き、情報を得ることから遠ざかることになり、札幌ミーティングが目標のひとつとしていた「同性愛者の孤立の解消」に背いてしまうのである。

最後に、（4）「作家・□□□氏の言動は制作者の意図したものなのか」という質問であるが、質問状では、

> レポーターとして番組に登場した□氏が、「髪を洗って新しいパンツ(ママ)履いて」取材に出かけるという表現は、台本にあったものなのかを明らかにすることを要求する。同性愛者を性的倒錯者と断じたような表現に関し、我々は言葉にできないほどの侮蔑を感じている。
>
> (NL1994/5:7)

と記されている。これも（2）と類似する批判である。（2）で見たハッテン場巡りを担当したレポーター（作家・□□□氏）は、「髪を洗って、パンツを新品にかえてちょっと探検してみました」との発言を皮切りにハッテン場巡りを開始した。ここでも問題の核となっているのは、「発言者が、同性愛者を『セックス人間』としか捉えていない発想が見事に現れている」(33)点であり、同性愛者を全面的に性的な存在としてしか捉えない認識に批判を向けているのである。

4−2　STV 問題 ——「モーホーの見分け方」

引き続き、もうひとつの抗議活動として STV への抗議活動を見ていく。抗議内容を先取りしておくと、論点は UHB の時と大きく変わらず、男性同性愛者を過度に性的な存在として捉えていることを中心的な批判としている。両者の抗議活動の間に大きな差異はないが、類似する表象と批判が繰り返されていたことを示すために、STV への抗議活動についても紹介をする。

(33)　UHB との話し合いで用いられた資料からの引用。

STV（札幌テレビ放送）の会員制ラジオ番組「うまいっしょクラブ」における「モーホーの見分け方」というコーナーに対して、札幌ミーティングは抗議活動を行った。「うまいっしょクラブ」とは主に中高生をターゲットとしたラジオ番組であり、月曜日から金曜日の23時から15分間放送されていた（『北海道新聞』1995.6.20）。「モーホーの見分け方」はリスナーからの手紙を紹介する不定期のコーナーであり、問題が発覚するまで一年半ほど続いていた（『北海道新聞』1995.6.20）。リスナーから送られてきた「モーホーの見分け方」をパーソナリティーが茶化すという内容であったが、1995年の4月から5月にかけて札幌ミーティングの一部のメンバーがこのコーナーとその差別的内容を知り、メンバーでの会議を経て抗議活動へと踏み切った。「ゲイという得体の知れない、架空の生き物を弄び、徹底的にお笑いネタにするという下劣きわまりない番組」（NL1995/8:3）とメンバーによって批判されている。カセットテープに録音された当時の放送内容を確認すると、「見分け方」として以下のような投稿が読み上げられている（放送日不明）[34]。

> 尿検査のとき、尿を持ってくるのを忘れた野郎は、「俺、昨夜、今朝、行為しちゃったんだよなあ」、なーんとか言ってみんなの顰蹙を買うが、尿を忘れたモーホーの場合は、「俺、生理中だから」と言ってごまかし、そばにいた人すべてを金縛りに陥れる。
>
> 古本屋で買ったひとりエッチのオカズに、男ものと思われるシミがあったら、普通の男性は…をなくすが、モーホーは逆に燃える。
>
> モーホーは、学級委員・学級の役員を決めるときに、必ず風紀委員になり、身だしなみ検査の時などは、没収した違反ズボンをこっそり持ち出して、家に帰り、匂いを嗅いで燃える。不良が好きな人は超ラッキー！
>
> モーホーは、自分でウォシュレットを使うとき、そのウォシュレットの水圧調節のメモリに、自分なりの印をつける。例えば、そんなに水圧が強くない、レベル１、あん。レベル２、あんあん。レベル３、あんあん、あ〜ん。最高レベル、あ、あ〜〜ん！イク！
>
> モーホーは、美術の時間に先生が、「今日は自分の好きな動物の絵を描いてください」というと真っ先に、亀の絵を描き、その絵が異常に上手かったりする。
>
> モーホーは男友達数人と泊りがけで旅行に行く計画が持ち上がると、進んで幹事役を引き受け、わざと人数分より一部屋少ない旅館を調べ上げて予約し、当日自分の不手際を、仲間に反省するふりをしながら、湧き上がる鼓動を抑えつつ、お気に入りの男性と「いや、部屋が少ないから」と言い、同じ部屋に入れてもらい、そのまま興奮のあまり眠れぬ夜を過ごし、最後には理性の鎖を断ち切って友を襲う。

(34)　波ダッシュや感嘆符は、読み上げられ方をもとに引用者が補ったもの。〔 〕内は音声が切れている箇所、あるいは発話が途切れている箇所で、引用者が補った。三点ダッシュは聞き取り不明の箇所。

食堂などで働くモーホーは、「お兄さん、ツケにしておいて」という言葉でドキッとしてしまう。

モーホーは、修学旅行で女湯を覗いている奴に向かって、「そんなのより俺のを見ろよ」〔と言う。〕

修学旅行中のモーホーの見分け方。モーホーは、修学旅行中、旅館などに備えてある石鹸やシャンプーを使う。特に石鹸は喜ぶ。

〔モーホーは、〕男性の、まあマスコミによく出ている有名人などに会った時に、「握手してください」と言わず、「手を握ってもらえますか」という表現を使う。

モーホーは、プールのトイレに行って、ぬるぬるしたスリッパを履いて感じる。

遠足や修学旅行などに関してのホームルームで「先生、バナナはおやつに入るんですかー？」という質問をするのは、まあネタにもならない普通の奴。その時に、「先生、花田君はおやつにしてもいいですか？ダメなら田辺君でもいいですか？」と聞くのはモーホー。

登山家で暇なシュンイチは、山の本を買ってきて、「関東にはどんな山があるのかなあ」と、関東のページを開いてじーっと見ていると、栃木にある男体山で指が止まり、笑みを浮かべる。

先日、モーホーのＹ君が、ものすごくみみっちいことで腹を立てていたので、「お前は本当にケツの穴が小さい野郎だな」と言ってやったところ、モーホーの Ｙ 君は真っ赤な顔をして、「違うもん！ケツの穴、でかいもん！」と言っていました。

マゾのモーホーは、お気に入りの不良に喧嘩を売ってボコボコに殴られ、その晩、「喧嘩には負けたが勝負には勝ったも同然」と思いながら、燃える。しかも喧嘩の時に、不良のチャンポコに触ることができたらダブルラッキー！

よく、焼肉屋さんなどでサービスしてますよねえ、店長が普通の人なら「女性は千円で食べ放題」。もちろん女性だからという理由もあるけども、モーホーの集う店ではこう書いてあります。「男性、千円で食べ放題」。

ケツを掘られ続けていると、肛門の周りだけ異常に毛が濃くなる。私はこの現象を、肛門高慢化現象と呼んでいる。

以上の「見分け方」に対して札幌ミーティングは、「ひとつひとつの『見分け方』は、ゲイというシンボルに絡みつくセックスモンスターイメージを根拠なく膨らませ」る（NL1995/8:3）と批判しているように、ここでもゲイとセックスが過剰に結びつけられることが問題とされていた。STV へ話し合いの申し込みをしたり質問状を送付しても真っ当な回答が返ってこず、抗議が難航していた。1995 年 7 月 11 日の放送では「うまいっしょクラブ」の中でパーソナリティーによって、「同性愛者の友人がいる『ある異性愛者』からの投書を紹介するという形で〔札幌〕ミーティングからの抗議にも触れ」、「第一にコーナー名の付け方に『配慮を欠いており、反省する』ということ、第二に『差別に苦しんでいる皆さんに、結果として精神的苦痛を与えていたとすれば、大変申し訳ない』」という 2 点について謝罪が行われた（NL1995/8:5）。しかしこの遠回しな謝罪に札幌ミーティングは納得せず抗議を続行し、1995 年 8 月 11 日の午前と午後には STV 本社前と札幌駅前で抗議のための 1000 枚のビラ撒きを行い、午前には STV 社屋前にて、話し合いに応じることを要求するためのシュプレヒコールも行った（NL1995/9:3）。最終的には、1995 年 12 月 2 日に STV から送られてきた回答書をもって抗議活動は終結している。

4−3　性的イメージへの抵抗

以上、札幌ミーティングが「気がつけばホモ」と「モーホーの見分け方」のコーナーに見出した問題点について見てきたが、まず彼らの批判点を（主に「気がつけばホモ」への抗議内容から）細かく三点取り出すことができる。ひとつは、同性愛には「度合い」なるものはないという点である。つまり、同性愛者を明確に縁取られた集団として捉え、同性愛という性的指向を本質化しようとする側面を読み取ることができる。二つ目は、ゲイ男性が集う場の安全性が脅かされたことへの批判である。ハッテン場やゲイ男性向け書籍を揃える書店が場所のわかる形で放送されたことによって、「ホモ狩り」などが生じる危険性を危惧したのである。そして三つ目は、同性愛者が置かれている社会的背景についての説明がないという点である。同性愛者側の語りや思いなどは番組内では一切取り上げられず、製作者側（異性愛者側）による一方的なステレオタイプのみによって番組が構成され、同性愛者を異常者のように扱っていることに対して批判が投げかけられていた。

こうした批判がされていたが、全体に共通するものとして、一点目に、同性愛をセックスとのみ過剰に結びつけるイメージへの批判があった。「気がつけばホモ」でも「モーホーの見分け方」でも、性的側面を強調した男性同性愛の取り上げ方、つまり男性同性愛者の生活は常に性的な行為・欲望によって支配されているというようなイメージについて抗議をしていたのである。「気がつけばホモ」に関して、1 月 31 日に札幌ミーティングが UHB に送った最初の質問状でも、番組全体の特徴を、「今回の貴番組は、同性愛を恰も『趣味の一種』のごとく扱って、性的な部分をことさら強調した内容になっておりました」（NL1994/5:7）とまとめている。また 11 月に札幌ミーティングが UHB の番組制作の手伝いを行った時のことを振り返り、次のように語るものもある。

> 11/18 放送の通常枠の『ポテト』ゲイ・ブーム特集に札幌ミーティングが協力した折、その制作段階で私は担当ディレクターのＩ氏には同性愛者の存在の何たるかを可能な限り説明したはずだ。同性愛はたんなるセックスにおける趣味嗜好というレベルのものではなく、ひとつのライフ・スタイルであるということ。（NL1994/3:13）

また長い交渉と議論の結果、UHB から送られてきた謝罪文には、「視聴者へインパクトを与えようとするあまり、性的な面が強調されていたこと等を含め、同性愛者の問題はマイノリティの人権の問題であることを再認識し、今後の番組制作に反映していきたいと思います」（NL1994/12:3）と記されているように、札幌ミーティングは同性愛がセックスの問題ではなく「ライフ・スタイル」の問題であることを主張し、UHB 側にもこの点において謝罪を求めていたのであった。ゲイ男性を過剰に性的なものとして捉える認識は現在でも存在しており、1990 年代に特有のものではない。しかし、ゲイリブの隆盛期に行われた抗議活動がこの認識に対する抗議活動を特に積極的に行っていたという事実は重要な点であろう。

この傾向は第 2 節で見たように、ゲイ男性が「ゲイ」としてのアイデンティティを選択し、「ホモ」から自らを遠ざけようとしていた姿勢ともパラレルに動いていた。第 2 節の議論を振り返ると、ゲイ男性は、セックスや「夜」などのイメージによって脚色される「ホモ」から自らを遠ざけ、「ゲイ」を全人格的なアイデンティティであり、ライフスタイルであると主張していた。「ホモ」はゲイリブに批判的なゲイ男性を指し示す言葉でもあり、クローゼット志向を意味していた。しかし本節の抗議活動を見てもわかるように、「ホモ」というのはゲイリブを批判するゲイ男性のみを指すだけではなく、メディアにおいて性的に過剰な意味づけをされた男性同性愛者を意味するものでもあった。つまり、札幌ミーティングのゲイ男性が「ホモ」から自らを遠ざけたいと志向するその背景には、ゲイリブを批判するゲイ男性への抵抗と、一般メディアにおける表象への批判という二つの動機があり、その二つの相互作用によって「ホモ」からの忌避を増幅させていたと言える。別の言い方をすると、メディアにおいてセックスと過剰に結びつけられる「ホモ」を否定することが、ゲイリブを批判するクローゼット志向のゲイ男性への抵抗と重なり合うことで、両者への抗議／抵抗の強さが増幅されていたのだ。

4−4 「からかい」への抵抗

UHB と STV への抗議活動のもうひとつの共通点は、「からかい」への抵抗である。江原由美子（1985）は「からかいの政治学」で、週刊誌などでフェミニズム運動に浴びせられる「からかい」や「嘲笑」の構造について論じている。「からかい」には二つの特徴がある。ひとつはそれが「遊び」であることである。「からかい」は「遊び」であり「冗談」であるため、からかう側も、からかいを向けられた人も、第三者も、それを真面目に受け取ってはいけない。もしそれを真面目に受け取ったなら、「遊び」のルール違反になる。二つ目は、それが「匿名的・普遍的・自明的」であることである。「からかい」の内容は伝聞や自明の事実のように語られるため、発言主体があいまいになり、発言責任から逃れることができる。発言者の思想・意図・意思からは切り離される。

UHB と STV いずれの放送内容も、まさに「からかい」の構造をなぞるものであった。この二つの抗議活動の特徴は、放送内容が差別であることをテレビ局に認めさせようと奮闘していたことにあるが、しかし両者は（最終的には謝罪したものの）放送内容を差別的なものであるとは認めようとしなかった。なぜならば、第一に、放送内容は「遊び」でしかなかったからである。〈同性愛者は異常だ〉、〈同性愛者は自然に反する〉などのあからさまな非難がされるわけではなく、男性同性愛をテレビの「ネタ」のひとつとして扱い、コメンテーターやリポーターはそれを「笑う」のである。

ハッテン場といった〈禁断の世界〉を覗き見したり、「性」に脚色された「ホモセクシュアル度チェック」や「モーホーの見分け方」によって、男性同性愛を「下ネタ」のひとつとして扱うのだ。STV に送られた抗議書への回答には、「このコーナーはもともとギャグのコーナーであり、差別を意識したり助長することを目的にしたものではありませんでした」(NL1996/1:12) と記されており、「ギャグのコーナー」であるという〈言い訳〉が用いられていることは、まさに放送内容を「真面目」に受けとることを拒否する姿勢である。そしてこれが「遊び」である限りにおいて、差別の意図を不問にすることができるのである。

放送内容が「からかい」と言える第二の理由は、放送内容はテレビ局の意見ではなく、その時の社会状況を紹介したにすぎないため、その内容は普遍的なものであり、発言主体はテレビ局ではないとされるためである。UHB の放送に対して札幌ミーティングは幾度も抗議の手紙を送付しており、1 回目はすでに取り上げた、放送内容を 5 つの問題点にまとめ回答を要求した手紙、2 回目は、それに対して満足な回答が得られなかったために再度回答を要求した手紙である。この両者に対する返信には、ほぼ同様の内容が記されていた。

> 昨年はテレビドラマや映画で同性愛が数多く取り上げられ、大きな話題を呼びました。番組は、こうした現象を紹介し、同性愛が決して異常なものではなく価値観の相違によるものであること、そのことを互いに認め合うことが必要ではないかという視点から取材、放送したものです。／同性愛者を差別したり、蔑視するものでは決してないことをご理解下さい。
>
> (NL1994/5:7, 1 回目の抗議書への返信)

> 番組の基本コンセプトは御覧いただいて理解いただけるとおり、人間の愛は異性愛、同性愛ともに何等変わるものではなく、普遍的なものであり、同性愛についてもすべての人間がもっている感情であり特殊なものではないとの考えに基づいています。このことが昨年は、ドラマなどの素材として取り上げられたように、社会の問題となったことをテーマに放送したものです。 (NL1994/8:5, 2 回目の抗議書への返信)

この回答では執拗に、同性愛が社会で話題となっていたことと放送内容を結びつけようとする姿勢が見て取れる。つまり、放送内容は〈人々が言っていることを紹介しただけ〉であり、その根本的な発言主体はテレビ局にはないと言おうとしているのである。またこの回答のもうひとつの特徴は、〈同性愛は異常ではない〉と、ことさらに強調していることである。確かに放送内で〈同性愛は異常である〉とは言われていないが、明らかに「遊び」であり「笑い」の「ネタ」としか捉えることのできない放送内容であったにもかかわらず、〈同性愛は異常ではない〉という考えが番組のコンセプトであったというのは飛躍しすぎている。しかしこのような飛躍が可能となるのは、放送内容が「遊び」でしかなく、そこに具体的な「意図」は存在していないため、具体的な回答を要求された際には、意図を捏造することが可能となるからである。

STV 問題に関しては、「モーホーの見分け方」のコーナーの構成自体が発言責任を逃れるために役立っていた。なぜならば、それぞれの「モーホーの見分け方」は中高生からの投稿であるという点で伝聞であり、STV の発言ではない。そしてその発言主体が中高生という「子ども」による発言で

あるために、それはより「遊び」の範疇のものであり、真面目に取り立てるに値しないためである。

以上のように、UHB も STV も「からかい」の構造によって、差別の意図と発言責任から逃れていたのである。法律などによる同性愛者への明確な差別やあからさまなヘイトスピーチが比較的希薄な社会では、多くの「差別」が「からかい」の形を取りやすいと思われる。そのため札幌ミーティングでは、〈差別の意図の不在〉＝〈差別の不在〉という状況に立ち向かい、「差別」の問題を言説化・社会問題化することに奮闘していたのだ。

本節では、札幌ミーティングによって行われてきたローカルメディアへの抗議活動を取り上げ、メディアによる「差別的」表象、その表象に対して札幌ミーティングが問題視していた点、そしてその「差別」の構造について論じた。UHB と STV の放送内容は共にゲイ男性を過度に性的なステレオタイプで捉えるものであり、札幌ミーティングはそこを最大の問題点としていた。しかし放送内容は「からかい」の構造に囚われていたため、放送内容を差別であると認めさせることが非常に困難でもあった。このような対外的な抗議活動では、性的イメージへの抵抗と〈差別なき社会〉への抵抗を行うことによって、差別の存在を可視化し、被差別者としてゲイ男性が置かれている状況を社会に提示しようと努めていた。これはのちに見る、対内的活動としての「ゲイナイト」とは対極的な表象である。

本節で取り上げたのは、札幌ミーティングの中の活動でも「真面目」な対外的活動と言えるものであり、政治性を伴った「ゲイ／リブガマ」のラディカルさによって可能となっていたと言える。しかしこうしたアイデンティティは初めから多くのゲイ男性が持つものでは無い。札幌ミーティングのゲイ男性は「ホモ」ではなく「ゲイ／リブガマ」としてのアイデンティティを形成しようと努めていたが、それは「ホモ」から「ゲイ／リブガマ」に意図的になることによる〈成長〉であった。ではそれはどのように行われていたのだろうか。次節で見ていくように、この〈成長〉は対内的活動によって行われていたのである。

５．対内的活動 —— ゲイ男性の取り込みと「ゲイ」への誘導

本節ではゲイ男性当事者をターゲットに行われてきた対内的活動の分析へと移る。対内的活動は「内」が意味する対象者によって二つに大別することができる。ひとつは札幌ミーティングの中で行われていた普段の活動であり、主にメンバーを対象とした活動である。もうひとつは、札幌ミーティングのメンバーではない一般のゲイ男性に対して行っていた活動である。前者の例としては、月に数回開催されてきた普段の定例会がもっとも日常的な活動であろう。また後ほど詳細に論じるブランチ活動もここに当てはまる。初期の札幌ミーティングでは他地域のグループとの交流やネットワーク作りを目的とした合宿も開催してきたが、これもメンバーを対象とした活動と考えて良いだろう。

後者の例としては電話相談がある(35)。札幌ミーティングでは週末などの限られた時間ではあった

(35)　札幌ミーティングが行っていた性教育プロジェクトと電話相談については関口久志（2007a）による紹介記事

が、HIV/AIDS について、同性愛者としての悩みなどについての相談を受け付ける電話相談を行っていた。またのちに考察するゲイナイトの開催も、札幌ミーティングのメンバーではない一般のゲイ男性をターゲットとしたイベントであった。もちろんこの二つは必ずしも明確に分離することはできず、多くの活動はこの二つの対象者にまたがって行われていた。

新しいコミュニティとしての札幌ミーティングには、継続的であれ非継続的であれ、多くのゲイ男性が参加しにやってきた。第2節でも見たように、札幌ミーティングのメンバーが求めるアイデンティティは「ゲイ」や「リブガマ」であるため、「ホモ」の参加は歓迎されないように思われる。だが実際はそこから「ホモ」を排除するというよりは「ホモ」を積極的に呼び入れ、「ゲイ」・「リブガマ」といったアイデンティティを形成することを期待していた。例えば、「大半のゲイはまだノンケに対してほんとうの自分を出せないでいたり、仲間であるはずの僕たちに対してでも心を開いてくれない事さえある」(NL1999/6:6) といった嘆きは、「ホモ」を排除したい欲求というよりは、「ホモ」と交流をしたいという欲求と捉える方が妥当である。では、メンバーを対象とした活動と一般のゲイ男性を対象とした活動は、いかに「ゲイ」としてのアイデンティティを形成しようとしていたのか。

本節ではまず初めに札幌ミーティングの組織形態であった「ブランチ制度」について論じ、それによって種々の活動が行われていたことを示す。次にその中でも特に「ジュニアブランチ」は参加者を「ゲイ／リブガマ」へと導く活動としての位置付けが強かったことを示す。そしてもうひとつ特筆する活動として、彼らが「ゲイナイト」を開催していたことに注目し、それが一般のゲイ男性と社会運動との接点となっていたことを示していく。

5−1　ブランチ制度による集合的アイデンティティの維持

札幌ミーティングには「ブランチ制度」が存在していた。ブランチとは、会員各自の興味関心にもとづいて特定の活動テーマを設定した下位組織であり、一言で表現するならば、「やりたい人だけでやりたい活動をするための制度」(NL1994/1:20) である。その設置と廃止は総会あるいは運営会議の承認によって行われており、札幌ミーティングの重要な組織形態であった。活動の頻度・内容、継続期間、メンバー数は非常にばらつきがあるが、多くのブランチが結成されてきた。ニュースレターなどの資料において確認できるだけでも、22 のブランチが存在していた (表 3-4)。実際にはブランチの設置には運営委員会の承認が必要であったものの、運営委員会で却下されたブランチは存在しないのではないかと思われるほど多種多様なブランチの記録が残っている。1990 年代末になると、「ブランチ制も曲がり角」(NL1998/3:28) と言われるようになり、その活動も下火になっていった様子が窺えるため、ブランチがもっとも活発であったのは 1990 年代半ばであると思われるが、この活動から当時のゲイリブが志向していた活動や思想を知ることができる。

ブランチ制度については、札幌ミーティングの「問題」を取り上げた記事で詳しく紹介されている。その記事では、メンバー間にさまざまな差異があることから生じるひとつの団体としてまとまって活動をすることの困難が、ブランチ制度の存在によって解決されていると語られる。その記事によると、「札幌ミーティングの誕生以来、ミーティング内に全員一致の運営方針が存在したことは

を参照。

表 3-4　札幌ミーティングに設置されていたブランチ（設置順）

ブランチ名	活動期間	活動概要
ジュニアブランチ	1991/8-1997/12	新しい参加者がゲイリブについて学ぶために設置されたブランチ。月数回の定例会で種々のテーマで交流をしたり、文集を作成したりしていた。
札幌発「中島みゆき」私設ファンクラブ	1991/9-1995/7?	別名「ブランチ B」。主な活動はニュースレターへの中島みゆきに関する記事の寄稿。
プロテストブランチ	1991/12-1995/7?	マスメディアなどに対する抗議活動を行うためのブランチ。差別的表現を行ったメディアに対して抗議の手紙を送るなどしていた。
エイズ救済プロジェクト	1992/1-1999/12?	HIV/AIDS に関する問題に取り組むブランチ。エイズに関する記事をニュースレターに寄稿したり、エイズの電話相談を行ったりしていた。
レズビアンブランチ［→ウィメンズブランチ］	1992/5-1997/11	レズビアン・バイセクシュアル女性によるブランチ。月数回の定例会で勉強会やコンシャス・レイジングを行ったり、レズビアン・バイセクシュアル女性向けのイベントを企画したりしていた。
ブランチ J	1993/9-1997/11?	女装愛好家のためのブランチ。ニュースレターに活動記録はないため、具体的な活動は不明。
カトレア会	1993/9-1997/11?	映画愛好家のためのブランチ。札幌にあるミニシアター「シアターキノ」で映画祭を開催したり、メンバーの家で映画上映会を行ったりしていた。
ブランチフェチ	1993/?-1995/7?	活動報告はニュースレターにないため、具体的な活動については不明。活動していないとの記述もある。
パーティーブランチ	1994?-1995/7	パーティーなどのイベントを企画するブランチ。「Gay Lesbian BBQ Party」やお花見を企画したりしていた。(ブランチ名は仮称とも記されている)
劇団ブランチ	1994?-????	ミュージカルが趣味のメンバーによって設立されたブランチ。具体的な活動は不明だが、ボイスレター「Go Plain! Vol.2」でラジオドラマの担当をしている。
LR ブランチ	1995/4-????	高校生&18 歳までの社会人向けのブランチ。内容はジュニアブランチと類似するものであったと思われる。15 名ほどで活動をしていた。1997 年 9 月から 12 月は活動ができていないとの記述もある。
店員倶楽部	1995/3-1997/11?	休みが不規則で普段の活動にあまり参加ができない人が集まって活動をするブランチ。主に社会人が中心。1996 年末の段階ではメンバーが二人との記述もある。
スポーツブランチ	1995/7-1997/11?	スポーツに関するイベントを企画するブランチ。ボウリング大会を企画するなどしていた。
翻訳プロジェクト	1996/3-1997/11?	海外のゲイ雑誌の記事などを翻訳してニュースレターに掲載することが主な活動（1995 年 10 月号から「翻訳チーム」としてメンバーの募集が行われていた）。
クッキングブランチ	1996/1-1998/??	料理を通して交流を行うことを目的とするブランチであると思われる。ちらし寿司やイタリア料理を作ったとの記述がある。1997 年は 1 回しか活動できなかったという記述もある。
ウェルカムブランチ［→コミュニケーションブランチ→オムニバスラウンジ 21］	1996/8-????	ジュニアブランチに入る前段階として発足したブランチ。ジュニアブランチが難しいと感じる人向けだが、具体的な活動はジュニアブランチと類似していた様子が窺える。例会の参加者は 10-20 人ほど。ゲイが多いとの報告もある。「オムニバスラウンジ 21」へとなってからは、「雪まつりフォーラムの小さい版のような感じ」の活動となった。
まったりブランチ	????-????	詳細不明。
ブランチ・いこい	1997/5-1999/12?	「がんばらない、無理しない、仕事は作らない。やりたい人が何かしても、やらない人を責めたりしない」がコンセプトの「能天気ブランチ」。定期的に集まり自由に交流をしていたと思われる。

親の会	1999/8-	セクシュアルマイノリティの子を持つ親のサポートなどを目的とするブランチ。2000 年 10 月に通常のニュースレターとは別に「親の会通信」という冊子を発行し、2002 年までの間に計 6 号ほど発行していた。
レズビアン・スタディ・プロジェクト	2000/2?-????	レズビアンについて勉強をし、レズビアンアイデンティティの形成を目的とするブランチ。レズビアンであることを参加条件として、「徹底的にレズビアンにこだわった会にしていきたい」と発足時に語られている。しかし参加者が少なく、あまり活動が出来ていなかった模様。
TGIS ブランチ	2000/11-????	トランスジェンダー(transgender)、インターセックス(intersex)に関する問題に取り組むブランチ。
海洋冒険クラブ	2000?-????	詳細不明。

※各ブランチの設置時期・活動休止時期は明確に記録されていないものが多い。その時期が不確かであったり曖昧なものには「?」を付してある。[ ] 内はブランチ設置以降に行われた改称。資料からブランチの存在だけは確認できるが活動内容の記録が一切ないものは活動内容を「詳細不明」としてある。

ない。札幌ミーティングの構成要員には、ゲイであること以外のアイデンティティはないのである」(NL1994/1:20)。札幌ミーティングは共通の目的を持った人によって結成された団体というよりは、ゲイであるという共通点をもとに結成してから、その目的を模索するという過程を辿っていた(36)。こうしてゲイというアイデンティティのみによって結成された団体であるがために、全員の意思を最大限反映させた活動をすることの困難が語られる。個人によって問題関心も興味関心も異なるため、「現在の札幌ミーティングは、各自の立場を尊重しあう結果、求心力を失い、やりたいことがあってグループ全体で何かしようとしても意見が収束せず発散してしまうという問題を抱えている」(NL1994/1:22)。

この記事は次のように続く。「実は、ブランチ制度は、今まで述べてきたような問題を回避する知恵として誕生した」(NL1994/1:22)のであり、「やりたい人だけでやりたい活動をする」(NL1994/1:20)ための制度なのである。つまり、共通のアイデンティティのカテゴリーで集団を形成しながらも、その中で共通の興味関心を持ったメンバー同士が小集団を形成することができるようにすることで、その集団性を保っていたのだ。各自がやりたいことをやりながらも、団体としては札幌ミーティングが掲げる目的のもとで活動をしている(その目的に必ずしも全員が同意する訳ではないものの)という事実を共有することで、メンバー間の分裂を最小限に抑えようとしていたのである。

しかしブランチは大学のサークルのように、入りたい人は入り、入りたくない人は入らないといった個人の自由選択に委ねられていたのではない。1992 年 6 月 28 日に制定された会則で、一般会員の責務として、「ブランチに所属し、その活動に参加すること」とある (NL1992/7:2)。札幌ミーティングは会費制を採用していたので、札幌ミーティングの会員と非会員の間には明確な境界線があり、会員は会則にしたがって行動することが求められることになる。こうして札幌ミーティングはブランチ活動をメンバーの義務とすることによって、各自の興味関心によって小集団を形成しながらも、各自が札幌ミーティングのメンバーであることを自覚させる仕組みを作っていた。ブランチ制度の機能は、団体として共に行動することというよりは、やりたい活動や目的の異なるメンバー各自の意思を尊重し、各自での活動と差異を認めながらメンバーを緩やかに統合することであっ

(36) 上の語りではレズビアンなど他のセクシュアルマイノリティのメンバーの存在が排除されてしまっているが、ゲイ男性が主なメンバーであったという、結成初期の認識をそのまま扱っている。

たと言うことができる。「甘い汁」を吸いながらも、同時にそれを作り出すことがブランチ制度によって促されていたとも言える。

5-2　ジュニアブランチによる「ゲイ」アイデンティティの形成

表 3-4 にあるように札幌ミーティング内にはいくつものブランチが存在してきたが、その中のひとつのジュニアブランチはその他のブランチとは異なる位置付けがされていた。ジュニアブランチは 1991 年 8 月に設立されており、最初に設置されたブランチでもあった。ニュースレターとは別に独自に『ジュニアブランチ文集』を発行したこともあった点は、活動の活発さを表している。その他のブランチに関しては、各自が興味のあるものを選択して参加する形態であった一方で、「初めてミーティングに来た人には、ほとんどの場合ジュニアブランチに入っていただいている」（NL1994/3:3）と言われるように、ジュニアブランチは新しい参加者がまず初めに参加することを求められるブランチであったのである(37)。

ジュニアブランチの役割を一言で表すのであれば、札幌ミーティングへの新参者が政治的なアイデンティティを形成するのを促すことであった。つまりジュニアブランチは、一般のゲイ男性を社会運動に引き入れるためのブランチであり、新たに札幌ミーティングに参加したメンバーの「ゲイ」アイデンティティの形成を促すシステムが札幌ミーティング内に存在していたのだ。次の語りは、ジュニアブランチの設立意図について説明するものである。

> ジュニアブランチだけは、その誕生のいきさつが他のブランチとは大きく異なっていることに触れておかなければならない。(…) 入会してしばらくの間、ミーティングでは何が出来るのか、とか、自分はどういうことをミーティングの活動としてしていきたいのか、とかを、何らかの活動に参加しながら自ら感じ取(ママ)れるような受け皿として、ミーティングの運営上の都合から設置したのがジュニアブランチなのである。(…)「ジュニアブランチ」との命名からは誤解を招きやすいが、札幌ミーティングのジュニアブランチは、ユースのためのブランチというよりは、札幌ミーティングあるいはゲイ・ムーブメントなどについての「ジュニア」が、ゲイ・グループ活動について理解するまでの期間を有意義に過ごすための場を提供することを目的として設置されたブランチであったのである。　　(NL1994/3:3)

上の語りを簡単にまとめると、ジュニアブランチとは、「ゲイ・ムーブメント」への新参者が、札幌ミーティングの目的を理解し、自分がやりたい具体的な活動を見出すための踏み台となるブランチであった。また、明確な目的を持たずに札幌ミーティングに参加した人たちが、ゲイ・ムーブメントについて学び、自分がやりたい活動を模索する場所にもなっていた。例えば、自分の知らない世界を覗き見してみたかったという理由から札幌ミーティング(ジュニアブランチ)に参加したが、参加する回数を重ねるたびに、ゲイリブの必要性を学んでいったという語りがある(『ジュニアブランチ文集 1994』14 頁)。

---

(37)　ジュニアブランチのメンバー数には移り変わりがあるだろうが、詳細な推移はわからない。1993 年初期にはメンバー数が 2 桁に突入したとの記述があり（NL1993/2:8)、また 1994 年半ばの時点でのメンバー数は 20 名強との記述がある（NL1994/8:10)。

ジュニアブランチは設立された当初からその目的を十分に果たしていたわけではないことは、メンバーによって語られている。例えば札幌ミーティングの当時の事務局長は、ジュニアブランチは設置（1991 年 8 月）から 2 年半の間、「その役割をほとんど果たすことなく（…）単なるお遊び企画部隊に過ぎなかった」（『ジュニアブランチ文集 1994』20 頁）と回顧している。札幌ミーティングの初の総会で出されたジュニアブランチの性格も、「まず、コミュニケーションの場であって、具体的にどうミーティングの活動に関わっていいかわからない人が、気軽に集える場所」（NL1992/7:6）とされている。実際にニュースレターで確認できる初期の活動も、花火大会、花見大会、温泉リゾート地へのツアー、クリスマスパーティなどの企画であり、「遊び」としての傾向の強さが窺える。

だが 1994 年頃から、ただ楽しく交流するだけの「遊び」を第一の目的とすることを否定する語りが登場し始める。例えば、交流することの大切さを認めながらも、「必要以上に『きばる』ことはないんだけれど、出逢いとアソビばかりを求めるばかりで、この〔「同性愛者として生きていける社会の実現に努める」という〕目標に沿った活動ができなければジュニア・ブランチの活動は前進できなくなってしまう」（NL1994/10:15）と言われたり、1994 年のジュニアブランチの活動報告で、「みんなの共通の意見は、一方的に何かを提供してもらう“お客さん”からの脱皮を図り、自分たち自身よりパワフルなジュニアを創っていこうということでした」（NL1995/2:7）と言われたりするように、楽しく交流するだけの「遊び」ではない「真面目」な活動を能動的に行うこと、そうした活動ができる人物を育てることを目標とするように変わっていった。またジュニブランチには所属していないと思われる他のメンバーから、ジュニアブランチは「リブガマ養成の『虎の穴』」（NL1995/2:6）と呼ばれるようになるのも 1994 年以降である。しかし「遊び」を一切許容しないということではない。「近年ジュニアブランチはお遊び部隊の色を抜きました。別にお遊びがいけないというのではないんです。ただジュニアブランチは人と出会うこと自体が第一の目標ではない。そういうはっきりした方向性が生まれたということです。僕たちジュニアブランチはゲイリブ実践の場です」（NL1995/6:5）とも言われるように、「遊び」と「真面目」な活動のバランスの重要性が認識され始めているのだ。

では、ジュニアブランチでは「真面目」な活動として具体的にどのようなことが行われていたのだろうか。もっとも日常的な活動としては、月に 1-2 回程度、定例会を行っていた。そこでは種々のテーマを設定して交流が行われており、ジュニアブランチの中心的な活動であったと言えよう。例えば、「友達とネットワーク」、「恋愛」、「SEX について」、「カミングアウト」、「あなたならどう答えますか？」、「老いるということ」、「諸外国の同性愛関連法について」、「エイズ」、「恋人」、「エイズの基礎知識」、「あなたにとって同性愛であることの意味」といったテーマがニュースレターから確認できる。あるメンバーがジュニアブランチの趣旨を、「若い Gay の人で、1 人で悩んだりするしか知らない人等にたいして、自分のほかにも自分と同じような人はたくさんいて、別に Gay であることを重荷に感じる必要はなくって、人目を気にせず、自然体でいられる場、空間を設けること」（『ジュニアブランチ文集 1994』6 頁）とする語りは、ジュニアブランチを交流を通して自身をさらけ出すことのできる空間としようとしていたことの表れである(38)。しかし定例会のテーマを見てみ

(38)　次の語りも同様のものである。「オレはホモとかゲイとか呼び方にはこだわらない。差別をなくせ！って強く主張する気もない。ただ、ゲイであるという自分の誇りは大切にしたいと思っている。みんなもゲイである自分を受け入れて、誇りをもって生きて行こう」（NL1993/2:9）。

ると、ただ交流をし「遊ぶ」だけの活動でなかったことがわかる。つまり、定例会は交流し「遊ぶ」ことによって自己肯定感を獲得することを促進していたのみならず、「真面目」な議題について話し合うことで、社会変革活動へと進んでいくための道筋も形成していたのである。

またジュニアブランチでは1994年末から1995年初頭までに「Go Plain!」というボイスレター（ニュースレターのカセットテープ版のようなもの）を二度（Vol.1とVol.2）作成していた(39)。札幌ミーティングのメンバーによる座談会、ラジオドラマ(40)、札幌ミーティングの紹介などによって構成されていた。その中のひとつに「街角突撃インタビュー」というコーナーがあり、その名の通り、札幌ミーティングのメンバーが街中の人に、同性愛についてどう思うか、友達がゲイやレズビアンだったらどうするか、自分の子どもがゲイやレズビアンだったらどうするか、といった質問で突撃インタビューを行うものであった。こうした活動もただの「遊び」ではなく、社会に働きかけていくための活動としても行われていた。

このようにジュニアブランチは単に「遊び」をする場ではなく「真面目」な活動をする場へと変容していった。確かに前節で見たような抗議活動を行っていたわけではないが、「真面目」な話題について学習をしたり、ボイスレターという独自の活動を行うことなどによって、社会変革を見据えた活動を行うようになっていったのだ。その中で、ゲイのメンバーが求める「ゲイ」や「リブガマ」としてのアイデンティティの形成が促進されたのち、さらに各種ブランチで各自の興味関心にあった活動をすることによって、そのアイデンティティを最良の形で表現できるようになっていたと言える。その後、1997年いっぱいでジュニアブランチは解散してしまうが（NL1998/1:5）、それと同様の役割を担うブランチとしてウェルカムブランチが誕生し、アイデンティティの形成を後押しする仕組みは維持されていた。

ウェルカムブランチは1996年8月に設置された。このブランチは、「初めてミーティングに来た人でも気軽に楽しく参加でき、GAYである自分を開放できる場として」（NL1996/12:7）設置されたと説明されるが、ジュニアブランチに入る前段階として発足したブランチでもあった(NL1999/12:4)。ウェルカムブランチの設置から数年経った1999年末に、設置当時の状況が以下のように回顧されている。

> 当時「ジュニアブランチ」っていう、まあ立派なリブガマ（…）を育てるブランチがあったんだけど、ミーティングに入ったばっかりの人たちから「ちょっと難しいな…」っていう意見があったのね。で、ジュニアブランチに入る前の段階の物として「ウエ(ママ)ルカムブランチ」が作られたのよ。（NL1999/12:4）

(39) 両方とも具体的な発行日は不明だが、Vol.1に収録されている「活動内容紹介」は1996年10月5日の定例会で録音されたことがボイスレター内で語られている。また1995年2月5日に発行された『ジュニアブランチ文集』にはVol.2が完成したことが記載されている。両方500円で販売されていた。Vol.3が作成予定であるとの記述もあったが（NL1995/2:10）、実際に作成されたかは不明。このボイスレターは、ゲイ・フロント関西が作っていたボイスレターを参考に作られたと言われている。

(40) 「Go Plain! Vol.1」に収録されているラジオドラマ「明日」は、第2節で論じた「ホモ」と「ゲイ」の二極化を描く作品であった。まだ「自分と同じ人」に会ったことのない主人公の男子高校生（と思われる人物）が「自分と同じ人」と出会う物語である。ゲイ雑誌の文通欄を通して初めて会った人は自分のことを「ホモ」と呼び、いわゆる「二重生活」を勧めてくるが、同じ学校の生徒会長の横田さんは自分のことを「ゲイ」と呼び、自分らしく生きるためにカミングアウトをし始めた人であった。

この語りからは、ジュニアブランチの活動が非常に活発さを増していたということを読み取ることができる。普段の定例会は新たな参加者の対応を目的のひとつにしていたが、そうした参加者がついていくのが難しいと感じてしまうほどに活発な議論が行われていたと考えられる。交流＝「お遊び」よりも「真面目」な活動にほとんどの比重が置かれるようになっていったことが、この語りからもわかる。ウェルカムブランチはのちに「コミュニケーションブランチ」へと改称されるが、その目的として、（1）「自分がレズビアンやゲイなどマイノリティーであることを受け入れて、それを楽しむことができるようになること」、（2）「ちょっとしたお勉強を通じて、自分のことや、周りのことにもっと関心を持ってもらうこと」（NL1999/12:13）の二つが挙げられている。前者は交流＝「遊び」を通して肯定的なアイデンティティを形成するための活動、後者は政治性を持って行動するためのアイデンティティを形成する活動を意味していると言い換えることができ、「遊び」と「真面目」な活動と類似する軸によって目的が特徴付けられていた。

こうして札幌ミーティングでは、一般のゲイ男性に肯定的かつ政治的な「ゲイ」としてのアイデンティティを形成させ、彼らを社会運動へと参画させるための模索がされていた。その中ではジュニアブランチが中心的な役割を担っており、一般のゲイ男性が「ゲイ」や「リブガマ」へと〈成長〉するための仕組みとなっていた。ジュニアブランチは「遊び」から「真面目」な活動に比重が移り、「ゲイ」や「リブガマ」というアイデンティティを形成するために、ただ出会いを求めたりコミュニケーションをすることを切り離していった。では一切の「遊び」が札幌ミーティングから排除されていったのかというと、そういうわけではなかった。例えばブランチを見てみても、パーティブランチ、スポーツブランチ、クッキングブランチといった、「遊び」の側面を強く感じさせるものが設置されて（団体としてその設置を認可して）おり、ウェルカムブランチ／コミュニケーションブランチといったコミュニケーションの場も常に設けられていた。「遊び」から距離を置きつつもそれが実際にはあり続けてきたという事実は矛盾しているが、この矛盾が存在していたのは、ただ楽しく交流する「遊び」も肯定的なアイデンティティの形成には大切であることをメンバーは知っていたのからなのだ。第3節で論じたように、甘い汁を吸い、生み出すことは札幌ミーティングの大切な役割のひとつであった。ゲイバーやハッテン場では築くことのできない関係性を築くことが、自己肯定の獲得には必要不可欠であることを知っていた。しかし、甘い汁を吸い、生み出すことだけで満足することは容認されなかった。つまり、彼らが否定しているのは、「遊び」だけを求めること、「遊び」しか生み出さないことであり、「遊び」自体の必要性は認めていた。それは必要不可欠な自己変革活動であり、「遊び」を生み出すことも「真面目」な活動のひとつであった。しかし、その「遊び」の段階を経由して、「真面目」な活動＝社会変革活動に取り組むことができるようになることが重要視されていたのである。

ここで重要となる活動に、ゲイナイトがある。ゲイナイトとはゲイやレズビアンをはじめとしたセクシュアルマイノリティをターゲットとするクラブイベントであり、その他の活動よりも多くのゲイ男性を一度に動員するイベントである。ジュニアブランチのメンバーによって企画されたのち、札幌ミーティング全体で主催されるようになった。ゲイナイトはクラブイベントであるため、ただ交流をして楽しむだけの「遊び」としての意味合いが強く感じられるが、しかし札幌ミーティングはこれを積極的に開催してきたのである。では札幌ミーティングのメンバー以外に向けられる側面

が強いゲイナイトを、いかなる意図と目的のもと開催してきたのであろうか。

5-3　ゲイリブとの接点としての「ゲイナイト」

札幌ミーティングでは、「ULTRA KMD NIGHT」と称されるゲイナイトを1994年12月17日から開催してきた（表3-5）[41]。半年から一年おきに開催しており、1999年11月20日までに計10回開催してきた[42]。また1990年代末からは札幌ミーティングのメンバーがゲイナイトを行う団体「Qwe're」を札幌ミーティングとは別に結成し、1997年8月の第1回から2000年までの間だけでも20回近くのゲイナイトを開催してきた。

「KMDナイトの主旨はゲイセレブレーション」（NL1996/11:9）と言われるように、ゲイナイトの一番の目的は、参加者がゲイであることを〈祝福〉し、ゲイであることを肯定的に捉えることができるようにする場を提供することにある。この点は、「自分らしく」生きることができ、「全人格的」な人間関係を築けるコミュニティとして札幌ミーティングが形成されてきたことと繋がっている。しかし一方で、ゲイナイトは彼らが否定していたゲイバーやハッテン場と類似する特徴も持っている。クラブイベントであるためにゲイナイトは夜に開催され、クラブという閉じた空間におけるクローゼット的なイベントである。そこではアルコールも提供され、そうした場に性的な出会いを求めにやって来る人も多くいることは容易に想像できる。さらには、第1回のゲイナイトの広告には、「バンダナでMOTIONかけかけ大作戦」と称されたシステムについて記載されており、「友達募集中の人→BLUE系のバンダナを身につけて下さい！」、「恋人・CRUISINGの人→PINK or RED系のバンダナを身につけて下さい！」、「気になる人がいても声をかけられない人はSTAFFがセッティングします」（NL1994/12:23）と、運営側が出会いの斡旋を積極的に行うことが明記されている。札幌ミーテ

表3-5　札幌ミーティングによって開催されたゲイナイト

開催年月日	イベント名	参加者（人）
1994年12月17日	Christmas GAY NITE '94　Go Plain!	106
1995年7月29日	GAY NITE '95　ULTRA KMD NIGHT	170
1995年11月18日	GAY NITE '95　闇鍋 ～BREAK＝SILENCE～	217
1996年6月29日	ULTRA KMD NIGHT '96　SILENCE=DEATH	350
1996年11月23日	ULTRA KMD NIGHT '96　OVER THE RAINBOW	430
1997年6月28日	ULTRA KMD NIGHT '97　SALAD BOWL	450
1997年11月29日	ULTRA KMD NIGHT '97　DANCE=LIFE	350
1998年11月28日	ULTRA KMD NITE '98　LOVE FACTORY	350
1999年6月19日	ULTRA KMD NITE '99　JUNE PRIDE	250
1999年11月20日	ULTRA KMD NITE '99　ANNIVERSARY	280

※「ナイト」は「NITE」と「NIGHT」のスペルで揺らぎのあるがあるが、この表では広告での表記に合わせている。

(41)　「KMDは札幌ミーティング内メンバーと、札幌ミーティング外からの強力助っ人を迎え、結成されたゲイナイト・プロジェクトチーム」（NL1995/9:17）との記述があるように、このゲイナイトは札幌ミーティングのメンバーのみによって企画されていたものではなく、外部の人らとの協力のもと開催されていた。

(42)　第10回で廃止された理由は、ゲイナイトの収入がなくとも札幌ミーティングには財政的に余裕があったこと、またゲイナイトの運営には一度に多くの人手を必要とすることであった（NL2000/10:14）。

ィングでは単なる出会いやセックスというものを排除しようとする志向があったにも関わらず、それとは相反するゲイナイトが開催されてきたのはなぜなのか。

まずゲイナイトが開催されるに至ったきっかけを見てみると、「札幌ミーティングのメンバー向け行事と対外的なイベントとくっつけて何かやろう！」というメンバーの意見がきっかけであったと語られている（NL1995/2:8）。ジュニアブランチでは毎年クリスマスパーティを開催していたが、それとは異なるイベントを模索している中で出てきた意見であった。ここで言われている「対外的」が意味するのは、異性愛者を含む社会一般ではなく、札幌ミーティングには参加していないゲイ男性当事者であることは、第1回ゲイナイトの広告で参加者が「LESBIAN & GAY ONLY」（NL1994/12:23）と表記されていることからもわかる。つまりゲイナイトは、札幌ミーティングに所属しないゲイ男性向けのイベントであり、札幌ミーティング（社会運動）と一般のゲイ男性との接点となるイベントとして企画されていたと言える。それではゲイナイトは具体的にどのような場になっていたのであろうか。第1回のゲイナイトについて回顧している次の対談は、その点について示唆的である。

S：それにしてもさ、LOGキャラバンのときは全然ハッテン場&飲み屋系の人は来なかったのに、今回凄かったねぇー来るわ来るわ「くらやみ乙女」（場内大爆笑）

K：がははー。やっぱり来やすいんだろーね。でも、今回のイベントを札幌ミーティング色を前面に出したらどーだったんだろーね？人来なかったんだろーか？きっと来なかったんだろーねこんなに。

S：アンタそれって「反語」ってやつ？自問自答ね。でもさ、いわゆる「享楽イベント」だったけど、セーファーセックスのパンフとコンドーム配って、最後におネェを使いながらも結構硬めの挨拶で閉めたから、ボチボチってとこじゃない。

（『ジュニアブランチ文集1994』30-31頁）

この語りからわかることのひとつは、他の比較的「真面目」なイベント（LOGキャラバン）[43]などには参加しなかった「ハッテン場&飲み屋系の人」、つまりゲイリブに批判的・無関心な人がゲイナイトには数多く参加したということである。折に触れて指摘してきたように、ゲイバーやハッテン場という従来のコミュニティは札幌ミーティングが距離を置いていたものでもあった。しかしそうした場に通うゲイ男性がゲイナイトに来たという事実が肯定的に語られていることからも、ゲイナイトはゲイリブの一形態であり、それに関心のないゲイ男性をゲイリブに触れさせられたことがここでの成果であったのだ。

二つ目は、ゲイナイトが「札幌ミーティング色」を押し出していたらそれらの参加者が来なかったであろうという認識、そしてゲイナイトが「享楽イベント」であったからこそ「ハッテン場&飲み屋系の人」が多く参加したという認識があることである。夜に開催されるクラブイベントであるゲイナイトはゲイバーやハッテン場と類似する性質を持っていると思われるが、札幌ミーティングによるゲイナイトではあえてそれらの特徴を押し出していたとも言える。先ほども触れたように札幌ミーティングが開催していたゲイナイトでは、友達、恋人、性的接触（クルージング）を求める

(43)　「LOGキャラバン」については序論の6頁を参照

人が相手を見つけることができるようなシステムが採用されていた。また確認できただけでも、ゲイナイトとは別に「KMD 合コン」も二度開催しており、第1回は1996年9月22日に「ハッピー・ゲイ・ライフ」というタイトルで（NL1996/9:13, BADI1996/10:406）、第2回は1997年2月9日に「ハッピーバレンタインスペシャル」というタイトルで（NL1996/11:5, BADI1997/3:393）開催していた(44)。つまりここからも、札幌ミーティングのゲイ男性が単に「ハッテン場&飲み屋系の人」を排除しようとしていたのではなく、「ハッテン場&飲み屋系の人」が求めるものを企画に取り込みつつ、いかにして「ゲイ」「リブガマ」「ゲイリブ」へ引き寄せるのかを模索していたことがわかる。

そして三つ目に、確かにゲイナイトは「享楽イベント」ではあるが、「セーファーセックスのパンフ〔レット〕とコンドーム〔を〕配っ」たりしていたように、そこにゲイリブ的な政治的要素を積極的に持ち込んでいたということである。以下の語りは、札幌ミーティングのゲイ男性が結成した「Qwe're」という団体が開催した「Hole」と呼ばれるゲイナイトについての語りであるが、ゲイナイトと社会運動の関係性をより明確に語っている。

> 僕は基本的にリブガマなのさ、だから、このイベント〔Hole〕を企画する時も必ずゲイリブ精神がかきたてられるのだよ。このイベントで何か、リブをいれたメッセージが送れないかと、客がこのイベントを通じて他のゲイカルチャーにも興味を持ってくれないだろうか？いつもこの事で頭を抱える。（…）このイベントでリブ的メッセージを送っている事と言えば、精々レインボーフラッグを飾る、ボランティアグループへの寄付、パレードの散らし(ママ)とコンドームを配る。そんな事しか出来ていない。しかし、今の時代ゲイナイトが若い世代の登竜門的な存在になってきていることだけは拒みきれない現実だ。こんな大切な時代にただ利益だけを追求する空間にはしたくない。それ以上に Hole という空間を利用しゲイとして楽しんでくれて、ゲイとしての自信を持って帰ってくれれば僕は大満足だ。うまく表現は出来ないが、ゲイセレブセーションの場として機能させて行きたい。（NL1998/7:12）

この語りでも、ゲイナイトがゲイリブの一種とされている。彼らはゲイナイトで、ゲイであることに関するメッセージを送ったりゲイであるというアイデンティティを自覚してもらうための働きかけをしながら、リブにゲイ男性を動員しようと模索していたのである。

各ゲイナイトのタイトルにも、ゲイナイトを通してメッセージを発信するという意図があらわれている。もっともわかりやすいのは、1995年11月の「GAY NITE '95　闇鍋 ～BREAK＝SILENCE～」であろう。アメリカのエイズアクティヴィズムで用いられていた「SILENCE=DEATH」（沈黙＝死）を彷彿させる標語がゲイナイトのタイトルとして用いられている。1997年6月のゲイナイトのテーマの「SALAD BOWL」も、さまざまな人種の人たちが共生することを表現する「人種のサラダボウル」をセクシュアルマイノリティにも当てはめたものと思われる。1999年6月の「ULTRA KMD NITE '99 JUNE PRIDE」については、「ちまたのおノンケ結婚シーズン到来で、身も心も財布もつかれきっているレズビアン・ゲイの皆様達にとって、6 月はそんな疲労を癒しあう意味ある月。自分自身のプラ

(44)　第1回には23名が参加し、8組のカップルが誕生（BADI1997/3:393）、第2回には22名が参加した（NL1996/11:5）。

イドをしっかりもち、『結婚なしでも充実してるわ、アタシ』と胸を張って生きる決心を固めるという大切な月でもあるのです」(NL1999/6:17) と、「プライド」を持って生きるというメッセージがタイトルと開催趣旨にあることが説明されている。

もちろんゲイナイト自体は札幌でのみ行われていたものではないし、この当時にはすでに東京や関西で多くのゲイナイトが開催されていた。札幌におけるゲイナイトは単にそれらを札幌でも開催しようとしたという意図もあるだろうが、ゲイナイトとゲイリブが積極的に結び付けられていた事実は、特筆すべきものである。そして両者の接続が可能であった背景には、札幌が東京ほどの大都市ではないという事実もあったと思われる。次の語りでは、札幌のゲイナイトであるからこそゲイリブとゲイナイトの接続が可能であることが語られている。

> 最近の札幌の状態を見るとゲイバーに最初にデビューするビギナーゲイが減ってきていて、ゲイナイトでデビューする子が増えている状況だ。僕達はこんぱ(ママ)状況を無視し続けていいのだろうか?ゲイとしてHAPPYに過ごしたい、過ごして行きたいと思い始めた子にとってゲイナイトとは…。東京ならまちがいなくカバーしきれないだろう。しかし、札幌ならそういう子をカバーしきれる能力を持っているんだ!そういう子をカバーできる規模なんだ!これは東京のゲイナイトには真似できないものだろう。何かメッセージを送ることも可能。友達を増やさせることも可能。もっと、もっと、ゲイとして楽しませるきっかけを作ることも可能なんだ。 (NL1999/3:13) (45)

東京などの地域におけるゲイナイトについてはこれまでに研究が行われていないため推測によるところが大きいが、東京のゲイナイトは大規模のため、主催者と参加者との距離が遠いと思われる。対して札幌では比較的小規模であるために、主催者が参加者に働きかけたり、メッセージを届けたりすることができた。少なくとも札幌のゲイナイトの主催者はそう認識しており、それがゲイナイトとゲイリブの接点としての特徴を際立たせたと言うことができるのだ。

ゲイナイトを通した働きかけを考えるにあたって、ゲイリブをめぐるイメージについての語りは重要になる。なぜなら、ゲイナイトは一見すると社会運動のイメージとは結びつきにくい、「遊び」や「楽しさ」というイメージを持っているからだ。例えば、ジュニブランチのメンバーがゲイナイトやゲイ・レズビアン映画祭について対談をした記事では、ゲイリブの「楽しさ」というイメージについて語られている。あるメンバーは、札幌ミーティングに参加する前、「ニュースレターを買って見てた頃(カクレだった頃)は、なんか静かに、難しい事を、みんなで考えているようなイメージがあった」と語るが、実際に参加してメンバーの活動を見ると(映画祭を運営しているメンバーの活動を見ると)、その活動が「楽しそうだった」と語っている(NL1995/6:8)。それに続けて別のメンバー二人は、「具体的にどうとかじゃなくて、『楽しい』って雰囲気が大切なのよね、リブをやるのには。」「楽しいっていうと、男探しとかのイメージだけど、あーゆー映画祭とかの雰囲気を見

(45) 類似する語りに、「企業ではなく、札幌ミーティング主催のパーティなので、東京や大阪のような商業ベースのナイトではできにくい、札幌ミーティングだからこそできるパーティーにしましょう。」「具体的には、お客さんとの接触を機械的ではなく人間的に、『スタッフ』対『客』ではなく『人』と『人』との接し方で動いて欲しいのです。」(NL1996/11:9) というものもある。

て『楽しそう』って言えるのっていいよねぇ」(NL1995/6:8) と語っている。このように、彼らの中でゲイリブの「楽しさ」という側面の重要性が共有されている。この「楽しさ」とはイベントの企画などの活動を行う側が「楽しく」行うという意味合いと同時に、そこに参加する側がゲイリブを「楽しい」と感じるという二つの側面を意味していると言うことができる。そのため、ゲイナイトもまさに、ゲイリブの「楽しさ」を前面に押し出しつつ多くのゲイ男性を引き込み、その中でゲイリブの「真面目」なメッセージを発信するという働きがあったのである。

以上をまとめると、一般のゲイ男性への働きかけとしてのゲイナイトには二つの働きがあった。ひとつは、「遊び」をきっかけにゲイ男性を「真面目」な活動＝社会変革活動へと引き入れることである。「ゲイセレブレーション」の場としてのゲイナイトは札幌ミーティングのゲイのメンバーらが遠ざけようとしていた「遊び」としての特徴も持ち合わせていたが、ゲイナイトとは、「ハッテン場&飲み屋系の人」などの一般のゲイ男性がまさにその「遊び」を通して自己肯定を形成しながら、ゲイリブに触れる場であったのである。「遊び」と社会変革活動という対極にある志向を切り離すのではなく、両者を融合させながら活動を行うことでいかに多くのゲイ男性に働きかけるべきなのか、という模索がゲイナイトにあらわれている。二つ目は、差別などの経験によってではなく、「遊び」、「楽しさ」といったイメージによってゲイ男性をまとめあげることである。一般のゲイ男性の多くが「真面目」な活動には興味がないと判断される背景には、差別が見えにくいということがある。前節までででも論じたよう、日本では差別があからさまな形態をとって行われるよりは、「からかい」という形態、あるいは「寛容言説」によって行われる。差別の意図の不在による差別の見えにくさは、ゲイ男性当事者さえも「差別」されるという経験を持つことを困難にさせる。こうした社会的背景では、ゲイ男性を別の表象によってまとめ上げることの方が容易となる。そのひとつが、対外的な抗議活動での「被差別者」とは対極的な、ポジティブな「ハッピー」や「楽しさ」という表象なのだ。

本節の議論をまとめると、札幌ミーティングのゲイ男性と一般のゲイ男性を主な対象とした対内的活動では、ブランチの中のジュニアブランチとコミュニケーションブランチによって、ゲイリブについて学ぶことのできるシステムが設けられていた。それら二つは、新参者が「ゲイ」としての肯定的なアイデンティティを形成すること、そしてゲイリブと結びつく政治的なアイデンティティを形成することを後押ししていた。具体的な目的や目標がなく札幌ミーティングに参加したとしても、肯定的かつ政治的な「ゲイ」としてのアイデンティティが形成されるための段階的な道筋を用意していたのである。「リブガマ養成の『虎の穴』」という表現にはこの点が顕著にあらわれており、札幌ミーティングの集合的アイデンティティとも言える政治的活発さを身につけた、主体的に活動をする同性愛者を育むような場がジュニアブランチとコミュニケーションブランチであったのだ。しかし「真面目」な活動に比重を置きながらも、単なる出会いや交流といった「遊び」を完全に否定していたわけではなかった。ゲイナイトの開催はその代表例であった。札幌ミーティングのメンバーではない一般ゲイ男性を対象とした活動として特筆的なゲイナイトは、「ゲイセレブレーション」の場であり、「遊び」や「享楽」的であることを通して人々を呼び込んでいた。「遊び」を通して自己を肯定的に捉えることを促す場としながら、そこに「政治的」なメッセージを持ち込み参加者に積極的に働きかけることによって、多くの一般のゲイ男性をゲイリブに動員しようとしていた

のである。

札幌ミーティング全体を見ると、コミュニケーション／レクリエーションとしての意味合いが強い「遊び」と言える活動と、社会への抗議活動や講演会の開催などの社会変革活動と言える活動が共存してきた。これは、〈「遊び」と並行しての社会変革活動〉である。また、札幌ミーティングでの「遊び」はゲイ男性を「ゲイ」へと〈成長〉させるためのステップでもあった。これは、〈「遊び」を通しての社会変革活動〉である。そして、札幌ミーティングには関わっていない一般のゲイ男性をゲイリブに触れさせるために、ゲイナイトを開催していた。これは、〈「遊び」をきっかけとしての社会変革活動〉であった。こうしたさまざまな活動によって〈「遊び」から社会変革活動へ〉という道筋を札幌ミーティングは作り上げてきたのである。

６．レズビアンの活動 ── コミュニティの形成と「遊び」の重視

ここまでの議論はゲイ男性に関して、ゲイ男性の言説を中心に論じてきた。しかしもちろん札幌ミーティングはゲイ男性のみによって構成されていたわけではない。本節ではレズビアン・バイセクシュアル女性の語りと活動に注目することで、活動の背景にある両者の差異について論じ、ゲイ男性の活動とアイデンティティの特徴を明らかにする。

６−１　ウィメンズブランチによる排他的領域の確保

札幌ミーティングのゲイ男性が「ゲイ」というアイデンティティについての議論を交わし、「ゲイ」であることに取り組んでいたように、レズビアン・バイセクシュアルの女性メンバーも自身のアイデンティティについての取り組みを行っており、主にそれはブランチ内の「ウィメンズブランチ」で行われていた。ゲイのメンバーが求める「ゲイ」や「リブガマ」としてのアイデンティティはジュニアブランチによって形成が促進されたのち、各種ブランチで各自の興味関心にあった活動をすることによって、そのアイデンティティを最良の形で表現できるようになっていたと論じた。しかしジュニアブランチは、確かにゲイ以外のメンバーも参加していたが、メンバー構成がゲイ男性に偏っていた。例えば、1994 年の段階でメンバー20 人の中、女性は 1 人だけであるとの記録がある（『ジュニアブランチ文集 1994』2 頁）。また「リブガマ養成の『虎の穴』」（NL1995/2:6）と言われたりもするように、特に女性メンバーの少なかった初期は主にゲイ男性によって構成されていたと思われる。

札幌ミーティングは 1989 年に結成されたが、その 3 年後の 1992 年 4 月に初めてレズビアンがメンバーとして参加した（NL1992/5:2）。その後すぐ、彼女によって札幌ミーティング内に「レズビアンブランチ」が結成されている。レズビアンブランチはその後の 1993 年末に、新しくリーダーとなったメンバーがバイセクシュアルであったことから「ウィメンズブランチ」へと改称された（NL1993/10:20）[46]。1992 年 10 月の段階で、レズビアンブランチの活動は二人で行われており（NL1992/10:4）、活動内容もニュースレターへの寄稿のみであった。1994 年 3 月の段階で 5 人

(46)　ウィメンズブランチは 1997 年末で一旦活動を終了している。

(NL1994/5:24) であったが、1996 年 8 月には 20 名ほど (NL1996/9:3-4) にメンバーは増えていった。1997 年初期ごろの段階でも月 2 回の定例会に毎回約 20 名ほどが参加していたとの記録がある(『アニース』1997 年春号:144)。

ブランチの中にレズビアンブランチが存在したことは、札幌ミーティングないし当時の「ゲイリブ」におけるレズビアンの位置付けを物語っている。つまり「ゲイブランチ」なるものがない一方で「レズビアンブランチ」が必要であった背景には、当時の運動がゲイ男性主体に行われていたことを示している。

ウィメンズブランチはその中で自身のセクシュアリティや女性であることにまつわる基本的な悩みについて話し合うために、1994 年 5 月から勉強会(ウィメンズスタディ)を開始し、その一環として 7 月からはコンシャスレイジング (Conscious Raising、以下 CR) も開始した。彼女たちの言葉を引用すると、コンシャスレイジングとは、「意識向上、意識覚醒」を意味し、「女性が女性どうしで女性の悩みをききあい、共通点をみいだしたり、励ましあったり、何が問題なのかを一緒に考えたりする」活動である。あるいは、「自分に自信をつけたり、自分や他人との気持ちのよい折り合いの付け方を見つけたりしていこうというもの」であり、「自分の中の怒りや悲しみや疑問を、誰にもじゃまされることなく、言語化していく過程で、自分の気持ちを整理したり、受け入れたり、自分のありたいという状態にするためにどうしたらいいかを考えたりしていく」ための活動である (NL1994/10:22)。1994 年から 1995 年にかけて行われた CR の具体的なテーマには、「カップル」、「嫉妬心」、「セックス」、「母」、「パートナーシップ」などがあった(47)。

開始当初からこの CR は女性メンバーのみで行われており、その理由として、「CR では自分の内面をさらけだしたり、話しにくい事を話すこともあるので、男性には申し訳ないんですが、しばらく女性だけでやってみようと思います」(NL1994/10:22) と語られている。「ウィメンズスタディに男とヘテロが参加できない理由」という記事では、CR への参加をレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーに限定する理由が次のように語られている。

> 私たちはまず、私たちの欲求、苦悩、からだ、性などについて、内なる自分自身の声に耳を傾けなければならない。そして、それらを語るための言葉を、私たちは獲得し、男やヘテロセクシュアルからの借り物ではない、自分たちの言葉で私たち自身をポジティブに受け入れていく作業をしなければならないと思う。そのためには、女性たちが誰にも邪魔されず、誰にも揶揄される事なく話し合える環境を、人工的に作らなければならない。それがウィメンズスタディがクローズである理由である。 (NL1995/3:8)

ゲイのメンバーにとってはジュニアブランチや全体の定例会が CR のような機能を持っていたと思われるが、レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは必ずしもそこでゲイのメンバーと同様の悩みや経験を語ることはできなかったと言える。よって彼女たちは、ゲイのメンバーと同じ団体に所属しながらも、その中で女性だけの排他的な場を設けることによって、「女」であることにつ

(47) ニュースレターで確認できる限り、CR は 94 年から 95 年の間に行われていた。また「勉強会」や「CR」という名前は用いられていないが、その後も継続的に「女」や「レズビアン」であることについて学ぶ集会は開かれていた。

いて語ることのできる安全圏を形成する必要があったのである(48)。つまり、ゲイのメンバーが「ゲイ」としてのアイデンティティを形成しようとしていた中で、レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは「女」としてのアイデンティティを肯定することから活動を始めていたのだ。

札幌ミーティングにおけるレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーの位置付けは、ウィメンズブランチが独自に作成していた『かわらばん』という刊行物の存在からも窺うことができる。全何号作成されたかは不明だが、1994 年 10 月の 0 号（創刊準備号）から(NL1996/5:5)、1997 年 2 月の 12 号まで作成されていたことは確認している。これを作り始めたきっかけは、札幌ミーティングのニュースレターを見た他の女性グループから「ゲイだけのミニコミなら、交換購読はできない」(NL1996/5:5)と言われたことであった。また札幌ミーティングの女性メンバーから、「他のレズビアンのコミュニティともコンタクトを取りたいから」、「必要とされるのは女性のみの情報という所も多いので」(NL1994/6:7）という理由も語られている。このように、札幌ミーティングの活動がゲイ男性に偏向しているという認識が共有されており、彼女らはその中で「女」としての活動を立ち上げることに取り組んでいた(49)。しかしこの「活動」をめぐっては、ゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーの間に大きな隔たりも生じていた。

6-2　コミュニティの不在

札幌ミーティングが取り組んできた多くの活動の中で、「ゲイリブ」としての政治性がもっともあらわれているのは、第 4 節で見た対外的な抗議活動である。しかしそれらのほとんどはゲイ男性に関するものであった。この背景には、「ゲイ」や「リブガマ」というアイデンティティが「政治性」や「強さ」と結び付けられていたこと、そしてゲイに対する差別はレズビアンに対するものと比較すると見えやすい一方で、レズビアンに対する差別はより一層不可視であることがあるだろう。異性愛社会では女性同士の欲望は不可視化されているためにレズビアンという主体も不可視化され、ゲイに対して行われるような「わかりやすい」差別が存在していない（杉浦 2010)。しかしこれらに加えて、レズビアン差別への抗議活動がほとんど行われなかったのは、札幌にレズビアン・バイセクシュアル女性のコミュニティがそれまで存在してこなかったため、その形成がまず取り組むべき課題であったからと言える。レズビアンなど女性メンバーによる社会への働きかけに対しては、レズビアンブランチが設立された当初から語られている。1993 年 2 月 6 日に開催されたレズビアン

(48)　「ウィメンズスタディに男とヘテロが参加できない理由」という記事の「ヘテロ」には、異性愛の女性も含まれていると思われる。しかし記事の内容は、レズビアンやバイセクシュアルであることの CR ではなく、「女」であることの CR についてである。よってこの記事からも、ウィメンズスタディではレズビアンやバイセクシュアルであることより、まず「女」であることへの取り組みが重視されていたことを窺うことができる。

(49)　序論でも触れたように、1997 年に東京大学で「ゲイ・スタディーズ　ミーツ　フェミニズム」（パネラーは上野千鶴子とアカーのキース・ヴィンセント、河口和也）と題するシンポジウムが行われた。しかしそこでレズビアンのパネラーがいなかったことについて、竹村和子は次のように考察している点は、札幌に限らず全国的にレズビアンが声を上げにくい状況がこの当時あったことを捉えている。

「同性愛の問題とフェミニズムの問題をぶつけるという画期的な企画において、なぜレズビアンがパネラーにならないのかと、アカーのメンバーに尋ねたことはありました。その理由は、アカーという運動体が発展過程で、あの段階ではレズビアンの声を適切に表出することができなかったからだと思います。活動の中心が、まずゲイ男性だったせいでしょう。それはアカーだけの状況ではなく、レズビアンの声が、運動体として、ゲイ男性よりも出にくいという大きな問題がありますね。アメリカ合衆国でも、『アドヴォケイト』という優れた「全米ゲイ／レズビアン雑誌」（副題）は、その努力にもかかわらず、ゲイ男性に偏りがちです。」（上野・竹村 1999:50）

ブランチの第一回目のお茶会（出席者は、助っ人として参加したゲイ男性2人を含む6人）が、以下のように総括されている。

> これは総括として話していた事だけど、やっぱり女性同性愛者、いわゆるレズビアンが社会的に自己主張を始めてから、まだ日が浅いでしょ。だからみんな、まだまだ余裕がないと思うのね。何しろ相手を探すのが大変、っていう段階にいるわけだから、法律がどうの、社会的な扱いがどうのっていう事を考えてる余裕がない。特に札幌や北海道の他の地域みたいな、地方の人は出会いの場が少ないから、それが顕著だと思う。／だから、みんなで集まって何かしようよ、っていう時、友達が欲しいとか、恋人が欲しいとか、そんな一番身近な事を先に解決していかないと、始まらないよね。恋人の斡旋なんかはちょっと無理だけど、友達なら、なんとかなるかもしれない。駆け引きや嘘を抜きにして、正直に話をして、聞いて、プレッシャーや悩みを軽くする事なら、できるかもしれない。／プロテストブランチやエイズブランチみたいに、社会に働きかけるのは、私達にはまだ早いと思うの、私は。出来る人たちにはやって欲しいです、もちろん。だけど人任せっていう事じゃなくて、その土台作りっていうのかな。社会に訴えていく、その前に、出来る事があると思う。　(NL1993/2:15)

この語りでは、ゲイ男性にはすでに恋人や友人などと出会う環境が存在してきた一方で、レズビアンはまずそうした環境を整える段階にいるということが示されている。商業誌としては初のゲイ雑誌である『薔薇族』は1971年に創刊され、ゲイ男性はゲイ雑誌内の文通欄を用いることで他のゲイ男性と交流をしてきたが、レズビアン・バイセクシュアル女性向けの雑誌とされる『フリーネ』は1995年まで待たなければならなかった。『フリーネ』が第2号で休刊したのち、1996年には『アニース』が創刊されている。だが途中休刊を挟み、2003年までの間に計9号しか発行されなかった(50)。ゲイ男性にとってゲイ雑誌の登場は、他のゲイ男性がこの世に存在することを伝えるという意味において非常に重要な出来事であった。またゲイ雑誌は肯定的なアイデンティティを形成するためにも重要であったことは言うまでもない。雑誌の登場という点から考えると、ゲイ男性らの交流の開始とレズビアンらの交流の開始には、20年以上のギャップが存在することになる。そのためレズビアン・バイセクシュアル女性にとって札幌ミーティングとは、出会いの場としてのみの利用はされなかったかもしれないが、少なくとも他のレズビアン・バイセクシュアル女性と知り合い、出会い、悩みを話し合うために使用する場であった。

また札幌にゲイバーは1970年代にはすでに13・14軒ほどあり（伏見2004:325）、1995年には20軒が営業をしていた（『全国男街マップ　'95年版』4-7頁）。一方でレズビアン・バイセクシュアル女性向けの「道内唯一」の「レディースバー」は1990年代末になって開店したと語られている（NL2000/1:19）。対して東京の場合、1990年代にはレズビアン・バイセクシュアル女性向けのバーが8軒ほどあり、2000年代に入っても10軒前後のバーが存在している(51)。またバーのみならず東

(50)　『薔薇族』（1971年創刊）、『アドン』（1974年創刊）、『サムソン』（1982年創刊）、『バディ』（1993年創刊）などのゲイ雑誌は、それぞれ数百号がこれまでに発行されている。その他の雑誌の詳細は第1章の表1-1参照。

(51)　東京のレズビアンバーの軒数を調べるにあたって参照したのは『アニース』の1996秋号、1997春号、1997夏号、1997冬号、2001夏号、2002夏号、2002冬号、2003冬号である。創刊号（1996年6月発行）のみ参照で

京にはレズビアン・フェミニズムの団体も1980年代から存在してきたが（表3-2参照）、札幌には札幌ミーティング以前にそうした団体は一切なかった。こうした状況において札幌のレズビアン・バイセクシュアル女性は、「一番身近な事」を解決する交流の場を札幌ミーティングに求めていたのである。

例えば、交流の場を作る活動として、レインボー・ハウス・パーティというイベントが企画されていた。このイベントは「女性のセクシュアル・マイノリティとして遊べるパーティー」であり、毎回40人を超える参加者があった。1997年7月から11月までの間に計5回開催された(52)。このイベントを企画した理由が、次のように語られている。

> 〔1997年にはさまざまな参加者が増えたので、〕まず、レズビアンということを考えることをしていこうと思いましたがなかなかうまくいきませんでした。／この「考える」作業がうまくいかないことについては、北海道には、女性のセクシュアルマイノリティの遊び場がなく、集(ママ)ると「遊びたい」という気持ちが先走り、「考える」作業に集中できませんでした。
> （NL1998/1:7）

このイベント開催の動機も、まだ「考える」ことのできないレズビアン・バイセクシュアル女性らに「遊ぶ」場を提供することであった。レズビアンブランチが設立された当初と同じく、まだ彼女らは「真面目」な活動をする段階に至っていないという認識があったのである。

ではレズビアン・バイセクシュアル女性が「女」としてだけではなく「レズビアン（バイセクシュアル）」として「考える」作業をしようという動きが出始めたのはいつからかというと、2000年に発足したブランチの「レズビアン・スタディ・プロジェクト」からであると言えるだろう。1990年代末に「道内唯一」の「レディースバー」が開店してしばらく経った時期であり、「レズビアンコミュニティは狭い狭いと言われながらも、出合(ママ)いの場、交流の場、遊びの場は既に存在します」（NL2000/1:19）と言われている。つまり、交流をしたいという欲求がある程度満たされたとの判断のもと、このプロジェクトが始まっている。そして目的が次のように語られている。

> レズビアンがレズビアンであることに向き合う場を提供し、レズビアンの抱える問題に真摯に取り組み、レズビアンアイデンティティを確立して初めて、レズビアンの主張、理想が見えてくると考えレズビアンの会を創設したいと考えています。(…) レズビアンであることの確認から主体性を持ってコミュニティに関わっていくこと、戦略的にレズビアンアイデンティティを利用しより政治的な動きを生み出していくことに重点を置いて活動していくことが会の目的となります。
> （NL2000/1:19）

この文言からもレズビアン・スタディ・プロジェクトは、「レズビアン」というアイデンティティへ徹底的にこだわり活動をするプロジェクトであったことがわかる。そしてこうした活動が可能と

きていない。

(52) 5回しか開催されなかったのは、月一回のペースでやっていたため、ウィメンズブランチのその他の活動に支障をもたらしてしまったためであると語られている（NL1998/1:7）。

なったのは、「遊び」のための安定した場が確保できたためであり、「遊び」が確保されていることが「政治的」な活動の条件となると言われているのだ。

6-3 「運動」と「内面」のバランス

「遊び」や「交流」の欲求が満たされたことによって、レズビアン・バイセクシュアル女性らも「政治的な動き」への志向が2000年頃から顕著に生じはじめたと言える。しかしもちろん、札幌ミーティングという団体にいるからには、1990年代から「政治的活動」との関わりに意識的にならざるを得なかった。前節までに見たように、ゲイのメンバーは政治性を身につけ社会変革活動を能動的に行うのがあるべき姿であるとしていた。ではこの点をレズビアン・バイセクシュアル女性はどのように考えていたのであろうか。ウィメンズブランチのメンバー4人による座談会記事で、参加した2人は対内的活動と対外的活動について次のように語っている。

> レズビアンはレズビアンである前に女性であるわけで、大変だとは思うのね。でも、活動とかやっちゃうと自分の弱さとかさらすの、なかなかできないと思うのね。自分はなるべくさらそうと思っているんだけど。
>
> 運動って二本立てじゃないとだめだと思うのね。外への活動、抗議活動とか、外への表現も大事なんだけど、内面の面ももう一度見直していくっていうかさー、仲間うちで自分の悩みとか話してみたり（…）そういうの両方平行にいかないと、かたっぽだけだと、バランスとれないと思う。（NL1996/1:48）

この語りからは次のことがわかる。外への抗議活動（社会変革活動）と「内面」（自己変革活動）のバランスの必要性を認識しつつも、対外的活動をすることが「弱さ」を覆い隠してしまうという認識である。同じ座談会で別のメンバーが、「グループとかやってて、運動とかやってはた目では強くなったように見えるんだけど、ただ単によりかかってるだけだから強くなっていないのよね」（NL1996/1:48）とも言うように、対外的活動によって形成できる「強さ」とは、〈偽り〉の強さとみなされている。活動することで「内面のホモフォビアから目を背けちゃう」（NL1996/1:48）ことを危惧し、「ミーティングって、傷のなめあいじゃなくて、傷の広げあいじゃない？（笑）」（NL1996/1:48）と語るメンバーの語りからも、彼女らにとっての本当の「強さ」とは、自分の「弱さ」を克服することからくるのではなく、それを引き受けることからくると言える。

ゲイのメンバーにとっても自己の内にあるホモフォビアや「弱さ」に向かい合うことは重要なことであり、それはジュニアブランチや団体全体の定例会によって行われていたと思われる。しかし彼らの場合は、「ゲイ」や「リブガマ」とは異なる他者として「ホモ」を対置させ、否定的な男性同性愛者のイメージをそこに放擲することによっても「弱さ」を克服していたと言える。つまり、性質の異なる男性同性愛者の二項対立を維持することによって「弱さ」を切り離し、「強さ」を手に入れていたとも言えるのだ。言い換えるとそれは、「弱さ」を引き受けるというよりは、遠ざけるための戦略でもあった。レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーがゲイのメンバーと同様の戦略をとらずに「弱さ」を引き受けようとしていたことも、男性メンバーと女性メンバーの間に（対外

的)「活動」に関する認識の差異を生む原因となっていたと思われる。

こうして社会変革活動と「遊び」のバランスを彼女らは重視していたが、しかし活動の比重が内面に偏ってしまっていたことは、ウィメンズブランチが一度解散した後、当時の活動を振り返る記事で次のように語られていることからも窺うことができる。

> 当時のウイ(ママ)メンズは、リブを活動の主目的とする札幌ミーティングの中では少々異色の存在で（宴会が多かったかな…)、「リブ意識が低い」と、他のメンバーだけでなく、ウイ(ママ)メンズ内部のメンバーからも問題提起されることがしばしばあった。 (NL1998/7:14)

そしてその背景については次のように続けて語られる。

> 言い訳になってしまうかもれないが、それにはいくつかの理由があった。ゲイの人達には、情報雑誌、ハッテン場、お店など、沢山のコミュニケーションの機会があるが、女性にはそういう環境も、また、それを知る術もほとんど無い。当時は、そんな中で、やっと創刊された情報雑誌のお陰で、ようやくウイ(ママ)メンズに人が集まり始めたところだった。ウイ(ママ)メンズは、コミュニケーションに飢えた女性達にとって「やっと見つけた憩いの場所」だったのである。
> (NL1998/7:14)

すでに紹介した『フリーネ』や『アニース』では札幌ミーティングの紹介も掲載されており、両誌の登場によって団体のことを知った女性たちの参加が増加した。確かに先ほどの語りでは社会変革活動と「遊び」のバランスが必要とされていたが、多くの女性にとって「やっと見つけた憩いの場所」でもあった札幌ミーティングで、彼女らの活動はコミュニケーションに重点が置かれるようになったことは必然でもあった。ゲイのメンバーは札幌ミーティングという場をゲイバーやハッテン場から差異化しようとしていたが、レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーはゲイのメンバーのようにコミュニティの厳密な機能分担をしてはいなかったのだ。もちろんウィメンズブランチの中にもリブ的な活動をしようとしていたメンバーもいたが、傾向としてはコミュニケーションに重きを置いていたと言える。しかしこうした活動傾向が、ゲイなどの他のメンバーにとっては、レズビアン・バイセクシュアル女性が札幌ミーティングをただの「遊び」の場として利用しているように見えてしまうこともあったであろうことが、批判を招くことに繋がったと思われる。

6-4　ジェンダーの問題の後景化

札幌ミーティングのゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは置かれている状況が異なっていたというだけではなく、「男」「女」としてその差異を両者の間で共有することができていないという状況にもあった。レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーの増加によってゲイとの関わりが深くなったとも言われているが（NL1996/12:6)、同時にゲイとの問題意識の違いもより際立つようになったと思われる。定例会での話し合いを再構成した記事（レズビアンのメンバーによる再構成）では、この対立の様子が描かれている。レズビアンのメンバー二人は札幌ミーティング内で感じる女性差別について次のように発言する。

（女性は）発言を途中からさえぎられる。女性の意志は通らない。女性はこうしていきたいと発信しているし、始めの一歩は出ている。お膳立てとかいう発想をやめてほしい。フェミニズムをもっと勉強して。

永年ミーティングにいる自分や□□は女性差別を感じているのに、他の女性が（運営会などに）出てこれないのは当然。今まで抗議してきたマスコミも必ず最初に差別の意図はない、と言っていた。当事者が差別されていると言っているのに、認めないのはSTVやUHB、無自覚な異性愛者と同じ。女性と男性は、全く違うのに同じにできないからバッシングするのは、最初にルールをつくってそれに従えないからダメというのと同じ。

(NL1997/7:4, □□は人名の伏せ字)

それに対してゲイのメンバー二人は次のように応答する。

女性差別があると言われてもわからない。(…) 女だからといって排斥したことはない。

女性差別がゲイにあるのは認めるが、すべての発言に関してそういわれるとおかしい。フェミニズムを勉強してすぐ行動できるかは難しい。いちいち指摘してほしい。もっと女性と接したい。(…) 無意識に差別しているという自覚がゲイに必要。きく用意が必要。

(NL1997/7:4)

レズビアンらによって、札幌ミーティング内にある女性差別が問題化され、ゲイのメンバーがそれを認めようとしない姿勢が批判されている。そしてゲイらは女性差別の存在を認知できていないことが語られている。より具体的な話題としてこの定例会で議論されているのが、ゲイナイトにおけるゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性の位置付けである。札幌ミーティングが開催していたゲイナイトにはセクシュアルマイノリティでなくても参加できる「ミックスナイト」もあったが、レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは、女性向けに会場内の椅子を増やし、「ノンケバッチ」(ゲイナイトに参加するノンケが着けるバッチ) のシステムを導入することを提案している。椅子を増やす理由は、レズビアン・バイセクシュアル女性はより「おしゃべり」に重点を置いているため、椅子の増設によって座って話すことのできる場を増やしたいと望んでいたからである(『Knock on the Rainbow』2018.11.10)。ノンケバッチ導入の理由は、参加者にノンケが増えてしまったため、ノンケの女性とレズビアン・バイセクシュアル女性を判別することができるようにすることで、レズビアン・バイセクシュアル女性同士の交流を確保するためであると思われる。これらの要望の背景にあるのも、レズビアン・バイセクシュアル女性らには既存のコミュニティが存在しないため、求めるものが「おしゃべり」や「交流」にあったということであろう。しかし「女性と男性の利害は、ゲイナイトに関しては対立」(NL1997/7:6) しており、女性にとっては「しゃべるためのイベント」であるのに対して、ゲイ男性にとっては「ダンス目的のイベント」(NL1997/7:5) であった。そのため、「目的が違うイベントをいっしょにやってしまうと中途半端になってしまう」(NL1997/7:4)

との意見がゲイのメンバーから出されてもいた。

こうした札幌ミーティング内で生じていたと男女の軸における認識の違いはそう簡単に解決されるわけではない。しかしこれはゲイとレズビアンの「仲の悪さ」を示すものではないことは注意されたい。先ほどのゲイのメンバーの発言に、「もっと女性と接したい」、「無意識に差別しているという自覚がゲイに必要。きく用意が必要」とあるように、この定例会では最終的には互いの利害や問題関心の違いについて完璧にではなくとも理解しつつあることを前提に、今後も共に活動を進めて行くことが模索されている。また第1節でも引用したように、ウィメンズブランチの解散後、東京で「女性」を対象とした活動を開始したメンバーは、「ゲイもビアンもバイセクシャルも一緒になって活動できた札幌ミーティングの楽しさを味わってしまった自分には少々ものたりない感がある」（NL1998/7:14）との感想を残している。レズビアンとゲイが共に活動をしなければならないという札幌の地域的な状況で、両者は対立と歩み寄りの間を往還しながら活動を進めていたと言えよう。

本節の議論をまとめると、ゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーは同じ団体に所属し共に活動をしながらも、活動内容の隔たりを抱えていたことが明らかとなった。彼女らが「真面目」な活動よりは「遊び」としての交流に重点をおいていた理由は、「男」「女」として両者が置かれている社会的状況が異なっていたため、そして自身のジェンダーに対する意識や取り組み方が異なっていたためであった。より具体的には、次の二点である。ひとつは既存のコミュニティの違いである。ゲイ男性にはゲイバーやハッテン場といった場がすでにあったが、レズビアン・バイセクシュアル女性にそうした場はなく、彼女らは出会いやコミュニケーションを求めていた。そのため札幌ミーティングに求めるものが両者で異なり、社会変革活動と「遊び」のバランスをめぐる意識の差が生じていた。札幌ミーティングのゲイ男性がゲイバーやハッテン場といった既存のコミュニティを否定できるほどにそれらが〈成熟〉していた背景には、ゲイ男性も「男」であるため経済的余裕があること、夜間の交遊が許容されていること、そして性的欲望の存在が認識されやすいことがある。対してレズビアン・バイセクシュアル女性には、ゲイ男性が「男」として持つ特権が与えられておらず、欲望の存在も不可視にされてきた。そのため、ゲイ男性のように〈「遊び」から社会変革活動へ〉と進んでいく段階にはなく、「遊び」をより充足させることに重きが置かれていたのである。

そして二つ目は、「弱さ」と「強さ」の捉え方の違いである。ゲイ男性は自身の「弱さ」に向き合うことで「強さ」を得ると同時に、同性愛者の否定的側面を担わされた「ホモ」という他者から自身を差異化することによっても「弱さ」を克服していた。これは、抗議活動などの対外的活動への原動力となっていたとも思われる。この点は、「ハッピー」によって〈現実逃避〉をしていた第1章と第2章の戦略と共通するところがあると言えよう。対してレズビアン・バイセクシュアル女性はCRなどを通して「女」としての問題に取り組むこと、「弱さ」に向き合うことをより重視していた。そして彼女らにとって「弱さ」は克服されるものというよりは、引き受けるものであった。彼ら／彼女らは確かに社会におけるマイノリティとしてのアイデンティティを引き受けようとしていたが、ゲイ男性はその位置付けを引き受けながらも、「男」としての「強さ」を求めてしまうという側面もあったのではないだろうか。

アイデンティティ形成過程の違いは、「ゲイ」、「ホモ」、「レズビアン」といった言葉に見られる言語資源（中村2007:15）の制限も大きな要因であったと思われる。男性メンバーは「ゲイ」としての

アイデンティティを形成するために、積極的に「ホモ」という男性同性愛者内部の他者を形成していた。そして同性愛にまつわる否定的なイメージを「ホモ」に担わせることによって、「ゲイ」への肯定的なイメージ付けを行っていた。対して「レズビアン」は、「ホモ」と「ゲイ」のような対立させるべき言語上の資源がなかったため、昔から現在まで存在してきた「レズビアン」という言葉しか使用することができず、「レズビアン」という言葉に付随するイメージを根本から入れ替えていかなければならなかった(53)。

以上のような差異は、レズビアン・バイセクシュアル女性の言説により表出している傾向がある。その背景には、彼女らが、ゲイ男性が主なメンバーであった札幌ミーティングに後から参加したという事情もあったと思われる。彼女らは常にゲイ男性による活動を基準に自らの活動について考えなければならず、それが結果として両者の差異を認知するきっかけとなった。ゲイ男性の言説を見ると、新しいアイデンティティやコミュニティ形成にあたって参照軸となるのは、ゲイリブに批判的なゲイ男性と、既存のコミュニティであった。対してレズビアン・バイセクシュアル女性は、ほとんどゼロからアイデンティティとコミュニティを形成しようとしており、他のレズビアンが参照軸とはなりにくかった。このようなゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性の関係性は、札幌ミーティングに限らず、広く当時の運動の中で存在していた傾向であると思われる。しかし第1節でも触れたように、おそらく人口的な要因からも両者が共に活動をすることが促された地方都市としての札幌では、その差異がよりレズビアン・バイセクシュアル女性にとって認識されやすかったのではないだろうか。

ジェンダーの話題はもちろん札幌ミーティングでも扱われていたし、ニュースレターにもジェンダーに関する記事が存在している。また「ゲイリブ」とは、「自分をねじ曲げて生きることを拒否し、『異性愛＝正常』とする社会の方に疑問を投げかけ、この常識をつきくずしていくあれこれの地道な試みのこと」(NL1995/2:11-12) であり、異性愛規範によって抑圧を受けるすべての人のための活動であった。しかし、必ずしも〈すべての人の活動〉という意図が共有されていたとは言えない。

> ぼくにはぼくのための闘いしか戦えないし、他人の代理になって他人のための闘いを戦うことには、確かに無理がある。ゲイリブは自分のためにするもので、他人のためにするものじゃない。……もう一度、はっきりさせよう。自分は自分の闘いを戦う。あなたも自分で戦いましょう！そしたら、はじめて共同戦線の可能性が生まれる。 (NL1998/6:17)

こうした語りにあるような〈自分のための活動をする〉という姿勢は、彼ら／彼女らの活動が〈連帯〉の中にありながらも、「ゲイ」や「レズビアン」というそれぞれのアイデンティティを軸にしたアイデンティティポリティクスとしての側面が強かったことを示している。この語りでは自分と他人が異なる問題を抱えていることは認識されており、ゲイとレズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーの間に差異があることは少なからず認識されていたと思われる。だが自身のアイデンティティの形成が何よりも重要であったため、具体的にどのような差異が存在しているのかというとこ

(53) 「レズビアン」を短縮した「レズ」という言葉も存在してきたが、同じ言葉の派生であるため、意味合いはそれほど変わらない。「レズ」の方が侮蔑的ニュアンスを含むが、両者ともにポルノにおける女性同性愛者という意味合いを強く含んでいた。「レズビアン」という語については掛札 (1992) の議論が詳しい。

ろまでは積極的に共有し、踏み込んだ議論をしていたとは言えない。そのため、互いが自身に特化した活動をすることにより、時に利害が衝突することがあったのである。

7.「遊び」と「真面目」な活動のジレンマ

第2節以降の議論を要約する。第2節では「ホモ」「ゲイ」「リブガマ」という男性同性愛者を指し示す言葉がゲイ男性のメンバーによってどのように扱われていたのかを論じた。「ゲイ／リブガマ」という新しいアイデンティティには能動的・主体的にゲイリブを行うための政治性が付与され、ただの〈行為〉ではなく、個人の核となるアイデンティティであり、ライフスタイルとして捉えられていた。その対極には「ホモ」が置かれ、性的でしかなく、クローゼットの中の存在という意味が付与されていた。この「ホモ」はゲイリブに対して批判的であり、「リブガマ」という罵り言葉を用いていたが、札幌ミーティングのゲイ男性はそのアイデンティティを引き受け、政治的存在としてのアイデンティティを強化していた。そしてクローゼットではないアウトな「ゲイ」というアイデンティティは「24 時間ゲイ」という言葉によっても表現され、「自分らしく生きる」だけではなく、ゲイであることをいかにして社会に提示するのかという「可視性の管理」をすることを重要な行動としていた。

第3節では札幌ミーティングという新しいコミュニティがいかなるものとして捉えられ、「ゲイ」というアイデンティティといかに結びついているのかを論じた。「甘い汁」論争と言える一連の議論は、「甘い汁」≒「ゲイバーやハッテン場では築けない全人格的な関係性を築くことのできる機会」を創出することの必要性を説いていた。甘い汁吸うだけではなく、皆でそれを作り出すことによって、新しいコミュニティとしての札幌ミーティングをゲイバーやハッテン場から差異化しようとしていた。しかし甘い汁の生産と消費だけを行い、札幌ミーティングがただの「コミュニケーション系のサークル」や「アルコールのない飲み屋」となってしまうことも否定され、交流＝「遊び」ながら社会変革活動もするというバランスが模索されていた。

第4節では非当事者をターゲットとする対外的活動としてローカルメディアへの抗議活動を取り上げ、より具体的な活動から「ゲイ」というアイデンティティについて論じた。UHB と STV の両者の放送で中心的に批判されたのは、「ホモ」という言葉とともに、性的な存在であることが強調され表象されることであり、第2節で見た「ホモ」への抵抗と、メディア表象としての「ホモ」への批判は密接に結びついていた。また両者への抗議活動はいずれも、差別的であると制作側に認識されていない表象を、差別的なものであることを認めさせることに最大の困難があった。「からかい」の構造によって男性同性愛者が「遊び」による「笑い」の対象として扱われており、〈差別の意図の不在〉＝〈差別の不在〉という状況に札幌ミーティングは抵抗をし、マイノリティとしての同性愛者が差別を受けているという事実を社会問題化しようとしていた。

第5節ではゲイ男性当事者をターゲットとする対内的活動を取り上げ、札幌ミーティングのメンバーに対する活動と、一般のゲイ男性に対する活動について論じた。札幌ミーティングではブランチ制度の中のジュニアブランチによって、一般のゲイ男性を「ゲイ／リブガマ」という政治的な存在に〈成長〉させるための仕組みが作られていた。もともとは「遊び」の場でしかなかったジュニ

アブランチが、「リブガマ養成」の場となるにつれて、「遊び」から「真面目」な活動＝社会変革活動へと比重が移っていった。札幌ミーティング全体でも「真面目」な活動をすることに重きが置かれていたが、「遊び」が完全に否定されていたのではなく、札幌ミーティング内での「遊び」を経由していかに社会変革活動へと進んでいくのかということが模索されていた。そしてこの「遊び」は、「真面目」な活動に興味のない一般のゲイ男性にゲイリブとの接点を持たせるための戦略、そして差別の経験によってまとめ上げることが困難な一般のゲイ男性をまとめ上げるための戦略にもなっていた。これらは、〈「遊び」と並行しての社会変革活動〉〈「遊び」を通しての社会変革活動〉〈「遊び」をきっかけとしての社会変革活動〉と言うことができた。

第6節では、レズビアン・バイセクシュアル女性の活動を取り上げ、ゲイ男性との差異について論じた。レズビアン・バイセクシュアル女性はゲイ男性が主な構成員となっている札幌ミーティングで、女性メンバーだけの排他的領域をウィメンズブランチとして形成することによって、「女」としての問題に取り組もうとしていた。ゲイ男性にはゲイバーやハッテン場という既存のコミュニティがある一方で、彼女たちにとって札幌ミーティングは札幌での唯一のコミュニティであったため、抗議活動などの対外的活動よりも、他のレズビアン・バイセクシュアル女性との出会いやコミュニケーション＝「遊び」を第一に求めていた。しかし札幌ミーティングに所属するからには対社会的活動にも取り組まなければいけないと感じており、「真面目」な活動を重視するゲイ男性とのすれ違いを経験したり、「遊び」と社会変革活動のバランスをいかにして保つかを模索したりしていた。

以上の本章の分析からは、1990年代の活動には二つの側面があったことがわかる。ひとつは、「ホモ」と「ゲイ／リブガマ」という二つの対極的な存在を軸に活動が行われていたということである。「ホモ」、「ゲイ」、「リブガマ」といった言葉によってゲイ男性がカテゴリー化され、新しいコミュニティとしての札幌ミーティングでは、ただ交流をしたり出会いを求める人ではなく、能動的に活動をする「ゲイ／リブガマ」であることが求められていた。マスメディアへの抗議活動でもただ性的な「ホモ」ではなくライフスタイルとしての「ゲイ」であることが主張され、対内的活動では一般のゲイ男性を「ゲイ／リブガマ」へ〈成長〉させるための活動が行われていた。

そしてもうひとつの側面は、「遊び」と「真面目」な活動という二つの活動を行ってきたことである。札幌ミーティングでは、ただの出会いやコミュニケーションを求める「遊び」ではなく、能動的に「甘い汁」を作り出したり対社会に働きかけたりする「真面目」な活動＝社会変革活動が重視されていた。しかし「遊び」は完全に否定されていたのではなく、必要不可欠なものでもあった。それはまず、「真面目」な活動を行うための前提として必要であった。レズビアン・バイセクシュアル女性の言説からも明らかであったように、「一番身近なこと」としての出会いや交流の欲求をまず満たすことによって、「真面目」な活動に取り組むことができるようになる。ゲイ男性も、ゲイバーやハッテン場によってそうした基本的欲求をすでにある程度満たしていたからこそ、「真面目」な活動への取り組みが札幌ミーティングの結成当初から可能であった。

〈「遊び」から社会変革活動へ〉と移行するということは、被差別者でありマイノリティであるという社会での位置付けを受け入れることでもある。つまり、札幌ミーティングでは、いかに多くのゲイ男性に被差別者／マイノリティというアイデンティティを自覚させるのかということに奮闘していたと言える。このアイデンティティを形成する道筋としては、対外的活動としての抗議活動が行っていたように、〈同性愛者は被差別者／マイノリティだ〉という直接的な教示をゲイ男性に対し

ても行うことが考えられる。ジュニアブランチ、コミュニケーションブランチ、普段の定例会などでは、同性愛者の置かれている状況について学び、被差別者としての意識を涵養していたと言える。しかし同時に、札幌ミーティングが一般の多くのゲイ男性に働きかけるために行っていたのは、ゲイナイトを通して「楽しさ」や「ハッピー」という表象を提示し、〈同性愛者は楽しく生きている〉という、〈被差別者〉とは異なる表象を提示することであった。〈ハッピー〉であり、〈悩みが無い〉という状態を活動の基盤とする点は、『バディ』やゲイマンガの分析結果とも緩やかにつながっている。『バディ』では「ハッピー」のイメージによって現実社会の困難からの〈逃避〉を行い、それによって読者を獲得し、読者共同体としてのゲイコミュニティを形成していた。ゲイマンガでも異性愛社会における「悩み」からゲイコミュニティにおける〈悩み〉へと描かれるものが変わっていき、登場人物は恋愛の〈悩み〉を抱えていたとしても〈幸せ〉な存在として捉えられるようになっていた。

このように、札幌ミーティングでもゲイ男性をゲイリブに引き入れるために、「遊び」や「ハッピー」であることが利用されていたのだ。これを男性性との関連から考察すると、被差別者／マイノリティというアイデンティティとは、「悩み」を〈解決〉し、「ハッピー」になり、「男」としての〈余裕〉ができた上で引き受け可能なアイデンティティであったとも言えるのではないだろうか。本論で論じたように、札幌ミーティングのゲイ男性が取り組んでいた種々の活動も、男性性の特権に少なからず支えられていた。『バディ』で主張されるライフスタイルが男性性と結びついていったように、ゲイリブを行うゲイ男性も「男」としての立場と無縁ではなかった。レズビアン・バイセクシュアル女性のメンバーとは異なり、「ホモ」ではない自分たちを主張すること、「弱さ」の引き受けではなく放擲によって自身の「強さ」を少なからず獲得していたこと、政治的な強さを持ったアイデンティティを形成しようとしていたこと、これらは「男」であることに影響を受けていた。しかしこのことが必ずしも認識されていなかったということは、ゲイリブにおけるジェンダーの問題への着目が不完全であったことを意味しているのではないだろうか。

札幌ミーティングはレズビアン・バイセクシュアル女性との〈連帯〉の活動であったが、次章のパレードも同様に連帯の活動である。札幌ミーティングの分析でも男性性が重要であったように、パレードの中でもゲイ男性の位置付けや男性性の問題に焦点を当てる必要がある。また、〈「遊び」から社会変革活動へ〉という実践もパレードと密接に関わっている。〈パレードは「祭」か「政治」か〉という議論がパレードの運営・開催と並行して生じてきたが、先取りすると、これは「遊び」と社会変革活動を言い換えたものであった。札幌ミーティングの分析を下敷きに、パレードの分析へと進んでいく。

第４章　セクシュアルマイノリティのパレードにおける演出

―― 連帯におけるアイデンティティとパレードの中のゲイ男性

１．日本のパレードと札幌のパレード

1－1　本章の目的

本章では、社会変革志向が強く、オーディエンスとしての異性愛者の存在が強く意識される活動として、セクシュアルマイノリティのパレード（以下、パレード）を取り上げる。日本におけるセクシュアルマイノリティのパレードは1994年に東京で始まり、次いで札幌では1996年から開催されてきた。2019年には札幌（さっぽろレインボープライド）、青森（青森レインボープライド）、岩手（いわてレインボーマーチ）、宮城（仙台プライドジャパン）、東京（東京レインボープライド）、愛知（名古屋レインボープライド）、三重（三重レインボーパレード）、大阪（関西レインボーパレード）、香川（丸亀レインボーパレード）、福岡（九州レインボープライド）の10の都道府県で開催されるに至っている(1)。パレードではなく、大きな野外会場でブース出展や種々のイベントを行う「フェスタ」という形式のイベントも、2019年には愛知（Nagoya Lesbian & Gay Revolution Plus）、和歌山（レインボーフェスタ和歌山）、奈良（奈良レインボーフェスタ）、三重（三重レインボープライド）、大阪（レインボーフェスタ！2019）、沖縄（ピンクドット沖縄）の6県で開催されている。それぞれの地域によって規模は異なるが、日本で最大規模の東京のパレードでは、2019年のパレードの行進者が1万人を超え、ブース出展や各種イベントが開催される会場となる代々木公園でのプライドフェスティバルとパレード前後の関連イベントには204,000人を動員しており、公的な場で行われるセクシュアルマイノリティの活動としては代表的かつ最大規模のものとなっている。一連のイベントの協賛に多くの一般企業が加わったり、メディアによっても報道されたりするなど、非当事者からの関心や支援がもっとも寄せられる活動のひとつとなっている。

前章までの分析の重要な点を振り返ると、ひとつは、社会に対しては差別の存在や「悩むゲイ」が提示される一方で、ゲイ男性には「ハッピー」の表象が提示される傾向があることである。ふたつ目は、「遊び」や「ハッピー」の表象を通してゲイ男性を社会変革活動へと動員しようとしてきたことである。パレードは札幌ミーティングの活動と同様に、ゲイ男性をターゲットとする自己変革活動と非当事者をターゲットとする社会変革活動としての側面を共に持つが、札幌ミーティングと大きく異なるのは、公的な場で行われる大規模なイベントであること、自己変革と社会変革という二つの側面がより絡み合っていることである。こうした特徴を持つ活動の中では、表象がどのよう

(1)　2019年の岩手のパレードは台風の影響により直前で中止が発表されたが、ここでは開催数に含めている。

に利用され、自己変革と社会変革という側面はどのように扱われてきたのであろうか。

以上を踏まえた上で、本章でパレードを分析対象とする理由のひとつは、公的な活動としてもっとも大規模に行われており、現在のセクシュアルマイノリティの活動を代表するものであるためである。当事者の可視化という目的がパレードの基盤のひとつであり、セクシュアルマイノリティ当事者としての立場から社会へ働きかける志向が強い。それに加えて、公的な場で行われる活動であるため、異性愛者にどう見られるか／にどう見せるか、という意識がその他の活動よりも強く働く。前節までに見た対外的な抗議活動と同様に、社会的に承認をしてもらうため、ゲイやセクシュアルマイノリティをどのような存在として提示するかという戦略がパレードには伴う。つまりパレードとは、「ゲイ」というアイデンティティの重要な側面であった、可視性の管理＝可視化を行うための活動なのである。1994 年の東京で行われた第 1 回のパレードでは、その先頭を行進していた人らが「祝 カミングアウト」と書かれた横断幕を掲げていたが、この事実はまさにパレードがセクシュアルマイノリティの存在を社会で可視化させようとしていたことを象徴している。しかしもちろん、パレードは非当事者への働きかけのみを行っているわけではない。重要な役割のひとつに、セクシュアルマイノリティ当事者への働きかけもある。公的な場でマイノリティの存在を可視化することによって、孤立している当事者に同じ当事者の存在、そのコミュニティの存在を知らしめ、エンパワーメントをすることもできる。パレードは「レズビアン&ゲイコミュニティの最大の社会的イベントであり、間違いなく、〔彼ら・彼女らの〕公的生活に対して最大の貢献をもたらす」(Kates & Belk 2001:393)[(2)]のである。海外では「パレード」ではなく「ゲイ・プライド (gay pride)」や「LGBT プライド (LGBT pride)」とも言われるように、「誇り」や自尊心を獲得するためのイベントとしての働きもある。よってパレードは、前節でみた札幌ミーティングの活動と同様に、対外的活動でもあり対内的活動でもある。しかし公園や車道といった公共の場を用いて行われる活動であるために、その他いずれの活動よりもオーディエンスとしての異性愛者が意識される活動でもある。つまりパレードとは、当事者の視線も非当事者の視線も同程度に注がれ、その二つが複雑に絡み合う場であること、誰が参加し、誰に対して何をアピールするのかということが特段問題となることを特徴としている。こうした特徴に注目しつつ、パレードを開催する背景にいかなる思想・議論が存在してきたのか、そしてどのようなパフォーマンスが実際のパレードで（あるいはその周辺で）行われてきたのかという点に注目し、その中でゲイ男性のいかなる表象が形成されてきたのかを分析する。

パレードを取り上げる二点目の理由は、それが現在の活動のキーワードである「連帯」をもっとも象徴する活動であると言えるからである。本研究はゲイ男性のアイデンティティについて論じるものであるが、現在の活動の中でゲイ男性だけによって構成される活動は非常に限られている。1990 年代後半からも「連帯」が叫ばれるようになり、ゲイ男性の活動もそうした潮流の中で行われてきた。昨今、「LGBT」という言葉が主流化していったことにも象徴的であるように、ゲイ男性はさまざまなセクシュアルマイノリティの中のひとつでしかない。よって、現在までの活動とゲイ男性のアイデンティティを捉えるのであれば、他のセクシュアルマイノリティとの関係の中でもゲイ男性を捉える必要がある。以上の点からも、本章ではパレードを取り上げたい。

では、より具体的にはパレードをどのように捉え、分析を進めるべきであろうか。

---

(2) “the lesbian and gay community’s largest social event and arguably its most significant contribution to public life” (Kates & Belk 2001: 393)

1−2　分析視角・先行研究

まずひとつの軸として、セクシュアルマイノリティのパレードにおけるパフォーマンスを、ゲイやレズビアンといった個別カテゴリーを包括的に表象するものとして捉える。つまり、セクシュアルマイノリティ全体について形成される表象を見ることで、それがゲイ男性の表象でもあると論じるということである。日本のパレードについて論じた堀川修平（2015, 2018）は、南定四郎による1990 年代のパレードから 2000 年代の砂川秀樹によるパレードへの移り変わりを、「社会変革」や「デモ」としてのパレードから、「祭」として「楽しさ」によって脚色されたパレードへの移行として記述している。また1990 年代のパレードは「ゲイ」や「レズビアン」などのアイデンティティに基づく「アイデンティティ型」の運動であった一方で、2000 年代はセクシュアルマイノリティの権利獲得などの目的によって参加者が参集する「ミッション型」の運動へと移行していったと論じる。前章を参考にこの分析を解釈するのであれば、時代の推移とともに「ゲイ」や「レズビアン」といった個別のアイデンティティの強調からは距離を置くようになると同時に、「真面目」な活動から「楽しい」「遊び」へと変化したと言えるだろう。しかし堀川の分析の問題点は、パレードの実行委員長個人の思想に焦点が当てられ過ぎているため、実際にパレードでどのようなことが行われてきたのかが分析されていないことである。

堀川と類似する指摘は、イギリスとアイルランドのパレードを分析したキャス・ブラウン（Brown 2007）によってもされている。ブラウンは通りで行われるパレードとそれに付随して公園を会場に行われるアフターパーティを取り上げ、二つの空間を人々がどのように利用・経験するのかを論じている。彼女はプライドを「政治を伴った祭り（party with politics）」という言葉で形容し、多くの参加者は「楽しさ（fun）」や「パーティ（party）」というきっかけからプライドに参加しながら、プライドが政治的なものであることも知っていると分析する。セクシュアルマイノリティ内での多様化が進み、「平等」や「同性婚の法制化」などのような政治的命題が必ずしもセクシュアルマイノリティをまとめ上げる推進力とはなりにくい時代に、「パーティ」や「楽しさ」といったイメージが彼ら／彼女らをまとめあげている。彼女の分析でもパレードの第一の特徴が「祭」であると述べられており、セクシュアルマイノリティのイメージが「楽しさ」によって脚色されている様子が論じられていると言える。ロリー・ブリットとデイヴィッド・ハイス（Britt & Heise 2000）は広く同性愛者の権利獲得運動を取り上げ、それが感情資本（emotional capital）をいかに用い、多くの人を集合行動へと動員するのかを論じている。同性愛者のアイデンティティが「恥（shame）」から「プライド（pride）」へと変化していったという議論は、上述の論者らが示したパレード全体の現代的傾向とも重なりを見せている。これらの研究のように、本章でも広くセクシュアルマイノリティの運動としてパレードを扱い、その表象を論じる。

二つ目の軸は、セクシュアルマイノリティのパレードの中のゲイ男性というアクターを取り出し、彼ら特有のパフォーマンスについて論じるというものである。第一の軸での議論でも暗示されているように、パレードにはさまざまなアイデンティティを持った人が参加するため、「ゲイ」や「レズビアン」といった個別のアイデンティティのカテゴリーは集合性の中に融解するように思えるが、必ずしもそういうわけではない。特にパレードの中のゲイ男性の位置付けや、パレードとゲイ男性の関係性について注目すると、この点がより顕著になる。前章で見たように、ゲイリブはゲイ男性を主要なメンバーとし、彼らが牽引してきたという側面があった。となると、パレードでもゲイ男

性がある一定の立場を維持してきたり、他のセクシュアルマイノリティとは異なる関わり方をしている可能性もある。例えば、休止状態であった東京のパレードを2000年に復活させた砂川秀樹は、その復活を可能とした背景について語っている。砂川によると、その復活に大きな貢献をしたもののひとつは、「90年代半ばに登場した新しいゲイ雑誌〔『バディ』と『ジーメン』〕と同時期から急速に普及したインターネットであ」り、「それらにより、ゲイやレズビアンに関する肯定的な言説は爆発的に増大し流通した」(砂川2000:244)。そしてもうひとつは、ゲイビジネス(3)の資本の蓄積であり、「単に、それらが、パレードや祭りの開催のための資金を提供したという意味だけではな」く、「資本蓄積というゲイビジネスの安定化により、それらのビジネスの中心にいる人たちの間にこのようなイベントの後押しをする精神性が生じてい」(砂川 2000:244) たという。この語りで重要なのは、ゲイ男性というアクターがパレードの中で特別な役割を果たしていたという認識である。この東京のパレードが「政治」ではなく「祭」としての特徴を強めていったという変化について札幌ミーティングのメンバーは、「〔2000年の東京のパレードで〕かつての東京パレードの『政治性』を排除したのは、かつてのパレードがまさしくその『政治性』で潰れてしまった反省と、リブ嫌いの2丁目飲み屋ゲイを動員させるための手段だったと思われます」(NL2000/8:26) との見解を示しており、パレードとゲイ男性の関係性が、ひとつの問題となっていたことを示唆している。確かにパレードは個人のアイデンティティを問わず多くの人が参加するが、その中でのゲイ男性という存在が実行委員によって特別視されていたり、ゲイ男性が特別なパフォーマンスを行っていたのであれば、その側面を取り立てて論じる必要もあると思われる。よって、パレードでゲイ男性はどのような位置を占めており、どのようなパフォーマンスをしてきたのか、という点からもパレードを捉える。

そして三つ目の軸は、札幌のパレードから広くパレードという現象一般について論じつつ、札幌のパレードを内在的に見、その特徴にも注目するということである。日本のパレードはいくつもの地域で開催されてきているが、これまで研究されてきたのは東京のパレードのみである。しかしパレードも地域によってその内容や全体の志向性は異なる (Bruce 2016)。例えば、ケヴィン・マークウェルとゴードン・ウェイトはオーストラリアの4つの地域で行われているLGBTプライド／フェスティバルを比較分析し、地域によって社会変革を主眼とするのか、それともコミュニティ形成や自己肯定感の形成を主眼とするのか、企業などと協力をするのか、それともそれを否定するのか、といった違いがあることを示している。こうした思想的な側面以外でも、物理的な空間の会場設計の異なりによって行われるパフォーマンスに違いが生まれることを指摘している (Markwell & Waitt 2009)。後に紹介するように、札幌のパレードは確かに東京でのパレードをきっかけとしているが、東京とまったく同じ思想やパフォーマンスを共有していたとは言えない。よって、東京のパレードやパレード一般の議論にも触れつつ、札幌のパレードの特徴に注目する。

1−3　分析対象・資料

本章で分析対象とするのは1996年から北海道札幌市で開催されてきたパレードである。札幌で

(3)　ここで言うゲイビジネスとは、ゲイ男性によってゲイ男性向けに行われるビジネスのことを指している。主に、ゲイバー、ゲイポルノ制作会社、ゲイ男性向け性風俗、ゲイショップなどである。ゲイ男性にフレンドリーな一般企業のことではない。

表 4-1　札幌におけるセクシュアルマイノリティのパレードの年表

開催年月日	開催名	参加者数（人）
1996 年 6 月 30 日	第 1 回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ	285
1997 年 6 月 29 日	第 2 回セクシャルマイノリティ・プライドマーチ in 札幌	280
1998 年 8 月 23 日	第 3 回セクシャルマイノリティ・プライドマーチ in 札幌	350
1999 年 9 月 19 日	第 4 回レインボーマーチ in 札幌	500
2001 年 9 月 16 日	第 5 回レインボーマーチ in 札幌	590
2002 年 9 月 15 日	第 6 回レインボーマーチ in 札幌	630
2003 年 9 月 14 日	第 7 回レインボーマーチ in 札幌	896
2004 年 9 月 19 日	第 8 回レインボーマーチ in 札幌	1000
2005 年 9 月 18 日	第 9 回レインボーマーチ札幌	940
2006 年 9 月 17 日	第 10 回レインボーマーチ札幌	1116
2007 年 9 月 16 日	第 11 回レインボーマーチ札幌	961
2008 年 9 月 14 日	第 12 回レインボーマーチ札幌	950
2009 年 9 月 21 日	第 13 回レインボーマーチ札幌	940
2010 年 9 月 19 日	第 14 回レインボーマーチ札幌	700
2011 年 9 月 18 日	第 15 回レインボーマーチ札幌	700
2013 年 9 月 15 日	レインボーマーチ札幌 ファイナル	1107
2017 年 10 月 8 日	さっぽろレインボーマーチ＋	451
2018 年 10 月 7 日	さっぽろレインボープライド	680
2019 年 8 月 15 日	さっぽろレインボープライド 2019	731

※1　鈴木（2016）、札幌のパレードの公式ガイドブック、札幌ミーティングのニュースレター、ゲイ雑誌の記事、報道記事などを参照し作成。
※2 「参加者数」はパレードを行進した人数。主催者発表と警察発表の二種類が発表されている年もあるが、基本的に主催者発表の参加者数を記載している。
※3　1996 年のパレードの名称は、公式の報告集でも「第 1 回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ」、「第 1 回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ札幌」、「第 1 回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ in 札幌」などの揺らぎがあり、どれが正式名称か不明。

のパレードを分析対象とする理由のひとつは、日本の一地域でのパレードの開催数としては最多であるからである。札幌でのパレードは 1996 年から 2019 年までに、数度の休止を挟みながら 19 回開催されてきた（表 4-1）。対して東京でのパレードは 1994 年に始まり、2019 年までの開催数は 18 回である（表 4-2）。1997 年から 1999 年にも一応開催されているが、1997 年の参加者は 100 名ほど（BADI1998/1:245）、1998 年はインターネット上でしか開催が告知されず、参加者は 20 人名ほどであったとされている（BADI1998/11:67）。大幅に規模が縮小した理由は後述するが、この点からこの 3 年間は実質未開催と捉えられている(4)。札幌と東京に続くパレードは大阪で 2006 年から始まっており、東京と札幌での開始から約 10 年後であった。札幌のパレードは地方都市での開催でありながらも東京に引けを取らない活発さを保ってきたことがわかる。

(4)　1997 年にはパレードの実質休止を受けて、レズビアンを中心とする「ダイクマーチ」が開催されている。1998 年にはセクシュアルマイノリティと労働問題をテーマとする「セクシュアル・マイノリティ・レイバーズ・マーチ」が開催されている。1997 年から 1999 年に開催された南定四郎のパレードも含め、これらを開催数に入れるかによって、全開催数が変わる。表 4-2 では「第 1 回東京レズビアン・ゲイ・パレード」の延長線上にあるパレードのみを記載している。

表 4-2　東京におけるセクシュアルマイノリティのパレードの年表

開催年月日	開催名	参加者数（人）
1994 年 8 月 28 日	第 1 回　東京レズビアン・ゲイ・パレード	1134
1995 年 8 月 27 日	第 2 回　東京レズビアン・ゲイ・パレード	2156
1996 年 8 月 25 日	第 3 回　東京レズビアン・ゲイ・パレード	1257
1997 年 8 月 17 日	第 4 回　東京レズビアン・ゲイ・パレード	100
1998 年 8 月 9 日	第 5 回　東京レズビアン・ゲイ・パレード（？）	20
1999 年?月?日	（？）	?
2000 年 8 月 27 日	東京レズビアン&ゲイパレード	2000
2001 年 8 月 26 日	東京レズビアン&ゲイパレード 2001	?
2002 年 9 月 8 日	東京レズビアン&ゲイパレード 2002	2700
2005 年 8 月 13 日	東京レズビアン&ゲイパレード 2005	3500
2006 年 8 月 12 日	東京レズビアン&ゲイパレード 2006	2292
2007 年 8 月 11 日	東京プライドパレード	2800
2010 年 8 月 14 日	東京プライドパレード	2300
2012 年 4 月 29 日	東京レインボープライド 2012	1500
2013 年 4 月 28 日	東京レインボープライド 2013	2100
2014 年 4 月 27 日	東京レインボープライド 2014	3000
2015 年 4 月 26 日	東京レインボープライド 2015	3000
2016 年 5 月 8 日	東京レインボープライド 2016	4500
2017 年 5 月 7 日	東京レインボープライド 2017	5000
2018 年 5 月 6 日	東京レインボープライド 2018	7000
2019 年 4 月 28 日	東京レインボープライド 2019	10915

※1　山縣（2017）、ゲイ雑誌の記事、東京レインボープライド公式ホームページに掲載されている過去のパレードについての記事（東京レインボープライド 2018、東京レインボープライド 2019）を主に参照して作成。
※2　「参加者数」はパレードを行進した人数。同期間に開催される「フェスタ」会場への参加者数、関連イベントへの参加者数を含む総動員数ではない。
※3　網掛けの箇所は実質未開催と捉えられている回。情報が少なく、正式な開催名など不確定情報が多いため、「？」を付してある。

2 点目は、札幌でのパレードは札幌ミーティングによって開始されたため、前章の議論をより活かすことができるからである。「政治」と「祭」がひとつのキーワードとなってきたパレードでも、対内的活動と対外的活動、「遊び」と社会変革活動の議論は中心的関心と言える。対外的かつ対内的な活動であるパレードでどのような実践が行われていたのかを論じるにあたって、前章の札幌ミーティングについての分析を下敷きにすることで、他地域のパレードを分析するより示唆的な分析を行うことができると考えられる。

3 点目は、資料が豊富に残されている点にある。特に初期のパレードは札幌ミーティングが主体に行っていたため、パレードについての語りや情報がニュースレター内に豊富に残されている。またパレードごとに当日や関連イベントの様子を撮影した映像が VHS や DVD で実行委員会によって販売・配布されてきており、映像資料も豊富に残されている。よって、パレードにまつわる言説のみならず、当日のパレード行進の様子も分析に含めることができる。1996 年からの変遷を視野に含めることを考えると、文字資料のみならず映像資料が残されていることは、パレードの実際のパフォ

ーマンスを分析するには有利に働く。

具体的な分析資料は、札幌ミーティングのニュースレター、公式ガイドブック、『バディ』をはじめとするゲイ雑誌における記事、当時の映像資料・写真、北海道・札幌の地元雑誌による報道記事であり、文字資料と映像・画像資料の双方を扱う。

次節から分析に移るが、はじめに全体の議論の流れを示しておく。第2節では、パレードにまつわる中心的な議論である、〈パレードは「政治」なのか「祭」なのか〉という問題が札幌のパレードでいかに議論されてきたのかを論じることで、札幌のパレードの基本的な性格についてまとめる。堀川による議論や先行する東京のパレードの事例にも触れつつ、札幌のパレードでの議論を主に実行委員の言説からまとめる。第3節では、パレードの名称や目的の変化に注目し、パレードの目的と方向づけがどのような意図から設定されていたのか、「LGBT の連帯」の運動として捉えられるパレードで、「ゲイ」というカテゴリー／アイデンティティ（やレズビアンなどのその他のアイデンティティ／カテゴリー）がどのように扱われてきたのか・捉えられてきたのかという点について論じる。第2節と第3節は、パレード全体の思想面の分析と言える。第4節では、実際のパレード行進に注目し、その場でどのような演出がされているのかを、フロート（山車）や先導車から発せられるメッセージと、行進者によるパフォーマンス（主に実行委員によって方向付けられるパフォーマンス）に注目して分析をする。差異化／同化、祭／政治といったパフォーマンスを当日の実際の行動から分析する。第5節では、パレードの中でのゲイ男性に注目し、パレードにおける彼らの立ち位置や彼らのパフォーマンスについて論じ、ゲイ男性がパレードの全体の志向にいかなる影響を与えていたのか、ゲイであることがどのように表象されていたのかを分析する。

「パレード」という言葉について、簡単に補足をしておく。一般的に「パレード」という言葉が用いられる際には、車道を借りて行われるパレード行進のみを指す場合と、基本的にパレード行進を指し示しながらも、その前後・周辺で開催されるイベントも含む総称として用いられる場合がある。本章では基本的に「パレード」という言葉を用いるときは後者を意味するが、パレード行進のみに限定したりそれを強調して言及するときは「パレード行進」という言葉を使用する。

2．「政治」と「祭」をめぐる論争

本節では、パレードは「政治」か「祭」かという問いが札幌のパレードでいかに議論されてきたのかを取り上げ、パレードのあり方についての言説をまとめる。堀川が東京のパレードを事例に論じたように、「政治」と「祭」という側面は重要である。なぜならこの議論は、誰を対象にいかなる目的のもとでどのようなパフォーマンスによって、セクシュアルマイノリティやゲイを表象するのかということに関わるからである。しかし堀川が描く「デモ」から「祭」へという変化が札幌のパレードにも当てはまるかは不明であるため、札幌のパレードという文脈でどのような議論が行われてきたのかをまとめる必要がある。また、そもそもパレードに見られる「政治」と「祭」という二つのイメージは、堀川が言うように〈「政治」から「祭」へ〉という単純な移行として捉えることができるのであろうか。「政治を伴った祭り（party with politics）」（Brown 2007）と表現されるように、両者は複雑に交差しているのではないだろうか。

2－1　東京のパレードでの〈事件〉と札幌のパレード

すでに触れたように、札幌でのパレードを始めたのは札幌ミーティングであった。札幌ミーティングが活動をしている間は主にそのメンバーによって実行委員会が構成されていたが、活動が休止状態になってからもその都度有志によって開催が継続されてきた(5)。札幌でパレードが開催されるきっかけとなったのは、東京で 1994 年からパレードが開催されたこと、そして 1994 年と 1995 年のパレードに札幌ミーティングのメンバーが参加したことであった。これをきっかけに、札幌でもパレードを開催したいという声が札幌ミーティング内で登場し始めた。札幌の第１回のパレード後にレズビアンのメンバーは、東京のパレードに参加してから札幌でのパレード開催までの経緯を次のように回顧している。

> 3 年前、東京で初めてパレードが行われた時、パートナーだった□□君が、札幌でもやれるよ、やろうよと言っていたのを思い出す。その時、私も含めて誰もばかにして耳を貸さなかった。あまりにも非現実的な事に聞こえたからだ。その次の年、私が東京のパレードに出て、何か物足りなさを感じ、札幌でもやれたら・・と、かわらばんに書いたのが去年の秋。でもやっぱりその時、札幌でやれるなんて、まだまだ思えなかった私。その年の暮れ、○○○○がやろう！と言い出し、ハッとした。そうだ！！どんなことだってイメージできたものは、必ず実現できるはず。やれると思った人には、必ずできるし、まだやれないと思っている人には、永遠にやれやしないんだ。私たちは夢を見た。あとは、その夢を実現したいと思うかどうかなんだ。　（NL1996/8:8, □と○は人名の伏字）

東京でのパレードに参加し札幌でも開催をしたいと思ったこと、東京のパレードに何か物足りなさを感じ札幌独自のパレードを行いたいと思ったことが語られているが、同時にそれは非現実的なものとしても捉えられていた。札幌での第１回パレード開催を告知する札幌ミーティングのニュースレターの記事は、「マジ？ホントにやるの？第１回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ in 札幌」（NL1996/4:15）と題されており、自分たちによる企画にも関わらず、驚き・不安・戸惑いがこのタイトルで表現されている。札幌におけるパレードはこれほど非現実的なものと思われていたのである。東京でのパレードに参加をすることは「旅の恥はかきすて」（NL1996/4:15）とも表現されるように、自分の地元ではないという条件のもと、可能であった。それに対して、地元札幌でパレードを開催するのは、いつ知人に見られてもおかしくはないという恐怖と隣り合わせであったため、開催・参加は不可能だと当然のようにみなされていた。しかし第３章でも見たように、地域におけるコミュニティ形成を重要な目的のひとつとしていた札幌ミーティングは、地元でパレードを開催することにこそ意義があると考えていた。

> 同性愛者であることを誇りをもって受け入れ合い、同性愛者の孤立を解消し、地域の同性愛

(5)　ただ開始当初から札幌ミーティング自体が実行委員会を兼ねていたわけではないと言われている。札幌ミーティングのメンバーは次のように言う。「パレードと言うのは『札幌ミーティング』が主催じゃないんですね。『レインボーマーチ実行委員会』と言うものをちゃんと組織して行っているイベントなんです。／メンバーに関してはほぼ、ミーティングなんすけど。」（NL1999/9:57）

者に正確で有用な情報を提供していくには、もっと地域に根ざした活動を展開していく必要があります。東京のパレードだけに参加するのではなく、活動の本拠地である札幌で新しいパレードを作り上げていくことが大切だと考えます。 (NL1996/4:15)

こうして、地域に根ざした活動を行うという目的を達成するために、札幌でのパレード開催へと踏み切ったのであった。第1回と第2回（1996年と1997年）の札幌のパレードの時点では「政治」と「祭」をめぐる議論はほとんど行われていないが、東京での1996年（第3回）のパレードで生じた〈事件〉以降、札幌ミーティング内でもその議論が登場するようになる。

1996年の東京のパレードで生じた〈事件〉とは、パレードに関する実質的な決定権を持っていた、継続委員と呼ばれる中心的実行委員と、その運営方法に疑念を抱いた参加者との間での衝突であったと言われている。この事件は現在でも〈事実〉の共有に至っておらず、正確にこの出来事をまとめることは困難である。しかし、この出来事をめぐってどのような議論が行われたのか、その議論がその後のパレードの方向性にいかなる影響をもたらしたのかということを把握することは可能である。改めて簡単に紹介をすると、東京のパレードは1996年に南定四郎の呼びかけによって始まった。南定四郎は1974年にゲイ雑誌『アドン』を創刊し、1984年にはIGA日本（のちにILGA日本）を設立した人物であった。南はこれらの活動によって、日本におけるゲイの社会運動を牽引してきた人物である。以下で見る1996年の東京のパレードへの批判は、主に南によるパレードの運営形態に対する批判になっている。

レズビアン・バイセクシュアル女性向けの雑誌『アニース』（1997年冬号）で、東京の1996年（第3回）のパレードに参加した人らによる座談会が開かれ、この事件の問題点を3つにまとめている。1点目は、パレードの開催以前に生じた出来事として、意見書をつけて実行委員会に参加申し込みをした京都のグループである「プロジェクトP」が申し込みを断られたことを挙げている。プロジェクトPのメンバーが運営するウェブサイト『barairo.net』（1997）に掲載されている意見書の内容を参照すると、プロジェクトPが提出した1点目の意見は、継続委員によって提示された「第3回L&Gパレード実行委員会基本方針」（以下、基本方針）内に、実行委員になるためには「レズビアン・ゲイ解放運動において一定の活動実績があること」という要件があることは不適切なのではないかというものである。その活動実績とは具体的に何で、誰が、どういう基準で判断するのかが不明確であること、その文言がレズビアン・ゲイ以外のセクシュアルマイノリティを排除していることを問題視していた。活動実績の有無を実行委員会の参加条件とする基準が設けられたのは、1995年（第2回）のパレードの実行委員に社会変革意識がなかったと南定四郎が捉えたことをきっかけとしている（堀川2015:70）。プロジェクトPが提出した2点目の意見は、基本方針ではパレードが「祭」ではなく「社会的訴えを行うためのデモンストレーション」であると事前に画定／確定され、その位置付けの決定に参加者の意向が無視されていることを挙げている。パレードの方向性が継続委員によってのみ決められていることを問題視しての意見である。南はパレードを「抗議活動」、「デモンストレーション」として捉えており、「祭」のような場としては意識していなかったため（堀川2015:70-71）、「祭」のようなパフォーマンスが制限された。プロジェクトPが提出した3点目の意見は、「レズビアン・ゲイ」の可視的な政治行動のみが前面に打ち出されることで、その他のセクシュアルマイノリティの存在や多くの人々の間にあるネットワークを無視しているという意見である。

4 点目は、パレードの実行委員になるためにはパレードの基本方針を承認しなければならないことを疑問視するものであり、「みんなのもの」としてのパレードであるのならば、条件なしで誰もが実行委員になれるべきではないのかという意見である。

『アニース』の座談会で挙げられた 2 点目の問題は、「第 3 回レズビアン・ゲイ・パレード宣言」が時間をかけて検討されず、パレード後の集会で継続委員がそれを参加者の拍手によって（強行）採択しようとしたことである。「第 3 回レズビアン・ゲイ・パレード宣言」とは、日本政府に対して、セクシュアルマイノリティに関する今後の取り組みを要求する声明・要望書であり、南定四郎を中心とする継続委員はこの宣言を「レズビアン・ゲイパレード」の名で東京都知事と総理大臣に提出しようとしていた。しかしその内容の作成と検討は継続委員によって行われたのみであったため、十分な検討がされていないと判断した参加者が異議を申し立てたのであった。実行委員がパレード後の集会で宣言案を読み上げ拍手での採択を呼びかけた際に会場から「異議あり」の声が叫ばれ、参加者らがステージに登り乱闘になった。札幌ミーティングのニュースレターではこの出来事を、「『規則を受け入れない奴はパレード実行委員会に入れん！！』という南さん達と『パレードのことは参加するみんなで決めるハズ』というそれ以外の人達の争いでした」（NL1996/9:7）とまとめている。

そして 3 点目は、この乱闘の中、宣言の採決に反対した女性参加者に対して、宣言の採択を求めた実行委員が「レズのくせに、なにしやがるのか」と発言したことである。パレードという運動内で女性差別・レズビアン差別が生じたことが問題とされたのである。この「レズのくせに」発言をした実行委員はのちに南定四郎編集による『アドン』で、「僕はたまたますぐそばにいた□□□に『あんたはレズビアンなのに、何なんだ』と言った。（…）『レズビアンなのに、何なんだ』という意味はもちろん『レズビアン・ゲイ・パレードを他ならぬレズビアンであるあんたがなぜ妨害するのか、理由を言ってみろ』という意味であり、それを□□□が誤解するわけがない」（ADON1996/11:8, □は人名の伏字）と釈明している。

ここで挙げられた点はすべて、広くパレードの民主性（参加者の意向が最大限反映されること、誰もが実行委員会にも当日のパレードにも自由に参加する権利があること）の欠如を問題視している。継続委員によって設けられた参加資格を満たさないと実行委員会に参加することができないこと、パレードの方向性やあるべきパフォーマンスが継続委員によって制限されていること、それらに賛同できない場合はパレードから排除されること、セクシュアルマイノリティの中の特定の人が差別・排除されること、といった参加者の意向や多様性を欠いた運営方法が問題視されていたのである。これらの東京での出来事と札幌ミーティングの関係について確認しておくと、この東京の第 3 回のパレードが開催された 1996 年 8 月 25 日の 2 ヶ月前の 6 月 30 日に札幌で第 1 回となるパレードが開催されており、その〈成功〉の直後にこの〈事件〉は生じたのだった。また乱闘が生じた集会の司会を札幌ミーティングのメンバーが行っており、当日は札幌ミーティングのメンバーも多く参加をしていたことからも、無視できる出来事ではなかった。

南定四郎をはじめとする継続委員らはパレード後に発行された『アドン』で当日の出来事を振り返り、「パレード破壊者の扇動」（ADON1996/11:11）を批判する記事を寄稿している。そして札幌ミーティングはこの『アドン』の記事も参照しながら、この〈事件〉について数点の見解を出してい

る[6]。

1点目は、プロジェクトPがパレード実行委員会登録を拒否された問題についてであり、『アニース』座談会で出された1点目の問題と共通している。「権限の明確でないたった3人（…）だけのLGパレード継続委員会なるものがパレード実行委員会基本方針を決定すること自体が不当であり、それに異議があるというだけで特定の団体の実行委員会への加入を拒否するのは最初から民主的討論を拒否する不適切な対応であったと考える」（NL1996/9:7）と、運営の非民主性を問題視している。

2点目は、パレード宣言の事前討議についてであり、『アニース』座談会で出された2点目の問題と共通している。「『宣言』の内容が十分に民主的な議論を尽くした上で当日のプライド集会に諮られたとはいえず、一部の実行委員が勝手に起草した文章をたった一度の実行委員会での討議で決定したのは手続きに問題があったと考える」（NL1996/9:7）と、宣言採択が非民主的に行われたことを問題視している。

3点目は、パレード宣言が採択されたか否かについての見解であり、札幌ミーティングは宣言は採択されていないとの見解を示している。『アドン』での南による記事では、「プログラムの順序にしたがって、□□□□運営本部長が『第三回レズビアン・ゲイ・パレード宣言』を朗読し、『拍手をもって採択をお願いします』と結んだ。会場から一斉に拍手が起こり、『第三回レズビアン・ゲイ・パレード宣言』は採択された」（ADON1996/11:11, □は人名の伏字）と書かれているが、札幌ミーティングは、ステージでの混乱により宣言の採択は棚上げ・取り下げされたとの見解を示している。

そして4点目は、パレードが「政治的デモ」であるのか、「お祭り」であるのかについての見解である。「そもそも両者の境界線はあいまいであり、『政治的でない』ことを理由に参加を断ることは意味がないと考える。今まで存在することすら無視され、社会的存在であることを黙殺されてきた性的マイノリティーが、パレードを行い、可視的に存在をアピールすること自体が『政治的』であるといえる。『お祭り』だって立派な政治であり、特定の狭い政治観の押し付けは我々の運動の幅を狭める結果となり、有害である」（NL1996/9:8）と、「政治」と「祭」の境界線の曖昧さを主張している。

ここで「政治」と「祭」という言葉が用いられる際、継続委員が言う「政治」と「祭」と札幌ミーティングのそれが異なる基準によって語られていることがわかる。継続委員にとっての「政治」とは、明確な目的（具体的な制度変革の要求、特定の権利の獲得など）を持って対社会的にラディカルな働きかけをする活動のみを指し示すのに対して、札幌ミーティングにとっての「政治」とは、セクシュアルマイノリティが存在をアピールすること、つまりいかなる形であれパレード行進を実施すること自体がセクシュアルマイノリティを可視化させることを「政治」と呼んでいるのだ。

札幌ミーティングによって出された見解は、『アニース』座談会で出された問題点とも、プロジェクトPによって提出された疑問点とも一致しており、それらはパレードの民主性と政治／祭の区分について問う見解であった。ではこれらの事件を踏まえた後の札幌ミーティングで「政治」と「祭」はいかに議論され、どのようなパレードが作られていったのであろうか。

---

(6)　出された見解は7点であるが、ここでは4点のみを取り上げる。取り上げない3点は、「管理売春（ウリセン）資本が利潤を守るために同性愛者の解放に反対しているとの認識について」、「全国の諸団体に期待すること」、「これからの札幌ミーティング」についての見解であり、本章の議論との関連は薄い内容であるため、ここでは割愛する。

2-2　民主的な場としてのパレード

パレードの民主性に関わる言説として、パレードをいかなる場と捉えるのかという議論がある。パレードには主催者と参加者がおり、主催者が企画し何かしらの方向付けがされるパレードに参加者が参加するというのが、両者の基本的関係性である。この関係性では、参加者はパレードの方向性に同意をした上で参加することになるが、その方向性に同意をすべきか否かという点が東京の第3回のパレードでは問題となっていた。2003年に札幌で行われた「徹底討論！どうする、日本のパレード」というテーマのシンポジウム(7)では、札幌のパレードの実行委員によって、札幌のパレードが次のように性格付けられている。

> 札幌でぼくも去年までかかわっていて考えていたことは、パレードは一つの場である、われわれは場を提供するだけで、そこになにを持ち込んでもいい。禁止事項は極力つくりたくないということでした。服装であれ、行進の仕方であれ、警察からああしろこうしろ言われるんです。トラックの荷台に人を乗せるなとか。でも、なんでも持ち込んでください、と。政治的なこともどんどん持ち込んでください。そのために実行委員会のほうでもプラカードを用意したりして呼び水にもします。（関根ほか2003:44）

パレードは参加者個人個人が自由に主義主張を唱えたり自由な格好でパフォーマンスをするための「場」であると捉えられている。政治的なことでも祭り的なことでも「なんでも持ち込んでください」との語りには、札幌のパレードは、実行委員によるトップダウンの目的によって参加者各自が持ちうる目的や意図を制限しないこと、セクシュアルマイノリティに肯定的である限り誰もが自由に主張を唱えたりパフォーマンスできる民主的な場であることが示されている(8)。

パレードは参加者が自由に表現をする民主的な場であるということは、その参加には参加資格やメンバーシップ、そしてあるべき姿を要求しないということである。これを札幌ミーティングと比較してみると、それにはメンバーシップがあり、会費と規約もあり、「ゲイ」としてのあるべき姿の議論も行われており、パレードとは根本的に異なる運営形態であった。また札幌ミーティングではメンバーシップを持った人々が活動の中心であるのに対して、パレードは実行委員ではない人々によるパレード当日のみの参加によって成り立つ活動であるため、どれほど人々に開かれた活動であるか、という点で両者は大きく異なるのである。

2000年の東京のパレード後に札幌のパレードを振り返る次の語りにも、パレードは参加者主体であるという同様の趣旨が表れている。

> 札幌のパレードは「お祭り」であるべきか？ということなのですが。去年の札幌パレードは実質「お祭り」だったんじゃないのかな？／どんなパレードでも主催者側にはもちろん意図

(7)　登壇者は、札幌のパレードで実行委員長を務めた経験のある3人、東京のパレードで実行委員長を務めた経験のある2人、『バディ』の編者1人の、計6人である。

(8)　アメリカのパレードについて分析をしたブルースも、セクシュアルマイノリティのパレードの興味深い点のひとつとして、セクシュアルマイノリティに対する肯定的なメッセージである限りにおいて、その内容は主催者からトップダウンに決まるのではなく、参加者からボトムアップで決まる点を挙げている（Bruce 2016:7-8）。

があると思うけど。主催者がどんなスローガンを掲げたって、パレードが始まってしまえばパレードは参加者ひとりひとりのもの(…)。去年のパレードはそういう意味で十分「お祭り」的だったと思います。／そうであるならば、強烈な主張を主催者が用意するのはちょっとなぁと思います。(…) それならばパレードの主催者の最大の役割は「楽しく自己主張出来るプラットフォームを作ること」なんじゃないかな？ (NL2000/8:24)

この語りでは、パレード主催者側が明確な目的・意図を用意したとしても、そもそも参加者はそれに制限されずに自由なパフォーマンスを行うため、目的の提示自体があまり意味を持たないことが指摘されている。しかし、では一切の方向付けが必要ではないのかというと、必ずしもそういう訳ではない。必要ではないのは「強烈な主張を主催者が用意する」ことであり、何かしらの方向性を設けることの一切が否定される訳ではない。次の語りも同様に、緩やかな方向性は必要だと指摘している。

ぼくは「お祭り」にも、「場の提供」にも反対なんかしてないよ〜。それどころか、まさにこれまでの札幌の方針そのものじゃない。問題はなんの主張もない（□□□□いわく中途半端な主張すら)、単なるバカ騒ぎは困るということ。主催者として大まかなオリエンテーションは必要だろうと思う。 (NL2000/8:26, □は人名の伏せ字)

参加者にパレードの在り方を委ねながらも、パレードの主催者からも何かしらの方向付けが行われるべきであることを主張する背景には、2000 年に行われた東京のパレードの影響が少なからずある。南定四郎の 1990 年代のパレードからの離脱を図り、砂川秀樹が〈復活〉させた 2000 年の東京のパレードは、統一的な政治的スローガンを示さずに行うことで、より多くの人を集めようとした（砂川・野口・伏見 2001:238)。しかしそのパレードに参加をした札幌ミーティングのメンバーは、「東京のパレードがなんか焦点のぼやけた印象を人々に与えたのは、やっぱり『主張』がなかったからじゃないかな。政治的になるのを避けるばかりに。(…) 最低限の『主張』はやっぱり不可欠」(NL2000/8:23) と、「主張」の必要性を唱えている。つまり、何かしらの主義主張を設けることで大まかな方向付けを行った上で、参加者にパフォーマンスの自由を確保するというのが札幌のパレードということになる。

一方で、そもそも「政治」と「祭」という二項対立を否定する語りもある。

今回のパレードで僕が一番気になっていたのは、お祭お祭と強調されるたびにその対立項目としてリブ批判というのがあるような気がして (笑) (…) 祭り＝政治と捉えられないなんて、なんてダサいのと。(…) マルディグラのように、祭りを極めればもうそれだけで、「政治」でしょう。(…) なんか基本に立ち返るって感じかな。歩く事に意義がある。(NL2000/8:22)

この認識は、第 3 回の東京のパレードでの事件に対する札幌ミーティングの見解で、「今まで存在することすら無視され、社会的存在であることを黙殺されてきた性的マイノリティーが、パレードを行い、可視的に存在をアピールすること自体が『政治的』であるといえる。『お祭り』だって立派

な政治であ」る（NL1996/9:8）と言われていた点と共通している。つまり、パレードがいかなる主義主張を掲げようとも、ただセクシュアルマイノリティがセクシュアルマイノリティであることを主張しながら街中を歩くことで彼ら／彼女らが可視化されること自体に「政治」性があるとの指摘である。ここでの「政治」はその意味合いが拡大されており、「政治」と「祭」という二項対立自体が無効化されている。

可視化という「政治」的働きをパレードが必然的に前提とするのであれば、「政治」と「祭」という二項対立自体が無効化され、それ以上その二項対立を議論する必要はなくなるはずである。しかしそれでも「政治」と「祭」の議論が行われてきたのは、「可視化」＋「何か」、つまり「可視化」に加え何かしらの主張や大まかな方向付けを求めようとしていたからに他ならない。ここに、前章で論じた「遊び」と社会変革活動の関係性が関わってくるのだ。つまり、いくら「可視化」という「政治」がパレードの基盤にあっても、「単なるバカ騒ぎ」という「遊び」に留まるのではなく、それと並行して／を通して／をきっかけとして、「可視化」以外の社会変革活動も行うことの必要性が議論されているのである。ここで重要になってくる議論が、パレードは誰のための活動なのか、という語りである。

2−3 「遊び」と社会変革活動の未分化

第1回の札幌のパレードから運営に携わってきた人物は、札幌のパレードの変遷を次のように語っている。

> ぼくは一回目からの参加ですが、札幌ははじめはすごく政治的ぽかったですよね。自分はそれだけだとあまり楽しくないかなと思って、三回目ごろはお祭りっぽい要素を入れたり。でも、それも二回ぐらいやると飽きてきて（笑い）、やっぱりパレードをやるんだったら政治的なものもないとおもしろくない。じゃあ、両方いっしょにやればいいんだと思って、今回、北海道知事選と札幌市長選の候補者に公開質問状を送ったり、プライド集会に市長の出席を要請したり、お祭的なところでは野外レイブや飲み屋さん主催のゲイナイトがあったり、と…。（関根ほか2003:44）

この語りによると、札幌のパレードは、「政治」としてのパレード（1996−1997年）から「祭」としてのパレード（1998−1999年）へ、そして「政治と祭の融合」(9)としてのパレード（2001年以降）へと変わっていったという。そしてこの語りでは、北海道知事選挙と札幌市長選挙の候補者に公開質問状を送ることと、プライド集会（パレード後の集会）に市長の出席を要請することが「政治的」なものとして、野外レイブやゲイバー主催のゲイナイトが「祭的」なものとして捉えられている。つまり、「政治」と「祭」は、パレードが誰への働きかけを意図しているのか、パフォーマンスが主に誰に向けられているのかによって異なるのだ。「政治」と「祭」の二項対立は、本研究の主軸である、当事者をターゲットとする自己変革活動と、非当事者をターゲットとする社会変革活動という

(9) 「政治と祭りの融合」という言葉は、2013年のパレードのアフターパーティー（パレード後のクラブイベント）で使用されていた言葉である。札幌のパレードの歴史を振り返る映像が実行委員による語りとともに流され、その中で使用されていた。

軸をめぐる論争であると言えるのだ。初期のパレードについては他の参加者も「パレードは、最初からかなりリブリブしたコンセプトで、お祭りという位置付けじゃないんです」(関根ほか2003:18)と語るが、これも対社会的な側面が強かったことを「リブリブ」という言葉で表している。

「政治」から「政治と祭りの融合」へという方向性の変化は、堀川の分析とも、伏見憲明と野口勝三が指摘した運動の潮流とも重なり合っている。2004年に伏見と野口が行った対談でそれまでのゲイ男性の歴史を振り返る中、野口は1990年代半ば以降の運動の特徴を次のように指摘している。

> あえてグループ系のゲイと一般のゲイを分けてみた場合、運動系と無関係に「遊び」を楽しむ中からゲイであることを肯定しようという動きが他方であり、94年に『バディ』(テラ出版)が創刊してゲイメディアの影響力が波及する中で、運動系以外の一般のゲイがゲイシーンを動かす時代が、90年代後半に始まっていくといえるのではないか。 (伏見 2004:19)

グループ系のゲイ(≒社会変革活動に携わるゲイ男性)ではなく、一般のゲイ(≒「遊び」を楽しむゲイ男性)がグループ系とは別の様式によって自己肯定を行うことでゲイ男性を取り巻く社会状況を率いていったことが語られている。伏見はこの指摘をパレードの文脈で次のように語っている。

> 90年代前半は、グループ活動が盛んになった時代だけど、一方でゲイナイトなどを通して自己を肯定するような感覚が出てきて、パレードが一つの起点となって、二つの動きがゆるく接続したという感じだと思う。 (伏見 2004:20-21)

この対談はゲイについて主題の対談であるため、ゲイ男性との関わりにおいてのみパレードが語られているが、伏見によるとパレードは「ゲイナイト」と「グループ活動」が接続された活動である。つまり、対内的活動の中でも特に「遊び」としての特徴のある「ゲイナイト」と、「グループ活動」が取り組んでいた対社会的な社会変革活動が融合したのがパレードであったと言える(10)。「祭」の色合いが強くなったと言われている1999年(第4回)の札幌のパレードの語りを見てみると、次のように語られている。

> 〔パレードの意味や楽しさを人々に伝えられたのは〕今年のパレードと去年との違う点、「対ヘテロ」ではなく「楽しもう」といったニュアンスをみんなが感じてくれた結果だと思っています。／しかし社会的なアピールである以上、ヘテロにとってより分かりやすいイベントにしていかなければならないという課題、つまりゲイにとっての「お祭り」がヘテロにとってどういう意味があるかということを訴えていく作業についてはもう少し力をいれていかなくてはいけないということも実感しました。／「楽しそうなイベント」の奥にどんな状況があり、どうしてそれが必要なのか、という部分を社会や参加者自身に考えさせることがで

(10) 野口は続けて、「パレードというものが当初から、政治的なゲイと、そうでないゲイを結びつける場であったのは間違いないと思います」(伏見2004:20-21)と発言している。

きてこその、「パレード」なのだと僕は思っているからです。　　(NL1999/9:54)

この語りでは、「『対ヘテロ』ではなく『楽しもう』といったニュアンス」へとパレードを変えていったと示されている。言い換えると、パレードが社会変革から参加者の自己変革・自己実現＝「遊び」へとその目的を変えていったということである。そしてその「祭」が異性愛者にとっていかなる意義があるのかを検討することの必要性が指摘されている。

パレードは「政治」か「祭」かという議論がされてきた理由のひとつは、札幌ミーティングの活動の中で議論されていた、札幌ミーティングをただのコミュニケーション＝「遊び」の場とするか否かの議論が引き継がれていたためであり、それが別の形で表出したのである。パレードでの「遊び」(参加者がただ楽しむこと)と並行して／を通して／をきっかけとして、いかに社会変革を行うかが模索されていたのだ。可視化はパレードが前提として持つ政治的機能であるため、可視化に加え何かしらの働きかけを社会に対して行うことが模索されていたのだ。

パレードは「政治」か「祭」かという議論が繰り返されてきたもうひとつの理由は、パレードが「政治」と「祭」、社会変革活動と「遊び」の棲み分けが困難なイベントであるからなのだ。第1章から第3章までの分析を振り返ってみると、対社会的な活動と対当事者的な活動がある程度棲み分けられて行われてきたことがわかる。『バディ』ではゲイ男性のみをターゲットとした活動として「ハッピー」というキーワードが用いられ、ゲイマンガではその表象がゲイ男性向けゲイマンガと一般向けゲイマンガで明確に使い分けられていた。札幌ミーティングの活動では、社会変革活動(抗議活動など)と「遊び」(ただコミュニケーションをしたり楽しむことなど)は切り分けて行われながら、接続されていた。しかし、パレードという公的な場での大々的な活動であり、それに参加する人(およびそれを見る人、働きかけの対象となる人)に、当事者も非当事者も必然的に含まれてしまうというイベントの性質上、活動の棲み分けもターゲットの分別も困難となる。パレードは自己変革活動であり、「遊び」としての特徴が強いと考える人は、それが「政治的デモ」で、社会変革の「真面目」な活動へと過度に引き込まれてしまうことを懸念する。同様に、パレードを社会変革の「真面目」な活動であり、「遊び」ではないと考える人は、それが単なる「バカ騒ぎ」へと引き込まれてしまうこと、あるいは「遊び」に留まってしまうことを懸念するのだ。前章で論じたように、ゲイリブでは〈「遊び」から社会変革活動へ〉という移行が重視されていたが、パレードはこの一方通行の道筋・段階を確保しにくいため、「政治」か「祭」かという軸が特段の問題となってきたのである。パレードの対外的側面と対内的側面をめぐるバランスについては、「政治的デモ」であることが強調された第3回の東京のパレードに参加した大阪の人物の語りにも表れている。

> パレードをしているあいだ運営本部がやったことといえば、同性愛者に対する差別を糾弾するスローガンをマイクで訴えることだけ。ぼくは友人たちと気持ち良く歩きながらも、60年代からちっとも変わらない彼らのスタイルに少なからず違和感を抱いていた。具体的な政治要求を掲げるデモだったらそんなやりかただってあるとは思う。しかしことはパレードだ。パレードにはお祭りを楽しむこと、ネットワークを拡げること、パレードに参加しない人たちにポジティブなメッセージを送ることなど、さまざまな可能性も含まれているはず。いま自分がゲイとして街頭を歩いているという行為と、その場でいろんなことに出会いたいとい

う欲望が、運営本部の拡声マイクから流れてくるヒステリックでこわばった声に搾取されているような気がしてとても不快だった。 (NL1997/7:16) (11)

この語りにあらわれているのは、対社会的な政治性が強調されることによって、「祭」にイメージされる楽しさやポジティブな側面などが覆い隠されてしまうという危惧である。ここで重要なのは、「政治」と「祭」のバランスを取ることが困難なのは、この活動形態が「パレード」という名を冠しているからであって、別の名であれば「政治」と「祭」の対立は生じない可能性が示唆されていることである。しかしパレードという形態で行われるイベントとして継続するにあたって、対社会的でありかつ対当事者的であるという二面性をいかにして維持するのかという点が問題点として挙がる。

「遊び」と社会変革活動の分離が困難であることは、表象を使い分けるのが困難であることにも繋がっている。下の語りはパレードについての語りではなく、東京都が「人権施策推進のための指針」から、当初は含まれていた「同性愛」を削除した(12)際に、それへの反応として示された見解であるが、パレードを含む活動の方向性について示唆的な内容が語られている。

社会とか政治とか、そういったものが相手の時には、オネエだのキャンプだのそうゆうスカしたやり方ってあんまり役に立たないよね。そもそもそれ系の人って、政治なんて（リブなんて）ダサいと思っているだろうし。社会や政治を相手にする時は、古式ゆかしい（笑）直球勝負のリブ。つまり売りは「普通」だったり「僕達、こんなにかわいそう」だったり。決して「ハッピー・ゲイ・ライフ」ではないのね。どちらかというと「アン・ハッピー・ゲイ・ライフ」（笑）だって石原〔元東京都知事の石原慎太郎〕に「こんなにしあわせよ」と言い放ったところで、「しあわせならそれでいいジャン」で終わってしまうもの。「ハッピー・ゲイ・ライフ」ってお題目、しあわせじゃないからこそ唱える自分を勇気づけるための自己暗示の言葉だってこと、やれ 2 丁目だやれパーティーだと浮かれ騒いでいて、忘れていた。そう、やはり社会や政治は（異性愛者は）僕達の前に立ち塞がる。社会や政治を「直接的」に変えてゆくには、まだまだ（異性愛にくらべて）「僕達、こんなにかわいそう」系の不幸自慢、つまりリブ（かわいそう、不幸からの解放）が有効なのだなと再確認したのでした。
(NL/2000/8:15)

「ハッピー・ゲイ・ライフ」と「アン・ハッピー・ゲイ・ライフ」という対極的な表象が運動で持ちうる有効性とその戦略的使い分けについて語られているが、社会にアピールするためには「アン・ハッピー」であること、つまり、「被差別者」であることを主張していくことがもっとも有効的であ

(11) この語りは、『OGC にゅうす』1996 年 9 月 29 日号からの転載記事「ホモフォビアと女性差別の行方」におけるもの。

(12) 東京都が 2000 年 6 月に発表した「人権施策推進のための指針骨子」から、当初含まれていた「同性愛者」という表現が削除された問題のことである。1999 年 12 月に「人権施策推進のあり方専門懇談会」でまとめられた提言では「同性愛者」という言葉が明記されていた。削除の理由は、庁内内部から「好みや趣味で同性愛を選ぶ人もいる。人種や性別など『生まれ』による差別と違うのでは」「人権概念として未成熟。都民に理解されない」との反対意見が続出したことと言われている（『朝日新聞』2000.7.17）。

ると捉えられ、「ハッピー」というのは「自分を勇気づけるための自己暗示」であるという、『バディ』に見られた認識がここで示されている。パレードがゲイ男性当事者を対象とする「祭」であることと非当事者を対象とする「政治」であることは、当事者に対して「楽しい」「ポジティブ」「ハッピー」などの印象を提示することと、非当事者に対して「アン・ハッピー」「かわいそう」などのネガティヴな印象を提示することと同義である。しかしパレードが、表象の使い分けが困難な「政治」と「祭」の融合であることによって、ゲイ男性に「アンハッピー」が提示されてしまい、非当事者に「ハッピー」が提示されてしまうという、戦略のズレが生じるのだ。このように表象の使い分けが困難であることも、「政治」と「祭」をめぐる議論の根底にあったのだ。

本節の議論を要約する。2-1 節では第 3 回の東京のパレードでの〈事件〉を取り上げ、中心的実行委員によるパレードの過度な方向付けが問題になっていたこと、それが運営の民主性を軸とする論争であったことを論じた。2-2 節では札幌のパレードにおける「政治」と「祭」の議論を取り上げ、パレードは参加者が自由なパフォーマンスを行う〈民主的な場〉であり、実行委員によるパレードの方向付けは最小限に留められるべきであること、パレードを行うこと自体が可視化という「政治的」な機能を必然的に持ちうるものとして捉えられていることを指摘した。その上で、可視化に加えて何かしらの「政治的」活動（具体的な主張、制度変革の要求など）をパレードによって行おうとしていることを論じた。2-3 節では、パレードが「政治＝社会変革活動」と「祭＝遊び」を必然的に含みうる活動であり、その棲み分けができないことが論争の基礎にあることを論じた。それにより、〈「遊び」から社会変革活動へ〉という一方通行の道筋を確保できないことが懸念されたり、そもそもパレードは「遊び」と社会変革活動のどちらの段階にある活動なのかが議論されていた。これらの特徴を持つパレードが「政治と祭りの融合」へと移り変わっていったというのは、「遊び」と社会変革活動をパレードで維持しようと試み始めたことの宣言でもあったと言えるだろう。つまり、可視化という「政治性」を前提としながら、最小限の方向付け（＝明確な目的・主張を掲げて社会に働きかける）をし、参加者の自由なパフォーマンスを許す（＝民主的な場として参加者の「遊び」を許容する）という意味での融合である。表象の使い分けという点から捉えるのなら、非当事者には「悩み」を抱えた「被差別者」としてのゲイ男性を提示しながら、ゲイ男性当事者には「ハッピー」を提示するという意味での融合でもあるのだ。しかし、それがどのように維持されてきたのか（あるいは実は維持されてこなかったのか）ということは、ここまでの分析ではまだ明らかになっていない。では実際に札幌のパレードで「政治と祭の融合」はどのように行われてきたのであろうか。特に、社会変革としての最小限の方向付けとはいかなるものであったのか。次節以降この問いに取り組んでいくが、民主的な場であり連帯の活動であるパレードに本研究が主軸とするゲイ男性がどう関わっていたのか、つまり、連帯と個別のアイデンティティの関係性を明らかにする必要もある。次節ではパレードの名称や目的を、パレードが開催され始めた当時の背景に着目しつつ論じることで、以上二つの問いに取り組んでいく。

３．パレードの方向付けと連帯の問題

３−１　パレードの名称 —— セクシュアルマイノリティ以外の動員

表 4-1 を見てわかるように、札幌のパレードの名称は第 1 回の「レズ・ビ・ゲイプライドマーチ」から第 2 回・第 3 回の「セクシャルマイノリティ・プライドマーチ」へ、そして第 4 回以降の「レインボーマーチ」へと初期の 4 年の間に大幅に変化した。2018 年にはさらに「レインボープライド」へと変化したが、ここでは初期の変化に焦点を当て、名称変更の背景にある議論を分析する。

第 1 回の「レズ・ビ・ゲイ」とは英語で「LesBiGay」と表記され、現在よく使用される「LGBT」という表記の前身のようなものである。例えば『第 1 回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ札幌　報告集』の表紙では、「レズビアン［Lesbian］・バイセクシャル［Bisexual］・ゲイ［Gay］などのセクシャルマイノリティの総称」として用いられると解説される。東京のパレードは「レズビアン・ゲイ・パレード」という名称であったが、札幌ではより多くのセクシュアルマイノリティを表象するために、「ビ」が挿入された。

しかしこの名称は早くも第 2 回（1997 年）には「セクシャルマイノリティ・プライドマーチ」へと変更された。その理由は、「セクシャルオリエンテーション（性的指向）の面でのマイノリティに加えて、ジェンダー（社会的性役割）、セクシャルアイデンティティ（性自認）、生物(ママ)的性別の面など、あらゆる性的な少数者」（NL1996/11:7）に対する差別に異議申し立てをし、連帯をするためであった。「私たちは、たとえばトランスジェンダーやトランスセクシャル、インターセックス（半陰陽）の人たちとも一緒にこのイベントを作りたいと思いました」（NL1996/11:7）と言われるように、主にトランスジェンダーとインターセックスの人々との連帯を意図しての名称変更であった。

さらに第 4 回（1999 年）のパレードからは「レインボーマーチ」へと名称が変更されたが、それに際しては次のような議論があったと言われている。この回はまず現行の「セクシャルマイノリティ・プライドマーチ」で継続するか、あるいは「レズビアン（バイセクシャル）ゲイプライドマーチ」にするか、という二案が出された。「セクシャルマイノリティ・プライドマーチ」のメリットは、セクシュアルマイノリティ全体を表象できること、セクシュアルマイノリティに限らないマイノリティが連帯する場としてのパレードの意義が明確になること、セクシュアルマイノリティという語を社会に定着させることができることが挙げられている。デメリットとしては、「セクシャルマイノリティ」では社会へのアピール度が低いこと、セクシャルマイノリティという言葉に自らをアイデンティファイしづらいことが挙げられている（NL1999/6:10）。

もう一方の「レズビアン（バイセクシャル）ゲイプライドマーチ」のメリットは、「レズビアン（バイセクシャル）ゲイ」、という言葉がすでに異性愛者にも知られているため、イベントの内容が一般の人々に伝わりやすいこと、デメリットは、「ゲイ」「レズビアン」「バイセクシュアル」がセクシュアルマイノリティの代表であるかの印象を与えてしまうことが挙げられている（NL1999/6:10）。

どちらの名称にするかで議論が平行線をたどっていた中で出てきたのが「レインボーマーチ」であり、「セクシャルマイノリティのリベレーションのシンボルであるレインボー、それを織り成す 6 色のハーモニーはそのまま性的少数者全体を表象出来、性的少数者同士のみならず、広く全てのマイノリティが連帯する場としてのパレードの意義にふさわしいものだと思うし、多様性を認めあえ

る成熟した社会の実現を目指すパレードの趣旨に沿うシンプルかつキュートなシンボル」（NL1999/6:10）と説明されている。

ここで挙げられている論点をまとめると、名称が（1）社会へどれだけアピールできるか（多くの人がその名称から一目でイベントの内容を捉えることができるか否か）、（2）どれだけ多くのセクシュアルマイノリティを表象できるか／がアイデンティファイできるか／をパレードへと動員することができるか、（3）セクシュアルマイノリティではないマイノリティをどれだけ動員することができるか、という3点の拮抗が課題となっていた。社会へのアピール度の側面からは、すでに知られている「ゲイ」や「レズビアン」といった言葉を用いることがもっとも有効と捉えられており、第1回のパレードの名称はこの点において有利であった。しかし多くの当事者を表象し取り込むためには、「ゲイ」、「レズビアン」、「バイセクシュアル」という言葉を用いない名称にする必要があり、セクシュアルマイノリティ以外のマイノリティを取り込むためにも別の名称がより好ましい。だがそうすると、「ゲイ」、「レズビアン」、「バイセクシュアル」など具体的なアイデンティティを持った人々がパレードにアイデンティファイし難くなってしまう。

トレードオフとも言えるこれら3点は、「レインボー」というシンボルを名称に用いることで解決されたが、この一連の議論で重要なのは、「レインボーマーチ」という名称が最終的に、それ自体が持つ社会へのアピール度や、当事者によるアイデンティファイの可能性より、より多くのセクシュアルマイノリティとその他のマイノリティを表象し連帯することを考慮して採用されていることである。第2回（1997年）のパレードですでに、「セクシャルマイノリティ」という語をパレードの名称に使用するに当たって、「これにはそれぞれのアイデンティティを充分に受け入れることを曖昧にし、置かれている立場の違いを等閑視するものだとの批判もあり得ることと思います」（NL1996/11:7）、と言われているように、「ゲイ」や「レズビアン」という個別のアイデンティティの重要性・必要性は常に実行委員の中にあった。しかし札幌のパレードは、「ゲイ」や「レズビアン」などの特定の言葉をパレードの名称として用いないことによって、広くマイノリティとの連帯を目指したパレードへと変化していったのである。

名称に関しては以上のように、マイノリティと称される多くの人々を運動へ呼び込むこと、できるかぎり多くのセクシュアルマイノリティを平等に表象し取り込むことを第一とし、社会へのアピール度を副次的な目的とする方向性へと進んでいった。前章までの分析では、1990年代の活動が「ゲイ」や「レズビアン」というアイデンティティの形成を重要視していたことを確認したが、ここではそれら個別のアイデンティティの強調を抑制したことになる。

3-2　パレードの目的 —— マイノリティの連帯からLGBTの連帯へ

では一方で、パレードの目的はどのように変化してきたのであろうか。まず第1回（1996年）のパレードを見てみると、その広い目的としては、「『あなたの身近にレズ・ビ・ゲイがいる』。私たちは、この当たり前の事実を社会に知らしめ、多数者である異性愛者には、異性愛であることだけが『正常』であるわけではないし、異性愛ではない人の自分らしく生きる自由や権利を奪い取ることの不当性をアピールしたいのです」（『第1回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ　報告集』8頁）として、セクシュアルマイノリティの可視化と権利の主張が謳われている。より詳細かつ具体的な目的は、パンフレットに「『第1回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ』の主張」として3点掲げられてい

る。

assertion 1　教育現場における差別解消

異性愛だけが正常であることを前提とした教育現場で、同性愛の性的指向性を持つ子供が傷つき、自己否定に陥り、いじめのターゲットとされています。画一的な人間だけを再生産しようとする日本の教育は、在日外国人やアイヌ民族、心身障害者などのマイノリティー差別にも共通する構造化された体質を持ちます。

assertion 2　職場における差別解消

強固な伝統的性的役割分担にしがみつき、必死になって異質なものを排除する日本の職場のあり方が、レズ・ビ・ゲイには自分を偽らせ、異性愛者のふりをさせてきました。レズ・ビ・ゲイや女性、その他の社会的マイノリティーを不利に扱う日本の職場環境の改善を求めます。

assertion 3　住宅利用における差別解消

レズビアンやゲイのカップルは公共の住宅に堂々と入居できるでしょうか。公的な住宅融資は同性愛のカップルにも一つの生活共同体としての扱いを与えるでしょうか。私達は異性愛者と同じ条件で住宅を手に入れる権利を要求します。同様に外国人や身障者を不当に差別する住宅供給のあり方にも抗議します。

（『第１回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ　報告集』４頁）

これらの主張は、主に同性愛者に対する差別の解消や制度の変更を求めるものではあるが、その他のマイノリティ（障害者、外国人、アイヌ）への差別解消も同時に要求することが明記されている。「第１回レズ・ビ・ゲイプライドマーチ」という名称では他のマイノリティとの連帯が表現されていなかったが、その目的内では連帯が目指されていた。この目的設定の背景は次のように語られている。

本当に〔札幌でもパレードを〕やりたいの？やりたい！絶対やりたい！そう思ったとたんに、イメージが湧いてきた。私たちの活動を見れば、レズ・ビ・ゲイ・スタディと称して、他の運動の講師に来てもらって勉強したり、イベントの時に協力しあったりしている。こんなにハタケ違いの運動が仲いいのって、札幌の特色かもしれない。だったら、それをいかさない手はない。そう思ったら、よけいパレードの実現がぐんと近くによってきた。そうだ。私たちは一人じゃないんだ。それなら、たくさんの人に、特に他の社会的マイノリティやその運動にかかわっている人が参加しやすいような、スローガンは・・・そこからあの三つの主張がうまれた。住宅、職場、学校での差別撤廃を訴えよう。　（NL1996/8:9）

この語りにもあるように、札幌ミーティングでは他の運動に関わる人を呼び講演会や勉強会を開催することもあり、セクシュアルマイノリティ以外の活動家との交流を行ってきた。また札幌ミー

ティングが初期の活動拠点としていた「ミニコミ喫茶ひらひら」には他の活動団体も出入りしていたため、必然的にネットワークができていたと思われる。こうした連帯をパレードでも活かすことで、広くマイノリティを取り込み、広くマイノリティに対する差別解消を目指そうとしていた。それぞれのマイノリティが具体的に抱える問題は異なっているが、「自分の意志でコントロールできない“特性”を持って生まれてきた」こと、「日本社会にある非常に根深い“異質なものを排除”しようとするイデオロギーや体質に、常に異議申し立て」(『すすきの TOWN 情報』1996/8:57) をしていかなければいけないという、共通の差別構造への批判をもとに連帯を目指していた。

一方で、連帯の理由が次のようにも語られる。

> また一方で、これは穿った考え方なんですが、正直に言わせてもらえば、レズ・ビ・ゲイだけでは我々の方も参加しづらい (笑)。ですから他の団体の方々やいろんな人達が参加してくれることによって、個人も特定されにくく、逆にレズ・ビ・ゲイとしても出て行きやすい (＝参加しやすい) (『すすきの TOWN 情報』1996/8:57)

札幌でのパレードは東京でのパレードに触発されて開催に至っているが、首都ではない札幌での開催にあたって、札幌ミーティング内外から寄せられた、「人数集まらなかったら見栄えしない」(NL1996/6:3) のではないかという疑問は、開催にあたっての懸念となっていただろう。つまり、パレードにおける連帯には、セクシュアルマイノリティ以外のさまざまな人が参加をすることによって、セクシュアルマイノリティ自身の参加をしやすくするという意図もあったのである。パレードが当事者だけではなく非当事者によっても構成されるのであれば、同性愛者ではないと言うこと、あるいは支援者であると言うことが可能になるため、自分のセクシュアリティが露呈するリスクを最小限に留めることができる。しかし、他のマイノリティとの連帯志向は札幌ミーティングのメンバーから批判されることもあった。

> でもね、「中途半端な」政治スローガンのうちの、他のマイノリティとの連帯とかなんとか、あれは外そうね。□□□さん以外他のメンバー誰もそんなことマトモに考えていないんだもの、参加人数増やすために利用する姿勢が見栄(マヽ)見栄(マヽ)で、恥ずかしい。常日頃被差別部落の問題や在日の問題、アイヌの問題、身障者の問題について勉強しているならいざ知らず、パレードの時に限ってコレ持ち出してくるのってものすごく姑息。ものすごく違和感。
>
> (NL2000/8:26-27, □は人名の伏せ字)

札幌ミーティングでは確かに他のマイノリティとのネットワークがあったが、連帯を普段から意識していたメンバーは多くないにもかかわらず、パレードに限って連帯が強調されることを疑問視する人もいた。他のマイノリティを動員するという「姑息」な手段を用いるのではなく、セクシュアルマイノリティに働きかけ、その当事者を動員することの必要性が語られていると言えるだろう。つまり、連帯の仕方と人々の動員の仕方を巡って、ジレンマが生じていたのだ。

他のマイノリティを動員するために他のマイノリティもパレードの目的・主張内に明文化するのは 1999 年（第 4 回）のパレードまで続き、2001 年（第 5 回）からは目的・主張内に他のマイノリ

ティは登場しなくなる。そして2004年（第8回）以降現在まで、多少の文言の変化はありながらも基本的に以下の目的が掲げられ、広くマイノリティのためのパレードではなく、セクシュアルマイノリティのためのパレードへと収斂していった[13][14]。

> 地域社会にLGBTが存在することを広く知らせる
> 　レインボーマーチは、地域社会にLGBTが存在することを広く知らせ、身近に暮らすLGBTとの共生を訴えます。
>
> 孤立するLGBTに、存在を肯定できる情報を提供する
> 　レインボーマーチは、孤立するLGBTに対して、行進を通じて自分の存在を肯定できる情報を提供します。また、社会に対してありのままのLGBTの姿を提示し、偏見や興味本位による差別の解消を訴えます。
>
> LGBTの存在を前提とした社会制度の構築を働きかける
> 　レインボーマーチは、LGBTが存在することを前提とした社会制度の構築を、行政や企業など広く社会全体に働きかけます。また、多様性を認め合い、一人ひとりの個性を尊重する社会の実現を訴えます。　　（『第8回レインボーマーチ札幌』（公式パンフレット）12頁）

目的の変化をまとめると、1990年代にはセクシュアルマイノリティ以外の他のマイノリティとの連帯を志向する目的が設定されてきたが、2000年代に入ってからは、セクシュアルマイノリティによるセクシュアルマイノリティのためのパレードという意味合いを強めていった。この変化の理由に関しては明確に語られていないが、開催ごとに参加者数が増加していったので他のマイノリティを動員することによる〈人数稼ぎ〉をする必要がなくなったため、そして他のマイノリティに対する知識不足・関心不足からセクシュアルマイノリティに関するものへと目的を狭めていったため、といった理由が考えられる。

上記の第8回の3つの目的を第1回の目的と比較すると、第1回では教育現場、職場、住宅利用に関する制度的な変革（社会変革）が要求されており、当事者への働きかけは表明されていなかった。しかし第8回からは社会への働きかけと当事者への働きかけがともに目指されるようになっている。「地域社会にLGBTが存在することを広く知らせる」というひとつ目の目的は、パレードが前提として持つ機能である、LGBTの可視化を掲げたものである。「孤立するLGBTに、存在を肯定できる情報を提供する」という二つ目の目的は、少々拡大解釈すると、セクシュアルマイノリティがパ

---

(13)　1999年から2003年のパレードの目的は札幌ミーティングのニュースレターには掲載されているが、公式ガイドブックには目的や主張が他の年のように明文化されていない。「政治色」を強めないための戦略であった可能性もある（2003年はいずれの媒体にも掲載されていない。第2回はニュースレターに目的が記載されておらず、パンフレットは未確認）。

(14)　2019年（第19回）の目的は、(1)「地域社会に対し、身近にLGBT（SOGI）が存在することを広く知らせます」、(2)「孤立するLGBT（SOGI）に対して自らの存在を肯定的に捉えられるよう情報を発信し、自己肯定感の向上を目指します」、(3)「LGBT（SOGI）が存在することを前提とする社会制度の構築を、行政や企業、教育現場への働きかけを通じて、広く社会全体へ訴えかけます。また、多様性を認め合い個性を尊重する豊かな社会の実現を提唱します。」（『さっぽろレインボープライド2019 公式ガイドブック』3頁）となっている。

レードで自己肯定を行うこと≒「遊び」を掲げたものである。そして「LGBT の存在を前提とした社会制度の構築を働きかける」という三つ目の目的は、社会・異性愛者へ働きかける社会変革を掲げたものである。つまり、内容は抽象的であるものの、可視化、「祭」＝「遊び」、「政治」＝社会変革活動の三つが掲げられることで、「政治と祭の融合」が目的上は維持されてきたのだ。

以上の点を名称の変化とともに考察すると、変化の方向性が逆であることがわかる。パレードの名称は「レズ・ビ・ゲイ」、「セクシュアルマイノリティ」と具体的な人々を表象するものから、「レインボーマーチ」と他のマイノリティも参加しやすいものへと変化してきたが、目的に関しては他のマイノリティを動員することから、セクシュアルマイノリティのパレードという点に重点が移っていった。この矛盾には、セクシュアルマイノリティ以外の人々もパレードに呼び込みながらも、セクシュアルマイノリティ当事者が行進することによる可視化を行うという、二つの志向の間でのジレンマが表れていると言えるだろう。このジレンマは結果として、まず人々の目に初めに触れる名称は多くの人が参加しやすい多様性のシンボルにしながらも、その〈裏〉ではセクシュアルマイノリティ当事者によるパレードであるという当事者性を維持することによって解決されていると言えるだろう。

一連の議論では、他のマイノリティとセクシュアルマイノリティ同士での連帯が論点となっており、「ゲイ」など個別のアイデンティティの強調は抑制されていた。しかしパレードの始まった 1990 年代末の段階では札幌ミーティングで「ゲイ」や「レズビアン」といった個別のアイデンティティは重視されており、「自分のための活動」という方向性を重視することで、連帯から距離を置こうとする志向性も少なからず存在していたはずである。単に時代的な移り変わりによって、個別のアイデンティの重要性がなくなったとは言えない。パレードの名称の議論でも、「ゲイ」や「レズビアン」といったアイデンティティの重要性は認識されていた。では「ゲイ」や「レズビアン」という個別のアイデンティティを表象するという問題は、どのように解決されていたのであろうか。

3-3 「ゲイ」であるための場としてのパレード

パレードが日本で始まった 1990 年代は、序論で論じたようにセクシュアルマイノリティをめぐるさまざまな動きが生じた時期であった。しかし、1990 年代後半からはその活動も停滞を迎えたと言われている。序論でも本章でも取り上げた伏見憲明と野口勝三の対談では、停滞の理由のひとつとして、目標・動機の喪失をあげていた。ゲイの脱病理化と差別問題の主張が一定のレベルに達したことによって、次はそれ以上に何を訴えるべきなのかを見つけられなくなっていったという（伏見 2004:26）。札幌ミーティングが行っていた UHB や STV への抗議活動も最終的に謝罪を引き出しており、活動としての大きな成果を挙げていた。もちろんその後メディアなどにおける一切の差別的表象がなくなった訳ではないものの、メディアや社会への抗議活動とその〈勝利〉は、1990 年代の活動の大きな成果として捉えられたと思われる。

1990 年代末の札幌ミーティングのニュースレターでも、運動の倦怠感や目的の喪失が生じていること、札幌ミーティングのメンバーが物事に無関心になってきていることが語られ始める。例えば、札幌でゲイリブをやることの意義や、「札幌独自のゲイリブ」を行いたいということを語るメンバーの記事では、「ミーティングでいつもアタシが言ってる『ミーティングの人間が何に対しても無関心になってきた』ってのは、本当に悪い傾向なのよ。モノゴトに無関心になって新しいモノなんて生

まれるわけないじゃない」（NL1998/6:13）と、運動や活動への無関心が札幌ミーティング内で生じていることが懸念されている。また別のメンバーはその原因が目標の喪失にあるのではないかと指摘する。

> 札幌も運動の倦怠感が気になるよね。これって、もしかしたら、目標を失っているせいなんじゃないかしら？ちょっと前まではゲイの劇団を呼びたいとか、パレードを札幌で！とか、メディアの出演とか、ゲイナイトの成功とか、なんだかんだ鼻かんだ、目標あってそれを実現させようと、頑張ってきたんだよね。そろそろ、ミーティングも次の目標（標的）を決めるべきなんだわ。（NL1999/7:18）

この語りでは、これまでの札幌ミーティングはイベントの開催などの目的を持って活動をしてきたが、これまでのような具体的な目的を失いつつあること、それが「運動の倦怠感」となっていると語られる。他にも、ブランチ制度が「曲がり角」（NL1998/3:28）を迎え、メンバー個別の活動が低迷していった様子が窺える。1999年12月19日の段階では、これまでいくつも存在してきたブランチも「コミュニケーションブランチ」と「親の会」のみになっている（NL1999/11:15）。つまり1990年代末には、札幌ミーティングは団体としてもメンバー個人としても、具体的な目的・目標、活動の動機を見失いつつあったと言える。

また1990年代末に特徴的なもうひとつの出来事は、「連帯」がこれまで以上に唱えられ始めたことである。特に性同一性障害が社会的認知を得始めたのがこの時期で、1999年3月号の札幌ミーティングのニュースレターには、初めてトランスジェンダーのメンバーによる記事が登場するようになる。札幌ミーティングは団体の正式名称を1997年に「ILGA日本・札幌ミーティング」から「北海道セクシュアルマイノリティ協会　札幌ミーティング」へと変更したが、その名称に「セクシュアルマイノリティ」を入れたのも、連帯を目指してのことであった(15)。

> 最近ではトランスセクシャルやトランスジェンダー、半陰陽（両性具有）などL、G、Bではおさまりきれない実に多様な性的少数者の存在が明らかになってきました。しかも、それらの人々は等しく、現在のヘテロ社会に息苦しさを感じ、自分らしい性を生きることを求めていることも分かってきました。／私たちは男らしいオトコが女らしいオンナを愛することだけを「正常」とし、それ以外の性愛のあり方を「異常」として排除、差別する意義や構造を根っこから変革するためには、そうした多くの性的少数者とも連帯して運動を進めることが得策だと判断しました。（NL1997/10:16）

(15)　団体名変更の直接的なきっかけは、ILGA日本が機能停止状態になったことであった。「札幌ミーティングはILGA日本の加盟団体としてスタートしましたが、94年頃からILGA日本に加盟している他団体はほとんどが活動を止め、実際に残っていたのは札幌だけという状態でした。95年からはILGA日本の年次総会も開かれず、会費も徴収しないという事実上の解散状態にありました。また、世界組織としてのILGAにも代表を派遣することなく、ほとんど連絡も途絶えるというありさまでした。こうなった以上、札幌だけがILGA日本を名乗り続けるのは不適切であり、誤解を招くと判断し、名称変更はここ2年来の懸案事項でありました。」（NL1997/10:16）

1996 年には埼玉医科大学の倫理委員会が性別適合手術（当時の言葉では「性転換手術」）を性同一性障害の人物に治療として行うことを承認する決定を発表した。それに合わせて札幌ミーティングのニュースレターでも「性同一性障害とレズ・ビ・ゲイは連帯出来るか」という記事が掲載され、同性愛者と性同一性障害は抱える問題が異なるものの、「自分の性や生は他ならぬ自分のものであって、直接他人に危害を及ぼさない限り、その人自身の決定や指向に委ねるべきである」という、「性＝生の決定権を自分に取り戻す戦い」として連帯できることが語られる（NL1996/9:12）。こうした社会状況も踏まえての「連帯」を志向した名称の変更であった。しかしこの名称変更はのちに批判を招くことにもなった。「誰のためのゲイリブか？」という記事では、団体の名称変更後、札幌ミーティング内外で生じた反応について次のように語られている。

> 名称をセクシャルマイノリティ協会に変えてから、思いがけない「期待」をかけられ、しかもその「期待」に応えていないことを批判する言説に接するようになった。その「期待」とは、ミーティングがすべてのセクシャルマイノリティの運動を「代行」し、請け負ってくれるはずだという期待である。そして批判とは、「にもかかわらず」ミーティングはちっともそれを果たしていないという批判である。こうした「期待」や「批判」は名称を変えたときから予想されたものであったといえばそうかも知れないが、ぼくにとっては迂闊ながらやはり意外な反応であった。／ミーティングはなぜセクシャルマイノリティ協会を名乗ることにしたのか。ぼくは次のように考えていた。これからはセクシャルオリエンテーションだけではなく、性的な面ですべての少数派に開かれたグループを志向したい、少なくともゲイやレズビアン、バイセクシャル以外の人たちにも居場所として使ってもらいたいという気持ちからであった。ところが世間は、また一部のメンバーの考えたことはそうではなかった。つまり、ミーティングはすべてのセクシャルマイノリティを代表して、彼女ら・彼らの代わりに運動を引き受けることを決意したと取られたのである。だから、ゲイを主語にしてものを語ろうとすれば、他のセクシャルマイノリティのことはどうなったのだという誹りを受けることとなった。（NL1998/6:15-16）

多くのレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルに限らないセクシュアルマイノリティとの連帯を目指したがゆえに、それらすべてを代表・代理した運動を行うべきであるという認識が生じていたことが語られている(16)。こうした反応が生じるのは、名称を変更した当時はメンバーにトランスジェンダーや性同一性障害のメンバーがいなかったという事情もあっただろう。そのため、自分たちの団体には含まれない他のマイノリティについての活動を引き受けるという意味合いがより名称に含まれると捉えられてしまった。序論でも触れた点だが、伏見憲明も 1990 年代に彼が取り組んできた

(16)　「誰のためのゲイリブか？」への応答として次の語りがある。「今になって思えば、今後、ミーティングに対して新たに加わると予想される『期待』や『責任』について、もっと深く議論すべきであったと思う。／『ミーティングを全てのセクシャルマイノリティの人達の居場所として開放する』ことは、ただ単に『場所を提供する』だけなのか、それとも、『その人達を考慮に入れて、自分たちの活動を推進していく』ことなのか…そのような議論が十分になされないままであったため、新しい名称でいざ活動を開始しようとする段階で、様々な議論を伴うことになった。『「セクシャルマイノリティ」と名乗っているくせに』という言葉もそのような議論の中で出てしまったのだろう。」（NL1998/7:14）

活動の「罪」を振り返る中で、「『クィア』とか『セクシュアルマイノリティ』という枠を提出したことで、何でも一緒にやっていくことが正しい、一緒にやらなければならない、そうでなければ差別や排除になる、と考える流れが運動の中にできてしまった。あるいは、カテゴライズすること自体が悪いことだというような主張。ゲイだけで何かをする、レズビアンだけで何かをするということが、批判対象になるという弊害が生じたんです」(伏見 2004:25) と振り返り、連帯することの〈正しさ〉が過剰に流布してしまったことを後悔している。札幌ミーティングでは地域的な事情から必然的に連帯の状況にもあったが、連帯することがよりよいことであるという考え方によってもその活動が方向付けられていったと思われる。

ゲイリブにおける目的の喪失と連帯への志向／要請という二つの状況が重なり合った 1990 年代末にパレードが開始され、他の活動が大きなうねりを見せなかった中でもパレードが継続されてきたのは、パレードにはその二つの状況を補完する働きがあったからではないだろうか。

目的の喪失という側面においては、パレードを開催すること自体が自己目的化しやすいために、それをセクシュアルマイノリティの活動の大きな目的とすることができたと思われる。パレードは他のイベントや活動と比べて、開催までの準備作業が膨大にある。パレードコースを申請するための警察との打ち合わせ、協賛のための連絡、パンフレットの作成、関連イベントの企画、行政などへの働きかけ、他団体との連携、広報・宣伝活動、フロート（山車）の準備など、無数の作業を毎回おおよそ一年がかりで行わなければいけない。その苦労や大変さは、パレードを開催することによる何かしらの目的の達成よりは、パレードを開催するということ自体の自己目的へと向かいやすい。また目的の喪失というのが主に「政治」の部分、つまり社会に対する働きかけという部分で生じていたのであれば、セクシュアルマイノリティ当事者が楽しむ「祭」としての側面に重点を置くことによっても、パレードを活動のひとつとして継続することができていたと考えられる。そもそも差別が見えにくく、さらにその見えにくい差別の解消も一定の成果を収めた 1990 年代には、〈差別なき社会〉がより一層促進されたと言える。対社会的活動としての「政治」では、変革すべき対象としての社会が〈敵〉として扱われるが、それを見失いつつある時代背景では、その〈敵〉を必要としない「祭」＝「遊び」は比較的継続しやすかったのではないだろうか。パレードが「遊び」となり、「政治」的主張が希薄化したとしても、可視化という最低限の「政治」は常に達成可能なのだ。

連帯の志向／要請という側面では、パレードはその他のどの活動よりも連帯がしやすい活動であったと言える。なぜならば、確かに実行委員はある程度のメンバーシップによって成り立っていたが、パレードの基本的な構成員は当日参加しにやってくる参加者であり、そこにメンバーシップはないからである。仮に実行委員がゲイだけで成り立っていたとしても、連帯ができる／できないという以前に、当日のイベントはさまざまなアイデンティティを持った人が集う場であるため、必然的に連帯が生じる。そして重要なのは、連帯をしつつも「自分のため」の活動をすることもできるのがパレードという場であったという点だ。「政治」と「祭」の議論で見たように、パレードは徹底して民主的な場であり、いかなるパフォーマンスも許され、あるべき姿が要請されない。活動の特徴は、「レインボーマーチへの参加者や実行委員が自由に表現を行うことができる場を作る」（NL2002/8:3）ことであり、参加者のみならず、実行委員の自由なパフォーマンスも許される。つまりその場では「ゲイ」や「レズビアン」といった個別のアイデンティティ・カテゴリーの表現／

の立場からの表現が可能とされるのである。連帯の運動では「ゲイを主語にしてものを語ろうとすれば､他のセクシャルマイノリティのことはどうなったのだという誹りを受ける」(NL1998/6:15-16)ことがあったが、パレードという民主的な場では、その「ゲイという主語」からのパフォーマンスを非難されることはない。つまりパレードは、セクシュアルマイノリティとその他のマイノリティをも含む集合的なアイデンティティの場でありながらも､「ゲイ」など個別のアイデンティティの表現の場所、大げさに言うと、1990 年代末以降、公の場における活動として「ゲイ」であることが許されるほとんど唯一の場所という、二面性によって成り立ってきたのである。しかし別の視点から捉えると､「ゲイという主語」が許されるということは、パレード全体の表象がゲイ男性に偏ることを許してしまうことにも繋がるのではないだろうか。この点は第 5 節で論じることになる。

本節ではパレードの名称と目的の変化に注目しつつ、パレードにおける「連帯」と個別のアイデンティティの関係性、そしてパレードの大まかな方向づけについて論じた。セクシュアルマイノリティとしての連帯と、他のマイノリティとの連帯をいかに行うかという困難が名称と目的の設定にあらわれていた。名称では広くマイノリティとの連帯が志向されていたが、明文化された目的ではセクシュアルマイノリティのための活動として限定されていった。この明文化された目的（パレードの大まかな方向づけ）では、対社会への働きかけと当事者への働きかけの双方が掲げられることで､「政治」と「祭」を共に行う場としてパレードが設定されていた。また目的の喪失と連帯の志向という時代背景でパレードが継続されてきたのは、パレードは「政治」的活動でありながらも〈敵〉を必要としない「祭」＝「遊び」としての側面を押し出すことを可能としていたため、そして連帯の場でありながら「ゲイ」や「レズビアン」といった個別の立場からパフォーマンスすることを可能としていたためであることが示唆された。

次節からは実際のパレード行進を中心的に取り上げ､「政治と祭りの融合」がどのように行われていたのか、それによりどのようなパフォーマンスが行われ、セクシュアルマイノリティとゲイが表象されてきたのかを論じる。次節となる第 4 節では、パレード行進で行われる全体的なパフォーマンスの傾向について論じ、第 5 節ではゲイ男性という個別のアクターに焦点を当て、パレードにおけるゲイ男性の位置付けとそのパフォーマンスを分析する。

4．パレード行進のパフォーマンス —— 可視化と差異化

本節では、実際のパレード行進でどのようなパフォーマンスが行われてきたのかを、当時の映像資料や写真も参照しながら明らかにしていく。はじめにパレード行進とはどのようなものなのか、簡単に説明をしておこう。

札幌のパレード行進は、札幌市中心部を 2-3㎞ ほどの行程で数百人の隊列が行進する（図 4-1)。第 1 回（1996 年）は中島公園を出発し、JR 札幌駅（図内の「札幌」）西側にある JR 高架下の「エルムの里公園」をゴール地点とするルートを行進した。第 2 回（1997 年）は反対に「エルムの里公園」を出発し、中島公園をゴールに行進した。それ以降の回は基本的に大通公園の 6 丁目（図内の☆）かテレビ塔（図内の◇）を出発地点とし、大通公園周辺と、札幌駅方面、あるいはすすきの方面を

周回し、出発地へと戻るルートで行進が行われてきた。先頭が出発してから最後尾が戻ってくるまでの所要時間はおおよそ１時間から１時間半前後で、札幌駅から地下鉄南北線すすきの駅までの間の、もっとも人通りが多い駅前通り（図4-1の「さっぽろ」と「すすきの」の間の道）のどこかはほぼすべての回で通っている。この札幌市中心部を行進しながら、さまざまなパフォーマンスが沿道の人に向けて行われたりする。



図4-1　札幌市中心部の地図（出典：Google マップ）

4－1　抗議／要求型から存在主張／可視化型へ

はじめに、パレード行進を率いる先導車からどのようなメッセージが発せられてきたのかを考察する。札幌のパレードは先頭に先導車（主に街宣車／選挙カーを装飾したもの）が走り、それがパレード行進の隊列を率いる形で行われる（図4-2）。そしてこの先導車はメガホンからパレードの目的や主張を発しながら進むため、パレード行進全体に意味付けをする役割を果たす。第２節でも触れたように、札幌のパレードは「政治」から「祭」へ、そして二つの融合へと変化していったと言われていたが、それはここでどう表れ、結果としてどのような表象の提示となっていたのだろうか。ここで発せられるメッセージは1999年（第４回）ごろを境にして変化が見られるため、初期のパレードで発せられるメッセージから見てみよう。

まず初期のパレード行進に特徴的なのは、〈私たちを見てください〉という呼びかけが非常に多いことである。

> 私たちから目を逸らさないでください。私たちを見てください。私たちの存在を、身近な問題であることを知ってください。（1996年〔第１回〕）

> 僕たちはゲイです。僕たちはレズビアンです。そしてバイセクシャルです。僕たちをじっくり直視してください。（1997年〔第２回〕）

> 私たちを見てください。私たちから目を背けないでください。（1998年〔第３回〕）

> 皆さん、私たちを見てください。私たちは性的少数者と呼ばれる者たちです。（1999年〔第４回〕）

> 異性愛者の皆さん、私たちを見てくださーい。私たちから目を逸らさないでくださーい。私たちは誇りあるゲイでーす。私たちはプライドあるレズビアンでーす。札幌市民の皆さん、

こんにちはー。（2001 年〔第 5 回〕）



図 4-2　パレードの先導車（2010 年〔第 14 回〕）

このメッセージは、セクシュアルマイノリティの可視化を強く意識したものになっている。しかし、ただ当事者の存在を社会に示すのではなく、その存在を見ずに済まそうとする視線、無視しようとする姿勢を否定し、視線をパレード行進へと向けることを要求する。よって、この視線の要求はセクシュアルマイノリティ当事者に対して、〈仲間〉の存在を示すエンパワーメントとして行われているものではない。〈私たちを見よ〉というこの要求は異性愛者を意識したものであり、当事者に対して〈私たちはたくさんいるので安心してください〉というような呼びかけになっているわけではない。

同様に異性愛社会＝異性愛者に対しての働きかけの強さを示すものとして、〈差別をやめよ〉、〈私たちを理解せよ〉というような、差別告発や差別解消を明確に強い口調で投げかけるものがある。

> もう私たちを踏みつけないでください。私たちのことを無視しないでください。私たちのことを特別視しないでください。（1996 年〔第 1 回〕）

> もっと同性愛者自身に語らせろ。STV は同性愛者の人権について勉強しなさい。STV はもっと勉強しなさい。同じく UHB ももっと勉強しなさい。学校、職場、地域、社会において、あらゆる場面で〔の〕ゲイバッシングに抗議します。（1997 年〔第 2 回〕）(17)

> 僕たちはゲイ、レズビアン、バイセクシャル、あらゆる性的少数者たちのグループです。今僕たちはあなたがた異性愛者たちに対して抗議します。同性愛者差別をなくせ。（1997 年〔第 2 回〕）

> 道庁で日曜出勤している方々、私たちはゲイ、バイセクシャル、レズビアンです。北海道はもっと同性愛者の人権について勉強して知識をつけなさい。窓から顔を出しなさい。（1997 年〔第 2 回〕）

> ヘテロは慣れろ、ヘテロは慣れろ、ヘテロは慣れろ、ヘテロは慣れろ。レズビアン、ゲイ、

(17)　第 3 章で見た STV への抗議活動は 1995 年に繰り広げられたが、1997 年（第 2 回）のパレードで再度 STV への抗議メッセージが唱えられているのは、ちょうど同年のパレード開催前に、STV が発行するプリーペーパー『週刊スパラン』（vol. 118,　3 月 30 日号）の中で「モーホー」という言葉が再度用いられ、同性愛者を嘲笑していたためである。これに対しても札幌ミーティングはすぐに訂正と謝罪を求める要望書を送付している。同書 Vol. 120（4 月 13 日号）の中で訂正と謝罪の記事が掲載された。

バイセクシャルはこんなにたくさんいます。僕たちの存在を認めなさい。（1998年〔第3回〕）

私たちを認めなさーい。多様性を認めろー。（1998年〔第3回〕）

札幌市民の皆さん、異性愛者の皆さん、私たちを差別するなー。ゲイを差別するなー。レズビアンを差別するなー。（2001年〔第5回〕）

「デモ」や「抗議活動」としての政治色が強かったと言われる初期のパレードは、対社会的に強い口調でメッセージが発せられることから、札幌ミーティングが行ってきた抗議活動の延長線上にあると位置付けることもできるだろう。パレードが掲げる主張を、「今回のパレードで僕らは三つのことを主張します。性の自己決定は人権の問題です。多様な個性を認め合ってこそ豊かな社会です。教育、職場、住宅供給におけるセクシャルマイノリティに対する差別の解消を訴えます」（1997年〔第2回〕）と叫んだり、類似するメッセージとして、より具体的に企業に対して「ぜひ来年は□□楽器札幌店も、今回僕らのパレードを是非とも応援してください。レズビアン、ゲイ、バイセクシャルはたくさん□□楽器でCDを買っていますよ」（1997年〔第2回〕，伏せ字は楽器店名）、「□□興業はもっとレズビアン、ゲイ、バイセクシャルの映画を上映しろ」（1997年〔第2回〕，伏せ字は映画配給会社）と呼びかけることもあった。

これらの呼びかけでは、セクシュアルマイノリティに対する差別が社会に存在することを示し、被差別者としてのセクシュアルマイノリティを提示することで、差別の存在を言説化する活動であったと言える。そしてこれに対抗するように、〈私たちは誇り／プライドを持って生きている〉、〈私たちは幸せだ〉というメッセージも発せられる。

お父さん見てください、みんな幸せです。私たちは同性愛者に生まれて幸せです。（1996年〔第1回〕）

市民の皆さん、私たちは同性愛者に生まれたことを誇りに思います。（1996年〔第1回〕）

私たちはレズビアン、ゲイ、バイセクシャルに生まれて本当に良かったと思っています。私たちは同性愛者に生まれて、同性愛者であることに誇りを持っています。（1996年〔第1回〕）

私たちは同性愛者であることにプライドを持って札幌の街を行進します。（1997年〔第2回〕）

私たちはゲイであること、レズビアンであること、バイセクシャルであることに誇りを持っています。（1997年〔第2回〕）

私たちはゲイでーす。私たちはプライドあるレズビアンでーす。私はバイセクシャルに生まれてよかったー。私たちはゲイで幸せでーす。私はレズビアンに生まれてよかったでーす。（2001年〔第5回〕）

差別が存在することを主張しながら〈幸せ〉であることを強調するのは、第1章で見た『バディ』の実践と類似する戦略である。『バディ』ではその「現実」を直視せず遠ざけながら「ハッピー」であることを唱えていた。対して初期のパレードでは、「現実」を直視しながら〈幸せ〉を唱えるということ、言い換えると差別され〈不幸〉であることと、セクシュアルマイノリティであることは〈幸せ〉であるこという対極的なメッセージが共存していたのである。同性愛者として差別されているため〈不幸〉ではあるが〈幸せ〉に生きているということ、同性愛者は〈異常〉であり〈不幸〉とみなされているが、「プライド」を持って〈幸せ〉に生きていることを主張することで、ネガティヴなイメージからポジティヴなものへの転換を図っていた。〈私たちは幸せである〉というのはセクシュアルマイノリティ当事者に対するエンパワーメントとも言えるが、同時に、社会から押し付けられる〈不幸〉という状況への対抗的言説でもあった。

これらの初期の特徴は2000年代以降のパレードではあまり見られなくなり、〈私たちはここにいます〉という、存在を主張するメッセージへと画一化されていく。

> 私たちゲイは、レズビアンは、バイセクシュアルは、性同一性障害者はあなたの学校や職場に必ずいます。例えば同性愛者なら、どんな時代にも、どんな場所にも、5%から 10%は必ずいると言われています。（2003年〔第7回〕）

> 私たち性的マイノリティの差別をなくすため、レインボーマーチを行なっています。みなさんの暮らす札幌にも、日本にも、ゲイやレズビアン、性同一性障害の方々が存在します。それを示すために、札幌の街をパレードしています。私たちはゲイです。私たちはレズビアンです。私たちはトランスセクシャルです。（2005年〔第9回〕）

> 私たちはゲイです。私たちはレズビアンです。私たちはバイセクシャルです。私たちはトランスジェンダーです。この札幌の街を、みなさんの隣で、一緒に生きています。（2006年〔第10回〕）

> 私たちは、札幌、北海道、そして全国各地に住むレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、そして応援してくれている仲間たちです。今私たちは笑顔で誇りを持って札幌の街を歩いています。（2008年〔第12回〕）

> レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーはテレビの中だけの特別な存在ではありません。みなさんの家庭に、職場に、学校に、そしてあなたの横に必ずレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーは存在しています。（2008年〔第12回〕）

> お買い物中の皆さん、こんにちは。私たちはレインボーマーチ札幌です。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーのみんなで札幌の街を歩いています。私たちセクシャルマイノリティは身近な存在なんですよ。（2010年〔第14回〕）

2000 年代以降は初期のパレードと比べても語感が柔和になり、抗議／要求の言葉を用いずにセクシュアルマイノリティの存在を主張するようになっていった。言い換えると、抗議／要求型のメッセージから、存在主張／可視化型のメッセージへと変わっていった。差別を受け、〈異常〉とみなされ、〈不幸〉でありながら、「プライド」を持って〈幸福〉に生きていることを主張するのではなく、セクシュアルマイノリティの存在のみを主張するようになっていったのである。抵抗のためであった「ハッピー」という言葉は、2000 年代以降は唱えられなくなり、「ハッピー」であることは前提へと移り変わっていったとも言えよう。この存在主張／可視化のメッセージは、セクシュアルマイノリティが常に・すでに社会に存在すること、言い換えると〈あなたが気づいていないだけで、私たちは身の回りにいるのだ〉という主張を行っており、必ずしもセクシュアルマイノリティが無視されていたり、差別によって社会から排除されている状況を告発するものではない。つまり、1990 年代は社会がセクシュアルマイノリティを〈無視〉する姿勢を批判していた一方で、2000 年代以降は社会の〈無知〉を表現するようになっていったのだ。

1990 年代は社会への働きかけを基本的姿勢とする抗議／要求型であったが、2000 年代からは存在主張／可視化型へと変化していった。その理由のひとつは、ゲイ男性をはじめとするセクシュアルマイノリティ当事者をより動員することを視野に入れ始めたからであると考えられる。〈差別をやめよ〉という抗議／要求型のメッセージはセクシュアルマイノリティ当事者へ向けられたメッセージではない一方で、存在主張／可視化型は当事者にも非当事者にも向けたメッセージとなりうる。両者に対する働きかけを両立させるためには、「ハッピー」か「アン・ハッピー」かの両極端に寄り過ぎない、語感の柔和な〈中立的〉とも言えるメッセージを発することが最適なのだ。二つ目の理由は、より異性愛者が受け入れやすいパフォーマンスをすることを目指していったからであると考えられる。1990 年代には差別解消への取り組みが一定の成果をあげ、より差別が見えにくくなり、さらにはそもそも差別の意図を多くの異性愛者が持っていないとなると、〈差別をやめよ〉という主張自体が必ずしも多くの人々に響くわけではない。こうした状況を踏まえた上で、社会に対する表象自体もより柔和なものへと転換が行われ、セクシュアルマイノリティを〈無視〉する差別的姿勢を告発するのではなく、〈無知〉を改善するメッセージへと転換していったのである。

以上の変化は「政治と祭の融合」へとパレードが変化していったことを示しているが、このことが示唆するのは、強い社会変革志向から退いていってたことによって、パレードに「遊び」を持ち込む余地が一層できたということである。あるいは、「遊び」によってパレードが彩られていく可能性を呼びこんだのである。この点は次節で論じることになる。

セクシュアルマイノリティの可視化のための存在主張／可視化型のメッセージになっていったことと同時に重要なのは、第 1 回から現在のパレードまでを通して、先導車から語られるのは主にセクシュアルマイノリティの存在であって、その他のマイノリティも参加者にいることはほとんど触れられない点である。掲げられる名称と目的では他のマイノリティとの連帯が重視されていたにも関わらず〈私たちのなかには外国人、障害者、アイヌなどもいます〉というようなことはほとんど言われず、〈私たちはゲイです、レズビアンです〉といったメッセージによって、行進者全員をセクシュアルマイノリティ化するパフォーマンスとなっているのだ。あるいは、パレード自体が、セクシュアルマイノリティの集団であるというアイデンティティを強めていったのである。ではこの、

セクシュアルマイノリティの集団としてのパレード行進で、行進者と傍観者の境界線はいかなるものとして構築され、それは可視化とどう関わってきたのであろうか。

4−2　境界線の構築／横断

パレード行進は一般の道路上を行進しながら、歩道からそれを見ている傍観者に向かってさまざまなパフォーマンスを行う。この両者の間には、車道と歩道という物理的な境界線が存在している。それに加え、先導車から発せられるメッセージによって、行進するセクシュアルマイノリティの〈私たち〉と異性愛者の〈あなたたち〉という二つの集団の境界線が構築されている。

車道と歩道という物理的な境界線は、実線の境界線というよりは破線の境界線と言うことができる(18)。札幌のパレード行進は行進者が歩道へ移動したり、反対に傍観者が車道のパレード行進に飛び入りで参加することが許されている。海外のパレードの中には観客とパレード行進の間に腰の高さほどの鉄柵やプラスティックの柵が設けられ、行進者と傍観者の行き来が厳しく統制されているものもある（Johnston 2002:78-81）。しかし札幌のパレードが行進をするルート上にはパレードのために物理的な柵などは設置されず、（一部のガードレールや植木があるところを除いて）両者の行き来は容易に行うことができる。いくつかの回では先導車から、「沿道で応援してくださっている皆さん、一緒に多様性を認めあえる社会を作っていきましょう。どんどんパレードに参加してください。パレードはお祭りです。みんな楽しみましょう。沿道の皆さん、私たちと一緒に歩きましょう」（1998 年〔第 3 回〕）、「皆さん、見ていないで仲間に加わってきてください。一緒に歩けば、この楽しさもわかります。はたから見ているだけでも面白いですが、中に入るともっと面白いです」（1999 年〔第 4 回〕）と、飛び入り参加を積極的に促すこともあった。実行委員によるコメントでも、「『私、バイセクシャルなんですけど…』と、飛び入りで途中から参加してくれた女の子や、踊りながら一緒に歩いてくれた外国人旅行者がいたこともすごく嬉しかった」（NL1996/8:7）、「毎年のことなんですけど、『飲み屋さんにしか行きません』とか、『沿道から見てます』なんていうオカマがいっぱいいて、そんな人達が次回は参加するってパターンが多かったのに、今年は沿道から見ていていきなり『あれ、何であんた歩いてんの？』みたいな人が多かった気がする。スタートしたときよりも終わったときの人数の方が 100 人も多かった」（BADI1999/12:46）と言われることもあるように、両者の境界線は、容易な行き来を可能とする破線の境界線と言える。

では一方でセクシュアルマイノリティの〈私たち〉と異性愛者の〈あなたたち〉という集団の境界線はどうかというと、車道と歩道の物理的な境界線よりも強固な実線の境界線であると言える。パレード行進者の中にはセクシュアルマイノリティ以外のマイノリティも異性愛者も含まれるが、しかし傍観者が行進者を見る視線、そして行進者が想定する傍観者の視線は、行進者のセクシュアルマイノリティと傍観者の異性愛者という二つの別個の集団が強固であることを示している。例えば、札幌のパレードの運営に携わっていた異性愛者の一人は、パレードを歩いたことについて次のように語っている。

> 当日。なんと当日。実は、一番見られるのを恐れていたのは、自分だった。ノンケなのに。

(18)　「実線の境界線」と「破線の境界線」という言葉は杉田敦（2015，第 1 章）を参考にしている。

> 親兄弟にギリギリまで出ないとも言っていた。確かに親兄弟に「あなたがレズだと思われたらどうするの！」、「社会はそんなもんじゃないの」と言われて、大丈夫だと、は言えなかった。 (NL1998/8:39)

この語りに表れているのは、パレード行進者は皆セクシュアルマイノリティであると傍観者が想定しているということ、そして参加者自身も、自分がマイノリティ化されるという視線を内在化しているということである。海外のパレードを観光の視点から論じたリンダ・ジョンストンは、パレード行進者の身体が「異なった（different）」ものとして有標化され、パレードが「風変わり（extraordinary）」な観光名所になると論じている（Johnston 2002:77）。また傍観者を観察する中で、傍観者が「パレードの中に何人か“普通”の人もいるよ」（There are some *normal* people in the parade）（Johnston 2002:81）と会話しているのを記述しており、傍観者（としての異性愛者）は行進者を自分たちとは異なる人々として理解しているのだ。札幌のパレードは観光化されているわけではないが、パレードで働く視線の力学は、ジョンストンの指摘と変わらないだろう。確かに「連帯」を強調したり、異性愛者も参加していることを強調することによって、ホモ／ヘテロの境界、セクシュアルマイノリティ当事者／非当事者の境界線は揺らぐかもしれない。しかし、それでもパレード自体がセクシュアルマイノリティのパレードであると謳われる限り、そのパレードに参加する人をセクシュアルマイノリティ化する視線は働き続ける。

パレード行進という空間では、そこに参加する人は圧倒的な視線の空間に投げ込まれている。異性愛社会では誰もが異性愛者であるとみなされてしまうように、パレード行進という空間では皆がセクシュアルマイノリティであるとみなされてしまう。初期に見られた〈私を見よ〉という主張も、2000年代以降の存在主張／可視化型のメッセージもそうした空間を作り、維持する。傍観者という外部から徹底的に差異化されるパレード行進という空間では、そこに参加する人は日常の世界から切り離され、圧倒的に視覚的な空間のなかで、差異や同一性の記号として存在する。吉見俊哉は博覧会の研究で、そこで展示されるものについて、「内国博は、近代国家形成期の日本のなかで『発見』されたモノたちを、かつてそれらが置かれていた場所からひき離し、差異性と同一性のなかに位置づけられる記号として存在させていく」（吉見 1992:130）と言うが、パレード行進における見世物性も博覧会における展示物と共通性があるだろう。パレードではセクシュアルマイノリティが社会に存在することをアピールするわけだが、彼ら／彼女らが存在するパレード行進という空間は、彼ら／彼女らの日常生活から引き離されている。彼ら／彼女らも異性愛者と同じく社会生活を営んでいることを主張する意図がありながらも、ここでパフォーマンスされるセクシュアルマイノリティは「生活」を持っていない。そこで可視化されているのは〈異なった存在〉としての差異である。

こうした境界線の構築／侵犯と視線の力学が生じるパレード行進の場では、破線の境界線である車道と歩道の間を行進者と傍観者が自由に行き来することで、人々の飛び入り参加を許し、パレードの参加者数＝規模を増大させることにつながる。そして行進者と傍観者の間にある視線の力学によって、行進する人々は皆がセクシュアルマイノリティ化させられる。よって、セクシュアルマイノリティの可視化と言ったとき、パレードを歩く人が実際に当事者かどうかは実は重要ではなくなる。

4−3　一体感の形成と差異化のパフォーマンス

パレード行進は先導車からのメッセージと行進者／傍観者という境界線によってのみ差異化されるわけではなく、その他の視覚的パフォーマンスによっても行進者の集団性を強めたり、傍観者からの差異化が図られる。

まず札幌のパレードでは「一体感」が重視され、行進者の集団性を維持するための行動がとられてきた。例えば、2000 年の東京でのパレードを見た札幌のパレードの実行委員らは、次のような感想を残している。

> 東京でのパレード、皆さんどうでした？私はやっぱり札幌のパレードが好きです。まとまり、一体感、お祭り！の雰囲気は札幌ならでは。東京は人数は多かったかもしれないけど、ただ歩いた、といった印象でした。　(NL2000/8:21)

> なんか不完全燃焼って感じのパレードでした。どうしてでしょう。パレードってやっぱり人数の多さじゃないみたい。決め手は。　(NL2000/8:21)

> 信号待ちで「色」区画〔隊列の区分け〕が離ればなれになっても待たないから、隊列がいくつにも分断されちゃって、全体のまとまり、一体感が…ね。　(NL2000/8:21)

こうした語りでは、東京のパレードは人数が多いにもかかわらず「一体感」を感じられないことが不満として語られている。パレードは参加者が自由にパフォーマンスを行う民主的な場とされていたが、それでもなお全体としての一体感や統一感を形成しようとしていた。その理由は、パレードをひとつの大きな集団・コミュニティとして見せつけることによって可視化を行おうとしていたからと言えよう。「一体感」を重視することができるのは、札幌のパレードの規模が東京と比べて小規模であるため、全体としてのまとまりを形成しやすいという事情もあるだろう。東京は数千人単位での行進が行われるが、札幌は数百人から千人前後の参加者数の間で推移してきたため、行進者全体をまとめ上げることができる（と少なくとも認識上は捉えられている）。

一体感を形成するために実行委員によって行われることのひとつに、プラカードの提供がある。第 1 回の開催から札幌のパレードでは実行委員によってプラカードが作成され、参加者が自由に使用できるように会場に展示されていた（図 4-3）。こうした行動は、プラカードを自宅で作成したりそれを会場まで持ってきたりすることのできない人向けの配慮でもあるが、実行委員が用意したメッセージを参加者が掲げることで、実行委員によるパレードの緩やかな方向づけが行われ、また先導車からのみでなく行進者からもメッセージが発せられることによって、結果として行進者の一体感の形成に繋がっていた。

もう一点、一体感の形成と差異化を促す実践として、2001 年（第 5 回）のパレードから行われた、行進者への風船の配布と「バルーンリリース」がある。2001 のパレードから実行委員によってパレードの行進者に風船が配布されるようになった。参加者は風船を持ちながら行進し、コースの終盤には全員で風船を手放す「バルーンリリース」を行い、札幌中心部の空を色とりどりの風船によって染める。図 4-4 のように多くの参加者が風船を持つことによって、パレードの隊列が視覚的に歩





図 4-3　実行委員によって用意されたプラカード（第 8 回〔上〕）とそれを掲げて行進する人々（第 7 回〔下〕）





図 4-4　風船を持ちながら行進する参加者（第 9 回〔上〕、第 11 回〔下〕）

道の傍観者から差異化されている。さまざまな色の含まれる風船はレインボーも表しており、パレードの隊列をセクシュアルマイノリティのシンボルとしてのレインボーによって脚色する役割も果たしている。

存在主張／可視化型のメッセージによって〈私たちは社会に存在しています〉と主張しつつ、異性愛者の〈あなたたち〉とは異なる、セクシュアルマイノリティの〈私たち〉を強調するのは、「差異と普遍性」（清水 2019）や「差異化と同化」と呼ばれるロジックと共通している。つまり、〈私たちはあなたと同じ人間である〉と主張しながらも、〈でも私たちとあなたたちには違うところもある〉と言うことで、自分たちの集団性やアイデンティティが失われてしまうことに対しての抵抗も行うのである。ここで見た全体的なパフォーマンスでは、比較的シンプルな形で差異化と同化が行われていた。それは一言で言うならば、〈私たちはあなたたちと同じ人間であるが、異性愛者ではないという点でのみ唯一異なっている〉というものだ。

本節ではパレード行進で行われるパフォーマンスの全体的な傾向について論じた。先導車のメッセージは、抗議／要求型から、語感の柔和な存在主張／可視化型へと変わり、セクシュアルマイノリティの〈わたしたち〉の存在を可視化させ、〈無視〉する姿勢の批判ではなく〈無知〉の改善のためのメッセージの発信へと収斂していった。車道と歩道の間にある破線の境界線を越えて傍観者がパレードに飛び入り参加することを促し、〈わたしたち〉の集団を拡大することで可視化の効果を増

幅させようと試みていた。パレード内で働く視線の力学によっていずれの参加者もセクシュアルマイノリティの〈わたしたち〉となり、傍観者である異性愛者の〈あなたたち〉とは異なるという実線の境界線が構築されていた。そしてその〈わたしたち〉の一体感を形成するために、プラカードを用意したり、風船を参加者に配布することによって、視覚的に行進者を傍観者から差異化していた。2000 年代以降のパレードでは具体的な主義主張を唱えず、セクシュアリティにおいては異性愛者と異なるが、それ以外は「普通」の人間であることを主張するという、可視化を中心的目的とする〈中立的〉なパレードへとなっていったとも言えるだろう。ではこうした特徴のあるパレード行進の中で、ゲイ男性はいかなるパフォーマンスを行ってきたのであろうか。当事者にも非当事者にも働きかけ、そして「遊び」と社会変革を共に行う「政治と祭りの融合」として、どのようなパフォーマンスを行ってきたのであろうか。

５．ゲイ男性のパフォーマンス ――「遊び」によるまとめ上げと差異化

前章では 1990 年代を中心にゲイリブにおけるゲイ男性のアイデンティティについて論じたが、その当時のゲイリブはゲイ男性が主導をしている側面が少なからずあった。1990 年代末から始まったパレードはその延長線上にあるため、パレードの中でもゲイ男性が特殊な位置に置かれている可能性がある。ではゲイ男性はパレードでどのような位置におり、どのようなパフォーマンスを行っていたのであろうか。

５−１　皆が平等に表象されるのか ――「Ｌ」「Ｇ」「Ｂ」「Ｔ」のフロート

パレードは誰であっても参加できるイベントであり、セクシュアルマイノリティのパレードであるのであれば、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーなどそれぞれが平等に参加し、平等に自分自身を表象できると思われる。実際にパレードに参加する人の中にどのような人がいるのかを調べることは困難ではあるが、参加者の構成や表象されるセクシュアルマイノリティには偏りがあることを暗示する言説がある。

2005 年（第 9 回）のパレードに際して実行委員らによって行われた座談会では、パレードでのゲイとレズビアンの位置付けについて語られている。レズビアンの実行委員長（□による伏せ字）とゲイの実行委員（◯による伏せ字）のやり取りを、少々長いが引用する。

> □□□□　：今年、実行委員長を務めさせてもらった□□です。今年は「パレードって何だろ？」というところから始まったような気がします。「政治的なメッセージをセクシュアルマイノリティのパレードを通して訴えるのがパレードなのか？」「お祭りがパレードなのか？」ってところから実行委員会が始まったのですが、パレードが終わってみてやっぱりパーソナルな部分ではなく、ゲイだとかレズビアンだとかバイセクシュアルだとかという部分で、いろいろと達成できたんじゃないかと思ってます。まあ、人知れずプレッシャーだったんですけど…。実行委員長がレズビアンだっていうことで「ゲイコミュニティはどういう風に見るんだろうか？」「いつものようにこちらに振り向い

てくれるんだろうか？」とか。でも本当にみんなの協力が得られて成功に繋がったと思います。ありがとうございました。

○○○　　：私は□□□□が実行委員長になったと聞いて、あら女性がってちょっと驚いたんだけど…。例えば自分がビアンだからどうこうしようという考えや目論見があって立候補したのかしら？

□□□□　　：勿論レズビアンとしてというのはあったし、何人かの参加者から東京じゃありえないよねって言われたりして、そういう風に見られるんだって思ったりもしました。結構こういうセクシュアルマイノリティの大きなイベントになると私オカマですっていうレズビアンが多かったんですけど、そうではなくて女プライドを持った人やレズビアンプライドを持った人が全面に出ればいいなぁって思ったんですよ。まだ札幌には少ないんですけど全国にいるだろう尾辻さん(19)のような媚びない女みたいな人達ですね。

○○○　　：わかるわかる。

□□□□　　：札幌ってゲイが上とかレズビアンが上とかってそういうことじゃなくって、みんな同じだし誰かが頑張ってるのみんなで助け合う街なんだよ、セクシュアルマイノリティのコミュニティってそういうものでしょ？って発信したかったんです。「マイノリティだから潰されてきたの」じゃなくて、そうした仲間を引っ張りあげるのがコミュニティじゃないの？っていうのを出したかったのはあります。（BADI2005/12:364）

この対話では、ゲイとレズビアンのパレードへの関わり方の違いに触れられている(20)。まず注目すべき点は、実行委員長となったレズビアンの人物が、「ゲイコミュニティはどういう風に見るんだろうか？」と、参加者のゲイ男性の視線を気にしていたということである。そして「いつものようにこちらに振り向いてくれるんだろうか？」と言うように、ゲイ男性の参加者や支援者がパレードの大部分を占めると捉えていたと言える発言をしているのである。ゲイの実行委員もレズビアンが実行委員長になると聞いて驚いたと語るように、実行委員も参加者もゲイ男性を主体としていた側面があったと言えるのである。そもそもレズビアンの実行委員長がゲイの視線を気にしなければいけないのは、（活動家・運動家は除く）一般の多くのゲイ男性とレズビアンの女性の間に交流が少なかったことも示唆しているのではないだろうか。『バディ』でもゲイコミュニティを形成することが目指され、ゲイ男性向けゲイマンガでもゲイコミュニティにおけるゲイ男性が描かれていたように、1990 年代から 2000 年代にかけてのゲイ男性は、ゲイであるということによるつながりへの志向があった。これは一種の同質性への志向、あるいは〈男の絆〉というホモソーシャルな関係性への志向とも取れるかもしれない。こうした状況でレズビアンとの交流が欠如するのは必然でもあった。

上の対話で注目すべきもうひとつの点は、「女プライドを持った人やレズビアンプライドを持った人」、言い換えると「女」としてのアイデンティティや「レズビアン」としてのアイデンティティ

(19)　当時、大阪府議会議員であった尾辻かな子のこと。2005 年には著書『カミングアウト：自分らしさを見つける旅』（講談社）でレズビアンであることをカミングアウトした。

(20)　このレズビアンの実行委員長による類似する語りは、このパレードについてレポートした関口久志（2007b）にも確認できる。

を持つ人物の参加が少ないと捉えられている点である。1999 年（第 4 回）の実行委員長もレズビアンであったが、彼女も 1999 年の段階で同様に、「個人的には、まだまだ地元のセクシャルマイノリティの参加者の少なさが気に掛かるし、特にレズビアン及びバイセクシャルの女性の参加者が少ないのは残念であると同時に、レズビアン及びバイセクシュアルの女性のコミュニティとパレードというイベントがリンクしていけない現状を再認識することが出来た学ぶことの多いパレードでした」（NL1999/9:52-53）と語っていた。前章で見たように、札幌ミーティングで「レズビアン」というアイデンティティの形成を目的とした活動が始まったのは 2000 年代に入ってからであった。ゲイ男性とレズビアン・バイセクシュアル女性のアイデンティティの状況の違いは、パレードにも引き継がれていたと思われる。そして「女」や「レズビアン」としてのアイデンティティを持つ参加者が少ないという状況は、「セクシュアルマイノリティの大きなイベントになると私オカマですっていうレズビアンが多かった」という語りにつながる。つまり、レズビアン・バイセクシュアル女性はゲイ男性のパフォーマンスへ同化せざるを得ない状況にあったのである。

パレードで誰が表象されてきたのかを知るにあたって重要なのは、フロートである。フロートとはいわゆる祭りなどの山車であり、パレードでは装飾された小型トラックや中型トラックがその上にパフォーマーを乗せ、行進者とともにパレードを行進する。図 4-5 は当時の映像・写真資料、ゲイ雑誌、公式ガイドブックなどにおける記述を参考に、これまでの札幌のパレードにおける出展フロートとその順番を図式化したものである。

「フロート」と呼ばれるものの定義は明確ではないが、広義の意味でフロートと言えるもの（自動車に装飾が施され、それに人が搭乗するもの）は 1996 年（第 1 回）から参加していた。オープンカーや小型トラックに簡単な装飾を施し、ドラァグクイーンなどのパフォーマーが搭乗していたものがそれである。狭義の意味として、「フロート」という言葉で指し示されるものが登場したのは、派手な装飾が施された 4t トラックが参加し始めた 1999 年（第 4 回）からである。狭義の意味でのフロートは、それぞれがテーマを持って装飾されている。図 4-5 ではこの狭義の意味でのフロートを中心にまとめている。1996 年から 1998 年（第 1 回から第 3 回）まではオープンカーや小型トラックが多く参加していたが、1999 年から巨大なフロート（狭義のフロート）が参加するようになってからはオープンカーや小型トラックの参加は減少していく。そのため 1999 年（第 4 回）以降もオープンカーや小型トラックが参加した回があるが、図 4-5 では 1999 年以降は狭義のフロートのみを記すことにした。

図 4-5 に記されているフロートについてそれぞれ簡単に紹介をしておこう。「先導車」と「街宣車」はほぼ同じものを指している。街宣車／選挙カーに装飾を施し、パレードのメッセージを周囲の傍観者に対して発することをメインとする車である。フロートではないが、パレードの全体像を示すため図に含めてある。「DJ」とは「DJ フロート」を意味し、DJ ブースが設置されたフロートであり、札幌のパレードで初めて登場した（狭義の）フロートである(21)。1999 年の一度のみの出展である。「バディ」は「バディフロート」を意味し、『バディ』によって出展されていたフロートである。2001 年から 2006 年まで出展されていた。「ゲイバー」は「ゲイバーフロート」を意味し、札幌

(21)　日本のパレードにおけるフロートは、1999 年の札幌のパレードで登場したこの DJ フロートが初であると言われている。ただ、何をもってフロートとみなすかによってもこの捉え方は変わってくるだろう。

図 4-5　札幌のパレードにおける出展フロートとその順番（先頭左）



※ 名称や参加が不確かなものには「?」を付してある

を中心とする北海道内のゲイバーによって合同出資・出展されたものである。回によってはハッテン場も参加しており「ゲイバー&クルージングスペース合同フロート」と呼ばれていたこともある。2001 年から現在まで出展されてきている。「女の子」は「女の子フロート」を意味し、その名の通り、レズビアン・バイセクシュアル女性などの「女の子」をテーマとするフロートである。2004 年から現在まで出展されてきている。「実行委員」は「実行委員会フロート」を意味し、実行委員によって出展されるフロートである。主にドラァグクイーンやゴーゴーボーイらが搭乗している（女の子フロートも基本的には実行委員作成だが、名称によって区別されている）。「道外合同」は、関東

や関西のゲイ関連産業が共同で作成したフロートであり、2013 年のみの出展である。「レッドリボン」は「レッドリボンフロート」であり、HIV/AIDS の啓発を目的に出展されたフロートである。2010 年と 2011 年のみの出展である。「トランス」はトランスフロートであり、トランスジェンダーをテーマとしたフロートである。2018 年に初めて登場した。2019 年からはフロート名に北海道を想起させる食べ物・動物の名前が使用されるようになった。フロートの内容としては、ヒグマは先導車、ジンギスカンは実行委員、とうきびは女の子とトランス、じゃがいもはゲイバーに対応している。

フロート全体の傾向を見てみると、札幌のパレードではゲイ、レズビアン／女性、トランスジェンダーといったアイデンティティがフロートによって表現されてきたことがわかる。ゲイバーや『バディ』はゲイ男性向けのビジネスであり、そこに搭乗するのもドラァグクイーンやゴーゴーボーイが主であることからも、実質的には〈ゲイフロート〉としての意味合いが強い(22)。DJ フロートも道外合同フロートも搭乗者の多くはドラァグクイーンであった。女の子フロートもレズビアンやバイセクシュアル女性を中心とするフロート（札幌ミーティングのウィメンズブランチのような意味合いと言える）であり、〈レズビアン・バイセクシュアル女性フロート〉としての意味合いがある。2018 年（第 18 回）になって初めて登場したトランスフロートも、これまで表象されてこなかったトランスジェンダーというアイデンティティを表象しようという意図から出展され始めたフロートと思われる。一方で、性的アイデンティではないテーマによって出展されたフロートは、実質レッドリボンフロートだけであったと言えよう（HIV/AIDS がゲイ男性との結びつきが強いことを考慮すると、〈ゲイフロート〉としての一面も持っていると言える）。そしてそれぞれのフロートの数を見ると、明らかに〈ゲイフロート〉がこれまで大半を占めてきたことがわかる。このように、セクシュアルマイノリティの連帯としてのパレードの中でもそれぞれの性的アイデンティティが重視され、かつゲイ男性のフロートが大半を占める中でパフォーマンスが行われてきた。ではこの中でゲイ男性によるパフォーマンスはどのように行われていたのであろうか。

5−2 〈差別なき社会〉における運動 ——「ゲイナイト」的パレード

まず、札幌のパレードに初めて登場した（狭義の）フロートである DJ フロート（図 4-6）を取り上げる。このフロートは東京在住の DJ であるゲイ男性 N 氏と大阪在住のゲイ男性 A 氏の二人によって企画されたものであり、関東・関西のゲイ・レズビアン関連企業の協賛によって実現したものであった。フロートには DJ ブースが設けられ、クラブのように音楽が流されていたことから、「DJ フロート」と呼ばれている。N 氏がパレードに興味をもち、日本のパレードにフロートを出展したいと思うようになった経緯が、2003 年に次のように回顧されている。

> 差別とか、ゲイだってことが理由でつらい思いをした経験のない僕が、なぜ興味を持って〔パレードに〕参加しているのか？それは、6 月末の NY ゲイパレード「STONEWALL 25 周年」（1994 年）を見に行ったから。それがパレード初体験。白昼堂々と NY・マンハッタンの中心街を、女装した集団やレザーで揃えたマッチョの団体など何万人もの人達が笑顔で手を振り、歩い

(22) ドラァグクイーンは女性によっても行われるが、ドラァグはゲイ男性が行うものという認識が非常に強いため、ここではドラァグクイーンを主なパフォーマーとするフロートをゲイ男性のフロートとして捉えている。

てるんです。それを見に来ている何十万人もの人達は拍手して応え、女装して山の手線に乗った程度の経験しかない僕には、異様に輝いて見えました。もちろん、都会のど真ん中を歓迎されながら笑顔で横切ってみたい！と大きな人生の目標ができてしまいました。実はその年から東京でもパレードが行われたのですが、周りの友人の反応が悪く、一人でコソコソと見に行ってました。参加したい、明治通りを横切りたい〜っ！て思ってたら、5 年前、札幌のパレードの PARTY へ DJ として呼ばれることに。チャンス！さっそく大阪の友人 A 氏を無理やりそそのかし、スポンサーを探し、資金集め。そして遂に、日本第一号の DJ フロートが札幌で完成したのでした。 (BADI2003/10:75)

この語りで重要な点のひとつは、フロート出展の動機が、「都会のど真ん中を歓迎されながら笑顔で横切ってみたい！」という、傍観者からのポジティブな歓迎である点である。言い換えると、対社会的な働きかけというよりは、傍観者がパレードを見て楽しいと思えるようなパフォーマンスを志向しており、「遊び」の側面が強まっているという点である。そしてもう一点は、「差別とか、ゲイだってことが理由でつらい思いをした経験のない僕」、つまりゲイであることによる被差別・被抑圧経験のない人物が企画したのが、ポジティブな歓迎を目的とするフロートであったということである。1990 年代の運動は社会に対して同性愛者への差別の存在を認めさせることが重要な活動のひとつであった（札幌ミーティングによる UHB や STV への抗議活動など）。しかしその反面、多くのゲイ男性当事者の間では、差別を受けてきたという経験、差別が社会にはびこっているという認識を必ずしも共有してこなかったことを N 氏の発言は意味しているように思われる。例えば、1998 年（第 3 回）のパレードを報道した北海道の情報雑誌『うおんつ』では、「差別」についての実行委員による語りが紹介されている。



図 4-6　DJ フロート（1999 年〔第 4 回〕）

こんなにオープンで楽しいプライドマーチは初めて。こういう形で、楽しく、自由に参加できるのが一番いい。ただ、市民からはもっとバッシングを受けてもいいと思う。それぐらいの反応をしてくれた方が逆に燃える。 (『うおんつ』1998/10:19)

この語りの重要な点は、パレードの基礎的な目的に対社会に働きかけることによる差別の解消があるにも関わらず、差別をされているという実感や経験が希薄であるということである。確かにパレードの明文化された目的や（初期の）先導車からのメッセージでは差別が存在することを唱えていたが、そうしたパレードにおけるメッセージと個人の間で、差別の経験をめぐるズレが生じていた。上の記事は社会の「寛容」な状況について、次のように続けている。

確かに、足をとめてプライドマーチを見ていた市民からは、『個人的にはあまり理解できないけれど、人それぞれの考え方があってもいいんじゃないの』（中年男性）『とてもカラフルで楽しそう』（女子高校生）というように好意的とも、無関心ともとれる反応が多かった。

（『うおんつ』1998/10:19）

つまりパレードは、差別をされているという意識・経験が参加者（そして運営者にも）にとって希薄で、かつ傍観者にも差別意識がなく無関心であるという、〈差別なき社会〉で差別に立ち向かっているという、錯綜した状況にあった。あるいは別の言葉で表すのであれば、〈差別らしい差別を経験したことはないが、差別はある〉という曖昧なスタンスから参加・運営する個人によって成り立っていたという一面もあるのだ。上のような「好意的とも、無関心ともとれる反応」は「寛容言説」と捉えることができ、それに対して抵抗をしていたとも言えるが、そうした反応が必ずしも立ち向かう差別＝バッシングであると捉えられているわけではない。このようなあいまいな状況でパレードを開催することによって運営者・参加者が感じ得ることは、異性愛社会に向けてパレードを行うことの無意味さや、社会の変わらなさではないだろうか。そもそも差別という差別が見えにくく、傍観者も好意的かつ無関心なのであれば、パレードの持つ社会変革可能性が感じられない。だからこそ先ほどの語りにもあったように、バッシングがあった方が「燃える」のであり、そのために差別を積極的に欲するのである。ではこのような状況で開催されるパレードとは、いかなるものになり得るのか。

伏見憲明は 1999 年の札幌のパレードを「いろいろな意味で、意義深いものだった」（BADI1999/12:50）と評価し、運動の背景を、「90 年代前半のムーブメントは反差別運動を中心としたいわゆる『運動団体』が牽引していたわけだが、21 世紀を前にした現在のゲイ・シーンは、『新中間層』の台頭が状況を展開させている現実がある」（BADI1999/12:50）と分析している。「新中間層」とは、「リブ的な意識によって反動形成された主体ではないが、ゲイであることに肯定的な感性を元にして自分のゲイ・ライフを想定し、消費行動をしている 90 年代的なゲイ」（BADI1999/12:50）を意味する伏見による造語である。そしてこの状況を別の言葉で、「時代のキーワードが『反差別』『人権』から『ハッピィ』『楽しさ』にその比重を移しつつある状況」、「リブ系と非リブ系の接近」（BADI1999/12:50）とも表現している。

DJ フロートはこうした状況をただ単に反映するだけではなく、それを後押しするものであっただろう。札幌ミーティングは 1994 年からゲイナイトを開催してきており、ゲイリブに興味関心のない一般のゲイ男性が「享楽イベント」には多く参加することを知っていた。『バディ』でも「ハッピー」によって多くの読者を獲得していた。1990 年代からゲイ男性が肯定的なアイデンティティを持ち始めたことも確かだろうが、そもそも政治的活動に興味のないゲイ男性は多かった。そうしたゲイ男性を、「政治的」活動でありながら「政治的」に見えない活動へと動員――「遊び」をきっかけに社会変革活動へ動員――しようとしていた。「抗議／要求型」から「存在主張／可視化型」へと移行する中で、パレードでもゲイナイトのような雰囲気を形成し、多くの一般のゲイ男性を呼び込むことになった。1999 年（第 4 回）のパレードについて特集をした『バディ』では、「今までとは違う形で盛り上げ、みんなの感動を呼ぶものにしてくれた」DJ フロートを「表彰モノ！」と賞賛し

(BADI1999/12:28)、「ゲイナイトが白昼の札幌に出現したかのような光景」(BADI1999/12:24)、「『歩く』パレードから『ダンス』するパレードへというイメージ」(BADI1999/12:28) と記述しており、DJ フロートの登場によってパレード自体がクラブイベントのような様相を帯び始めたことを示唆している。

しかしDJフロートはただ単に「政治的」活動に興味のないゲイ男性を動員するためのものではなかった。1990 年代のゲイ男性向けゲイマンガでは異性愛社会を原因とする悩みが描かれていたが、2000年代からはそれが描かれなくなっていったこと、差別が見えにくいために積極的に差別を欲するという状況が生まれること、こうした状況が意味する〈差別なき社会〉がパレードの背後にあるのなら、差別の経験とは別の何かによってゲイ男性の間につながりを形成しなければならない。それが「ハッピー」や「楽しさ」というイメージによって脚色されるゲイナイト的パレードなのである。伏見の言う、「反差別」「人権」から「ハッピィ」「楽しさ」へという移行は、差別の経験によって連帯を形成することの限界を迎え始めたこと、あるいはそれ自体がはじめからそもそも困難であったことが感じられ始めたことによる戦略の方向転換を指し示すものであったと捉えることができるのだ。さらには異性愛者もそもそも〈無関心〉で〈寛容〉で差別意識がないなら、〈差別をやめよ〉と言っても意味がないため、別の表象によって働きかけを行わなければいけない。それが「ハッピー」の印象であったのだ。

DJフロートは先導車と違い、そこから具体的なメッセージが発せられはしない。クラブミュージックなどが主に流され、搭乗しているドラァグクイーンやゴーゴーボーイ、そのフロート周辺の行進者はそこがあたかもクラブ会場であるかのように踊る。このフロートだけを見ると何を目的とした行進なのかはわからないようなパフォーマンスとなっている。よってこのフロートの周辺ではパレードの目的や意図が霞み、参加者は〈ダンスをする〉という目的のみによってパレードに参加することができるようになる。目的上の「政治と祭りの融合」とは異なり、実際のゲイ男性のパフォーマンスは可視化以外の「政治」の側面を後退させ、「遊び」の側面を強めていった。社会への働きかけというよりは自分が楽しむためにパレードに参加することによって、パレードが自己やその他の当事者に向けられた「祭」としての傾向を強め、「差別」の経験ではない「楽しさ」という共通点によってつながりを形成していく。

5-3　ゲイ企業の参入によるパレードのゲイ化

DJ フロートの登場は、『バディ』と札幌のゲイバーという二つのゲイ企業をパレードへと引き入れる役割を果たした。図4-6を見るとDJフロートには広告が掲載されているが、それらはゲイ・レズビアン関連企業の広告である。11 ほどの企業の協賛によって出展されており、『バディ』はその中のひとつであった。しかしDJフロートの「成功」をきっかけとして、翌年2000年に東京で開催されたパレードでは『バディ』がN氏とA氏の二人に依頼する形で「バディフロート」が登場することになった (BADI2000/11:49)。そして2001年の札幌のパレードでもDJフロートに取って代わる形で「バディフロート」が登場した (図4-7)。2001年から2006年 (第5回から第10回) までの6回のパレードにバディフロートは出展し、DJフロートと同様のパフォーマンスによってパレードを





図 4-7　バディフロート（2001 年〔上〕、2004 年〔下〕）





図 4-8　ゲイバーフロート（2004 年〔上〕、2005 年〔下〕）

盛り上げた(23)。

DJ フロートの登場によってパレード行進が「ダンス」するパレード、「ハッピー」をキーワードとするパレードへと転換した流れに乗って『バディ』がフロートを出展することは、1990 年代末から『バディ』が押し出していた「ハッピー・ゲイ・ライフ」というキャッチフレーズを考慮すると、不思議なことではなかった。雑誌の誌面を超えて「ハッピー・ゲイ・ライフ」を表現する場としてパレードが見出されたのである。そして『バディ』がターゲットとしていたのは異性愛社会ではなくゲイ男性であったため、バディフロートの「ハッピー」路線と「遊び」によって、ゲイ男性らがまとめ上げられていった。

DJ フロートが登場した次の回となった 2001 年のパレードからは、札幌のゲイバーが合同で出資するフロートも登場し始めた（図 4-8）(24)。パレード後に N 氏と A 氏が札幌のとあるゲイバーに行った際のエピソードが『バディ』に掲載されている。

> そこのマスターは今までパレードなんてリブっぽいから興味なかったそうなのだが、たまたま□□□くんの友達ということで見に行ったらものすごく感動して、「あんなお祭り騒ぎだ

(23)　バディフロートは第 10 回のパレードを最後に出展されなくなったが、その理由は人員不足であるということが、第 11 回のパレード後のプライド集会（パレード後に開催される集会）で語られている。

(24)　2001 年（第 5 回）のパレードに登場したゲイバーフロートは、正確にはフロートではなく、左右側面と背面にモニターとディスプレイのついたアドトラックであり、それに搭乗している人物はいない。バディフロート、DJ フロートに似た形でのフロートの参加は、2002 年（第 6 回）以降である。

とは思わなかった。あれだったらアタシもやりたい。来年は自分でトラック出すから。お客にも声かけてあと100人は増やすわ。あんた回してちょうだいよ」と言っていたそうだ。
(BADI1999/12:28, □はN氏の伏せ字)

この語りからはまず、このゲイバーのマスターにはリブ（社会運動）に対する忌避感があったことがわかる。パレードに限らず、ゲイリブに対する批判がゲイ男性当事者によって投げかけられていたことは、第3章で論じた。そしてもう一点わかることは、パレードが「リブっぽい」のではなく「お祭り」であるならば参加をしたいという意思があることである。第1回（1996年）のパレードを振り返るインタビューで、当時実行委員だった人物は当時のゲイバーについて次のように語っている。

第1回目のパレードでのことなんですが、フライヤーを各ゲイバーに置かせてもらいに行ったとき、とあるゲイバーのお母さんに「こんなことやったって、オカマは誰も喜ばないわよ！」と言われて、目の前でフライヤーをゴミ箱に捨てられた、なーんてこともあったんですけどね（笑）。
(BADI2003/12:355)

第1回のパレードは抗議／要求型のメッセージを投げかけ、対社会の「政治」としてのイメージの強いものであったことを考えると、このゲイバーの「お母さん」（＝マスター）もゲイリブとしてのパレードに批判的な立場にいた。しかしパレードをゲイリブとしてではなく「祭」として捉えるようになることで、ゲイバーの人々をもパレードへ動員することになっていった。

2001年までのパレードは北海道内の参加者よりも道外の参加者が多かったが、2002年（第6回）のパレードからは道内の参加者が道外からの参加者を上回ったと言われている（BADI2006/10:308）[25]。そのきっかけは、DJフロートが登場した1999年（第4回）からゲイバーとの連携を強めていったことであると語られている[26]。

ゲイコミュニティの中心の一つは、やはりゲイバーだと思うんです。4回目のパレードから「ビジネス」という面にも力を入れ出したのですが、そこでゲイバーとパレードが上手くコミットしはじめて来たと思います。お互いの協力関係がだんだんと形になってきて、6回目のパレードからゲイバー合同フロートが登場し、地元のパワーが一気に加速した感じでしょうか。
(BADI2006/10:308)

1999年（第4回）のパレードからゲイ男性向けのビジネスとしてのゲイバーに協力を求め、それがより形になったのが2002年（第6回）であると言われている[27]。では具体的にはどれほどの協

(25) 札幌のパレードでは、必須ではないが、パレード行進者に簡単な受付をしてもらっている。その受付の際に、居住地を調査していたと思われる。
(26) 1999年（第4回）のパレードを振り返る札幌ミーティングのニュースレターでも、「札幌の課題であった飲み屋やそのお客であるゲイとの距離も少しづつ(ママ)に近くなってきている感触も感じました」(NL1999/9:53) と語られている。
(27) 注24でも触れたように、ゲイバーによる合同のフロートが出展されたのは2001年（第5回）からであるが、

力があったのだろうか。そのひとつの指標として、公式ガイドブックにおけるゲイバーの広告協賛数を見てみよう。

パレードごとに発行される公式ガイドブックには、パレードの協賛企業・サービスの広告が掲載されている。その広告数をまとめたのが表 4-3 である。この表では、種別を問わず掲載されている広告の総数と、その中でのゲイバーの広告数、ゲイバー以外のゲイ男性向け企業・サービスの広告数をまとめ、全広告数に対する全ゲイ男性向け企業・サービス（ゲイバーとその他ゲイ男性向け企業・サービス）の割合を算出してある。ゲイバー以外のゲイ男性向け企業・サービスにはゲイ雑誌、ゲイ男性向けウェブサイト、ゲイショップ、ハッテン場、ウリ専（ゲイ男性向け性風俗店）が主に含まれる。表を見てわかるように、ゲイバーの広告は2001年まではほとんど掲載されていないが、2002年からはその数が急増していることがわかる。そしてその後は多少の変動はあるが、15-20 件ほどの広告数を維持してきた。その他ゲイ男性向け企業・サービスはゲイバーの広告数と比べると少なく、2004 年は 11 件とその他の年と比べて多かったものの、全体としては 4-7 件ほどの間で推移してきた。一般企業やセクシュアルマイノリティ向けの企業・団体の広告などを含む掲載広告総数に対する全ゲイ男性向け企業・サービスの割合を見てみると、概ね 3 割から 4 割近くを占め、特に 2002 年から 2009 年の間はそれらが全体の半数以

表 4-3　札幌のパレード各回の公式ガイドブックに掲載されている総広告数と、それに占めるゲイ男性向け企業・サービスの割合

年	ゲイバー	ゲイ企/サ（ゲイバー以外）	全ゲイ企/サ総数(1)	掲載広告総数(2)	割合［(1)/(2)］
1996	0	1	1	5	20.0%
1997	－	－	－	－	－
1998	2	4	6	20	30.0%
1999	1	4	5	16	31.3%
2001	2	3	5	15	33.3%
2002	12	4	16	31	51.6%
2003	16	9	25	45	55.6%
2004	16	11	27	47	57.4%
2005	19	7	26	45	57.8%
2006	18	6	24	47	51.1%
2007	19	4	23	47	48.9%
2008	17	9	26	48	54.2%
2009	21	7	28	49	57.1%
2010	14	4	18	45	40.0%
2011	20	4	24	59	40.7%
2013	14	5	19	51	37.3%
2017	5	1	6	21	28.6%
2018	14	3	17	70	24.3%
2019	20	1	21	78	26.9%

※1「ゲイ企/サ」＝「ゲイ男性企業・サービス」の略
※2 ゲイ男性を主なターゲットとする企業・サービス（ゲイバー、ハッテン場、ゲイ男性向けセックスグッズ販売、ゲイ男性向けウェブサイト、ウリ専など）を数え上げてあるが、ゲイ男性をターゲットとするものでも、資金提供・利潤の発生とは結びつかない趣味のサークルのようなもの、友達作りの交流会などはカウントしない。ゲイ男性向けゲイナイトの広告は一件としてカウントする。ゲイ男性向けの関連イベントの広告も、一件としてカウントする。セクシュアルマイノリティ全体をターゲットとするものは、ゲイ男性向け企業・サービスとしてカウントしない。
※3 件数は、広告の大きさを考慮せず、純粋に件数のみを数えている。
※4 複数団体によって出資されていると思われる広告は、一件としてカウントする。
※5 1997 年（第 2 回）は資料未所持のためデータ無し。

図 4-8 のような形でトラックに装飾を施したゲイバーフロートは 2002 年からであるため、この語りでは第 6 回からゲイバーフロートが登場したと捉えられていると思われる。

上を占めていた。

対して、女性向け（レズビアン・バイセクシュアル女性、異性愛女性を含む）企業・サービスの広告はどれほど掲載されているのであろうか。表 4-4 は表 4-3 同様に広告の件数を数え、全広告数に対する女性向け企業・サービスの割合を計算したものであるが、ゲイ男性向け企業・サービスの広告と比べ、圧倒的に少ないことがわかる。つまり、パレードはゲイ男性向け企業・サービスによる資本から大いに協力を得ており、ゲイ男性の意向に合わせてパフォーマンスが行われていたと考えられるのである。またガイドブックにおける広告は、それ自体がゲイやレズビアン・バイセクシュアル女性、そして彼ら／彼女らのコミュニティの表象でもあるが、パレード行進に見られるフロートだけではなく、ガイドブックでもゲイの表象が多くを占めていたことになる。

表 4-4　札幌のパレード各回の公式ガイドブックに掲載されている総広告数と、それに占める女性向け企業・サービスの割合

年	女性向け企/サ(1)	掲載広告総数(2)	割合〔(1)/(2)〕
1996	0	5	0.0%
1997	－	－	－
1998	2	20	10.0%
1999	1	16	6.3%
2001	0	15	0.0%
2002	1	31	3.2%
2003	3	45	6.7%
2004	3	47	6.4%
2005	2	45	4.4%
2006	1	47	2.1%
2007	0	47	0.0%
2008	3	48	6.3%
2009	2	49	4.1%
2010	4	45	8.9%
2011	1	59	1.7%
2013	2	51	3.9%
2017	2	21	9.5%
2018	3	70	4.3%
2019	3	78	3.8%

※1「企/サ」＝「企業・サービス」の略
※2 レズビアン・バイセクシュア女性と異性愛女性をも含む人向けの企業・サービスを数え上げている。レズビアンバー／カフェ、レズビアン・バイセクシュア女性向けニュースサイト・雑誌、女性向けクラブイベント、レズビアン・バイセクシュア女性向け出会いサイト、女性向けアダルトショップ、女性と子どもの支援団体、レズビアン・バイセクシュアル女性の活動団体が含まれる。セクシュアルマイノリティ全体をターゲットとするサービスなどは含めていない。

これまでは主にパレードの表舞台とも言えるパレード行進に注目してきたが、パレードはパレード行進がすべてというわけではなく、ガイドブックをはじめとして、その前後・周辺にさまざまな活動を伴う。2003 年の実行委員長は、「もちろん“お祭り”的なことがメインになるのですが、去年までは政治的な部分がちょっとおざなりになっていたので、今年は裏で地味に政治的なことをする予定で、すでにもうその活動はしています」（BADI2003/5:362）と語るように、「裏舞台」で「政治的」活動も行ってきた。その活動として中心的なものは、行政への働きかけであった。

札幌のパレードの歴史の中でもっとも大きな出来事と言えることに、札幌市長が参加したことが挙げられる。札幌のパレードではパレード行進後に「プライド集会」という集会が開催され、関連イベントの紹介やフロートの紹介、参加団体の紹介などがされるが、2003 年のプライド集会に当時の札幌市長であった上田文雄が参加をし、スピーチを行った。9 月 14 日のパレードに先立つ 9 月 10 日には、実行委員長がドラァグクイーンを引き連れて市役所を訪れ、直接パレードへの参加依頼をした（BADI2003/12:53）。札幌市長を退任する 2015 年まで、上田市長は継続的にプライド集会への参加や、メッセージの寄稿を続けていた。

類似する活動として、道内各市の市長にガイドブックへのメッセージの寄稿を依頼するという活動があった。上田文雄によるメッセージは 2004 年（第 8 回）から、当時の北海道知事であった高橋

はるみによるメッセージは 2005 年（第 9 回）から掲載されるようになったが、2007 年（第 11 回）のガイドブックからは、道内各市市長からのメッセージも掲載が開始された。札幌市を除き北海道には 34 の市があるが、2007 年以降はそれぞれの市にメッセージ寄稿の要望を送っていた。2007 年から 2009 年（第 11 回から第 13 回）までは 11 市に依頼をしており、2010 年（第 14 回）から道内全市への依頼が行われるようになった。2007 年の寄稿数は 4 市であったが、少しずつ数を増やし、2013 年には 10 市からのメッセージが寄せられるに至っている（表 4-5）。2013 年から 2018 年の間ではメッセージ寄稿数が倍以上に増えたが、これは、セクシュアルマイノリティに対する社会の関心が高まったことが最大の要因であると考えられる。

表 4-5　北海道内の市長からのメッセージ寄稿数

年	寄稿数（市）	依頼数（市）
2007	4	11
2008	6	11
2009	8	11
2010	12	34
2011	9	34
2013	10	34
2018	23	34
2019	30	34

※1　2017 年は未実施。札幌市長のメッセージのみ掲載。
※2　メッセージ寄稿数・依頼数に札幌市は含めていない。

2013 年までは 3 分の 1 の市からしかメッセージをもらえておらず、2013 年のガイドブックにはメッセージの寄稿をしなかった市による回答も掲載されているが、「開催の主旨には賛同できるが、ガイドブックの内容（風俗や過激な広告）から、メッセージを寄稿しないと判断した」、「レインボーマーチの主旨には賛同するが、公式ガイドブックに掲載されている広告と過激な文章から、以前にも寄稿を見合わせているので、今回もお断りする。」（『レインボーマーチ　ファイナル　公式ガイドブック』8 頁）という理由が多くを占めている。

「風俗や過激な広告」、「広告と過激な文章」が具体的に何を指し示しているのかは触れられていないが、主にゲイ男性向けの広告の中でも性的な広告を指していると思われる。例えば 2003 年、2004 年、2006 年のガイドブックには、東京のハッテン場の広告がページ一面（あるいは 2 頁分）に大きく掲載されていた。その広告の中心には比較的大きな文字で「あ！！通路のカベから巨根が！！」と書かれており、性的な施設であることが一目でわかる。ゲイ男性向けのアナルセックス用ローションの広告も掲載されており、2010 年と 2011 年の広告では「アナル専用ゼリー」、2009 年は「バック専用ジェル」と比較的大きな文字で記載されている。そのほかにも一見して「性的」であると捉えられる広告には、SM のハーネスを身にまとった男性の上半身の写真を用いるゲイショップの広告（2003 年〔第 7 回〕）、アンダーヘアーが見え、ペニスの形がわかる下着を身に着ける男性の裸体の写真を用いるゲイショップの広告（2004 年〔第 8 回〕）、アンダーヘアーが見え、股間が強調される下着を身につける男性のイラストを用いるゲイ男性向けウェブサイトの広告（2008 年〔第 12 回〕）、「マスターベーション専用」のローションの広告（2008 年〔第 12 回〕）、「競パンセクシーキャバクラ」というイベントの広告（2009 年〔第 13 回〕）、手で下着を下げアンダーヘアーを見せつける裸体の男性の写真を用いる『バディ』の広告（20010 年〔第 14 回〕）などがあった。また女性向けの広告でも、女性同士がエロティックにキスをする写真を用いた「女の子×女の子のためのエロチックブック♡」の広告、（2004 年〔第 8 回〕）、「マンコ持ちがマンコ持ちのために運営するバイブ屋」である、女性向けセックスグッズ販売の広告（2006 年〔第 10 回〕）があった。

パレードはゲイ企業との関わりを強め、より広く言えばゲイコミュニティとの関わりを強めることでより多くのゲイ男性を取り込もうとしていたが、しかしその中の一部の〈性産業〉の広告がガイドブックに掲載されることで、行政からの支持を得にくくなるという事態も生じていた。ハッテ

ン場やゲイ男性向け性風俗の広告の中には、一見して「性的」であるとわからない広告もある。例えば、あるハッテン場の広告は、「普通」の男性の写真とともに、店名、店舗のウェブサイトのURL、簡単なメッセージによってのみ構成されており、〈わかる人にはわかる〉広告になっている。しかし、明らかに「性的」であると判断され得る広告を載せるというのは、札幌ミーティングのゲイ男性などが否定しようとしていた〈ゲイは性的な存在である〉というステレオタイプを強化してしまう可能性がある。それでもこのような明らかに「性的」な広告を積極的に掲載していたのは、ゲイ男性は、〈ゲイ＝性的な存在でしかない〉というステレオタイプには反対していたが、ゲイ男性にとって性的な側面が重要であること自体は否定していたわけではなく、そうした性産業もゲイコミュニティの重要な一側面であると捉えていたからであると考えられる。

ただ、2017年以降のパレードのガイドブックではゲイ男性向け企業・サービスの性的な広告は掲載されなくなり、2018年からは札幌市の後援を、2019年からは札幌市と北海道の後援をもらっている。メッセージ寄稿数が増加した要因のひとつは、2015年移行の「LGBTブーム」によるセクシュアルマイノリティへの社会的な関心の高まりであることは間違いないだろうが、性的なものを取り除き、「キレイなセクシュアルマイノリティ」をパフォーマンスする主催者の意図もそのひとつなのではないだろうか。セクシュアルマイノリティの社会運動と社会の変化を見ると、2000年代には大きな出来事が生じておらず、3-3節でも見たように、運動が停滞した時期であった。しかし実はこの停滞していたという状況が、「性的」な広告を掲載することを可能にしていたとも考えられる。なぜならば、2015年以降の「LGBTブーム」のようなセクシュアルマイノリティを取り巻く状況が激変し、社会からの関心も増した中では、それを絶好の機会と捉え社会からの承認を得ることを目指す。それは社会の規範にラディカルには対抗せずに運動を進めることと表裏一体である。それに対して社会が大きく変わるという見込みのない中では、性的な広告を載せるという〈危険〉を犯すことに対するハードルが低くなると考えられる。異性愛者の関心が高まる中ではそれに同調することによって活動が行われ、異性愛者の関心が限定的である時には、比較的ラディカルな姿勢が可能となるのである。

5-4　ドラァグのパフォーマンスと〈普通〉志向のゲイ

ゲイのステレオタイプとみなされる表象をパレードでどう扱うかという問題は、ガイドブックへの掲載広告よりもドラァグクイーンについて議論してきた。〈ゲイフロート〉によるパフォーマンスは、ドラァグクイーン（以下、ドラァグ）とゴーゴーボーイ（以下、ゴーゴー）によるパフォーマンスによって担われてきたと言っても過言ではない。ドラァグはDJフロートとバディフロートのみならず、実行委員フロートやレッドリボンフロート（女の子フロートとトランスフロート以外のフロート）にも搭乗しパフォーマンスをしてきた。1999年（第4回）に巨大フロートが登場する以前から両者はパレードに参加しており、1996年（第1回）には、巨大ハイヒールを乗せた軽トラックにドラァグクイーンが乗りパフォーマンスを行っていた。またフロート搭乗者に限らず一般の行進者にもドラァグや女装をした人が多くいた。ドラァグクイーンとは、過度な化粧と服装によって女性性を表現するパフォーマーであり、ゴーゴーボーイとは、ゲイ男性向けのイベント（主にクラブイベント）などでステージ上でパフォーマンスをする人物でも、ドラァグとは対極的なパフォーマーであり、鍛え上げられた肉体を露出し、身体的男性性を強調しながらエロティックなダンスを

する人物のことを意味している。対極的ではありながら、両者はともにゲイナイトなどのゲイカルチャーにおける主要なパフォーマーとして活動をしてきており、札幌のゲイナイトでも活躍をしてきた。ゲイ男性などの当事者に働きかける「ゲイナイト」的パレードへと移り変わっていった中で、ゲイナイトの主要パフォーマーであるドラァグとゴーゴーがパレードでもパフォーマンスをするのは、必然の流れでもあったと言える。このように、パレード行進にはドラァグとゴーゴーが積極的に動員され、パレードを彩る中心的パフォーマーとして活躍してきた。

しかし、パレード行進にドラァグが参加しパフォーマンスを行うことについては、第1回から実行委員内部で議論が行われていた。実行委員の1人は、第1回パレード時に実行委員内部で以下の議論が生じたことを語っている。

> 今回のパレードで言えば、ドラッグ(ママ)クイーンや女装、オネエ言葉など、従来からある同性愛者のイメージや偏見（女装・男装・女っぽい男・男っぽい女）を助長しかねない、と。そういった意見は常に持ち上がり、その都度何度も話し合い、その結果――どういった恰好をする、しないはあくまで個人の領域であって、周りからどういう風に思われるから敢えてどうこうする、といった類の問題ではないと――。　（『すすきのTOWN情報』1996/8:57）

広く〈女装〉のゲイがパレードを行進することによって、ゲイ＝女性っぽいというステレオタイプを強化してしまうことが懸念されていたことが語られている。セクシュアルマイノリティの運動はまさにステレオタイプを解消することを目指してきた訳であるが、パレード行進でのパフォーマンスがそれを強化してしまうという、逆の事態が生じることが懸念されていた。しかし、民主的な場としてのパレード行進で、ある特定の表象は許可し、別の表象は排除するということはあってはならない。パレードに参加する個人のパフォーマンスはあくまでも個人のレベルの問題であり、パレード主催者からの統制があってはいけない。

この語りでは、女装として参加する個人のことが中心的に語られているが、しかしパレードでは、実行委員が積極的にドラァグをフロートに搭乗させてきた。つまり、ドラァグや女装とは、単に民主的な場での個人のパフォーマンスであることを超えて、実行委員が積極的に利用するパフォーマンスでもあったのだ。そのひとつの理由は、ドラァグがジェンダーやセクシュアリティの規範に抵抗する政治的存在として捉えられてきたからである(28)。つまりドラァグは、ゲイカルチャーの象徴としてはゲイ男性に対する「楽しい」「遊び」のパフォーマンスとなり、一方で異性愛社会に対しては規範への抵抗となるという、二面性を持つ。第1章や第3章で見たように、女装、ドラァグ、オネエは「普通」を切り崩したり可視性の管理を行うための戦略のひとつであり、存在自体が「政治的」なものと捉えられてきた。例えば、公式ガイドブックの「レインボーマーチQ&A」という記事では、「『ドラァグ・クイーン』はどうしてあんな格好をするんですか？」という質問に対して、それが規範への抵抗であることが明確に解説される。

(28)　ゴーゴーボーイについては、「全く政治的ではない。彼らはただただカッコいい存在なのである」と言われる（宇田川2017）。

まず「ドラァグ」は「ドラッグ（薬）」ではなく、「引きずる」という意味の英単語からきていて、ゲイ（男性）が女装をし「引きずる程のスソの長いドレスを身にまとう」ことで「男」と「女」の境界線を引きずり回し、ワケのわからないものにしてしまうという意味合いが込められています。派手なメイクにハイヒールを履き、豪華な衣装で飾り立てるのも「女らしさ」を過剰に演出することにより、「らしさ」の「バカらしさ」を笑い飛ばしているわけです

（『第10回レインボーマーチ札幌　公式ガイドブック』13頁）

ドラァグはジェンダー規範を撹乱し、ジェンダー規範の存在が「バカらしい」ことをアピールする存在であると言われる。ゴーゴーボーイについての解説などは見当たらないが、エロティックなパフォーマンスを私的とされる空間ではなく公的とされる空間で行うことで、公私の分離や広い意味での性規範への抵抗となっていたと言える。ドラァグは、主にジェンダー規範に対する抵抗であって、同性愛者に対する「差別」への抵抗とは異なる志向を持っていることからも、ドラァグは〈同性愛者への差別なき社会〉における運動では活躍しやすい。

ドラァグが利用されるもうひとつの理由は、それが傍観者として異性愛者の視線をより引きつけることができるからである。ステレオタイプを助長する可能性を認めながらも、このステレオタイプが人目を引き付けうることの積極的な意味合いも実行委員に認識されていた。

実際テレビのリポーターなどインタヴュー（ママ）や取材は、ハデなドラッグ（ママ）クイーンや女装に集中していたし、それが報道されることで同性愛者への画一的なイメージが増幅される、イロモノ的にとらえられる。また一方で、我々としても彼（彼女）らの存在は、見た目も華やかで一般の関心を呼ぶかな、と。なかなか難しいですね（笑）。（『すすきのTOWN情報』1996/8:57）

ドラァグやゴーゴーは、異性愛者にとって、「ゲイ」としてのわかりやすいステレオタイプでもあり、パレードにおけるわかりやすい差異化でもあった。言い換えると、特異なものを見る異性愛者の視線を先取りした上で、その期待に応えるように行う差異化のパフォーマンスなのである。第3章でもみたように、「オネエ」を用いることはわかりやすいステレオタイプとして異性愛者に同性愛者の存在を知らせるシンボルとなっていたが、ここでも女性性としてのドラァグクイーン、そして性的な存在としてのゴーゴーボーイを用いることで、〈ゲイらしさ〉」を見せつけていたと言える。日本のメディアにおける〈セクシュアルマイノリティ〉の表象を見ても、そこに登場するのは、〈オネエ〉や〈オカマ〉という枠組みにおいてのみの〈ゲイ男性〉である。つまり、異性愛者の欲望に応えるためには〈普通のゲイ〉であることはできないのである。よって、ドラァグはジェンダーを撹乱するという意図がありながらも同時に、あるいはそれ以上に、異性愛者と同性愛者をわかりやすい差異によって峻別することによる可視化の戦略なのである。

こうした戦略がパレードで可能となるのは、パレードが〈非日常〉の空間であるからでもあった。第4節でも論じたように、パレード行進の空間は日常生活から切り離された上で視線が注がれる場であり、徹底的に差異化される空間であった。よってここでのパフォーマンスは、必ずしもゲイ男性の〈日常〉と結びつくわけではなく、〈非日常〉におけるその場限りのパフォーマンスとなる。ドラァグやゴーゴーはゲイナイトなどの特定領域でのみ行われるパフォーマンスであり、日常生活で

ゲイ男性が行っている〈自然〉な振る舞いではない。パレードが一時的な非日常の空間であることは、次のような語りを生み出す。

> 12 回目を迎えた今、ここでもう一度、このパレードが存在する意義を見つめてほしいのです。（…）レインボーマーチがただの「お祭り」で終わってしまわない様に。9 月が終わっても、レインボーマーチで感じた気持ちが次の明日に繋がる様に。毎日がレインボーであるように。
>
> （『第 12 回レインボーマーチ札幌』（公式ガイドブック）6 頁）

この語りでは、パレードが人々にとって一時的な意味しか持たない「祭」であること、しかし一時的ではなく長続きする意義を持って欲しいという願いが語られている。こうした一時的な〈非日常〉の空間では、性的なパフォーマンスとしてのゴーゴーやドラァグによるパフォーマンスをも、その場限りの特別な表現とみなすことができる。

ジェンダー規範の撹乱と可視化の戦略としてドラァグやゴーゴーが積極的に動員されてきたが、これらには、パレードに参加しないゲイ男性から批判が寄せられることもあった。例えば 1998 年（第 3 回）のパレードの後には、「『なんで女装するの？』『恥ずかしい』などの意見がまず飛び込んできて、がっくりと肩を落としたのを覚えています」(NL1999/9:52-53) と実行委員によって語られ、必ずしもすべてのゲイ男性がドラァグを受け入れていたわけではないことが触れられている。また類似した典型的と言える批判は『バディ』読者によっても投げかけられている。

> 今年も東京でパレードがあるらしいが、なんでやるのか全然わからん。「世間にゲイの存在をアピールするため」とか言ってるが、本当に効果あるのか？道路占拠してお祭り騒ぎやって、マスコミには女装や裸ばかり取り上げられて、結局誤解されるだけ。あんなのと一緒にされちゃ迷惑なんだよ。ただの自己満足なら、山奥にでも行って、こっそりやってくれ。
>
> (BADI2002/10:106)

こうした反応に対しては、「ゲイ自身があたかもストレートの男であるかのようにおネェや女装を気持ち悪いものと捉えているうちは、そのゲイ自身もいつまでたっても同性愛者差別や男性優位社会の呪縛から解放されることはない」(N1996/6:4) と、ゲイ男性自身も内在化してしまっている、〈普通〉であることへの希求が批判される。確かに女性性や〈性的〉な印象と結びつけられることへの批判は、〈普通〉の「男」でありたいという欲求と密接に結びついている。しかし、ドラァグに対する批判が内なるホモフォビアとしてのみ解釈されてしまうことによって、これが、ステレオタイプ的でなければいけないという規範が生じてしまうことへの批判でもある可能性は見逃されてしまう。ドラァグとゴーゴーのパフォーマンスによって確かに異性愛者の目を引くことはできるが、それは同時に、多様なゲイ男性の表象を犠牲とすることも意味しているのだ。

5-5　新しい〈普通〉批判 ——「シャイニーゲイ」

パレードの表象に関してもうひとつゲイ男性から批判されるようになったものがある。それが、「楽しむ」、「幸せ」なゲイ男性である。パレードがゲイナイトの特徴によって「楽しい」「ハッピー」

なゲイ男性を表象していくことによって、プライドを持っていることを前提とするようなゲイ男性ばかりが表象されるようになっていく。パレードには、そこに参加するゲイ男性にもしないゲイ男性にもエンパワーメントをするという目的があったが、しかし、「ハッピー」や「楽しさ」、プライドを持っているということが前提となり、パレードの意味合いが可視化へと舵を切っていったことによって、パレードの見せ方／魅せ方に対して別の批判が寄せられるようになっていった。

ここで再度取り上げたいのは、第2章の4-2節で論じた、ゲイ男性向けゲイマンガ『アグリっ娘』でのパレードの表象のされ方である。そこではパレードが、「イケメン」が集い、「ボクたちモテま〜す♡」(小日向2008a:17)というプラカードを掲げて行進するイベントとして皮肉を込め表象され、主人公のアズサは「ブスだって幸せになりたい」(同上:19)というプラカードを掲げ行進し、それに抵抗をしていた。この作品では、すでにプライドを持っていると言える「イケメン」のゲイ男性が、自身の外見と「モテ」をアピールする場としてパレードが表現されている。ここで描かれているゲイ男性は、いわば〈普通〉の出で立ちではあるが、美醜の〈差別〉を支える場としてパレードを利用する姿が皮肉を持って描かれているのである。一般向けゲイマンガの『レインボウライフ』でも、物語の終わりにパレードがわずかに描かれるが、セクシュアルマイノリティの行進であることだけが描かれるという意味で中立的な表象になっていることとは対照的である。

これに関連して2015年に登場した「シャイニー」という言葉に注目したい。2015年には「シャイニー」または「シャイニーゲイ」という言葉がゲイ男性の間で流行し、『バディ』2015年11月号には「モテないゲイのシャイニースタイル白書」という記事が掲載されている。この記事によると、「シャイニー」は以下のように解説される。

> 2015年、モテ系イケメンのキラキラしたゲイライフを表す言葉として広まった「シャイニーゲイ」。意味としては「リア充」と同じだが、主にSNSやインスタグラムを媒体とし、イケメン同士の集合写真、ジムでの自撮り画像、プチセレブな旅行写真、オシャレホームパティーなど、まるで芸能人のプライベートのようなマイライフを「俺通信」として数多の人に発信するのが特徴。(BADI2015/11:67)

要するに、「イケメン」で「オシャレ」で「キラキラ」したゲイ男性を指すのが「シャイニー」という言葉なのである。そしてこの言葉の重要性は、同じく『バディ』が解説するように、パレードをきっかけとして登場した言葉である点にある。

> 東京レインボープライドが開催された4月28日、レインボーフラッグを片手に白昼堂々ゲイをアピールできる若い意識高い系ゲイの集団を表す言葉として、一気にSNS上で広まった「シャイニーゲイ」。その後、ゲイイベントやホームパーティーの集団セルフィーをアップする行為も「シャイニー」と定義つけられ、イケメンゲイやリア充ゲイそのものを指す言葉に変化したらしい。(BADI2015/11:72)

東京でのパレードをきっかけに登場したということではあるが、パレードという枠組においては、札幌のパレードについても深い関連を持つ。「シャイニー」とは、「レインボーフラッグを片手に白

昼堂々ゲイをアピールできる若い意識高い系ゲイ」や「リア充をネット上でアピールするゲイ」（BADI2015/11:71）を皮肉を込めて指し示す言葉であって、そうしたゲイ男性を肯定的に指し示す言葉ではないことに注意したい。無論、パレードの主催者は「イケメン」のゲイや「意識高い系」を意図的にパフォーマンスしているわけではない。しかし、「楽しさ」や「プライド」を表現することによって、ゲイ男性が一枚岩的に表象され、それがひとつの規範性を帯び始めていることを、この言葉は批判していると捉えることができる。また「シャイニー」への批判がゲイ男性の SNS の利用方法の批判にもなっていることは注目に値する。なぜならば、パレードも SNS も、何かしらの形で自己アイデンティティをパフォーマンスして見せる／魅せるという特徴を強く持っているからであり、両者はともに「楽しい」「プライド」を持ったゲイ男性を見せる／魅せることになっていたのである。ゲイであることのポジティヴな側面ばかりが強調されることで、ゲイ男性の表象が「ハッピー」へと傾倒しているとみなされるようになるのである。



図 4-9　シャイニー批判
（BADI2015/11:68）

「シャイニー」が「イケメン」のゲイ男性を揶揄する言葉であるのは、ゲイ男性を取り巻く現代的恋愛事情とも密接に関わっている。第 2 章でゲイ男性の恋愛について論じたように、ゲイ男性同士が出会う機会が増加することによって、永続的な恋愛が困難であると捉えられるようになっただけではなく、モテる人とモテない人の格差も生じ始めた。この美醜の格差によって、モテない「ブス」が恋愛からのみならず、ゲイコミュニティでも周縁化されるようになるという、新たな〈差別〉が生じたのである。先ほどの『バディ』の同じ記事内に掲載されている 4 コママンガ（図 4-9）では、その〈差別〉が揶揄されている。「ブス」を自称すると思われる 2 人の男性が、「ゲイ差別反対運動するクセにさ」「ゲイって平気でブス差別するじゃない」、「わかるーイケメンだけで村とか作って」「アプリとかSNS でもブスのことは無視するし」（BADI2015/11:68）と言葉を交わしている。これは単なる「イケメン」に対する妬みや羨みではなく、パレードが異性愛社会への異議申し立てをするにも関わらず、ゲイ男性間で生じている〈差別〉に対しては一切無関心であるということへの批判でもあるのだ。

この 4 コママンガで語られているのはゲイ男性間の美醜の格差による〈差別〉だけであるが、この批判は、「悩み」がなく、「プライド」を持ち、「楽しい」ゲイライフを送ることが規範化され、ゲイ男性内部での差異が覆い隠されてしまっている状況を広く批判するものでもあると捉えることができるのではないだろうか。パレードで表象されるのは、プライドや「楽しさ」を享受できており、なおかつ「イケメン」であるという、常に・すでに特権的な立場を享受しているゲイ男性だけであるため、それが新たな規範的像となりつつ（受容されつつ）あるのである。

６．〈差別なき社会〉におけるパレードと表象

本章では、対外的活動と対内的活動という二つの特徴を合わせ持ちながらも、対外的な働きかけという側面を強く持つパレードを扱い、そこで見られるゲイ男性の表象を分析した。

第２節では「政治」と「祭」の議論を取り上げた。東京でのパレードが非民主的であり、対社会というラディカルな「政治」志向によって特徴付けられていたことを発端に「政治」と「祭」の議論が登場した。「政治」と「祭」は、社会変革活動と「遊び」を言い換えたものであり、パレードは「政治」か「祭」かという議論が生じるのは、パレードという運動形態においてその二つの棲み分けが難しいからであった。〈「遊び」から社会変革活動へ〉という道筋を描きにくく、ただの「バカ騒ぎ」となってしまうことが懸念されていた。その中でも、「政治と祭りの融合」として両者を維持することが目指されてきた。

第３節ではパレードの方向づけと、連帯におけるアイデンティティの問題について論じた。札幌のパレードは広くマイノリティと連帯することによって、できる限り多くのマイノリティを表象しようとしてきたが、それは同時にさまざまな人を動員することで、セクシュアルマイノリティ当事者が参加しやすいイベントとするための戦略でもあった。連帯の言説ではマイノリティが連帯するということが前提となっており、「ゲイ」など個別のアイデンティティを表象することは抑制されていた。しかし「ゲイ」を表象することや「ゲイ」という立ち位置からの表現は、民主的な場のパレードにおいてむしろ積極的に行うことが可能であった。また抽象的ではありながら、セクシュアルマイノリティ当事者のエンパワーメントとしての目的と、社会の意識や制度を変革する目的が掲げられることによって、「政治と祭りの融合」が維持されていた。

第４節では、パレード行進の全体的なパフォーマンスの特徴を分析した。先導車からのメッセージは1990年代の〈差別をやめよ〉、〈私たちを見よ〉という社会に対する抗議／要求型のメッセージから、〈私たちはここにいます〉という、柔和な語感の存在主張／可視化型のメッセージへと変わっていった。この背景には、「差別」がゲイ男性当事者にも異性愛者にも共有されにくいという状況があった。また、パレード行進者と傍観者を差異化し、〈私たち〉と〈あなたたち〉の境界線を構築しながら〈私たち〉の集団を拡大することによって、セクシュアルマイノリティの存在が可視化されていた。

第５節ではパレードの中のゲイ男性に注目をした。〈差別なき社会〉でゲイ男性を動員し、まとめ上げるために、ゲイ男性を主体としたフロートによって「遊び」としての「ゲイナイト」のような「ダンスするパレード」としての演出が行われてきた。ゲイ男性向け企業・サービスとの連携を強めたことによって、ゲイ男性が主体となっていき、ゲイ男性の意向がパレードのパフォーマンスに影響を与えていた。しかしゲイ男性の性産業との連携が、社会からの承認を得る妨げにもなっていた。また「楽しさ」やゲイナイト的パレードのパフォーマンスがステレオタイプ的なドラァグや「キラキラ」したゲイ男性を表象することになり、それがゲイ男性内部から批判されるようにもなっていった。

本章ではパレードを、社会変革の傾向がもっとも強い活動であるという想定から取り上げた。しかし分析でわかったのは、ゲイナイト的パレードに明らかなように、対社会としての側面を徐々に

弱めていくという事実であった。札幌のパレードは実行委員によって掲げられる目的によって、大まかな方向付けがされてきた。毎回設定される目的によって、セクシュアルマイノリティの可視化、肯定的情報の発信、企業・行政に対する制度変更の要求が目指され、パレード行進でも先導車からのメッセージによってパレード全体の意味づけがされることで、セクシュアルマイノリティ当事者と非当事者へ働きかける「政治と祭りの融合」が目指されてきた。しかし〈差別なき社会〉における活動であるため、具体的なメッセージや主義主張の発信ではなく、可視化へと目的を収斂させていくことになり、可視化に加えて「何か」を主張するという、この「何か」を行うのが困難になっていった。パレードをパレード行進だけではなく、その周辺で行われることも含めて捉えると、札幌市長にパレード参加の要請をしたり、道内市長にメッセージの寄稿を依頼したりする活動によって、社会変革／対社会の活動は保たれてきたと言えるが、しかしそれはパレードの行進という〈表舞台〉ではなく〈裏舞台〉へと追いやられていったとも言えるのではないだろうか。

この〈差別なき社会〉におけるパレードは、ゲイ男性による「ハッピー」なパフォーマンスによって彩られることになり、それがセクシュアルマイノリティ全体の表象ともなっていった。実際のパレード行進では、〈差別なき社会〉でどう運動をするのか、どう人々を動員するのかということが重要であり、差別の経験が共有されにくい中、多くのゲイ男性を動員するために「遊び」として「ハッピー」や「楽しさ」という側面が押し出されるようになっていった。ゲイという立ち位置やアクターは常に存在していただけではなく、ゲイ男性を取り込もうとゲイ企業・サービスとの連携を強めていく中で、より運動の中心的位置を占めていった。これが可能なのも、パレードが民主的な場であり、ゲイとしての立場にこだわることが許されていたからである。その中で「ハッピー」はセクシュアルマイノリティ全体の表象へと横滑りしていくことによって、ゲイ男性の中だけではなく、セクシュアルマイノリティの中にあるさまざまな差異を覆い隠すようになっていったと思われる。砂川秀樹は、「参加者の資格が問われることのない、まさに多様な人々が思い思いの格好により様々な表出を行うパレードは、むしろ一枚岩的な表象を撹乱する実践と言えるのではないか」（砂川2000:241）とパレードの撹乱性を指摘するが、確かに参加者個人個人を見る限りにおいて、この指摘は的を射ているかもしれない。しかしパレード全体が「ハッピー」によって脚色され、〈セクシュアルマイノリティのわたしたち〉と〈異性愛者のあなたたち〉が構築され、異質としての差異がゲイ男性によって傍観者に対してパフォーマンスされる空間では、むしろ一枚岩的な表象となっているのではないだろうか。

さらに、「ハッピー」によってパレードが一枚岩に表象されるようになることで、「悩む」ゲイ男性が周縁化されていってしまったのではないだろうか。先導車からのメッセージに顕著であったように、1990年代は〈被差別者であること〉と〈プライドがあり、幸せである〉というメッセージが共存しており、言い換えると、前提としての〈不幸〉と抵抗としての〈ハッピー〉という言説が特徴的であった。しかし2000年代のパレードからは多くのゲイ男性をパレードへと動員するために、そして差別の意図や意識を持たない社会に対して別の表象で働きかけていくために、前提としての〈ハッピー〉に収斂していく。この中で、「差別」とそれに「悩む」ゲイ男性が見えにくくなっていった。1990年代は少なからず差別の存在と〈被差別者〉としてのゲイ男性がラディカルな主張の中で提示されていたが、2000年代からはそうしたゲイ男性の存在は後退していく。「ハッピー」で「悩み」のないように見える人々によって構成されるパレードは、多くの当事者にとって確かにエンパ

ワーメントになることは否定できない。しかしそれを見る人の目にはあたかも行進者はすでに悩みなど一切持たないかのように映り、参加者の意図を超えてそれが唯一の理想的なあり方として受容されていく可能性も少なからずある。この中では、「悩む」ゲイ男性はエンパワーメントされると同時に、いっそう周縁化されていく可能性がある。

こうして「悩むゲイ」が周縁化され「ハッピーなゲイ」ばかりが表象されるようになっていったからこそ、「シャイニー」に対する批判が生じた。「ハッピー」によって一枚岩化される傾向の中、一番目立つパレード行進では、何かを伝えるというよりも、「遊び」によって何かを見せる／魅せるという傾向を強めていった。そこで見せ／魅せられていたゲイ男性とは、まずひとつに、上述の「ハッピー」、「楽しさ」、「プライド」を当たり前のように持ったゲイ男性であった。ここに「キラキラ」した「リブガマ」としてのアイデンティティが引き継がれていることを見出すこともできる。しかしそれが一枚岩的な表象になり、「遊び」の傾向を強めることによって、「モテ」をアピールする場というイメージに繋がり、シャイニー批判を生み出した。ここでシャイニー批判が重要なのは、第1章から本章までの活動すべてにおいて、何かしらの形でゲイ男性の性愛と「モテ」が関わり、〈問題〉となってきたことを示しているからである。パレードに対するこの批判は一見すると的外れな批判に見えるかもしれないが、〈私的〉と捉えられてしまう性愛の問題が常に「活動」と関わってきたという事実は、正面から取り上げ論じる必要があるだろう。この点は次章で取り上げる。

以上の点に加えてパレードのもっとも特徴的な点は、これまでの章ではゲイ男性当事者にのみ提示されてきた「ハッピー」の表象が、非当事者である異性愛者にも提示されるようになっていったという点である。本章の2-3節でも触れたが、セクシュアルマイノリティの運動を行うにあたって有効だと捉えられてきたのは、社会に対して「アン・ハッピー」であることを提示していくことであった。しかしパレードではそれとは真逆のことが行われるようになっていったのである。つまり、社会に対して戦略的に利用されてきた「アン・ハッピー」の表象が「ハッピー」に取って代わられたのである。異性愛者に活動を受容してもらうにあたっては、〈差別なき社会〉という状況が背景にあることを考慮しなければいけない。差別をしている、差別があるという意識が異性愛者の間で低い中では、差別の糾弾より、「ハッピー」という表象の方が受け入れることが容易なのである。

これはドラァグのパフォーマンスでも同様である。このステレオタイプ的なゲイは、パレードという〈非日常〉の空間で表象される。ゲイカルチャーや「ゲイ」であることが一種の見世物としてパフォーマンスされるパレードの空間では、〈日常〉のゲイ男性を提示することが困難となり、異性愛者に承認されるゲイは、〈非日常〉としての差異を持ったパフォーマーとしてのゲイ男性となる。そもそもこの差異の演出は、傍観者としての異性愛者の視線があるからこそ成り立つものであり、その前提として、異性愛者は普段の日常生活でセクシュアルマイノリティと出会うことがない、という状況が想定されている。この異性愛者の日常において、突如視覚的差異に特徴付けられた人々が登場するため、〈驚き〉となるのだ。つまり、〈私たちはあなたの隣にいます〉という認識を異性愛者が持たない限りにおいて、この差異化は意味を持つのである。劇場型とも言えるこのパフォーマンスでは「ゲイ」であることを強調し、見せびらかす（flaunt）ことで、〈奇異なもの〉を見る異性愛者の欲望を満たす実践になっているのだ。

こうしてパレードは、社会や当事者を変革する側面がありながらも、現状にできる限り適合し、ゲイ男性、そして異性愛者の欲望を満たしうる形へと変化してきたのである。

第５章　ゲイアイデンティティの「今」と「未来」

本章ではこれまでの議論を発展させつつ、統括する議論を行う。本研究では、1990 年代以降のゲイ男性による自己変革活動と社会変革活動、そしてそれぞれにおける表象の使い分けを分析し、短い歴史をたどりながらゲイ男性のアイデンティティの「今」を明らかにすることを目指してきた。これまでの活動がどのような「今」につながってきたのか、そしてそれが今後どのような「未来」につながっていくのかということを本章では論じる。ここまでは主に活動に携わるゲイ男性が分析の中心であったが、本章では活動に積極的に携わってこなかったゲイ男性、言い換えると、ゲイ男性による活動のターゲットとなってきた一般のゲイ男性の存在も視野に入れ、より広くゲイ男性について論じる。

１．表象の対立 ――「ハッピーなゲイ」と「悩むゲイ」

1−1　周縁化される「悩むゲイ」

各章で扱った事例はそれぞれ異なるが、ゲイ／男性同性愛者であることを何かしらの形で表象し、それをゲイ男性当事者や非当事者に伝えるための活動であった。またそれぞれの事例には多くの論点があったものの、すべての事例に共通していたのは、「ハッピーなゲイ」に代表されるポジティヴな表象を提示していくのか、それとも差別を受ける「悩むゲイ」、「不幸なゲイ」といったネガティヴな表象を提示していくのか、という選択・戦略であった。これをもとに戦略を、（1）ゲイ男性に提示される「ハッピーなゲイ」、（2）ゲイ男性に提示される「悩むゲイ」、（3）社会に提示される「ハッピーなゲイ」、（4）社会に提示される「悩むゲイ」、の 4 つに分類することができる。

（1）のゲイ男性当事者に対して提示される「ハッピーなゲイ」には、主に 3 つの意図があった。ひとつは、〈現実〉から距離を置くことによって自己肯定を行うこと、2 つ目は、「悩むゲイ」という主流の表象から距離を置き、表象の多様化を図ること、そして 3 つ目は、ポジティヴなイメージによって一般のゲイ男性をまとめ上げ、社会変革活動へと取り込むことであった。重要なのは、（2）のように「悩むゲイ」がゲイ男性に提示されることは限られており、一般のゲイ男性に対する基本的戦略は、（1）の「ハッピーなゲイ」を提示するということであった。一方で社会に対しては（3）と（4）のように、いずれの戦略もとられてきた。社会に「ハッピーなゲイ」が提示されるのは、差別意図の希薄な〈差別なき社会〉において異性愛者にセクシュアルマイノリティによる活動を受容してもらうためであり、「悩むゲイ」が提示されるのは、マイノリティとして同性愛者の存在を可視化させ、同性愛者への差別を言説化・社会問題化させ、差別の解消を目指すためであった。いわば、異なるベクトルの戦略が同時に行われてきたのである。

「悩むゲイ」がゲイ男性当事者の活動によって広く社会に提示されるのは、マイノリティの運動と

いう大きな文脈では、いわば当たり前のことである。特にセクシュアルマイノリティについての議論が急増している昨今では、より目立ち始めていると思われる。しかし本研究が明らかにしたことのひとつは、1990 年代の活動の中で、この「悩むゲイ」が言説化されると同時にそれへの反動／抵抗として、そしてゲイ男性を広く活動へと動員するために、当事者の中から「ハッピーなゲイ」の表象が登場したことであると言える。つまり、社会に対する「悩むゲイ」の提示と、ゲイ男性に対する「ハッピーなゲイ」が特に対立関係にあったのである。

「ハッピーなゲイ」と「悩むゲイ」の対極的な表象は、それぞれがもう一方に依存することによって成り立っている。「悩むゲイ」について語る際には、差別が存在せず幸せに暮らしているゲイ男性の存在が目標として常に想定される。同様に、「ハッピーなゲイ」を強調することは、ハッピーではない状態が前提とされなければ成り立たない。社会問題を「クレイム申し立て活動」（Specter & Kitsuse 1977=1990）のひとつとして捉えるのであれば、「悩むゲイ」という存在は 1990 年代（より正確には HIV/AIDS に関するゲイ男性による活動が始まった 1980 年代後半とも言えるだろう）に構築されたと言える。もちろんそれ以前にもゲイ男性は悩みを抱えてきたことは前川（2017）の研究が明らかにしているが、しかし、ゲイ男性が実際に悩みを抱えてきたということと、〈ゲイ男性は差別を受け、悩みを抱えた存在である〉という言説や表象が共有されるようになったことは、別に考えなければいけない。多くのゲイ男性が悩んできた、というある意味では〈当たり前〉と考えられる事実が、明確な言葉をもってして社会に差し出されるようになったのが、1990 年代に生じた重要な出来事であった。

「悩むゲイ」の言説化は、広くマイノリティの活動において避けて通ることのできないプロセスである。1990 年代の札幌ミーティングの活動も、同性愛者への差別があるということを社会に向けて主張し、差別問題の言説化・社会問題化に尽力していた。同性愛を禁止したり犯罪化したりする法律が存在しないという点で差別の見えにくい日本社会で、そして差別があからさまな抑圧というより「からかい」や「寛容」の形態をとる状況で、異性愛を前提とする社会の規範が同性愛を異常視する姿勢を差別として社会問題化しようとしていた。しかし差別が見えにくいという状況で差別について言説化することは、差別が〈極端〉なイメージで認識されたり、そうした活動を〈過剰反応〉であるとして批判する反応も生み出す。このことは、第 3 章で扱ったゲイリブに対する批判に顕著にあらわれている。つまり、同性愛者は常に差別を受け、苦悩し、そこから一瞬たりとも逃れられない存在として捉えられるようになる。すると、その〈極端〉なイメージでは捉えられないゲイ男性の存在を捉えようとする反応を、活動に携わるゲイ男性にも、一般のゲイ男性にも引き起こし、「ハッピーなゲイ」が提示されるようになる。あるいは、その〈極端〉なイメージとの比較においてゲイ男性が自身の状況を捉えることによって、自分は比較的「ハッピー」であると多くのゲイ男性が感じ始めるとも言えるかもしれない。同時にこの背景には、「男」である自身をマイノリティと捉えたくないゲイ男性の欲望も大いに働いているだろう。

反動／抵抗として登場した「ハッピーなゲイ」という表象が、主にゲイ男性に向けられていたという事実は、現在のゲイ男性のアイデンティティを捉えるにあたって重要である。なぜならば、それがゲイコミュニティにおける規範としての様相を帯びる可能性があるからだ。それが社会全体に対してよりもゲイ男性に対して一層強調され提示されることによって、ゲイコミュニティに別の同化圧力のようなものを生み出す可能性がある。「ハッピー」の言説が主流化することは、〈ハッピー

であるべきだ〉、〈プライドを持たなければいけない〉、〈プライドを持っているのは普通なのだ〉という一種の規範が生み出されることと表裏一体である。もちろん個人個人がゲイであるという自己を肯定的に受け入れることができる状態は、好ましいかもしれない。しかしそれによって、ゲイであることを実は受け入れることができていなかったり異性愛規範によって抑圧を経験したりする「悩んでいる自分」をさらけ出しにくくなってしまう状況を生み出してしまう可能性もあるのだ。

1990 年代末から 2000 年代にかけての『バディ』には、「悩み」に関して興味深い言説が見られるようになる。それは、〈最近のゲイ男性は悩まない〉という言説である。例えば 1990 年代末には若いゲイ男性を意味する「コギャルゲイ」という言葉が使われていたが、彼らは「生き方についてはあまり深く考えない。(…) 結婚・家族などについての、従来型のゲイの悩みもあまり持っていない」(BADI1997/8:181)、「あっけらかんとゲイをやってる」(BADI1999/7:54) と言われたりする。2000 年代の「若ゲイ」は、「若ゲイは本当に悩んでいないのか？ (…) 私もよく耳にするのよ」、「最近の若い子は、ゲイだからって悩んだりしなさそうよねェ」(BADI2005/12:418) と言われたりするのである。確かに 1990 年代からはゲイ男性同士が交流する機会も増え、同性愛についての肯定的な言説も増えるなどの変化によって、自己を肯定的に受け入れ、「ゲイライフ」を歩もうとする人々が増えたというのは事実であると思われる。しかし同時に、こうした時代認識については懐疑的にもならざるを得ない。なぜならば、そもそもポジティヴな表象としての「ハッピー」は、ゲイ男性の置かれた状況を反映するものというよりは、ゲイ男性を「ハッピー」にするために、そしてゲイ男性を活動に動員するために、戦略的に流布されてきたという側面が非常に強いからである。つまり、〈ゲイ男性は悩んでいない＝ゲイ男性はハッピーである〉というのは、ゲイ男性の理想的姿としてゲイコミュニティを覆うように利用されてきた、戦略的表象であるからだ。言い換えると、〈ゲイ男性は悩んでいない〉という言説は、悩んでいない状況を作り出すためのパフォーマティヴな〈幻想〉であったのだ。

ゲイであることを受け入れることができなかったり、ゲイであることを隠して〈偽装結婚〉をせざるを得ない人は現在でも多くいると思われる。しかしながらゲイ男性による活動が「ハッピー」の言説を大量に生産するようになることで、「ハッピー」であるという状態が、ゲイ男性の間で共有すべき状態として捉えられ、「悩むゲイ」が周縁化されていく。つまり、〈最近のゲイ男性は悩んでいない〉という言説の流布は、確かに「悩み」を抱えるゲイ男性が減ってきたという変化を指し示しながらも、同時に、ただ「ハッピー」の言説が主流化したことによって「悩むゲイ」が覆い隠されてしまったり、「悩み」を語りにくくなってしまった状況も指し示しているのではないだろうか。

ゲイコミュニティにおける「悩むゲイ」の周縁化という状態は、ゲイコミュニティにおける新たな〈悩み〉の形のひとつと言える。この〈悩み〉は、ゲイ男性向けゲイマンガにも描かれていなかった、ゲイコミュニティでのもうひとつの〈悩み〉である。この点を論じるにあたって、ゲイコミュニティ（森山の言葉では、ゲイ男性の「つながり」）における「ついていけなさ」について論じた森山至貴 (2012) に触れる必要がある。森山はゲイ男性の「つながり」の様態を分析する中で、同性愛概念が登場した大正期は、男性同性愛者は「悩み」という「マジックワード」によってまとめ上げられていたと論じる（森山 2012:39-40)。この「悩み」によるまとめ上げがその後いかなる変容をたどってきたのかは必ずしも明確に論じられないが、前川 (2017) の分析も参考にすると、本研究が分析の開始時期とした 1990 年代までは継続していたと想定される。しかし、「悩み」の語り

が基本的にゲイ雑誌などの雑誌メディアにおける言葉の共有であることに留意し、本章の関心からこの指摘を捉えなおすと、「悩み」についての語りを引き出すための場と機能がゲイ雑誌という巨大なコミュニティに存在してきたと言うことができるだろう。つまり、ゲイ雑誌というメディアの読者投稿欄の存在によって、「悩み」を言語的に共有することができていたのである。しかし、「悩み」によるまとめ上げが 1990 年代以前まではあったとしても、1990 年代末以降はインターネットが登場したことで雑誌メディアのような物理的・心理的に全貌を捉えられるコミュニティは瓦解しはじめ、さらにはゲイ男性当事者による活動が、「悩み」ではなく「ハッピー」を押し出すことによって、「悩み」というキーワードは「ハッピー」に取って代わられていった。本研究が明らかにしたのは、つながりが「ハッピー」という新たなマジックワードによって形成されるようになったこと、少なくとも種々の活動がそのように試みていたことである。そしてこれによって「悩むゲイ」は、ゲイコミュニティ内でマイノリティ化していったのである。

森山が取り組む作業は、ゲイ男性が感じる「ついていけなさ」を差別論に還元せず、ゲイコミュニティ特有の構造から明かそうとするものである。この取り組み内で森山は「ゲイコミュニティ」についての言説を分析するが、それが「強烈な理想主義的傾向」（森山 2012:102）と共に利用されていることを批判する。「理想」としての「ゲイコミュニティ」とは、「『ついていけなさ』がない状態の別名」（同上:101）である。つまり、「ゲイコミュニティ」には「悩み」や「ついていけなさ」がないかのように語られるのである。しかし森山はこのゲイコミュニティについての語りの主体が「アクティヴィズムやアカデミズムの分野」に偏っており、「市井のゲイ男性」によるものではないことに留意しながらも（同上:91）、その事実を重視しなかった。これは重要な見落としと言えるのではないだろうか。実はこの理想主義的な言説というのは、本研究で見たゲイ男性当事者の活動による「ハッピー」の言説と並行関係にあったと言えるからだ。ゲイ男性当事者の活動における理想主義的な言説が実はゲイ男性の〈悩み〉の原因となりうる可能性について、森山は明確に論じなかった。本研究の主張のひとつは、この運動家・活動家による理想主義的な「ハッピー」言説が、ゲイ男性の〈悩み〉を作り出してきたのではないかということである。森山が具体的な言葉で析出しなかった「ついていけなさ」を生み出したものとは、1990 年代以降の「理想主義的」なコミュニティについての語りが生み出した、「ハッピー」であることによってゲイ男性をまとめ上げようとする姿勢なのではないだろうか。

加えて、初期の『バディ』や札幌ミーティングの言説にも顕著であったように、運動家・活動家が 1990 年代に用い始めた「ゲイ」という言葉には、強い政治性が付与されていた。つまり、「ゲイ」であることはただ単に男として男を性愛の対象とするのではなく、積極的かつラディカルに規範に抵抗したり、能動的・主体的に何かしらの活動に取り組むという行動規範も意味するのである。現在「ゲイ」という言葉が用いられる際には、必ずしも一般の多くのゲイ男性がそうした意味合いを受け取るわけではないが、しかし「ゲイ」という言葉が彼らの間で用いられるときにその政治的ニュアンスが喚起される可能性に注目する必要はあるだろう。現在では「ゲイ」という言葉に付与されていた政治性は「LGBT」という言葉に取って代わられた印象もあるが、「ゲイ」という言葉が〈政治的であれ〉という命令のニュアンスを伴うことがあることは、政治的でないとみなされるゲイ男性、政治的になりたくてもなれないゲイ男性を抑圧することにつながりかねない。以上の点は、悩んでいることに対する圧力が異性愛社会からやってくるのではなく、ゲイ男性同士の関係性の中か

らやってくるようになってきたのが 1990 年代以降（より本格的には 2000 年代以降）であることを示している。

「ハッピーなゲイ」の戦略的表象は、一般の多くのゲイ男性を運動に取り込むためのものでもあったが、この背景には、差別が見えにくい中で差別の経験を共通項にしてつながりを形成することの困難があったことも重要である。しかし、多くのゲイ男性を「ハッピー」によって社会運動へ誘い込むことにエネルギーを注ぎすぎてしまったために、弊害も生じてしまったのではないだろうか。つまり、「ハッピー」というキーワードによってつながりを形成しようとすることによって、ヘテロノーマティヴィティに異議を申し立てるという目的は後退し、「男」であることを疑わないゲイ男性を多く生み出してしまったのではないだろうか。1990 年代以降の活動は「ゲイ」という新しいアイデンティティを形成しようとしていたが、それと同時に、ゲイリブに批判的であった「ホモ」にどう対処するかという困難に代表されるように、いかに一般のゲイ男性の欲望を満たすか、あるいはいかにクローゼットのゲイ男性の欲望を満たしつつ活動を行うかという側面から逃れることができなかった。差別によってつながりを形成しにくいのは、差別が見えにくいからのみならず、〈あなたは差別されているのだ〉という宣言をもってマイノリティ化されることを嫌うゲイ男性がいたからでもあると言える。ゲイでありながら「男」として社会に存在するゲイ男性の中には、社会におけるマイノリティという位置付けを嫌う人もいる。そうした彼らは差別ではつながりを形成し得ないが、「ハッピー」によってはつながりを形成することができる。こうした「男」としての欲望に適合する形でゲイ男性をまとめ上げ社会変革活動に取り込もうとしたのが、1990 年代以降のゲイ男性当事者による活動であったと言える。「ハッピー」という言説がいとも簡単に成り立ってきたように見えるが、それは、ゲイ男性が「男」としては社会の中でのマジョリティであるということ、黙っていれば異性愛者として世の中で通用する（実際に歴史的に多くのゲイ男性がそうしてきたし、現在でも場面場面でそうするゲイ男性は多い）という事実によって支えられていた。

本研究で扱った多くの言説は広く〈活動家〉によるものであったこと、そして「ハッピー」であれ「悩み」であれ、その活動家が広範な受け手に対して語ることができるという特権的な状況がどのような条件によって支えられているのかは、常に考えなければいけない。第 3 章と第 4 章ではゲイの可視化、可視性の管理がひとつのキーワードになっていたが、可視性を管理できる状態にあることがまず特権的なことかもしれないことを自覚する必要がある。例えば当事者としてパレードを歩くということが（もちろん仮装することもできるが）個人にとってどれほどのリスクになるのかは人それぞれ違う。そして、語ることができる、活動することができるという特権が、男性性の担保によって支えられていた可能性は念頭におく必要があるだろう。

本章で扱ったそれぞれの事例のゲイ男性は、社会からの規範・抑圧には否定的であった。『バディ』では「ハッピー」が唱えられていたが、その背後には「差別」という「現実」があることを知っていた。1990 年代のゲイ男性向けゲイマンガも異性愛社会の規範を苦悩として描いていた。札幌ミーティングの活動もパレードも、同性愛者への差別を社会問題化しようとしていた。しかし、自分が「男」として、あるいはそれ以外の側面において、どれほど特権的な立場にありうるのかという自己内省は足りていなかったのではないだろうか。男性運動について論じたマイケル・メスナーは、社会運動では成員のエンパワーメントに男性性が利用されること、またゲイリブは性の解放に焦点を置くことによってジェンダーの問題を等閑視し、男性性の権力構造をそのまま維持する傾向があ

ることを指摘している（Messner 2000）。また、スポーツチームでゲイであることをカミングアウトしているゲイ男性について論じたエリック・アンダーソンは、そうしたゲイ男性はチームの中や全国的にもトップレベルの能力の持ち主であり、「男性性の保険（masculinity insurance）」による担保があるからこそカミングアウトが可能になっていることを指摘する（Anderson 2002:865）。その他にも、男というマジョリティ性は経済的な余裕、学歴、性的主体性と結びつくことによって、語る／活動をするという特権と結びつきやすい。今回事例として扱った中で発言主体であったゲイ男性が皆自身の特権的な立場に無自覚であったと断定することは到底できないが、しかし、「ハッピー」の言説によってゲイ男性をまとめ上げようという姿勢が、少なからず男性性の担保によってある程度「悩み」を解決してしまっている立場からの行動となっていた可能性を考慮しなければいけない。

一連の「ハッピー」の言説によって周縁化されてしまった「悩む」ゲイ男性をサバルタンと呼ぶのは極端かもしれないが、ここでもう一度、序論で触れた砂川秀樹の指摘に立ち戻る必要があるだろう。クィアの議論に対して砂川は、「日本のゲイ／レズビアン・スタディーズは、過去に発せられたゲイ／レズビアンの声も同時代のゲイ／レズビアンの声もまだ十分に聞き取っておらず、(…) まだ、具体的な形でほとんど分析的視線を向けてすらいない」（砂川 1999:149）と指摘していた。本研究では活動に携わるゲイ男性の声を掬い取り活動の歴史を記述することを目的としていたため、その他の一般のゲイ男性の声を聞き取ることができていない。では、そのゲイ男性の活動の中で一般のゲイ男性の声がどれほど掬い取られてきたのかを考えてみると、必ずしも十分に掬い取られないまま、「ハッピー」が強調されるようになっていったと言えるのではないだろうか。無論、では何をもって多くのゲイ男性の声を十分に聞き取ったと言えるのか、という問題は残るし、そもそもこれ以上声を聞かなくてもいいというような状態にはなり得ない。今後の活動に携わる者にとって重要なのは、常に自分たちの活動を内省的に眺め、さまざまな声を聞き続けること、そして自分が「男」であることが自分の活動・言動を形作っている可能性を常に忘れないことだ。

1-2 「ハッピー」と「悩み」の二項対立を超えて

「ハッピーなゲイ」と「悩むゲイ」という二つの表象をゲイ男性に限らずより広くセクシュアルマイノリティ、さらにはマイノリティという視点から捉えると、塙幸枝（2018）が障害者表象を「笑い」の視点から捉えた議論と共通点があることがわかる。塙は、障害者を「笑い」と結びつけることがタブー視され、「（自身の障害を乗り越えようと）頑張る障害者」という唯一の像によってしか障害者が表象されない社会状況において、障害者と「笑い」を積極的に結びつけることで既存のイメージに抵抗しようとする実践について分析している。具体的に分析対象とされているのは、2012年からNHKで放送が開始された「障害者情報バラエティー」の『バリバラ』であるが、そこでは笑いのパフォーマーとしての障害者が障害と笑いを積極的に結びつけ、「感動ポルノ」（Young 2014）として健常者によって消費されてきた、生きる上での困難としての障害を乗り越えようとする「頑張る障害者」に抵抗する実践が見られる。塙が捉える「笑い」は射程が広く、本研究が言うところの「ハッピー」とは完全に一致するわけではない。しかし少々乱暴ではあるかもしれないが、「頑張る障害者」から「笑う障害者／笑わせる障害者」への表象の転換（あるいは「笑う障害者／笑わせる障害者」による「頑張る障害者」への抵抗）は、「悩むゲイ」から「ハッピーなゲイ」への移行（あ

るいは「ハッピーなゲイ」による「悩むゲイ」への抵抗）と類似するように思われる。

両者の間の大きな違いを挙げるのならば、「頑張る障害者」は基本的に健常者が構築したイメージであり、「感動ポルノ」との言葉で表現されるように、〈不幸〉な状態から〈幸福〉な状態への物語として、一方的に「モノ」のように消費されてきた傾向が強い点である。この源流にあったのは障害者当事者による活動であり、それによって障害者への差別は社会問題化されてきたと言えるが、健常者が消費する物語として「頑張る障害者」がすでに定着しているという状況は、セクシュアルマイノリティの運動とは異なっている。対してゲイ男性の運動に関しては、1990 年代に「悩むゲイ」と「ハッピーなゲイ」がともにゲイ男性当事者から発信され、「悩むゲイ」に対する「ハッピーなゲイ」という反動／抵抗がゲイ男性間で生じていたことが指摘できる。そしてこの「悩むゲイ」という物語は、現在でもゲイ男性当事者によって、セクシュアルマイノリティに対する社会の理解を促進する戦略のひとつとして利用されているのである。

「悩み」と「ハッピー」が常に反動／抵抗関係にあるということ自体は塙の例からもわかるように、マイノリティの活動の多くに共通していることと言えよう。そしてこの反動／抵抗は、表象の多様性を支えるものと捉えることができる。表象が多様であるということは、人々がその表象の中から自分にあったものを見つけることによって、自己アイデンティティを形成する手助けをする。しかし、「悩み」と「ハッピー」の関係に内在する問題があるとすれば、「悩み」を解決することが理想的な状態として規範化されることである。この二項対立によって暗に想定されてしまうのは、〈悩みや差別のある状態からそれらのない幸福な状態へ〉という移行である。つまり、悩んでいる状態から悩んでいない状態への移行というひとつの物語が規範化されてしまうことが、人々に新たなプレッシャーを与え得るのである。ここでは、「ゲイであることは悪いことではない、プライドを持てるようになるよ」という声ではなく、「悩んでいてもいいのだ、ゲイであることを肯定的に受け入れることができなくてもいいのだ」、という声が実は大きな支えになる可能性を考えなければいけないのではないだろうか。

〈悩みや差別のある状態からそれらのない幸福な状態へ〉という暗黙の想定は、「悩み」の解決を規範化してしまうだけではなく、多様な「悩み」の形を排除したり、多様な抑圧の形態を無視したりすることにもなってしまう。一度ここで、昨今のセクシュアルマイノリティのパレードで頻繁に耳にするようになってきた掛け声である「ハッピー・プライド」という言葉について考えてみたい。「ハッピー・プライド」とは字義通り、誇り／自己肯定感を持つことを祝福する言葉である。プライドを奪われてきたセクシュアルマイノリティがそれを取り返し、自身のものとすることを祝福することは、運動の過程で必要なプロセスであることは確かである。しかしながらプライドを持ち「ハッピー」であることは、非常に個人化された感情でもあるのではないだろうか。つまり、〈私はプライドを持つことができたし幸せだ、だから問題はもうない〉というような個人化された閉鎖的な感情で終わってしまわないだろうか。そもそも、マイノリティの運動ではその内部の差異を無視することができなくなっている現代の状況において、「ハッピー」であるというのは、そう自認する個人は唱えることはできるだろうが、しかしマイノリティ全体に対する掛け声として使用することはできないのではないだろうか。「ハッピー」であることをマイノリティ全体のスローガンとして使用した瞬間、その活動を構成する人々の間にあるさまざまな差異を覆い隠してしまわないだろうか。経済的状況、障害、人種といった差異を「ハッピー」の中で十分に扱うことはできるだろうか。個人

が「ハッピー」であることは確かに重要だが、マイノリティ全体を「ハッピー」によって形容することには常に注意が必要である。そして当事者に「ハッピー」の表象を提示しようとも、非当事者に「悩み」の表象を提示しようとも、その背後には〈悩みのある状態から悩みのない状態へ〉、〈不幸からハッピーへ〉という移行が必然的に想定される。しかし想定されるこの移行自体が問題を孕んでいることに留意する必要がある。

セクシュアルマイノリティのために行われる活動が同時に広くマイノリティのための活動となりうる現在の社会において、その他のマイノリティを抑圧してしまうような結果をもたらす活動はあってはならない。そもそも、さまざまな差異を意識するのであれば、「ハッピー」になるという移行が、誰にとっての「ハッピー」なのかを問う姿勢を持たなければならない。一見、当事者にとって好ましいと思われる表象が、本当に良いと言えないこともある。すでにセクシュアルマイノリティの政治に対しては、多くの批判も寄せられてきた。例えば、リサ・デュガン（Duggan 2003）によるニュー・ホモノーマティヴィティ批判は、現在のセクシュアルマイノリティの政治や議論に大きな影響を与えた。ニューホモノーマティヴィティとは、ネオリベラリズム体制において登場したセクシュアルマイノリティの政治の新たな方向性であり、それは「支配的な異性愛規範の前提や秩序には異議をとなえず、それらを支持し、維持する。それと同時に、ゲイ有権者層の解散の可能性、そして家庭と消費とにつなぎとめられた、私的で脱政治化されたゲイ・カルチャーの可能性を、約束するのである」（Duggan 2013:50, 清水 2013:327）。この政治体制では、抑圧的な規範に迎合的な活動が行われ、それ以前の活動と比べるとそのラディカルさは〈後退〉したとも言え、それが求めるのは、「家庭に代表される私的領域における自由であり、それはとりわけ消費や経済活動の自由と結びつけられている」（清水 2013:327）。

ニューホモノーマティヴィティが結びつく消費の側面としては、セクシュアルマイノリティが「良い消費者」として、あるいは企業における「良い人材」として社会に取り込まれていく傾向がある。しかし本来、セクシュアルマイノリティであることはそのこと自体で人権として認められなければならず、消費をするか否か、あるいは企業に貢献できるか否かという〈条件付き〉の承認であってはいけないはずだ。こうした条件をつけることは、セクシュアルマイノリティ内にある経済的な格差を無視し、インターセクショナルな視点と共に活動をすることからの大きな後退になる。

また先進国では世界的に同性婚合法化の潮流ができつつあるが、同性婚に対しても批判的検討が多くされてきた。例えば、婚姻制度の基底となる戸籍制度がそもそも「家」意識を温存するものであること（堀江 2010）、結婚は、カップル単位の親密な生き方を選択しない／できない人であれば、同性愛者・異性愛者を問わず排除してしまう制度であるため、同性婚の要求は「『異性愛者にある不平等な制度』を同性愛者にも与えるべきだという主張」であること（志田 2009:161）、「愛」の称揚による「良き市民」として社会に包摂されることで、婚姻制度が孕む種々の問題が等閑視されること（青山 2016）などの批判がある。

同性婚を推進する際に、〈同性婚ができるようになることで、幸せになる人は増えるが、不幸になる人は誰一人としていない〉という言い方がされることがしばしばある。確かに、パートナーシップを結ぶことができないことでいま目の前で生じている問題（病院での手術の同意の問題、遺産相続の問題、子供の親権の問題など）を解決することは重要である。しかし、不幸な人を生み出しはしないだろうが、制度から常に取りこぼされる人がいることは念頭に置くべきではないだろうか。

法的保護が二者のパートナー関係にしか与えられないことによって、例えば生涯シングルで生きていく人や多様な形の「家族」を求める人たちへの保証や保護が周縁へ追いやられることは、常に同性婚を求める中で念頭に置く必要がある。

もっとも問題なのは、「悩み」のある状態から「ハッピー」な状態へ、あるいは抑圧・差別のある状態からそれらのない状態へ、という一直線の進歩主義的歴史観がさまざまな活動の基盤となってしまっていることではないだろうか。上で見たように、セクシュアルマイノリティをめぐる政治には、マイノリティの中の誰かが排除されてしまうことに対して常に批判が投げかけられていた。次のように言うと悲観的に聞こえてしまうかもしれないが、誰もが抑圧・差別を受けない社会はそう簡単に訪れるものではない。変化する社会の中で活動を行う限り、常に新たな要求と周縁化される人は生まれてしまう。個人が「ハッピー」と感じることはあっても、すべての人が「ハッピー」と感じる社会が訪れることは困難であり、いわば全員が「ハッピー」であるというゴールは幻想であるはずなのだ。重要なのは、セクシュアルマイノリティにとって一見よく見える進歩も、それは進歩ではなくひとつの変化として捉えなければならないことである。同性婚の合法化も、それ自体は「ハッピー」というゴールではなく、ひとつの変化であり、過程であり、次の変化を生み出すきっかけでしかない。そしてその変化は、現段階でとりあえず最適と考えられる変化でしかないのであって、常に批判的に検討されなければいけないのだ。「悩み」から「ハッピー」へ、という認識から脱却し、新たな抑圧の形が生じてしまう可能性について、常に内省的になることが、今後のセクシュアルマイノリティの活動で必要なことではないだろうか。

2．自己変革活動から社会変革活動へ？

2−1　自己肯定の獲得と性愛の充足

本研究で扱った「自己変革を目的とし、主にゲイ男性当事者を対象とした活動」と「社会変革を目的とし、主に非当事者を対象とした活動」の間には、単に表象の使い分けがあったというわけではなかった。1990 年代以降の活動はこの両者が常に並行して行われてきたが、それと同時に、自己変革から社会変革へという移行過程があり、（社会変革）活動に携わるゲイ男性が一般のゲイ男性を、「遊び」を経由して「真面目」な活動＝社会変革活動へと導こうとしていた。特にこの点は、第 3 章で扱った札幌ミーティングの分析に顕著にあらわれていた。札幌ミーティングのゲイ男性は、「遊び」による自己変革／自己肯定感の形成の意義を認めながらも、札幌ミーティングがただの「遊び」の場となってしまうことを避けようとしていた。「遊び」とは社会変革活動を行うに至るまでの過程であって、そこがゴールではなかった。パレードでもこの点が問題となっていた。同様のことは、レズビアン・バイセクシュアル女性による語りにも表れており、「内面」への取り組み、そして友達作り・恋人作りなどの出会いといった「一番身近なこと」を解決してから、社会に対する活動ができるようになると語られていた。そしてゲイ男性が札幌ミーティングで「遊び」や出会いだけを求めることを否定し、社会変革活動への取り組みに重点を置こうとしていたのは、ゲイ男性にはすでにゲイバーやハッテン場といった既存のコミュニティが存在しており、「一番身近なこと」が解決されていたとは言わないものの、比較的充足されていたからであった。また『バディ』でも同様

のことが唱えられていたことを思い出したい。『バディ』は基本的に自己変革活動であったが、その第2期の「ハッピー」の言説による〈現実逃避〉には、自己肯定の獲得（自己変革）を「シンドイ現実」に立ち向かう（社会変革）ためのエネルギーとするという目論見があった。ゲイ男性向けゲイマンガでも恋愛の物語が中心的に描かれていたのは、「一番身近なこと」としての恋愛を充足させようと努めていたからとも言える。つまりそれぞれの活動には、自己肯定の形成と恋愛・性的な出会いの充足という、広い意味での〈自己変革〉を経由して、社会変革へ進むという道筋があったのである。

社会変革の前提とされる自己変革を、同性愛者であることを肯定的に捉えることができるようになることと、恋愛や性的出会いが充足するということの二つの側面に分けて考えてみたい。

はじめに、同性愛者であることを肯定的に捉えることができるようになるという段階を考えると、『バディ』では「悩み」を抱えているゲイ男性を、「ハッピー」へと移行させるための模索がされ、ゲイマンガの中でも 2000 年代以降のゲイ男性向けゲイマンガでは、ゲイであることを肯定的に受け入れている人物が前提に物語が描かれるようになっていった。札幌ミーティングでは、性的な存在としてのステレオタイプを否定しながら、「全人格的な関係性」を築くことのできる、クローゼットではないアウトな場という新しいコミュニティを形成することで自己肯定感を形成していた。パレードでは可視化によってゲイ男性をエンパワーメントしたり、ゲイナイト的パフォーマンスによって「楽しさ」を表象してきた。しかし前節で論じたように、ゲイコミュニティを「ハッピー」の表象が覆うようになったことで個人の「悩み」が〈解決〉されてしまったり、あるいは「悩むゲイ」が覆い隠され不可視化されてしまっているのであれば、多くのゲイ男性は社会変革活動の必要性を感じにくいのではないだろうか。すでに「ハッピー」であるならば、わざわざ社会を変えていこうという意思を持ちにくく、社会変革活動への移行は限定的にならざるを得ないと思われる。

一方、恋愛や性的出会いの充足（以下、性愛の充足）に関しては、『バディ』では「モテ」を失っていく三十代のゲイ男性を男性性によってエンパワーメントしており、ゲイ男性向けゲイマンガでは、恋愛の真正性を保ち〈純粋〉な恋愛を行うために、さまざまな舞台設定がされていた。札幌ミーティングの活動やパレードでは、その充足を促していたわけではないが、性愛は社会変革活動に入り込んでしまう〈問題〉となっていた。札幌ミーティングではそのメンバーが、活動内に入り込んでしまう出会いの欲求を排除しようとし、パレードではパレードに参加しないゲイ男性によって「モテ」るシャイニーという新たな像が批判されるようになっていった。

ゲイ男性の活動のもっとも特徴的なことは、この性愛の側面が常に何かしらの〈問題〉として自己変革活動のみならず社会変革活動にも関わってきたことではないだろうか。性愛がゲイ男性の活動と切り離せないのは、ゲイや男性同性愛者であるというアイデンティティが、性愛を基盤としたアイデンティティであるという意味で必然と言える。またゲイ男性は、異性愛社会での生活において同じゲイ男性と出会う機会は自ら探し求めない限りほとんどないため、ゲイ男性が集う場では出会いが求められてしまうことが避けられないというのも事実であると思われる。性愛については各章でも折に触れて論じたが、性愛と活動の関係性がゲイ男性に特有のものならば、この点をより深めて考えていく必要があるのではないだろうか。以下の本章ではこの点を取り立てて論じることで、ゲイ男性のアイデンティティと活動について論じる。

以上を参考に以下では、性愛が充足されれば、あるいはその充足が見込まれれば、多くのゲイ男

性はより社会変革活動へと進んでいくのか、という問いを立てて考察を進めてみたい。無論この問いは、すべてのゲイ男性は社会変革活動を行うべきだ、という主張をしているわけでも、あるいはどうすればより多くのゲイ男性が社会変革活動に携わるのかという戦略を考えるということでもない。ゲイ男性のさまざまな活動で〈自己変革から社会変革へ〉という移行が想定されてきており、そしてその移行が時に困難であったという、分析の中で明らかになったこれらのことをひとつの問いとして析出し、それを手掛かりにゲイ男性の活動と性愛の関係性について考察をしてみるというのが趣旨である。

この問いはまずひとつに、皆が性愛をいつかは充足させることができるということを想定している。しかし、実際はそうではないということが重要である。第1章の『バディ』と第2章のゲイマンガの分析を参考にすると、現在のゲイ男性の間で認識されているのは、性愛を充足させることのできる人とできない人の格差が生じていること、言い換えれば、モテる人とモテない人の格差が生じてしまっているという現実である。年齢によって魅力がなくなることによって「モテ」を失っていくということ、現在ではゲイ男性同士が出会う機会が豊富にあることによって、美醜の格差が生じたり、「純粋」な恋愛ができなくなっていること、という新たな〈悩み〉が生じていた。そしてもうひとつ上述の問いが想定しているのは、社会変革活動が、異性愛規範を原因とする差別などの「悩み」も、ゲイ男性の性愛に関わる〈悩み〉も解決するということである。しかし、社会変革活動は〈悩み〉を解決することはできない。なぜなら、社会変革活動が目的としてきたのは、異性愛社会を原因とする「差別」などの「悩み」であり、出会いや「モテ」といった〈私的〉な事柄とされる〈悩み〉の解決を目指してはいないためである。だが、性愛といった〈私的〉と捉えられる領域でこそ欲望やジェンダー、セクシュアリティの問題が生じることはフェミニズムが明らかにしてきたことである。にも関わらず、これまでの活動は必ずしもその点に取り組んでこなかったため、社会変革活動によるプライベートな〈悩み〉の解決は見込まれていないのである。「差別」が見えにくく、「差別」の経験が共有されにくいという状況では、ゲイ男性が〈悩み〉の方をより重視する状況を生み出す。となると、社会変革活動が言う「現実」と、「モテ」などの新たな〈悩み〉が生じているというもうひとつの〈現実〉との乖離に対する違和感を、(一般の)ゲイ男性に生じさせる。

もちろんここでいう〈悩み〉の解決とは、社会変革活動がゲイ男性の性愛のパートナー探しをするということではなく、ゲイ男性間の性愛の中で働くジェンダーやセクシュアリティを問題化するということである。この点を考えるにあたって重要なのは、ゲイ男性間の性愛が男性同士のものであるということ、つまり男性性の問題が性愛の中で強固に働くということである。

2-2　社会変革活動では解決しにくい〈私的〉な問題

ここで改めて、ゲイ男性間の性愛がどのように成り立っているのかを論じておきたい。ゲイや男性同性愛者とは「男が好きな男」であると端的に言うことができるが、ここで性的対象となる男というのは生物学的な男ではなく、男性性である。これは男女の異性愛が互いの生物学的な性を欲望の対象とするのではなく、男性性・女性性というジェンダーが重要であるのと同様である。ジュディス・バトラー (Butler 1990=1999) が生物学的な性としてのセックスと文化・社会的な性としてのジェンダーの区別を取り払い、すべてをジェンダーによる産物として捉えたように、ゲイ男性の欲望もセックスを含めた男性性というジェンダーを巡って生じるのである。よって基本的にゲイ男

性の「モテ」のコードは「男らしさ」を体現することであり、「非モテ」は「女らしさ」と結びつけられる。それが象徴的にわかるのが、第2章で扱ったゲイマンガの『アグリっ娘』である。主人公のアズサとテルミはただ「ブス」なだけでなく、非常にフェミニンな存在として描かれていた。その他の「イケメン」の登場人物が「男らしい」のとは対極的である。

男性性を基盤とした欲望を持つことと社会変革活動を行うことの間で葛藤を経験する可能性については、伏見憲明がすでに1991年の段階で論じていた（伏見1991:163-175; 2004:10-15）。伏見は学生時代、フェミニズムについて学び、「男らしさ・女らしさから自分らしさへ」という標語を受け取ったことで「自分らしく」なろうとした。「男」としてのコードから外れ、自分の中の女性性を素直に表現し、レース付きのフェミニンな紫の服を着たりし始めたが、その途端、まったくモテなくなってしまったという。なぜならば、ホモセクシュアルとは〈男というイメージ〉＝〈男制〉をめぐる欲動なのであって、そこから逸脱することは〈イメージゲーム〉からの退却を意味するからである。〈男制〉と〈女制〉とは、男性性・女性性というジェンダーを意味する伏見による造語である。つまりここで伏見が気がついたのは、ジェンダーやセクシュアリティに関して社会変革を行うという志向性と、ゲイ男性の間で男性性を基盤とした魅力と「モテ」を保つことの両立不可能性なのである。

ゲイというアイデンティティを持ちながらゲイリブを行うということ――それは本来、同性愛者への差別解消のみならず、広く異性愛規範・ジェンダー規範に抵抗をすること――と、ゲイとして、男として男にモテるということ――男性性の規範にしたがって生きるということ――は、基本的に両立が困難な関係性にある。もしジェンダーの規範に抵抗をするのであれば、それは必然的に男性性を問題視することになり、結果として、性愛の相手に男性性を求めることも、「男」として自身がモテることも否定することになってしまうのである。では、〈みんなで一緒に男を降りよう〉などと言うことができるのかというと、それも不可能である。第一に、男性ジェンダーを性愛の対象とする限り、性愛の対象から男性性を分離させることは不可能であるためである。第二に、ほとんどの人は「男」から降りようとはせず、仮に自分だけが「男」から降りてしまったのであれば、結局誰からもモテなくなってしまうからである。この状況では、「男」から降りるというリスクを選択するよりは、現状を維持しその中で出会いを求める方がモテる可能性が確実に高い。

では、オネエやドラァグの実践はゲイ男性間のジェンダーやセクシュアリティの規範を撹乱することができるだろうか。これも必ずしも効果を発揮するとは言いにくい。まずオネエやドラァグは、異性愛者の欲望に適合する形でステレオタイプを利用した可視化の戦略として用いられてきた傾向が強いため、男性性の規範にまで抵抗するとは言いにくい。またオネエもドラァグも、「女」になろうとしているわけではなく、「男らしさ」を保ったまま、あるいは「男」というアイデンティティを保ったまま行うことのできるパフォーマンスなのである。よって、オネエやドラァグという〈逸脱〉がまさに男性性の担保によって可能となっている可能性があるため、それは常に「男らしさ」の表明と表裏一体である。岡田桂（2004）は男子サッカーの試合における選手同士のキスを、強固なホモソーシャリティに支えられている領域ではその〈逸脱〉が逆説的に「男らしさ」の表明になると論じるが、オネエやドラァグにも類似する構造を見出すことができるだろう。簡潔に言うと、オネエやドラァグを行うことと、「男らしい」ことは両立可能なのである。

伏見のエピソードにあった女性性の体現と比較してみると、オネエやドラァグは戦略として一時

的に行われる逸脱であるからこそ、それを実践する個人の男性性を脅かしはしないが、伏見の女性性の表現は自分を女性的であると認めることと等しかったため、彼の男性性を脅かした(1)。また、オネエやドラァグがゲイリブやゲイコミュニティにおけるコードのひとつと捉えられる一方で、伏見による女性性の体現はそのコードとは別の次元のものであったため、「男」からの明らかな逸脱と捉えられたのだ。

伏見は、ゲイ男性間の性愛から男性性を切り離すことができないというジレンマを乗り越えるために、性／エロスをゲームの中に囲い込み、ベッドに封印すること、「性を〈イメージ・ゲーム〉としてとらえ直し、ゲームに参加しているのだということを皆が了解し合うこと」(伏見 1991:174-175)を主張している。つまり、男であることや女であることによる不当な扱いや差別は解消されるべきだが、男性性・女性性無しの欲望は不可能であるため、折衷案としてそれをベッドの中だけのゲームとして維持することを提案する。しかしそれを「ベッドの中」の「ゲーム」としてのみ留めておくことは本当にできるのであろうか。

伏見の論は確かに折衷案として魅力的かもしれないが、二つの点から困難であると思われる。ひとつは、性を「ベッドの中」の「ゲーム」として囲い込むにしても、常に社会全体に存在する規範から切り離すことはできないと考えられるからである。「個人的なことは政治的なこと」であるように、「ベッドの中」の「ゲーム」であったとしても、そこに抑圧の構造が生じてしまうことは避けられない。ここで言われる「ベッド」を広く解釈して、ゲイコミュニティという限られた関係性における性愛のゲームとして捉えたとしても、そこでは「モテ」をめぐる不満が生じていたことも事実である。これは確かに「差別」と名付けられてきたものではないが、男性性を基準とする美醜によって特定のゲイ男性を〈差別〉するものであるのは事実である。そしてその〈差別〉は、女性性に向けられてきた。もし男性性の問題を不問にすることができるとしたら、それを可能にするのは男性性そのものの利用に他ならない。例えばフェミニズムの議論が性愛や欲望について積極的に扱うのは、男女の異性愛のジェンダー関係が常に不平等なものであり、女性は男性による性的客体化によってしか性愛を可能とされてこなかったからである。ミスコン批判やポルノグラフィー批判は、こうした理由から行われてきた。しかしながらゲイ男性間の性愛は、一見すると男女のジェンダー関係のような不平等な関係性によって成り立っているものではないため、ゲイ男性間で働く男性性の問題が積極的に扱われてこなかったと言える。男性同士という、基本的に性的主体としての能動性を確保された人々による性愛の関係性では、性的自由が確保されており、そこに何かしらの問題を見出したり、それに積極的に取り組んだりする姿勢は生じにくい。男女のジェンダー関係性はマジョリティとマイノリティの関係性であるのに対して、ゲイ男性間の関係性はマジョリティとマジョリティの関係性なのである。

伏見の提案が現実的ではないもうひとつの理由は、ジェンダーを容易にコントロールすることは困難であるからである。「ベッドの中」の「ゲーム」と伏見が言うときには、皆が平等に男性性と女性性をコントロールし、体現することがあたかも可能であるかのような前提がある。しかしジェンダーとはそう簡単にコントロールできるわけではない。例えば、経済的地位と男性性が結びつくこ

(1) 第3章の札幌ミーティングの分析で論じたオネエは日常的な実践としての意味合いがあったが、それも場面場面での戦略的使用としての意味合いがあったため、実践する個人の男性性を脅かさずに行うことができる。

とを考えると、それを容易にコントロールすることができないことは明らかだ。また例えば、特定のファッションが男性性と結びついているとき、そのファッション一式を揃えるだけの経済的余裕をすべてのゲイ男性が平等に持ち合わせているであろうか。むしろジェンダーは個人が容易にコントロールできず、社会から押しつけられる規範であるからこそ問題となるにもかかわらず、それを人々が自由に行うことができるような「ゲーム」と捉えるのは安易すぎるのではないだろうか。

ゲイ男性も性愛を充足させるためにモテるには男性性のコードに従わなければならず、女性性を身にまとうゲイ男性はモテず、〈差別〉される傾向がある。しかし社会変革活動に携わるゲイ男性は、社会変革を目指しながらも、ゲイであるという欲望の中で生きるためには、男性性を維持しながら性愛の充足を維持するために限定的な変革を行わざるを得ない。つまり、社会におけるホモフォビアは批判しながらも、ゲイコミュニティ内の男性性をもとにした「モテ」の〈私的〉な〈差別〉は温存される傾向がある。1980 年代までのゲイ男性は、「あっちの世界」（異性愛者として振舞う普段の生活）と「こっちの世界」（同性愛者としての暮らし）を切り離し、「二重生活」を行ってきたが、現在でもこの切り分けは別の形で残ってきているのではないだろうか。それは、広く社会に対しては規範への抵抗を行うが、ゲイコミュニティでは規範と折り合いをつけながら生きていくということである。

簡単にまとめると、ゲイ男性の活動には〈私的〉領域の〈差別〉には目を瞑りながらも「公的」領域の「差別」を批判していくという姿勢があるため、必ずしも多くのゲイ男性を社会変革活動へと呼び込まない可能性がある。「差別」への抵抗が必ずしも〈差別〉への抵抗を含まないのであれば、社会変革を行おうと思わない人がいても不思議ではない。そして〈私的〉領域の〈差別〉が温存されることによって、常に性愛が充足されないと感じる人が出てくるのだ。

３．モラトリアム時代のゲイ男性

３−１　日本における同性婚の議論

前節までの議論を下敷きにしながらより現在的な文脈の中で、ゲイ男性の性愛と社会変革活動の関係性について考察を続けてみたい。そして加えて第 4 章でも取り上げた、1990 年代末からゲイ男性の活動が停滞していったという指摘についても考えてみたい。1990 年代末から活動が停滞していったと言うとき、具体的に何をもって停滞というのか、非常に難しいところがある。例えば、ゲイ男性に限らずセクシュアルマイノリティ全般について考えるのであれば、2000 年代以降に活動がなくなった訳ではないし、規模の違いはあれ、さまざまな活動が行われ、社会的な動きが生じてきた。例えば、「日本の LGBT 30 年史」をまとめた東京レインボープライドのオフィシャルマガジン『BEYOND』では、1990 年代を「芽生える」、2000 年代を「根を張る」と形容し（東京レインボープライド 2019：14, 18）、2000 年代を活動の停滞期というよりは安定期と捉えている。しかしここで重視したいのは、実際にはさまざまな活動や動きがあった中で、1990 年代末以降は活動が停滞したという認識・言説がゲイ男性の中で生まれていたという事実である。そして 1990 年代は「ゲイブーム」が生じ、2015 年以降は「LGBT ブーム」が生じたと言われ、その間に〈空白〉の 15 年間が置かれているとみなせることである。このブームとブームの間に何があったのかということをゲイ男性に焦点を当て考え

ることは、現在のゲイ男性のアイデンティティを論じるにあたっては意義のある作業であろう。

この考察にあたって中心的に取り上げたいのは、結婚／同性婚の問題である。2015 年から始まったとされる「LGBT ブーム」は、東京都渋谷区が同性パートナーシップ制度を制定したことがニュースとなったことを発端としている。渋谷区以降の 4 年の間に 20 以上の自治体が同様の制度を制定してきたという急速な変化は、驚くべきものである。この同性パートナーシップ制度という、広い意味での「結婚」が「LGBT ブーム」のきっかけとなったことは改めて考えなければいけない。そして同時に、同性婚を求める動きが 1990 年代から 2000 年代にかけてはそれほど起こらなかったのはなぜか、別の言い方をすると、なぜゲイ男性をはじめとするセクシュアルマイノリティは 1990 年代の「ゲイブーム」の流れに乗って同性婚を求めるための議論・活動をそれほど行ってこなかったのかという問いを立ててみたい。そしてこの点を、ゲイ男性の活動、彼らが置かれていた状況という視点から考察してみたい。

日本で同性婚についての議論はいつ登場し、どのような議論がされてきたのであろうか。風間孝は 2003 年の段階で、同性パートナーシップの公的承認を求める声が大きくなり始めていることに触れている（風間 2003）。ここではひとつの指標として、出版されてきた同性婚関連の書籍を概観すると、1997 年に出版された『クィア・スタディーズ '97』は、「婚姻法／ドメスティック・パートナーシップ制度」という特集を組んでいる。同性愛者であることを肯定的に捉える人、同性愛者として生きることを選択する人、カミングアウトをする人が増え始め、「ゲイ・ライフは始まったばかり」ではあるが、今後同性愛者にとって大きな問題となってくるものとして、パートナーシップについて議論されている（クィア・スタディーズ編集委員会編 1997:47-49）。日本で初めて同性婚という言葉をタイトルに冠したものは、2004 年に出版された『同性パートナー：同性婚・DP 法を知るために』であると思われる。性的指向による差別を禁止する条例が宮城で成立したことや、オランダでの同性婚の成立、フランスでの民事連帯契約法（PACS）が成立したことなどをきっかけに、日本でも同性婚やドメスティック・パートナー法についての議論が沸き起こりつつあるとされている。しかしこの書籍は単に同性婚の必要性を説いたりそれを求めたりするのではなく、同性婚や既存の婚姻制度を批判的に捉え、「新しい時代のパートナーシップの考え方の枠組みと、そこへの道筋を収録」（赤杉・土屋・筒井 2004:13）することによって、新しい関係性を求めようとするものであった。2007 年には『パートナーシップ・生活と制度：結婚、事実婚、同性婚』という書籍が杉浦郁子、野宮亜紀、大江千束によって出版されている。異性愛の婚姻制度とはそもそも何か、諸外国の同性婚・パートナーシップ制度の状況、同性カップルが暮らす中で直面する困難とそれへの対処が解説されている。2009 年には永易至文による『同性パートナー生活読本：同居・税金・保険から介護・死別・相続まで』が出版されている。杉浦らによる書籍と類似するが、同性同士で生活していくにあたって生じる制度的問題を中心にQ＆A形式で解説するもので、同性婚の合法化を主題とはしていないが、それがない中で生じるトラブルについて知識を得ておくための書籍となっている。

いずれの書籍も、パートナーシップを求めない人もいることや、同性婚／パートナーシップという形態のみを国家から承認してもらうことによって、パートナーシップを求めない人を排除してしまうという批判があることにも触れている。その上で同性婚について議論をし、同性婚が本当に必要なのか、どのような同性婚が必要なのかという問いに取り組んできたと言える。2015 年以降のような同性婚を合法化するための具体的な働きは確かに少なく、あるいはほとんどなかったかもしれ

ないが、同性婚・同性パートナーシップを求める声や、それを何かしらの形で実現させようとする声は、少なからず常に存在してきた。

2-2　結婚からの解放／モラトリアムへの解放

札幌ミーティングが作成していた文集やニュースレターを見ても、すでに 1990 年代前半から同性同士での結婚を求める語りや、法的同性婚の必要性を説く語りが存在している。例えば、1990 年 2 月に作成された『札幌ミーティング文集 Vol.1』の「結婚考」という記事では、「家庭を持ちたい」「自分の子供が欲しい」と語られ、「ゲイのカップルを考える」という記事では、「愛情の枯渇しないような相手にいつかめぐりあって、一生のパートナーとして人生を共にしたい」と語られている。しかし本研究の分析を振り返ると、同時にそれを積極的に求めようとはしないゲイ男性の姿勢もあった。

例えば、『バディ』では結婚が生き方のモデルとして語られており、『バディ』の第 2 期では「夢」としての結婚を提示し、第 3 期では現実を帯びつつある同性婚についての語りが見られた。しかし現実に同性婚などの制度を求めるよりは、それとは異なる方法によって読者はエンパワーメントされてきた。別の言い方をすると、同性婚ができないという背景での戦略としてはある意味で現実的で、「現実」を変えるよりはそれと折り合いをつけて生きていくことに長けていたとも言えるだろう。またゲイ男性向けゲイマンガでは、確かに 1990 年代には女性と結婚をしなければいけないことを原因とする苦悩が描れていたが、次第にゲイコミュニティ内で生じる困難、ゲイ男性同士で恋愛をすることの困難へと描かれるものは変化していった。そこでは必ずしも「社会」が描かれるわけではなく、比較的閉じた関係性におけるゲイ男性の生き方が描かれていた。では、常に結婚を話題として頭の片隅に置きながらもそれを積極的には求めようとしない姿勢とは何か。そこで一度、多くのゲイ男性が女性との結婚を選択していた 1980 年代以前の状況から考えてみたい。

1980 年代以前には、多くのゲイ男性が女性との結婚を望んでいたことは、前川（2017）が詳細に記述していた。もちろんすべてのゲイ男性が女性と結婚をしていたとは到底言えないが、それが大多数の考える生き方であり、女性との結婚が常にライフコースの未来に位置付けられていた。女性と結婚するということは、異性愛者として自分の存在を社会に証明することであり、〈一人前の人間〉としてのラベルを貼られることを意味する。さらにこれは同時に、〈子ども〉から〈大人〉への移行も意味する。異性愛の結婚規範に従う限り、それが苦痛を伴うものであっても、彼らは社会的承認を得、わかりやすいライフコースを歩み、〈大人〉になることができた。

エリク・エリクソンは、人生を通しての人の発達を 8 段階で捉えているが、その 5 段階目の思春期／青年期を「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」(Erikson 1963=1977:351, 鑪1990:55)の時期であるとしている。思春期になると、身体的変化や大人役割の切迫に直面し、〈自分とはだれか〉という疑念に悩まされるようになる。これまではアイデンティティを形成するための環境がごく限られた場所（学校や家族など）でしかなかったが、この時期にはそれらがより大きな「社会」に取って代わられる。「人間存在の社会というジャングルの中では、アイデンティティ感覚がなくては生きている感触が得られない」(Erikson 1968=2017:153)。これまで形成してきたアイデンティティが、この時期には根本から問い直されるのである。こうした悩みを解決するために、アイデンティティを形成するための「モラトリアム」を人々は必要とする。モラトリアムとは、「社会的成人と

しての義務や責任を一時的に猶予する（…）保留の状態」（鑢1990：176）であり、〈子ども〉と〈大人〉の間のモラトリアムの中で人々は〈私とはだれか〉を模索する。この段階でアイデンティティを確立できないと、人々はアイデンティティの混乱に陥る。エリクソンによると、「青年期の終りに、確固としたアイデンティティが発達していなければ、次の段階へと発達していくことができない」（Evans 1967=1981：35）。1980年代以前のゲイ男性は、異性愛者として生きていくというアイデンティティを形成することで、この思春期／青年期のアイデンティティの形成を達成していったと言うことができる。

この段階の次となる6段階目は「親密さ 対 孤独」の段階である。鑢によると、「親密性でエリクソンが説くのは、男女の出会いであり、孤独を癒す力である。それができるこころの準備は、アイデンティティの感覚を得てからである」（鑢1990：63）と説明される。これは「結婚」の段階と言い換えることもできるだろう。ここからは、エリクソンのアイデンティティの発達段階が異性愛主義に裏打ちされていることがわかる。しかしエリクソンの理論が社会の規範を写しとったものであり、人々がそれを目指して人生を歩むのであれば、ここではエリクソンの議論を社会の規範として参照することは可能である。

エリクソンのアイデンティティの発達の理論を参考にすると、1980年代以前までのゲイ男性は、〈正常〉な発達をたどることによって、〈大人〉になることができていた。〈大人〉になるとは、社会に自身を統合させていくということである。しかし1990年代以降、ゲイ男性は「ゲイ」というアイデンティティを肯定的に持ち、女性と結婚せずに「ゲイ」として生きることを選択し始めた。もちろんすべてのゲイ男性が自身のことを肯定的に捉えることができるようになったり、女性と結婚しなくなったとは言えないことは第1節で触れたが、しかし「ゲイライフ」を歩み始めた人が増加したということ、それをあるべき生き方であると捉える人が増加したこと自体は否定できない。ゲイライフを送る人が増えたということは、女性と結婚をしなくなったということであり、それはライフコースから結婚というステップがなくなったことを意味する。つまり、ゲイ男性は1990年代以降、〈子ども〉のまま長いモラトリアムの期間に置かれるようになったのである。確固としたアイデンティティを探すための猶予期間であるモラトリアムの中ではアイデンティティを模索はするが、猶予期間であるため、何者でもないこと、社会について考えないこと、社会に自身を統合させないこと、結婚をしないこと、未来を見ないことも許される。「ゲイ」としてのアイデンティティを選択し、女性との結婚という最大の悩みを解決することによって、結婚をしないことが社会的には逸脱とみなされるとしても、ゲイ男性はモラトリアムへと〈解放〉されたのである。〈大人〉になる必要がなく、〈子ども〉のまま（結婚）規範から距離を置きつつ生きるという〈解放〉は、必ずしもゲイ男性をラディカルな社会変革へとは導かない。

モラトリアムへと解放され、〈子ども〉のままでいたいと願うゲイ男性は、〈大人〉になること、結婚すること、その先にある老後を延期しようとする。ここに男性性と結びつく「モテ」と若さへの希求が生じる。第1章の『バディ』の分析でも触れたように、「モテ」は若さと密接に結びついていた。若さはゲイ男性に限らず社会一般で「美」として希求されるものだが、これをゲイ男性が置かれた歴史的コンテクストから再解釈することは可能である。ゲイ男性が若さを求めるのには、二つの理由がある。ひとつは、「モテる」ことと若さが結びついているために、若さの維持によって「モテ」を維持しようとするためである。そして、もうひとつは、若さを維持することによってモラト

リアムの期間をできる限り延長させ、〈大人〉になることを可能な限り遠ざけようとするためである。

大島岳によると、社会からの排除によって形成されたゲイ男性の人間関係は「男らしさ」の規範からも影響を受けるため、その中でゲイ男性は「男らしさの快楽」を性的に追求し、それを生きる手がかりとする（大島 2016）。ゲイ男性は性的に奔放であるというステレオタイプがあるが、「男」として性的主体であり、性的能動性を持つことが許されるという実情では、性的接触の機会が異性愛の男女間よりも多かったり、そのハードルが低いことは否定できない。もちろんゲイ男性が性的接触へと駆り立てられる要因はひとつではなく無数の要因が交差しあっているが、本章の視点から捉えるのであれば、それは〈大人〉になることを遠ざける実践と言えるのだ。性的接触の敷居が低いゲイ男性の関係性の中では、「モテ」ること、性的に魅力があること、性交渉を欠かさないこと、そして若いことはほぼ同じ意味を持つ。結婚がライフコースに含まれないゲイ男性は、〈結婚して落ち着く〉という未来がなく、必ずしも不特定多数との性的接触をどこかの段階で制限する必要もないため、性的接触へと駆り立てられるのである。そうして「男」であるという立場を利用しつつ、若いことと「モテ」ることを維持するということは、自分はまだ〈大人〉ではないと自分に言い聞かせ、モラトリアムに留まることを意味する。しかし、若さを維持しようとしても、生物学的な老化を避けることはできず、老いることで他者から〈大人〉と必然的にみなされ、異性愛者としての役割期待を被る可能性がある。ゲイ男性は常に社会から異性愛規範へと回収されてしまう危険と隣合わせなのである。これに抵抗するために、ことさら若さや「モテ」を維持し、〈子ども〉のままモラトリアムに留まろうとする。

2-2 節では、性愛を充足するのが困難な状況にゲイ男性が置かれていること、そして社会変革活動が「モテ」などの〈差別〉を扱わずに温存してしまうことがゲイ男性を社会変革活動に導かない理由となり得ると論じた。しかしもう一方では本節で論じたように「男らしさ」によって「モテ」たとしても、性的接触を欠かさないことが、つまり性的接触を常に追い求めることで過度にそれを充足させ、「男」であることを維持すること自体が、既に〈解放〉にもなっているのだ。

3-3　同性婚はゲイ男性を〈大人〉にするか

ゲイ男性の活動が〈私的〉な問題に関与しにくいこと、そしてゲイ男性がモラトリアムへと解放されてきたこと、これらが 1990 年代の「ゲイブーム」と 2015 年以降の「LGBT ブーム」の間にゲイ男性が置かれてきた状況であり、2015 年までに大きなうねりを生み出さなかったこと、ゲイ男性を社会変革活動へと導くのが時に困難であったこと、同性婚合法化のための積極的な活動が生じなかったことの理由と言える。

2000 年代以降に同性婚が求められなかった理由は他にも考えられる。ひとつには、志田哲之があげる HIV/AIDS に関する日本の状況がある。アメリカでは 1990 年代から同性婚を求める動きが起こったが、そのひとつの理由に、HIV/AIDS の登場によって引き起こされた一連の出来事があった。1980 年代から始まった HIV/AIDS の脅威によって、パートナー関係にあったゲイ男性の多くがパートナーを失う状況に直面し、制度的な結婚による保証や利益のニーズが高まった。HIV/AIDS の感染を防ぐために、また乱交性と HIV/AIDS の感染が結びつけられたことに抵抗するために、性交渉をパートナーだけに限定する動きも生じた。しかし日本では HIV/AIDS 感染者が急増したのは HIV/AIDS が死

の病ではなくなり慢性疾患となった時期と重なり合っており、アメリカのような同性婚を求める状況を生み出さなかった（志田 2009:148-151）

他にも考えられる理由のひとつは、2000 年代以降も親・周囲の人に対するカミングアウトのハードルが高かったことである。同性婚をするということは、自動的に周囲に同性愛者であることをカミングアウトすることにもなってしまうため、そのハードルが高いうちは同性婚を求める動きも限定的になる。しかし、大きな出来事はなかったかもしれないが、1990 年代以降も地道に活動を続ける各地域の団体があったことは確かであり、小さな活動の積み重ねによってセクシュアルマイノリティに対する偏見が少しずつ減っていった。そうした中、カミングアウトをする人が増え、2015 年以降の「LGBT ブーム」へと繋がっていったと思われる。並行して 2000 年代以降、制度的結婚はできないものの、実際に同性同士で暮らす人が少しずつ増えていったことによって、法的結婚のニーズも少しずつ登場しはじめたと思われる。実際に同性同士で暮らす人がどれほど増加したのか、あるいは本当に増加したのかを統計的に知ることはできないが、しかし「ゲイライフ」を選択し始める人が増えていった中では、同性同士で暮らす人々が増えていくことも自然の成り行きであるろう。

同性婚はまだ日本で合法化されてはいないが、同性パートナーシップ制度が日本各地で制定されてきていることを考えると、セクシュアルマイノリティは結婚の権利を手に入れつつあると言える。1990 年代以降、モラトリアムへと〈解放〉され、結婚という選択肢を持たずに生きてきたゲイ男性が、再度結婚をゴールとする生き方へと回帰しようとし始めている。この事実は、より多くのゲイ男性を〈大人〉へと導き、社会の問題への取り組みを促すのであろうか。このことはゲイ男性のアイデンティティについて、何を意味するのであろうか。

結婚には二面性がある。まずそれは性愛と密接に関わる関係性であるため、より「モテ」や魅力の問題を表面化させる可能性がある。〈結婚できる人／結婚した人〉と〈結婚できない人／結婚していない人〉の二種にゲイ男性が振り分けられるようになってしまうことによって、モテる人とモテない人がより表面化する可能性がある。しかし同時にもうひとつの側面として、結婚が可能なライフコースとして想定されるようになり、老後も明確なライフコースとして捉えることができるようになったとき、ゲイ男性の間で若さと「モテ」を過剰に求める姿勢が薄れていくのではないかということである。もちろん結婚が制度的に可能となったからと言って、男性性を基盤とした魅力の規範が変わるわけではない。しかし、結婚が未来に見据えられることによって、性的接触や男性性を利用した〈解放〉ではないものを求めるようになるかもしれない。あるいは、性愛の充足がどこかで達成される／させないといけない、というストーリーを描くことで〈大人〉になりはじめたゲイ男性は、常に若さを保ち〈子ども〉にとどまり、〈大人〉になることを延期しなくなり、「モテ」や美醜をめぐる新たな認識を持ち始めるかもしれない。

同性婚合法化に向けた動きがある中で、多くのゲイ男性がどのような道をたどっていくのかを予想することはできない。しかし、2015 年以降の「LGBT ブーム」という変革のうねりを見てみると、結婚というライフコースの獲得という道を辿りながら、多くのゲイ男性がこれまで以上に社会変革活動へと移行しつつあるようにも思える。

４．ゲイアイデンティティの終焉？

4−1〈差別なき社会〉における戦略としての「愛」

より広く、2015 年以降の「LGBT ブーム」によって生じた種々の活動にはどのような特徴があり、ゲイ男性、そして広くセクシュアルマイノリティにとってそれらは何をもたらすのであろうか。2015 年以降は大小さまざまな動きが生じており、そのすべてを把握することは困難な状況にもなってきている。しかしその中でも二つ、急速に動き出している活動がある。ひとつはすでに触れた同性婚を合法化する活動と、もうひとつはパレードである。2015 年以降の運動は、この二つによって特徴付けられていると言っても良いだろう。

同性パートナーシップ制度に関しては、2015 年の渋谷区を皮切りに、2019 年 10 月の段階では全国の 26 の自治体で制度が制定されており、これまでに合計で 617 組が利用をしてきた（『虹色ダイバーシティ』2019. 10. 8）。これに伴い、同性パートナーシップや同性婚に関する書籍もこれまで以上に出版されてきており、出版ラッシュと言える状況である。一方、パレードは 1994 年に東京で開始されてから少しずつ開催地域を増やしていき、2015 年までには多い時で 5 地域で開催されてきた。そしてその後、2016 年と 2017 年は 7 地域、2018 年は 8 地域、2019 年は 10 地域(2)と、この短期間で急増してきた。

ではなぜこれら二つの活動が 2015 年以降、急速に広まり始めたのであろうか。まず留意すべきなのは、この二つの活動は対極的な特徴を持っていることである。セクシュアルマイノリティの社会変革活動は、二つに大別することができる。ひとつは目標の達成が明確にわかるもので、もうひとつはそれがわからないものである。同性婚推進活動は法律や条例などを立ち向かうべき具体的な〈敵〉として設定でき、具体的な達成が制度の変化によって明確にわかる活動である。一方でパレードはイベントを開催するということ以外に、具体的な達成やゴールを持ちにくい活動である。つまり同性婚推進活動はゴールが達成されればそれで終わりを迎えるのに対して、パレードはその終わりを持たないのである。対極的ではあるが、実は両者は互いに補完的でもある。同性婚推進運動は同性婚という単一の問題に取り組む活動である一方で、パレードは具体的な達成目標が掲げられないため、さまざまな複数の問題が主張される場になっている。パレードを通して問題提起されたものが独立した活動になったり、あるいはそれがパレードという場で表現活動を行うことも可能となっている。

こうした差異と補完性がありながら、両者には共通する点もある。それは、象徴的でありながら抽象的でもある「愛」「プライド」「楽しさ」といった印象によって脚色される活動である点である。これらの言葉による脚色の機能は、〈差別なき社会〉において、セクシュアルマイノリティ当事者でも非当事者でも共感できる共通言語を用いて、セクシュアルマイノリティを主流の物語の中に位置付けることである。セクシュアルマイノリティを差別する法律がなかったこと、宗教的教義を理由とする差別の希薄さ、「寛容言説」や「からかい」の構造による差別の意図の不在という事情は、当

(2)　2019 年に開催予定であった岩手のパレードは大型台風の影響により直前で中止となったが、開催数として含めている。

事者にも非当事者にも「差別」の存在が認識されにくく、それを共有することを比較的難しくさせる。こうした社会的状況では、双方にとって「差別」とは別の枠組みで活動を行う方が活動を受容する際のハードルが低くなる。

同性婚に関しては「愛」という物語を用いることで、人々の受け入れ可能性を高めることができている。「愛」はセクシュアルマイノリティに特有のものではもちろんなく、むしろ異性愛の文脈によって支配されてきた言葉とも言える。その意味では、セクシュアルマイノリティにとっては〈敵〉である異性愛者の言語を用いることで、セクシュアルマイノリティと異性愛者を同じ枠組みで捉えることができる。異性愛者にとっては、馴染みのある言葉の中で行われる主張の方が、理解しやすい。また、「愛」の言説によって、セクシュアルマイノリティとして直面するさまざまな困難を、「愛」を達成するための障害とすることができる。同性婚推進運動自体は社会運動でありながらも、「愛」の困難を乗り越えることで「愛」を達成する純愛ストーリーのような形態をとるのである。

またパレードに関しては、「祭」であることを基本に誰もが楽しめるイベントとすることで多くの人々を動員することができるようになっている。そして、社会によって蔑まれた存在ではなく、「プライド」を持った立派な市民として自らを社会にアピールすることができている。パレードが行うのは社会の枠組みを根本的に変えるための抗議ではなく、既存の枠組みへのセクシュアルマイノリティの包摂となるため、異性愛者にとっても比較的理解がしやすいと想定される。しかし「愛」は異性愛者もセクシュアルマイノリティも共に追い求めるものであるが、異性愛者は「プライド」を奪われるという歴史を経ていないため、それを追い求めるのはセクシュアルマイノリティだけである。また当事者にとっても、海外と比較してプライドというものを持ちにくい。なぜなら、プライドは差別への反動／抵抗として獲得されるものだが、差別の存在が当事者によっても共有されにくい日本社会では、その反動／抵抗自体が生じにくいからである。そのため両者ともに「愛」の方がより共感を呼ぶ。実際に東京のパレードがこれまでにパレードのテーマとして掲げてきたキャッチフレーズが、「Various Love, Various Pride! いろんな愛、それぞれのプライド」(2002 年)、「人生いろいろ♪ 愛もいろいろ♡」(2014 年)、「LOVE & EQUALITY すべての愛に平等を。」(2018 年)と、いくつかの回で「愛」をテーマとしてきたことを考えると、「愛」の方が皆にとって受け入れのハードルが低いと言える。

このように昨今の活動では、これまで以上に「愛」の言説によって人々が動員されつつある。前節で触れたように、同性婚は「モテ」や魅力の問題を一層表面化させそうではあるが、「愛」と結婚いう主流の物語の中に自らを位置付けることによって、むしろその問題を覆い隠しているように思われる。そして、〈大人〉になる＝社会に自らを統合させる未来を描き、男性性や性的接触を利用した〈解放〉ではない、新しい解放の形を思い描いているのではないだろうか。同性婚とパレードの隆盛は日本に限ったことではなく、世界各国で同様の流れが生じてきている。しかしそれをただ単に海外の流れを踏襲しているとか、あるいは海外と同様の歴史をたどっているとしてのみ解釈するべきではないだろう。本章の分析を踏まえた日本的なコンテクストで、特にゲイ男性に関しては、以上のような解釈を与えることも可能であると思われる。

4-2　強いアイデンティティと弱いアイデンティティ

ゲイをどのように表象し活動をしていくかということと、多くのゲイ男性が、自身がゲイである

という事実をどのように捉えているのかということは密接に関わっている。そもそも被差別の意識が西洋などと比べて比較的希薄で、プライドというものが形成しにくい社会では、ゲイであるというアイデンティティは「アイデンティティの束」の中でどのように位置付けられ、それはどれほど個人の中核を占めるのであろうか。

草柳千早（2004）は社会問題の社会学について論じる中で、「クレイム申し立て」をする主体のアイデンティティを、「『強い』主体」と「曖昧な主体」という言葉を使って表している。「『強い』主体」とは、「『逸脱』的アイデンティティを積極的に掲げ肯定し、自己の要求とその正当性を堂々と主張することによって、社会のあり方を変えていこうという信念に基づいて行動するような」主体（草柳 2004:70）のことを意味している。マイノリティとしてのアイデンティティを自己の中核的要素として捉え、アイデンティティポリティクスの中心的存在となりうる人々を指していると言える。対して「曖昧な主体」とは「『強い』主体」とは対になるもので、「自分のアイデンティティをめぐって宙吊りのまま揺れているような」主体（同上:79）、「自己の一要素にすぎないセクシュアリティによってアイデンティティを規定する／させられる発想自体から距離をとろうとする姿勢」（同上:83）とされている。「強い主体」のように社会に問題提起をしていくというよりは、カテゴリー自体について問うたり、アイデンティティポリティクスのような運動からは距離を置く人と言うことができるだろう。

類似する分類は、ウェイン・ブレッカス（Brekhus 2003）によっても行われている。ブレッカスはゲイ男性のアイデンティティを、「クジャク（peacock）」、「カメレオン（chameleon）」、「ケンタウロス（centaur）」という比喩によって表現している。「クジャク」は、ゲイであることがいつ、いかなる場所でも自己のすべてを決定づけていると捉える人物であり、「ゲイ」であることは彼をそのまま意味する「名詞」である。「カメレオン」は、時と場合によってゲイの自分と異性愛者の自分を使い分ける人物である。単にクローゼットの人の「二重生活」を意味するだけではなく、「ゲイでもあり、異性愛者でもある」というような人のアイデンティティを含む。「ゲイ」であることは彼にとって行うこと（to do gay）であり、「動詞」である。「ケンタウロス」は、いつでもどこでもゲイではあるが、それは自分の一部でしかなく、それによって自分のすべてを捉えることはできないと考える人である。ゲイであることは彼を規定するさまざまな要素のひとつでしかなく、彼にとってそれは「形容詞」である。

ここではこれらを参考にしつつ「強いアイデンティティ」と「弱いアイデンティティ」という言葉を使ってみたい。「強いアイデンティティ」を持つ人物は、ゲイであるということを自己の重要な要素であると捉え、そうした立場から積極的に社会や同じ当事者に対して働きかけを行おうとする。「差別」への反動としての「プライド」というアイデンティティを形成する。自己変革／社会変革活動の中心にいたり、必ずしも中心にはいないがそれを積極的に支持するような人である。対して「弱いアイデンティティ」は、ゲイであることを自認しながらも、それを必ずしも自分の重要な要素とはしない人である。単にそれは自分の一部であり、それだけで自分のすべてを捉えようとはしない。強い「プライド」を持つわけでもない。自己変革・社会変革にもそれほど興味を持たなかったり、限定的な関わりかたしかしないような人である。

東京大学教授でありタレントのロバート・キャンベルが自身がゲイであることを語った時に言ったように、ゲイであることを「自分の芯」（キャンベル 2018）と捉える人もいれば、ゲイであるこ

とは自分の一部でしかないため、それをすべてと思わない人もいる。しかし、差別の経験、反動としてのプライドの形成が比較的弱い日本のゲイ男性のアイデンティティは「弱いアイデンティティ」としての傾向が強いと言えるのではないだろうか。もちろん「強いアイデンティティ」を持つ人も存在し、そうした人々がさまざまな活動の中心を担ってきたことは間違いない。しかし、ここまで論じてきたように、〈活動家〉が多くの一般のゲイ男性を動員する時に、それがゲイというマイノリティであることや「プライド」を押し出した動員ではなく、「楽しさ」や「愛」による動員となっていったことは特筆に当たるだろう。

「弱いアイデンティティ」を持つゲイ男性は、自身がゲイであることを認めることができなかったり、内なるホモフォビアに悩まされているという判断がされることが多いだろうが、そうとだけ解釈することは、人は内なるホモフォビアを克服することによってゲイという強いアイデンティティを個人の核に持つようになる、という認識に囚われてしまっている。日本のコンテクストにおけるゲイ男性のアイデンティティが、差別というものへの強い反動によっては必ずしも形成されてきていない状況では、逆にそれを個人の核とすることに違和感を持たざるを得ないゲイ男性がいることも、不自然なことではないだろう。1990 年代からゲイ男性は「ゲイ」という言葉によって肯定的なアイデンティティを形成しようと試み、ゲイとしてのアイデンティティポリティクスを行ってきたが、「強いアイデンティティ」を持つ人（持ち得る人）が大多数とは言えない状況で、そもそもゲイ男性という当事者集団を形成することが困難な側面もあったと言えるかもしれない。札幌ミーティングの分析を振り返ると、「ホモ」や「MSM」はアイデンティティを持たない同性愛者、ゲイであることを「ライフ」の問題としない同性愛者と捉えられてきたが、この中には「弱いアイデンティティ」を持つ人が含まれていた可能性がある。そうした人々に対してゲイであることを個人の核とするように働きかけるのなら、むしろそれは抑圧となってしまう。

では、ゲイであるというアイデンティティ、それをもとにしたアイデンティティの集団や活動は今後いかなる運命をたどるのであろうか。デニス・アルトマン（Altman 1971[1993]=2010）は 1970 年代に、同性愛者というアイデンティティは今後なくなるのではないかと予測していた。アルトマンは、ゲイリベレーションがもたらす理想の結果は、「まさに同性愛／異性愛の区別を無効にするもの」（同上：312）であり、結果としてゲイや同性愛者といったアイデンティティ／カテゴリーもなくなるのではないかと予測していた。規範と抑圧のある社会では常にマイノリティは生み出され、そのマイノリティはマイノリティとしてのアイデンティティを維持し続ける。しかし、ゲイリベレーションのみならずフェミニズムなどの運動によっても、これまで自然と見なされてきたものが社会・歴史的な構築物であることが徐々にわかってきている状況は、「自らの性的アイデンティティの多面的で多様な性質を受け入れることのできる『新しい人間』に根ざした」（同上：315）社会へとつながっていくと彼は予測する。異性愛者が同性愛を自分の中の可能性のひとつとして捉えることができるようになり、また反対に同性愛者も異性愛を自分の中のひとつの可能性として捉えることができるようになり、「多形倒錯的な性質の受容」（同上：319）が進む。そして、「わたしは、われわれが人間のセクシュアリティをいっそう受容する方向に、そしてそれにともない、正統でない性に付随するスティグマの減少とそれに呼応する明白な両性愛の増大に向けて進むと信じている」（同上：322）と、同性愛／異性愛の区別がなくなるという未来予想をしていた。しかしながらそこから 40 年後にそれを振り返ったアルトマンは、アイデンティティはなくならず、むしろ運動の基盤とな

り続けていることを嘆いている(Altman 2013)。

アイデンティティの消滅については、日本の文脈でも触れられている。『ゲイスタディーズ』を執筆したアカーの河口和也は、その後『クィアスタディーズ』でクィアの視点からアイデンティティの未来について、次のように述べる。

> 「クイア」概念は、規範に抵抗する者にとって、約束の地を与えてくれるものではない。むしろ、規範によって自己や集団の統一性が保証されているとするならば、規範に対し徹底的に抗うことは、自己や集団そのものの統一性を崩壊させるような「危険」に身をさらすことにもなる。切った刀で自分自身をも切りつけてしまう危険性をクイアの思想ははらんでいる。したがって、このような考え方は、マイノリティの自己正当化の思想ではないし、解放主義的な運動の文脈における〈解放〉という考え方がもつ、あらかじめ措定された最終目標に向かう政治的使命にもなじまない。1970 年代以降の解放主義的な運動に見られるように、同性愛者の〈解放〉という理論、すなわち「自由」や「平等」という目標や達成地点を見出そうとする方向性のなかで、同性愛者にとっての非在郷を探しつづけるという「危うさ」と、先に述べた自己（の統一性）崩壊の「危険性」、そのどちらかを選択するのかというとき、わたしはあえて後者を選択する判断もありだと考える。（河口 2003：iv）

この論は、クィアがアイデンティティの否定として受容された文脈におけるものであると言えるが、クィアのポリティクスによってアイデンティティがなくなってしまう「危険性」に触れられている。ここでそれが「危険」なのは、「ゲイ」というアイデンティティをもとに活動を行おうとしたり、それを自分の「芯」としてきた人にとっては、自分のアイデンティティの消滅、それは自分自身の消滅を意味するからだ。ゲイという「強いアイデンティティ」を持つ者にとって、それは常に不安と隣り合わせなのである。序論でも触れたように、クィアは必ずしもアイデンティティを否定するのではなく、アイデンティティなしでは生きることのできない事実を内在的に論じることを視点とする。よってクィアのポリティスクによっても、アイデンティティ自体が崩壊・消滅することはないと思われる。しかしそもそも「弱いアイデンティティ」を持つ人が多いと思われる状況では、それがさらに弱くなるという可能性はあるだろう。昨今は SOGI という言葉によっても性的アイデンティティをベースとはしない議論の動きが登場しつつある。また「愛」や「楽しさ」によって当事者のみならず非当事者も動員され、アライ（セクシュアルマイノリティ当事者ではないが、その運動を支援する人物）との連帯がすでに生まれている状況では、ゲイというアイデンティティはすでに政治的有効性を失いつつあるようにも思われる。このとき、ゲイ男性をはじめとするセクシュアルマイノリティの政治は、アイデンティティをどう扱うべきか、それがどうあるべきなのか、それがどの時に必要で有効なのか、ということを論じ続けていかなければならない。

おわりに

１．議論の要約

本研究では、ゲイ男性当事者によって行われてきた自己変革／社会変革活動を取り上げ、それぞれの活動がゲイ男性のいかなる表象を提示することによって社会的アイデンティティを形成してきたのか、そして自己変革／社会変革活動の間にいかなる繋がりがあったのかを論じた。

序論ではまず、1990 年代に生じた出来事をまとめ、ゲイ男性を取り巻く社会的状況がその時期から転換していったことを示した。ゲイ男性当事者による言論活動が始まったり、同性愛者への差別を争った裁判が起こされたり、コミュニティ活動が始まったりしたのが 1990 年代であった。同性愛についての学術的な研究が始まったのもこの時期であった。動くゲイとレズビアンの会（アカー）やゲイスタディーズの議論によって、ゲイ男性の政治的アイデンティティの形成が目指されてきた。しかし同期に登場したクィアスタディーズによって、ゲイスタディーズが目指してきた一枚岩的なアイデンティティが批判された。しかしクィアがアイデンティティの否定として受容されることによって、アイデンティティについて議論すること自体も避けられてきた可能性を指摘した。一枚岩的なアイデンティティは確かに特定の人を排除することがあるが、しかし実際に、ゲイとしてのアイデンティティを形成しようとしてきた活動があったこと自体を無視するべきではなく、実際に何が行われてきたのかをつぶさに分析することは重要であると論じた。本研究では「アイデンティティ」をゴフマン的な自己提示として捉え、オーディエンスによって戦略的に使い分けられるパフォーマンスとして捉えた。またゲイ男性による「活動」は社会運動論の議論を参考にし、「新しい社会運動」の特徴である「社会変革」と「自己変革」という二つの側面に注目することとした。この「アイデンティティ」と「活動」の視点を統合し、「主にゲイ男性をターゲットとする自己変革活動」と「主に異性愛社会をターゲットとする社会変革活動」の二つの活動に注目することとした。

第 1 章では、自己変革活動であり、ゲイ男性をターゲットとした活動としてゲイ雑誌『バディ』を取り上げ、『バディ』の編者が「ゲイ」であること、「ゲイ」として生きること（ゲイライフ）についていかなる言説を形成していたのかを分析した。キャッチフレーズと誌名が変更された時期を区切りとして創刊から休刊までを 4 つの期間に分け、各期間の『バディ』の特徴に注目することでその実践を分析した。1993 年の創刊当初は「ゲイ」や「ゲイライフ」という言葉を紹介し、それを「普通」であることを否定する姿勢として提示していた。1990 年代末には、「ハッピー」であるという「夢」と、差別を受け「悩む」という「現実」の間で、『バディ』は前者を強調し〈現実逃避〉を行うことで自己肯定感を形成しようとしていた。また、わかりやすい生き方のモデルとして、結婚を提示し始めた。2000 年代に入ってからは、それまで「夢」として語られていた「ハッピー」が「現実」となったとして、それを前提に誌面作りが行われるようになった。より具体的・現実的な

生き方のモデルを提示しようという試みが登場し始めるなか、結婚ではなく独身として生きていくという現実にゲイ男性は直面し始めた。特に三十代のゲイ男性が直面する現実の生き方である、独身として生きていくという将来の不安、そして三十代になると魅力と「モテ」を失うという不安を解消するために、『バディ』は経済的自立・安定を軸とする「男」としての生き方を提示し始めた。そして2010年代には、「ゲイ」であるという意識や「ゲイコミュニティ」が衰退しつつあることを認識した編者は、ゲイコミュニティを盛り上げ、「ゲイ」であることを再強調し、それらを維持することに取り組み始めた。

『バディ』の主張は、「ハッピー」であることと「悩む」ことをどのように差し出していくかという戦略によって形作られており、全時期で「ハッピー」というキーワードによって言説が形成されていた。1990年代は「不幸」への抵抗として「ハッピー」が唱えられ、2000年代からは「ハッピー」をすべてのゲイ男性がすでに享受しているものとして差し出すようになった。『バディ』による「ゲイライフ」の形成は確かに多くのゲイ男性に自己肯定感を形成することに貢献していたと思われるが、社会における被差別者やマイノリティとしての位置付けではなく、規範の中で折り合いをつけて生きていくこと、「男」であることを強調することによってマジョリティとしての立場を維持することに結果として繋がっていった。創刊初期に規範への抵抗として捉えられていた「ゲイ」というあり方は、「現実」からは距離を置き、規範への同化へと舵を切ることによって、安全なアイデンティティとしての意味合いを強くしていった。「ハッピー」のアイデンティティは、それを経由して社会変革活動へと至るための過程として捉えられている側面もあったが、その道筋自体が徐々に後景化していった。

第2章では、ゲイ男性によってゲイ男性向けに描かれたマンガ（ゲイ男性をターゲットとする活動／自己変革）と、一般向けに描かれたマンガ（非当事者をターゲットとする活動／社会変革）を取り上げ、どのような物語が描かれているのかを分析した。「現実的」なアドバイスをしようとしてきた『バディ』と違い、フィクションであるマンガが「現実」をどう扱い、それをどう乗り越えようとしていたのかを分析した。1990年代までのゲイ男性向けゲイマンガで描かれる恋愛の物語を見ると、女性と結婚をしなければいけないという、異性愛社会を原因とする葛藤が描かれ、異性愛社会との関わりの中でゲイ男性のアイデンティティは揺らいでいた。しかし2000年代以降に描かれる恋愛の物語では、悩みの原因がゲイ男性同士の浮気や不信感へと移行し、その悩みを解決するため、純愛が成立するための舞台が設定されていた。異性愛社会、家族、社会問題といったトピックは避けられたり、あるいは読み替えられることで非抑圧的なものにされていた。対して一般向けゲイマンガは、想定される読者としての異性愛者に、ゲイやLGBTについて教示する意図によって描かれていた。実際に生じた差別事件を取り上げたり、ゲイ男性が普段の生活で経験する差別や抑圧、ゲイであることを隠さなければいけない苦痛などが描かれていた。ゲイ男性向けゲイマンガでは異性愛社会を原因とする「悩み」ではなく、ゲイコミュニティにおける〈悩み〉が描かれるようになり、比較的「幸せ」な存在として描かれる一方で、一般向けゲイマンガでは差別の存在を積極的に描くことで、社会における被差別者として「悩む」ゲイ男性が描かれていた。

一般向けゲイマンガで意図されていたのは、ゲイ男性が置かれている差別の「現実」を描くことでそれを社会問題化することであった。一方、ゲイ男性向けゲイマンガで2000年代からゲイコミュニティを描くものが増えていった背景には、「悩むゲイ」とは異なるオルタナティブな物語を提示し

たいという欲求があることが示唆された。しかしこの欲求は、作者が新しい物語によってゲイであることの新しいアイデンティティを形成するという欲求であると同時に、「現実」から距離を置き、「ハッピー」な物語に自身を投影したいという読者の欲求を汲み取った戦略的な物語の提示でもあったと考えらえる。『バディ』でゲイライフの内実が規範への抵抗から同化へと変わり、「男」としての生き方によって「現実」との折り合いをつけるようになっていったように、ゲイ男性向けゲイマンガの表象も、マイノリティとしての社会的立ち位置を受け入れることへの忌避感と背中合わせであった。

第3章では、社会変革を基礎的な目標とし、非当事者をターゲットとする傾向の強い活動として、ゲイリブ団体である札幌ミーティングの活動を分析した。札幌ミーティングは札幌という地方においてセクシュアルマイノリティの生きやすい社会を作るために、広く社会に向けて発言したり抗議活動をしながら、当事者のコミュニティも形成しようとしていた。自己変革を軸としていた第2章までの事例と違い社会変革を主軸とする活動では、どのようなあり方が模索されていたのか、どのように「ハッピー」と「悩み」の表象が使い分けられてきたのかを論じた。札幌ミーティングのゲイ男性は「ゲイ」としてのアイデンティティの形成に努めており、性的・クローゼット的な「ホモ」から差異化された「ゲイ」に、社会や当事者の意識を変えるために積極的・能動的に活動を行うアクターという政治性を付与していた。「ゲイ」としてのアイデンティティを形成するコミュニティとしての札幌ミーティングでは、全人格的な人間関係の形成が目指され、性的な場であるゲイバーやハッテン場から区別された。「ゲイ」であるためにはただ「遊び」を求める人は歓迎されず、札幌ミーティングがただの交流の場となってしまうことが否定され、「遊び」と「真面目」な活動＝社会変革活動のバランスが模索されていた。ゲイ男性のメンバーはその政治性をもとに、社会に対する抗議活動を行ってきた。同性愛者への差別が比較的見えにくい〈差別なき社会〉において差別の存在を認識させ社会問題化し、「ホモ」という言葉で性的な存在として一方的にステレオタイプを形成されることを批判していた。この政治性は札幌ミーティングのブランチ制度によって後押しされていた。その中では、「遊び」と社会変革活動の関係性が問題となり、いかに「遊び」を経由して社会変革活動へと人々を動員するかが模索されていた。特筆する活動としてはゲイナイトを開催し、一般のゲイ男性を「享楽」イベントに誘い込みながらもそこで政治的メッセージを発することで、多くのゲイ男性をゲイリブに動員しようとしていた。

政治的なアイデンティティとしての「ゲイ」を形成しようとしていた札幌ミーティングのゲイ男性も、社会には抗議活動によって「悩むゲイ」を提示しつつも、ゲイ男性には「遊び」に結びつけられる「ハッピーなゲイ」を提示した。彼らが抗議活動で行っていたのは、同性愛者に対する差別を可視化・社会問題化することであり、同性愛者は差別に悩んでいることを伝えるということであった。こうした取り組みは札幌ミーティングの普段の活動でも行われ、社会とゲイ男性当事者の意識を変える「真面目」な活動が行われてきた。しかし、特に札幌ミーティングに所属しない多くのゲイ男性をゲイリブに動員するためは、「遊び」、「ハッピー」が有効であることを知っていた。ただのセックスや「遊び」と結びつけられるゲイバーやハッテン場を札幌ミーティングのメンバーは否定していたが、「遊び」を通して実際に多くのゲイ男性が自己肯定を形成してきたこと、「真面目」な話題に興味のないゲイ男性も「楽しさ」には興味を持つことを知っていた。また同時に、差別が見えにくく、その経験を共有することも難しい〈差別なき社会〉では、差別の経験ではない別の何

かの方がゲイ男性をまとめ上げることが容易であった。できる限り多くの人をゲイリブに動員したり触れさせたりするには、「現実」への取り組みだけではなく、ゲイナイトのような「ハッピー」の印象によって、表面的には「現実」を見せないことが重要であった。こうした活動によって、一般のゲイ男性を〈「遊び」から社会変革活動へ〉導こうとしていた。

第4章では、もっとも公的な場で行われ、非当事者へ働きかける社会変革活動としての側面を強く持つセクシュアルマイノリティのパレードを扱い、そこでどのような演出によってゲイ男性が表象されているのかを分析した。連帯におけるアイデンティティの問題、パレード全体の傾向、そしてその中でのゲイ男性の位置付けに焦点を当てた。パレードでは開催当初から、「パレードとは〈政治〉なのか〈祭〉なのか」という議論があり、それは前章で見た、「遊び」と社会変革活動の関係性を問うための議論であった。パレードは「民主的な場」としていかなる参加者もパフォーマンスも排除しない旨を掲げてきたため、「遊び」と社会変革活動を分離することが困難であった。このことが、〈「遊び」から社会変革活動へ〉という過程を困難とし、社会変革活動としてのパレードがただの「バカ騒ぎ」に引き戻される可能性が問われていた。その二つを首尾良く維持するために、「政治と祭りの融合」としてのパレードが模索されていった。連帯の問題に関しては、パレードを他のマイノリティも表象する活動として行うか、それともセクシュアルマイノリティを表象する活動として行うかの間でジレンマが生じていた。一方で、パレードが開始された1990年代は「ゲイ」というアイデンティティの形成が重視されていた時代であったにも関わらず、セクシュアルマイノリティ同士の連帯は前提とされていた。その理由は、民主的な場としてのパレードでは、連帯をしながらも「ゲイ」としての立ち位置からのパフォーマンスがむしろ可能であったからである。パレードの全体的なパフォーマンスは、1990年代は〈差別をやめよ〉という抗議／要求型の傾向が強かったが、2000年代には〈私たちはここにいます〉という、柔和な存在主張／可視化型へと変わっていった。その理由は、〈差別なき社会〉において異性愛者をも含む人々を動員するため、そして特に一般のゲイ男性をパレードに動員するためであった。DJフロート、バディフロート、ゲイバーフロートなどのゲイ企業を主体としたフロートによってパレードが彩られ、「ゲイナイト」のような「遊び」としての演出が行われてきた。その中ではゲイカルチャーの中心を担うドラァグクイーンとゴーゴーボーイが中心的なパフォーマーとして活躍し、〈わかりやすい差異〉としての「ゲイ」を傍観者へ提示していた。同性愛者への差別が見えにくい社会において、ゲイ男性自身も差別を受けた経験によってつながりを形成しにくい。そのため、パレードに参加する「楽しさ」や「幸せ」という感情、ゲイカルチャーという共通の趣味嗜好によって人々が動員されていった。

札幌のパレードは「政治と祭りの融合」として当事者へも非当事者へも働きかけを行うことが目指されてきたが、いかにして社会に働きかけるかという問いに加えて、いかにゲイ男性を動員するかという問いへの取り組みも重要になっていったことにより、「ハッピー」の印象がパレードを覆うようになっていった。〈差別なき社会〉において異性愛者にもゲイ男性にも働きかけを行うために、パレード行進でのパフォーマンスは存在主張／可視化型へと変化していき、社会変革のための具体的な主張は唱えられなくなっていった。パレード行進は「ハッピー」で脚色され、行政などへの直接的な働きかけという社会変革活動は裏舞台へと移動することで、パレードの印象は戦略的に使い分けがされるようになっていた。パレードという非日常の空間において行われるドラァグやゴーゴーのパフォーマンスは、可視化のための見世物としての〈わかりやすい〉差異として利用される側

面が強いため、異性愛者にとっても受け入れることが容易であった。

第5章では、全体の議論を発展させつつ統括する議論を行った。表象の使い分けという点に関して言うと、全体的な傾向として、社会に対しては「悩むゲイ」を提示することで差別の存在を社会問題化しようとする一方で、ゲイ男性に対しては「ハッピーなゲイ」を提示するという戦略があった。この「ハッピーなゲイ」は「悩むゲイ」をいっそう言説化しようとする1990年代の状況において反動／抵抗として登場したものであった。こうした中、ゲイコミュニティにおいて「ハッピーなゲイ」の表象が流布されることで、逆に「悩むゲイ」が周縁化される状況が作られていった。結果として「悩むゲイ」は声をあげにくくなり、また「ハッピー」によって動員されていったゲイ男性は「男」であるというジェンダーの問題や規範の存在を疑わなくなっていった可能性が示唆された。「ハッピーなゲイ」と「悩むゲイ」という二項対立自体が孕む問題として、〈悩みや差別のある状態からそれらのない幸福な状態へ〉という道筋が暗に想定されることによって、悩みの解決が規範化されたり、マイノリティ内のさまざまな差異が覆い隠されてしまう可能性が指摘された。

自己変革活動と社会変革活動の関係性に関しては、すべての章の事例において、自己変革が達成されることによって社会変革活動へとゲイ男性が移行していくことが想定され、さまざまな戦略によってその移行が目指されていた。しかし必ずしも彼らが社会変革へと移行するわけではないという困難があった。前提とされる自己変革の中でも特に、恋愛／性的出会いの充足がゲイ男性に特有の問題であったことに注目して考察をした。現在の多くのゲイ男性が抱える悩みが、異性愛社会での差別といった「悩み」ではなく、ゲイコミュニティ内での「モテ」や性愛に関する〈悩み〉であると考えられる状況では、社会変革活動が解決しようとする「悩み」と、多くのゲイ男性が抱える〈悩み〉にズレが生じている可能性があった。また「モテ」に付随する男性性の規範は〈私的〉なものと捉えられるため、社会変革活動はそれに対して限定的な異議申し立てしかできない。以上の問題を1990年代以降のゲイ男性の「結婚」と共に捉えると、ゲイ男性は「ゲイライフ」を獲得し、結婚から距離を置くことができるようになったことで、モラトリアムへと〈解放〉されていることがわかった。男性性というマジョリティ性を利用したり、規範から距離を置くことのできるモラトリアム期にいるゲイ男性は、必ずしも社会変革を求めはしないことが示唆された。だが、昨今は「愛」の言説によってゲイ男性も社会変革活動へと動員されつつあった。昨今新たな隆盛を見せる同性婚合法化運動とパレードが「愛」によって脚色され、〈差別なき社会〉において当事者も非当事者も動員されている。日本のゲイ男性は差別への反動としてのプライドを持ちにくく、またモラトリアムへと〈解放〉されてきたため、「弱いアイデンティティ」を持つ傾向がある。こうした状況では、1990年代から取り組まれてきた「ゲイ」というアイデンティティの形成とそれをもとにした活動は、すでに限界を見せ始めていたり、あるいはそもそも困難であった可能性が示唆された。

２．本研究の成果と今後の課題

本研究の成果のひとつは、1990年代以降のゲイ男性の活動／運動を記述したことである。さまざまな活動がそれぞれの表現方法においてゲイ男性当事者や社会を変革させるための活動を行ってきたことを掘り起こした。ゲイ雑誌、マンガ、ゲイリブ団体、パレードとそれぞれの事例は大きく異

なっているが、それらを共通の軸において捉え、いわゆる「社会運動」とみなされる活動以外も取り上げることで、さまざまな自己変革・社会変革の実践の形態があることを提示した。本研究ではゲイ男性の活動に焦点を当てたが、それぞれの活動は、今後レズビアンなどその他のセクシュアルマイノリティの活動を分析する際や、その他のマイノリティの活動を研究する際にも参考になると思われる。

二つ目の成果は、ゲイ男性の男性性を積極的に論じたことである。ゲイ男性がマイノリティであると同時に「男」としてはマジョリティの立場にいることが彼らの活動にどのような影響を及ぼしていたのかを論じた。今回は「男」というマジョリティ性に注目したが、そのほかにも健常者／障害者、日本人／外国人などのさまざまなマイノリティ／マジョリティの関係性が本来はある。こうしたインターセクショナルな視点を持ち込んだ分析をより促していくひとつのきっかけとして本研究を提示することができる。

三つ目の成果は、ゲイ男性による活動が特定のゲイ男性を周縁化してしまっていることを論じたことである。ゲイ男性が自己変革・社会変革を進める過程で、逆接的に「悩むゲイ」を周縁化していってしまったという状況を明らかにした。この分析結果は、ゲイ男性に限らずセクシュアルマイノリティの活動を行うにあたって、常に自己省察を行い、セクシュアルマイノリティ内の差異への注目を促すことになるだろう。

そして四点目の成果は、特に後半の章ではセクシュアルマイノリティの活動の中でのゲイ男性の位置付けに注目しつつ論を進めたことで、現在の「LGBT／セクシュアルマイノリティの活動」が登場する〈以前〉を明らかにしたことである。現在は「LGBT」という連帯の言葉によってその連帯が初めからあったかのような印象を受けるが、本論文ではゲイ男性が主な担い手であった時代を前景化させることで、連帯が叫ばれるようになる以前(あるいは連帯が叫ばれるようになったその当時)の活動を明らかにした。しかし、〈以前〉と括弧付によって表記しているのは、現在の「LGBT／セクシュアルマイノリティの活動」においても、ゲイ男性や、特定のセクシュアルマイノリティが他のセクシュアルマイノリティよりも表象されていたり、発言権を持っていたりする可能性を念頭に置いているからである。本研究によって、さまざまな差異を持った人々によって構成される活動内での権力関係に注意を促すことが可能となるだろう。

本研究には多くの限界と課題も残されている。まず一点目は、4 つの事例しか扱えておらず、その他の多くの活動を取りこぼしてしまっていることである。本研究では 1990 年代ごろに始まり現在まで継続的に行われてきた活動を取り上げたが、それ以外に多くの活動があることは紛れもない事実である。例えば、『バディ』以外のゲイ雑誌、ゲイの演劇、札幌ミーティング以外のゲイリブ団体・コミュニケーションサークル、ゲイ男性によって出版されてきたエッセイやライフヒストリーなどを綴った書籍、LGBT 映画祭、ほかにも筆者の知らない活動は数多くあるはずである。また第 3 章と第 4 章の分析が札幌に偏ってしまった。本研究が取りこぼした活動も取り上げ、重層性を持たせることによって、4 つの事例からは見えてこなかった何かを明らかにすること、そして本研究の偏りを補正することが可能となるだろう。

二点目の限界は、他のセクシュアルマイノリティとの比較が限定的にしかできなかったことである。ゲイ男性の活動の特有性を際立たせるには、その他のセクシュアルマイノリティがどのような活動を行ってきたのかを共に論じる必要がある。第 3 章でレズビアン・バイセクシュアル女性との

比較を行ったが、その他の章でも同じだけ同様の比較を行わなければ、どのような差異があるのかを捉えることは困難である。今後、他のセクシュアルマイノリティがいかなる活動を行ってきたのかを分析することで、本研究の分析結果は再考されるべきであろう。

三点目の限界は、文字資料を分析対象としたが、文字資料からは見えてこない活動や思想が取りこぼされていることである。本研究は歴史研究としての特徴もあるが、比較的最近の歴史であるため、1990 年代に活動をしていた人は存命であったり、今でも積極的に活動を行っている。彼ら／彼女らにインタビューをして当時の活動について詳細に語ってもらうこと、あるいは本研究の分析結果に対するフィードバックを彼ら／彼女らからもらうことで、新たな知見をもたらすことも可能となるはずである。

最後に、研究者や活動家・運動家を自認しない、いわゆる一般のゲイ男性にとって本研究はどのような役に立つのかを簡単に述べておきたい。筆者が考えるのは、彼らがゲイ男性による活動に何かしらのついていけなさであったり疑問を抱いているとするなら、それがどのような歴史によって生じてきたのかを知ることが、少しでもエンパワーメントになるかもしれないことである。例えば、実は「ゲイ」というアイデンティティが 1990 年代以降に作られた、非常に歴史の浅いものであるということ自体、ひとつのエンパワーメントになるかもしれない。各人が抱えるついていけなさを筆者が直接解消することはできないが、しかし本研究の内容が自身のアイデンティティや「悩み」について考えるきっかけに少しでもなれば幸いである。

参考文献

A

Abe, Hideko (2010) *Queer Japanese: Gender and Sexual Identities through Linguistic Practices*, Palgrave Macmillan.

赤杉康伸（2004）「ゲイ・コミュニティにおける東京一極集中主義、異物排除の構造性：生きることは『病』なのか？」『情況 第三期』5(1)：238-244.

赤杉康伸・土屋ゆき・筒井真樹子編（2004）『同性パートナー：同性婚・DP 法を知るために』社会批評社.

アカー・動くゲイとレズビアンの会（1991）「府中青年の家・同性愛者差別事件とは」『インパクション』71：52-61.

Altman, Dennis (1971[1993]) *Homosexual: Oppression and Liberation*, New York University Press.（＝2010. 岡島克樹・河口和也・風間孝訳『ゲイ・アイデンティティ：抑圧と解放』岩波書店）

Altman, Dennis (2013) *The End of the Homosexual?*, University of Queensland Press.

Anderson, Eric (2002) "Openly Gay Athletes: Contesting Hegemonic Masculinity in a Homophobic Environment", *Gender & Society*, 16(6): 860-877.

安藤礼二（2006）「鴻巣玄次の犯罪：『虚無への供物』に封印された最後の秘密」『彷書月刊』22(3)：14-17.

『アニース』, 1996 秋号, テラ出版.

『アニース』, 1997 春号, テラ出版.

『アニース』, 1997 夏号, テラ出版.

『アニース』, 1997 冬号, テラ出版.

青山薫（2016）「『愛こそすべて』：同性婚／パートナーシップ制度と『善き市民』の拡大」『ジェンダー史学』（ジェンダー史学会）12：19-36.

Armour, William, S. (2010) "Representations of the Masculine in Tagame Gengoroh's *Ero SM Manga*", *Asian Studies Review*, 34(4): 443-465.

『朝日新聞』(1993. 4. 9)「同性愛への偏見なくして　市民グループが報道の手引き（メディア）」(朝刊).

『朝日新聞』(2000. 7. 17)「『同性愛』者の人権揺れる　東京都の人権指針骨子から削除」(夕刊).

あさなさくま（2018）『あさな君はノンケじゃない！』KADOKAWA

B

塙幸枝（2018）『障害と笑い：障害者をめぐるコミュニケーションを拓く』新曜社.

『barairo. net』(1997)「第 3 回東京レズビアン・ゲイ・パレード資料集」(http://barairo. net/s

pecial/3rdParade/index.html，2019 年 8 月 15 日閲覧）

Battles, Kathleen & Hilton-Morrow, Wendy (2002) "Gay Characters in Conventional Spaces: Will and Grace and the Situation Comedy Genre", *Critical Studies in Media Communication*, 19(1): 87–105.

Baudinette, Thomas. (2016) "An evaluation of physicality in the bara manga of *Bádi* magazine", in Sarah Pasfield-Neofitou and Cathy Sell (eds.), *Manga Vision: Cultural and communicative perspectives* (pp. 107-124), Monash University Publishing.

Baudinette, Thomas. (2017) "Japanese gay men's attitudes toward "gay manga" and the problem of genre", *East Asian Journal of Popular Culture*, 3 (1): 59-72.

『弁護士ドットコム NEWS』(2018. 7. 17)「ゲイ暴露『一橋大アウティング裁判』は終盤戦：死亡学生、なぜ孤立化…大学の対応争点に」(https://www.bengo4.com/other/n_8213/，2019 年 9 月 7 日閲覧）.

『弁護士ドットコム NEWS』(2019. 2. 27)「『アウティングを肯定されたような気持ち』：一橋大生転落死、大学を訴えた遺族敗訴」(https://www.bengo4.com/c_23/n_9304/，2019 年 9 月 7 日閲覧）.

ボネ鏑木（1987a)『風のアルバム（１)』海燕書房.

ボネ鏑木（1987b)『風のアルバム（２)』海燕書房.

Brekhus, Wayne (2003) *Peacocks, Chameleons, Centaurs: Gay Suburbia and the Grammar of Social Identity*, University of Chicago Press.

Britt, Lory & Heise, David (2000) "From Shame to Pride in Identity Politics", in Sheldon Stryker, Timothy Joseph Owens, Robert W. White (eds), *Self, Identity, and Social Movements* (pp. 252-268), University of Minnesota Press.

Browne, Kath (2007) "A party with politics?: (Re)making LGBTQ Pride Spaces in Dublin and Brighton", *Social & Cultural Geography*, 8(1): 63-87.

Bruce, Katherine, McFarland (2016) *Pride Parades: How a Parade Changed the World*, NYU Press.

Butler, Judith (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. (=1999. 竹村和子訳『ジェンダートラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)

C

キャンベル，ロバート（2018)「『ここにいるよ』と言えない社会」『ロバート キャンベル公式サイト』(https://robertcampbell.jp/blog/2018/08/「ここにいるよ」と言えない社会/，2019 年 10 月 7 日閲覧）.

Clair, Judith. A. & Beatty, Joy. E & Maclean, Tammy. L (2005) "Out of Sight but Not out of Mind: Managing Invisible Social Identities in the Workplace", *The Academy of Management Review*, 30(1): 78-95.

Crisp, Thomas (2008) "The Trouble with Rainbow Boys", *Children's Literature in Education*, 39(4): 237-261.

Crisp, Thomas (2009) "From Romance to Magical Realism: Limits and Possibilities in Gay

Adolescent Fiction", *Children's Literature in Education*, 40: 333-348.
Culler, Jonathan (1997) *Literary Theory: A Very Short Introduction*, Oxford University Press. (=2003. 荒木映子・富山太佳夫訳『文学理論』岩波書店)

D

de Lauretis, Teresa (1991) "Queer Theory: Lesbian and Gay Sexualities; An Introduction", *Differences*, 3(2): iii-xi. (=1996. 大脇美智子訳「クィア・セオリー：レズビアン／ゲイ・セクシュアリティ」『ユリイカ』28(13):66-77)
デ・ラウレティス、テレサ (1998)「クイアの起源：レズビアンとゲイの差異を語ること」風間孝・ヴィンセント, キース・河口和也編『実践するセクシュアリティ』動くゲイとレズビアンの会：66-78.
D'Emilio, John (1983) "The Capitalism and Gay Identity", in Ann Snitow et al. (eds.), *Powers of Desire: The Politics of Sexuality*, Monthly Review Press. (=1997. 風間孝訳「資本主義とゲイ・アイデンティティ」『現代思想』25(6):145-158)
堂本正樹・本田正一 (2006)「[インタビュー]三人の間に：堂本正樹さんに聞く」『彷書月刊』22(3):2-7.
Duggan, Lisa (2003) *The Twilight of Equality? Neoliberalism, Cultural Politics, and the Attack on Democracy*, Beacon Press.

E

江原由美子 (1985)『女性解放という思想』勁草書房.
Erikson, Erik. H (1963) *Childhood and Society (Second Edition)*, W. W. Norton & Company. (=1977. 仁科弥生訳『幼児期と社会１』みすず書房)
Erikson, Erik. H (1968) *Identity: Youth and Crisis*, W. W Norton & Company. (=2017. 中島由恵訳『アイデンティティ：青年と危機』新曜社)
Evans, Richard. I (1967) *Dialogue With Erik Erikson*, Harper & Row. (=1981. 岡堂哲雄・中園正身訳『エリクソンは語る：アイデンティティの心理学』新曜社)

F

Fisher, Jeremy (2014) "Sex, Sleaze and Righteous Anger: The Rise and Fall of Gay Magazines and Newspapers in Australia", *TEXT*, 25: 1-12.
藤本由香里 (1998)『私の居場所はどこにあるの？：少女マンガが映す心のかたち』学陽書房.
藤高和輝 (2015)「アイデンティティを引き受ける：バトラーとクィア／アイデンティティ・ポリティックス」『臨床哲学』(大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室) 16:23-41.
古川誠 (1994)「セクシュアリティの変容：近代日本の同性愛をめぐる３つのコード」『日米女性ジャーナル』(日米女性情報センター) 17:29-55.
伏見憲明 (1991)『プライベート・ゲイ・ライフ：ポスト恋愛論』学陽書房.

伏見憲明（2003）『変態（クィア）入門』筑摩書房.
伏見憲明（2004）『ゲイという［経験］：増補版』ポット出版.
伏見憲明（2006）「『アドニス』探求」『彷書月刊』22(3)：10-13.
伏見憲明編（1999）『QUEER JAPAN Vol.1：メイル・ボディ』勁草書房.
伏見憲明・及川健二・野口勝三・松沢呉一・黒川宣之・山中登志子・春日亮二・志田陽子・下村健一・taka・田亀源五郎・平野広朗・浩史・本田勝一・宮崎留美子（2002）『「オカマ」は差別か：『週刊金曜日』の「差別表現」事件』ポット出版.

G

『ゲイの学園天国』，1994，宝島社.
『ゲイの贈り物』，1992，JICC 出版局.
『ゲイのおもちゃ箱』，1993，JICC 出版局.
Giddens, Anthony. (1992) *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press.（=1995. 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房）
Goffman, Erving (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company Inc.（=1974. 石黒毅訳『行為と演技：日常生活における自己提示』誠信書房）
Goffman, Erving (1963) *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall.（=2001. 石黒毅訳『スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房）
後藤純一（n.d.）「杉田議員問題（5）：TOKYO LOVE PARADE」『g-ladd xx』（http://gladxx.jp/column/goto/5522.html?index_start=0，2019 年 9 月 7 日閲覧）.

H

『北海道新聞』（1994.11.21）「理解されてる？同性愛　『偏見なくせ』動き盛ん」（夕刊）.
『北海道新聞』（1995.3.29）「戦後 50 年あした模様　選ぶ人たち　動きだす少数者　少しだけど全身の兆し」（朝刊）.
『北海道新聞』（1995.6.20）「同性愛者団体　STV に抗議　ラジオで差別的内容」（朝刊）.
『北海道新聞』（1996.2.24）「ひと '96　25 日に演劇公演を企画している ILGA 日本・札幌ミーティングの高松尚志さん」（朝刊）.
『北海道新聞』（1998.4.24）「市民運動見つめ 23 年　札幌の『ミニコミ喫茶ひらひら』が閉店　利用者減少『役割終えた』　26 日に記念同窓会」（朝刊）.
堀あきこ(2010)「ヤオイはゲイ差別か？：マンガ表現と他者化」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』明石書店：21-54.
堀江有里（2010）「同性間の〈婚姻〉に関する批判的考察：日本の社会制度の文脈から」『社会システム研究』（立命館大学社会システム研究所）21:37-57.
堀江有里（2015）『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版.
堀川修平（2015）「日本のセクシュアル・マイノリティ運動の変遷からみる運動の今日的課題：デモ

としての『パレード』から祭りとしての『パレード』へ」『女性学』（日本女性学会）23:64-85.
堀川修平（2016）「日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉における『学習会』活動の役割とその限界：南定四郎による〈運動〉の初期の理論に着目して」『ジェンダー史学』（ジェンダー史学会）12:51-67.
堀川修平（2018）「セクシュアル・マイノリティ運動論における《デモ/祭》枠組みの再考：砂川秀樹による『00 年パレード』の理論に着目して」『部落解放研究：広島部落解放研究所紀要』（広島部落解放研究所）24:111-131.

I

市川和秀（2005）『ナツノカッパ』古川書房.
市川和秀（2007）『男気』古川書房.
池田久美子（1999）『先生のレズビアン宣言：つながるためのカムアウト』かもがわ出版.
伊野真一（1997）「Queer Studies の射程」クィア・スタディーズ編集委員会編『クィア・スタディーズ '97』七つ森書館：106-119.
伊野真一（2005）「脱アイデンティティの政治」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房：43-76.
石田仁（2004）「ジェンダーとセクシュアリティの真空圏：新宿二丁目ホモバーにおける商的相互行為実践」『中央大学文学部紀要』（中央大学）203:81-98.
石田仁（2006）「戦後日本における『男が好きな男』の言説史:雑誌記事にみる表象とそれを支える解釈枠組みの変容」（中央大学大学院文学研究科博士論文）.
石田仁（2007a）「ゲイに共感する女性たち」『ユリイカ』39(7):47-55.
石田仁（2007b）「『ほっといてください』という表明をめぐって：やおい／BL の自律性と表象の横奪」『ユリイカ』39(16):114-123.
石田仁（2012）「数字で見る JUNE とさぶ」『ユリイカ』44(15):159-171.
石田仁（2014）「戦後日本における『ホモ人口』の成立と『ホモ』の脅威化」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会：173-195.
石田仁（2015）「いわゆる淫乱旅館について」井上章一・三橋順子編『性欲の研究：東京のエロ地理編』平凡社：122-141.
石田仁（2018）「ゲイ雑誌、その成り立ちと国立国会図書館の所蔵状況」『現代の図書館』56(4):196-204.
石田仁（2019）『はじめて学ぶ LGBT：基礎からトレンドまで』ナツメ社.
石川准（1988）「社会運動の戦略的ディレンマ：制度変革と自己変革の狭間で」『社会学評論』（日本社会学会）39(2)：153-67.
石川准（1992）『アイデンティティ・ゲーム：存在証明の社会学』新評論.
伊藤文学（2001）『編集長「秘話」』文春ネスコ.
伊藤文学（2004）「特別掲載①　月刊『薔薇族』廃刊のいきさつ」一文字カルト編『gay@ Vol.1』独也工房：24-25.

伊藤文学(2006)「『アドニス』は『薔薇族』の原点だ！:同性愛文学に思うこと」『彷書月刊』22(3):18-19.
伊藤悟（1993）『男ふたり暮らし：ぼくのゲイ・プライド宣言』太郎次郎社.
伊藤悟（1998）『同性愛者として生きる：すこたん企画奮闘記』明石書房.
和泉広恵（2001）「虐待の物語と体験の狭間：ナラティヴ：セラピーにおける物語化の再検討」『家族社会学研究』（日本家族社会学会）12(2):211-222.
出雲まろう（1993）『まな板の上の恋』宝島社.
出雲まろう・原美奈子・つづらよしこ・落谷くみ子（1997）「日本のレズビアン・ムーヴメント」『現代思想』25(6):58-83.

J

Jagose, Annamarie (1996) *Queer Theory: An Introduction*, New York University Press.
児雷也（2004）『五人部屋［新装版］』古川書房.
児雷也（2007）『仰ゲバ尊シ』古川書房.
Johnston, Lynda (2002) "Borderline Bodies", in Liz Bondi et al. (eds.), *Subjectivities, Knowledges, and Feminist Geographies* (pp. 75-89), Rowman & Littlefield Publisher.

K

掛札悠子（1992）『「レズビアン」である、ということ』河出書房新社.
上条毬男（1997）『Tango』Gプロジェクト.
金田智之（2003）「『カミングアウト』の選択性をめぐる問題について」『社会学論考』（東京都立大学社会学研究会）24:61-81.
菅野優香（2015）「クィア・LGBT 映画祭試論：映画文化とクィアの系譜」『現代思想』43(16):202-209.
Kates, Steven. M & Belk, Russell. W (2001) "The Meanings of Lesbian and Gay Pride Day: Resistance through Consumption and Resistance to Consumption", *Journal of Contemporary Ethnography*, 30(4): 392-429.
河口和也（2003）『クィア・スタディーズ』岩波書店.
河口和也（2016）「わたしたちはここにいる：地方中核都市に生活する性的マイノリティの『語り』から」『理論と動態』（社会理論・動態研究所）9:73-91.
河中優郁子(2003)「レズビアン三都物語：札幌」『にじ』2(6):36-38.
風間孝（1997a）「エイズのゲイ化と同性愛者たちの政治学」『現代思想』25(6):405-421.
風間孝（1997b）「クイアはどこからきたか：クイア・セオリーにおける理論と実践」風間孝・河口和也・ヴィンセント，キース編『別冊 id 研』動くゲイとレズビアンの会：10-35.
風間孝（1998a）「表象／アイデンティティ／抵抗：疫学研究におけるエイズとゲイ男性」風間孝・ヴィンセント，キース・河口和也編『実践するセクシュアリティ：同性愛／異性愛の政治学』動くゲイとレズビアンの会：237-258.

風間孝（1999）「公的領域と私的領域という陥穽：府中青年の家裁判の分析」『解放社会学研究』（日本解放社会学会）13:3-26.
風間孝（2001）「同性愛／異性愛、その関係性の再構築：府中青年の家裁判を事例に」慶應義塾大学経済学部編『家族へのまなざし〈市民的共生の経済学３〉』弘文堂：123-145.
風間孝（2003）「同性婚のポリティクス」『家族社会学研究』（日本家族社会学会）14(2):32-42.
風間孝・河口和也（2010）『同性愛と異性愛』岩波新書.
風間孝・河口和也・横田祐司（1997）「レズビアン／ゲイ・スタディーズ・キー概念　座談会」風間孝・河口和也・ヴィンセント，キース編『別冊 id 研』動くゲイとレズビアンの会：66-93.
『KICK OUT』，Vol.12，1994.
金城克哉（2012）「同一テーマに関する二つのコミック作品群の比較計量分析：BL コミックとゲイコミック」『言語文化研究紀要』（琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系）21:1-20.
金城克哉（2013）「述語との共起関係による男性器表現の特徴抽出：2006 年度『G-men』誌の『野郎小説』データから」『言語文化研究紀要』（琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系）22:21-40.
『Knock on the Rainbow』（2018.11.10），STV ラジオ.
小日向（2008a）『アグリっ娘』テラ出版.
小日向（2008b）『Relation』テラ出版.
小宮明彦（2000）「同性愛の子どもの実態に関する覚え書き：ゲイ雑誌のテクスト分析を中心に」『学術研究：教育・社会教育・体育学編』（早稲田大学教育学部）49:87-104.
近藤祐一（1987）「男性同性愛者文通交際欄における疑似親族名称用法：役割行動の日米比較」『アカデミア：文学・語学編』（南山大学）42:65-93.
晃次郎（2015）『激情男児！！』古川書房.
小谷野敦（1997）『男であることの困難：恋愛、日本、ジェンダー』新曜社.
小谷野敦（2017）『定本　〈男の恋〉の文学史：『万葉集』から田山花袋、近松秋江まで』勉誠出版.
クィア・スタディーズ編集委員会編（1997）『クィア・スタディーズ '97』七つ森書館.
くじら（2014）『8 月の居候』古川書房.
熊田プウ助（1996）『愛の世紀末劇場』海燕書房.
熊田プウ助（2007）『熊田プウ助大全集』古川書房.
熊田プウ助（2009）『熊田プウ助大全集Ⅱ：極楽コロシアム！！』古川書房.
熊田プウ助（2010）『熊田プウ助のつれづれ駄ホモ暮らし』ブックマン社.
熊田プウ助（2013）『続・極楽コロシアム！！：熊田プウ助大全集Ⅲ』古川書房.
蔵田伸雄・野宮大志郎・尾崎一郎・鈴木賢・瀬名波栄潤（2017）『シティズンシップと市民運動：LGBT をとりまく日本的事情』北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター.
草柳千早（2004）『「曖昧な生きづらさ」と社会：クレイム申し立ての社会学』世界思想社.

L

『LABRYS』，Vol.10，1995.
Lasser, Jon & Tharinger, Deborah (2003) “Visibility Management in School and Beyond: A

Qualitative Study of Gay, Lesbian, Bisexual Youth", *Journal of Adolescence*, 26: 233-244.
Lunsing, Wim (2006) "*Yaoi Ronsō*: Discussing Depictions of Male Homosexuality in Japanese Girls' Comics, Gay Comics and Gay Pornography", *Intersections: Gender, History and Culture in the Asian Context*, 12 (http://intersections.anu.edu.au/issue12/lunsing.html, Retrieved April 15, 2019).

M

Mackintosh, Jonathan. D (2010) *Homosexuality and Manliness in Postwar Japan*, Routledgede.
前川直哉 (2017)『〈男性同性愛者〉の社会史：アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』作品社.
Markwell, Kevin & Waitt, Gordon (2009) "Festivals, Space and Sexuality: Gay Pride in Australia", *Tourism Geographies*, 11(2): 143-168.
マサキチトセ (2015)「排除と忘却に支えられたグロテスクな世間体政治としての米国主流『LGBT』運動と同性婚推進運動の欺瞞」『現代思想』43(16):75-85.
松崎司 (2009)『山椒は小粒で』古川書房.
Messner, Michael. A (2000) *Politics of Masculinities: Men in Movements*, AltaMira Press.
ミナモトカズキ (2016)『少女漫画家のミナモトさんがカミングアウトします。』宙出版.
ミナモトカズキ (2017)『メルヘン課長とノンケ後輩くん（1）』徳間書店.
ミナモトカズキ (2018a)『メルヘン課長とノンケ後輩くん（2）』徳間書店.
ミナモトカズキ (2018b)『メルヘン課長とノンケ後輩くん（3）』徳間書店.
ミナモトカズキ (2019)『メルヘン課長とノンケ後輩くん（4）』徳間書店.
簗瀬竜太・伊藤悟 (1994)『男と男の恋愛ノート：愛と暮らしと仕事のパートナーシップ』太郎次郎社.
三橋順子 (2016)「戦後・男性同性愛頒布誌の整理［性社会史研究(性風俗雑誌)］」(http://junko-mitsuhashi.blog.so-net.ne.jp/archive/c2303442583-1, 2019 年 5 月 13 日閲覧)
溝口彰子 (2015)『BL 進化論：ボーイズラブが社会を動かす』太田出版.
森山至貴 (2012)『「ゲイコミュニティ」の社会学』勁草書房.
村上博美 (2006)「『アドニス』主要記事解題」『彷書月刊』22(3):28-33.

N

永易至文 (2009)『同性パートナー生活読本：同居・税金・保険から介護・死別・相続まで』緑風出版.
中村桃子 (2007)『〈性〉と日本語：ことばがつくる男と女』日本放送出版協会.
中西正司・上野千鶴子 (2003)『当事者主権』岩波新書.
仲野由佳理 (2016)「少年院における演劇を通した物語化創作オペレッタにみる〈教育的行為としての物語化〉の技法」『教育社会学研究』(日本教育社会学会) 99(0):27-46.
『にじ』編集部 (2003)「札幌レインボーマーチ」『にじ』1(3):17-25.

『虹色ダイバーシティ』(2019.10.8)「地方自治体の同性パートナー認知件数(2019 年 10 月 8 日時点)」(http://nijiirodiversity.jp/partner20191008/, 2019 年 10 月 10 日閲覧).
野原くろ (2005a)『ミルク (1)』古川書房.
野原くろ (2005b)『ミルク (2)』古川書房.
野原くろ (2005c)『ミルク (3)』古川書房.
野原くろ (2013)『タイムカプセル』くろとあお.
野原くろ (2014a)『下宿のお兄さん (1)』くろとあお.
野原くろ (2014b)『下宿のお兄さん (2)』くろとあお.
野原くろ (2015a)『下宿のお兄さん (3)』くろとあお.
野原くろ (2015b)『下宿のお兄さん (4)』くろとあお.
野原くろ (2016)『下宿のお兄さん (5)』くろとあお.
野原くろ (2017)『下宿のお兄さん (6)』くろとあお.

O

小倉東・佐藤雅樹 (1999)「『ファビュラス』編集長　マーガレット小倉東氏　ロング・インタビュー」『KICK OUT』22:2-15.
小倉東・志木令子・関根信一・溝口彰子 (1999)「私たちの 90 年代:『ヘンタイ』は時代を創る」伏見憲明編『クィア・ジャパン Vol.1:メイル・ボディ』勁草書房:70-100.
岡田桂 (2004)「喚起的なキス:サッカーにおける男らしさとホモソーシャリティー」『スポーツ社会学研究』(日本スポーツ社会学会) 12:37-48.
奥野裴 (2019)「一橋大学アウティング裁判が社会に投げかけた問題」『創』49(5):96-101.
おくら・橋井こま (2017)『そらいろフラッター (1)』スクウェア・エニックス.
おくら・橋井こま (2018a)『そらいろフラッター (2)』スクウェア・エニックス.
おくら・橋井こま (2018b)『そらいろフラッター (3)』スクウェア・エニックス.
『女を愛する女たちの物語』, 1987, JICC 出版局.
大久保ニュー (2008)『坊や良い子だキスさせて』テラ出版.
大島岳 (2016)「『性的冒険主義』を生きる:若年ゲイ男性のライフストーリーにみる男らしさ規範と性」『新社会学研究』1:93-118.
大坪真利子 (2013)「言わなかったことをめぐって:カミングアウト〈以前〉についての語り」『ソシオロジカル・ペーパーズ』(早稲田大学大学院社会学院生研究会) 22:75-82.
おタケ (2015)『おタケ短編漫画集:ガチラブバトル!!』古川書房.

P

Pearl, Monica. B. (2013) *AIDS Literature and Gay Identity: The Literature of Loss*, Routledge.
Phelan, Shane (1993) "(Be)coming Out: Lesbian Identity and Politics", *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 18(4): 765-790. (=1995. 上野直子訳「(ビ) カミング・アウト:レズビアンであることとその戦略」富山太佳夫編『現代批評のプラクティス 3 :フェミニズム』研究

社：209-261）

Plummer, Ken. (1995) *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, Routledge. (=1998. 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代：語りのポリティクス』新曜社)

プロジェクトG（1985）『オトコノコのためのボーイフレンド：ゲイ・ハンドブック』少年社.

R

『立憲民主党』(2018.12.6)「野党５党１会派が LGBT 差別解消法案を衆院に提出」(https://cdp-japan.jp/news/20181205_1153, 2019 年 9 月 7 日閲覧）.

竜超（n.d.）「竜超版『薔薇族』について」(http://薔薇族.jp/?page_id=13, 2017 年 7 月 27 日閲覧）.

S

斎藤綾子(2004)「ホモソーシャル再考」四方田犬彦・斎藤綾子編『男たちの絆、アジア映画：ホモソーシャルな欲望』平凡社：279-309.

齊藤笑美子（2011）「性的指向に基づく公共施設の宿泊利用拒否：府中青年の家事件」谷口洋幸・齊藤笑美子・大島梨沙編『性的マイノリティ判例解説』信山社：101-105.

齋藤理恵（2010）「ダムタイプ《S/N》：メディア化された身体・言語・映像をめぐって」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』（早稲田大学大学院文学研究科）56:145-153.

サムソン高橋・熊田プウ助（2011）『世界一周ホモのたび』ぶんか社.

三部倫子（2014）『カムアウトする親子：同性愛と家族の社会学』御茶の水書房.

笹野みちる（1995）『Coming OUT!』幻冬社.

里見満（2002a）『レインボウ・ライフ（１）』集英社.

里見満（2002b）『レインボウ・ライフ（２）』集英社.

里見満（n.d.）「レインボウ・ライフ（１）」『amazon.co.jp』(https://www.amazon.co.jp/gp/product/4087826953/ref=ppx_od_dt_b_asin_title_s00?ie=UTF8&psc=1, 2019 年 6 月 25 日閲覧).

佐藤雅樹（1996）「少女マンガとホモフォビア」クィア・スタディーズ編集委員会編『クィア・スタディーズ '96』七つ森書館:161-196.

Sedgwick, Eve. Kosofsky (1985) *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Colombia University Press. (=2001. 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)

関口久志（2007a）「探訪“街角の保健室”（第 7 回） HSA 札幌ミーティング 性的マイノリティの相談活動(1)」『季刊セクシュアリティ』29:134-137.

関口久志（2007b）「探訪“街角の保健室”（第 8 回） HSA 札幌ミーティング 性的マイノリティの相談活動(2)」『季刊セクシュアリティ』31:146-149.

関根信一・春日亮二・竹村勝行・桑木昭嗣・斎藤靖紀・鈴木賢（2003）「徹底討論！どうする、日本のパレード」『にじ』2(7)：42-49.

戦艦コモモ（2015）『ひこうき雲』古川書房.
戦艦コモモ（2010）『太陽が呼んでいる』古川書房.
七面堂（2006）「『アドニス』周辺の雑誌たち」『彷書月刊』22(3):24-27.
志田哲之（2009）「同性婚批判」関修・志田哲之編『挑発するセクシュアリティ：法・社会・思想へのアプローチ』新泉社:133-167.
鹿野由行（2011）「『運命の物語』と計算された親密さ：ゲイの出会いツールの変化と合コンの流行」『日本学報』（大阪大学大学院文学研究科日本学研究室）30:47-66.
清水晶子（2006）「キリンのサバイバルのために：ジュディス・バトラーとアイデンティティ・ポリティクス再考」『現代思想』34(12):171-187.
清水晶子（2013）「『ちゃんと正しい方向にむかってる』：クィア・ポリティクスの現在」三浦玲一・早坂静編『ジェンダーと「自由」：理論、リベラリズム、クィア』彩流社：313-331.
清水晶子（2019）「つながりへの希求は何を求めてきたのか」北海道大学大学院文学研究科 応用倫理・応用哲学研究教育センター編「『「LGBT」はどうつながってきたのか？』記録」北海道大学大学院文学研究科 応用倫理・応用哲学研究教育センター：12-22.
清水晶子・マリィ，クレア（2019）「ジュディス・バトラーを〈翻訳〉する」『現代思想』47(3)：73-86.
『しんぶん赤旗』（2018.7.29）「LGBT『生産性ない』　杉田議員やめろ：自民に抗議　広がる怒り」（https://www.jcp.or.jp/akahata/aik18/2018-07-29/2018072914_01_1.html，2019年9月7日閲覧）.
新ヶ江章友（2013）『日本の「ゲイ」とエイズ：コミュニティ・国家・アイデンティティ』青弓社.
Specter, Malcolm & Kitsuse, John. I（1977）*Constructing Social Problems*, Cummings Publishing Company.（=1990. 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築：ラベリング理論を超えて』マルジュ社）
須賀原みち（2017）「『TVで見るようなゲイは出てこない』　漫画『そらいろフラッター』インタビュー」『KAI-YOU』（https://kai-you.net/article/47975，2019年10月14日閲覧）
杉田敦（2015）『境界線の政治学［増補版］』岩波書店.
杉浦郁子（2008）「日本におけるレズビアン・フェミニズムの活動：1970年代後半の黎明期における」『ジェンダー研究』（東海ジェンダー研究所）11:143-170.
杉浦郁子（2010）「レズビアンの欲望／主体／排除を不可視にする社会について：現代日本におけるレズビアン差別の特徴と現状」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』明石出版：55-91.
杉浦郁子（2015）「『女性同性愛』言説をめぐる 歴史的研究の展開と課題」『和光大学現代人間学部紀要』（和光大学現代人間学部）8:7-26.
杉浦郁子（2017）「日本におけるレズビアン・ミニコミ誌の言説分析：1970年代から1980年代前半まで」『和光大学現代人間学部紀要』（和光大学現代人間学部）10:159-178.
杉浦郁子・野宮亜紀・大江千束編（2007）『パートナーシップ・生活と制度：結婚、事実婚、同性婚』緑風出版.
砂川秀樹（1999）「日本のゲイ／レズビアン・スタディーズ」伏見憲明編『QUEER JAPAN Vol.1　メ

イル・ボディ』勁草書房：135-153.
砂川秀樹（2000）「『変動する主体』の想像／創造：『レズビアン&ゲイ・パレード』とバトラーの再考から」『現代思想』28(14):240-246.
砂川秀樹（2003a）「『ゲイ・コミュニティ』の形成（1）：コミュニティ意識の高揚」『季刊セクシュアリティ』9:138-141.
砂川秀樹（2003b）「日本のゲイの歴史」伏見憲明編『同性愛入門［ゲイ編］』ポット出版：44-47.
砂川秀樹（2015）『新宿二丁目の文化人類学：ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』太郎次郎社エディタス.
砂川秀樹・野口勝三・伏見憲明（2001）「クィアが問題か、クレゾールが問題か？！：アイデンティティをめぐるゲイ・リベレーションの争点および展望」伏見憲明編『QUEER JAPAN Vol.4　友達いますか？』勁草書房：237-255.
『すすきのTOWN情報』（1996.8）「第1回レズ・ビ・ゲイプライドマーチin札幌」56-57.
鈴木ケン（2003）「非東京地域でのリベレーション」『にじ』1(4):40-41.
鈴木賢（2016）「地方都市にも性的マイノリティが生きる空間を作る」栗原彬編『ひとびとの精神史第9巻』岩波書店：333-345.
衆道寺独路（2004）「『薔薇族』の〈功〉と〈罪〉を検証する」一文字カルト編『gay@ Vol.1』独也工房：6-9.

T

宝島ゲイ・スタッフ編（1994）『よくわかるゲイ・ライフハンドブック』宝島社.
田亀源五郎（2004a）『PRIDE（上）』古川書房.
田亀源五郎（2004b）『PRIDE（中）』古川書房.
田亀源五郎（2004c）『PRIDE（下）』古川書房.
田亀源五郎（2012a）『銀の華［復刻版］（上）』ポット出版.
田亀源五郎（2012b）『銀の華［復刻版］（中）』ポット出版.
田亀源五郎（2012c）『銀の華［復刻版］（下）』ポット出版.
田亀源五郎（2003）『日本のゲイ・エロティック・アート Vol.1：ゲイ雑誌創生期の作家たち』ポット出版.
田亀源五郎（2015）『弟の夫（1）』双葉社.
田亀源五郎（2016a）『弟の夫（2）』双葉社.
田亀源五郎（2016b）『弟の夫（3）』双葉社.
田亀源五郎（2017）『弟の夫（4）』双葉社.
田亀源五郎（2018）『日本のゲイ・エロティック・アート Vol.3：ゲイ雑誌の発展と多様化する作家たち』ポット出版.
田亀源五郎（2019a）『僕らの色彩（1）』双葉社.
田亀源五郎（2019b）『僕らの色彩（2）』双葉社.
高原英理（2006）「遠い記憶として」『彷書月刊』22(3):20-23.
竹田恵子（2010）「ダムタイプによるパフォーマンス《S/N》(1994)の物語構造分析」『演劇映像学：

演劇博物館グローバルCOE紀要』(早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム) 1:209-227.
竹田恵子 (2012)「《S/N》(1994)における『作者』の凝集と拡散」『人間文化創成科学論叢』(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科) 15:103-111.
竹田恵子 (2014)「ダムタイプによるパフォーマンス『S/N』(初演一九九四年) における引用の様態と作品構造」『演劇学論集』(日本演劇学会) 58:73-89.
竹本小太郎 (1997a)『まぶしい空にKissしよう』第二書房.
竹本小太郎 (1997b)『五月のせいかもしれない』第二書房.
竹本小太郎 (1997c)『雲に抱かれて眠りたい』第二書房.
竹村勝行(2002)「親のゆっくりとした自然な受容をめざす活動の場:HSA札幌ミーティング親の会」“人間と性”教育研究所編『同性愛・多様なセクシュアリティ：人権と共生を学ぶ授業』子どもの未来社:187-192.
平ひろ (2005)『エキストラ・ゴング』古川書房.
田崎英明・ヴィンセント, キース・河口和也 (1995)「〈ゲイ・スタディ〉の可能性」『imago』6(12):22-43.
富永京子 (2017)「社会運動」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力：最重要概念・命題集』有斐閣：128-131.
東京レインボープライド (2019)『BEYOND: issue 5 / 2019 Spring』.
『東京レインボープライド2018』「PRIDE PARADEとは」(https://trp2018.trparchives.com/pride-parade/, 2019年8月13日閲覧)
『東京レインボープライド2019』「これまでのTRP」(https://tokyorainbowpride.com/archives/, 2019年8月13日閲覧)

U

上原早苗(2001)「ホモソーシャリティとホモセクシュアリティ：セジウィックの視点」『大航海』39:88-93.
上野千鶴子 (2005)「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房:1-41.
上野千鶴子(2010)『女ぎらい：ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店.
上野千鶴子・竹村和子 (1999)「対談　ジェンダー・トラブル」『現代思想』27(1):44-77.
上野千鶴子・ヴィンセント, キース・河口和也 (1998)「ゲイ・スタディーズ　ミーツ　フェミニズム」風間孝・ヴィンセント, キース・河口和也編『実践するセクシュアリティ：同性愛／異性愛の政治学』動くゲイとレズビアンの会：26-64.
動くゲイとレズビアンの会 (1993)『同性愛報道の手引き：同性愛者、エイズ、そして人権』動くゲイとレズビアンの会.
『うおんつ』(1998.10)「『札幌をゲイの街に！！』　セクシャル・マイノリティ・プライドマーチ札幌」18-19.
宇田川しい (2017)「イケイケ系ゲイの肖像　『週6回ジムに行ってます』　ゴーゴーボーイってど

んな人たち？」『Huffington Post』(2017年6月16日) (https://www.huffingtonpost.jp/2017/06/16/gogoboy_n_17147306.html, 2019年8月29日閲覧) .
宇田川しい (2018)「杉田水脈議員の『差別発言』に抗議するデモに、なぜ5000人も集まったのか：セクシュアル・マイノリティ以外にも広がった連帯の輪」『Huffington Post』(2018年7月29日) (https://www.huffingtonpost.jp/2018/07/28/lgbt-demo_a_23491398/, 2019年9月7日閲覧) .
宇田川しい (2019)「We shall Over come.」『Over』1:2-3.

V

Vincent, Keith. J (2016) "Queer Reading and Modern Japanese Literature", in Rachael Hutchinson & Leith Douglas Morton (eds.), *Routledge Handbook of Modern Japanese Literature* (pp. 69-81), Routledge.
ヴィンセント, キース・風間孝・河口和也 (1997)『ゲイ・スタディーズ』青土社.
ヴィンセント, キース・小谷真里 (1996)「クィア・セオリーはどこまで開けるか」『ユリイカ』28(13):78-98.

W

Weeks, Jeffrey (2007) *The World We Have Won: The Remaking of Erotic and Intimate Life*, Routledge. (=2015. 赤川学監訳『われら勝ち得し世界：セクシュアリティの歴史と親密性の倫理』弘文堂)

Y

山田昌弘 (1996)『結婚の社会学：未婚化、晩婚化はつづくのか』丸善株式会社.
山田参助 (2004)『若さでムンムン』太田出版.
山田参助 (2007)『山田参助の無駄な抵抗やめましょう』オークラ出版.
山田参助 (2016)『十代の性典』太田出版.
やまだようこ (2000)「人生を物語ることの意味：なぜライフストーリー研究か？」『教育心理学年報』(日本教育心理学会) 39:146-161.
山縣真矢 (2017)「東京のプライドパレード：過去・現在・未来」『LGBTのひろば』日本評論社：105-113.
山口正児 (1985)『ふたりの童話』けいせい出版.
山川純一 (1986a)『兄貴にド・キ・ド・キ』けいせい出版.
山川純一 (1986b)『君にニャンニャン』けいせい出版.
山川純一 (1988)『ワクワクBOY (男たちの夏)』けいせい出版.
山中剛史 (2005)「解題　『アドニス』総目次 (第一回)」『薔薇窗』12:31-36.
山中剛史 (2006)「解題　『アドニス』総目次 (第二回)」『薔薇窗』14:26-32.
山中剛史 (2007a)「解題　『アドニス』総目次 (第三回)」『薔薇窗』15:38-44.

山中剛史（2007b）「解題　『アドニス』総目次（最終回）」『薔薇窗』16：30–42.
吉見俊哉（1992）『博覧会の政治学：まなざしの近代』中央公論社.
Yoshino, Kenji (2006) *Covering: The Hidden Assault on Our Civil Rights*, Random House.
Young, Stella (2014) "I'm not your inspiration, thank you very much", *TED: Ideas worth spreading* (https://www.ted.com/talks/stella_young_i_m_not_your_inspiration_thank_you_very_much, Retrieved September 22, 2019)

Z

『全国男街マップ '95 年版』, 1995, 海鳴館.

謝辞

本研究はひとつの形になるまでに二転三転ならぬ、五転六転してきました。結果、博士課程に入学した時の研究計画からは大幅に路線変更をしましたが、それでも本研究の問いと分析は、自分の中にあった疑問が結晶化したものであると確信しています。

現在でもなく、また大昔でもない1990年代という近い歴史に興味を持ったのは、自分が1991年生まれであるということが最大の理由だと思います。ゲイの歴史について学ぶと、1990年代の「ゲイブーム」がひとつの歴史の転換点であることがいろいろな文章の中に出てきます。今から30年前にそんなすごい変化があったのか、と。1991年は伏見憲明の『プライベート・ゲイ・ライフ』が出版された年でもあり、「府中青年の家裁判」が始まった年でもありました。私はゲイリブの隆盛とともに生まれ、ゲイリブとともに生きてきたはずなのに、ゲイリブを経験はしなかったという事実が、1990年代に生じたことに対する興味を増幅させました。どこか「うらやましい」という感情も感じずにはいられませんでした。この博士論文は研究であると同時に、自分が経験しなかった時代の人々の経験を追体験し、それを自分のものにするための、自己満足の「遊び」とも言えるかもしれません。また正直に言って自分は、分析の中でもまさに描いたように、差別を受けたことがないと感じてしまう人間であるということが、この研究の分析には大きく関わっています。伏見が「新中間層」と呼んだものにまさに自分が当てはまるということ、また私自身がかつて「差別」ばかりが語られることに対して、「ゲイも楽しく暮らしているよ」と発言したことがあること、すべてが結果としてこの研究につながっています。この研究自体が、自分が持っている意識がどこからきたのかを明らかにする自己変革作業でもあったと感じます。

この博士論文は、指導教員の原田真見先生の助言がなければ生まれませんでした。やりたいことがいくつもあり、焦点の定まらなかった研究目的は、原田先生との対話の中で少しずつ形になっていきました。時に心配になるほど優しく、親身な原田先生の助言は、私がやりたいと思っている無数のことを否定せず、かつそれを最大限博士論文内で表現することができるよう導いてくれました。原稿も丁寧に読んでいただき、分析を細かくチェックしていただいただけでなく、ダメライターでもある私の誤字脱字やおかしな表現も細かく指摘していただきました。

副指導の玄武岩先生と浜井祐三子先生にも感謝します。副指導を依頼しておきながらほとんど直接の面談をお願いしなかったことは、非常に申し訳なく思います。しかし年数回の報告会などでいただいたアドバイスは、研究の方向性を決める助けとなりました。優柔不断であり、時に焦点のぼやけた発表をする私に下さった思い切ったアドバイスには、ハッとさせられました。

学院外の方もあげると、鈴木賢さん、国見亮佑さん、工藤久美子さん、桑木昭嗣さん、武藤義弘さん、ようすけさんには札幌の活動に関する多くの資料をご提供いただきました。みなさんからの資料の提供がなければ、この研究は不可能でした。札幌の活動の歴史に興味があるという若造に、これほど惜しみなく資料を提供してくださるとは思ってもいませんでした。しかし研究の性質上、良いことばかりではなく、批判的に考察もしなければならず、セクシュアルマイノリティが過ごしやすい札幌を築き上げてきた先輩方について研究をするというのは、少なからずためらいもありま

した。ですが、尊敬しながらも、これまでの活動を批判的に継承することは必要不可欠であると思っています。本研究が私なりの感謝であると受け取っていただけると非常に嬉しく思います。

「ホモセクシュアル研究会」でともに勉強をさせてもらった石田仁さん、前川直哉さん、鹿野由行さん、金田智之さんにも感謝します。偶然の縁から研究会に参加させていただいたことは、感謝しきれません。自分一人ではなかなか読めない文献を読んだり、予備論文となる原稿に目を通していただくなど、多くを学ばせてもらいました。

「セクシュアリティ研究会」でお世話になった、近藤智彦先生、満島てる子さんにも感謝します。お二人との勉強会でも予備論文の検討をしてもらったり、公開研究会を開いて発表の機会を設けてもらったりしました。この研究会からも博士論文につながる多くの成果を生み出すことができました。

また、私のやりたいことを一切否定せず、学部時代の留学から大学院進学まで全面的にサポートをしてくれた両親に感謝します。

最後にひとり、私が博士課程に入学したときに出会ったゲイの〈友人〉に感謝を述べたいと思います。彼との出会いは、博士論文のみならず、私の人生にとっても重要なものでした。比較的ゲイの友人が多いと自認している私の周りには、「楽しいゲイライフ」を送っているように見える友人が多く、「悩み」など誰も抱えていないと思っていました。個人的に親しい友人とも「悩み」を語ることはほとんどなく、本当に皆「あっけらかん」と生きているように見えていました。そんな中、「ゲイになんて生まれたくなかった」という彼の言葉は、私にとって衝撃であり、私を狼狽させたことが今でも忘れられません。苦しんでいる人がいるという当たり前の事実に気がつき、そのくせ彼の言葉にどう返答すれば良いのかわからなかった自分がいたたまれなくなったことが忘れられません。彼との出会いとこの出来事は、この研究に少なからぬ影響を与えています。この研究は、「ゲイになんて生まれたくなかった」という彼の言葉にうまく返答ができなかった私からの、遅れた返答であり、謝罪でもあります。

本研究の資料の一部は、公益財団法人トヨタ財団による助成（研究題目「性的マイノリティ運動の口述資料のアーカイブ化に向けた実践的研究」〔助成番号：D18-R-0156、代表者：鶴田幸恵〕）を受けている。